

このみすぼらしい万事  
屋に祝福を！

カレー大好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

不運な事故で死んでしまった銀時は、おバカな駄女神アクアと共に異世界へ転生することになった。

RPGゲームのようなその世界で魔王を倒すことになった彼は、どのような冒険を進めていくのだろうか。

一緒にやってきた友人(?)や現地で知り合う仲間達と繰り広げる、新たな人情コメディーがここに始まる。

# 目次

	ああ、駄女神さま、頼むからぱんつをはけ	
	第1訓 死後の世界も甘くはない	
1		
	第2訓 ギルドに行ってもまともな職	
	にありつけると思うな	22
	第3訓 バカは死んでも治らない	46
	第4訓 ブリーフ派でも胸を張れ	76
	第5訓 主人公は遅れてやって来る	116
	第6訓 頭のおかしい奴らにも良いと	
	ころはある	156
	第7訓 命懸けで戦ってる奴は大体中	
	二病	194
	第8訓 ギャグも魔法も一発だけでは	
	やっていけない	239
	第9訓 美女には裏の顔がある	281
	第10訓 美女には苦い過去がある	313
	第11訓 美女には素敵な彼がいる	347
	第12訓 美女には悪い友がいる	379

- 第13訓 バカな仲間ほど厄介な敵は  
いない 476
- 第14訓 女神みたいな女だつて裏で  
は結構ヤンチャしてる 517
- 第15訓 遊びも仕事もスキルが大事  
560
- 第16訓 必殺技は無闇に出すな  
601
- 第17訓 キャベツの作画には細心の  
注意を払え 650
- 第18訓 ロリっ子は変態共を引き寄  
せる 696
- 第19訓 王女様は万事の守護者に憧  
れる 748
- 第20訓 魔王の幹部が近所に引つ越  
して来てもこっちが話しかけるまで動か  
ないからとりあえず放置 815
- 第21訓 城の宝を勝手に持つてく勇  
者つて正直どうかと思うけど仕方がない  
よね人間なもの 849
- 第22訓 最大の敵は己の中にいる  
878
- 第23訓 たとえゴリラにソックリで  
も全裸で外を徘徊したら公然わいせつ罪  
928
- 第24訓 人の縁は思つてる以上に切

れにくい

963

第25訓 水の浄化はなんとかなるけ

ど心の浄化は超ムズい

1015

第26訓 イケメンは性格が良いヤツ

ほど腹が立つ

1048

第27訓 魔王の幹部じゃ大魔王の城

は落とせない

1100

中二病でも魔女がしたいっつーんなら、

他の魔法も覚えやがれ

第28訓 氷属性のキャラクターは性

格もクールガイ

1191

第29訓 ゴミの中にも宝はある

1245



ああ、駄女神さま、頼むからぱんつをはけ

## 第1訓 死後の世界も甘くはない

その日の深夜。坂田銀時は、しこたま酒を飲んでた。久しぶりにまとまった収入が入ったので、ついハメを外してしまったのである。その結果、もれなく悪酔いした。

「オエ——ッ!!」

開始早々いきなり吐いて、モザイクのお世話になる。それほどまでに今の彼は酔っ払っていた。

「あく、気持ちわりいく……。ったく、何でこーなると分かってんのに、酒なんか飲んじまうのかねえ。俺ってDSかと思ってたけど、実はDMなんじゃね？ 苦痛という名の美酒に酔いしれて悦びを感じてんじやね？」

気分の悪さをいつもの軽口で誤魔化そうとする。無論それには何の効果も無く、時間が経つに連れて更に酔いが回っていく。そうして千鳥足を進めているうちに段々と意識が遠のいていき、ついに路上へ寝転がってしまう。

「もーダメだわ。目の前に裸の美女がいたって、体もアソコも起きねーわ」

ボロい街灯が照らす薄暗い路地に仰向けになって寝転んだ銀時は、急激に強まってい

く睡魔に負けてその身を預ける。

「ちよつとだけ、一休み……」

そう言つて静かに目を閉じる。眠りにつく前に見た最後の景色は、かぶき町を穏やかに照らす綺麗な星空だった。



次に目が覚めた時、銀時は異様な空間にいた。足元には白と黒のチェック柄をしたパネルが並び、周囲は見渡す限り真っ黒な空間が広がっている。そんな異様過ぎる場所に2つの椅子が対面するように置いてあり、質素な作りの方に銀時が座っていた。なぜ自分がこんなところにいるのだろうか。はつきりいって意味不明である。

「……あれ、なにこれ。なんで俺こんなトコにいんの？ 酔っ払って路上にぶっ倒れた記憶はあるけど、一体どのタイミングで瞬間移動しちゃったの？ つーか、瞬間移動なんてスキル持って無いんですけど。ヤードラット星で修行なんてしたことないんですけど」

銀時は、なんとなく嫌な予感を抱きながら今の状況を整理する。自分の意思で来た可能性が低いとなれば誰かの手で連れ込まれたという結論になるが、こういう場合は、



ほぼ間違いなく厄介ごとに巻き込まれる。

「ぜってー酷い目に遭う気がするのは気のせいだと思いたいけど、そーはいかねーよな……」

これまでの人生を振り返って、この後に起こるだろうトラブルを危惧する。その直後に、彼が思い描いていた未来をもたらしそうな人物が現れた。銀時の後方に突然現れた少女が静かに歩きながら近づいてきたのである。

「(こいつ、いつから後ろにいた?)」

これまでまったく気配が分からなかった銀時は、若干緊張する。そのファンタジーな格好をした少女は、完璧とも言える容姿をしており、水色の髪と瞳が彼女の神秘性をより高めていた。

そこまではいい。色んな変人と関わってきた銀時にとっては、『変わった格好のねーちゃん』程度の認識である。しかし、その可愛らしい少女から思いもしなかった言葉を告げられてしまう。

「坂田銀時さん。ようこそ死後の世界へ……」

「はあ? なに言っちゃってんのお嬢さん。囲碁の世界なんざこれっぽっちも興味ないんですけど。ヒカルの碁が流行った時も影響されなかった俺に囲碁クラブの勧誘なんて意味ないから、今すぐ元の場所に帰してくんない?」

「つて、そんなんじゃないわよ！ 囲碁じゃなくて死後よ死後！」

「ああ、なるほど死語のほうね。たまにキヤバクラで使うと意外にウケたりするよね。でも、そっちも既に間に合ってるんで、ここから速やかに帰してくんない？」

「あなたワザと間違えてるでしょ!? ひねくれ過ぎて友達少ないタイプでしょ!」

おバカなことを言っただけで現実逃避する銀時のせいで、少女の神秘性はあっけなくぶっ飛んでしまった。というか、元々の地が出ってしまった。

「だ・か・ら！ あなたは既に死んでいるの！ ベロベロに酔いつぶれて路上でぶっ倒れてる間に寝ゲロして、そのまま窒息死しちゃったの！」

「嘘だと言っただけよバーニイ!!」

取り繕うことを止めた少女は、とんでもない事実をぶっちゃけた。何となく理解し始めていたが、やはり最悪の結果になっていたらしい。

「まさか、主人公である俺さまがドラゴンボールの無い世界で死んでしまうなんて……。つか、寝ゲロで窒息死ってなんだよ!? 少年マンガの主人公にあるまじき死に様なんですよ！ あまりに意外すぎて逆にセンサーショナルなんですけど！」

「プークスクス！ よーやく自分の置かれている状況が分かったよーね！ 世にもマヌケな死に様をさらした己の愚かさを！」

せっかくの登場シーンを台無しにされた少女は、ここぞとばかりに銀時を罵る。しか

し、彼女は知らなかった。大人気無い彼は、少女ですら容赦しないドSであるということを。

「黙って聞いてりや、ざけんじゃねーぞクソガキがあ——っ！」

「きやうっ!?!」

「このままあつさり死んでたまるか! つーか、たつたー回死んだくらいで何だつてんだ! クリリンが何度生き返つたと思つてんだコノヤロー!!」

「ぐええ——っ!?! 首が絞まるううう——っ!!」

急に荒ぶりだした銀時は、少女の胸倉を掴んで支離滅裂なことを言い出した。

「たえてめえが死神でも、この命は狩らせねー! それどころか、逆に尸魂界まで乗り込んで、死神全員あの世送りにしてやらあ!」

「つて、私は死神じゃないんですけどっ! もっと神々しくて、アイドル的な存在なんですけどー!」

もう無茶苦茶である。

我を失った銀時に恐怖を感じた少女は、焦った様子で自分の正体を明かす。

「私は女神! 死んだ人間を導く女神様よ!」

「なるほど、やつぱ死神じゃねーか!」

「ぐほお——っ!?! 何でそーなるのよ! 私は卍解なんてできないから! オサレな

斬魄刀なんて持ってないから！ 外見で察しなさいよっ！」

そう言われればそうかもしれない。必死に訴えてくる少女を見て落ち着きを取り戻した銀時は、とりあえず詳しい話を聞くことにした。

「こほん……それでは気を取り直して。私の名はアクア。日本において、若くして死んだ人間を導く女神よ」

「死んだ人間を導く？ つーことは、死神じゃなくて閻魔王つてところか」

「例えが気に食わないけど概ねそーよ。華麗で優美なこの私があなたのよーなオジサン  
の相手をするのはヒジヨーに不服なんですけど？ 今回は、地球の歴史に一定の功績を  
残した低級英霊として特別にサービスしてアゲルわ☆」

やたらと偉そうに説明する女神——アクアを見て、銀時はイラツとした。しかし、嘘  
を言っているようには思えない。これまでの状況から判断すると、やはり自分は死んで  
しまったのだろう。

「認めたくねえが、俺はもう生き返れねーんだな」

「ええそうよ。現世のあなたは、薄汚れた路上でゲロまみれになって無様に死んでし  
まったのよ！ まるで哀れな野良猫のよーにねえ！ プークスクス！」

「この駄女神エ、傷ついた俺の心にマヨネーズを塗り込むよーなことをズケズケと……」  
可愛い見た目に反してゲスなアクアに、銀時のヘイト値が溜まっていく。

「でも悲しまないで。これからあなたの友達も呼んであげるから」

「はあ？ 俺の友達い？」

「ええそうよ。たまたま偶然あなたと同じ日に死んじやったから、ついでのオマケで私  
が水先案内してあげることにしたのよ。ほんとに光栄なことなんだから、全力で感謝し  
なさいよねー」

「え……マジで俺の知り合い死んじやったの？」

「もちろん大マジよ。残念だけど、運命には抗えないわ」

「そんな、なんてこった……」

急にもたらされた驚くべき事実にはショックを受ける銀時。一体誰が死んだというの  
だろうか。新八、神楽、お妙、それに一応ツラ……。あいつらは殺しても死ななそうな  
連中ばかりだが、その筆頭である自分が死んでしまったのだからあるいは……。

などと考えている間に、準備を整えたアクアがその人物を召喚する。そして、神妙な  
面持ちをした銀時の横に1人の男が現れた。

「あれえ？ 銀さんじゃねーか。あんたも一杯やってたの？」

「つて、長谷川さんかよっ!!？」

意外な人物の登場に銀時がつつこむ。その、ちよつと高めなグラサンをかけた冴えな  
いオッサンは長谷川泰三だった。

「なあ、銀さん。この変な場所は一体どこだ？ 確か俺は、かぶき町の歓楽街をぶらついてただけだぞ？」

「なにのん気なこと言ってるんだよ長谷川さん。もしかして、自分が死んじまったことに気づいてねえのか？」

「たぶんそうね。いきなり事件に巻き込まれて死んだ場合に記憶が曖昧になることはよくあるのよ」

「はあ？ 死んだとか事件とか何のこと言ってるの？ つーか、この嬢ちゃんは一体誰よ？」

「1人だけ状況が分からない長谷川は、2人の会話についていけず疑問符を浮かべる。そんな彼にこれまでの経緯を説明すると、銀時と同じように驚いた。

「あなたは、ピッコロさんっあまんとぼい天人の放った魔貫光殺砲に身体を貫かれて死んだわ」  
「なんでだ——！！？」

「こんな超展開に巻き込まれたら誰でも驚愕するだろう。

「かぶき町で飲み歩いてただけなのに、どーしてそんな事態になったー!!? つーか、一体何をやってたら死因が魔貫光殺砲になるんだよっ!!」

「はあ、記憶が無いんじゃないから原因を教えてあげるわ」

「やれやれと肩をすくめたアクアは、長谷川が死ぬことになった原因を話し始めた。

今から数時間前。バイトをして久しぶりにまとまった収入が入った長谷川は、しこたま酒を飲んでいた。かぶき町の歓楽街にある小さな酒場で安い酒を飲みまくった彼は、ほろ酔い気分を外に出た。

「うい〜！　酒が飲めるって幸せだなあ〜。生きてるって実感できるなあ〜」

長谷川は、小さな幸せを噛み締めながら、住処にしている近場の公園へと足を向ける。今日は久方ぶりに良い気分だ。今夜はこのまま現実を忘れて眠りにつこう。そのように思いつつ歩みを進めると、前方から酷く酔っ払った男が近づいてきた。かなりふらついていて今にも倒れそうだ。

「お〜い、大丈夫かいアンタ。少し休んだほうがいいんじゃないか？」

「うっせーぞオツサン！　偉そうに説教なんざ垂れてんじやねー！」

親切に声をかけたら乱暴に拒絶された。しかし、人の良い長谷川は、その男の顔色が非常に悪いことを心配してさらに話しかけてしまう。

「確かに俺なんかはどうこう言える立場じゃないけどさ。そんなに顔色が悪くなるまで飲むのは身体に毒ってモンだぜ？」

「てめえ、黙って聞いてりゃ好き勝手言いやがって……。この顔色は生まれつきだあ――

「つ  
!!!!」

しつこい長谷川にキレた酔っ払いは、思わず必殺技を放ってしまった。頭痛を我慢する際に指で眉間を押さえているうちに魔貫光殺砲のエネルギーが溜まっていたのである。その酔っ払いこそがピツコロさんっぽい天人あまんであり、長谷川のお節介がきっかけとなつて溜め込んでいたストレスが爆発してしまった。その結果、不運な彼は胸を貫かれて絶命した。

「……つてなわけよ」

「ええ——っ!? そんなことで魔貫光殺砲撃たれたの——っ!? ピツコロさんの沸点低すぎなんですけど! 悟飯と接して手に入れた優しさが微塵も感じられないんですけど! つてか、なんでピツコロさんがかぶき町ぶらついてんの!? 何があつて我を失うほどに酔いつぶれたの——っ!?」

「その理由なら俺にも分かるぜ。登場時は最強のライバルキャラだったピツコロさんも、今じゃヤムチャと同格扱いだからな。たまには何もかも忘れて酒に溺れたくなる時もある。やるせない憤りを魔貫光殺砲に込めてぶっ放したくもならあ」

「そんな理由でキレてたのかよ!? メンタル普通過ぎるんですけど! 後輩の出世に嫉妬してるしがない中年サラリーマンと同レベルなんですけど!」

あまりに理不尽な話に流石の長谷川も怒る。確かにその通りだったが、実際に起きて



しまった結果は変えられない。彼らは本当に死んでしまったのだ。

「コンチクショー！ 再就職する前に死んじまうなんて……。結局、俺はマダオ（まるでダメなオツさん）のままで終わるのか」

「そんなことより、エログッズを処分しないまま死んじまったのが痛過ぎるんですけど！ 遺品整理してる時にあんなモンが出てきたら、コントみたいになっちまうじゃねーか！ 愛しさと切なさよりも気まずさと馬鹿らしさが勝っちまうじゃねーか！」

「あんなたち、死んで一番気にすることがソレなの？」

ある意味、落ち着きまくっている2人のマダオを見て呆れるアクア。

「まあ、なんだ。死後の世界まで来ちまったんなら仕方ねー。この際、残してきたエログッズのことは綺麗サツパリ忘れて、さっさと天国に連れてってもらおうや」

「あ、ああ、そうだな！ 天国に行けば、大手を振って『永遠の夏休み』を満喫できるもんなー！」

持ち前のお気楽さで色んな問題を無視した2人は、これから訪れるだろう幸せを夢見る。なんたつて目の前に女神様がいるのだから天国行きは間違いないだろう。のんきな2人は、微塵も疑うことなく楽しい天国ライフを期待する。しかし、こういう流れでアクシデントに巻き込まれるのはお約束である。

「ああ。まだ言ってなかったけど、あなたたちは地獄行きよ」

「え？ なんて？」

「そりやそーでしよう？ 殺人、暴行、痴漢にのぞき、更には公共の場での無断宿泊に糖分の過剰摂取。あなたたちの罪を数えたらキリがないわ」

「つて、最後のだけはおかしくね？ そのくらいのプチ贅沢は許してくれてもいいんじゃないね？」

銀時は無駄な悪あがきをしたが、アクアの言っていることは概ね当たっている。これだけ立派な罪状があつては地獄行きも仕方ないかもしれない。

だがしかし、長谷川が来る前はもう少し好意的だった気がする。

「でもよお、さつきは『英霊として特別にサービスしてアゲルわ☆』とか言つてなかったか？」

「そうね、低級を付け忘れてるけど確かに言つたわ」

「それでも地獄行きだつてのokay？」

「いいえ。本来ならそうなるトコだつただけ、それを回避するチャンスをあなただちに与えてあげようつてことなのよ」

「はあ？ チャンスだと？」

どうせ碌な展開にならないだろうと予測しながらも、得意げな表情のアクアに聞く。もちろん彼の読みは当たつており、美しい女神様は悪魔のような笑みを浮かべながら当

初の目的を告げる。

「あなたたちには異世界で暴れている魔王を退治してもらおうわ！」

「異世界？　魔王？　なんじゃそりゃ」

「魔王ってアレか？　竜王とかハーゴンとかバラモスみたいに世界征服企んじやつてるヤツのことか？」

「ええそうよ。あなたたちは異世界を救う勇者として選ばれたのよ！」

　　バーツと両手を広げたアクアがおかしなことを言い出した。

「その世界は長く続いた平和が魔王の軍勢によって脅かされていた！　人々が築き上げてきた生活は魔物に蹂躪され、魔王軍の無慈悲な略奪と殺戮に皆、怯えて暮らしていた！　いたあー！」

　　まるで演劇のように大げさな身振りで異世界の危機を伝える。しかし、彼女の真の狙いは別の所にあつた。

「そんな世界だから、皆、生まれ変わるのを拒否しちゃって人が減る一方なのよ」

「そりゃ当然だ。はたらく魔王さまがいるつてのに、好き好んで村人に生まれ変わりたいとは思わねーだろ。DM以外は」

「例えがアレだけど、大体そんなところよ。で、他の世界で死んだ人なんかを、肉体と記憶はそのまま送ってあげてはどうか、つてことになったの。ゲームで言うところの

「強くてニューゲーム」ってヤツね」

静かに拝聴していたら、とんでもなく身勝手な内容だった。

「えつと……つまりその、魔王とやらを倒してアンタの悩みを解決しろと？」

「ぶっちゃけるとそういうことね」

「おいおい、そりゃあ無茶振りつてもんだろ。俺たちや別に勇者の子孫でもねーし、竜の騎士でもねーから。ただの一般ピーポーだから。魔王退治なんて土台無理に決まってるじゃん。それに、ゲームを取り扱った話は本編で何度もやってるんで、同じような話をやると集〇社にクレームが来ちゃうんで、その提案は遠慮させていただく方向で……」

「だったら地獄へ直行させるわよ。エツチを禁止された世界で、100年間むさ苦しい鬼のパンツを洗濯することになるんだけど？」

「喜んで魔王退治をやらせていただきますっ!!」

もつとも恐ろしいネタで脅迫された銀時と長谷川は、アクアの提案を飲むしかなかった。

「しかしなあ、ただのオッサンが行っても返り討ちに遭うだけじゃねーか？」

「その点は心配無用よ。大サービスとして、何か一つだけ好きな物を持っていける権利をあげるわ。強力な武器だったり、とんでもない才能だったり。魔王に対抗できる力が

手に入るのよ」

「なるほどね。確かに『強くてニューゲーム』ってわけだ」

その特典は、マンガが大好きな銀時にとつて中々魅力的な話だった。もちろん、グラサンしか値打ちのあるものを持っていない長谷川も期待に胸を膨らませる。

「それじゃあ、何でも願いが叶うドラゴンボールをくれ」

「だったら俺はドラゴンレージャーだな」

「ふっ、話が分かるな長谷川さん」

「銀さんとの付き合いも長いからな。もはや阿吽の呼吸だぜ！」

こういう時だけ息が合う2人は、ガシツと右手を重ねあう。ドラゴンボールとドラゴンレージャーさえあればいくらでも願いを叶えることができる。少年だった頃、ジャンプを読みながら夢見た望みがついに叶うのだ。

しかし、そうは問屋がおろさなかった。

「あー、そういうのはダメよ。著作権に引つかかるから」

「ここにきて著作権かよっ!?!」

「つーか、著作権って神様にも適用されんの!?!」

「そりゃそうよ。偉大な神が人間の創作物なんかに影響されてちや、色々台無しになっちゃうじゃない。だから、私の用意したものの中から選んでもらうわ」

そう言うと、アクアはクルクル回りだして、持っていける特典が記された紙を派手にばら撒く。

「さあ選びなさい！ あなたに一つだけ、何者にも負けない力を授けてあげましょう！」  
「いや、この状況でそんなこと言われてもな……」

「二気にテンション下がっちゃうよな……。かめはめ波とかデスノートとか使ってみたかったのに、著作権でダメですーとか、ほんと使えねよーこの駄女神。デンデの足元にも及ばねーよ」

「きい——っ!! いちいち文句言つてないで、さつさと選びなさいよ！」  
願いが叶わず拗ねてしまったオツサンたちにアクアはイラついた。

ほんと、なんなのよこいつら。ちよつとは使えそうだと思つてここに連れて来たのに、いざ話してみたらただのマダオじゃないの。

「どーせなに選んでも一緒でしょ？ 侍だか何だか知らないけど、無職のおじさんたちに期待なんてしてないから」

「はあ？ 俺は全然無職じゃねーだろ！ 長谷川さんと違つて自営業を営んでるし！ 立派な社屋も持つてるし！」

「ちよ、なに自分だけかっこつけてんだよ！ 銀さんだつて限りなく無職に近いじゃねーか！」

「あーそんなこと言っちゃうわけ？ 友達の俺を傷つけるよーなこと言っちゃうわけ？  
こういう時は優しくオブラートに包んであげるのが常識ってモンだろーが、この家無し野郎！」

「お前の方こそ、オブラートに包めよ天パ野郎！」

アクアの暴言をきっかけにしてマヌケなケンカが始まってしまった。その様子を見て、彼女は更に呆れてしまう。アクア自身もかなりのおバカなのだが、女神としての力とプライドが彼女の発言を傲慢にする。

「んなことどーでもいいから早くしてえ？ 他の死者の案内がまだたくさんあるんだからあー」

『『このクソアマア、下手に出てりや調子に乗りやがってえ!!』』

あまりに理不尽な物言いに、2人の反骨精神がMAXになる。小娘ごときにここまで言われちゃ男が廃るってもんだ。

「なあ長谷川さん。あいつが願いを叶えるっつーんならよお、あいつ自体を異世界に持ってけばいいんじゃない？」

「おつ、そりゃナイスな案だな！ 女神様がいれば魔王との戦いも楽になるかもしれないーしな！」

「だな。一見するとバカそうな女だけど、俺の背後を取れるほどの実力者だ。頭はアレ

でも、アテナみたいに強大な小宇宙コスモを持つているに違いないぜ！」

逆襲を企てた銀時は、長谷川と小声で相談する。その内容は、別の並行世界で佐藤和真という少年が考え出したものと奇しくも同じだった。

「ちよつと、オツサン同士でなにコソコソ話してんのよ？ キモイわねえ」

「なーに、ちよいと相談事がありましたてねえ」

「ようやく持つていきたいものが決まりましたよ女神様」

「ふーん。で、何に決めたの？」

足を組みながら椅子に座っているアクアが偉そうに聞いてくる。この時、彼女はまったく予想していなかった。女神である自分にとんでもない不幸が降りかかることになることを。

「俺たちが異世界に持っていくもの」

「それは……」

「お前だあ————っつっつ!!!」

銀時と長谷川は、仲良くハモリながらアクアを指差す。それはあまりに意外な選択だったので、彼女はしばらく何を言われたのか認識できなかつた。だから、いつも通りに転生の準備を進め、2人の足元に魔方陣を出現させる。

「……………それじゃ、魔方陣から出ないように立って——」



そこまで言つてようやく頭が回ってきた。

「今、何て言ったの？」

椅子から腰を浮かしかけたところで違和感に気づき動きを止める。しかし、時既に遅しだった。

アクアが何かを言う前に、神々しいエフェクトを伴つて翼を生やした金髪美女が出現した。その女性は、これから異世界に行くことになるアクアの代理としてやつて来た天使だった。

「承りました。では、今後のアクア様のお仕事は、この私が引き継ぎますので」

「え？」

アクアよりも女神らしい天使がそう言うのと、アクアの足元にも魔方阵が出現した。そして、円柱状に光を発して外部と遮断するようなフィールドを形成する。こうなるとアクアでも脱出することは出来ず、ただ泣き叫ぶしかない。

「ちよ、え、何コレ？ う、嘘でしょ……いや、いや、いや！ ちよつと、あの……おつかしいから、女神を連れてくなんて反則だから！ 無効でしょ！ こんな無効よね！

待つて！ 待つて〜！

「行つてらっしゃいませアクア様。無事魔王を倒された暁には、迎えの者を送ります」

代理の天使は、まったく聞く耳を持たなかった。

そうこうしているうちに魔方阵が起動して銀時たちが浮かび上がる。いよいよ異世界へ転生するのだ。

「あーん、待ってよお!!」

「ふっふっふ……どうやら上手くいったようだなあ長谷川さん」

「ああ、すべて計画通りだ」

ゲスな顔をした銀時が、碇ゲンドウのような長谷川と頷き合う。

「これでお前の力は俺たちのモンだ。とことん使い尽くしてやるから、覚悟しておくんだなあ!」

「天上でぬくぬくと暮らしてたお前さんに、下々の辛さを思い知らせてやるぜえ!!」

「ひいひい————っ!!? こんな奴等と一緒にいたら、私のすべてが汚されるう——

——っ!!

貞操の危機を感じたアクアは、自身の身体を抱きしめる。しかし、そんな抵抗も空しく、彼女は空中へと舞い上がっていく。

「さあ、勇者よ。願わくば、数多の勇者候補達の中から、貴方が魔王を打ち倒すことを祈っています。さすれば、神々達からの贈り物として、どんな願いでも叶えて差し上げましょう」

「なっ、マジか!?!」

「むわあああ——っ！ 私の台詞う——っ!？」

異世界へと続く光の門へ飲み込まれる直前に、天使から重要な情報をもたらされる。魔王を倒せば元の世界へ戻れるかもしれない。たとえ世知辛い世界でも、大切な者たちがいるあの場所へ2人は戻りたいと思つた。

しかし、その希望を達成するには魔王を倒さなければならない。

「さて、洞爺湖<sup>こい</sup>で魔王を倒せるか、いっちょ試してみるか」

愛用している木刀に手を当ててニヤリと笑う。果たして、万事屋銀ちゃんと無職の長谷川さんは、異世界でどのような冒険を繰り広げるのだろうか。

## 第2訓 ギルドに行ってもまともな職にありつけると思いうな

異世界に転生した銀時、長谷川、アクアの3人は、牧歌的な雰囲気が漂う異国風の街に出現した。ここは、「駆け出しの冒険者の街・アクセル」。すべての転生者が一番最初によつて来る場所であり、魔王討伐の出発地点となる地方都市だ。

「うおー！ さつきまで半信半疑だったけど、マジで異世界来ちゃったよ！ ガキの頃の夢だった、リアルドラクエワールドだよ！」

意外にゲーム好きな長谷川は、いかにもファンタジーな光景に興奮する。一方、彼の右隣にいる銀時は、いつものように死んだ魚のような目をしながらネガティブな意見を吐き出した。

「つたく、大の大人になってからダイの大冒険やるハメになるたあ思わなかったぜ。ガキの頃はマアムのお色気シーンに胸と股間を膨らませたもんだが、頭のユルい駄女神相手じゃ不安とストレスしか膨らまねーよ」

内心ではウキウキしているのに、誰得なツンデレ属性が子供のような嘘をつかせる。確かに魔王退治はかつたるので、この理不尽な状況に文句を言いたくもなるが、ここ

から先は完全に自由だ。それなら存分にこの世界を楽しんでやる。

「（もしかしたら、ピアノカのように運命で結ばれた嫁さんと出会えるかもしれねーしな……）」

不意に彼女の笑顔を思い浮かべた銀時は、柄にもなくときめいてしまう。かつてドラクエVにハマっていた頃、健気に尽くすピアノカに恋した記憶を思い出したのだ。

「あれ、なにこの気持ち……。もしかして俺、まだアイツのこと諦めきれてなかったのか？ この胸の奥で、決して消えない恋の炎を灯し続けていたつてののか？」

「おーい、マヌケな顔して何おかしなこと言ってるんだよ銀さん。まさか転生に失敗して頭がパーになっちゃったのか？」

「なつてねーよバカヤロー。髪は天バでも頭はパーフェクトだコノヤロー」

異世界に来ててもマイペースを崩さない2人はバカな会話を進める。

その間、アクアはずっと何も言わずに銀時の右隣で立ち尽くし、顔を下に向けながら静かに震えていた。どうやら、天界から下界へ連れ出されたことがかなりシヨックだったらしい。

「あ……あああ……」

「ん〜？ そんな小刻みに震えてどーした駄女神。もしかして、あまりのシヨックでシヨンベンちびつちまったのか？ つたく、しゃーねーなあ。長谷川さん、ちよつくら

下着売り場に行つてコイツの着替えゲットして来いよ」

「おう分かった、じゃねーよ！　なんで俺が行かなきゃなんねーの!？」

「だって、異世界で初めてのお使いがギャルのパンティーなんて主人公のやることじゃねーし、長谷川さんなら変態扱いにも慣れてるから平気だろ？」

「慣れてねえーよそんなもん!？」　つーか、俺が行つたら間違ひなくサツに逮捕されるから！　冒険を始める前に人生がゲームオーバーになつちゃうから！」

街中だと言うのに大声で下品な言い合いをする。アクアが漏らしてしまつたと勝手に決め付けた銀時のせいで周囲に気まずい空気が出来てしまひ、ただでさえテンパつていた彼女の精神がオーバーフローを起こしてしまふ。溢れる感情をついに堪え切れなくなつたアクアは、異様な様子で髪をかきむしりながら奇声を発し始めた。

「うう、うううううううう……」

「おい、どうすんだよ銀さん。この子、大分へこんでるよ」

「そりや仕方ねえさ。公衆の面前で粗相しちまうなんざ、神楽でさえもやらなかつた最低のヨゴレ役だ。流石の女神さまでも、これほどの恥辱プレイに耐えられるわけがねえ。だが、心配は無用だぜ。新品パンツに穿きかえれば、心もお股もリフレッシュ！　チビつたあなたも気分爽快！」

「んなわけあるか——っ!?　つてゆーか、ノーパン派の私は、お漏らししたつて着替え

る必要ないんだから！ 常にフリーフォール状態で汚れる心配ないんだから！」

「……あれ、今何か女神さまにあるまじき単語が聞こえたよーな気がしたんですけど？」

あまりにテンパリすぎて、さりげなく問題発言をかましてしまうアクアだったが、今はそんなことに気を回している場合ではない。興奮状態になったアクアは、いきなり銀時に掴みかかって激しく揺さぶり始めた。

「うはあ——っ!! うはあはああつ!! うはあはああつ!!」

「おいコラ止めろ！ そこはかとなく痴情のもつれの絵面になってるから！ 街のみなさんに変な目で見られちゃってるから！」

「うわあ——んっ！ そんなことよりどーしてくれんのよお!! 魔王を倒すまで帰れないなんて、か弱い私には耐えられないんですけど！ どうすんの!! ねえどうしよう!! 私これからどうしたらいい!!」

何の準備も無くいきなり下界に放り出されたアクアは、押し寄せる不安に負けて泣き叫ぶ。これまで何の不自由も無く暮らしていたのだから当然である。しかし、不自由だらけの環境でゴキ○リよりもしぶとく生き抜いてきた野郎どもにとっては、このくらいの逆境など屁でもない。

「まあ、とりあえず落ち着けや駄女神。魔王を倒せば万事解決すんだから、何も悩むことあねえ。最初に俺たちのやることは既に決まってるぜ？」

「えつ、ほんと!？」

「ああ……。俺たちがやるべきこと。それは【金】を手に入れることだあ!」

「へっ? お金?」

いきなり現実的なことを言い出した銀時に、アクアはキョトンとしてしまう。しかし、その提案は実能的に射っていた。極貧生活をウン十年続けている彼は痛いほど知っていたのである。金とは、何よりも勝る力であるということ。

「戦いっさをするには何が必要か。兵隊、武器、食料。簡単に上げればそんなとこだが、それらをすべてそろえるには何を置いても金がある。古今東西、どこの世界においてもそれだけは変わらねえ。魔王と戦うためにもカジノで戦うためにも、軍資金が無ければ話にならねえってことはな。だがしかし、金さえあれば俺たちや無敵! 金さえあれば何でも出来る!」

「まったくその通りだぜ銀さん! 良い装備に金をかけまくれば攻略もはかどるもんな!」

「そういうことだよ長谷川くん! 序盤でグリーンガムのムチやメタルキングの剣が手に入れば、もう何も怖くない! 伝説の勇者ですら馬車要員だぜ!」

お気楽な2人は、ドラクエ的な思考でこの先の展望を語る。確かに、大金があれば冒険が楽になり、魔王打倒も早められるだろう。



「でも、この世界のお金なんて持ってないわよ?」

「なあに、心配はいらねーよ。んなもんこれから用意すればいいだけじゃねーか。望んだ物を何でも与えられるお前の能力でな!」

「ふえ? ……………ああ、その能力って、ここじゃ使えないわよ。天界にいるとき限定のスキルだから」

「……………」

速攻で銀時の計画は瓦解してしまった。アクアの女神パワーに期待して彼女を連れて来たのだが、世の中そんなに甘くはなかった。

「どーしてくれんだグラサン野郎! お前が欲張ったせいでお宝貰い損ねたじゃねーか!」

「俺に文句言うんじゃねーよ! 元はと言えば、全部アンタのせいじゃねーか!」

目論見が外れてイラついた2人は、醜いケンカを始めてしまう。まさに『二兎追う者は一兎も得ず』である。

「ちよつと、こんな状況でケンカなんかしないでよ! あなたたちがしつかりしないと、この私が困るじゃない!」

「お前のせいで困ってるからケンカしてんだろーがあ——つ!!」

「うぎゃ——つ!!?」

オッサン2人に八つ当たりされたアクアは、早速、下々の辛さを学んだ。

何はともあれ、彼女の力はまったく当てにならないことが分かり、自力で金を稼がなければならなくなった。初日から0円生活をしたくない一行は、必要な情報を手に入れるためにギルド的な場所を目指すことにした。

「それじゃあ行くぞ」「アクア」。さっさと来ねえと放置プレイしちまうぞー」

「あつ……。ちよつ、待つてよー！」

初めて銀時に名前を呼んでももらえなかったアクアは、嬉しそうな笑顔を浮かべて彼の横に並んだ。彼の固有ドSスキル「アメとムチ」は、ゆつくりと彼女を調教しつつあった……。



アクセルの冒険者ギルドは、円形に作られている街の中心にあった。屋根裏が2階になつていような建物で、それほど規模の大きなものではない。中はギルドが経営している酒場となつており、ファンタジーな格好の冒険者たちが楽しそうに酒を飲んでい

る。ここが、冒険の基点となる場所で、能力に応じた仕事の斡旋をしてもらえる。

「いらつしやいませー！ お食事なら空いてるお席へどうぞー！ お仕事案内なら奥のカウ

ンターへー！」

丁度、入り口付近にいた可愛いウエイトレスが元気に案内してくれた。

更に、酒場の客と話した一行は、とりあえず冒険者の登録をすることに決めてカウンターへと足を運ぶ。だがここで問題が発生した。

「冒険者の登録をするには、最初に登録手数料がかかります」

おっぱいの大きい受付嬢から笑顔でお金を請求される。ゲームみたいな世界なのに、こういうところは現実のお役所仕事と変わらないようだ。何となく夢を壊された銀時は、お登勢に家賃を払うような心境でお金を出す。

「それじゃあ、この5000円で頼みます」

「えっと……誠に申し訳ありませんが、エリス以外の貨幣は取り扱っておりませんので、この硬貨では登録できません」

「ですよー」

やはり、ジャンプ代として持っていた元の世界のお金は使えなかった。

しよっぱなから行き詰った銀時たちは、沈黙したままカウンターから離れる。そして、人気の無い窓際の席に座ると、ようやく話し始めた。

「なあアクア」

「なによ銀時」

「どー考えてもおかしいだろコレ！ 何でルイーダの酒場で手数料取られなきゃなら

ねーんだ！ 笑顔で無料があのお店のモットーじゃなかったのか——っ！」

「んなこと知らないわよ！ ってゆーか、ここはルイーダの酒場じゃないしいく？ そんな赤字経営必至のお店、ドラクエ以外のどこの世界にあるっていうのよ？ プークスクス！」

「おいコラてめえ！ 俺が大いにお世話になったルイーダの酒場をバカにするたあい度胸してんじやねーか！ 無料でぶっ飛ばしてやつから、表に出やがれコノヤロー！」

「上等じゃない！ 私のゴッドブローで、その死んだ魚のような目を覚まさせてあげるわ！」

「ちよつ、2人とも落ち着けて！ ルイーダの酒場が原因でケンカとか、今日日小学生でもしねーから！ 見てることちが恥ずかしいから！」

仲良くケンカしだした銀時とアクアを一番年上の長谷川が宥める。納得は出来ないが、確かに今はくだらないことで言い争っている場合ではない。先立つものが無ければ先に進めないのだ。

「つたく、うだつが上がらないオジサンは、これだからダメよねー」

「なんだとう!?」

「いいわ！ ここは、超優秀な私の出番ね！ 女神の本気を見せてあげるわ！」

急に自己主張を始めたアクアは、元気よく立ち上がると、彼女の後方に座っていた老

人の元へ歩いていく。そして、おもむろにお金を無心した。

「そのプリーストよ、宗派を言いなさい？」

「ん？」

「私はアクア。そう、アクシズ教団の崇めるご神体。女神アクアよ！ 汝、もし私の信者ならば……お金を貸してくれると助かります！」

そう言つて頭を下げるアクアは、女神の威厳を自ら捨て去つてしまつていた。しかも、そんな彼女に追い討ちをかけるように、老プリーストから衝撃の告白を受けてしまふ。

「私はエリス教徒なんです……」

「なっ!？」

目を見開いて固まるアクア。自信満々で自分の信者だと思つていたら、後輩女神の信者だったのだから仕方がない。それを見ていた銀時たちも、やるせない心境になつてしまふ。

「あー、よくあるよねこーいうの。自分を好きだと思つてたブルマが、ぼつと出のベジータに寝取られるつてパターン」

「よくあるつーか、それただのヤムチャ！」

外野のオッサンどもがヤムチャをディスプレイスつて凍りついた空気を誤魔化す。そんな中、

心にダメージを受けたアクアは、何とか痛みを堪えつつ撤退する事にした。

「あく、エリス教徒の方でしたか。それはどうもすみません……」

「ああ、待ちなさい。お嬢さんはアクシズ教徒なのかな？ 女神アクアと女神エリスは先輩後輩の間柄らしい。これも何かの縁だ。さつきから見えたが、手数料が無いんだらう？ ほうら、エリスさまのご加護つてやつだ。でも、幾ら熱心な信者でも女神を名乗っちゃいけないよ？」

「あ……あ、はい、ありがとうございます……」

とても親切な老プリーストは、困っているアクアたちのために手数料を恵んでくれた。

それはいい。苦境を救ってくれた彼には感謝しても仕切れない。だがしかし、その代償としてアクアのプライドは痛恨のダメージを受けてしまった。

受け取ったお金を右手に乗せたアクアは、銀時たちの元に戻ってくると、半泣きになりながらつぶやいた。

「ふ、ふふ……女神だつて信じてもらえなかったんですけど……。ついでに言うけど、エリスは私の後輩の女神なんですけど……。私、後輩の女神の信者の人に同情されてお金もらっちゃったんですけど……」

「まあ、そんなに気にすることでもねーだろ。長谷川さんも公園で寝てるからお金を恵ん

でもらえるからな。大体それと同じよーなもんさ！」

「まったく全然違うんですけどっ!？」

サムズアツプする銀時にアクアのツツコミが入る。DSな彼の慰めはまったくの逆効果だった。

数分後。アクアの尊い犠牲(?)の末に手数料を手に入れた一行は、再びカウンターへ戻ってきた。いよいよ冒険者の登録をおこなうのだ。

おっぱいの大きい受付嬢……ルナに手数料を払うと、冒険者についての初歩的な説明が始まる。

「まずはこの登録カードを作ってくださいます。ここに冒険者の情報が記載されまして、その数値に応じてなりたい職業を選んでいただくことになります」

そこまで言うと、ルナは右手に持った3枚のカードを掲げて見せる。サイズは大体、運転免許証の2倍ぐらいだ。

「それから、討伐やクエストをこなすとレベルが上がってスキルを覚えるためのポイントが与えられるので、がんばってレベル上げをしてくださいね?」

「おぉー、ようやくRPGっぽくなってきたなあ!」

スキルという単語に反応した長谷川は年甲斐もなくはしゃぐ。これまでの説明を聞

く限り、基本的なシステムはオーソドックスなRPGゲームに基準しているようだ。

「それではお三方とも、こちらの水晶に手をかざしてください」

慣れた様子で話を進めるルナは、カウンターテーブルの上に置いてある機械のような道具に手の平を向ける。これは魔法の力で対象者のステータスを計測し、冒険者カードに自動記録する魔道具だ。まずはこれで能力値を測り、それを元に職種を選択することになる。

「なあ銀さん、最初は俺にやらせてくれよ!」

「ああいいぜ。あんたはハロワに通い慣れてるから、色々参考にさせてもらおうわ」

「余計なお世話だバツキヤロウ!」

軽くからかわれてツツコミを入れる長谷川だったが、それでもワクワクしながら水晶に手をかざす。すると、魔法が作動して青い光を放ち出す。それと同時に水晶を取り囲んでいる機械がカタカタと稼動して、何かを計測しているような動きを見せる。その後、水晶の下部にある皿状のパーツに光の粒子が移動していき、一番下にある針状のパーツからカードに向けてレーザーのようなものが照射される。それらの過程は数秒の間に終わり、無記名だった冒険者カードに長谷川のステータスが記録された。

「はい、ありがとうございます。ハセガワ・タイゾウさんですね。えつとお……」

完成したカードを手に取り内容を確認したルナは、しばらく動きを止めた後に目を見



開いた。

「こ、これは……」

「えっ、なになに、どーしたの？　もしかして、凄まじい潜在能力が目覚めて伝説級のステータスが出ちゃった？」

「は、はあ……ある意味、伝説級ですよこれは……」

「やたらと元気な長谷川とは対照的に歯切れの悪いルナ。その様子に疑問符を浮かべたアクアが説明を求める。」

「伝説級って、一体どーいうことよ？」

「はい……知力は結構高いのですが、他の値はどれも平均以下。その中でも幸運の数値があまりに酷くて……なんとマイナスになっています。このような値を見るのは初めてですよ！」

「ええ——!?　幸運がマイナスってどーいう状態!?!」

「しかも「グラサン」という装備品を外すと、すべてのステータスが表示不能になるようです。もう訳が分かりません！」

「それはこっちのセリフだよ!?!　なんで装備品の方にステータス依存してんの!?　グラサンが本体扱いってどーいうことになってんのお——っ!?!」

まさに非常識な結果を出した長谷川は、不本意だとばかりに叫ぶ。しかし、他の2人

は納得顔だった。

「すげえ機械だなコレ。あまりに正確過ぎて言葉も出ねえよ」

「ええ。この水晶の機能は完璧だわ」

「お前ら結構仲いいなっ!? つーか、少しは慰めやがれてんだコンチクショーツ!!」

こういう時だけ息の合う2人は、いやらしい笑みを浮かべながら長谷川を見つめる。そんな彼らの様子を見たルナは同情心を抱いたが、彼に対して追い討ちをかけるような報告をしなければならなかった。

「あの……ここまでステータスが低いと、基本職の【冒険者】になることもご遠慮させていたきたいのですが……」

「えっ、ウソでしょねえ? ルイードの酒場で職に就けないなんて、どう考えてもおかしいだろう!? たまねぎ剣士にすらなれないって、単なる無職の村人じゃねーかあああああああっ!?!」

いきなりマイナスの幸運値が発揮されて無職が決定してしまった。残念ながら、異世界に来てもお約束は健在だった。

「ま、まあ、知力は優秀なので、高い技術を必要とする職業に就くことをお勧めしますよ?」

「ちよっ、いきなり冒険者人生否定しないでくださいよ! 何とかやらせてください

よお——っ!!」

「うう……仕方ありませんね。レベルが上がれば何とか転職も出来るようになると思いますし……とりあえず【冒険者（仮）】として登録させていただきます」

「ふう……（仮）って、バイトみたいな扱いだけど、無職よりはマシか……」

みつともなく涙を流しながら訴えた結果、ギリギリで登録することができた。とはいえ、冒険者になれたことは間違いない。気を取り直した長谷川は気合を入れる。

「よし、これからスゲーレベル上げて上級職を目指すぞーっ!」

「まあ、せいぜいがんばれや。懸命に働いて上司にアピールしまくれば、正社員登用も夢じゃねえから」

「いや、そういうリアルな言い方されると萎えるんですけど……」

調子に乗り出した長谷川に軽く釘を刺した銀時は、髪を掻き揚げながら進み出る。次は彼の番なのだ。

「さあて、いよいよ真打ち登場だぜ」

一応少年マンガの主人公である彼は、自信満々で水晶の前に立つ。一応少年マンガの主人公の自分なら、一応少年マンガの主人公らしいステータスになるはずだ。

「見てろよお前ら。本編で何度も死にかけた今の俺なら、戦闘力53万は堅いはずだぜ」  
「それ主人公じゃなくてフリーザさま!」

間にギャグを挟みつつ、いよいよ銀時の計測が始まる。ルナがカードをセットした後に手をかざすと、先ほどと同じように水晶が起動し、数秒後に彼の冒険者カードが出来上がった。

「サカタ・ギントキさん。あなたのステータスは……」

手に取ったカードを見たルナは、再び動きを止める。どうやら、先ほどの長谷川と同様にいつもと違う結果が出たようだが……。

「どうだい姉ちゃん。ジャンプを代表する主人公さまのステータスは？ 常人離れた凄まじい数値だろう？」

「は、はい……とても素晴らしい結果が出ています！ 身体能力に関しては一級職のベテランすら超えています。どうやら、適度な運動を定期的に行なっているようですね。肉体年齢も20代前半をキープしています。ですが、幸運がかなり低いので、これから先は健康面に不安があるかもしれません。実際、血糖値が非常に高く、糖尿病を発病するリスクが高まっています。大変だとは思いますが、甘い物の摂取をなるべく控えるように注意してくださいね？」

「はあ、すみません。自分、甘党なもので自制出来るか自信無いですが、出来る限りがんばってみます……じゃねーだろ!! なんて途中から健康診断受けてるみてーになつてんだ！ 魔王と戦う前に生活習慣病と戦えつてのかわノヤロー！」

「あはは……何故か血糖値という項目が追加されていたので、流れ的に……」

「そんな気遣いありません！　つーか、血糖値ってなーに？　それに何の意味があんの？　状態異常がデフォルトなんて嫌がらせでしかないんですけど！」

あまりに予想外な結果に銀時がつっこむ。やはりというか、彼の冒険者カードにもバグが発生していた。とはいえ、血糖値が高いことと幸運が低いことを除けばとても優秀なステータスとなっている。物理攻撃に関する能力値は申し分なく、知力もそこそこあるので魔法も使える。

「ま、まあ、この際、血糖値の件は置いといて……いよいよ一番重要な職選びをする番だな」

バグってるステータスを無視して職業選択の自由に期待する。

この時、銀時は大いに胸を膨らませていた。なんと自分も自分は主人公であり、女神に選ばれた勇者なのだから、特殊なジョブが選べるに違いない。

「オーソドックスに勇者が来るか。もしくは、原作を意識して侍になるか。いや、ここは意表を突いて海賊王なんてことも……」

「あれ？　これは一体どういうことなの？」

「ん？　どーした姉ちゃん。まさかほんとに海賊王来ちゃったの？　ルフィより先に目標達成できちゃうの？」

「いい、いいえ、そんな職業はありませんけど……基本職の【冒険者】が変化して、それしか選べないようになっていいるんです！」

困った様子のルナが、必死にカードを操作しながら叫ぶ。案の定、職業選択の方にも異常が発生しているらしい。

「で、その選択できる職業ってのは？」

「【遊び人】です」

「それただの無職うろうう——っ!?!」

答えを聞いてみたら、思いっきり納得できる職業だった。

「ふざけんじゃねーよ！　なんで主人公の俺さまが、勇者を邪魔するクズヤローにならなきゃならねーんだ！　っか、前から思ってたんだけど、それってほんとに職業なの!?!　お茶目な開発スタッフの悪ふざけじゃないの——っ!?!」

「ええっと、言葉の意味はよく分かりませんが、とりあえず【冒険者】に近い扱いのようですので安心してください。レベルが上がれば転職もできると思いますから……」

「そーだぜ銀さん。【遊び人】ならレベル20で賢者に転職できるから、そんなに気にすんなって」

納得できずに荒ぶる銀時をルナと長谷川が宥める。しかし、空気を読まないアクアは彼を煽るような言葉をはく。

「つてゆーか、それ以上にお似合いの職業なんて無いんだから、そのままでもいいんじゃない？」

「こんの駄女神エ！ 遊び人を馬鹿にすんな！ ヤツラはみんな、悟りの書が無くても賢者になれる可能性の卵なんだよ！ やれば出来る子なんだよ！」

「嫌がつてるクセにすごい愛着!!」

口先から生まれてきた男と言われる銀時は、どんなに劣勢でもアクアに反論して行く。しかし、彼女にも女神としてのプライドがある。このまま言われっぱなしでは済ませられない。

「ふっふっふ。あなたがどう言い訳しても、所詮は遊び人の戯言。高貴な私の素質には足元にも及ばないわ！」

「はっ！ そこまで言うなら見せてもらおうじゃねーか、ポンコツ女神の性能とやらを！」

挑発的なアクアは、怒りを示す銀時に余裕のある笑顔を向けると、そのまま水晶の元まで歩いていく。

「見てなさいよ2人も。女神である私に秘められし本当の力を！」

得意げな表情をしながらピシッと人差し指を向けるアクア。その態度にイラツとくる銀時たちだったが、彼女が女神であることは確かなので、とりあえず結果が出るのを

静かに待つ。

すると、カードを見たルナが驚いたような声を上げた。

「わああ——っ!? 知力が平均より低いのと幸運が最低レベルなこと以外は全てのステータスが大幅に平均値を超えていますよ!」

さりげなくアクアの頭が悪いことを強調しながら他の部分をベタ褒めする。実際、彼女のステータスは常人を超えており、驚くべきことだった。

「んふふ。やっぱり私は凄いでしょ?」

「は、はい。すごいなんてものじゃないですよ! 知力を必要とされる魔法使い職は無理ですが、それ以外なら何だってなれますよ……」

得意げなアクアに伝えてルナの褒め言葉が続く。その言葉は周囲にいる者たちの興味を引き、あつという間に注目を集める。

「【クルセイダー】、【ソードマスター】、【アークプリースト】……最初からほとんどの上級職が選択できますよ……」

「そうね、女神って職業が無いのが残念だけれど。私の場合、仲間を癒す【アークプリースト】かしら?」

「【アークプリースト】ですね? あらゆる回復魔法と支援魔法を使いこなし、前衛に出ても問題ない強さを誇る万能職ですよ!」



アクアの選択にルナも同意する。水の女神である彼女の性質とステータスを見れば適切な選択だと言えるからだ。

しかし、銀時だけはブリーチキャラのようなりアクションで警戒心を表している。

「なん……だと……」

「ん〜？ どーした銀さん？ 驚いてる一護みてーな顔して？」

「クソツタレめ。まさか、こんなことになっちまうなんて。どうやら、もつとも恐れていた事態になっちまったようだぜ……」

「はあ？ 一体どーいうことよ？」

銀時の言っていることが分からない長谷川は、とぼけた顔で質問する。どうして彼は、アクアが「アークプリースト」になることを危惧しているのだろうか。

「まだ分からねえのか？ アイツが僧侶になっちまう恐ろしさを！」

「いや、なにが恐ろしいのか全然分からないんだけど。回復役は絶対必要になるんだから、いいことじゃねーの？」

「そうだ。確かに、パーティには回復魔法を使えるキャラが必要となる。しかし、神楽以上にバカな駄女神が僧侶になったらどうなると思う？ 知力が低いアイツは、才色兼備

なミネアじゃねえ。MPが空になるまでひたすらザラキを唱え続けるクリフトだ！」

「なん……だと……」

「よく考えてみる。ベホマラーを使って欲しい時にザラキを連発されたらどうなるか……。回復役に放置された俺たちは確実に死ぬぞ」

「そんな……なんてこった……。あの馬鹿なAIにイラつく日々が再び蘇るといのか!？」

ドラクエ的な説明を受けた長谷川はようやく理解した。あの駄女神に命を預けることの恐ろしさを。そんな死活問題の根源となっているアクアは、何も知らない酒場の連中からもてはやされているが……。

「それでは、冒険者ギルドへようこそ、アクアさま！ スタッフ一同、今後の活躍を期待しています！」

『ヒャホーウ!!』

「いきなり「アークプリースト」なんて、とんでもないですねー!」

「あんたみたいな奴が、案外、魔王を倒しちまうのかもなあ!」

「この命知らず!」

「いやいや、どーもどーも!」

周囲から送られる賛辞に笑顔で応える我らが女神。しかし中身は駄女神だ。徹底的に学習させなければ、いずれはザラキ厨となってしまうかもしれない。

「ならば、手遅れになる前に俺の手であいつを調教……もとい、教育するつきやねーだろ

うな……」

「それってドSの血が騒いでるだけじゃね？　ただ単にやりたいだけじゃね？」

楽しい教育シーンを思い浮かべた銀時は、口元をサデイスティックに歪ませる。果たしてアクアは、彼の教育によって賢いクリフトになれるだろうか。もしくは、激しい攻めに屈してドMに目覚めてしまうのだろうか。

しかし、彼らに降りかかる問題はそれだけではなかった。冒険者の収入がフリーターよりも不安定だということを、彼らはまだ知らなかったのである。

### 第3訓 バカは死んでも治らない

駆け出しの冒険者の街・アクセルに転生した銀時、長谷川、アクアの3人は、ギルドにて冒険者の登録を済ませた。これでモンスターを討伐したり募集されているクエストをこなせば、難易度に応じたお金と経験値が貰える。しかし、事はそう簡単には運ばない。現在、アクセル周辺のザコモンスターは粗方討伐され尽くしており、初心者に優しい仕事はほとんど残っていない。つまり、ドラクエ序盤で必ずおこなう『スライム狩り』が不可能になっていたのである。

ギルド内で仕事を探している最中にその事実を知った銀時は、不条理な怒りに燃える。

「チツキショウ！ みんなのアイドル・スライムさんを、てめえらの都合だけで全滅させちまうだなんて……許さんぞ冒険者どもおおお!!」

「さつきまでスライム狩る気満々だった奴の言うセリフじゃないんですけどー!」

クエスト掲示板の前で騒ぎ出す銀時と、それにすかさずつつこむアクア。迷惑極まりない行為だが、一応納得できる理由はある。武器すらまともに用意できない状況で初心者に適した仕事を奪われてしまったのだから憤るのも無理はない。簡単なクエストを

クリアして今日の夕食と宿代だけでも稼ごうとしたのだが、現在受付中のクエストはどれも厄介な物ばかり。現時点でアクアの回復魔法を当てにするのはあまりにも無謀なので、いきなり危険な冒険は避けたいところである。

「こりやまいったな。どのクエストもすっぴん状態じゃクリアできねえよ……」

「今ある装備は『マダオの棒』と『駄女神の盾』ぐらいだからな。実質、俺一人で戦うよ  
うなもんだぜ」

「なんだそのドS装備は!? 俺らを武器に戦うとか、一体どーいう発想してんの!? そんなことされたら、俺らの方が傷ついちゃうから! トラウマという名の傷を負っちゃ  
うから!」

「そーよそーよ! 女神の私を盾にしようだなんて、あんたどんだけ鬼畜なのよ!

ノーブラ派の私は防御力低いんだからね! 神ならぬ紙装甲なんだからね!」

「なんか再び女神らしからぬ単語が聞こえたんですけど!? つーか、女神さまなら下着  
くらいつけてください!」

またしてもアクアが問題発言をして、それに反応したオツサン2人は彼女の胸元を凝  
視してしまう。うん、よく見ると確かにノーブラです。重力に逆らうことなく自由に存  
在感をアピールなさっております。

「良いモン見させてもらいましたっ!!」

「??」

思わず手を合わせてお礼を言ってしまう。とはいえ、これから一緒に行動するのならパンツくらいは穿いてもらわないと困る。仲間が痴女ではアレなので、早々にパンツを手に入れなければならない。

だが、そのパンツを買うお金を稼ぐことすら困難だった。ギルドで得られる仕事はほとんど日雇いバイトのようなもので、収入はまったく安定しない。しかも、命がけになるような内容ばかりのクセに報酬はスズメの涙というブラックぶりであった。もちろん、難易度に見合った高額報酬を貰えるクエストもあるが、現時点ではクリアなど到底不可能である。

「まったく、やってらんねえぜ。ギルドに登録したつつつても、これじゃあ万事屋と変わんねえじゃねえか。ファンタジーつつーくらいだから『ジャンプ読むだけで金が貰える』みてーな夢のある仕事があると思つてたのに、やれペット探しとか、やれ害獣駆除とか、デジャブを感じる雑用ばっか。この世界にや夢も希望もジャンプも無えよ」

「それ夢でも希望でもねーから！ 中坊レベルの欲望だから！ つーか、いい加減ジャンプのことは諦めろよ！ もう続きは読めねえんだから」

「あー！ あー！ なんも聞こえませーん！ そんな現実認めませーん！」

銀時は、ジャンプが読めなくなったことに未練を感じて子供のようには駄々を捏ねる。

その様子を見たアクアは、上から目線で嘲笑する。

「ぷぷー！ そんな幼稚なことでヘコんでたなんて、転生してもマダオはマダオね！  
いい年こいてジャンプなんか読んでるから、まともな大人になれないのよ！」

「よーし、駄女神そこに立て。爆裂究極拳食らわせてやつから」

自分とジャンプを侮辱された銀時はアクアに制裁を加えようとする。しかしそれも現実逃避でしかない。仲良くケンカしたところで、お金が無いという事実は変わらない。

「そんなことより、どーすんだよ銀さん。このままだとメシも食えずに野宿することになっちまうぞ？」

「ええ——っ!? そんなのダメに決まってるじゃない！ 女神さまを夕食抜きで野宿させるとかマジで有り得ないんですけど！ 男だったら、こういう時に甲斐性見せてみないよー！」

「あー、そーいうこと言っちゃうんだ？ 男女平等が叫ばれてる時代に、女神さまともあろうお方がパワハラ発言しちゃうんだ？ 口だけ偽善者はこれだから困るんだよねー。

割り勘すると嫌な顔する女とか全然平等じゃねーし。クリリンと18号の戦闘力ぐらいい不平等だし」

「尊い女神とケチな女性を一緒にするな！ っっていうか、18号だっけ好きで強くなっ

たわけじゃないでしょ！ 戦闘力のインフレに翻弄された悲しき被害者の1人でしょ！

のらりくらりと言い訳してアクアの八つ当たりを受け流すが、このまま野宿するのは銀時自身も御免である。ならば、あの手を使うしかない。

「はあ……。マダオとケンカしたところで、結局お腹が空いちやうだけ。なのにご飯を食べるお金が無い……。あーんっ！ これからどーすればいいのよおー！」

「まあ待てアクア。ここは一先ず落ち着いて冷静になるべきだ。そうすれば、新たな道も見えてくるさ」

「あうう。新たな道って、そんなものが本当にあるの？」

「ああ、俺たちにはまだできることがある。こういう時に、かつての勇者たちが必ず行ってきた定番の解決法がな」

「えっ、マジで!？」

「なんだよ銀さん。良い方法があるのにもったいぶるなんて、あんたも人が悪いぜ」

いつになく頼もしげな銀時にアクアと長谷川が期待の眼差しを送る。果たして、自信ありげな彼が思いついた方法とは一体何なのだろうか。

「では明かそう。俺の思いついた解決法を。古より数多の勇者を救いし禁断の技を」

「ズクリ……」



「その解決方ってのは？」

「窮地に陥った勇者たちを何度も救ってきたその方法。それは……」

「それは？」

「街中の家に入って、ダンスやツボから金目の物を頂戴することだああああ——  
——っ!!」

「それただのドロボ——ッ!!?」

「おいコラてめーら、人聞きの悪いこと言うんじゃねーよ。ドラクエの勇者たちなら、全員もれなくやってることじゃねーか。新しい街に来たら『しらべる』すんのは基本じゃねーか。だったら俺らがやってもなんら問題ねえはずだ……。そーだよ、冷静に考えれば最初からそうするべきだったんだよ。お前らだつてそう思うよなあ？ うえへへへ……」

「いやいや、それ普通に犯罪だから！ ゲームの中だけで許される行為だから！ つーか、お前の方こそ冷静になれよ！ 魔王と戦う前に自分の悪意に負けてんじやねーよ！」

なんと、頼もしいことを言っていた銀時は内心で超テンパっていた。

「ちよつと銀時！ ドロボーなんて、女神である私が許さないわよ！ そんなことして捕まったら、牢屋で臭い飯を食べなきゃならなくなるじゃない！ 美食家の私には耐え

られない屈辱よ！」

「つて、全然女神関係ねーし！ 気にしてるのメシだけだし！」

こんな時でもブレないアクアは女神とは思えない発言をする。そんな彼女を銀時の甘い言葉が誘惑する。

「分かってねえなあアクアさん。女神のお前が自分の家に降臨したとなりや、街人のみなさんにとつちや最高に光栄なことじゃねーか。だったら、そのお礼をいただいたとしても何ら問題無えだろお？ 見事なまでのギブアンドテイクなんだからよお？」

「あ……………そ、そう言われるとその通りかもしれないわね！ なんだって私は、この世界でもつとも尊き女神さまなんだから！ 神に捧げられし物を頂戴しても、まったく全然構わないわよねえ……………」

「つて、早まるなアクアちゃん!? 悪魔の甘言に騙されちゃダメだあーっ!? そのまま行ったら悪堕ちしちゃうから！ エッチな衣装の堕女神になっちゃうからあ————っ！」

なんと、甘い誘惑は女神にも有効だった。このままでは、開始早々に主人公の悪堕ちエンドに陥つてしまいそうだ。

しかし、彼らのピンチを救ってくれる男が唐突に現れる。

「つたく、バカなこと考えねーでお前ら地道に働けえ————っ!!」

「ならば、俺たちの仕事場で働かないか？」

「……え？」

やたらと男前な声で話しかけられた3人は動きを止める。ほとんどの冒険者が近寄ろうとしなかったほど厄介そうな彼らに話しかけるなんて、一体どんな男なのだろうか。気を引かれて見てみると、ソイツは銀時たちよりも厄介なヤツだった。黒い長髪に端正な顔立ち。そして、青い着物と白い羽織を華麗に着こなすその男は……

「ツラじゃね——かああああ——っ!!？」

「ツラじゃない、桂だ!!」

お決まりのフレーズで突っ込み返すロン毛の男。現れた人物とは、銀時と共に日本の窮地を救った立役者の1人である桂小太郎だった。更にその傍らには、いつも一緒に行動している白いペンギンのような宇宙生物・エリザベスもいる。どうやら彼らもこの異世界に転生してきたらしいが、相も変わらず神出鬼没なヤツラである。

「久方ぶりだな2人とも。壮健そうで何よりだ」

「この不自然極まりない状況で普通に挨拶してんじやねーよ！ つーか、なんでお前らがここにいんだよ!?! まさかお前らも死んじまってここに転生してきたつてのかわ!?!」

「ああそうだ。今から2ヶ月ほど前に俺は死んだ。『黄色い悪魔』に襲われたことをきっかけにしてな……」

「ああ？ 黄色い悪魔だと？」

「アンタほどの手練れを死に追いやるなんて、一体何者なんだ？」

ここにいる理由を聞いた途端に桂の回想が始まった。あまりに唐突だったものの、事情を知りたい銀時たちは静かに耳を傾ける。

現在より時を遡ること半年前。平穏を取り戻した日本で新たな形の攘夷活動を開始した桂は、自分なりの世直しを進めるため、相棒のエリザベスと共に各地を旅していた。志半ばで散っていった徳川茂茂や仲間達の意味を受け継いだ彼らは、平和を脅かすすべての歪みを絶ち切らんと全国行脚を続ける。旅の途中で手に入れた初代たまごつちをプレイしながら。

『まったくお前ってヤツは、やたらとウンコをしまくりおって。少しは掃除をするこちらの身にもなれ。だがしかし、世話がかかるからこそ、より愛着が湧くというもの』  
「つて、攘夷活動そつちのけでゲームやってるだけじゃねーか！ しかも今頃たまごつち!？」

「最近、巷で流行っていると噂に聞いてな。試しにやってみることにしたのだ。攘夷志士たるもの、たとえ子供のおもちやであっても時代の流れに乗り遅れるわけにはいかならな」

「時空を超えて乗れてねえよ！ 相変わらず時代の流れについていけてねえよ！」

真面目に活動していると語り出したクセに、歩道を歩きながらゲームで遊んでいる桂。そんな隙だらけの彼に不幸が起きる。

「確かに俺は油断していた。ようやく進化に成功した『おやじっち』の世話に追われて、周囲の警戒を怠っていた。その時だ、奴が奇襲をかけてきたのは」

「そりゃあ奇襲も容易だろーよ！ スマホ時代にたまごっちやつてる視野の狭いやツなんか、どうとでもなるだろーよ！」

「そう、確かにお前の言う通りだ。平穩というぬるま湯に浸っていた俺の目は曇っていた。それゆえに気づくのが遅れてしまったのだ。足元から忍び寄って来たヤツの存在にー！」

たまごっちに集中しながら歩道を歩いていた桂は、足元に落ちている「バナナの皮」に気づかずに思いつきり踏んでしまった。その結果、ギャグマンガのように足を滑らした彼は、受身を取ることもできずに引っくり返って後頭部を強打してしまった。

「ええい、忌々しい黄色い悪魔め！ 一般市民が往来する公共の場に罠を仕掛けるとは、なんて卑劣なヤツなんだ！」

「つて、不注意なバカがバナナの皮踏んだだけじゃねーかああああ——つ!!？」

真面目に話を聞いていたら、予想以上に残念なオチだった。

「それじゃああなたにか？ 結局、お前はバナナの皮で死んだのか？ コントみてーにスベって転んで死んじまったってのか？」

「いいや違う。その時俺は、かろうじて一命を取り留めた。エリザベスが適切な処置をしてくれたおかげでな。しかし、こいつの努力も空しく、俺の意識が回復することはなかった……。俺の頭を治すことは、従来の医療では不可能だったのだ」

「そりゃあ当然だろ。お前の頭は死んでも治ってねえんだから」

その指摘はもつともだったが、この場合は治すべき場所が違う。当時の桂は、物理的にダメージを負って意識不明の重体となっていたのだ。

病院に運び込まれた桂は、静かな病室で時が止まったように眠り続ける。その傍らで世話を続けるエリザベスは、ある日一つの決心をする。例えどのような手を使っても、必ず桂を目覚めさせてみせると。

「そして、海外にまで調査の手を広げたエリザベスは、とある人物に目をつけた。ドクターゲロという名の天才医師に！」

「ちよつと待てえええええ——つ!? その人、医者じゃないんですけど!? マッドなサイエンティストなんですけど!」

「何を言う。確かに名前はアレだと思うが、レッドリボン・クリニックでは最高の名医として知られるお方だぞ」

「いやいや、お前絶対騙されてるから！ レッドリボンって軍隊だから！ 人造人間的なものに改造されちゃうトコだから——っ！」

話を聞いた銀時は、この後、桂の身に起きたことを悟った。そしてそれは大体当たっていた。

「俺は幸運だった。地球最高の名医に治療してもらえたおかげで、奇跡的に意識を回復する事が出来たばかりか、超サイヤ人以上の戦闘力を手に入れていたのだからな」

「やっぱ改造されてるうううう——っ!? え、マジで？ ホントに人造人間になっちゃったの？ ロン毛の17号的な残虐超人になっちゃったの——っ!?」

思わずセル編の悲劇を思い出した銀時は焦る。しかし、銀魂世界のドクターゲロはそんなに悪い人ではなかった。素質のある患者を見ると、つつい超戦士に人体改造してしまう癖のある風変わりなお医者さんだった。無論、おバカな桂は、彼の事を命の恩人だと思いついでいるため、何の迷いもなく反論する。

「失礼なことを言うな銀時。あの方がそんな物騒なことをするわけがなからう。かなりの悪人面で初見は恐怖を感じたものだが、今思えばお茶目で楽しい人だったぞ？」

「そんなハートフルな思い出話で済まねえよ!! あのおツサンは、顔面通りにアブナイ奴だよ！ あぶない刑事テカよりアブナイ科学者ドクだよ！」

あまりに都合良すぎる思い出に銀時のツツコミが決まる。しかし幸いな事に、彼が危

惧した洗脳は施されておらず、桂の頭は改造されないまま治療され、数カ月後に無事退院した。身体の方は超戦士に改造されてしまったが。

「何はともあれ、命を取り留めると同時に強大な力を得た俺は一先ずかぶき町に戻り、身の振り方を改めて考え直した。この圧倒的な戦闘力をどのように活かすべきか。小一時間ほど思考を重ねた結果、俺は一つの答えを導き出した。そうだ、『趣味でヒーローでもやってみつか』と!」

「答えがめつさ軽いなオイ!」

銀時は、あまりにのん気すぎる桂にツツコミを入れる。それと同時に、ニュータイプ的な電撃が脳裏を走る。彼の語る動機から、とあるマンガの主人公を連想したのだ。

「こうして決心を固めた俺は、ヒーローっぽい衣装を用意した。そして、悪のはびこるかぶき町をパトロールし、数多の悪人を懲らしめるようになったのだ。その際、必ずパンチ一発で仕留めてしまうことから、まもなくこう呼ばれるようになった。『ヅラを被ったワンパンマン』とな!」

「思いつきりパクリじゃねーか!? しかも、さりげなく自己主張してんのがムカつくんですけど!」

「俺が言い出したことではないのだから仕方なからう。その証拠にしつかりと訂正している。ワンパンマンじゃない、『カツパンマン』だ!」



「まったく訂正しきれてねえよ！　ちやつかり便乗しちやつてるよ！　つーか、やんなら徹底しろよ！　そのヅラ取ってハゲも再現しろよカス！」

「ヅラじゃない、最近抜け毛が気になってる桂だ！」

調子のいいことを言う桂に怒りが湧き上がり、口汚く罵る銀時。とはいえ、カツパンマンが正義の味方として功績を挙げていた事実は間違いなく、かぶき町の新たなヒーローとしてそれなりに名前も広がっていた。実際、新八や神楽も情報を仕入れており、生前の銀時に話している。

「そうか。あいつらが言ってた全身タイツの変態野郎ってのはお前のことだったのか」

「ヒーローは正体を隠さなければならぬものだからな。例え竹馬の友であっても秘密を明かすことは出来なかったのだ。許せ銀時」

「いや、別にどーでもいいし。俺には変態の友達なんていねーから」

どつちかって言うのと万事屋の商売敵だったため、イラツとしながら受け答える。

しかし、無敵と思えたカツパンマンにも終焉を迎える時が来てしまう。桂とエリザベスは、自身の最後を思い出して沈鬱な表情になる。

「あれは静かな夜のことだった。俺とエリザベスは、とあるキャバクラで仕入れた情報をもとに、閑静な住宅街で張り込みをしていた。何でも、貧乳ながら見目麗しいキャバ嬢がゴリラのような風貌の変態男にストーカーされているというのだ」

「あれ、そこはかたなく聞き覚えのある話なんだけど、それお妙と近藤のことじゃね？」  
銀時が察した通り、桂たちは『志村』と書かれた表札のある屋敷の近くで張り込みをしていた。すると、屋敷の中から女性の悲鳴が聞こえてきた。

『交尾の相手が欲しいなら、動物園で探して来いやああああ——つ!!』

『うぎやああああ——つ?!』

『これは!?! 助けを求める乙女の悲鳴!』

「今のドコでそう思った!?! 乙女よりもゴリラが助けを求めてるパターンだろコレ!

ゴリラのよーなキャバ嬢にゴリラのよーなストーカーがぶつ飛ばされてるパターンだろコレ!」

中で起きたであろう惨状を予想してツツコミを入れると、案の定、涙を流したゴリラが扉を乗り越えて逃走してきた。キャバ嬢に蹴りを入れられたケツの穴に手を当てながら。

その様子を見たカツパンマンは、隣に控えるエリザベスに指示を出す。

『よし。後を追うぞ、ジェノザベス!』

〈了解です、カツタマ先生!〉

「いや、ジェノザベスってなんだよ!?! オサレなヅラまで被りやがつて! オバQの分際でジェノス役とか、図々しいにも程があんぞ!」

イケメンサイボーグであるジェノスの格好をしたエリザベスは、確かにムカツク絵面だったが、回想にツツコミを入れても仕方が無い。

兎にも角にも、張り込みをしていたコスプレ野郎どもは、逃走するゴリラストーカーを追いかける。しかし、彼らの健脚を持つても中々追いつけない。リビドーを発散できず悶々としたエロパワーを溜め込んでいるゴリラストーカーは、憎たらしいまでに速かつたのである。

「このままでは逃げられてしまう。そう判断した俺は、ジェノザベスを担いで高速移動することにした。その時だ、奴が奇襲をかけてきたのは」

「はあ？ こんなどーでもいい場所で第三者が割り込んで来たつてののか？」

「そうだ。奴は獲物を狙う毒蛇のように俺たちがやって来る瞬間を待ち構えていたのだ。足元から襲い掛かるためにな！」

この時、カツパンマンは、ゴリラストーカーに追いつこうとしてショートカットできる路地裏へ入った。するとそこは生ゴミの集積場となっており、間が悪いことに回収し損ねたバナナの皮が落ちていた。暗がりだったせいであれに気づかなかつたカツパンマンは、高速移動中に思いつき踏んづけてしまい、担いでいたジェノザベスごと引っくり返って、2人仲良く後頭部を強打してしまった。

「こうして俺とエリザベスは、波乱万丈な一生を終えたのだ」

「結局、バナナの皮がよおおおお——っ!!?」

やたらと長い回想の結末は『バナナの皮でスベって死ぬ』だった。

ちなみに、彼らが死んだことは世間には知らされていない。桂が常に携帯していた遺言状に『我らの魂は消えることなく、未来永劫、悪の敵となり続ける。故に、この死は仮初であり、公言することまかりならん』と記してあったため、すべての真相は事後処理をした真選組が隠蔽してしまった。そのせいで、付き合いの長い銀時も彼らが死んでいたことを知らなかったのだが、改めて聞いたその経緯はあまりにツツコミ所満載だった。

「人生の最後に何やってんだテメーは！ 仮にも組織のトップを務める男がドリフのコメントみてーな死に方してんじゃねーよ！ ネタがあまりに古過ぎて、オチまでスベってんじゃねーか！」

「つーか、人造人間なのに、このくらいで死んじやうのかよ！」

「さしものドクターゲロも、繊細すぎる俺の頭は強化出来なかったようだ」

「そりや、弱点だらけのお前の頭じゃ、誰でも匙を投げるだろーよっ！」

壮絶におかしな死に方してもまったく変化の無い桂にオッサン2人は呆れ果てる。

「確かに、お前たちが呆れるのも仕方ないほど呆気ない死に様だった。友との約束を道

半ばで果たせなかった無念の死でもあった。しかし、死すべき時は共にと誓い合ったエリザベスと一緒に逝けるなら、それもまた本望。故に俺は、何ら後悔することなく死後の世界へと旅立つことが出来たのだ。もちろん、お前も同じだろう、エリザベスよ」

自分に酔いしれた様子の桂は、優しい眼差しを相棒に向ける。しかし、当のエリザベスはご立腹の様子である。

「お前のせいで俺まで死んじまったのに、良い話だった風に誤魔化してんじゃねえよ！」  
と書かれたプラカードを手に持ち、桂の頭を激しく殴る。

ガスッ！ ガスッ！ ガスッ！

「はっはっは、まったくエリザベスは照れ屋さんだな。これが最近流行っているツンデレというものか」

「いや、それ普通に怒ってるだけだから。デレの要素は微塵も無いから」

照れていると勝手に決め付けて朗らかに笑う桂だったが、その無神経さがエリザベスの怒りを増大させる。

「嫁と子供を残してきた俺の無念を思い知れや、このクサレ外道！」

と書かれたプラカードを手に持ち、桂の頭を激しく殴る。

ガスッ！ ガスッ！ ガスッ！

「はは、ホントにお前は天邪鬼だな。いくら人前だからとて、そんなに恥ずかしがらずと

もいいではないか……おい、そろそろ本気で止めなさい。プラカードの角が刺さって頭皮にダメージ出ちやってるから。不自然なままでに出血しちやってるから」

そろそろ黙っていられなくなった桂が注意する。それでもエリザベスの折檻は止まらない。

ガスッ！ ガスッ！ ガスッ！

「いや、だから、俺の言うことを聞いて……俺の言うことを……聞いて……いい加減、聞けやゴラア!! お前、さつきから怒ってるフリしてっけど、ホントは俺に隠れて道具屋のリンダちゃんとヨロシクやってんの知ってんだからな、俺！ 深夜にハッスルしてんの知ってんだからな、俺！」

さつきまでの紳士的な態度はどこへやら。仲良しアピールをしていた桂は、その友情をかなぐり捨てて、反抗的なエリザベスと殴り合いのケンカを始めた。

「なあ長谷川さん。『バカは死ななきや治らない』なんて言葉があるけど、ありや嘘だな。転生してもバカはバカだ」

「まあ、俺たちも似たようなモンだけだな」

期せずして懐かしい光景を見ることになった銀時と長谷川は、嬉しい気持ちを感じる。同時にやるせない気分になる。

一方、桂が現れてからずっと黙ったままだったアクアは、これまでのバカなやり取り

を生暖かい目で見つめていたが、彼のロン毛とエリザベスを眺めている内に、とあることを思い出した。

「あ———っ!? あんたたちのこと思い出したわ!」

「おお。そういうあなたは、やはりアクア殿であったか。先ほどから見覚えのある少女だと思っていたが、その節は世話になったな」

いつの間にかケンカを止めていた桂は、ボコボコになった顔をアクアに向けて微笑む。

「なんだよ、こいつらを転生させたのもお前だったのか?」

「ええそうよ。いつもだったらすぐに忘れちゃうんだけど、この人たちは強く印象に残ってたから思い出せたわ」

いつになく真面目な顔で答えるアクア。一体、桂は何をやらかしたというのだろうか。気になった長谷川は質問してみた。

「強い印象って、何があっただよ?」

「それは天界で転生特典を選んでもらう時の話よ……」

そう言いながら静かに目を閉じたアクアは、本日2度目の回想を始めた。

バナナの皮が原因で死んでしまった桂とエリザベスは、銀時の場合と同じくアクアに

目を付けられて異世界への転生を強要されていた。

『……つてなわけで、異世界に転生してもらう人には、大サービスとして何か一つだけ好きな物を持っていける権利をあげるわ。強力な武器や、とんでもない才能。誰にも負けないオンラインワンの力をあなたに授けてあげちゃうわよ?』

『ふむ。女神から与えられし力か。それはさぞかし凄まじいものなのだろうな』

『そりゃ当然よ! どんなマダオも勇者になれる伝説級の宝具や英雄級の能力ばかりなんだから!』

褒められたアクアは、したり顔で悦に入る。しかし桂の真意は、彼女が思っていたものとは全然違った。

『ならば俺は、その権利を放棄しよう』

『はい了解く。権利を放棄しますつと……え? 放棄? 今、放棄するって言った?』

『ああ言った』

『ええ——つ!? なぜなにどうして!? こんなチャンス、二度と無いのに!』

『ふっ。何故かと問われたならばこう答えよう。この俺が侍だからだ』

『……侍だから?』

『そうだ……。確かに、魔王打倒を実現するには、あなたの施しを受けるべきなのだろ





珍しく気の利いた提案をするアクアに桂は喜ぶ。気まぐれな女神さまは、この奇妙な男が欲しがっているものを知りたくなっただけなのだが、果たしてその正体とは何なのだろうか。

『それじゃあ聞かせてちょうだい。あなたが欲しい物を』

『では、遠慮なく頼ませてもらう……あのファミコンとディスクシステムが一体化した超高性能ゲーム機「ツインファミコン」を！』

「神さま相手に何頼んでんのおおおお——っ!？」

アクアの回想を聞いてみたら、案の定、おバカな内容だった。

結局、桂はすごいお宝ではなく、ツインファミコンを貰って転生してきたのである。ちなみに、宇宙生物でペット扱いのエリザベスは特典の対象外だったため、何も貰っていない。貴重な願いは、本当にツインファミコンだけで終わってしまったのだ。

「ぶふ——っ!! 今思い出してもウケるんですけどっ! あそこでツインファミコンって、流石の私でも予想できなかったんですけどっ!」

「そりゃ誰でもできねーよ! つーか、おめえはどんだけツインファミコン欲しがってんだ!?! オヴェー編の後もずっと探してたのか——っ!?!」

「うむ、どうしてもマリオの奴と再会したかったのだな」

「だからなんでファミコン限定!? もっといい機種出てんだろーが! そもそもここじゃあ、ツインファミコンどころかテレビすら使えねーよ!」

「確かに、そこが盲点だった」

「普通に分かれよそんならい!? つーか、んなもん貰って魔王退治はどーすんだよ! ツインファミコンの角で魔王の頭カチ割る気ですかコノヤロー!!」

確かに銀時の言葉にも一理ある。女神の特典を貰った転生者は大勢いるのに依然として魔王が存在していることを考えれば、ツインファミコンなどをゲットしている場合ではない。しかし、当の桂は自信満々の表情で反論する。

「その心配は無用だ銀時。ギルドに登録した俺は、魔王の天敵である史上最強の職業に就くことが出来たからな。この絶大なる力があれば、魔王など恐るるに足らん!」

「なっ!? ま、まさか……お前みてーなバカ野郎が、あの『伝説の勇者』に選ばれたというのか!」

「そう! 運命の女神は、魔王を滅ぼす正義の力をこの俺に授けたもうた! それは、最強の破壊神。それは、勇気の究極なる姿。我々が辿り着いた、大いなる遺産。その名は……【勇者王】カツガイガー!!」

「それ勇者じゃなくて勇者シリーズッ!!」

話を聞いてみたら、とんでもない答えが返ってきた。なんと桂は、ロトとか天空の勇

者ではなく【勇者王】になっていた。

「このバカ！　いくらサンラ○ズ繋がりだからって、なんてシロモン持ち出してきやがったんだ！　タ○ラト○ーにケンカ売る気かコノヤロー！」

「そーだぜヅラっち！　アニメやマンガだったらクレーム来ちゃうレベルだから！　流石の集○社でも底いきれないレベルだから！」

「ふん、何を弱気なことを。目の前にある壁を乗り越えようとしなければ、その先にある未来を掴むことなどできはしないぞ！」

「社会常識という壁を壊してお偉さんに怒られる未来なんかノーセンキューだよ、バカヤロー!!」

あまりに不条理な職業を引き当てた桂にオツサン2人が憤る。

ただ、このような事態になった理由はちやんとある。人造人間に改造された桂の戦力はあまりに強大過ぎたため、転生する際に【世界の修正力】が働いて彼自身は元の人間に戻った。しかし、【世界最強の人間】という因果情報はそのまま反映されてしまい、それが職業やステータスに現れてしまったのである。ちなみに、彼の選べる職業が【勇者王】になったのは、桂が最強の勇者とイメージしていたせいだ。

「まあ、なっちゃったモンはしよーがないわね。それに、【冒険者（仮）】とか【遊び人】より強そうだし、結果オーライじゃない」

「かーっ、これだからバカな女は嫌だねえ。『職業に貴賤無し』って言葉すら知らねーなんて。そんなオツムじゃ、まともな社会人になれやしねーぜ？」

「いや、ただの遊び人に言われても説得力無いんですけど」

自分よりカツコイイ職業になれた桂に嫉妬して減らず口を言う銀時に、ジト目を送るアクア。

「それはそうと、エリザベスの職業は何なんだ？」

「うむ。コイツの職業もすごいぞ。なんと、ドラクエVの主人公と同じ【魔物使い】だ」  
〈無職同然のお前らとは出来が違うんだよ！〉

「魔物の分際で人間さまを見下しやがって、何様だコノヤロー!? つーか、魔物が魔物使  
いってどーいうことだよ! ドラクエVの主人公をテーマなんかにはやらせてたまるか  
! ビアンカは俺のモンだああああ——っ!!」

「落ち着け銀さん! このパーティーにビアンカなんていないから! クリフトみたいな  
駄女神しかないから!」

「そうそう、まったくその通り……って、クリフトみたいな駄女神ってなによっ!」

もう無茶苦茶である。元の世界で『狂乱の貴公子』と呼ばれていた桂は、異世界でも  
おかしな混乱を巻き起こす迷惑極まりない存在だった。



桂と奇妙な再会を果たしてから1時間後、彼のおごりで昼食を取った一行は、アクセルの街の外に来ていた。現在、街から2キロほど離れた場所に【砦】を建設しており、桂はその現場監督を任されていたのである。

「それじゃあなにか。【勇者王】のお前は冒険もしねえで、ドラゴンクエストビルダーズやってんのか？」

「言葉の意味はよく分からんが、ビルダーという点は当たっている」

桂の説明を聞いた銀時は呆れながらも納得する。この異世界はゲームと違つてごく普通の職業もある。それなら命がけでなくてもお金を稼げるので、ビギナー冒険者の銀時たちを雇うことにしたのである。

「しかし、昼休み中に赴いた酒場でお前たちと遭遇するとは思わなかつたぞ。これも女神であるアクア殿のお導きといったところかな？」

「ふふーん！ やつぱり、この私から溢れ出る女神パワーが幸運を引き寄せたのね！

私のおかげで良いバイトにありつけるんだから、ほんと感謝しなさいよねー！」

「こいつ、俺より幸運低いクセに調子こきやがって……いつか必ず、ノーパン派のてめえに使用済みブリーフ穿かせてピーピー泣かせてやらあ！」

「仕返しの方法がえげつねえよ銀さん……」

とまあ、楽しく談笑しながら平原を歩いていき、十数分後に砦の前までやって来た。

近くで見るとかなり頑丈な作りをしているようだ。未完成ながら威風堂々とした佇まいを見せている。

「ふうん、私の知らない間にこんなもの作ってたんだ〜」

アクアは、自分の知識に無い建造物を見て首を傾げる。

「でも、なんでこんな辺境の街に砦なんて作ろうと思ったのかしら？」

「それはここが冒険者の出発地点だからだ」

「ん〜、つまりどゆこと？」

「そんなことも分からんのか？ ラダトーム、ローレシア、アリアハン……勇者が最初にいる街には必ず城が存在している。だからこそ、彼らは安心してスライム狩りに勤しむことが出来るのだ。その教訓を参考に、この地の防御も強くする必要があると考えたお方がこの砦を作ったわけさ」

「なるほど。確かに、天空シリーズで『主人公と馴染み深い村が襲われる』のは定番だからな。そいつは中々分かってるぜ」

「お前ら、そろそろドラクエ脳で会話すんの止めてくんない？」

銀時たちはドラクエ的な会話をしながらこの砦の情報を手に入れた。どうやら、かな

りの金持ちがバックにいるらしい。そして、その人物は桂と知り合いでもあるというのだ。

「いいかお前ら。上手く取り入れれば、良いパトロンになつてくれるかもしれないねーお方だ！ 誠心誠意、媚を売れよ！」

「そ、そうね！ 女神である私がそんな惨めつたらしいことするのは非常に不本意だけど、私の魅力で虜にしてやるわ！」

「銀さんとアクアちゃんつて、実は生き別れの兄妹なんじゃね？」

こういう時だけ息が合うバカどもたちに、長谷川さえも呆れてしまう。しかし、彼ら以上にバカな桂はそんなことなどまったく気にせず、砦の中に招き入れる。ここの所有者と顔合わせするのだ。

「銀時よ。今の内から覚悟しとけよ？ あのお方と出会ったらビックリするはずだからな」

「ああ？ そりやどーいうこつた？」

前を歩く桂が、背中越しに意味深なことを言ってくる。一体どういう意味だろうか。それを尋ねる前に、砦の所有者が住んでいる小屋に着いた。砦はまだ建設中なので、今はこちらが拠点になっているようだ。

「さあみんな。こちらのお方がこの砦の所有者だ」



そう言つて桂が手の平を向けた人物は、豪華な椅子から立ち上がると、銀時たちに顔を向けた。ドラクエⅢの勇者みたいな格好で、ベジータみたい逆立つた髪をしている。どこから見てもドラクエマニアのコスプレ野郎だが……その凛々しい顔には見覚えがある。それは当然だ。彼は銀時にとつてかけがえのない「友」なのだから。

「……久しいな銀時。よもや異世界で再び合間見えようとは思わなかつたが……友と再会できたことを、余は心より嬉しく思うぞ」

その男は優しい笑みを浮かべて、懐かしい友との再会を喜ぶ。まさかこのような出会いが実現するなんて。忘れもしないその表情に、さしもの銀時も目を見開く。バカ丁寧な喋り方。やたらと男前な声。そして、強い意志を感じさせる鋭い眼光。間違いない、彼は……この侍は……

「しよ……將軍かよオオオオオオオオ!!?」

そう。非業の死を遂げた悲劇の將軍・徳川茂茂その人だった。

## 第4訓 ブリーフ派でも胸を張れ

世界すら超えた腐れ縁によって桂小太郎との再会を果たした銀時一行は、更にもう一人の知り合いと対面する。その人の名は徳川茂茂。江戸時代末期の将軍として激動の時代を生き、志半ばでこの世を去った傑物である。

「しよ……将軍かよオオオオオオオオオ!!?」

予想もしていなかった邂逅に銀時と長谷川は驚く。しかし、その大半は喜びでもあった。それも当然だ。最後を看取ることもできずに死に別れた友と再会できたのだから。

「どうだ銀時、俺の言った通り驚いたであろう?」

「ああ……こいつあ、チョコボールで金のエンゼルが出るよりも驚きだぜ」

「その例えはどうかと思うけど、これには俺もビックリだよ……」

「さもありません。生きて死人と再会するなど青天の霹靂だからな。かく言う余も、桂と再会した時は狐につままれた心地になったものだ」

「それはこちらと同じこと。あの時は、異世界転生モノが時間逆行モノになったのかと思っただぞ」

「女神にツインファミコン頼んだお前は精神だけタイムスリップしちゃってるよ！」

『僕街』の悟みたいになりバイバルしまくってるよ!」

空気を讀まない桂につっこみを入れつつ茂茂の方を見る。相も変わらず真面目な彼は、過去の記憶と同じようにバカ丁寧な口調で答える。

「(間違いいねえ、確かにこいつは將軍さまだ)」

生前と変わらないやり取りに懐かしさを感じて柄にもなく感傷的になる。しかし、自身の頭髮と同じく捻くれ曲がった性格をしている銀時は、いつもの腑抜けた顔で小さな笑みを浮かべるだけだった。

それに今は、現状について聞きたいことがたくさんある。

「ところで、さつきから気になってしょうがねーんだけど、なんであんたはドラクエⅢの勇者みてーな格好してんだ? もしかして、上様は口ト派だったの? 俺たち天空派のライバルだったの?」

「いいや。余もまた、お前と同じく天空シリーズを愛好している。だが、Ⅲの勇者の父君であるオルテガ殿には、同じブリーフ派として特別な思い入れがあつてな。息子である勇者の格好をすることで、偉大な彼を超えてみせるという決意を表現してみたのだ」

「リスペクトの仕方間違ってるよ!! オルテガなんてパンツ一丁の変態じゃねーか! 勇者の父親つつーより覆面パンツの露出狂じゃねーか!」

理由を聞いてみたら微妙な答えが返ってきた。よりにもよってパンツ怪人をリスペ

クトした結果だったとは……。

ちなみに、彼がイメチェンした理由には、この世界に鬚を結える人物がいなかったことも大いに関わっている。その事実を確かめて、異世界であるここに侍は存在しないと実感した彼は、武家の証である鬚を切ると決心した。

『たとえ鬚を失おうとも、武士としての誇りは我が魂と共にあり続ける。ならば、それで十分だ』

国を守護する征夷大將軍ではなく、徳川茂茂という一介の冒険者としてこの異世界の人々を守っていく決意を固めた彼には、もう鬚など必要なかった。ただし、彼のコスチュームがドラクエⅢの勇者へ行き着いたのは武士とか將軍とかまったく関係なくて、彼個人のブリーフに対する異様な愛着ゆえだった。

「つたく、あなたのブリーフ好きは筋金入りだな。ここまで来ると、刹那のガンダム愛すら敵わねえよ。もはや愛を超え、憎しみも超越し、『俺はブリーフだ』状態だよ」  
「ふっ。代々もつさりブリーフ派の徳川家にとつては最高の褒め言葉だ」

「こりやマジで、とんでもねえブリーフバカだな……」

流石の銀時でも呆れるほどに茂茂とブリーフは切れない因果で繋がっている。異世界に転生しても彼のトレードマークは健在だった。

「しかし、銀時。お前ほどの男が死んでしまうとは、一体何があつたというのだ？ 桂か

らは江戸の治安も落ち着いたと聞いていたが……」

「えっ？ えーつと、それはですねえー………あつ、そうそう！ ある日突然、かぶき町を消滅させようと画策した破面が虚圏アランカル ウェコムンドから攻めて来ましてね？ 主人公の銀さんは、最終決戦を前に習得した『最後の月牙天衝』で奴等の首領・藍染惣右介を見事打ち取ったんだけど、代わりにすべての霊力を使い果たしてそのまま死んじまつたってわけなんですよねえー！」

「なんと……この2ヶ月の間にそのようなことが起きていたのか」

「いやいや、騙されちゃダメだよ將軍さま！？ そいつら来たの空座町だから！ かぶき町にはピッコロっぽい酔っ払いしか来てないから！ つーか、銀さんの死亡原因はそんなオサレなもんじゃねーだろ！ 俺よりダサイ最後だったろ！」

「あつ、てめつ、俺が咄嗟に考えたオリジナルストーリーを台無しにすんじゃねーよ！ 久保○人先生みてーな力作だったのによお！」

「みたいっつーか、まんまBLEACHだったじゃねーか！」

「そーいうのはオマージュって便利な言葉で誤魔化しやいいんだよ！ 大体、そんな細げえこと気にしたら、パクリ上等の銀魂なんか欠片も作れねーじゃねーか！ レギユラーキャラなら空気読んでスルーしろや！ ゴリラ原作者もそう思ってるから！」

「それ主人公が言ったら一番ダメなヤツじゃねーか！」

奇跡的な再会だというのに、いつものバカ騒ぎを始めるマダオたち。そんな彼らの後ろで呆れた表情をしていたアクアは、頃合だとばかりに前に出てくる。

「はいはい。くだらないコントはその辺にして、そろそろ私にも話をさせなさいよ」

「ああ？ まさか早速、ハニートラップでも仕掛ける気か？」

「違うわよ!! 私には真面目に挨拶しようとしてんの！ ……彼のことはちゃんと覚えていたからね」

そう言うときアクアは、本当に真面目な顔で茂茂と対面する。

「久しぶりね、徳川茂茂」

「恐悦至極にございます、アクア様。よもや再び、ご尊顔を拝し奉るとは思いもよりませんでした、ご鄭重なる御言葉を賜り、身に余る光栄です」

「ふふ、そう畏まらなくてもいいのよ？」

なんと、茂茂と話すアクアはとっても女神らしかった。外見だけは完璧な美少女なのでイラッと来るほど様になっている。しかし、彼女の本性を知ってしまった銀時たちにとってはギャグ以外の何者でもなかった。

「ぶふー！ 救いようのない駄女神が、救いの女神を演じてやがるぜ！ ついさつきまでピーピー泣きながら『銀さん助けてー』とか言ってたクセに、まったくとんだ茶番だよなあ？ つーか、女神さまなら星矢たちを頼ればいいじゃん。神すら倒せるあいつら

「だつたら魔王なんか瞬殺だぜ？」

「いやいや、それは有り得ねえよ銀さん。仮に星矢たちのような聖闘士セイラントがいても、アクアちゃんみたいな駄女神の下にいたらまともに育つわけねーだろ？　いてもせいぜい、3巻でかませになったユニコーンの邪武程度じゃぶだよ」

「それもそーだな。アクアと比べちゃ、アテナさまに失礼過ぎるぜ」

「あんたたち……黙つて聞いてりゃ好き勝手言つてくれちゃつてえ！　これでも私はれつきとした女神なのよ!?　アテナみたいに偉くて尊い存在なのよ!?!」

あまりに無礼な銀時たちにプリプリと怒るアクア。しかし、その様子を見た茂茂は、何故か納得顔で頷く。

「ほう。女神でさえも友の契りを結んでみせるとは、流石は銀時だな」

「つて、勘違いしないでよね！　こいつらとは友達でも何でもないんだからね！　つていうか、私を天界から拉致つて来たクズヤローなんですけど！　神の裁きを受けるべき極悪人なんですけど！」

微妙な勘違いをしている茂茂にイラついたアクアは、これまでの経緯を説明する。この機会に、自分が被害者であることを印象付けて彼の同情を得るつもりなのだ。

「(すつごいお金持つてる将ちゃんを味方につければ怖いもの無しだわ!)」

この女神は、銀時にも負けないほどのクズだった。しかし、アクアの嘘はすぐにバレ

た。絶対的に有利な立場にあった彼女を連れてこれた時点で天界のルールに反していないことは明らかだからだ。無論、その程度の事は茂茂も理解しており、彼女の策略は無駄に終わるのだった。

「うう、私の素敵な未来予想図が……」

「つたく、とんでもねえ女だぜ。何で將軍の時だけ猫つかぶりしてんのかと思ったら、同情を買って金を無心する気だったとはな。このキャバ嬢は、一見さんの客に何て酷えことしやがんだ」

「あんたが媚売れって言い出したんでしょ!? つていうか、天界をキャバクラ扱いしないでほしいんですけど!」

立場が悪くなったアクアは、さりげなく責任転嫁してきた銀時に言い訳する。

「大体、私は将ちゃんのことを結構買ってるんだから、あんたが思ってるほど酷いことなんてしないわよ!」

「ああ? おめえに將軍の何が分かんだよ? ブリーフの臭いから股間の足軽まで知り尽くしてるこの俺に勝てると思ってるのかあ?」

「そんな勝負いつしてたつけ!? そもそも、表面で分かるような話をしてるんじゃないわよ!」

妙な所で競争心を掻き立てられた銀時と争う気になったアクアは、過去の出来事を話



し始めた。彼女の後輩女神であるエリスから感謝されることになった出来事を……。

今から2年ほど前。毒を盛られて命を落とした茂茂は、アクアによつて天界に召喚された。状況としては銀時たちとほぼ同じだったが、実を言うと、これは彼女の意思ではなかった。

「本来のルールだと二十歳前の若者だけなんだけどさあ、彼のブリーフネタを気に入っちゃつてる先輩に、上手いこと転生させろつて頼まれちゃつたのよねえ。『茂茂のような逸材を失うことは【娯楽を司る女神】として許せない』とか訳わかんないこと言っちゃつてさあ。言う事聞かないと【ももパーン】すんぞとか脅してくるし、ほんと迷惑な話だったわ」

「意外に体育会系だなあオイ!? つーか、うちの將軍さま笑いのネタにされてんですけど、そんな理由で異世界転生させられたの!」

「ちなみに、あんたたち全員そうよ」

「「なんて無慈悲な女神さまなの!」」

回想シーンの冒頭でさりげなく判明した裏事情に銀時と長谷川がつっこむ。しかし、桂だけは違う反応を示す。

「ほう。よもや天界にまで我が名声が轟き渡つていたとは。しがなない武家の子せがれに

過ぎなかったこの俺が随分と偉くなったものだ」

「確かに偉えよ。マジすげえよ。お前らぐらいのバカチャンピオンじゃねえと天界公認にはなれねえからな。ノーマルな俺じゃあ、とても敵わねえよ」

「ちよつ、なに自分だけ『この人たちとは違います』みてーなフリしてんの!? あんたもしつかりバカ認定されてるからね! 間違ひなくドSネタ要員にされてるからね!」

長谷川の言う通り、アクアを含めた全員が、何らかの形で突出しているバカの集まりだった。

しかし、バカという欠点を補って余りある才能を持つ者も多く、茂茂には政治や経済面で秀でた力があつた。その能力を垣間見れる光景が転生特典を授けるシーンで起きた。

『さあ選びなさい。あなたに一つだけ、何者にも負けない力を授けてあげましょう』

『では、貴女が用意できる限りの資金を所望いたします』

『資金? ……あなたにとってお金なんか何者にも負けない力なの?』

『左様でございます。武士<sup>もののふ</sup>としての資質が無い私などが神の御業によつて生み出されし宝具を手にしたところで、結局は宝の持ち腐れとなりましょう。されど、この身には征夷大將軍という大任を仰せつかった経験<sup>まづりごと</sup>がございます。傀儡なれども政<sup>まつりごと</sup>に関わり、多少なりとも国の発展に貢献できたと自負しております。なればこそ、豊富な資金こそが

私にとつてもつとも強き力となるのです』

『……………え……………えーつとお……………な、なるほど！ あなたにとつてお金こそが、自分の能力を最大限に活かせる武器になるってわけね？』

アクアは、自分の想像と違う回答に冷や汗を流す。お金を要求された時は、將軍だったクセに俗っぽいヤツだと蔑んだ目で見ていたのだが、俗っぽいのは彼女自身の方だった。

『金というものは「水」と同じです。多すぎても少なすぎても毒となり、心と身体を蝕みます。しかし、バランス良く循環させることが出来れば、生命を支える恵みとなります。私は、女神様より授かる資金を、異世界の民を生かすための水として使いたいです。それこそが、私に出来る魔王討伐への近道であると存じますゆえ、ご配慮頂きますようお願いいたします』

『……………そうですか。あなたは水というものを正しく理解しているのですね。分かりました、あなたの願いを叶えましょう』

『ははっ！ ありがたき幸せ！』

茂茂の説明を聞いたアクアはちよつぱり嬉しくなった。何故なら彼女は水を司る女神だからだ。おかしな信者しかいないアクシズ教の御神体にとつて、これほどまつとうな理解者は初めてであり、必要以上に尊い存在であると感じ入ってしまったのだ。この

やり取りのおかげで彼に対する好感度がすこぶる上がり、銀時たちよりも扱いが良くなっているわけだ。

何はともあれ、アクアとの交渉に成功した茂茂は、潤沢な資金を持つて異世界に転生することになった。その額は『転生特典を貰っていれば稼げるだろう討伐報酬を合計したもの』だった。調子に乗って大盤振る舞いしたアクアは、魔王を含めたボスクラスにかけられている報酬を全部まとめて渡してしまったのである。そんな無茶をしたものだから、この世界を担当しているエリスから散々文句を言われたのだが、意外な茂茂の活躍によって事態は思わぬ方向へと変化していくことになる。

「冒険者となった彼は、私から貰ったお金を元手にして精力的に活動したわ」

回想を続けるアクアは、茂茂が転生してから辿った経緯を語る。

無難にレベルを上げながらほぼすべての都市を調査した彼は、冒険者というちっぽけな立場から人の世を眺めて、將軍という立場からでは分からなかった社会の現実というもの学んだ。それを踏まえた上で魔王討伐という理想を掲げ、自分の成すべきことを見出すために思考を重ねた結果、彼の精神は目覚ましい成長を遂げた。天導衆の圧政によつて日の目を見ることがなかった『人の上に立つ者』としての素質がようやく開花したのである。

こうして、自分でも気づかぬうちに世間知らずのお坊ちゃんから稀代の名君へとレベ  
ルアップした彼は、女神より授かった資金を効率良く活用するために経済活動の基盤と  
なる会社を作ることにした。

まず始めに、人や物を瞬間転移させることが出来る「テレポート」という魔法に目を  
つけて、それをを用いた物流業を始めた。テレポートを使える魔法使いを高給で雇い、世  
界中を結ぶネットワークを構築して、あらゆる商品を瞬間的にお届けするファンタジー  
な卸問屋を立ち上げたのである。もちろん、似たようなことをやっている組織は他にも  
あったが、近代的な知識を持っている茂茂はより充実したサービスを展開してあつとい  
う間に業界ナンバー1へのし上がり、莫大な利益を生み出すまでに至った。

それと同時に、優れた技術を持つ武器・防具職人を各地より選り抜いた彼は、交渉と  
融資を進めて信頼を深めあい、強力な装備品を大量受注する代わりに価格を引き下げる  
ことに成功した。そうして買い入れた装備品をテレポートで各地の販売店に卸してい  
き、結果的に冒険者たちの戦力強化に繋げていったのである。

「そのおかげで冒険者の死傷率が徐々に減少してきて、この世界を担当してる後輩から  
『アクア先輩でもたまには役に立つんですねー』って感謝されちゃったのよー」

「それ絶対感謝されてねーよ。あからさまにバカ扱いされてるよ」

おバカなアクアは、エリスの真意に気づくことなく胸を張る。そんな彼女に呆れなが

らも、地味にすごい茂茂の活躍に舌を巻く。エリスという女神が喜ぶのも納得できる績であり、バカな願いをしたマダオたちとはえらい違いだった。

話を聞き終えて、あまりに情けない選択をしたことを恥じた銀時は、あからさまに目を泳がせながら言い訳する。

「ははは……やっぱ上さまは俺たち一般人とスケールが違うねえー！ 股間は足軽でも心は征夷大將軍だよ！」

「ああ。俺の見込んだ通り、将ちゃんの器はでかかったようだ。今更ながら、物欲に負けてツインファミコンを頼んでしまった自分を恥ずかしく思うよ」

「確かに恥ずかしいよ！ 世界よりゲーム機を取るためえの選択には竜王様もがっかりするよ！」

何と言うか、とつても無様な光景だが、内心では自由に人生を謳歌している茂茂を見て喜びを感じていた。この世界にいる彼は、誰かの傀儡ではなく自分の意思で生きているのだ。

しかし、褒められている当人は、静かに頭を振るだけだった。

「余を褒め称えてくれるのは嬉しいが、それほど大層なことをしている訳ではないさ。所詮は他人の猿真似であるからな。それに、冒険者としての実力はお前たちに遠く及ばぬ」

「つたく、あんたに謙遜されたら、駄女神なんて持ち込んだこつちの立つ瀬がないっての」

銀時は、アクアを連れてきてしまったことを改めて後悔した。確かに彼女はクソの役にも立たなそうなので、この先は自分たちの力で未来を切り開いていくしかないだろう。そういう彼自身も、今はしががない遊び人でしかなかったが……。

「ところで、將軍の職業って何なんだ？ そのまんま將軍なのか？」

「いや。余の職業は『ブリーフマスター』だ」

「それってただのブリーフ好きじゃね!? つーか、一体ナニをマスターしてんの!? ブリーフのナニを極めちゃったの——っ!?」

話の流れで聞いてみたら、とんでもない回答が返ってきた。まさか、こんな形で彼の個性が現れてしまうとは。

「将ちゃんの職業はすごいぞ銀時。過去の英雄が使用していた『伝説のブリーフ』を装備すると『ブリーフソウル』というパッシブスキルが発動して、その者の特性を完コピできるので」

「発動条件、酷すぎだろソレ!? アブノーマル感が変態仮面以上なんですけど!? 他人のブリーフ穿かなきゃダメとか、罰ゲーム以外の何者でもないんですけど!?」

全力で笑いを取りに行つてるとしか思えない職業とスキルにツツコミを入れる。得

られる能力がまともな点だけ救いがあるものの、改めて考えるとアクア以外はすべておかしな職業ばかりである。

「ぷぷー！ 流石は先輩の選んだ『導かれしバカたち』ね！ もはや存在自体が笑えるレベルなんですけど！」

「おめでとう駄女神。俺の逆鱗に触れることができたお前に爆裂究極落としを食らわせてやろう」

KYなアクアは、銀時のヘイト値を順調に溜めていく。その報いを受ける時が来るのはそれほど遠くないだろう。



一通り現状を語り合った一行は、仕事の話をするために作業現場を回ることにした。外に出た銀時たちは、先を歩く茂茂から簡単な説明を受ける。

「この皆は魔王軍の侵攻に対抗する軍事拠点として作り始めたものだが、新人冒険者を育成する訓練施設も兼ねた設計をしている。完成した暁には、桂に剣術を始めとする武芸全般の指南役を担当してもらい、エリザベスにはレベルアップに使うザコモンスター繁殖を任せることになっている」



そう言いながらしばらく歩き、たった今話に出て来た「モンスター牧場」へ辿り着く。牧歌的な作りをしている牧場の中ではつぶらな瞳のスライムたちが跳ね回っており、先回りして準備していた桂とエリザベスが慣れた手つきでスキンシップをおこなっていた。

「よーしよしよし！ いい子ですね〜！ とても元気にプルプルしてますね〜！」

「皆さん、ここを見てください。この子たちは機嫌が良いと頭先がフニャツとなるんですよ〜」

「何かムツ〇ロウの動物王国みたいになってんですけど——っ?!」

まるで愛玩動物のようにスライムを可愛がるバカどもに銀時たちがつつこみを入れる。

「ちよつと待て！ 何か目的変わっちゃってるんですけど!? とつてもピースフルな関係築いちやつてるんですけど!? つーか、こんなもん見せられたら、もうあいつら倒せないよ!」 流石の俺でも会心の一撃繰り出せないよ!」

「その通りだ銀時。元よりそんな必要などは無かったのだ。憎む心ではなく愛をもって接すれば、モンスターたちの方から仲間にしてくれと言ってくるのだから。そんな彼らを倒そうとするなど、人でなしのやることだ!」

「いや、モンスターに肩入れしてるお前の方が人でなしだろ! 魔王サイドに墮ち

ちやつてるだろー!」

「どうやら桂は、スライムの可愛さに負けて本来の主旨を放り捨ててしまったようだ。つたく、こんなに飼い慣らしてんならスライムレースやった方がいいんじゃないか?」

「経験値よりゴールド稼げるほうが嬉しいな」

「おつ、それいい銀さん! カジノがあれば一攫千金も狙えるからな!」

「ちよつと、あんたたちも魔王サイドに堕ちちやつてるわよ!?! 欲望という名の悪魔になつちやつてるわよ!?! ……でも、あんたたちがどーしてもつて言うなら、この私も賛成してあげるわ」

結局、パーティ全員が欲望に負けてしまった。どうやら、モンスター牧場は別の目的に使われることになりそうだ。

「……とりあえず、ここの説明はこのくらいにしておいて、次は砦の中に行くとしよう」  
勝手に自分の計画が変えられていく状況で1人取り残されてしまった茂茂は、空気を變えるために場所を変える。

数分後。モンスター牧場から移動して砦の正面に來た銀時たちは、改めてその外観を観察する。かなりチープなデザインをしており、奥行きのある作りをしているようだが……。

「ん〜? この砦、何かどっかで見たことあるよーな気がすんなあ……」

「銀さんもそう思う？　実は俺も気になってたんだけど、どこで見たのかなあ？」

答えが分からない2人は、怪訝な顔で砦を見上げる。そんな彼らの反応に満足した桂は、得意げな表情をしながら疑問に答える。

「ふっ。お前たちに見覚えがあるのは当然だ。この砦は、かの有名な『クツパ城』を参考に作られているのだからな！」

「最初の街のご近所に大魔王の城作ってたんかあ——いつ?!」

桂からもたらされた答えは予想の斜め上を行っていた。まさか、魔王軍の攻撃に大魔王の城で対抗しようとしていたとは。

「いやね、将ちゃんから砦の設計について相談された時に、フワツと思いついちゃったんだよねえー。『今こそ、子供の頃からの夢だったリアルスーパーマリオを実現する時じゃね？』ってな！」

「やっぱお前の仕業かよ!?　つーか、将軍利用して自分の欲望叶えてんじゃねーよ！」

「人聞きの悪い事を言わないでもらいたいな。難攻不落の砦を作りたい将ちゃんの想いと難攻不落の砦を攻略したい俺の想いは見事に合致しているではないか！」

「まるつきり真逆じゃねーか！　お前は単にリアルマリオやりたいただけだろ！　さつき自分で暴露してたろ！」

結局のところ、それが本音だった。とはいえ、まったくの外れな話でもない。ゲーム

と同じように手強いトラップが多数仕掛けられているため、魔王の軍勢に対しても効果を發揮するからだ。

「論より証拠、この砦の凄さをその目でじかに確かめてみるがいい!」

重厚な門を開けた桂は、得意げな表情をしながら銀時たちを促す。そんな彼にイラツとしながらも砦の中に入っていくと、早速見慣れた光景が視界に飛び込んできた。マリオをもつとも殺してきたと思われる底なしっぽい穴、炎を纏った回転棒、定期的に上下する吊り天上、トゲのついた動く石など、ゲームで見たことのあるトラップが、魔法と科学の融合技術で再現されていたのである。残念ながら用意できなかった溶岩は熱したタバスコで代用しているが、他のトラップだけでも十分脅威だ。

「見たか銀時、この素晴らしい再現度を! これほどの出来栄えならば、流石のマリオも死にまくること請け合いだ!」

「お前は誰と戦ってんだ! マリオなんてどこにもいねえよ! しがない配管工はゲームと思いい出の中にかいねえんだよ!」

桂と銀時は大好きなマリオネタで盛り上がる。それほどまでにこの砦がスーパーマリオしているからだ、あの配管工でさえも苦戦するトラップならば、十分魔王軍にも通用する……と思われる。少なくとも茂茂はそう確信しており、自信満々で説明の補足をおこなう。

「この砦には更に仕掛けがあつてな、『トレーニングモード』にすれば、冒険者の訓練施設としても使えるのだ」

「もうソレただのアミューズメントパークじゃね?」

「いいや、そうでもないぞ。実際に余が試して見せるゆえ、じっくり観察するといい」

そう言うのと茂茂は、近くに設置されている魔法式マイクのスイッチを入れ、最奥部の管制室にいる部下にモード変更の指示を出す。

「これで準備は整った……徳川茂茂、いざ参る!」

気合を入れた茂茂は、力強く走り出した。2年も先に転生してきている彼のレベルは、かなり高く、身体能力も銀時たちに匹敵していた。

「おっすげー! Bダツシユ使えるようになってんじゃん」

「いや、これは普通に走っているだけだ」

銀時の問いに答えながら危険な道を駆け抜ける。どうやら何度も試しているようで、巧みにトラップを回避していく。しかし、タバスコの海を飛び越えた先で悲劇に見舞われることになる。綺麗に着地してからトラップの見当たらない通路を走り抜けようとしたその時、両側の壁に空いている穴から強力な火炎が噴出してきたのである。

ズゴオオオオオ——ツ!!

「「「シヨオオオオオグウウウウ——ン!!?」」」

いきなり火炎に飲み込まれた茂茂を目撃して、銀時、長谷川、アクアが叫ぶ。

「あっそーいえば、午前中に魔法式の火炎放射器仕込んでおいたことを、ついウツカリ伝え忘れてたなあ。スマンスマン！」

「スマンじや済まねーだろコレ!? 将軍めっちゃ燃えてるんですけど!? ヨガファイヤー食らったみてえに全身火ダルマなんですけど!?」

派手に燃え盛る茂茂にビックリしつつ、KYな桂にツツコミを入れる。だが今は、バカに付き合っている場合ではなかった。

「まってる將軍、今助けに行くぞ——っ!」

「アクアちゃんも、早く回復魔法かけてあげなきゃ!」

「あっそうね!」

流石に焦った銀時たちは、倒れている茂茂の元へ駆け寄る。煙でよく見えないが、恐らく大やけどを負っているはずだ。そう思っていたところで、意外に元気そうな声が返ってくる。

「安心しろ皆の者。余は無事であるぞ」

「「えっ?」」

予想外のセリフに驚いて注目すると、薄れゆく煙の中からブリーフ一丁の茂茂が現れた。

「なあ、將軍。めっちゃ燃えてたクセに、何で服以外は無傷なんだ？」

「それはこの【魔法のブリーフ】のおかげだ。これは英雄として名を残しているアークウィザードが使用していた一品でな、装備している間は魔法耐性が大幅に上昇するのだ」

「もう既に中古ブリーフ装備してた——?! つーか、魔法の鎧みてーな名前がムカつくんですけど！ 魔法というより阿呆なんですけど！」

あまりに残念なタネ明かしを聞いて、銀時たちは引いてしまう。どうやら【ブリーフマスター】のスキルが発動して助かったようだが、その代償はかなり大きい。すごい昔の中古ブリーフを身につけなければならぬなんて、あまりに嫌過ぎる。

ただ、スキル効果だけは抜群だったため今回は助けられた。

「まあ、なんだ。とりあえず、怪我が無くて何よりだぜ」

「あ、ああ。一時はどうなることかと思っただけど、服が燃えただけで済んだからな」

「これもブリーフの女神より授かりし加護のおかげだな」

「そんな女神いないわよ」

茂茂の周囲に集まった男たちは、パンイチ姿を無視する形で話を進める。一方、紅一点のアクアだけは不快な表情をしていた。そりゃあ、男のパンイチ姿なんか見ても楽しくないから当然だが、それに加えて変な臭いを感じたからだ。

「ねえ、何か臭くない？ 焦げた臭いに混じってイカっぽい臭いを感じるんですけど……」

「ああそれね。んなもん、原因はアレしかねーだろ」

アクアの感じた臭いの原因を知っている銀時は、茂茂のブリーフを指差す。

「將軍って涼しそうな顔してっけど、股間は蒸れやすい体質みてーでさ。あんなだけしゃげば、十分臭くなるさ」

「なるほどな。将ちゃんと一緒に銭湯行って服脱いでる時に『コイツ何か臭うなー』っていつも思ってたんだけど、そういうことだったのかー」

銀時の説明に納得した桂も茂茂の体臭をデイスつてくる。それを聞いた本人は、雪山で遭難した時に受けた古傷を思い出して、その目に涙を浮かべてしまう。

「……（悲）」

「おーい!? 何か將軍泣いちゃってるよ!? オナラしたことを茶化された小学生みたいな泣き方しちやってるよ!? ああ、やめて! もう見てらんないから、これ以上攻めないであげてえええええ——っ!」

この中では一番まともな長谷川だけは庇ってあげるものの、蔑むようなアクアの視線が茂茂の心に痛恨のダメージを与える。

「……余は身体とブリーフを洗って来る。後のことは桂に任せよう……」



悲しそうな声でそう言うと、傷心の茂茂は猛ダツシユでこの場を去っていった。

「おい駄女神！ てめえのせいで気まづくなっちゃまったじゃねーか！ 仕事始め初日から上司の機嫌を損ねやがって！ フリーザさまを怒らせたせいで故郷の惑星ごと滅ぼされたサイヤ人の失敗を忘れたかあ？」

「んなもん知らないわよ！ っていうか、あんたたちも臭いって言ってたじゃない！」  
「当然だろう。たとえ上司であつても人として直すべきところは具申する。それが真の忠義というものだ」

「さーらつと嘘をつかないで欲しいんですけど！ 私らに便乗して、さりげなくデイスつただけなんですけど!？」

「はあ……こいつら全員、デリカシーって言葉とは無縁だわ」

せつかく再会した茂茂を泣かしてしまった一行は、仲良くケンカすることで責任をなすり付け合う。転生しても彼らの関係は変わりそうになかった。



仕事を終えた銀時たちは、今日の日給を貰った後にアクセルの町へ戻るとギルドの酒場へ集まった。奇跡的な再会を記念して歓迎会をおこなうことになった。茂茂のおご

りで用意された豪華な夕食を前に、クリームゾンビアという名のビールが注がれた金属製ジヨツキを掲げる。

「では……志を共にした友との再会に」

「命を預けあつた戦友との再会に」

「腐れ縁でつながつた悪友との再会に」

「そして、新たな絆を紡いでいく友たちとの出会いに」

「「「乾杯!!」」」

〈乾杯!!〉

カチン!

皆で大きなジヨツキをぶつけ合い、それを豪快に飲む。

「ゴクツ、ゴクツ、ぷはぁーっ! くーっ! やっぱ、働いた後の一杯は格別ねっ!」

「なあ、長谷川さん。冒険ファンタジー物のヒロインがこんなんじゃ喜ぶヤツがいると思うか?」

「まあ、エロければいいんじゃないやね? 一応見た目は可愛いし、ノーパンノーブラというお色気要素もあるし」

「……………」

「おい、ノーパンノーブラに反応した將軍が、アクアの胸元見まくってるんだけど。思

いつきり堪能しまくってるんだけど」

「どうやら、へっぽこヒロインのアクアにも需要があったようだ。」

駄女神が暴飲暴食する様子を童貞の少年みたいに見つめる茂茂に、再び懐かしさを覚えてしまう。

「転生しても將軍のムツツリスケベは相変わらずか」

「ふっ、人間の性質はそう易々と変わりはないさ。それはともかく、余のことは茂茂と呼んでくれ。たとえ性質は変わらなくとも、立場は変わっていくものだからな」

「いいや、そいつは聞けねえ話だな。後にも先にも、俺が將軍と認めた男はあんただけなんだね、このまま將軍と呼ばせてもらうさ。あんたの言う通り、人間の性質はそう易々と変わんねえもんだからな。俺にとっちゃ、立場なんざどうでもいいのさ」

「相分かった、お前がそう望むのなら是非もない」

茂茂は、これほどまでに自分のことを認めてくれている銀時に感謝する。桂の時にも同じようなことを言われており、その時は後ろめたい気持ちになったものだが、実績を上げつつある今なら胸を張って受け止められる。

「さあ、湿っぽい話はこのくらいにして、今夜は大いに楽しんでくれ。我らの門出を祝うために」

「ああ、遠慮なくそうさせてもらおうよ」

互いの気持ちを確かめ合った男たちは2人で乾杯しなおすと、アクアの大食いによって盛り上がっている宴に加わる。

銀時たちが騒ぎ始めた頃、窓際の静かな席にいる1人の女性冒険者が彼らのことを観察していた。盗賊を生業としている彼女は、露出度の高い格好をした美少女だ。胸がとても慎ましいせいで美少年と間違われることが多々あるのだが、もちろんそれは禁句である。そんな少女が意味ありげに銀時パーティを見つめている。

「ふうん……これから面白いことになりそうね」

頬杖をついた少女は、そうつぶやきながらニヤリと笑う。それを不思議に思ったのか、彼女の前に座っている人物が声をかける。

「おいクリス。さっきからどこを見ているのだ？」

「……ん？」

クリスと呼ばれた盗賊の少女は、目の前にいる友人に意識を向ける。18歳程度に見えるその女性は豊満な身体つきをした金髪碧眼の美少女で、名はダクネスという。今日はクリスの方から彼女を誘ってここに来ていたのである。

「ああ、話を止めちゃってごめんねダクネス。ちよつと気になる人たちがいてさ」

「なに、私のことなら構わないさ。放置プレイには慣れてる」

ダクネスは、見た目通りに包容力のある様子(?)で答える。クルセイダーである彼女はきらびやかな鎧を華麗に着こなし、年齢以上に大人っぽい雰囲気を出している。一見すると子供みたくないクリスとは対照的なのだが、2人の仲はとても良い。

「ところで、気になる人たちというのはあの連中のことか?」

クリスの視線を追ったダクネスは、銀時たちに当たりをつける。

「うんそうだよ。何か面白そうでしょ? あの人たち」

「確かに、変わった格好をした連中が多いな。というか、あの白い鳥の化け物みたいなヤツは何だ?」

観察しているうちに、アクアと肉の取り合いをしているエリザベスの存在に気づいて驚く。奇妙な姿をした彼はアクセルにいる子供たちの間で密かに人気を高めているのだが、普段は街にいないことが多いためダクネスが見たのは今日が初めてだった。

「まさか、あんな生物が存在していたとはな。あの無表情な顔で、一体どのような攻めをしてくるのだろうか……はあ、はあ……」

「おーい、ダクネスー? ヨダレが垂れてるわよー?」

変な想像を膨らませてしまったダクネスは、急に息を荒げ始める。ぶっちゃけると、彼女は極度のドMだった。

ゆえに、この出会いは必然だったのかもしれない。

「それにしても風変わりなパーティだな。あの男に至っては木刀を携帯しているぞ」

おかしい武器を携えた男に興味を持ったダクネスは、彼の顔を見つめた。その銀髪の男は死んだ魚のような目をしており、一見するとただのマダオだった。しかし、彼女の視線に気づいた男が、その死んだ魚のような目を向けてきた瞬間にすべてが変わった。

「はうう——んつつつ!」

「えっ!?! 急に変な声出してどうしたの!?!」

状況が分からないクリスが驚く中、ダクネスはブルブルと震える。男と視線が合った瞬間にドMの直感を刺激され、これまでに経験したことがないほどの衝撃を受けたのである。

「な、なんだあの男は……。アイツの目を見た瞬間に私の身体が歓喜に震えた! まるで汚いメス豚を見るようなあの目は……。私が求め続けていた絶対的強者サディストのものだ!」

一瞬でその男——銀時の性格を見抜いたダクネスは、一気に興奮してしまった。アブノーマルな感情に身をゆだねたその姿は、彼に対して悪質なストーカー行為をしていた猿飛あやめと重なって見えた。

「ああつ、エリス様! こんなんにも素敵な出会いを与えて下さったことを心より感謝します!」

「ほえっ!?! 私に感謝って、いきなり何言ってるの!?!」

突然、エリス教の御神体へ祈りを捧げ始めたダクネスにビックリするクリス。その際に思わず危険な発言をしてしまったが、幸いにもダクネスが気づくことはなく、そのまま話を続ける。

「すまないクリス。私はこれよりあの方の元へ赴いて一世一代の告白をする」

「ちよつ、告白ってまさか!？」

「そうだ。今から私は、あそこにいる銀髪の男性に告白するのだ。このメス豚の<sup>マス</sup>主人様<sup>ター</sup>になってくださいいなー」

「告白ってソツチの方!?! っていうか、いきなりそんなことしたら嫌われちゃうよ!？」

「それはむしろ望むところだ!」

「もうわけがわからないよ!？」

突如始まった友人の暴走を必死に食い止めるクリス。ちよつぴり気になる彼らの様子を偵察しておこうと思っただけなのに、どうしてこうなった!。

「と、とりあえず、ダクネスが犯罪者になることだけは阻止しなきゃ! 友人として!」

「はあつ、はあつ! 大切な友人に告白の邪魔をされるなんて……心が苦しくて気持ち悪いーっ!」

何かもう手遅れな気がするものの、この場はダクネスを酔いつぶして無力化することに成功するのだった。

一方その頃、すべての元凶である銀時は、ダクネスからロツクオンされてしまったことも知らずに、アクアとエリザベスから横取りした肉を美味そうに頬張っていた。

「あーん！ 私のお肉がー！」

「ふははは！ たとえ女神だろうと、弱肉強食という世界のルールから逃れることは出来ないのだ！」

「くっ、人間のクズめ！」

「てめえは人間ですらねーじゃねーか！」

まるで子供のようにケンカする2人と1匹。のん気なバカヤローどもは、外野の喧騒に気づくことなくバカな戦いを繰り返していた。



今夜の寝床を確保するため早々に歓迎会を終えた一行は、ギルドの前で解散することになった。

「本当にいいのか？ 今宵の宿代ぐらい余の金で支払うが……」

「いや、そいつは遠慮しておくよ。これ以上、あんたの邪魔はしたくねえからな。その金



はもつと有効に使つてくれや」

「そうか……そこまで言うのならば、お前の意思を尊重しよう」

銀時は、自分で作つたつまようじを使いながら茂茂の提案を断つた。タダ飯上等な彼としては珍しいことだが、元の世界で茂茂を守りきれなかつた悔恨が少なからず影響していた。この男は自国の民を想つて必死に足掻き、志半ばで死んでいったのだ。そんな彼がこの異世界を救うために選んだ力が金だというのなら、それを無駄遣いさせるわけにはいかない。

「じゃあな將軍。良い夢見ろよ」

「ああ、お前たちもな」

銀時の意志を聞いて納得した茂茂は、軽く片腕を上げて砦に帰っていく。そんな彼を静かに見送つていると、これまで黙っていたアクアが不満顔で突つかかつてくる。

「ちよつと、なにやつてんのよ銀時！　せつかく将ちゃんか宿代をくれるつて言つてくれたのに何で断つちやうのよ!？」

「うるせーぞ女体化クリフト。お前みてーなザラキ厨に宿屋なんざ勿体ねえんだよ。プライヤトルネコと一緒にずつと馬車で揺られてろ」

「女神に向かつてなんたる暴言!?!　つていうか、女体化クリフトつてどーいうことよ!?!」

ドラクエIVで例えたら、当然私はミネアでしょーが!?!」

見苦しいほどにダダを捏ねるアクアに流石の銀時も呆れ果てる。この哀れな駄女神は心の芯まで情けなかった。

「それより銀さん。今日はどこで寝るつもりなんだ？ 流石にアクアちゃんを野宿させんのはマズイだろ」

「その点は心配すんな。こういう時は無料の馬小屋を利用すればいいんだよ。さつき將軍から場所を聞いておいたから、そこに行けばなんとかなんだろ」

「ええーっ!? 馬小屋なんか泊まる気なのーっ!？」

「今は明日の朝飯代しか無えんだからしようがねえだろ。それに馬小屋はすげえんだぞ？ なんと、あそこに泊まれば歳を取らないんだぜ？」

「それは本当か銀時!? もしその話が事実なら、最高のアンチエイジングとなるではないかー!」

「そんな効果あるわけねーだろ!？」 つーか、そんなウィザードリイの定番ネタなんぞ、今日日の子供にや伝わんねーよ!」

古のゲームネタで話を濁す銀時であったが、一応、当座の寝床をどこにすべきかは考えていたらしい。それを聞いて納得した桂は、自分たちの寝床へ帰ることにした。

「それでは、ここでお別れだな」

〈グツナイ、バカども!〉

「……そーいえば、お前らはどこに泊まってんだ？」

「あそこに見える大きな宿だ。砦の建設に参加することになってからずっと借りていてな、今は2人部屋を1ヶ月分キープしてある」

「ほう、2人部屋を1ヶ月分ねえ……」

その話を聞いた途端、銀時の目がキラリと光った。何やら良からぬことを思いついたようだが、果たしてそれは何なのだろうか？

「おいツラ。ちよつとだけ宿のカギを見せてくれよ」

「うん？ 別に構わんが、何の変哲も無いタダのカギだぞ？」

奇妙な頼みに首を傾げつつも素直にカギを渡してしまう桂。その途端に銀時の態度が豹変する。

「やったぞアクア！ ようやく『俺たちが借りてる2人部屋』のカギが見つかったぞおー！」

「え………ああ！ 良くやったわ銀時！ これで『私たちが借りてる2人部屋』に入れるわねえー！」

「つて、おお——いつ!? それ俺たちのカギイ——ツ!？」

なんと、銀時が思いついた作戦は、桂たちの借りてる部屋を奪い取ることだった。

「ちよつと待つてよ銀時君！ それ俺たちのだから返してくんない!？」

「はああ？ このカギがお前たちのモンだつて証拠がどこにあるつーんだよ？」

「そーよ、そーよ！ 名前だつて書いてないじゃない！」

「いやでも、ほんとにソレ俺たちのだから……」

〈盗んだ物を返しやがれ！〉

ジャイアン以上の横暴行為に当然のごとく抗議する桂とエリザベスだったが、ゲスな銀時が聞く耳を持つ訳がなかった。

「ええい、つべこべうるせーんだよ、バカヤロー！ 勇者王のお前は、若い女性を馬小屋に泊まらせてもいいと思つてんですかあ!？」

「まったくもつてその通りよ！ 女神である私に部屋を譲れることを光栄に思うといいわ！」

更に無茶苦茶なことを言い出した2人は、必死に抵抗する桂たちをボコボコにする。

「オラオラオラア！ 素直にしてれば痛い目見ずに済んだのによお！」

「ぐおつ！ いてつ！ やめてっ！」

「食らえ——っ！ ゴツドブロー乱れ打ちい！」

〈ちくしよう！ こいつ意外に良いパンチ持つてやがる！〉

桂は銀時から執拗なももパンを食らい続け、エリザベスはアクアにマウントポジションを取られてタコ殴りにされてしまう。まさに地獄絵図である。

「けつ、これに懲りたら二度と逆らうんじゃねーぞ、カス！」

「ふん、私たちの部屋で預かつてるあんたたちの荷物は後で取りに来なさいよね！」

「ふあい、ほんとしゅみませんでした……」

〈これで勝つたと思うなよ……グフツ〉

「ひ、酷え……なんてドゲスな奴らなんだ……」

あまりに凄惨な光景を前に啞然とする長谷川を無視して、勝利を手にしたゲス野郎どもは宿屋へ向かつて去っていく。

「おい、大丈夫かツラっち？」

「ああ、問題ない……。それにしても銀時め、憧れのファンタジー世界に来たからといって、子供のように浮かれおって」

「今のアレは浮かれてたってレベルじゃねーだろ!？」

あれだけボコられても平気へっちゃらな桂にツツコミを入れる。心の広い(?)彼は、さきほどの暴虐行為を子供のイタズラとして許すようだ。

「こうなったら仕方がない、俺たちは馬小屋へ行くとしよう」

「え? ツラっちたちは金持ってるんだろ? 今から部屋を取ればいいじゃん?」

「いいや。長谷川さんだけで行かせるのは酷だから、しばらくは付き合ってるさ」

「うう。あんた、ほんとに良い人だな……」

「そんなことは気にするな。馬小屋で泊まると歳を取らないという特典もあるらしいからな。最近、抜け毛が気になってたから丁度良かった」

「俺も、ベジータみたいになげてきたから何とかしたかったんだよね」

「お前ら、揃いも揃って髪の毛のこと気にしてるだけじゃねーか!」

未だに銀時のウソを信じている桂は、エリザベスと長谷川を伴いつつ、アンチエイジングのために馬小屋暮らしを始めるのだった。

一方、桂から宿のカギを奪った銀時とアクアは、宿屋の主人と話をつけた後に部屋へ向かった。

「えつとお……私たちの部屋はここね」

番号を確かめたアクアが部屋の前に立つ。当分ここが2人の拠点となるわけだ。

「とりあえず、まともな寝床が手に入ったな」

「ええそうね。初日から馬小屋暮らしにならなくてほつとしたわ」

まったく悪びれる様子の無い2人は、サムズアップをして成果を喜び合う。幸運の低い彼らがこれほど上手くいっている理由は、幸運マックスな桂の恩恵を受けたおかげだった。無論、どこかで報いを受けることになるのだが、今はベッドで眠れる幸せを噛み締めるのみである。

「何はともあれ、これで宿代の心配は無くなった。後は將軍のところまで当面の生活費を稼ぐとして……ある程度金が溜まったら、冒険を始める前にもう一人ぐらい仲間を探るか」

「えっ？　なんで？」

「そりゃあ4人パーティーがRPGの基本だからな。丁度、俺たちには魔法使いがいねえから、ビアンカみたいに美人で優秀な人材を探すぞ」

「あんたほんとにビアンカ好きね……。私はイオナズンが使えるフローラの方がいいと思うんですけど？　この世界で一番強力な魔法はエクスペロージョンっていう爆裂魔法だし……」

「はっ！　この駄女神はなんも分かつちやいねえなあ。一見するとイオナズンを使えるフローラは優良物件に見えっけど、実際は『お嫁さんにしたいヒロインナンバーワン』のビアンカに花を添えるためのかませ犬に過ぎねえんだぜ？　大体、最後はメラゾーマが使えりやいいんだから、爆裂魔法なんざ必要無えよ」

どこまでもビアンカ派を貫き通す銀時は、イオナズンっぽい爆裂魔法を否定する。その直後だった。少女の怒声が聞こえてきたのは。

「その暴言、聞き捨てなりませんね！」

「!？」

怒気を含んだ声に驚いた2人は、聞こえてきた方向へ顔を向ける。すると、宿の廊下を歩いてこちらに近づいてくる人影が見えた。その声の主が何者なのか確かめてみると、典型的な魔法使いの格好をした美少女だった。特徴的なトンガリ帽子を被り、黒いマントと赤いローブを身につけた中学生ぐらいのチビツ子が目の前までやって来る。そして、手に持った大きな杖を銀時に向けた。

「我が最愛の爆裂魔法を侮辱するなんて……たとえ女神エリスが許しても、この私が許しません！」

ビシツと中二病的なポーズを決めながら勇ましく啖呵を切る。見るからに厄介そうな人物だが、彼女は一体何者なのだろうか。

「何だてめえは？」

「ほう、あまりに強大ゆえ世界の理すら凌駕せしめる我が魔力を前にしても退かぬとは良い覚悟だ。その蛮勇に免じて我が真名を教えてやろう！」

銀時の問いかけに応じた少女は再び中二病的なポーズを決めと、格好良さげなセリフで名乗りを上げる。

「我が名はめぐみんっ！ 史上最強のアークウィザードにして、最上無二の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

ドオオオオオオオッ!!



めぐみんと名乗った少女は、奇妙な効果音が聞こえてきそうな勢いで自身の存在をアピールする。その際に、くいつと顔を上げたため、左目に十字の模様が入った眼帯をつけているのが見えた。やべえ、こいつは本物だ。自分の世界に生きている中二病少女と出会った銀時は、かめはめ波が撃てると信じていた子供の頃を思い出してイラツとした。

## 第5訓 主人公は遅れてやって来る

銀時とアクアは、桂から奪ったカギを持って宿屋にやって来た。とりあえずこれだ1ヶ月は寝床の心配をする必要が無くなった。部屋の前で初日の成果を確かめた2人は、仲良くサムズアツプする。後は生活費を稼ぎながら装備を整え、今のパーティに足りない後方支援メンバーを増強しよう。会話の流れで始まった今後の方針について盛り上がる。そんな場面に偶然遭遇してしまった魔法使いの少女が、銀時の言葉に怒りを抱いて乱入してきた。

「我が名はめぐみんっ！ 史上最強のアークウィザードにして、最上無二の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

ドオオオオオオンッ!!

銀時に爆裂魔法をバカにされたと感じた彼女は、怒りに燃えた赤い瞳で睨みつける。なんだこのめんどくさそうながキンちよは……。唐突に現れて突っかかってきた少女にイラツとした銀時は、容赦なく先制攻撃を仕掛ける。油断しまくっている彼女に素早く近づくと、その可愛らしいほっぺたを右手でムギユツと掴み上げて近場の壁に押し付ける。

「認めたくないものだなあ！ 自分自身の、若さゆえの過ちというものを！」

「むによ!? にやにをしゆるんれふか——っ!? (うわっ、なにをするんですか)」

「うっせー黙れ中二病！ お前のせいで心の奥に封印せし黒歴史が甦っちまったじゃねーか！ かめはめ波の練習を本気でやってた自分なんて思いだしたくなかったのにい——っ！」

中二設定を本気で貫くめぐみんを見ているうちに恥ずかしい記憶を呼び起こされてしまった銀時は、大人気無い八つ当たりをする。一方、被害者となつてしまった彼女は、タコのように突き出た唇を必死に動かしながら抵抗する。

「うによによー！ ひよのへをひやなへー！ (ちくしょー。この手を離せー)」

「はあく？ なに言つてんのかまったく分かんねえなあ？ ケンカ売つてきたんだから、かかつて来いや的なこと言つてんのかなく？ だったら次は、左手の指で鼻フックしちやおつかなく？」

「あーん！ ひよめんなひやい！ あやまりまひゆひやら、ひやなふつふはひやめれふらひやいー！ (あーん、ごめんなさい。謝りますから、鼻フックは止めてください)」

「あんた、女子供にも容赦ないわね……」

颯爽と登場しためぐみんは、銀時のD攻撃によつてあっさりと敗北した。

「はあ、はあ……。死んだ魚のような目をしているクセになかなかやりますね……。究

「極の破壊力を誇りし爆裂魔法を操る我をここまで追い込むとは……」

「おいおい、鼻フックに負けちゃったぞ爆裂魔法。そんなんでいいのか爆裂魔法」

銀時は、負けを認めたクセに中二病を続けるめぐみんに呆れる。しかし、特殊な種族の一員として生を受けた彼女にとつてはこれが普通だった。その証である赤い瞳に気づいたアクアが、彼女の種族を言い当てる。

「あれ？ その赤い瞳は、もしかして紅魔族？」

「いかにも！ 私は紅魔族随一の魔法の使い手、めぐみん！ 我が必殺の魔法は、山をも砕き岩をも溶かす地獄の爆炎！ そは禁断の力にして、すべてを滅する破壊の権化！

すなわち、爆裂魔法の申し子たる我こそが、紅魔族の頂点にして史上最強のアークウイザードなり！」

「はっ、史上最強ねえ。だったらお前の爆裂魔法と俺の鼻フックで、どっちが強いか試してみるか？」

「ああっ、ごめんなさい！ 私、調子に乗りました！ 爆裂魔法を愛するが故にちよつぴりハッスルしちゃいました！」

よせばいいのに、いつものクセでかっこつけためぐみんは、再び鼻フックの恐怖に屈する。

そもそも、最初から彼女に勝ち目など無かった。確かに爆裂魔法は最強と呼ぶに相応

しい威力を誇るのだが、その絶大な破壊力が仇となって使える場所が極端に限られてしまふという弱点があった。つまり、魔法を使えないこの状況においては鼻フックの方が圧倒的に有利なのだ。

容赦ないドS野郎の攻撃によって返り討ちにされたためぐみんは、ちよつぱり涙目になりながら負け惜しみを言う。普通ならそのまま退却するところだが、中二病を患っている者は迷惑なまでに心が強く、しつこかった。

「お、おのれー！　我が左目に封印されし魔力を解き放つことさえできれば、貴様のような卑劣漢を倒すことなど造作も無いのにい！」

「ああん？　その眼帯は怪我を隠してるわけじゃねえのか？」

「いかにも！　この眼帯は、我が強大なる魔力を抑えるマズイックアイテム！　もし、外されることがあれば、この世に大いなる災厄がもたらされるであろう」

敗北したにも関わらず中二行動を続けるめぐみん。もちろん全部嘘であり、それに気づいた銀時の怒りをさらに増大させることになる。

「(いいだろう。あくまで中二病を貫くというのなら、お前の意思を尊重してやる！)」

この瞬間、銀時のドS魂に火がついた。眼帯がタダの飾りだと分かった以上、繊細な気遣いは無用だ。心の赴くままにアレを実行すればいい。

「大いなる災厄ねえ……。面白え、だったら見せてもらおうじゃねーか。その左目に封

印されし邪王真眼の力とやらをよお！」

微妙に違う設定を盛り込みながらめぐみんの眼帯を掴み、それを思いつき引つ張る。幸か不幸か、眼帯のヒモ部分はゴムのように伸縮性があり、ゴムパツチ的な恐怖が彼女を襲う。

「ああっ、ごめんなさいっ！ 引つ張らないで下さいっ！ やめ……やめろおおお  
——っ！」

「はーっはっはっはっ！ 闇の力の使い手ともあろう者がナニ甘えたことぬかしてやがんだ！ やめろと言われてやめるDSがこの世にいると思つてんのかあ？」

「ひいひいひいひいっ！? この人マジでおっかないです！ 悪魔以上に悪魔してます！」

「はあ? 魔法使いともあろう者が、今更なにをビビッてんだよ? お前たちは、悪魔の力を制御してその法則を行使するのが仕事だろお? だつたらよお、悪魔的な俺も邪王真眼の力で従えて見せればいいじゃねーか? メガテンみてえに仲魔にして見せればいいじゃねーか? ほらほら、やってみろよ? お前の力で銀さんを従えてみせろよ? 早くしないと眼帯パツチンしちまうぞー?」

「それだけはやめてえ——っ!?! 誠心誠意謝りますから、とにかく私を許してください  
! もう嘘はつきませんから! 邪王真眼とか使いませんからああああ——っ  
!!」

本気で攻撃してきているようにしか見えない銀時に恐怖しためぐみんは、本気で許しを請う。すると、彼女の願いが通じたのか、ゲスい表情をしていた銀時が急に優しくなる。

「ふっ。バカだなお前。俺が好き好んでこんなことをしていると本気で思っていたのか？」

「えっ……どう考えてもそのようにしか見えませんでした……」

「ははっ、そいつは心外だな。俺はただ、お前の赤い瞳が2つそろっているところを見たかっただけなんだがな。こんなに綺麗な目を野暮つたい眼帯なんかで隠しちゃうなんて、勿体無いにもほどがあるぜ？」

「えっ……この目が綺麗？」

唐突に自分の容姿を褒められためぐみんは頬を赤く染める。紅魔族はその出自故に変わり者が多く、一般的に『おかしな人たち』と見られている。だから、紅魔族の証である赤い瞳を綺麗だと言われる機会など滅多に無かった。なのにこの人は、一切躊躇することなく言い切ってくれた。そんな口説き文句とも取れるセリフを目の前で言われたら、めぐみんの純情な感情が空回りしてしまうのも無理はなかった。

「あああ、あのあのっ！ 私の瞳……そんなに綺麗ですか？」

「ああ、すげえ綺麗だ。ルビーのように輝いて、タバスコのように情熱的だぜ？」

「あうう、大人の男性からそんなことを言われるなんて……何だかとても照れてしまいます」

「今のセリフでときめくのは間違つてると思うんですけど?」

これまでの成り行きを外野から見ていたアクアが茶々を入れるが、雰囲気は酔いしれてしまっているめぐみんには聞こえなかった。

「さあ、その閉じた目を開いて、素敵な瞳を見せてくれ」

「えつと、その……ちよつとだけならいいですよ?」

おかしい空気に毒されためぐみんは、素直に言うことを聞いてしまう。その途端に銀時の表情が歪む。まるで悪魔が微笑んでいるかのように……。

「こ、これでいいですか?」

「ああ、素敵な瞳を見せてくれてありがとう。お礼に、この眼帯を戻してやろう!」

「え」

すっかり油断をしていためぐみんは、銀時の言葉を理解するのに時間がかかった。その間に悪魔の手が眼帯から離され、あるべき場所に戻ってきたソレがバツチり開いた彼女の左目に直撃する。

バツチ——ンツ!!

「ああああああ——つ!? いったい、目がああああ——つ!」



「なんとという卑劣な行為!? あんたほんとにドSの鑑ねっ!」

銀時のワナにかかって眼球にダメージを受けためぐみんが激しい動作で身悶える。悪魔の囁きでピュアな少女を弄ぶ鬼畜の所業である。

「けっ! うちは一族だかクルタ族だか知らねーが、この俺にケンカ売るヤツはガキでも容赦しねーぞゴルア!」

「はあ……女神としては、天罰の一つでも与えなきゃって思うけど、返り討ちに遭いそうだから止めとくわ」

流石のアクアも哀れなめぐみんに同情する。しかし、結局は我が身の安全を優先するのだった。

「それにしても、転生初日から紅魔族のアークウィザードにケンカ売られるなんて、あんたもとんだトラブルメーカーね」

「ああ? 紅魔族ってのはそんなに厄介なのか?」

「ぶっちゃけるとその通りよ。彼女たち紅魔族は生まれつき高い知力と魔力を持って、大抵は魔法使いのエキスパートなんだけど、一族全員が重度の中二病で、もれなく変な名前を持つてるわ」

「中二病の上に変な名前ねえ。確かコイツは、めぐみんとか言ってたよな」

「はい、そうです。紅魔族の伝統に則った由緒正しい名前です」

アクアから情報を聞いていると、いつの間にか復活していためぐみんなが会話に加わってきた。今度は紅魔族の名前がデイスられそうだと感じて牽制してきたのである。

「もしかして、あなたも変だと思ってますか？ 私から言わせれば、街の人の方が変な名前をしていると思うのですが……」

「いや。俺は可愛いと思うぜ」

「えっ、本当ですか!?!」

「こんなことで嘘は言わねえよ。なんつーか、お前の名前は語呂が良いんだよな。父親のホイミンや母親のフーミンと韻を踏んでるし」

「家族の名前を捏造しないでもらおうか!?!」

銀時に名前を褒められたためぐみんは、内心の喜びを隠しながらツツコミを入れる。アクセルに来て以来、名乗ると必ず変な目で見られていたため、おかしい偏見を持たない彼の反応が嬉しかったのだ。

とはいえ、家族の名前で遊ばれるのは困る。

「私の家族はもつと個人的でかっこいい名前ですよ!」

「それじゃあ、本当の名前は?」

「母はゆいゆい、父はひよいぎぶろー!」

「……」

「ちなみに、妹はこめつこと言います」

いぎ聞いてみたら微妙な答えが返ってきた。彼女たちのネーミングセンスを残念に思ったアクアは、中二ポーズでニヤリと笑うめぐみんに哀れみの眼差しを送る。残念ながら、アクアのような反応をする方がこの世界の常識だった。しかし、非常識な銀時は違う反応を示す。

「なんだ。結構、普通の名前じゃねーか」

「えっ!? 今のどこが普通なのよ?」

「そりゃあ、禁止用語じゃなかったからに決まってるんだろ。お前が変な名前だーって言うから、俺はてつきり『ち○こ』とか『○んこ』みてえにピー音で隠さなきゃいけない単語なのかなーって思ってたんだぜ? もしそうだったらドン引きするところだったけど、最悪の事態を避けることが出来てホッとしたぜ」

「いやいや、全然避けられてないんですけど!? あんた自身がピー音連発しちゃってるんですけど!?!」

予想外の下ネタギャグにアクアがツッコミを入れる。まさか、いい歳した大人が思春期の男子中学生みたいに嬉々としてエロ単語を言うなんて。この手の話にめっぼう弱いめぐみんは、大いに照れてしまった。

「なになっ!? なんてお下劣な人なんですかあ!? 花も恥らう乙女の前でエッチい単語

を連呼するとはっ！」

「おいおい、この程度の下ネタでなに恥ずかしがってんだよ。中二病の方がよっぽど恥ずかしいじゃねーか。ガキの頃の知り合いに邪王炎殺拳が使えるって言い張ってたヤツがいたけど、そりゃあもう痛々しくて、見てるこっちの方が恥ずかしかったぜ？」

「確かにソレは痛々しいけど、それとこれとは話が別でしょ？」

まったく悪びれもしない銀時に対してアクアが釘を刺す。このままでは話が進まないと感じて別の話題を振ることにしたのである。

「ところでさ。魔法使いをパーティに入れるんなら、この子が適任じゃない？」

「はあ？ この中二病のどこを見れば適任なんて思えんだよ？」

「それはこの子が上級職のアークウィザードで、最強の爆裂魔法まで使えるからよ。もしそれが本当なら凄い事よ！」

めぐみんの話を丸呑みしたアクアは、棚ボタとばかりに彼女をスカウトしようとする。そしてそれは、めぐみんにとっても願ったり叶ったりな提案だった。

「も、もしかして、あなたたちは仲間を求めているのですか!？」

「うんそうよ。丁度、魔法使いを入れようかなーって話をしてたところなのよ」

「な……なんと!?! この邂逅は、女神エリスの導きか!」

「エリスじゃなくてアクアさまの導きよ!」

後輩の名前を出されてムカツとするアクアさま。しかし、興奮した様子のもぐみんは、彼女の怒りに気づくことなく話を続ける。

「それならば、ぜひとも私を選んでください！　我が爆裂魔法で、あなた方に仇なす敵をすべて屠ってみせますから！」

訳あつて仲間集めに苦労していためぐみんは、ここぞとばかりにアピールする。確かに爆裂魔法は強力なので、その威力を知っているアクアは乗り気だった。報酬の取り分が減るとはいえ、爆裂魔法を使える逸材を逃すのは惜しいと思ったのである。しかし、彼女の提案はリーダーの銀時によって却下される。

「だが断る」

「なぜですか——っ!?　私はあの爆裂魔法が使えるんですよ!?　究極で！　絶対で

！　最強なんですすよおおお——!?」

「はっ、お前はなにも分かつちやいねえな。俺が求める魔法使いの条件を」

「えっ……それは一体なんなのですか!?!」

「俺が求める魔法使いの条件。それは最強の爆裂魔法なんかじゃねえ……最高の爆乳美女だ！」

「ばっ、爆乳美女!?!」

「そのとおり！　女魔法使いとは、あぶない水着をはじめとするセクハラ装備の着用

を求められる存在であり、ぱふぱふが出来るほどの爆乳でなければならぬ！ それゆえに、胸元が慎ましいお前はまったくもって論外なのだよ！」

「そんなバカなあ——っ!？」

銀時の提示した条件に絶望して頭を抱えるめぐみん。彼女の年齢は13で、まだまだ成長途中なのだが、胸のサイズは平均よりも小さくて、本人もそのことを気にしていた。ようするに、幼児体型の彼女は見事なまでの貧乳であり、爆乳とはほど遠い状況だった。「ぐぬぬ……。あなたが爆乳を条件とするのであれば、今は引き下がるしかありません」

顔を俯かせためぐみんは、プルプルと震えながら答える。

「だがしかし！ 冒険者として戦場に赴き、強大な敵と対峙したその時、あなたは必ず爆裂魔法を求めるだろう！ そして、我が申し出を拒絶したことを心の底から後悔するだろう！ 大体、爆乳なんか普段生活する上では邪魔でしかないじゃないですか。そりゃあ私だって女ですから少しぐらひは憧れますけど、あまり大きすぎると肩がこるって言いますし、すぐに垂れてだらしなくなるとも聞きますから適度な大きさの方がいいんじゃないかと思うのですが、世の殿方の大多数は大きい方を好んでいるとの統計もありますから、私のような真つ平らで絶壁でペツタンコな胸ではてんで話にならないつても領けますけれども、貧乳には貧乳なりの魅力があるってエリス教の聖典にもでか

と記されているから貧乳だっていいんですっ！」

「あれ、なにこの展開？ 爆裂魔法そっちのけでオツパイ談義が爆裂しちやってるんですけど？」

自分の胸に手を当てながら暴走しているめぐみんにツツコミを入れる。一連の会話で貧乳に対するコンプレックスを刺激されてしまったのである。

「ちよつと銀時、なんてことしてくれてんのよ！ あの子、おっぱい揉みながら半べそか  
いちやってるじゃない！ あんな姿見せられたら、私の方まで気まづくなるんですけど  
！ 哀れ過ぎていたたまれなくなるんですけど！」

「ああもうごめんね！ 銀さん全力で謝るから、そんな悲しい瞳しないで！ 君には明るい未来があるから！ そのうち立派に成長するから！ 今はただ、ありのままの君を愛してっ！」

涙ぐむめぐみんを見てアクアだけでなく銀時も慌てる。流石のDSも少女の涙には敵わなかった。

「ほら、神楽からパクツた酔昆布やるから機嫌直してくれよ。賞味期限切れてるけど」

「グスツ……そんな得体の知れないものはいりませんから、私を仲間に入れてください」  
「そうすれば泣き止んでくれるのか？」

「はい、もちろんです！」

「だが断る」

「うわーん！ この人、正真正銘のクズですう——っ！」

少女の涙に弱くても、それとこれとは話が別だ。ただでさえ碌な面子がないパーティなのに、めんどくさそうな中二病を加えるなんて愚かな選択はしたくない。やはり、魔法使いを仲間にするならビアンカのような良い女がいい。

「っーわけで、お前みてえなガキんちよは、とつと帰ってクソして寝な！」

「くうう〜！ 最強のアークウィザードたる我をここまでバカにするとは、なんたる屈辱！ こうなったら、意地でもあなたに爆裂魔法の素晴らしさを思い知らせてやりませう！」

「ほう。どうやって思い知らせるつもりなんだ？」

「報酬はいりませんので、あなたたちのクエストに参加させていただきます。そこで私の爆裂魔法を颯爽と披露してあげるのです！」

「なるほどね。手っ取り早く実演してみせるってわけか」

「その通りです。超絶すごい爆裂魔法をタダで利用できるなんて、とつてもお得ですよ〜？」

「だが断る」

「コンチクショー!!」



三度断られたためぐみんは、涙をキラリと輝かせながらも最後の抵抗を見せる。

「今日のところはこれで勘弁してあげましょう！　しかし、我が命ある限り、何度でもあなたに挑戦し続けます！」

「はいはい、よく分かりました。また一緒に遊びましょうねー」

「ぐぬぬぬぬう〜っ！」

どこまでもふざけた様子の銀時を赤い瞳で睨みつけてリベンジを誓う。いいだろう。今はこの怒りを胸にしまっておいてやる。でも、いつか必ず、このドS野郎をギャフンと言わせてやるんだから！

「お、覚えてろよ——っ!!」

心の中で誓いを立てためぐみんは、分かりやすい負け惜しみを言いながらその場を逃げ出す。そして、隣の部屋に駆け込んでいった。

キイク、バタンツ!!

「お隣さんが爆裂マニアだったああああ——っ!?!」

「ぶふー！　これから大変なことになりそうねえ」

なんと、お隣さんは中二病の魔法少女だった。よもや幸運の低さがこんな形で現れるとは。何かと女運の悪い銀時は、先行きに不安を覚えた。



時は進んで次の日の12時頃。茂茂の砦で土木工事のバイトを始めた銀時たちは、午前中の仕事を終えて昼休みを取っていた。しかし、朝食代だけで所持金のほとんどを失ってしまったため、昼飯を食べられないでいた。

「つたく、肉体労働中の空腹はキツ過ぎるぜ……」

グツタリした様子で銀時がつぶやく。たとえどんなに身体を鍛えても空腹の辛さだけは克服できない。それこそが生物最大の弱点だからだが、その真理は女神さまにも当てはまるらしい。

「あーん！ お腹空いた！ お腹空いた！ お腹空いたあー！ 誰か私を助けてよ！

この満たされない心とお腹を愛とご飯で満たしてよおー！」

「ええい、黙れ駄女神！ 騒げば騒ぐほど腹が減るって分かんねーのか？ こういう時は長谷川さんを見習うんだよ」

「えー、こんなマダオを？」

「そうだ。たとえ空腹に苛まれ眠れぬ夜を過ごそうとも、過酷な公園生活に挑み続ける不屈のファイター。それこそが、明鏡止水の境地に達したキングオブマダオなのだ！」

「俺は流派東方不敗の使い手じゃねーよ!! つーか、Gガン風に俺をデイスるの止めて

くんない!？」

空腹に負けそうな銀時たちは、仲良くケンカをすることでそれを誤魔化そうとする。しかし、そんなことをしても余計にカロリーを消費するだけだった。

「あつ! そういえばあんた、酔昆布持ってたわよね?」

「おおそうだ。神楽からパクツた酔昆布があつたわ。賞味期限切れてるけど」

「この際、贅沢は言つてらんないわ! 早くそれを出しなさいよ!」  
「ちよつと待てよ……よし、あつた」

アクアに急かされた銀時は、懐に入れていた酔昆布を出した。昨日、めぐみんにあげようとしていたヤツだ。

「おおー! いいもん持つてんじゃねーか!」

「こんな量じゃ腹の足しにもならないけど無いよりはマシだわ。さあ、それを私によこしなさい!」

「だつたら、俺にも少しくれよ!」

運良く食料にありつけると喜んで2人は、銀時に向けて手の平を差し出す。しかし、性根が捻じくれ曲がっているこの男が素直に渡すわけがない。

「ああん? 何でてめえらに貴重な食料を分け与えなけりやならねえんだよ?」

「なつ!? まさかあんた、それを独り占めするつもり!?」

「んなもんだらうお？ こいつの所有権は俺にあるんだからよお？」

「なんだとう!? お前には仲間を思う心ってモンが無いのか!？」

「はっ！ それはこつちのセリフだバーロー。仲間を思うつつーんなら、俺の食いモンを奪おうとすんじゃねーよ。映画版のジャイアンみてえに熱い友情を見せてくれよ」

「こ、こいつ！ 憎たらしいまでに巧みな話術で言い返しやがってえー！」

こくなることは薄々と察していたが、予想通りの展開となつてしまった。この男に正論などは通じないのだ。

「さあて。それでは、心置きなく俺の酢昆布をいただくとしますか」

「あーっ！ 私の酢昆布がー!？」

「なに勝手にお前の物にしてんだよ。こいつは全部俺のモンだ。欠片一つ渡しやしねえ！」

そう言いながら酢昆布を一枚手に取り、これ見よがしに口へと運ぶ。

「あーん、くちやくちやく……。ほほう、これはなんとも濃厚な味わいだ。賞味期限を過ぎたことにより、昆布の旨味が更に凝縮しているようだね。そこに絶妙な塩梅で配分された酢の酸味が加わり、旨味は極みへと昇華される。しかも、お楽しみはそれだけではない。舌が歓喜に震えると同時に、足の裏のように芳醇な香りが鼻腔に広がって更に食欲を増してくれるのだから、もう堪らない！ この完成度はもはや、一つの頂点を極めた

至高の一品と表現しても過言ではないだろう！」

「なっ……なんてことなの!? 小銭で買える酢昆布なのに、すこぶる値が張る高級料理のように見えるわ!?!」

「この野郎、ただの駄菓子をなんて美味そうに食いやがんだ! 賞味期限切れの酢昆布を、あたかも黒毛和牛の高級霜降り肉のように味わってやがる! ヤツの食レポは、もはや達人の域を超えているぜ!」

飢えたバカどもは、貴重な食料をいやらしく見せびらかす銀時に怒りを向ける。食べ物物の恨みは、時として争いの元となるのだ。

「あーもう、我慢できなーい! その最高級酢昆布を私によこせえええええ——っ  
!」

「ちいっ! こいつ、理性を失ってやがる!」

我慢の限界に達したアクアは、無謀にも戦いを挑んだ。食べ物絡んだ時、女子はどこまでも強くなれる。それは女神も同じであった。

「見敵必殺! ゴッドスクリューブロー!!」

「ならばこっちはAT・マダオ・フィールド!!」

「えっ?! ちよっ、まっ、ぐはあっ!!?」

激しいバトルは傍観していた長谷川をも巻き込んでエスカレートしていく。そんな

時に、街で昼食を取っていた桂たちが帰ってきた。

「ほう。昼食みを返上してまで身体を温めるとは、随分と気合が入っているな。それほどまでにクツパ城の建築作業が気に入ったか？」

「てめえと一緒にすんなクズ。俺はもう、マリオなんかで楽しめるほど無邪気な子供じゃねえんだよ」

「なるほど、そうであつたか……。お前は既に、PCエンジンで『同級生』を楽しむような大人になつてしまつたのか」

「そーいうことじゃねえよ!? 確かに当時はやつてみたいなーって思つてたけど、任天堂派の俺はメガドラもPCエンジンも買つてませんーっ! つーか、お前の中のゲーム機は揃いも揃つて古いんだよ! ファミコンは過去の遺物だということをいい加減認めてくださいよ!」

かたくななまでにファミコン時代から進もうとしない桂にツツコミを入れる。そんな彼の隣にはいつものようにエリザベスがいて、相も変わらず異様な雰囲気を作り出している。しかし、今日はそこにもう1人加わっていた。

「あれ? なんか1人増えてるわね」

長谷川をノックアウトして気が紛れたアクアは、新たに登場したその人物に気を止める。彼女が視線を向けた先には、緑色のジャージを着た少年がいた。背丈はそれほど高

くなく、顔立ちは平凡そのもの。装飾品はがんばっているようで、やたらとオサレなメガネをかけているけど、それもミスマッチでしかない。ようするに、女性とは縁が無さそうな男子高校生だった。

「おいヅラ。そこにいる冴えないクソガキは誰だ？」

「うむ。この冴えないクソガキは、たまたまギルドで出会った新人転生者だ」

「新人転生者？ この冴えないクソガキが？」

「ああ。この冴えないクソガキが一人きりで途方に暮れている時に、和服を着ている俺を見かけて思わず声をかけたそうさ」

「つーことは、この冴えないクソガキも日本人なのか？」

「事情を聞くとそのようだぞ。なんでも、トラックに轢かれそうになっていた少女を突き飛ばして身代わりになったらしくてな。その勇気を見込んで、この冴えないクソガキの面倒を見てやることにしたのだ」

「へえ、この冴えないクソガキの死に様がそんなにご立派だったとはねえ。人は見かけによらねえもんだな」

「あのちよつと。話の腰を折るようで申し訳ないんですけど、その呼び方はいつまで続けるつもりでしょーか？ 永遠？ エターナル？ これからずっとフォーエヴァー？」

メガネ少年は、辛口な歓迎を受けて怒り出す。一応これは彼らなりの親愛表現なのだ

が、普通に聞けばタダの悪口なので、意図を読めなかった少年は不機嫌になってしまう。そんな彼を哀れに思ったのか、珍しくアクアが気を利かせて、優しく名前を尋ねる。

「ねえ少年。あなたの名前はなんていうの？」

「えっ？ ああ……俺の名前は佐藤和真だ」

「ふむふむ、佐藤和真か。それじゃあ、これからはカズマって呼ぶわね？」

「お、おう、よろしくな……」

女性に耐性の無いカズマは、すごい美少女から下の名を呼んでもらえて照れた。見た目だけは可愛いので、彼女の本性を知らない男はころつと騙されてしまうのだ。

その犠牲者となった佐藤和真という少年は、別の時空でこの物語の主人公を務めている人物だった。幸か不幸か、銀時たちが割り込んだことで、彼の運命が変わってしまったのである。そのせいで、本来なら恋愛感情を抱くことなどないアクアに好意を抱いてしまった。

「（なんと見事なボーイミーツガール！ 異世界に来て早々にこんな美少女とお近づきになれるなんて、こいつあいわゆるモテ期到来というヤツですかあ!?!）」

アクアの中身を知らないカズマは、哀れなぬか喜びをする。しかし幸いな事に、彼女の正体はすぐにバレる。

「おい駄女神。なんか妙にコイツの気を惹こうとしてねーか？」



「うえ!!　　そ、そんなことしてないわよ?　　一人寂しく異世界にやって来た少年に女神の慈悲を与えたまでよ?」

「ふーん、そーかい?　　俺はてつきり、チートアイテム持つてるコイツを飼ひ慣らして甘い汁を吸いまくろうとしてんのかなーって思ったんだけど。やつぱ女神さまともあるうお方が、そんなアクドイことするわけないよな?」

「うっ……ま、まあね!　　なんだってこの私は、気高く、強く、美しい、女神アクアなんだから!　　そんなアクドイことなんか、微塵も思っちゃいないわよ?」

旗色が悪くなったアクアは、銀時の追及を受けて冷や汗を流しまくる。ぶっちゃけると、彼が予想した通りのことを考えていたからだ。凶星を突かれて挙動不審になっている様からは、女神の威厳など微塵も感じられなかった。

無論それはカズマにも伝わっており、一連のやり取りをしっかりと目撃した彼は、己の間違いを悟る。

「(ああ……今の会話で分かった。こいつは中身がダメな系だ)」

あつさりとアクアの正体が発覚してしまった。その瞬間、彼のモチ期も儂い幻となつて消えた。

「(それにしても、女神とか言ってるのが気になるな……。神オーラなんて微塵も無いのに)」

銀時と仲良くケンカしているアクアを見つめながら思う。人間として考えてもまるでダメな女が女神さま？ それって笑うとこなんでしょうか？

「しかし、ここは異世界だ。もしかしてということも有り得るか？」

頭の回転が速いカズマは柔軟に思考を切り替える。もしコイツが本当の女神なら、それなりの能力を持っているはずだ。そして自分には、それを確かめる術がある。だったら、今すぐ調べてやろう。転生する時に貰ったこのチートアイテムで！

意を決したカズマは、装備しているメガネを使うことにした。

その神器を手に入れたのは、今から数時間前のことだった。

アクアの代わりに仕事を引き継いだ天使は、銀時たちの後から天界にやって来たカズマとの接触を適切にこなしていた。アクアと違ってまともな彼女は、死亡したという事実には衝撃を受けている彼の心をしっかりとケアしながら話を進める。

『あなたの人生は大変立派なものでした。少女を助けるために見せた勇気を、これから先も誇りに思い続けてください』

『っ!?! ……そう言ってもらえると、すごく嬉しいよ』

気落ちしていたカズマは、慈愛に満ちた天使の言葉に感動する。

実を言うと、彼の本当の死因は『トラクターに轢かれたと勘違いしたことによる

シヨック死』で、彼が助けたと思っっている少女は元々轢かれることなどなかった。つまり、客観的に見れば不必要な死だったと言わざるを得ないものだったが、それでも、迷うことなく少女を助けようとした善意と勇気は間違いない、天使はそれを正しく理解して余計な真実を語ろうとはしなかった。か弱き人の心を無償の愛で慈しむその姿は、まさに天使そのものである。しかし、別の時空でカズマの対応をしたアクアは、彼の死因を無慈悲に笑ってガラスのハートを傷つけまくった。ゲスな思考で悪意を振りまくその姿は、まさに悪魔そのものである。

そんな彼女も自分より悪魔的なドS野郎によつて異世界に連れて行かれたため、ここにはカズマを傷つけるものはいなかった。

『ううっ！ こんな俺でも最後は誰かの役に立てたんだなあ……』

最低な駄女神と出会わずに済んだカズマは、天使がついた優しい嘘によつて心を救済される。この瞬間、彼は『ちよっぴり綺麗なカズマさん』となり、天使の期待に応えたいと思つた。異世界にいる魔王を倒して欲しいという彼女の願いを叶えるために、褒めてもらえた勇気を示してみせようと決意したのである。

『マジ天使な巨乳美女の頼みを断る理由などあるだろうか、いやない!!』

彼女の胸を見ながら異世界へ転生することを即決する。

そうして、とんとん拍子に話は進み、もつとも重要な転生特典を選ぶ時が来た。もし

ここに居るのがアクアだったら、理不尽な言葉でカズマを怒らせ、特典の代わりに自分が選ばれるという結果を招いていただろう。しかし、この天使は優しいお姉さんの性格をしているので、じっくりと吟味する時間を与えてくれた。

『さあ、カズマ。この中から好きな物を選んでください』

『はい、分かりました』

天使から紙の束を受け取り、その内容を確認する。そこには転生特典の説明が記されており、その中から自分の気に入ったものを一つだけ貰えることができる。

『さあて、どれにしようかな』

ざっと目を通してから思考する。確かにどれも強力で、正真正銘のチートアイテムだった。伝説級の武器に始まり、一度は使ってみたいと思つたことがある能力など、より取り見取りだ。

しかし、カズマは思った。過去の転生者の行く末がどうであったかを。

『（これまでもたくさん転生者が送られてるらしいけど、未だに魔王を倒せていない。ということは、単純に攻撃手段となるものを選んででも駄目つてことだよな……）』

ようするに、過去の転生者と同じような考え方では魔王を倒すことは出来ないという結論になる。そもそも、強力な武器や能力を貰つても使いこなす自信が無い。直接戦うことは自分の本分ではないと思うからだ。

ならば、頭を使うというのはどうだろうか。

『(そうだよ。なに俺自身が戦う必要なんてないじゃないか。大体、俺、引きこもりだし。運動めっちゃ苦手だし)』

良くも悪くも自分を知っているカズマは、自らが勇者になることをやめて、勇者に指示を出す司令塔を指すことにした。その結果、彼が選んだ神器が、運命を見るメガネ〔ノルングラス〕だった。

このメガネには運命を司る女神の分霊が宿っており、対象者の因果情報を読み取ることで、本来なら知り得ないデータを入手する能力が備わっている。過去を観測して現在を把握し、未来に変革をもたらす道筋を見出すのである。

能力を発動するにはメガネをかけた状態で対象者を直接見る必要がある、過去を遡るほどに観測時間も増加する。また、人間相手に使う場合はプライバシー保護機能が働いて、ダメだと判断された内容は公開されないようになっていて、

そのように万能というわけではないのだが、それでも、使いようによっては非常に強力なチートアイテムとなる。例えば、敵対者のステータス、得意技、弱点などを知ることが出来るので、正攻法での攻略が難しい相手と戦う場合に期待以上の効果を発揮する。また、気になるあの子の好きな食べ物や異性のタイプなども調べることが出来るので、恋愛を進める際にもめっちゃ役立つ優れものだ。

神器の中でもかなり特殊でクセの強いアイテムだったが、彼の心にティンと来るものがあつた。

『よくし！ ノルングラス、君に決めた！』

ようやく希望に叶う相棒を見つけたカズマは、対戦用のポケモンを選んだサトシ少年のように叫んだ。

そのような経緯でカズマの手元にやってきたチートアイテムが、奇妙な因果の道を経てアクアに使われようとしている。

「(さあ、ノルン。お前の出番だ！)」

メガネのフレームをつまんでキラリと太陽光を反射させたカズマは、心の中で呼びかける。すると、それに反応してノルングラスの能力が発動する。

《はーい！ 呼ばれて飛び出て、じゃじゃじゃん！》

可愛らしい少女の声が聞こえた途端、カズマの目の前に妖精サイズの少女が現れる。彼女はノルングラスに宿っている女神の分霊である。ピンク色の髪をツインテールに纏めあげ、ちよつと大きめなローブを可愛く着こなしている10歳ぐらいの美少女だ。見た目通りに子供っぽい性格をしており、カズマは彼女をノルンと名付けて年の離れた妹のように接している。

ちなみに、彼女の姿や声はメガネをかけている者にしか認識できないので、直に声を  
出すと脳内にいる幼女と会話するアブナイ人になってしまう。それを回避するために、  
念話による秘匿通話が可能となっている。

《カズマ、カズマ！ にゃんぱす〜》

「(お、おう、にゃんぱす〜。じゃなくて、そんな言葉どこで覚えた!)」

《ふふーん。グー〇ルよりも優れているボクの検索エンジンをもつてすれば、この程度  
の情報を得ることなど造作も無いのだ! ところで、このボクになんかようかい?》

「(うむ。そのお前の力で、あそこにいるバカそうな女の素性を調べて欲しいんだ)」

《かしこまつ!》

カズマの要望を聞き入れたノルンは、ピースサインで右目を挟むようなポーズを取っ  
た。そして、意気揚々とターゲットに視線を向ける。

《えーつとお、あのバカそうなお姉ちゃんは……っていうか、アクアじゃん?!》

「(ん? もしかして、あいつのこと知ってるのか?)」

《う、うん。あいつは天界中で知られてるちょー有名な女神だよ》

「(ふーん。つてことは、本当に女神だったのか。でも、有名になるほどすごいヤツには  
見えないんだけど、バカそうなのフリしてすごい能力の持ち主なのか?》

《ううん、そーいう良い話じゃないよ。あいつはね、あまりに残念な性格ゆえに100年

間も『お嫁さんにしたくない女神』ナンバー1に君臨して、ただ1人殿堂入りを果たした筋金入りの駄女神なんだよ!』

「ちよつ、なにそのご長寿ランキング!? 天界でなにやってんだよとつっこむよりも、100年以上続いているつてことにビックリなんですけど! つてゆーか、改めて考えたらあいつすつげーババアじゃん!」

《ちつちつちつ、神さまは絶対歳を取らない存在なんだよカズマ君》

「(永遠の17歳ですね、分かります……)」

この時カズマは年齢の話なんて聞かなきや良かったと後悔した。いくら見た目が若くても100歳以上つてのは流石に引くわー。もうあいつのこと恋愛対象として見れないよ。バスや電車で見かけたら席を譲りたくなつちやうよ。

「(ま、まあ、歳の話はともかくとして、あいつが女神というのは確かなんだな?)」

《うん。それはそうなんだけどさあ、あいつにはなるべく関わらない方がいいよ》

「(それまたなんで?)」

《それはね、あいつの幸運がめつちやバいからだよ。上条当麻ばりに不幸体質だから、一緒にいるだけで運気を吸われちやうんだ。ぶつちやけ、最強の『さげまん』だね》

「(あつコラツ、年頃の女の子が人前で『まん』とか言つちやいけません!)」

カズマお兄ちゃんは、ちよつぴり危険な単語を使ってしまったノルンを叱る。それに



しても、不幸を呼ぶ女神とは、これまた斬新な設定である。

「(とりあえず、ノルンの言う事を聞いておくか。あいつのせいで酷い目に遭うよーなデジャブが見えるし)」

《うむ！ いい判断だよカズマ君。ノーパンノーブラで表を歩けるよーな痴女と一緒にいたら、君も変態の仲間入りしちゃうからね》

「(えっうそ！ あいつパンツはいてないの!?)」

《遅かった！ カズマは既に変態だった!》

16歳らしくリビドーに流されるマスターに呆れるノルン。しかし、これは仕方がないことだった。たとえ中身が残念でも、あれほどまでのわがままボディを前にしては反応せずにいられない。それが若さというものだ。

「(人は流れに乗ればいい。だから私は君を見まくる!)」

本能に身を任せてエッチい視線をアクアに向ける。乳・尻・太もも、デイ・モールト  
良し!

「……………認めたくはないが、あえて言わせてもらおう。あれは、いいものだ!」

「ねえちよつと。あのカズマって子、大丈夫なの? 妙に大人しくしてると思ったら、この私のわがままボディを舐めるような視線でガン見してるんですけど?」

「ああ。確かにあいつはお前の姿にガンダムを見てるようだけ。なんかマ・クベのモノ

マネしてるし」

「恐らくは、アクア殿の胸を見た瞬間にアツザムを連想してしまったのだろう」

「なるほどな。確かにアクアのパイオツはアツザムに見えなくも無い」

「つて、なに納得してんのよ!?! 私の美乳をアツザムなんかと一緒にしないでほしいんですけど!」

意外にもガンダムを知っていたアクアが適確なツツコミを入れてくる。

この時空の彼女は、娯楽を司る先輩女神の影響で銀時たちに匹敵するほどサブカルチャーに精通していた。その先輩はお笑いをこよなく愛し、ギャグ要員としてお気に入りの銀時たちを直に観察するためにしょっちゅう日本へ降臨していた。そのついでにマンガやゲームを大量に持ち帰り、色々と世話をかけている日本担当のアクアにとっては迷惑極まらない心遣いだったのだが、のび太タイプの彼女がジャイアンタイプの先輩に逆らうことなど出来るわけもなく、話合わせのために遊んでいるうちに娯楽関係の知識が身につけてしまったのだ。そのおかげで銀時たちと対等に渡り合うことができ、カズマにも親近感を持つてもらえたのだから、結果オーライといったところなのだが。

「ふう、いいもん見させていただきました!」

バカどもの騒ぎを無視してアクアの胸を堪能したカズマが現実に戻ってくる。その

様子を見ていた桂は、朗らかな笑顔を浮かべる。

「どうだいカズマ君。俺の仲間は気のいい連中ばかりだろう？」

「はあ。グラサンの人は気絶してるし、天パの人はドSだし、女神っぽい人は駄女神だけど、何とか上手くやっていけそうかな？」

「ははっ、そうかそうか、そいつあ良かった！」

「全然良かないわよ！　なんでこの私がこんな冴えないクソガキに駄女神呼ばわりされなきゃならないのよ！　どう見てもヒキニートにしか見えないクセに、女神である私を侮辱するなんて絶対に許さないんだからね！」

「ああ桂さん。俺、こいつとだけは仲良くやってく自信無いわ」

どう見ても女神には見えないアクアに蔑んだ視線を向ける。なんでだろう、このやり取りにも激しくデジヤブを感じるの。

「ノルンの言う通り、こいつは危険だ……。俺の中のシックスセンスがそう告げている」  
「ん？　どうしたカズマ君。もしかして、好意を抱いてるのに素直になれないツンデレモードというヤツか？」

「おいおい、野郎のツンデレなんざこれっぽちも需要無えぞ？　つーか、鳥肌が立つほどキメえからそういうのやめてくんない？」

「そんなとちやうわ!!」

どこまでも前向きな桂には2人が仲良しに見えたらしい。まったくもって迷惑な話である。つていうか、このままあの駄女神に気があると誤解されたらたまらない。誰かこの空気を何とかしてください。困ったカズマが助けを求めた時、その切実な願いを聞き届けたように1人の男がやってくる。

「随分と賑やかだな。楽しそうであるから、余もまぜてもらえるか？」

「おお、将ちゃん。待ちかねたぞ」

「ん？ しょうちゃん？」

新たに登場した人物に興味を持ち、こちらに顔を向ける。するとそこには、ドラクエⅢの勇者みたいな格好をした男性がいた。

あれ、この人どっかで見たことあるような気がするんですけど……。

「まずは自己紹介からするとしよう。こちらの少年は、今日転生してきた佐藤和真だ。こう見えても中々見所のあるヤツでな、これからしばらく面倒を見ることにしたのだ」  
「そうであるか。名前から察するに、日本から来たようだな？」

「あつ、はい！ 今日からお世話になります！」

「ああ、こちらこそよろしく頼む。余は、この砦の所有者である徳川茂茂だ」

「……………え？ 徳川茂茂？」

カズマは、思いっきり聞き覚えのある名前を聞いて固まる。えつと……………この人、今な

んつつた？ 徳川茂茂？ 徳川つていやあ、日本で征夷大將軍を務めていたあの有名な……。

「しよ、將軍かよオオオオオオオオ!!?」

ようやく顔と名前が合致して真実に気づく。まさかあの暗殺されたという將軍さまがこの異世界に転生してただなんて。しかも、ここにいるオッサンたちは將軍と知っている上で親しげに接している。

「ここまで將軍と仲良しなんて、一体あんたたちは何者なんだ?」

「はあ? 何者もナニも、俺はただの遊び人ですけど?」

「そして俺は勇者王だ」

「あのスンマセン! まったく全然意味不明です!」

一応正しく説明してるのに訳が分からなかった。ああ、そうか。ようするに、深く考えても無駄なことか。何かを悟ったカズマは、憑き物が取れたような表情になった。

「さて、カズマ君の紹介も済ませたことだし、これで出かける準備は整ったな」

「ん? 出かけるってどこ行くんだ?」

「うむ。これからレポートというルーラの魔法で別の街に行く予定なのだ。そこで試作している兵器を見学するためにな」

「えっ、試作兵器だつて?」

興味をくすぐる単語を聞いて気絶していた長谷川が復活する。

「それってまさか、ガンダム的な機動兵器？ もしくは、エヴァンゲリオン的な生物兵器？」

「いや。残念ながら既存の兵器を改良したものだ。しかし、あれが量産された暁には魔王軍など鎧袖一触となるであろう。なにせ、無限増殖したマリオが一斉に襲い掛かってきたとしても圧倒できる威力があるのだからな」

「あんなカメに触れただけで死んじまう配管工なんざ、比較の対象にならねーよー」

いちいちマリオを絡めてくる桂にツツコミを入れる。それにしても、試作兵器なんて代物を作っていただなんて、随分と穏やかじゃない話である。っていうか、茂茂と同伴する桂やエリザベスが何故かそわそわとしていて、こちらも何だか穏やかじゃない。

「おいてめえら。まだ何か隠してないか？」

「はっはっは、やだなあ銀時君！ 出張のついでにサキユバスの店によって、ちよつと良い夢見させてもらおっかなーとか、そんなことは全然考えてないさ！ なあ、エリザベス？」

「へそうそう。俺たちは別に、将ちゃんが出資して作ってるサキユバスの店の支店巡りでしょうだなんて全然考えてないよ？」

バカな攘夷志士どもは、自ら白状してしまった。ぶつちやけると茂茂は、このアクセ

ルで秘密裏に運営しているサキュバスの店の常連だった。ここではサキュバスが見せる『夢』で男性冒険者の性欲を解消するサービスが行われており、内密かつ平和的に欲求が満たせる夢のような場所だった。その魅力にどっぷりとハマった彼は、足しげく通いながら思った。この店をなるべく健全に広めることで、犯罪を減らすと同時に男性冒険者のやる気を上昇させることが出来るのではないかと。実際、かぶき町にあるキャバクラに通っていた友人たちは、そうやって日々の疲れを癒し、リフレッシュしていた。ならば、この異世界でも通用するはずだ。なんてことを考えて他の街にも支店を作ってみたのだが、はつきり言ってエロに目が眩んだだけである。魔王を倒すために金を使うんじゃないのかよと言いたるところだが、有史以来この手の店は作られ続けてきているので、こればかりは男の性だと割り切るしかない。

だがしかし、女であり神でもあるアクアとしては絶対に見過ごせない。

「ねえちよつと。サキュバスの店って一体なによ?」

〈ギクツ!〉

「さ、さあ? 一体なんのことかなあ?」

「とぼけんじやないわよ! 今さつき、あんたらが白状してたじやない! まさか、サキュバスに魅了されていい様に操られてるんじゃないでしょーね?」

「ナニをバカなことを! 数多の戦場を駆け抜け、鋼の精神を持つに至ったこの俺がサ

キュバスごときに魅了されるなどあるわけなからう!」

「ツインファミコンの誘惑に負けた分際でなに言ってるの!」

女神としての使命に燃えたアクアは、明らかに嘘をついている桂に詰め寄る。人に災いをもたらす悪魔が関わっている以上、彼女の行動は正しいと言える。しかし、残念なことに彼女の味方はこの場にいなかった。サキュバスの店というエロティックな単語に銀時と長谷川も興味を抱いたからだ。

「それにしてもサキュバスの店かあ。なんか素敵な響きだな!」

「全然素敵じゃないわよ! そもそも、あいつらは悪魔なのよ! あんたたちの生気を吸い取る魔性の女なのよ!」

「つたく、ファンタジーなキャバクラくらいで、なに目くじら立ててやがんだこの駄女神は。今更、純情キャラ演じてても手遅れだつて理解しろよ。大体、ノーパンノーブラのお前だつて、アニメ視聴者の精を大量に搾り取つてんだろ? お前の尻で、やつらの部屋に大量のティッシュゴミを作り出してはるはずだぜ」

「ちよつ、何て危険な発言してるのよ! それはあらゆる意味でアウトでしょつ!」

パーティメンバーによるまさかの裏切りによってアクアの追撃は失敗に終わる。こうして、サキュバスの店存続の危機はひとまず回避された。

一方、そのやり取りに巻き込まれたカズマは思う。自分もサキュバスの店について



もつと詳しく知りたいです。でも、こいつらといるとすつごい疲れる。

「(はあ……こんなダメな大人に囲まれて、これからちゃんとやつていけるんでしょーか？)」

《だいじょーぶだよ、カズマ君！ 時々酷い目に遭つたりするかもだけど、あの天パの人と一緒にいれば、面白い人生が送れると思うよ？》

「(えー、あのDSの遊び人とおー?)」

ノルンの言葉に興味を抱いて天パの男を見る。全体的な雰囲気は、本人も言ってる通り遊び人そのもの。性格もそれに準じていい加減ときている。しかし、過去を知ることが出来るノルンの言うことに間違いは無い。この男には、彼女の興味を惹くほどの魅力があるのだ。

「(まあ、ノルンが勧めるなら仕方ない。未来のパーティーメンバー候補としてチェックしとくか)」

《ふふっ。ボクを選んだ人間ならそう言うと思ったよ》

愛しい妹の言葉を信じることにしたカズマは、彼らと共に生きていく道を選択する。

何はともあれ、神のいたずらによって邂逅を果たした主人公たちは、奇妙な友情を築きながらおバカな冒険譚を繰り広げていくことになる。

## 第6訓 頭のおかしい奴らにも良いところはある

一応女神のアクアにサキユバスの店の存在が発覚しそうになり、男たちの桃源郷が壊滅の危機に瀕した。だが、機転を利かせた銀時が飢えた彼女を酢昆布で操り何とか誤魔化した。かなり危ないところだったが、これで心置きなく出かけられる。サキユバスの店で遊ぶ気満々の茂茂たちは、やたらとイイ笑顔を浮かべながら別の街に出張していく。

その別れ際に茂茂から4万エリスを手渡される。

「これで和真の歓迎会を行うといい。お前たちの分は、彼の面倒を見てもらう礼だ」

「おう、そういうことなら遠慮なく使わせてもらうぜ」

茂茂の心を汲んで素直に受け取る。何よりも人とのつながりを重んじる彼ならではの配慮を無碍に断るつもりは無い。ここは盛大に使い切つてやるのが友のためとなり、新たな仲間のためとなる。

「よーしお前ら！ 今夜もクールにレッツパーティーと洒落こむぜえー？」

「イエ—— イ!! ヒアウイゴ—— つ!!」

「あかん。この人たち、全員もれなく駄目な大人だ」

陽気にはしゃぐマダオたちを呆れた目で見るカズマ少年。しかし、彼が見ているものは表面的な部分でしかない。社会の荒波に揉まれた時、彼も理解するだろう。酒に酔いしれて嫌なことを一時的にでも放り出さなきゃ世の中やってらんねえということ。

数時間後。午後の作業を終えた一行は、ギルドの酒場でカズマの歓迎会をおこなった。茂茂にもらった1人1万エリスの軍資金をフルに使って昨日と同様に盛り上がる。

最初はマダオたちのはしやぎつぶりに引いていたカズマだが、元々彼にもマダオの素質があったため、あつという間に意気投合してしまう。

「ごくつ、ごくつ、ぷはあーっ！ くうーっ！ このシャワシャワって飲みモン、味は正直微妙だけど、一仕事終えた後だから何かちよーうめーっ！」

「いいわよカズマ、その調子でジャンジャンいきなさい！ お代わりはいくらでもしていいから、私と飲み比べするわよー！」

「よし、いいだろう！ 今夜はとことん飲んでやるぜえーっ!!」

アクアに勧められて、キンキンに冷えたクリムゾンネロイドを美味そうに飲み干す。何だかんだと言いながらも結構仲良しな2人であった。

そして更に数時間後。他の冒険者も巻き込んで散々騒いだ一行は、深夜に宴を切り上

げると千鳥足でギルドの外に出てきた。すっかり出来上がった銀時とアクアは、仲良く肩を抱き合いながら一発芸を披露する。

「二番、坂田銀時。ワカモト氏のモノマネやりまーす。ぶるああああああ——っ!! アイテムなどお、使ってんじやあねええええええ——っ!! ハローエブリニャン! イゼルロロンは陽動……本隊はフェザーン行きと来たあぜえ!」

「きやははは! マニアックすぎてよくわかんないんですけどーっ!」

銀時がメタな芸を披露して、それを堪能したアクアが笑う。ツツコミどころ満載の内容はともかく、完全に酔いが回っている彼らの宴はまだ続いていた。

一方、この中で唯一酔っていないカズマは、ベロンベロンに酔いつぶれている長谷川に気を使っていた。

「大丈夫か、長谷川さん?」

「い、いやあ……2日連続でまともな酒を飲んだから、肝臓がビツクリしてアルコールの分解が間にあわねえみてーだ……うつぷ!」

貧乏暮らしに慣れてしまった彼の身体は贅沢によってダメージを受けていた。

「はあ……なにこの嫌な現実感。異世界生活1日目にして酔っ払いの世話をすることになるとは思わなかったよ……」

疲れた様子のカズマは、となりで吐き気を催している長谷川の身体を支えながらため

息をつく。これからしばらくの間、このオッサンと一緒に馬小屋暮らしをするのだと思うと先行きが不安になる。宿屋に泊まるうにも天使からもらったお金だけでは心もとないし、現状で得られる収入を考慮しても自分の間はギリギリの暮らしを強いられることになる。だから、ある程度金が溜まるまでは、長谷川たちと共に馬小屋で暮らすことにしたのである。

「なあ、ノルン。転生者って、全員こんな極貧生活を生き抜いてるのか？」

《ううん。ほとんどの転生者は、攻撃に特化したチート能力を活かして高難度のクエストをクリアしまくるから、序盤でお金に困る人なんてほんの一部だよ》

「なるほどね……レベラーからソロでG級クエストをクリアできるってことか。それなら金にも困らないよな」

《カズマ……もしかして、ボクを選んだこと後悔してる？》

「ふっ、そんなわけないだろ？ チート能力で金儲けするより、可愛い相棒と会話できるほうが断然いいさ」

《うわーい、カズマ大好き！ たとえ真性のロリコンでも、ボクは君を軽蔑しないよ！》

「あの、最後の言葉は余計なんですけど。大好きと相反する言葉なんですけど」

ノルンのおちやめな冗談にツッコミを入れる。ただし、カズマが子供好きということも確かであり、ロリっ子からのウケがいいのも間違いない。その性質はノルンに懐

かれていることからもうかがい知れる。

「(ま、まあ、ロリコン疑惑は置いて……俺のレベルが上がればノルンの力も活かせるようになるはずだから、貧乏生活も最初だけだろ)」

《そうだねえ。カズマは幸運が高いから、アクアの悪影響を受けなければ大富豪も夢じゃないよ》

「(あの駄女神は貧乏神かよ)」

大体、そういう認識で間違いはない。ブラックホールのように幸運を奪い取る彼女の魔の手から逃れられれば、余計な苦勞をしないで済む。

しかし、T o L O V E を引き寄せる要因はアクアだけではなかった。その元凶である銀時は、何者かの気配を感じて立ち止まる。

「……おい、後ろからついてきてるストーカー野郎。お前がいることは既にお見通しだ。こそこそ隠れてねえで、とつとと出てきな」

前を向いたまま鋭い声で呼びかける。あらゆる窮地を経験してきた彼は、酔っ払っている状態でも周囲の警戒を怠っていなかったらしい。無論、そんな芸当ができるのは一握りの達人だけであり、超無能な駄女神と昨日まで一般ピーポーだったカズマには気配を感じるなどできない。

「ほえ〜? ストーカー?」

「まさかねえ?」

銀時の言葉に疑問を覚えた2人は、半信半疑のまま後ろを振り返る。すると、彼の呼びかけに応えるように、少し離れた建物の陰から若い女性が現れた。

「この私の存在によくぞ気づいたな……」

「本当に誰かいた——っ!?!」

「当然の結果だ。気配を察知するサイドエフェクトに目覚めた俺は、シヤアのように敵の位置が分かるからな。そんな俺の背後を取るには『スタープラチナ』か『ザ・ワールド』を使うしかないぜ?」

「そんな奴マジでいたら魔王より強いんじゃない?」

確かに、時を止める能力があれば最強の存在となれるだろう。しかし、幸いながら、オラオラな人も無駄無駄な人もこの世界にはいない。もちろん、銀時たちをストークキングしていた人物もスタンド使いなどではなく、白い鎧でその身を包んだ剣の使い手だった。

「これほど容易く見つけてもらえらるとは、やはり私の目に狂いは無かった」

「なんだコイツ、ストーカーのクセに見つけてもらいたかったのか?」

「ああそうだ。実を言うと、友人に止められて自ら名乗り出ることを思いとどまっていたのだが……あなたの方から話しかけてくれたのだから、この場合は不可抗力と言える

だろう」

妖しい笑顔を浮かべた女騎士は、危険な理屈を言いながら銀時たちの前まで歩いて来る。見た目はとびっきりの美少女なのだが、行動と言動がおかしすぎる。

「あれ、あの人からアクアと同じよーな印象を受けるんですけど、それはなぜ？」

顔を赤く染めて呼吸を乱している女騎士を見た瞬間、カズマの危機感知センサーが鋭敏に反応した。ダメだ。恐らく彼女とは関わりあいにならないほうがいい。まるで自分がストーカー被害に遭ったかのように恐れおののく。しかし、幸いながら女騎士の興味はカズマではなく銀時にあるようだ。

「はあつ、はあつ……これでようやく話が出来るな。異国の剣士よ！」

「ああん？ お前に目を付けられるような記憶なんざ微塵もねえけど、どこかで会ったか？」

「昨日、ギルドの酒場で目が合っただろう？ まるでメス豚を見るような目つきで！」

「この私を見下していたらどう!?」

「ん〜？ ああ、あん時の金髪姉ちゃんか。そういやあ、お前を見た瞬間に、なぜか知り合いのメス豚を思い出したんだよなあ」

「きゃはあんっ！」

銀時の口から発せられたメス豚という単語に反応して悦びを感じてしまう金髪の少



女。その正体は、昨日の夜に銀時を見かけて一目惚れ（？）してしまったダクネスだった。

「はあつ、はあつ……ありきたりな言葉責めだというのにこの威力つ！　これはもう、天性の才能というよりほかは無い！　私は、あなたのような者が現れてくれることを心の底から待ち望んでいたっ！」

「な、なんなのこの女騎士……。メス豚扱いされたのに頬を赤く染めてるんですけど」

「ふふくん。所詮ヒキニートなんかに複雑な女心は理解できないのね。あれはどう見ても恋しちやつてる顔じゃない。たとえ憎まれ口を叩かれても、あの子には分かるのよ。自分の想いに応えてくれる銀時の優しさがね！」

「いやいや、あれは絶対、恋じゃねーだろ!?　DMの想いに応えてくれるDSの攻めに惚れてる顔だろ!？」

とんだ勘違いをしているアクアと話している内にカズマは理解した。あの女騎士は、とんでもねえDMであると。無論それは銀時も同様だった。

「つたく、どこの世界でも変態はいるもんだな」

「ははっ、銀さんの周りには変人ばかり集まってくるからなあ。ところで、あんたの名前はっ！」

「ああ、すまない。まだ名乗っていなかったな。私の名はダクネス。クルセイダーを生

業としている者だ」

散々性癖を曝け出しといてからようやく名乗ったダクネス。未だに彼女の目的は分からないが、とにかく残念な人物であることは十分に分かった。なんかもう、美少女と上級職とか、すべてのプラス要素がぶつ飛んでしまうほどにおかしいわよ、この子。で？ To LOVEるダクネスさんが、この俺に何の用だ？ もしかして、昨日の件を根に持つてんのか？」

「いや。メス豚扱いされたことに關しては何の遺恨も無い。それどころか、もつと激しく罵つて欲しいと願っている！」

「だが断る」

「あひいんっ!？」

ぞんざいに扱われて再び興奮に酔いしれるダクネス。人目をはばかることなく身悶えるその姿に、自称ノーマルのカズマは恐怖する。

「はあつ、はあつ……このままでは、どこまで正気でいられるか分からない。早めに本題に入らなければ……」

「あのく、すごく言いにくいんですけど、あなたは最初からまともじゃありませんよ？」

「ああ、その通りだ。そこにいる天パのお方と出会った瞬間から、私の心はまともでいられなくなつてしまった！ だからこそ、この想いをあなたに告白しよう！」

まるで好きな相手に愛を打ち明けるような宣言をする。しかし、彼女の真意は異次元に突入していた。

「……………この私の……………主人様マスターとなつてもらえないだろうかっ!!」

「失せるメス豚」

「くぎゆうくんっ!!」

速攻で断られて三度興奮に酔いしれるダクネス。

「くうう……………よもや……………まで屈辱的な断り方をされるとは……………! 一体どれだけ私の喜

ぶツボを押さえているというのだっ!!」

「いや、なんであんたは喜んでんだ!? 史上類を見ない言葉で断られてんじゃねーか!」

「はっ、そうだ! あまりに強烈な悦びを感じて思わず心を奪われてしまったが、今はそれどころではなかった! なぜ私の願いを断つたのか、その理由を聞かせてくれ! 一体私の何が気に食わなかったというのだ!」

カズマに指摘されて本題を思い出したダクネスは、銀時の肩を掴んで激しく揺さぶる。本気だからこそつい力が入ってしまったのだが、この行動が悲劇を生み出すきっかけとなつてしまった。

「いい加減にしてくれよ。さつきから気持ち悪いんだよ」

「なっ!? 私のどこが気持ち悪いというのだ!? もっと詳しく、痛めつけるように説明

してくれっ!!」

「はっ、勘違いすんなよ。俺は、お前のことを気持ち悪いと言ったわけじゃねえ。酒に酔ったこの俺が気持ち悪くなったって意味だからなオエエエエエ——ッ!!」

そう言った途端、銀時の口から茶色のゲロが噴出した。実を言うと、ギルドを出てからずっと吐き気を催しており、ダクネスが揺さぶったことで我慢の限界が来てしまったのである。その結果、出来立てホヤホヤなゲロが噴水のように噴き出して、目の前のダクネスへと降り注いだ。

「出会って間もない美少女にゲロのシャワーをぶっつけたああああ——っ!?!」

あまりに衝撃的な瞬間を目撃したカズマが劇画タッチの顔で叫ぶ。しかし、彼を襲う衝撃はそれだけで終わらなかった。

「ちよっと銀時! あんたなんてことしてくれてんのよ! そんな醜態を目の前で見せられたら、流石の私も我慢できないでしょーがオエエエエエ——ッ!!」

そう言った途端、アクアの口から虹色のゲロが噴出した。実を言うと、ギルドを出てからずっと吐き気を催しており、銀時のゲロを見たことで我慢の限界が来てしまったのである。その結果、虹のように綺麗なゲロが噴水のように噴き出して、目の前のダクネスへと降り注いだ。

「お前もかいいっ!?!」

再び衝撃的な瞬間を目撃したカズマが劇画タツチの顔で叫ぶ。

「おいコラ駄女神！ 貰いゲロで追い討ちかけんてんじやねえよ!? ただでさえ手遅れなのに、トドメさしちまったじゃねーかつ!?」

アクアにツツコミを入れたカズマは、2人分のゲロを浴びたダクネスを見て途方に暮れる。ああもう、どうすればいいのよコレ。全身汚物まみれで、もはや手の施しようが無いよ。この手の事態に慣れていないカズマは、対処の方法が思いつかずに右往左往する。

しかし、こういう場合になり頼りになる長谷川がすかさずフォローに入る。

「安心しろカズマ君。俺があの子のケアをするから」

「長谷川さん！ よろしくたのんます！」

この時ばかりはマダオが輝いて見える。強力な助っ人を得たカズマは、悠然とダクネスに近づいていくその姿を頼もしく思った。

しかし、それは錯覚だった。

「ダクネスちゃん、俺の仲間が迷惑をかけてゴメンな。とりあえず、このハンカチで顔を拭いてから、落ち着いて話しあオエエエエエ——ツ!!」

なんと、ダクネスの顔を拭こうとしていた長谷川までもが貰いゲロをしてしまった。実を言うと、ギルドを出てからずっと吐き気を催しており、2人のゲロを間近で見たこ

とで我慢の限界が来てしまったのである。その結果、超フレッシュなゲロが噴水のよう  
に噴き出して、目の前のダクネスへと降り注いだ。

「お前もかいいいっ!!」

三度衝撃的な瞬間を目撃したカズマが劇画タツチの顔で叫ぶ。このマダオめ。頼り  
になると思つた途端に事態を悪化させやがった。

「ちよつ、コレツ、どうすんだよ!?! もうゲロだかグロだか分かんない状態になつて  
るんですけど?!? ねえ誰か! この状況を何とかしてよ! 哀れな俺を助けておくれよ  
!?!」

頼るべき大人たちが沈黙し、成すすべが無くなったカズマはパニック状態に陥る。あ  
あもうダメだ。あの女騎士、絶対俺たちを訴えるよ。逮捕エンド待たなしたよ。思わ  
ず、最悪の未来を想像して顔を青ざめさせる。

しかし、天はカズマを見捨てていなかった。彼が騒いでいる間に天パの銀時が復活し  
たのである。一通り吐き出してスッキリした彼は、周囲を見回して現状を把握すると、  
となりで座り込んでいるアクアを背負った。そして、うろたえているカズマに声をかけ  
る。

「おいカズマ、今すぐここからずらかるぞ」

「ええーっ?!? あのダクネスって人、放っておくのか?!?」

「そんなもん考えるまでもねえだろ。こうなったのは全部あいつのせいなんだから、こつちが気を使う必要は無えよ」

「いや、でも……」

「ああもう、つべこべ言つてねえで長谷川さんを運んで来いや！ あんま言う事聞かねえと、アクアの世話をためえに押し付けるぞ!？」

「わつかりました！ 今すぐここから離脱しましょう！」

もつとも恐ろしい脅迫に屈したカズマは大人しく従う。グツタリと座り込んだ長谷川に肩を貸して立ち上がらせると、そそくさとその場から離れていく。その途中で顔を俯かせたまま立ち尽くしているダクネスに視線を向けると、かすかに震えていることに気づいた。

「そりやあ泣きたくもなるよなあ……」

だつてゲロまみれなんだもん。流石のカズマも、酷いシヨックを受けて固まっているらしい彼女に罪悪感を覚えてしまう。

しかし、彼の気遣いはまったくの無駄だった。

「うふ……うふふ……。私の身体は3人の暴漢によつて全身くまなく汚されてしまった……。騎士であるこの私が、暗い夜道で襲われて抵抗すら許されずに清らかな柔肌を蹂躪されてしまった！ ああつ、なんてことだ！ クルセイダーとしての誇りも、女性と

しての尊厳も、何もかもが一瞬にして奪われてしまうなんてっ！ 剣を手に取り戦うことも出来ず、強引にその身をオモチャにされる女騎士とか、今だかつて無いほどに燃えるシチュエーションではないかっ!! ああどうしよう!! 果てしなく押し寄せる快樂の闇が魂までも墮落させりゅっ!!」

「ねえ銀さん。あの人なんか喜んでるんですけど？ モザイク必須の状態で歓喜に震えてるんですけど？」

「よく覚えておけ、あれがドMというものだ」

「うん、よく覚えた。そして、ああはなるまいと思つた」

「ああ、それでいい。お前はどちらかというドSタイプだからな。俺のように慈愛に満ちたドSプレイで哀れなドMを喜ばせてやればいいさ」

「あの、ゴメンなさい。俺は後ろ指されたくないんで、ドSの方もノーセンキューです」  
ダクネスを見てやるせない気持ちを共有した2人は、奇妙な連帯感を覚えながらその場を離れる。興奮して我を忘れていたダクネスを放置したままで。

《なるほど、あれが真正のドMってヤツかー。リアルで見ると迫力が違うね!》

「(あつコラツ、年頃の女の子があんな恐ろしいものに興味を覚えちゃいけません!)」

馬小屋へと向かう途中でちよっぴり楽しそうなノルンをたしなめる。いかん。このままでは可愛い妹分まで毒されてしまう。この時カズマは、ダクネスを要注意人物と認



識してアクアと同格扱いにするのだった。



転生した初っ端からおかしな少女たちに興味を持たれてしまった銀時は、数日に渡って執拗なアプローチを受け続けた。朝はめぐみんからパーティに入れると催促され、夜はダクネスから主従の契りを結べと迫られる。2人ともに美少女かつ上級職という好条件で普通なら喜ぶ所である。だがしかし、おかしな性格がすべてを台無しにしていた。そんなことから、どのパーティからも受け入れてもらえないというのに、まったくもって懲りない奴等である。

もちろん、銀時だって厄介ごとは御免だ。ある日の夜、宿屋でアクアと会話した時にその心情を語っている。

「ねえ銀時。本気でめぐみんとダクネスを仲間に入れたいの？ 2人とも上級職だから、この私の従者としては申し分ないと思うんですけど？」

「いや、あいつらはダメだ」

「えーなんでよ？」

「考えてもみろ。ただでさえ最強のバカが目の前にいるってのに、中二やドMの世話ま

でやらされたら、俺の頭にストレスハゲが出来ちまうかもしれないねえじゃねーか。ジャンプで絶賛活躍中の主人公さまに円形脱毛症を強いるなんて絶対に許さねえ！ 例え神でも、俺の髪は奪わせはしねえぞゴラア！」

「そんな理由で断つてたの!? っていうか、最強のバカってどーいうことよ!? アクシズ教の御神体にしてお嫁さんにしたいたい女神ナンバーのこの私を最強のバカ呼ばわりするなんて、罰当たりもいいところよ!」

銀時の暴言にムカツときたアクアは、分かり易い嘘をついて自分を称える。当然そんな与太話など端から通用しなかったが。

「ぶぶーっ！ 脳無し、品無し、パンツ無しのお前がお嫁さんにしたいたい女神ナンバーだつてえ？ そんなこと、ヤムチャがベジータに勝つくらい有り得ねえよ！」

「ななな、なんですつてえーっ!? 言うに事欠いて、この私をかませ犬のヤムチャと同格扱いするとか、ちょー許せないんですけど!」

「そうだな、ヤムチャに例えたことは訂正しよう。お前はせいぜい、戦闘力がたったの5しかねえゴミだ」

「うわーんっ！ 私のもつと強いんだからっ！ スーパーサイヤ人ゴッドよりも強いんだからあーっ！ 女神だけにっ！」

全然自分を敬ってくれない銀時に怒ったアクアは、涙目になりながら掴みかかってく

る。その勢いで2人はベッドに倒れこみ、T o L O V E 的な状態で抱き合うことになってしまふ。それでも互いに異性を意識しないのは、性格の似ている相手に同族嫌悪しているのか、兄妹のように感じているのか。いずれにしても、R—18 的な展開にならなくて何よりである。

そんなこんなで、めぐみんとダクネスを適当にあしらいながら2週間ほどが経過した。

これまでは当面の生活費を稼ぐために土木工事のバイトをひたすら続け、冒険者の仕事などこれっぽちもやっていなかった。とはいえ、いつまでも街人Aを満喫しているわけにはいかない。そろそろ資金も溜まってきたので、初めてのクエストに挑戦することにした。

「つーわけで、カエル狩りじゃ——っ!!」

「おーう! 一狩りいくぜ——っ!!」

ようやくやる気になったマダオどもは、数日前にギルドの掲示板で見つけた『ジャイアント・トードの討伐クエスト』を選択して、それに合わせた準備を進める。

今日のバイトを早めに切り上げた銀時たちは、装備品を整えるために商店街をぶらつく。その中には長谷川に誘われてついて来たカズマもいて、仲良く武器を吟味してい

た。

「おつ、この『はかいの剣』すっげー安いな！ たったの2000エリスだってよ！」  
「あのソレ、なにか危険なおいがするから止めたほうがいいと思うよ？」

長谷川が手にしている前衛的なデザインの剣を見たカズマが、やんわりとアドバイスする。

「それにしても本当に安いな。もしかして在庫処分ってヤツか？」

カズマは、特売品コーナーに並んでいる剣を見て、異世界でもバーゲンセールなんてやるんだなと思った。

もちろん、この世界でも安売りをすることはあつて、夕暮れ時の商店街では激しいタイムセールバトルが頻繁に勃発している。しかし、彼らの見ている剣が異常に安くなっているのは茂茂の活躍に原因があつた。彼が世界各地の武器職人に融資をおこなった結果、良質な製品が安定した値段で行き渡るようになり、これまでぼったくりのような価格で売られていた粗悪品が値崩れを起こしていたのである。残念ながら、どんなに素晴らしい仕事をおこなったとしても、すべての結果が最良となるわけではなく、どこかに歪みが生じてしまうのだ。

当然、この世界に來たばかりの長谷川たちはそういった事情を知らず、売れ残りの粗悪品をお買い得な商品と判断してしまった。

「まあ、最初の買い物だし、このくらいの奴にしとこうぜ？」  
「そつすね。あんま金も無いし、俺も同じ奴を買っとくかな」

長谷川に釣られたカズマまで粗悪品を購入してしまう。自分でよく考えずに軽率な選択をしたせいで、マダオの不幸に巻き込まれてしまったのである。そのせいで後々後悔することになるのだが、今は良い買い物をしたと満足する。

何はともあれ、これで長谷川たちの買い物は終わった。一応女神のアクアはデフォルト装備が最強なので、後は銀時の武器を決めるだけである。

「銀さんはなんか買わねえの？　どんな敵がいるか分からないし、その木刀だけじゃ厳しいと思うけど？」

「いや。俺は当分こいつでいいよ。ドラクエでも、はがねのつるぎを買うまではこんぼう使い続けるしな」

「なにそのセコい縛りプレイ!?　DSのくせに自分を縛ってどーすんの！　やるせなくなるから、ゲームの中でくらい贅沢しろよ！　せめて間に銅のつるぎを買ってくれよ！」

「バツキヤロウ！　一銭を笑う者は一銭に泣くつてことわぎを知らねえのかあ？　出来る限り金を使わず、やくそうすらも無駄なく換金！　そうして勇者は、苦心の末に『あぶないみずぎ』を手に入れるのだ！」

「命懸けでセクハラ装備買うつもりかよ!」

思春期の子供みたいなきことを考えている銀時に呆れてしまう。まさか、武器代をケチってまであの有名なセクハラ装備を買うつもりだったとは。そりゃあ、ロマンに生きること否定しないが、とりあえず現実を生きるために武器を買え。

《ちなみに、この世界のあぶないみずぎは20万エリスで買えるよん》

「(高っ! 男の弱みにつけこんだぼったくり価格に怒りを禁じえないよ……っっていうか、マジであんの!?)」

《もつちろん。あぶないみずぎどころか、あぶないビスチエやエツチなしたぎまでありますけど?》

「(流石は異世界、男のロマンに溢れてやがるぜ! ぼったくり価格だけど)」

ノリのいいカズマとノルンは、2人の会話に便乗して盛り上がる。

しかし、セクハラ装備を強制されると危惧したアクアだけは突っかかってくる。

「ちよつと、そういうのやめてよね。いくら私のナイスボディを拝みたいからって、そんなはしたない姿で表を歩くななんて真っ平ゴメンなんだから!」

「はっ、誰もお前に着せようなんて思っっちゃいねえよ。っーか、ノーパンノーブラのお前にあぶないみずぎなんざいらねえだろ。存在自体があぶないんだから!」

「むきいっ! 尊い私をいつまでも変態扱いしてえ! このアクアさまはね、世界を

構成するエレメントの1つを司る女神だから、出来る限り自然体であることを求められているのよ!? それなのに、あぶない女呼ばわりするなんて勘違いも甚だしいわ! これは決して、私個人の性癖でやってるわけじゃないんだからねっ! 裸のヌーティストのように羞恥心を楽しんでるわけじゃないんだからねっ!

異世界に来てからずっと痴女扱いされていることに怒ったアクアは、意外な事実をぶっちゃける。好意的な姿勢で聞くと納得できそうな内容ではあるが……。

「(なあ、ノルン。あいつの言ってることって本当なのか?)」

《ううん、あんなのこじつけだよ。本当は、洗濯と着替えがメンドイだけだよ》

「(うわ、すっげえ納得!)」

すべての運命を見通すノルンによってアクアの嘘はあっさりバレた。

ああ、やっぱりあいつは駄女神だな。だって、すべての行動に知性を感じないモン。カズマは、銀時にほったまをつままれているアクアを見つめながら思った。あいつと一緒に命がけのクエストなんてしたくねえと。

「長谷川さん。俺、あんたたちが無事にクエストクリアすることを祈ってるよ」

「ん? そいつはありがたいけど……。やっぱ、カズマ君は参加しないのかい?」

「スンマセン、最初は桂さんたちと行こうかなーって考えてるんで、今回は遠慮しとく

よ」

「そっか、それなら仕方ねえな」

アクアを危険視しているカズマは、それっぽい理由をつけて誘いを断る。ごめんなさい長谷川さん。俺、可愛い女の子とイチャイチャする前に死にたくないんだ。我が身を優先したカズマは、心の中で馬小屋仲間に謝る。

その直後に、武器屋の入り口から一人の女騎士が現れ、彼らの会話に乱入してきた。

「ならば、この私を参加させて欲しい」

「？」

声を聞いてそちらを見ると、真剣な面持ちのダクネスがいた。どうやら、店の外で彼らの会話を盗み聞きしていたらしい。

「あのダクネスさん？　もしかして、ずっと外でスタンバってました？」

「ああそうだ。我が主にアピールせんがため、ずっと機会を伺っていた。そして今、その好機がやって来た！」

目をらんらんと輝かせたダクネスが呼吸を荒げて銀時を見つめる。これから彼にアピールとやらをするつもりなのだ。

「我が主！　是非ともこの私をパーティに加えて欲しい！　クルセイダーたる我が能力をもつて、すべての攻撃を防いで見せるから——」

「消えろメス豚」



「くはあんっ?!」

たったの一言でノックアウトしてしまう。銀時から発せられるドSオーラが、ダクネスの心にハードコアな刺激を与えてくれるのだ。

「はあつ、はあつ!　なんてことだ!　ここまで邪険に扱われるなど、普通なら有り得ないぞっ!」

「そりゃそーだろ。人をメス豚扱いするドSとそれを喜ぶドMなんて、そうそういてたまるか」

呆れた様子のカズマが合いの手を入れる。しかし、興奮しているダクネスはまったく聞いちゃいない。

「ああつ、なんと素晴らしい!　あなたはまさしく、私をいたぶるために生まれてきたお方……。そう!　このお方こそ、女神エリスの導きにより奇跡の邂逅を果たした、私のドSマスターだっ!」

「あれ、おつかしいな。同じ世界で生きてるのに言ってるのが分かんないや」

我が道を暴走するダクネスについていけず、カズマの方が根負けした。残念ながら、この時点では変態に対する抵抗力が身につけていなかった。

しかし、変態に慣れっこの銀時にとってはどうというこたはない。

「誰がドSマスターだコノヤロー。こちとら、てめえみてえなドMセイバーを召喚した

覚えはねえぞ。つーか、毎日飽きもせずストーキングしやがって、いつまでつきまとうつもりなんだお前は？」

「それはもちろん、私の願いを聞き入れてもらえるまでだ！」

「つたく、ようやく変態くノ一から開放されたと思っただよ。どうして俺の周りには、バカや変態しか寄ってこねえんだろーなあ？」

「そりゃあ、銀さんがその筆頭だからに決まってるじゃん」

付き合いの長い長谷川によってあつきり答えに行き着いた。無論、そんなことは銀時自身も理解しており、猿飛あやめを連想させるダクネスにも親近感を抱きつつあった。

それでも、簡単に仲間入りを認めるわけにはいかない。だって、命懸けで戦おうつてのにドMプレイを目的としてる奴なんかいても迷惑なだけじゃん？

ゆえに銀時は、ダクネスに対して試練を与える。猿飛あやめのように、やるときはやるドMであるかを見定めるために。

「おいダクネス。そんなに俺のパーティに入りたいのか？」

「無論だつ！ あなたが望むのなら、どのような痛みにも耐えてみせるぞ！」

「ほう、それなりの覚悟はあるようだな。だったらよお、とりあえず『焼きそばパン』買って来いや」

「えっ……ヤキソバパン？」

初めて聞いた単語の意味が分からず、ダクネスは疑問符を浮かべる。この世界に焼きそばパンなんて存在しないのだから当然だ。無いものを用意することなど不可能なのだから、途惑うのも仕方がない。

しかし、無いからといって最初から諦めるような奴にドMを名乗る資格は無い。銀時の注文を拒絶したその瞬間、これまでのダクネスはすべて偽りとなり、結局はその程度の覚悟しか無かったということになる。つまり、自分の信念を貫き通すことも出来ない輩に、背中を預けるわけにはいかないのである。

だからこそ、銀時はダクネスの覚悟を試す。真にドMであることを売りにするというのであれば、この程度の辛さで根を上げてもらっては困る。こちらら魔王討伐を割りと本気で目指しているのだ。どうせドMを仲間にするなら、呪いの装備にも耐えうる人材がいい。

「おらメス豚、早くしねえと昼休みが終わっちゃうじゃねーか！　いつまでもブヒブヒ鳴いてねえで、とつとと昼飯買って来いや！」

「くふうんっ!?!　し、承知したぞ、我が主っ！　ヤキソバパンなる物がどのような食べ物なのかは分からぬが、全速力で買ってくりゅ！」

銀時の意図を知ってかしらさずか、妖しい笑顔を浮かべたダクネスは脱兎の勢いで駆け出していく。パンという手がかりだけを頼りに……。

その様子を呆れた表情で見ていたアクアだったが、ダクネスが去った後に文句を言い出す。

「ちよつと、あれは流石に酷いんじゃない？ お昼なんてとつくに過ぎてるし、そもそも焼きそばパンなんてこの世界に無いのに……」

「はっ！ 実際に見えるかどうかなんざ、正直どうでもいいんだよ。あのメス豚が主の期待に依って従順に行動することにこそ意味があるのさ。その覚悟を示すために、あいつはあいつの意思で焼きそばパンを買いに行った。ただそれだけのことだ」

「単なる無茶振りをかつこよく言ってるんじゃないわよ！ つていうか、焼きそばパンとか微塵も必要無いんですけど!？」

珍しくアクアが正論を言ってくるが、本当に珍しいのでほとんど効果は無かった。それに、ダクネス自身が喜んでいたのも事実なので、非難されるいわれは無い。

とはいっても、一連の出来事が酷かったことだけは間違いない。期せずしておかしなイベントを目撃してしまったカズマは、となりにいる長谷川に心情を吐露する。

「現実つて悲しいなあ。あんな金髪美少女がド変態だなんて……」

「なあに、そう悲観するものでもないぞカズマ君。一見すると頭のおかしな奴等でも、良い所はあるもんだからよ」

「えーそうかなあ？」

「まあ、銀さんと一緒にいればそのうち分かるって……君も変態になるだろうけど」  
 「はあそうですか……って、最後に不穏なセリフが聞こえましたけど!?」

《だいじょーぶだよカズマ君！ 君はもう手遅れだから!》

「(全然だいじょーぶじゃねえっ!!)」

あれ、なにこの状況。いつの間にか自分まで変態扱いされてんですけど。この世界に、冤罪を証明してくれる敏腕弁護士っているんでしょーか？

この時カズマは、自分の周りにまともな人間がいない事を痛感して恐怖した。



武器を買った翌日。とうとう初クエストに挑戦する時が来た。

ちよつとした遠足気分でもより早めに起床した銀時は、へそ丸出しで眠っているアクアに近寄ると、幸せそうなその顔に往復ビンタを食らわせる。

「オラア！ さっさと起きろや駄女神エー！」

「ぶべらっ!?」

女神にあるまじき叫び声を発したアクアは、両頬に感じる痛みを不思議に思いながら目覚めた。

「んにゆく？　なんかほつぺたが痛いんですけどお……」

「なに寝ぼけてんだてめえは？　夢見んのは、寝てる時とギャンブルしてる時だけにとけよな。つーか、つべこべ言わずに早く着替えろ」

起きたばかりで思考が定まらないアクアは、銀時に言われるがままに準備を整える。眠そうに目をこすりながらもそもそもと着替える姿はとても可愛らしいのだが、彼女の内面を知った者には通じない。

「それじゃあ、朝飯食いに行きますよー」

「ふぁーい……」

腹が減っては戦は出来ぬ。ということで、まずは朝食を取ることにする。

部屋を出ると、毎朝ドアの前で待ち構えているめぐみんの姿が無い。彼女と出くわさぬように、いつもより早めに出て来たことが功を奏したようだ。

「ふん。ガキンチョは、おはスタが始まるまでゆっくり寝てな」

銀時は、隣で寝ているだろうめぐみに勝ち誇った顔で語りかける。

何はともあれ、厄介な障害を難なく切り抜けた2人は、ギルドで待ち合わせしていた長谷川と一緒に朝食をがつつり食べる。その後は、トイレで出すものを出して、身も心もスッキリしてからギルドの前に再集結する。

「ちなみに私はトイレなんて行かないわよ？　アークプリーストは不浄なものを出した

りしないんだから」

「虹色のゲロ出しといてなに言ってるんだてめえは。天然自然を司る女神さまが生理現象否定してどーすんだよ。あんまふざけた言い訳してつと、絶対花摘み行かせねえぞ？」

もし大きいほうを出しそうになったら木の棒をケツの穴に……」

「ああっゴメンなさい！ 私、嘘つきました！ 女神にも生理現象はあるので、相応のお心遣いをお願いしますっ！」

アクアの乙女心も、D.Sの銀時にとつてはつまらない冗談でしかなかった。街の外に出たら野グソするしかない世界観なのだから、昔のアイドルみたいな設定を持ち出されても面倒くさいだけなのだ。

「さあて、駄女神の生態について新たな事実が判明したところで、そろそろ行くとしますか」

「おうよ！ 記念すべき最初の冒険へ、いざ出発！」

「えぐっ、えぐっ……私の扱いが日に日に悪化していくよう」

「人聞きの悪いこと言うんじゃねえよ。対等の仲間と認めてるからこそ、楽しくいじつてやってんだろーが」

そう言つて、涙を浮かべているアクアの頭に手を置く。鬼畜な言動からは微塵も伝わってこないが、それでも彼なりに親愛表現をしているつもりなのだ。

「お前の回復魔法には期待してるぜ、アクア」

「……………うんっ！ 怪我をした時はこの私に任せなさいっ！」

その言葉を聞いた瞬間、初めて自分を認めてくれたような気がした。そうか、これが銀時の本心なのか。そう思ったアクアは、思わず嬉しくなって綺麗な笑顔を浮かべる。

確かに彼はアクアの能力を認めて頼りにすると宣言した。それは命を預ける者に対する礼儀であり、信頼の証でもある。彼は戦う者としての、侍としてのけじめをつけたのだ。

ただし、それがすべてではない。これまでのデータを元にアクアの性格を分析した結果、『この手の女は、おだてた方が使えるんじゃない？』という結論に達したことも原因となっている。

「銀さんにとっては、女神ですらキャバ嬢と変わらねえんだろ？ ……ある意味最強だぜ」

銀時をよく知っている長谷川だけは真相を察した。しかし、喜んでいるアクアにわざわざ水を差すなんて野暮なことはいらない。水の女神に水を差すつても、つまらないダジャレみたいでアレだし。

「さあ、行くわよ銀時！ 愚かなカエルどもをぶちのめして、勝利の美酒に酔いしれるのよー！」



「はいはい。カエルでもカエサルでも、なんでもぶちのめしてあげますよー」  
すっかり機嫌が直ったアクアは、銀時の腕を掴んで意気揚々と歩き出す。

しかし、そんな彼女の前に小さな人影が飛び出して、通せんぼするように立ちほだかった。

「ちよーつと待ったあ——っ!!」

「ひゃうっ!? ななな、何事!？」

突然の襲来にビックリしながら相手を確認すると、そこには息を荒げたためぐみんがいた。どうやら、こちらの動向に気づいて追いかけてきたようだ。

「はあっ、はあっ……いつもの時間に出てこないのでもしやと思いましたが、よもや私の隙についてクエストに行こうとするなんて! この薄情者めっ!」

「お前に薄情者呼ばわりされる言われはねえよ。会うたびに『魔法使いは爆乳以外お断り』って言うてんだろーが?」

「ぐぬぬ……確かにそれはそうなのですが、こちらにも引けないワケがあるのですよ!」  
爆乳という単語に一瞬怯んだためぐみんであったが、強靱な精神力でもって持ち直して再び食いがつてくる。実際、彼女には命に関わるようなワケがあり、仲間に入れてくれる可能性がある銀時たちが最後の希望なのだ。

「(あのアクアという人とは強力なシンパシーを感じます。私の読みが正しければ、絶対

に仲間入りを支持してくれるはず。だから、ギントキを説き伏せればどうともなるのです！」

猪突猛進な性格をしているめぐみんは、頼りにならないと思われる長谷川を無視して銀時一点に集中する。

しかし、紅魔族特有の悪癖が彼女の野望を邪魔してしまう。

「一体何なんだよ、そのワケってのは？」

「ふっふっふ……究極の深遠を覗き、魔道の真理を得てしまった私の秘密に触れようなどと、浅はかにもほどがある。取り返しのつかない代償を払いたくなくば、そう易々と禁忌に触れようとは思わないことだ——」

「なあ長谷川さん。カエルのから揚げって美味いの？」

「おう、結構イケルよ。見た目はグロいけど鶏肉みたいな味がすんだぜ？」

「つて、くだらない雑談しながら立ち去らないでもらおうか!？」

いつものように面倒くさい中二病が始まったので無視しようとするが、やたらとすばしっこいめぐみんに回り込まれてしまった。

「はあつ、はあつ！ ちょっと待てと言ったでしょう！」

「もう何なんだよお前。普段は温和な銀さんでも、これ以上邪魔されたら怒っちゃおうよ？ 鼻フックよりもエゲつない究極爆裂剣でオシオキしちゃうよ？」

「な、なんと!? 究極爆裂剣とはなんですか! まさか、この私ですら知らない爆裂魔法の亜種ですかーっ!?」

銀時の嘘を信じて予想以上に食いついてしまうめぐみん。実に素直な子である。しかし、それが悪かった。全速力で走って来た直後に余計な興奮をしたせいで、弱つていた体力に限界が来てしまったのである。

あつダメだ。そう思った時点で既に手遅れだった。お腹から『ぐうぐう』という音が鳴ると同時に足から力が抜けてヘナヘナと座り込んでしまう。

「あうぐ……」

「もしかして、お腹空いてるの?」

「はい……実を言うと、昨日から何も食べていないのです……」

「なんだよそりゃ。その貧相な身体を維持するためにダイエツトしてんのか? そこまでして貧乳ロリキヤラを貫き通すとは見上げた根性だな」

「ち、ちがわい!」

「じゃあ、なんで食わねえんだよ? ガキの頃にたらふく食っておかねえと、爆乳どころかチンチクリンのままだぞ?」

「うぐっ! それは非常に困るのですが、個人的な事情により今は無理なのです……」

「個人的な事情?」

「そう！　すべては我が、爆裂魔法という禁断の力に魅入られた瞬間から始まった！　人智を超えた艱難辛苦の末に究極の力を手に入れた我は、あまりに強くなりすぎたがゆえに世界から疎まれ、孤独であることを定められし存在となった。その過酷なる運命は大なる呪いとなり、ついには人の世との関わりすらも断ち切られて、食料を得ることもままならなくなってしまうのだ」

「えつと。なんかかつこよく言っただけで、それって全部、中二病のせいなんじゃね？」  
この期に及んで中二設定を貫くめぐみんを見て銀時たちは呆れる。どうやら彼女は親に頼らず自立しようとしているようだが、重度の中二病と爆裂魔法に対するこだわりで、のせいで誰からも相手にしてもらえず、生活費がピンチに陥っているらしい。

はつきり言っただけで自業自得であり、傍から見れば愚かな行為でしかない。しかし、めぐみんにとっては命を懸けるほどの価値があるものなのだろう。その覚悟が分かった以上、彼女の意味を否定するつもりはない。いや、それどころか、自分で決めた『守るべきもの』に命を懸けることができる彼女に共感すら覚える。銀時もまた同じタイプの人間だからだ。

「はあ……しゃーねえなあ」

命懸けで中二病を貫き通すめぐみんの姿に戦う者の誇りを見た銀時は考えを改めた。こいつもまた、自分なりの『侍魂』を持っていると感じたのである。たとえそれが中二

病ゆえの過ちだとしても、根性の強さだけは認めざるを得ない。

「(神楽よりかはまともだが、根っこの部分は似てるかもしれないねえな)」

そう思ったら急激に親近感が湧いてきた。長い間、あのエセ中華少女と一つ屋根の下で暮らしてきた彼は、転生して以来、無意識のうちに物足りなさを感じていたのである。

大体、死にそうになるまで意地を張り通すような奴を放っておくわけにはいかない。DＳのクセに面倒見が良い銀時は、サイフから取り出した1万エリスをめぐみに差し出す。

「こいつをやるから、ギルドでなんか食って来いや」

「えっ……これを私にくれるのですか？」

「勘違いすんなよ。この金はお前を爆乳にするための先行投資だ。俺のパーティに入る女魔法使いは必ず爆乳でなければならねえんだからな。俺についてくる覚悟があんなら、ガツガツ食ってポインになれや」

「っ!? そ……それってつまり、私を仲間に入れてくれるってことですかっ!?」

「今回はダメだがな。腹空かしてる奴を連れて行くわけにはいかねえから、今日のところは我慢しとけ」

「は、はいっ、分かりました!」

ついに銀時から認められたためぐみんは、笑顔を浮かべながらお金を受け取る。これで

次回のクエストから彼らと一緒に冒険できる。そして、念願だった爆裂魔法三昧の日々がスタートするのだ。

「ふっふっふー、いよいよ我が爆裂魔法による無敵伝説が始まりますよー!」

「そいつは素敵な話だが、とりあえず無敵伝説を夢見る前にステーキでも食って来いや」「了解です!」ギルドの酒場で特大ステーキをいただきながら、みなさんのご武運をお祈りしています!」

すっかり銀時に懐いてしまったためぐみんは、元氣よくエールを送る。

そんな彼女に見送られつつ出発した一行は、新たに加わった仲間について語り合う。

「つたく、妙なガキンチョコに懐かれちゃったぜ……」

「ははっ! どうやらまた守るべきモンが増えちゃったようだなあ?」

「へっ、それほど立派な話じゃねえよ。近所に住んでるガキの面倒を見るくらい、真つ当な大人なら当然だろうが」

「その当然をできる大人が少ねえから、あんたみてえに人情を守る奴が必要なんだろ?」

なあ、万事屋銀ちゃん?」

「フンツ、おだてたって屁しか出ねえぞ」

ブ——ツ!!

「うわっ!? こいつマジで屁えこきやがった!」

「つていうか、私の方に出不いで欲しいんですけどっ!？」

いきなりガス攻撃を食らって長谷川とアクアが悶絶する。照れ隠しにひり出したオナラは、思いのほか臭かった。

## 第7訓 命懸けで戦ってる奴は大体中二病

めぐみんに見送られながら出発した銀時たちは、初心者向けにランクされている『ジャイアント・トードの討伐クエスト』に挑戦するため街の外へ出かけた。クエストの内容は、体長8mぐらいある巨大なカエルのモンスターを3日間で5匹討伐するというものだ。

目的地は、アクセルから数時間歩いたところにある草原地帯で、なだらかな丘陵が広がる見晴らしの良い場所である。この季節、繁殖期を迎えたジャイアント・トードは、こちら一帯の土中から一斉に出現して近隣の人里にまで被害をもたらすことがある。それを軽減するためにクエストで駆除するわけだ。

「あれがジャイアント・トードか。確かに、ナルトが口寄せしそうなほどでけえな」

銀時は、500mほど離れた場所でゲコゲコ鳴いてる巨大なカエルを観察しながら感想を述べる。見た目は可愛らしくデフォルメされているものの、2m以上ある大きな口で大人の人間ですら丸飲みしてしまう危険なモンスターだ。

「おいおい、なんだよあのデカさは!? ザコ扱いのクセにクロコダインよりもデケエじゃねーか!? 本当に初心者でも倒せんのかアレ!?!」



命懸けの戦闘経験など無きに等しい長谷川は、ジャイアント・トードのデカさにビビりまくる。大きいと言ってもせいぜい人間と同じくらいのサイズだと思っていたのだが、彼の中の常識はここでは通じない。基本的にこの異世界の生態系はおかしくて、ザコモンスターと言えども侮れない強さを持っている。攻撃系の特典を貰っていない転生者にとってはいきなり詰みかねないほど過酷な世界なのだ。それを思えば、何の強みも無い長谷川が恐怖してしまうのも無理はなかった。

「やべえ、なんか足が震えてきた……今ならダイを見捨てようとしたポップの気持ちがよく分かるぜ……」

「ブークスクス！ やっぱりマダオは使えないわねえ。あの程度のザコに怯えるなんて、ちよー情けないんですけど！」

「そう言われてもよお、チャクラも使えねえオツサンにガマ吉を倒せなんて無茶振りもいいところじゃね?」

ネットゲの中では最強のハンターと称えられたこともある彼だが、現実ではただのマダオ。自分よりも遥かにでかいモンスターを前にして恐れるなど言うほうが無理な話だろう。

それでも彼には……いや、ここにいる3人には戦わなければならない理由がある。

「この期に及んでなに弱気なこと言ってるんだよ長谷川さん。俺たちは魔王を倒して元の

世界に帰るんだろ？ 金は無えけど、それ以上に大事なモンがたくさんある、あのふざけた世界によ」

「えっ!? 銀さんはマジで帰れると思ってるの!？」

「そうだな……俺たちの手で魔王を倒せるかどうかなんざ分からねえし、アクアみてえな駄女神がいる以上、神々からの贈り物とやらもどうなるか分かったもんじゃねえ。だがな、少しでも可能性があるなら、こんなところで立ち止まっていらねえだろ？」

「……ああ、銀さんの言う通りだ! ハツの元へ帰れるってんなら、それに賭ける価値はあらかあ! こうなったら、サードインパクトを起こしてでも奥さんと再会しようとした碇ゲンドウみてえな男になってやるぜ!」

「全人類を犠牲にした人妻復縁計画は止めろ」

銀時に鼓舞された長谷川は、人類補完計画を実行しちやいそうなほどの気迫で恐怖心を押さえ込む。そうだ、たとえ使徒が襲い掛かってきたとしても逃げちゃだめだ!

「面倒かけてすまなかつたな銀さん! どんなに敵が強かろうと、俺あやるぜ!」

「その意気だけ長谷川さん! パチンコで一発当てるにも玉を撃たなきや始まらねえ!

その過程で何度も代償を払うことになるだろうが、大いなる苦難を乗り越えた先にこそ、確変という栄光はある!」

「言いたいことは分かるけど、その例えは微妙じゃね?」

確かに銀時の例えはアレだったが、単純な長谷川はノリに任せて奮起する。戦闘だろうとパチンコだろうと、逃げずに挑戦しなければ何も始まらない。ここで立ち上がらなければ、物語後半のイケてるポップにはなれないのだ。

「とりあえず敵は一匹！　3人でかかれれば楽勝で倒せるはずだ！　翼君と岬君ばりのコンビネーションでアイツを蹴散らしてやろうぜ、銀さん！」

「いや待て。いくら相手がザコだろうと、何も考えずに突っ込むのは軽率すぎる。ここはひとまず、冷静に作戦を練るべきだろう」

「それもそうね。頭を使えばあんたたちだけでもどうにかなるだろうし、出来るだけ私ができるように取り計らいなさい？」

男どもが積極的に動いてくれることに気を良くしたアクアは、急に偉そうな態度を取る。これでも一応女神なので、本人はいたって本気である。だがしかし、このパーティのイニシアチブが銀時にあることを忘れてはいけなかった。

「それじゃあ、今回の作戦は『銀さん以外ガンガンいこうぜ』で行きまーす」  
「なぜそーなるっ!?!」

頼もしい様子で仕切っていると思ったら、子供のようになんか身勝手なことを言い出した。無論、アクアを特別扱いする気など微塵も無い。

「ちよつと、あんた以外ってどーいうことよ!?!　なんであんただけ楽しようとしてんの

よ!? 普通は女神である私に気を使うところでしょうっ!?」

「そうだけ銀さん! アクアちゃんの魔法で後方支援を受けながら俺たち2人がアタッカーを務めるのがセオリーだろ?」

「いいや、それは違うな。お前たちは『敵を知り己を知らば百戦危うからず』という言葉を知らねえのか? 俺たちは今日初めて一緒に戦うわけだが、戦慣れしてねえ長谷川さんとアクアの実力は未知数だ。それに加えて、あのカエルの能力も見定めなければならねえとくれば、リーダーである俺がお前らの戦いっぷりを観察するのは合理的と言えるだろ?」

「まあ、そいつは確かに一理あるけどよお。銀さんほどの達人だったら、一緒に戦いながらでもできんじゃないかねーか?」

「そーよ、そーよ! 一人だけズル休みしようだなんて、この私が許さないんだからね!」

実際に戦わされる2人は、当然銀時の説明に納得しない。どう考えても強い力を持った彼がアシストしてくれた方が効率良く戦えるからだが、銀時の思惑は2人にとって想像の範囲外にあるものだった。

「あーもう、ギャーギャーうっせーな! とにかく今日は戦わねえつつてんだろ!」

「なんでだよ銀さん! ついさつきまでやる気満々だったじゃねーか?」

「ああそうだ、確かに俺は殺る気満々でここまで来た。だがな、洞爺湖こいを手にした途端に  
気づいちまったんだよ、『カエルの体液で生臭くなった木刀なんて持ち歩いてたら、周り  
の人たちから変な目で見られちゃうかも』ってな！」

「お前は汗の臭いを気にする夏場の女子高生かよっ!? つーか、色んな悪臭放ってる  
オッサンが、年頃の女子みてーに繊細なこと言ってるじゃねえーよ! 認めたくはない  
が、数十年かけて熟成された体臭から逃れる術は無えんだよ!」

「あつ、なに言ってるんだてめえ!? 俺はまだ加齢臭かうれいじゅうなんざ放つちやいねえぞ!? キヤバ  
嬢の明美ちゃんだって『銀さんはフローラルミントの匂いがするね!』って言ってたモ  
ンねー!」

「ウソつけえー!? 万年金欠のてめえなんざ貧乏臭ひんぱくじゅうえマダオ臭おしかしねーよ! つー  
か、明美ちゃんって誰!」

理由を聞いてみたらとつてもチャライ話だった。辺りに漂うカエル臭で気分を害し  
た彼は、自分の武器が生臭くなってしまいうリスクによく気づいたのだ。

「つーわけで、お前らがなんて言おうと洞爺湖こいは絶対え使わねえ! もしこいつが妖し  
い粘液でヌメヌメになったらどーなると思ってるんだ! それを見た街の奴らに『やだあ  
の人! アレを使って一体どんな変態プレイしてるのよ?』とか噂うわさされたら、主人公の  
面子丸つぶれじゃねーか!」

「なんてくだらねーこと気にしてんの!? 生臭い棒からそこまで想像の翼を広げるエロい奴なんて早々いねえよ! つーか、前の世界では臭いなんて全然気にしちゃいなかったじゃねーか!」

長谷川は、銀時と口喧嘩しながら過去の出来事を思い返す。彼があの木刀を使って戦っている姿を何度も見たが、血だらけの人間だろうと腐った猫の化け物だろうと平気で殴りまくっていた。それを今更気にする理由とは一体なんなのだろうか?

「大体さあ、臭いがついたって洗えばいいじゃない」

「バツキヤロウ! 木に染み付いた悪臭はファ○リーズでも消せねえくらいしつこいんだよ! しかもこいつは二度と手に入らねえ貴重品なんだぜ?」

「はあ? そんな棒切れのどこが貴重品なのよ?」

「こいつは通販で別の星からお取り寄せした特注品だからだよ! この世界にや電話もパソコンも無えんだから、二度と購入できねえだろーが?」

「つ、通販っ!?!」

あまりに意外な言葉に驚愕する。

実を言うと、銀時が愛用している木刀は地球外の店から通信販売で購入している量産品である。それでも普通の木刀より遥かに頑丈で、この世界では作れないオーパーツ的な代物だった。しかも、ここでは通信販売も不可能なので、同じものを新たに入手する

ことが不可能となってしまった。そのことに思い至らずいつもの調子でここまで来た銀時は、いざ戦闘という段階になってようやく気づき、今やオンリーワンとなってしまった洞爺湖の損耗を危惧したのである。

「つまり、この洞爺湖は伝説の剣に匹敵するレアアイテムと化したのだ！ そんなシロモンをカエルの体液でヌルヌルのズルズルにさせてたまるかってんだコンチクショウ！」

「だったら別の武器を買っとけよ!? 銅の剣も買わねえでこんぼうでいいとかケチなこと言つてやがるからこんな目に遭うんだろ!? ギルドの人だって、打撃に強いカエルに木刀なんて通用しないとか言つてたのによお！」

「うっせえぞグラサン野郎!! 過ぎたことにいちいち文句言つてくんじゃねえよっ! てめえらみてえな下っ端はリーダーの言うこと聞いてガンガンいつときやいいんだよっ!!」

「うきや——っ?!?」

「何て最悪なリーダーなんだああああ?!?」

業を煮やした銀時は、詰め寄る2人の肩を突き飛ばして後ろ向きにすると、無防備なその尻に強烈な蹴りを入れた。

「オラア! あのカエルをぶっ倒せなかつたら、洞爺湖<sup>こいっ</sup>をてめえらのケツ穴にぶち込む

「ぜえ!?!」

「それマジで変態プレイになっちゃうから止めてっ!?!」

無茶苦茶なことを言う銀時にツツコミを入れるが、長谷川とアクアではジャイアンタ  
イプの彼を止めることはできない。それに、ここまでコケにされて結果を出せないのも  
何かムカつく。

「こうなりや仕方ねえ! 俺たち2人の実力をあいつに見せ付けてやろうぜアクアちゃ  
ん!」

「ええそうね! 神々しくも凄まじい女神の一撃を見れば、流石の銀時もこれまでの非  
礼を心の底から悔いるはずだわ!」

怒りに燃えた2人は気合を入れて駆け出していく。そんな彼らに反応したのか、標的  
としていたジャイアント・トードもこちらに向かって飛び跳ねてきた。

「俺が奴を引きつけるから、アクアちゃんは別の方向から攻撃してくれ!」  
「分かったわ!」

初めての戦闘にしては見事な連携を見せる。アクアの中身もマダオ(まるでダメな  
女)なので意外に息が合うのだ。しかし、マダオ2人が協力したところで結果がプラス  
になる可能性はほとんど無い。実際、引きつけるとか言っていた長谷川が一瞬でやられ  
てしまう。



「ぐはあああああ——っ!!?」

不用意に近寄った長谷川がムチのように伸びてきた舌でぶっ飛ばされてしまった。このジヤイアント・トードは後方にいるアクアの方が美味しそうだと思い、明らかに不味そうな彼を排除したのだ。

カエルにすら見向きもされず、もろに攻撃を受けた長谷川は、アクアの近くまで吹っ飛んできた。派手に土煙を上げながら着地して、持っていた剣とグラサンを辺りに撒き散らす。

「長谷川ああああっ?!」

やられた仲間を気遣ってアクアが駆け寄る。そして、草原に落ちているグラサンを手に取り、彼の無念を晴らす決意を固める。

「長谷川……あなたの仇は私が取るわ!」

「それ長谷川じゃなくてグラサンーっ?!? つーか、俺はまだ死んでねーよっ!」

うつ伏せに倒れた長谷川がツッコミを入れる。しかし、不謹慎なアクアの発言も間違いとは言い切れない状態にある。グラサンが本体扱いとなっている今の彼は、人間というよりアンデッドに近い存在となっているのだ。しかも、グラサンを外してしまうと、こめっこぐらいの幼女と喧嘩しても勝てないほどに弱体化してしまうため、ダメージを受けた状態では起き上がることすら出来なかった。

「すまねえアクアちゃん！ 今の攻撃で動けなくなっちゃった！」

「まったく世話がかかるわねえ！ 私の回復魔法で華麗に治してあげるから待つてなさいー！」

アクアは、唯一自慢できる回復魔法の出番が来たと張り切って使おうとする。しかし、彼女を食べたがっているジャイアント・トードがその隙を与えてくれない。

「ダメだ！ 回復する前にヤツが来ちまう！ ここは俺に構わず、アクアちゃんだけであいつを倒してくれっ！」

「あんたに言われるまでもないわ！ 私は私のお金を稼ぐためにあいつを倒す！」

「そこは嘘でも仲間のためと言ってくんない!？」

自分の目的を優先してあっさり長谷川の回復を諦めたアクアは、持っていたグラサンを放り捨てると迫り来るジャイアント・トードに向かって走り出す。今こそ、怒れる女神の一撃をお見舞いする時だ！

「行けえアクアちゃん！ 今こそ君の小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やせ！ 女神である君ならアテナと同等以上の力を発揮出来るかもしれねえーっ!!」

「うおおおおお——っ！ 燃え上がれっ！ 私の小宇宙<sup>コスモ</sup>!!」

長谷川の声援に触発されて、思わず自分の中のナニかを呼び覚まそうとするアクア。その際に発せられた神気に警戒したのか、彼女に向かって飛び跳ねていたジャイアン

ト・トードの動きが止まる。

「これこそが万物の頂点に君臨せし女神の力！ 身の程もわきまえず私に牙を剥いた愚かなカエルよ！ 比類なき神の小宇宙コスモに震えながら滅びなさい！」

アクアが威勢よく啖呵を切ると握り締めた右手の拳が光り輝く。彼女の中の女神的な聖なるパワーを攻撃力に転化したその技は……

「ゴッド流星拳——っ!!」

「パクリ方が雑だなあオイッ!」

聖闘士星矢のノリで攻撃したアクアは、有名な主人公の技を堂々とパクった。

「ゴッド流星拳とは、女神の怒りを小宇宙コスモに乗せて放つ必殺の拳！ 相手は死ぬ！」

何かソレっぽいことを言いながら突進を続ける。説明内容は色々アレだが、神々しい光りを放っている拳にはかなりの威力がありそうだ。

「おおっ！ これはいけるか!」

長谷川が期待を込めた眼差しを送る中、アクアのゴッド流星拳がジャイアント・トードの白い腹に直撃する。しかし、見た目に反してダメージはほとんど与えられなかった。派手なエフェクトだったクセに腹の肉がボヨヨンと震えただけで、カエル野郎は平気な顔をしている。その反対に、アクアの方は愛想笑いを浮かべながら言い訳を始める。

「12星座も覚えられない私に小宇宙コスモなんて使えないと思うの」

カエルにそんなことを言ったところでどうにもならず、打つ手を失ったアクアは為す術もなくジャイアント・トードに食べられてしまう。

「きやびっ!!」

「食われたあああああ——っ!!? ヒロイン的なアクアちゃんが、進撃の巨人のモブ的な食われ方をしたあああああ——っ!!?」

ヒロイン（笑）に襲い掛かった悲劇を目の当たりにして長谷川が叫ぶ。幸運と知力が低い彼女は、自らの行いで災難を呼び込んでしまうのだった。

一方その頃、彼らの無様なやられっぷりを観察していた銀時は大きなため息をついていた。

「つたく、使えねえとは予想してたがここまで酷えとはな……。っーか、あの駄女神マジでバカだぜ! マンガの技を実戦で使おうとするなんて中二病でもやらねえよ!」

あっさりとかエルにやられたアクアの醜態をあざ笑う。ここに来るまで銀時たちをバカにしながら女神アピールをしていたクセにこの体たらくである。

「仕方ねえ。カエルのクソになる前に助けて貸しを作っとくとするか!」

こうなることを予想していた銀時は焦ることなく動き出す。

DSの彼とて、何の考えも無しに彼らだけで戦わせたわけではない。事前にギルドの

職員から情報を仕入れて即死するような状況にはならないと承知していたため、アクアたちに腕試しをやらせたのだ。もちろん本音は木刀を汚したくなかったからなのだが、こうなったら彼自身が戦うより他はない。

「ギルドの姉ちゃんが言ってた通り、打撃は効きにくいようだな」

走り出した銀時は、受付嬢に教えてもらった情報を思い出す。分厚い脂肪に包まれたジャイアント・トードの身体は打撃に強い反面、金属製の刃物で急所の頭を切り裂けば簡単に倒せるらしい。

「あの程度なら洞爺湖こいっほで何とかなるだろうが……」

銀時は、腰に差した木刀に手を当てながらつぶやく。この洞爺湖には話の展開次第でやたらと頑丈になるという主人公補正があり、銀時の腕を持ってすれば、鋼を砕き岩をも切り裂くことが出来る。それに加えて彼自身のステータスも非常に高いので、通常の打撃攻撃でもジャイアント・トードを倒すことは可能である。

しかし、これを使ってしまうと生臭い悪臭が染み付いてしまう。元の世界なら汚れるも新しいものに交換すれば良かったが、ここではその手が使えない。そうになると、汚れる度にいちいち洗浄しなければならなくなる。

「主人公の俺様が木刀の臭い落としなんて面倒くせえことやつてられつかあ——  
——っ！」

こういう時だけ素直な銀時は本音をぶっちゃける。マンガやアニメではスルーされがちだが、武器の手入れはものすごくメンドイのだ。

その手を回避するには、あの手を使うしかない。

「長谷川さん、ちよつくらコイツを借りてくぜ！」

「つて、俺の剣を使うんかいっ!？」

長谷川のツツコミを無視して草原に落ちているショートソードを拾っていく。値崩れ品だけあつて粗末な作りだが、上手く使えば十分通用するはずだ。

「よっしゃあーっ！ 景気付けにあの技で決めてやるぜえーっ！」

何かを思いついた銀時はニヤリと笑うと、順手で持っていたショートソードを逆手に構えた。その姿を見た長谷川は、彼がなにをしようとしているのかすぐに察する。

「あの腰を低く捻る独特の構えはまさか!？」

「そう、これは『ダイの大冒険』連載当時の小中学生男子に傘や箒でよく真似されたあの必殺技……アバンスストラッシュだああああ——っ!!!」

そう叫ぶと同時に跳躍した銀時は、アクアを捕食するのに夢中で動きを止めているジャイアント・トードの頭頂部に強烈な一撃をお見舞いする。つい先ほど、アクアの中二行動をバカにしていたクセに自分でもやってしまう辺り、彼も十分に中二病を発症している。

ただし、彼の場合は実力も伴っており、ジャイアント・トードを一撃で仕留めて見せた。流石は武闘派主人公といったところである。

「よっしやあ——っ！ 会心の一撃入りましたあ！」

この異世界での初勝利に喜ぶ銀時だったが、素直に喜んではいられなかった。かつこつけた代償として、ショートソードの刃が根本からポッキリと折れてしまったのである。銀時の腕力とカエルの防御力が真つ向からぶつかった結果、粗悪品の剣が耐えられないほどの負荷がかかってしまったのだ。

刃を失って柄だけになってしまったショートソードを見た銀時は、適当なことを言つてその事実を誤魔化そうとする。

「どうやらビームサーベルのエネルギーが切れちまったようだな」

「嘘つけえええええ——っ!? もはやゴミと化してるそのの一体どこがビームサーベル!? つーか、お前自身で壊しといて、なんつー言い訳してんだよ! それ買うのに結構苦労したんだからね! 給料2日分で手に入れた王者の剣なんだからねっ!」

「お前こそ嘘ついてんじゃねえよ! 始めの街に、んなもん売ってるわけねーだろ!

その証拠に、俺の放つドラゴニックオーラに耐えきれなかったじゃねーか! オリハルコン製じゃなかったじゃねーか!」

「そつちだつて嘘ついてんじゃねえよ! お前が放つてんはドラゴニックオーラじゃな

くてドSチックオーラだろーが！ 竜の騎士つつーかドSの奇人だろーが！」

バカな男たちはバカな言葉で不毛なケンカをする。とりあえず命の危機は去ったものの、パーティが分裂の危機に瀕してしまった。

そんなバカ騒ぎに引き寄せられたのか、彼らの元に第三者が現れる。

「おーい！ 長谷川さーん！ 銀さーん！」

「ん？ この声はカズマ君か？」

声に気づいた長谷川が辺りを見回すと、こちらに向かって走ってくるカズマとエリザベスの姿が見えた。

「はあ、はあ……ようやく見つけた……」

〈面倒かけんじやねえよ、天パ野郎〉

「ああつ!? 勝手に来といて、なにケンカ売ってんだテメエ!? つーか、何でお前らがここにいんだよ?」

「いやあ、実は俺もなんでもかなーって思ってるんだけど……」

微妙に疲れた表情をしたカズマは、銀時の質問に曖昧な返事をしながら、これまでの経緯を説明する。

それは桂の独創的な思い付きから始まった。



数日前。岩建設のバイトをしていたカズマは、休憩時間を利用して桂に相談を持ちかけた。クエストを始めるという銀時たちに触発されて、自分も早くやってみたいとお願ひしたのだ。

その結果、あまりに予想外な提案が返ってきた。

『なるほどな……いよいよ冒険を行う気になったか』

『はい！ よろしくたのんます！』

『相分かった。ならば君には、攘夷志士養成訓練を受けてもらおう！』

『なぜそうなるっ!?!』

クエストに行こうと言ったのに攘夷志士養成訓練とは一体どういうことなのか。その答えを聞くと、桂は真面目な顔で説明しだした。

『クエストを受けた攘夷志士が戦うのは、狡猾な人間や凶悪なモンスターだけではない。突如として牙を剥いてくる大自然の脅威。野外活動を続ける上で肉体に襲い掛かる様々な障害。そして、過酷な状況によって徐々に疲弊していく精神……。攘夷志士として生きていくには、それらに打ち勝てるだけの生存能力を身につけなければならぬのだ。そのために攘夷志士養成訓練を行うわけだ。新緑に萌えるフィールドを散策して美しい自然を堪能し、現地で集めた旬の食材を食べて季節の変化を舌でも味わう。そうして攘夷志士に必要なサバイバル技能を養うのだよ！』

『いやいや、それってまったく攘夷志士と関係ないよね!!』 後半からただのピクニックになつてるよね!』 つーか、適当なこと言つてアウトドア楽しもうとしてるだけだろソレ!? ごく普通に遊びに行きたかっただけだろソレ!』

カズマのツツコミ通り、桂の言う訓練とは、よ〇この濱口さんがテレビでやってるよな無人島生活的なノリのヤツだった。もっと正確に言うと、面識の浅いカズマとの仲を深めるためにレクリエーションを計画したのだ。何よりも仲間との絆を重んじる桂ならではの回りくどい配慮であつた。

何はともあれ、世話になつてゐる桂の提案を飲むことにしたカズマは、攘夷志士養成訓練という名のピクニックに参加した。場所は銀時たちが来る予定の近くに決めて、カエルの肉を入手する合間に彼らの活躍を見学しようということになつた。

カズマとエリザベスは近場の森林で野草や山菜を集め、しばらくしてから肉を担当する桂とこの辺りで合流するはずだった。しかし、めぐみんと遭遇して出発が遅れた銀時たちがやって来る間に行方不明となつてしまつていた。

「桂さんは、童心に返つて銀さんたちと一緒にカエル取りするとか言つてたんだけど……」

そう言つて銀時が倒したジャイアント・トードを見たカズマは顔を引きつらせた。

なにこのカエル。想像以上にデカいんですけど。童心に返って取れる程度の獲物じゃないんですけど。それに、口から出てる2本のアレはなんだろう。そこはかたなくアクアの足みたいに見えるんだけど、気のせいかなあ？

「いや気のせいじゃねえ!？」

見覚えのある青いブーツで確信を持ったカズマは驚きの声を上げる。

「えっ、ウソでしょ!？ あの駄女神やられちゃったの!？ 神さまのクセにカエルのエサになっちゃったの!？」

「ああそーだよ。あの駄女神は『燃え上がれっ！ 私の小宇宙<sup>コスモ</sup>！』とか言いながらあつと  
いう間にヤラれちゃったよ」

「色んな意味でイタすぎるっ!？」

おバカなアクアの残念な顛末を聞いてカズマは悲しむ。ああ……これまで女神に抱いていた神聖なイメージは、あの駄女神によって木っ端微塵に弾け飛んだよ。

《ねえ、カズマ。アクアのヤツを助けてやってよ。あまりに情けなくて流石のボクも涙を禁じえないからっ!》

「(ああ、分かってるよ。せめてこの場は優しくしてやろう)」

同胞の惨劇を見て涙目になったノルンに優しく微笑む。たとえ性格が悪くてウザイ女でも、カエルに食われてお尻を丸出しにしている姿は見るに耐えない。

アクアを助けるために彼女の足を掴んだカズマは、丸見えになっているお尻を見ないようにながら引きずり出す。

《とか、地の文で説明してるけど、本当はバッチリ見たでしょ?》

「(だいじょーぶだよノルンちゃん、心の中でモザイクかけといたから)」  
《なるほど、ダメじゃん!》

ジト目で睨んでくるノルンに対して適当に誤魔化すカズマ。助けてやってるんだからこのくらの役得はあってもいいだろう。本人も気にしてないみたいだし。というか、カエルに食われたシヨックでそれどころじゃないみたいだし。

「おーい、大丈夫かアクア?」 怪我は無いみたいだけど、どつか痛むか?」  
念のために一通り確認したが、カエルの唾液でヌルヌルのズルズルになっている以外に問題はなさそうだ。

しかし、彼女の心の方に大きな問題が起きていた。ジャイアント・トードに食われた恐怖と屈辱によってアクアのハートはズタズタに傷つきまくっていたのである。

そんな時にカズマから優しくされたため、彼に対する好感度が爆上がりしてしまう。

「うわあーんっ! ありがとう! ありがとう、カズマアアアアッ!」

「おわっ!! こっち来んなっ!!」

感極まったアクアは、ヌルヌル状態でカズマに抱きつこうとする。まずい、このまま

では一張羅のジャージが汚されてしまう。いくら相手が美少女とはいえ、生臭いローションを全身に塗りたくつたバカ女なんか抱かれたくはない。

もちろん、その気持ちはノルンも同じで、マスターのカズマと見事にシンクロする。ばつちいカエルの唾液なんかで仮初の身体であるオサレメガネを汚されては堪らない。

《この駄女神があ、汚い身体でボクの依り代に近づくんじゃねええええ——つ!!》  
「ぶぎゅらっ!!」

アクアがカズマに触れようとした直前に、ノルンの必殺パンチ『パルマファイオキーナ』が発動して、無様に泣いている青髪女の右頬にクリーンヒットした。分霊の彼女は実体を持たないが、天界にいる本体からエネルギーを貰うことで物理的な干渉が出来るようになるのだ。

不意に見えない攻撃を食らって吹っ飛んだアクアは、事態を飲み込めずに疑問符を浮かべる。

「いったあ——つ!! なぜなにどーして!?! なんで私、吹っ飛ばされたの!?! つていうか、ほっぺがすつごい痛いんですけどっ! マジパンチで殴られたかのように痛いんですけどっ!」

「ああ、それね。お前にムカついたどっかの誰かがスタンド攻撃でもしかけてきたんじゃないね?」

「はあ？ 高潔な女神として人々から崇められる私にそんな罰当たりなこと考えるヤツなんかいるわけじゃないじゃない！ そもそも、そんなこと出来るのはチート能力を持った転生者しか……って、まさかアンタがやったんじゃないでしょーね!？」

「はあ？ 何で俺がそんなことしなきゃならねえんだよ？ 大体、証拠も無いじゃないか?」

「くうう、悔しいっ！ どんな特典貰ったかこの私にも分からないなんてえ〜！」

口喧嘩に負けたアクアは地団駄を踏んで悔しがる。現在の彼女は天界とのつながりを絶たれたことで神としての能力が弱体化しており、ステルス能力を強化しているノルの姿や声を感じることが出来ないのだ。

それに加えて、ノルングラスの存在自体を知らないという事情もあった。

「(アクアはマジでお前のこと知らないんだな?)」

《うんそうだよ。ボクが入荷されたのは、アイツがこの世界に連れて行かれた後だからね》

「(なるほど、お前は新製品だったわけか。そういえば、ノルのヤツだけカタログの作りが違ったから、やたらと目に付いたんだよな)」

ノルンの話を聞いたカズマは天界でのやり取りを思い出した。あの時、天使から渡されたカタログの中の一枚だけがアニメ好きを刺激する可愛いイラスト付きで妙に親近

感が湧いたのを覚えている。それがノルングラスであり、彼が興味を引くようにわざとそうしていたのだが、その辺の経緯は後に明かすことにする。

とにもかくにも、アクアの救助(?)を終えたカズマは本題に戻ることにした。

「ところで銀さん、桂さんを見かけなかった? こっちの方に来てるはずんだけど……」

「いんや。あのバカヅラは一度も見てねえぞ?」

尋ねられた銀時は鼻をほじりながら受け答える。態度には問題ありだが嘘はついていない。彼らが来たときには人っ子一人見当たらなかった。

そうなると、桂はどこへ行ってしまったのだろうか?

「(おいノルン。桂さんがここにいるつてのは本当だよな?)」

《モチロン本当だよ。君にだけはウソなんてつかないモン》

過去と現在を見通すことが出来るノルンは、既に桂の居場所を知っている。間違いない。彼はここに来ており、今も至近距離にいる。しかし、秘密にしておいた方が面白いことになると思つたのでカズマにも内緒にしていた。ウソはつかないけど、すべてを話すわけでもない。お年頃の乙女には秘密が多いのだ。

「(ノルえもーん! そろそろ答えを教えてくれよ!)」

《もう、しよーがないなあカズ太君は。でも、教えてあげないよーん。すぐに答えは分か

るから!」

そう言つて可愛らしくウインクするノルン。まったく、ロリ女神は最高だぜ……キュートな相棒を見てアブナイ感想を抱いたカズマが禁断の扉を開きかけたその時、彼女が言つていた瞬間がやって来た。桂を探してキヨロキヨロと見回していると、まるでタイミングを計つていたかのように探し人の声が聞こえてきたのである。

「安心しろ、俺ならここにいますぞ!」

「!!!?!!!!」

〈その声は桂さん!〉

急に発せられた声に驚いた一行は、すぐさま声の聞こえてきた方向に顔を向ける。しかしそこに桂はおらず、銀時が倒したジャイアント・トードの巨体があるだけだった。いや違う! パックリ開いた大きな口から『人の手』が出て来ているではないか!

「!!!うぎやああああああああ———っ!!?!!!!」

まるでホラー映画のような光景に皆で恐怖する。そりゃあ、倒したモンスターの口から粘液まみれの手が出てきたら誰でもビビるだろう。

しかし、驚くだけ無駄だった。この手の主は、彼らが探していたロン毛のバカ野郎なのだから。

「よお銀時! 初めてのクエストは楽しめてるかい?」



「よお銀時じゃねえよカス!! どっから出てきやがんだてめえは!! 普通にグロくてビビっただろーが!? つーか、勇者王のクセにカエルごときにやられてたのかよ!!」

相変わらず立派な職業にそぐわない行動ばかりしている桂にツツコミを入れる。ヌルヌルの身体でカエルの中から這い出てきた本人はまったく気にしていないようだが、彼のような存在が許されるこの異世界のデタラメさを改めて痛感してしまう。

そもそも、こいつの職業は本当にあの勇者王なのだろうか？

「マジでガオガイガーとか出されてもそれはそれで困るけどよお、ガイガーくらいは呼べねえのかよ勇者王?」

「残念ながらスキルポイントが足りなくてな。今はまだ呼べんのだ」

「えっウソ、マジで呼べるの!? ファイナルフュージョン承認できんの!? ヘル・アンド・ヘブン放てちゃうのお——っ!」

衝撃の事実には銀時は驚く。これまでは名前だけのパロディだと思っていたのだが、スキル自体は本当にあるらしい。実際に桂の冒険者カードにはガオガイガー関連のスキルが記載されており、スキルポイントさえあればゴルディオオンハンマーですべての物質を光に変えることも可能である。もはやチートを超えて世界観すら破壊してしまう……ある意味、魔王よりも危険な存在となってしまう。

しかし、世界の修正力とやらが働いたのか、破壊神の降臨は今のところ実現できない

でいる。バカな桂は、魔王討伐そっちのけで貴重なスキルポイントを無駄遣いしまくっていたからだ。

「今思えば、溜めていたポイントをすべて使って宴会芸スキルを極めてしまったのが痛かったなあ!」

「何やってんだお前はああああ——つ?! 確かに痛えよ! 痛すぎるよ! 宴会芸にうつつを抜かしたお前のせいで世界平和が遠のいてるよ! つーか、宴会芸スキルって何なんだよ?! 飲み会以外のどこで使えんだよソレ?! モンスターに披露したら仲良く盛り上げられちゃうんですかあ!?!」

本当にこのバカは何をやっているのだろうか。真相を聞いた皆は呆れた表情になる。巨大ロボが呼べるなら魔王なんて瞬殺なのに、僕らの希望は宴会芸スキルに変わってしまった……。

いざ聞いてみたら何ともマヌケな真相だったが、攘夷志士のリーダーを務めていたほどの男が何の考えも無しにバカな行動しているわけではなかった。

「確かに、俺がカツガイガーになれば魔王討伐など造作も無いだろう。だが、世界中を見て周った俺は、それではいけないと悟った。あまりに理不尽な自然の理こそが乗り越えるべき敵であり、この異世界に生きる人々は自らの手で戦う力を持たねば未来を切り開いていけないのだ。その事実気づいた時、俺は神をも超える力を入れることを止

めた。たとえ俺一人が強くなっても、すべての人を救えない。たとえ魔王を討伐しても、脅威が消え去るわけではない。文明・文化を成長させて、彼らだけで災厄から身を守る術を身につけなければ、結局何も変わらない。ゆえに、その方法を教え導くことが俺たち転生者の役目であると、この異世界の民を本当の意味で救うことになる、そう思ったのだ」

桂は聞いてもいないのに自論を主張し始めた。カエルの唾液でヌルヌルのクセに内容はとてもまともで、イラツとしながらもつい納得してしまう。

実際、凶暴な野生モンスターに襲われたり理不尽な災害に巻き込まれて発生する死者数は、魔王軍との戦争で発生するそれと比較しても大差ないほど多いので、桂の考え方は理にかなっている部分が多い。

そもそも、この異世界では魔王として自然災害のようなものだから、一匹倒せばそれで解決というわけではないのだ。繰り返して来る病魔を抑えるために、転生者という強烈な抗生物質をいちいち投入しては、この異世界を担当する女神がエゲつない副作用でぶっ倒れてしまうかもしれないのだ。そのような悲劇の連鎖を回避するには、転生者の力に頼ることなく、この異世界の力だけで魔王を退けられるようになる必要がある。

「そして俺は、将ちゃんと再会した時に決心したのだ。俺たちの手でこの異世界に変革

をもたらすとな」

この手の情報戦を得意としている桂は、2ヶ月に及ぶ調査によって自分がやるべきことを理解した。そして、同じ答えを導き出して既に行動を始めていた茂茂と再会してからは、彼の理想に賛同して精力的に活動し、現在では国政にすら影響を与えるほどの勢力になっていく。バカなことをしつつも自分にも出来る仕事を見事にこなしてみせる辺りは流石と言わざるを得ない。

だがしかし、このまま良い話で終わらないのがツラクオリティである。

「でもさあ、せつかく異世界に来たんだから少しはエンジョイしたいじゃん？ だから俺は、酔っ払った勢いで宴会芸スキルを極めちゃったんだよねー！」

「結局、酒で失敗しただけじゃねえーかああああ——つ!?!」

何だかんだとそれっぽいいことを言っていたものの、結局は自分のやりたいことをやっているだけであつた。しかも、そのマヌケな話にアクアまで同調してしまったから性質が悪い。

「流石は桂ね！ みんなを笑顔にするために宴会芸スキルを極めた癒し系ヒロインである私と同じ選択をするなんて、とても素晴らしいことよ！ その慈愛に満ちた精神を誇りに思いなさい？」

「な、なんと！ アクア殿も同じ結論に至っていたとは……やはり俺の考えは間違いで

はなかつたようだ！」

「いや、思いつきり間違ってるよ！ お前らそろって宴会好きのロクデナシだよっ！」

救いようの無いバカどもにツツコミを入れるが、彼ら自身に有用なスキルを取得する意思が無いのであればどうにもならない。これ以上ガオガイガーの件で論争しても今は無意味だろう。

「それにしたって、桂さんの実力ならこんなヤツ楽勝なんじゃないの？」

桂の冒険者カードを見せてもらったことのあるカズマが疑問を述べる。勇者王となった彼の能力は文字通り世界最強であり、魔王軍の幹部クラスですら圧倒する力がある。カズマの言うようにジャイアント・トード程度なら素手でも十分に倒せる力を持っていた。

しかし、彼には特殊な事情があつて全力を發揮できる機会はほとんど無かつた。数値化できないほどにおかしな強運を持っているせいで、あらゆる状況を『面白い方向』へ捻じ曲げてしまうという世界規模の副作用が発生しているからだ。こうなつてしまつたのは、おバカな桂の性格が反映された結果なのだが、そのせいで彼の行動は大体残念な展開になり、今回もそうなつた。

「カズマ君の言う通り、万全の体制ならばカエルごときに後れは取らん。しかし、あの時の俺は、とある事情によって窮地に立たされていたのだ……」

ヌルヌルの状態のクセにやたらと男前の表情をした桂は、唐突に回想を始めた。

銀時たちがこの場に到着する少し前。先に来ていた桂は急な腹痛に襲われていた。

『ぐおおうっ!? まさかな……エリザベスとやりあつた牛乳一気飲み対決で無理したツケがこんな時に来ようとは……。俺としたことが迂闊であつた!』

「いい年こいてなにやつてんの!?! いつまで小学校の給食時間を楽しんでんだお前らは! 頼むから大人になつてくれよ! せめて出社中にヤンジャン読むヤングサラリーマンぐらいにはなつてくれよ!」

あまりにふざけた理由で窮地に陥つた桂は、とにかく楽になるために腹痛の元となつているブツを排出することにした。こうなつては場所を選んでいる暇はないので、その場で用を足すことにする。

『ふう……草原のど真ん中で野グソをするのも開放的で気持ちがいいものだな』

「おーいつ!? 汚ねえ野グソを爽やかに語つてんじゃねーよ!? つーか、わざわざ回想シーンでこんなモン見せんなボケツ!!」

あまりにお見苦しい光景で申し訳ないが、これでも必要なシーンなのでそのまま続ける。なぜなら、無防備なこの状態の時にジャイアント・トードが現れたからだ。

近づいてくる震動で危機感を煽られた桂は、無駄と知りながらも説得を試みる。

「あの、すみません。ただ今、取り込み中なので、用事があるなら後にしてもらえませんか？」

なるべく丁寧に話しかけたが、知能の無いカエルには無意味だった。懸命な説得も空しく、桂はパクリと食われてしまった。ケツを丸出しにしたまま。

『うおお——っ!? まだ尻を拭いてないでしょーがああああ——っ!?』

「つて、ウソでしょねえ!? 私も同じカエルに食べられちゃったんですけど!? お尻を拭いてないアンタの後に食べられちゃったんですけど!?」

「うわバツチー! こいつエンガチヨしようぜ!」

「いやああああ——っ!? お願いだからエンガチヨ止めてっ!? これ以上、女神の私を貶めないでええええ——っ!?」

知りたくなかった事実を聞いて涙目になったアクアが嫌々と首を振る。カエルの唾液だけでも参っていたのに更に更に汚されてしまった気がする。

なんともふざけた内容だったが、とにかくこれが事の顛末だった。最強の勇者王である桂も、う〇こをしている時に襲われてはどうにもならない。そして、お尻を拭き損ねた彼の後に食べられたアクアが新たなトラウマを植えつけられてしまったこともどうにもならない。

「えぐつ、えぐつ……。汚されちゃった……。清らかだった私の身体は、唾液とう〇こで汚されちゃったわ……」

「アクア殿には申し訳ないが、これは事実だ。たとえどんなに辛くとも、真摯に受け止めて自分の足で乗り越えていくしかないだろう」

「なに人事みてえに言つてんだてめえは！ う〇この途中で食われたバカが、かつこつけんじやねえよカス！」

「ああそうだ。尻を拭く間も無く食われた俺は、確にかつこ悪かつた。お前の言う通り、ケツを丸出しにした無様な敗北者と成り下がってしまった。それでも、顔を上げて立ち上がらなければならぬ。たとえ生き恥を晒そうとも、必死に足掻いて前に進まなければならぬ。己の理想を叶えるために。友との約束を果たすために。こんなところで終わるわけにはいかないと、俺は逃げずに前へと進んだ」

自分の非を素直に受け入れた桂は、カエルの中で抵抗していた様子を冷静に語る。状況はすぐくかつこ悪いのに、言い方はムカツとするほどかつこ良かった。

「幸いなことに、俺の実力をもつてすれば自力で抜け出すことも可能だったからな。のどちんこの辺りでパンツを穿き直して脱出する用意を済ませていたのだ」

「じゃあ、なんでさつさと出てこなかつたんだよ？」

「そこには予想もしてなかつた罠が待ち構えていたからだ。カエルの体内は意外と心地



良い温度でな。しばらく堪能している内に身も心も気持ちよくなって、つい寝入ってしまったのだ。優しい温もりを求めてしまう寂しい現代人の心につけ入る実に恐ろしいトラップで、流石の俺も後れを取ってしまったぞ」

「いつその事、カエルのクソになってしまえクソヤロー！」

聞いてみたらものすごくしよーもない話であった。こんなんでもよく生きてこれたなコイツと、世話になってるカズマも思わずにはいられなかった。

《ぶふーっ！ やっぱ、この人たちサイコーだよ！ 笑いを取るためにここまで身体を張れるなんて、まさに芸人の鑑だね！》

「いやいや！ アレでも一応、芸人じゃありませんよ!? 宴会芸スキルを極めてるから否定しきれないけれども!」

これまで笑いを我慢していたノルンが大爆笑する。彼女は自分の能力で桂の状況ですべて知っていたのだ。まさかの野グソからカエルに食われるという急転直下の超展開を見せられては笑うなどという方が無理な話だろう。

とはいえ、この手のハプニングに慣れまくっている銀時は、つき合っていないと冷めた反応を示す。

「あー、バカの相手してたら一気にやる気無くなったわ。まともな武器も無えし、今日はとっとと帰っちゃまうか」

クエストの有効期間まだ2日あるので一旦退こうと考える。合計12万5千エリスという報酬を考えれば1日遅れたくらいで大きなマイナスにはならない。命懸けの仕事とはいえ、かぶき町にいた頃より遥かにまともな収入を得られるのだ。マジで死にかけるような仕事ばかりしてきた銀時にとっては、近所のコンビニにジャンプを買いに行くくらい楽な内容と言える。

ただし、まともな武器が無い状態では流石に辛い。洞爺湖は対人・対ボス戦用に温存すると決めたので、代わりとなる武器を入手しなければならなかった。

「確か武器屋に刀みてえなヤツがあつたよな……」

長谷川たちと武器屋にいった時に見つけた獲物を思い出す。それは茂茂の提案で回るようになった日本刀のレプリカだった。若干値が張るものだったが、あれなら銀時の手にも馴染むはずだ。

「銀さん！ あつちからピンク色のカエルが来るぞ！」

長谷川に言われて視線を向けると、こちらに向かって来ている新手のジャイアント・トードが見えた。桂たちと騒いでいる間に土の中から出て来たようだ。しかし、まだ距離があるので、長谷川を回復してからでも余裕で逃げる事が出来る。

だったらこのまま帰ってしまおう。あっさり撤退を決めた銀時はアクアたちにそれを伝える。だが、カエルにやられた者たちは退き下がることを良しとしなかった。

「オラ駄女神。今日はもう帰つから、さっさと長谷川さんにホイミかけろや」

「はあ？ なに弱気なこと言つてんのよ！ このまま仕返しもしないで帰るなんて私は嫌よー！」

「アクア殿の言う通りだ。名誉挽回をせずして背を向けるは侍のすることではない」

「気が合うわね桂！ 女神である私としても、やられっぱなしじゃいられないわ！ 麗しくも清らかなこの私を汚した罪を、その命を持つて償つてもらわなきゃー！」

宴会スキルを極めた者として意気投合した2人は、カエルにリベンジしたいという意見も合致した。しかし、自分の意見を拒否された銀時は当然ながら反発する。

「ああん？ 宴会芸なんて使えねえスキルを覚えるようなバカどもが、なに偉そうなこと言つてんだ？ まさか、ご自慢の宴会芸スキルであいつを倒すつもりですかあ？ タダの遊び人でしかない俺としては到底無理だと思えますけどお、プロの芸人さんともなればそんな芸当も出来るんですかねえー？」

「ぐぬぬーっ！ あからさまにバカにしてえー！ 私たちが愛してやまない宴会芸スキルを侮辱するなんて、水の女神であるこの私が許さないわよ!？」

「はっ、無様にやられたクセにでさえ口叩くじゃねーか？ だつたらよお、そのくだらねえ宴会芸スキルが戦闘でも使えるつてところを見せてみるよ？」

「上等じゃない！ 私たちの超絶奥義で、あのカエルを魅了してみせてやるわよ！ そ

うよね、桂！」

「もちろんだとも！ 『芸は身を助ける』という故事を貴様の目の前で体現してみせよう！」

銀時に煽られたアクアと桂は、売り言葉に買い言葉で無茶な挑戦をすることになった。

その様子を見ていたカズマは、あまりに無謀な彼らをいさめる。

「おいアクア。流石にそれは無謀すぎだろ……」

「止めないでカズマ。水を司る私にとつて宴会芸スキルはとても大事な物なの。それをバカにされたままじゃ女神の沽券に関わるのよ！」

「随分と安っぽいなあ、女神の沽券!？」

せっかく助け舟を出してやったのに、駄女神はそれをグーパーパンチで破壊しやがった。まったく、バカな選択しやがって。もうどうなっても知らねえぞ。

銀時たちが生暖かい視線を送る中、宴会スキルに命を懸けたバカどもが両手に扇子を装備して走り出した。彼らのプライドを傷つけた憎きジャイアント・トードは目の前にいる。今度はこちらが敗北の二文字を与える番だ。

「娯楽を知らぬ愚かなカエルよ！ 華麗なる我らの絶技を見るがいい！」

「そして、その空虚な心に歓喜と感動を刻み込みなさい！」

何やらかつこいいことを言いながら突進した2人は、ターゲットの直前で立ち止まると、両手の扇子をバツと広げる。いよいよ自慢の宴会芸スキルが炸裂する時が来たのだ。

「行つけえええええ——つ!! 愛と友情の、ダブル花鳥風月!!」

2人同時にそう叫ぶと、両手に持った扇子からピューつと水がほとぼしる。これが宴会スキル・花鳥風月である。ぶつちやけると、今やっているのは綺麗な水が出るだけの技で、ジャイアント・トードには微塵も効果が無かった。

「やっぱ、宴会芸でカエルは倒せないと思うの」

怒りが冷めて冷静に現実を見た時には既に手遅れだった。宴会芸を極めしバカどもは、扇子を掲げたままジャイアント・トードに捕食された。

「きやばっ?!」

「食われたあああああ——つ!!? 芸人コンビが仲良く同時に食われちまつ

たあああああ——つ!!?」

「仕方ねえよ。あのバカどもは本気で宴会芸に命を懸けてたんだ。その意地を貫き通した結果なら、あいつらも本望だろうよ」

「ちよつ、なにカツコイイこと言ってやり過ぎそうとしてんの!? ここは普通、助けるとこでしょ!」

「そーだぜ銀さん！　ここがヤレヤレ系主人公の見せ場だろ？」

「ああん!?　誰がヤレヤレ系だあ!?　このダメダメ系のマダオ野郎!!」

耳クソをほじりながら傍観していた銀時は、カズマたちに急かされてようやく動き出す。

「つたく、やれやれだぜ……面倒くせえが、金と経験値のためにやってやるか」

……あれ、これってやっぱヤレヤレ系?　いいや違う!　俺は天下のドS系!　別に、あいつらを助けるために戦うわけじゃないんだからねっ!

ヤレヤレ系からツンデレ系にチェンジした銀時は、心の中で言い訳しつつも救出行動を開始する。

「おいエリザベス。お前の持つてる刀を貸せや」

武器が無いので今回も借りることにする。エリザベスは、あのオバQみたいな服の中に色々な武器を隠し持つっており、その中には刀も含まれているからだ。

しかし……

へバカかお前は。ピクニックに武器持つてくるわけねえだろ

「バカはお前だコノヤロー!!　武器も持たずにジユラシックパークでピクニックするとか、どんな神経してんだよ!」

なんと、桂だけでなくエリザベスまで丸腰だった。ねえちよつと。マジでこいつらな

にしてんの？ バカなの？ 死ぬの？

頼りにしていた引率者が武器を持ってきていなかったことを知ってカズマは顔を青くする。それでも桂は自分を助けてくれた恩人だ。このまま見捨てるわけにはいかない。ついでに頭が残念な駄女神も。

「なあ銀さん。俺の剣を貸すから、あの2人を助けてやつてよ」

「おつ、気が利くじゃねえかカズマ君。やつぱ、良いメガネをかけてる奴は出来が違うな」

《へへ〜ん、よく分かっているじゃん銀時君。女神のメガネは伊達じゃない！》

「いや、伊達メガネだろコレ」

カズマとノルンが念話でコントをする中、ショートソードを受け取った銀時は、早速行動を開始した。

「今度こそ、主人公らしくバシツと決めてやるぜ！」

目標に向かって颯爽と駆けながらニヤリと笑う。今こそ放つ時だろう、少年マンガの主人公なら大抵は持っているアレを！

「覚悟しやがれクソガエル！ ジャンプを読んで編み出した必殺技を見せてやらあ！」

「あれ、これって何かさつきと同じよーな展開じゃね？」

何やら掃除中に清掃道具でふざけている中学生のようなことを言い出した銀時にデ

ジャブを感じる長谷川だったが、その嫌な予感も当たっていた。

「食らええええっ!! 月牙天衝おとおおお——っ!!」

「思いつきりパクリじゃねえーかつ!!」

堂々と一護の技をパクった銀時は、アクアたちを捕食するのに夢中で動きを止めてい  
るジャイアント・トードの頭頂部へ向けて強力な一撃をお見舞いする。それは一匹目に  
放ったものと同等以上の威力があり、今回も一撃で仕留めて見せた。

しかし、ここでもまた悲劇が起こる。カズマの剣は長谷川のものと同じ粗悪品だった  
ため、同じような負荷を受けた結果、同じように刃が折れてしまったのである。

「どうやらライトセ○バーのエネルギーが切れちゃったようだな」

「嘘つけえええええ——っ!! 目の前で壊しといてなんつー幼稚な言い訳してん  
の!! あんたのフォースで壊された普通の剣だからねソレ!! ダークサイドに堕ちた  
あんたが自力で壊したんだからねソレ!!」

「うっせーよメガネザル! 斬月だろーがダイの剣だろーが、折れる時は折れんだよ!  
形ある物はいつか壊れるもんなんだよ!」

記念すべき最初の剣を壊されたカズマは当然怒るが、口から生まれてきたとまで言わ  
れるほど屁理屈が上手い銀時に口喧嘩で敵うわけがなかった。それに、彼が最初に使っ  
てくれたおかげで粗悪品だったことが判明したのだから怪我の功名とも言える。もし、



何も知らないカズマが使っていたら、モンスターを倒す前に剣が壊れて命を落とす結果になっていたかもしれない。

こんな事態になったのは、幸運の低い長谷川の言う事を鵜呑みにした結果だった。そのことをノルンに教えられたカズマは、己の失敗を理解する。

《いい勉強になったねカズマ君。これからは、なるべく自分で考えて、高い幸運を活かした選択をするよーにしなきゃダメだよん?》

「(心に沁みる説教をありがとうございます……)」

こうなることが分かっていたノルンは、痛い思いをさせることでマスターの成長を促す。実を言うと、彼女は未来も見通すことが出来るほど神格の高い女神なのだ。カズマにそれを明かさなかったのは、人間に未来を教えることが禁忌とされているからだ。

人間の未来は人間自身の力で作り出していくものであり、神はそれを見守るべき存在でなければならぬ。その逆に、神の敵対者である悪魔は、不確定な未来を騙って人心を惑わし、可能性という希望を壊して心弱き人々の運命を弄ぶ存在とされている。中には人をからかうためだけに予知能力を使う変わった悪魔もいるようだが、女神であるノルンはそんなことはしない。見た目は可愛いロリっ子でも、中身は立派な神さまなのだ。

《これだけは言っておくけど、カズマの未来はカズマ自身が選んでいかなきゃならない

んだ。たとえそれがロリコンになる未来へと繋がっていたとしても、ボクは何も言わないよ。その代わりに生暖かい目で見ちゃうけど」

「(目は口ほどに物を言ってるんじゃないか!?)」

実際に生暖かい目で見られたカズマは、ロリコン疑惑を否定するようにツツコミを入れる。こいつと出会ってから、なんかやたらと強調されるんだけど、マジでその気があるのかしら? 後に数多のロリっ子たちを魅了するとは露知らず、犯罪臭のする自分の未来を見通してるようなノルンの言動に戦慄するのだった。

数分後、倒したジャイアント・トードからアクアと桂を救出した一行は、今度こそ撤退することにした。2度もやられた彼女も流星に異論は無く、半ベそをかきながら同意する。

「あううう、カエルの唾液が生臭いようう。早くお風呂に入りたいうう」

「ええい! 分かったから抱きついてくんない!」

意外と面倒見のいい銀時にいつの間にか懐いてしまったアクアは、切欠があればスキップを計ってくる。それは男女の関係というより、ペットが飼い主に甘えているようなものだった。

一方、ピクニックが台無しになった桂パーティーも一緒に帰る事にした。

「残念だが今日は帰ろう。下半身がヌルヌルしてどうにも落ち着かんからな。これではまるで、野外でローションプレイを……」

「あ——っ!? それ以上は言わんでいい!」

何やら危険なことを言い出した桂をツツコミで止めるカズマ。俺、この人たちについていつて本当に大丈夫なんでしょーか? マダオたちの奇妙な冒険を目の当たりにして未来に不安を感じてしまう。確かに、ノルンが言っていた通り面白い人生ではあるけど、思いつきり命懸けじゃねーか!

《そんなの当然でしょ? 冒険者つてのは、命知らずのバカしかやらない超ブラック職業なんだから》

「(辛辣かつ身も蓋もない説明をありがとうよっ!?)」

今更ながら人生設計を誤ったと悟ったカズマであったが、今は他に出来ることもない。とりあえずは、このまるでダメな大人たちと一緒にがんばっていくしかなかった。

そんなマダオのリーダーである銀時は、しつこく抱きついてくるアクアをデコピンで撃退してからまとめに入る。

「よーし、忘れもんはないなー、バカども?」

そう言いながら、これまで放置していた長谷川のグラスンを回収する。そして、彼の本体を置き去りにしたまま帰途に就く。

「それじゃあ帰るぜ、長谷川さん」

「だからそれ長谷川さんじゃなくてグラサン——っ!？」

最後は定番のネタで締める仲間想いな銀時であった。

こうして、攻撃手段を失った銀時パーティは、ジャイアント・トードを2匹倒しただけで街に帰ることになった。一応、銀時の木刀があるので戦術的撤退ではあるが、敗北には違いない。銀時と長谷川はとりあえず折れない剣を買おうと思い、リベンジを誓っているアクアは密かに秘密兵器を連れて行く計画を立てていた。

「待ってなさいよ不埒なカエルども! あんたらなんか、爆裂魔法で木っ端ミジンコにしてやるんだから!」

このセリフだけで秘密兵器が何なのかバレバレだが、正式な種明かしは次回にしようと思う。

## 第8訓 ギャグも魔法も一発だけではやっていけない

武器を失いクエスト中断を決定した一行は、疲れた顔をしながらアクセルの外壁前で帰ってきた。

今日の収入は、銀時が倒したジャイアント・トード2匹を売って得た1万エリスのみ。何とかタダ働きは避けられたとはいえ、情けない結果に意気消沈する。

「はあ、今度はまともな剣を買わなきゃ……」

今回、何も良い所が無かった長谷川がため息交じりでぼやく。買ったばかりの剣を1回使っただけで壊されたのだから仕方ない。

そしてもう1人、彼と同じ目に遭わされたカズマもちよっぴりやさぐれた表情をしている。ピクニックに行ったと思ったらモンスターに襲われて、更には一度も使っていない剣まで壊されてしまうなんて、幸運が高いって話は本当なのでしょうかと疑わずにはいらなかった。

「カズマ君もゴメンな。ジャイアンにオモチャを壊されたスネ夫みてえな目に遭わせちゃまって……」

「あー、長谷川さんのせいじゃないから謝らないでいいですよ。銀さんみたいないい加

滅な人に武器を貸した俺の方にも落ち度はあったんだから」

「うう、カズマ君は大人だなあ。クズしかないうちのパーティじゃ考えられねえセリフだぜ」

「おい、なんだてめえら。黙って聞いてりゃあ、命の恩人を仲良くデイスリやがって。確かに剣は壊れちまったけど、映画版のジャイアンぱりに男気溢れる戦いつぶりだっただろーが。つーか、こいつみてえにヌルヌルにされなかつただけありがたいと思えつてんだ」

チクチクと2人に非難され続けて苛立った銀時は、不機嫌な顔でアクアを指差す。ベソをかきながら隣を歩いている彼女はジャイアント・トードの唾液で全身がヌルヌルになっており、とても生臭かった。

「ひつく、ひつく……早くお風呂に入りたいよお。そんでもって、サツパリした後はキンキンに冷えたクリムゾンピアをガブ飲みしたいよお」

「どうだお前ら。カエルに食われかけた恐怖で、仕事帰りのオツサンみてえに老け込んじゃまってるぜ」

「いやそれ前からだから。元々、女捨ててる感じだから」

言うほどダメージを受けていないアクアは、泣きながらも我侷を言う。今回のクエストで一番酷い目に遭った彼女だが、この程度でへこたれるほどヤワではなかった。こう

いう時、バカは単純で助かる。

無論、駄女神よりバカな桂も平然としており、傷心の彼女を労わるほどの余裕を見せる。

「今回は災難だったなアクア殿。だが、いつまでも落ち込んでばかりはいられない。この敗北を次の糧にするために、今宵は酒場を大いに盛り上げようではないか！」

「ええそうね！ このまま引き下がっては水の女神の名が廃るわ！ 私の芸でカエルを倒せるようになるまで、もつと実戦で鍛えなきゃ！」

「んなモンどーでもいいわ！ つーか、もうそれタダの飲み会じゃね？ 反省会という名の宴会じゃね？」

すつかり意気投合してしまった芸人コンビは、しょーもない方向に熱意を傾けていた。こういう時、バカは面倒で困る。

肩を組み合つて高笑いし始めたヌルヌル野郎共に呆れた銀時たちは、彼らを無視して歩みを進める。バカは放つておいてさつきと武器でも買いに行こう。そんなことを話しあいながら巨大な門をくぐつていく。すると、その向こう側には彼らの帰りを待つていためぐみんの姿があった。

「お帰りなさいギントキ！」

「ん？ なんだお前、こんなところで一人遊びか？ やっぱ、中二病の爆裂マニアはポツ

手だつたみてえだな」

「余計なお世話ですよっ!？」

イタイところを突かれたためぐみんが、涙目でツツコミを入れてくる。せつかく労つてあげようと思つていたのに何たる仕打ち。心無い銀時の一言にちよつぴりムカツときた彼女は、『私にだつて友達はいますよ、一応!』と弁解しようとした。

しかし、出掛かつたその言葉は不意に起こつた驚きで止まつてしまう。銀時の後方にある白い物体に気づいた瞬間に、彼女の興味はそちらへ移つてしまつたのだ。

「なっ!? あれはまさか……」

驚いたためぐみんは、大きく目を見開いてその白い物体——エリザベスを凝視する。どうやら彼女は、このオバQっぽい生物に対して並々ならぬ興味があるらしく、興奮した様子で傍に駆け寄つてきた。

「あ、あの! 失礼ですが、あなたが最近噂になつてゐるエリザベスですか!？」

へいかにも。俺が噂のエリザベスですが、なにか?」

「おおっ! まさかあのエリザベスとこんなところで出会うことが出来るなんて、超感激ですっ!」

何やら、道端でイケメン芸能人と出会つた女子のようにテンションを上げるためぐみん。なぜこんなことになつてゐるのかと言うと、愛嬌のある姿をしたエリザベスがこの



街の子供たちの間でゆるキャラ的存在となっていたからだ。足元を覗くとすね毛の生えたオツサンの足が見えたりするのだが、純真な子供たちの目には映らないらしく、こういう生物なののだと思ひ込まれていた。

ちなみに、一番人気は穴掘り用のドリルを口に装着した【モールタイプ】である。どこの世界の人間でもドリルにはロマンを感じるのだ。

「うわあー、実に私好みの前衛的なデザインですね！ あつ、記念に私と握手してもらえますか？」

〈ああいいとも〉

顔を紅潮させためぐみんがエリザベスに詰め寄って握手を求める。相手は美少女なので当然彼の方に異論は無く、イラツとするほどキザな態度でペンギンのような手を差し出す。それをそつと握り返した彼女は、感激した様子でその感触を確かめる。

「へえ〜。見た目は鳥の羽みたいですけど、中の骨格は人間の指みたいなんですわ〜」

「そりゃあ、中身はタダのオツサンだからな。妙に汗ばんだ手で握手してんだろ」

銀時がエリザベスの正体をさりげなく暴露するが、幸いな事に興奮しているめぐみんの耳には届かなかった。

「あの、今度は抱きついてもいいですか？」

〈ああいいとも〉

「それでは、遠慮なく行かせていただきます！」

予想外の結果に興味を増したためぐみんは、更に大胆な行動に出た。もちろん今度も異論は無く、気を良くしたエリザベスはイラツとするほどキザな態度でペンギンのような手を広げる。その胸元へ元氣良く抱きついた彼女は、感動した様子でその感触を確かめる。

「これは……何となく私の父と同じような匂いがして、親しみが湧いてきます！」

「そりゃあ、中身は汚えオッサンだからな。加齢臭をプンプン発散してんだろ」

再び銀時がエリザベスの正体を暴露するが、やっぱり興奮しているめぐみんの耳には届かなかつた。真実を知らないということは、時として幸せな結果を生むものなのだ。

しかし、アレの中身を知っている銀時と長谷川は微妙な顔になってしまう。

「よくそんな気持ち悪いヤツに抱きつけるな、お前。くま○ンとかポケ○ンならともかく、オバQのパチもんを気に入るたあ、どう考えても普通じゃねえよ。やつぱり頭のおかしい爆裂娘はセンスも爆裂しまくってるぜ」

「誰が頭のおかしい爆裂娘ですか!？」 大体、ギントキの方がおかしいじゃありませんか！ これほど素晴らしいデザインの生物は今だかつて見たことありませんよ？ しかし、この街ではあのデストロイヤーよりも人気を集めているほどなんですから！」

「なるほど、分かります！ つーか、デストロイヤーってなに？ 宇宙戦艦？」

「それは違うぞ銀時。デストロイヤーと言えばプロレスラーに決まっているだろう」  
 「どっちも違うよ！ そんな古ネタ、ナウいらノベじゃ使わねーよ！」

めぐみんの熱弁を聞いて銀時と桂がアホな答えを出し、そこに長谷川が死語を用いてツツコミを入れる。こいつらのセンスはめぐみんとは別の方向にぶっ飛んでいた。

そんな彼らについていけないとばかりに、ナウなヤングのカズマ少年が割り込んでくる。

「ところで、君は誰なんだ？ 銀さんの知り合いみたいだけど」

これまで生暖かい視線を向けながら静観していたカズマがめぐみんに話しかける。エリザベスを気に入るセンスはアレだけど見た目はすごい美少女なので、お年頃な彼の興味を引いたのだ。

「おっと、失礼。そう言えばまだ名乗っていませんでしたね……」

興奮が冷めてきためぐみんは、カズマに質問されてようやくそちらに意識を向ける。我を忘れてはしゃいでいた自分に照れて頬を赤く染めている姿はとても可愛らしい。

「(幼い子の愛らしい様子を見て心を和ませるのは悪いことじゃないよな、うん)」

《まさにロリコン的思考だね》

不意打ちを食らったカズマは、少女らしい仕草をしているめぐみんに迂闊にもときめいてしまう。だが、彼女の名乗りを聞いた途端にその想いは消え去ることになる。

「我が名はめぐみん！ アーク・ウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

カズマたちの注目を集める中、赤い瞳をキラんと光らせためぐみんは、中二病ポーズをババツと決めて紅魔族特有の決まり文句を叫んだ。普通の人なら反応に困る状況であり、ご多分に漏れずカズマも乾いた笑みを浮かべて絶句する。

「……………からかつてるのか？」

「ち、ちがわい！」

今の一瞬でこの魔法少女に対する淡い感情が吹っ飛んでしまった。ああ、なんだ。こいつもまた、中身が残念なヤツだったか。新たな仲間もまともではないと知り、カズマはガツカリしてしまう。

しかし、元々感性がおかしい桂は、彼女の名乗りを大いに気に入った。ついでに長谷川も彼女の名前から奇妙な縁を感じていた。

「そうか……君の名は林原めぐみんというのか。何やら一緒に仕事をしたことがあるような親しみを感じるな」

「ツラつちもそう思う？ 何か俺も、初号機に取り込まれた嫁さんというみたいなおしさと切なさを感じるんだよなー」

「別世界の自分とシンクロしてるうーっ!? おい止める！ そいつはてめえらの記憶

じゃねえよ!? 色々めんどくせえから、今すぐATフィールドで封印しやがれっ!」

『めぐみ』という単語に反応したバカ共が、ちよつとだけ新世紀な世界に意識を飛ばしておかしなことを言い出した。中の人をネタに出来る彼らにとつて、世界の垣根など無きに等しいのだ。とはいえそれはこいつらだけの特殊能力(?)であつて、流石のめぐみんもメタ発言にはついていけず、意味不明なやり取りに困惑するだけだつた。

「よく分からないけど、私の名を間違えなくてもらおうか! 大体、ハヤシバラつてなんですか? 紅魔族的にはポイント高い響きですけど、一体どこから湧いて出たのですか!」

「ああ、すまない。君の名が昔馴染みの綾波レイとソツクリだつたのでな、つい思い出に耽つてしまつたのだ」

「はあ、そういうことだつたのですか……いや、アヤナミ・レイつて誰ですか!? ソツクリどころか全然違うじゃないですか!」

謝つておきながら更にボケ続ける桂にツツコミを入れる。この時彼女は心の底から理解した、彼が銀時の仲間であるということ。

「冷静沈着な私ですらつっこまずにはいられない、巧妙かつ理不尽な会話……この人は間違いなくギントキの同類です!」

「ん? 俺のことをじつと見てどうしたのだ、めぐみん殿? もしや、俺のロン毛がツラ

ではないかと疑っているのではなからうな？ なぜか時々そう思われることもあるが、それは違うぞ。このロン毛は100%俺の地毛だ。何なら引つ張って確かめてくれないぞ。でも、あんまり強く引つ張らないでね。最近抜け毛が気になってるから」「そんなことは微塵も思っていないませんよ!? それより、今度はあなた方の名を聞かせてください」

「おおそうだった。今度はこちらが名乗る番だな」

めぐみんから催促された桂は、待つていましたとばかりに笑みを浮かべる。中二病的な彼女の名乗りを見て、何故か対抗意識を燃やしてしまったのだ。その結果、ジョジョっぽいポーズを決めた彼は、どこかで聞いたようなセリフを言い始めた。

「我が名はカツラン！ 勇者王を生業とし、最強の配管工、マリオをこよなく愛する者！」

「中二病に感染してらううううっ!?」

なんと、めぐみんの名乗りに感化された桂は、早速パクって対抗してきた。

「なにあっさり影響されてんだテメエは!? 最強のバカが中二病になっちゃったら、フリーザ様が海賊王を目指すくらいカオスになっちゃまうだろーが！ つーか、こんなとこにまでマリオをねじ込んでくるんじゃないよ！ アピールする意味が分かんねーし、主張しすぎてなんか怖えよ！ 大体、カツランって何なんだよ!? アスラン・ザラの名前

をパクってカツラン・ツラと名乗る気ですかあ!？」

「ツラじゃない、カツラン・ザラだ!」

「どっちも違えよ、デコハゲ野郎っ!」

なんだかんだとやりあつて、結局いつものツラネタになった。まったくもつて不毛な会話である。

出会つて間もないめぐみんも、まともに付き合つてらんねえと判断して、まだ名前を聞いていないカズマに話題を振る。

「あの2人は放つておいて、こちらで話を進めましょう」

「おう、そうだな……」

その意見にはカズマも同意する。バカな大人のバカらしいケンカを眺めているより、中二病の美少女と仲良く会話をしている方がまだいい。

そう思つた彼は、これまでのふざけた空気を変えるように、ごく普通の挨拶をした。

「俺の名はカズマだ。職業は冒険者をやつてる。銀さんのパーティには入つてないから一緒に仕事する機会は少ないかもしれないけど、とりあえずよろしくな」

「……………あなたの名乗りは拍子抜けするほど普通ですね。正直言つてガツカリです」  
「俺をあいつらと一緒にすんじゃないかねえ!? つーか、お前は俺にナニを求めてるんだ!？」

ヤレヤレと言いたげなジェスチャーをするめぐみんにムカツとするカズマさん。な

んだらう、彼女の対応にどことなくSっ気を感じるぞ？　まるで銀髪天パの遊び人のように……。

「(こいつ、銀さん色に染まってやがる!)」

しばらくして真相に気づいたカズマは、ドS野郎の影響力に恐れおののく。この2週間、銀時と仲良くケンカし続けた結果、めぐみんは非常識な会話に思いつきり馴染んでしまっていた。彼女自身も気づかない内に銀時の調教……もとい、教育が進んでいたのだ。

「(いかん！　このままでは俺の周りが変人だらけになってしまおう!)」

《だいじょーぶだよカズマ君！　それはもう決定事項だから、今更心配する必要は無いんだよ》

「(どう考えても心配要素しかねえじゃねーか!?)」

身も蓋も無いノルンのフォローは逆効果だった。だが、実際ここには変人しかいないのだからしょうがない。それが事実であることは、カエルの唾液でベツトリとなつたアクアを見れば誰でも察することが出来る。

もちろん、めぐみんもずっと会話に参加してこない彼女の様子が気になっており、カズマに質問してきた。

「ところでカズマ。得体の知れない粘液でヌメヌメ状態のアクアがベソかいてるのです



が、一体何があつたのですか？」

「あーアレね。アレは宴会芸に命を懸けた自称女神が、花鳥風月でジャイアント・トードを倒そうとして返り討ちに遭い、そのまま為すすべも無く食われた結果だ」

「なんですかソレ!?! まったくもって意味不明なんですけど!?!」

カズマの説明はすべて事実だったが、まともな部分の一つも無くてギャグ以外の何者でもなかった。しかし、今の発言の中には当人にとつて我慢できない言葉があつた。

「誰が自称女神よヒキニート! 私は真正正銘の女神さまよ!?! この美しさと神々しさを兼ね備えたパーフェクトボディを見れば一目瞭然でしょっ!!」

「カエルの唾液でヌルヌルになつてるお前が言つても説得力ねえだろ」

「ひぐつ!?!」

現実を突きつけられたアクアは、自身が受けた屈辱を思い出して涙する。

そうだ……今の自分は女神としてのプライドを汚されてしまっている。だから、こんな駄メガネヒキニートにすら見下されてしまうんだわ。

でも大丈夫。汚名返上するための秘密兵器が今、私の目の前にいるんだから!

「うわーん、めぐみーん! あなたの爆裂魔法で、あの憎きカエル共を木っ端微塵に爆殺してよう!!」

「ほう、私の爆裂魔法を御所望ですか? やはりアクアは見る目があります……つて、そん

な身体で抱きついてこないでください!? 私に変な趣味はありませんから! ヌルヌルプレイは論外ですから! あっ、ちよっ、やめてっ!? いやっ、生臭っ!」

めぐみんの爆裂魔法に希望の光を見出したアクアは、ドラえもんに泣きすがるのび太のように助けを請う。バカな彼女は女神のクセに他力本願だった。

何はともあれ、アクアの熱望によって翌日の冒険からめぐみんの参加が決まった。更に、銀時たちもその日の内に武器を買い、これで一応戦力は整った。

後は明日のリベンジマッチを成功させるだけである。



クエスト2日目。新参のめぐみんを加えて4人パーティーとなった銀時一行は、再び草原地帯へとやって来た。

「とりあえず戻ってきたけど、何となく心配だぜ。この刀は本当に大丈夫なんだろうなあ?」

「安心しろ。今度はこの俺が念入りに吟味したから簡単には折れねえよ」

「俺の目には、壊れた剣をネタにして武器屋のオヤジを脅してたように見えただけだな!」

長谷川は、新しく買った刀……サムライブレード・サキガケを手にしながらぼやく。この刀は茂茂の提案で生産された日本刀の模倣品で、銀時の執拗な値切り工作と桂の口利きにより本来の価格の5分の1で手に入れた一品である。それを銀時、長谷川、カズマの3人が買い、すぐさま実戦投入することとなった。

「RPGと言えば両刃の剣がセオリーだけどよ、やっぱ俺には日本刀こいつが合うぜ」

鞘から刀身を抜き放ち、使い心地を確かめる。元いた世界の物と比べたら鈍らもしい所だが、実用レベルには達している。これなら十分に戦果を出せるだろう。真剣を手にとって元の世界が懐かしくなったのか、つい真面目な気持ちを吐露してしまう。

すると、その様子を見ていたアクアが急に笑い出した。

「プップーツ！ カエルを倒すだけなのに、なにカッコつけてんのよ腐れ天パ！ そんなことしたって女性ファンは増えないわよ！ どーせあんたは、出番の少ない高杉晋助にすら勝てないヤムチャのようなカマセ犬なんだから！」

「こんの駄女神えええええつ!! 俺が密かに気にしていることをズバズバぬかしやがってえええええつ!! そこへなおれ！ その首ズバツと切り離してくれるわっ!!」

「ちよっ!! 最初の戦果を仲間にするのは止めてよね?」

よせばいいのに、お調子者のアクアは余計な事を言って銀時の怒りを買ってしまふ。

よし、こいつはもうお仕置き決定な。心の中でDSな計画を練った彼は、デスノート

を使うライトのように凄惨な笑みを浮かべる。

すると、彼の悪意に反応したのか、実にタイミング良く敵が出現する。

「ギントキ！ あっちからジャイアント・トードが来ますよ！」

めぐみんの報告を受けて視線を向けると、確かに巨大なカエルが1匹近づいてきている。警戒することもなくバカ騒ぎしていたせいでろうが、こちらにとつては都合がいい。

「ようし、まずは昨日のリベンジだ。あいつは俺らがぶつ殺すから、お前は一先ず観戦しろ」

「はい、みなさんのお手並みを拝見させていただきます！」

銀時の指示に元気良く応えるめぐみん。爆裂魔法の使い手である彼女としても、これから共に戦っていく仲間の実力には興味があった。

「あの！ 出来れば、昨日言っていた究極爆裂剣とやらを見せてほしいのですが！」

「あーソレね。悪いけど、ソイツは相棒のホイミンがいないと出来ねえんだわ」

「えっ!? ホイミンという方は本当にいるのですか!? しかも、私と同じく爆裂道を歩んでいるとは、猛烈に親近感を覚えます！」

未だに銀時が言った嘘を信じているめぐみんは再び騙された。世の中ワルはたくさんいるので、素直すぎるのも考え物である。

「んなことより、究極爆裂剣を使えねえ今はお前の爆裂魔法が頼りだからな、大いに期待してるぜ？」

「フツ、望むところですよ！　我が爆裂魔法が最強と呼ばれる所以をとくにご覧にいれましょう！」

初めて爆裂魔法を好意的に見てもらえたためぐみんは、やたらと張り切つて答える。ようやく自分の理解者に巡り合えたことを嬉しく思つたのだ。実際は欠点だらけのネタ魔法であることを知らないだけなのだが、幸か不幸か、2人の勘違いは爆裂魔法が炸裂するまで続くことになる。

「攻撃魔法といやあメラゾーマが一番だがよ、イオナズンでザコを一掃すんのもアリだな」

「フフーン、そうでしょう？　これも私がめぐみんの参加を提案したおかげなんだから、この私に感謝しなさいよね！」

「分かつたよ、今度ばかりはお前の言う通りかもしれないねえ。つーわけで、使える魔法使いの代わりに、役に立たねえ僧侶はリーダーの酒場で別れることにするわ」

「いやあああああつ?!　生意気言つたことは謝るから私を見捨てないでえ!!　お願いだから待機という名のリストラは止めてえええええつ?!」

もつとも恐れているネタで脅されては、流石のアクアも奮起せずにはいられない。め

ぐみんに負けてはいられないとばかりに、取ってつけたようなやる気を見せる。

「さあ、行くわよみんな！ 私たちの友情パウワーで勝利をこの手に掴みましょう！」  
「なにこの茶番!?」 心にも無いこと言つて必死にアピールしちやつてるけど、痛々しいから止めてくれない!? ジャイアンに媚びるスネ夫みたいでやるせなくなつちまうからー！」

空元気を見せるアクアに人生の悲哀を見た長谷川がツツコミを入れるが、こうせざるを得ないのが今の彼女だった。たとえ女神でも一人きりでは生きていけない。時にはプライドを引き換えにしても自分の居場所を確保しなければならない。悲しいけど、これ社会の常識なのよね。

「あの、みなさん。揉めてる間にカエルがすっごい近くまで来てますよ?」

「けつ、主人公の邪魔をするたあ無粋極まるカエルだぜ」

殺る気満々の銀時は悪役のような笑みを浮かべる。このクソガエルめ、駄女神の世話で溜まった鬱憤を思う存分ぶつけてくれるわ!

「行くぜバカ共! カエル狩りの時間じゃあああああつ!」

銀時の合図で戦闘が始まる。それに従つた長谷川とアクアは彼の横に追隨して、共にジャイアント・トードへ突進していく。

「銀さん、俺たちはどうしたらいい?」

「仕方がないから、戦闘の間はあんたの指示に従ってあげるわ！」

並走している長谷川とアクアが息を合わせて聞いてきた。緒戦で手痛い失敗をしたがゆえの判断で、普通だったら正しい選択と言える。しかし、その相手がDSだということが致命的なミスだった。

「よく聞けお前ら。あのカエルは食事をしている時に動きを止める。つまり、エサに食いつかせれば楽に倒せるってわけだ」

「なるほど、それなら俺でもいけそうだな！」

「でも、エサなんてどこにあるのよ？」

「ああん？ なにとぼけたこと言ってるんだてめえは。ちゃんと用意してあるじゃねーか、『女神』という最高級のエサをよお！」

「ほえ？ 女神？」

なんかとつても親近感を覚える名前のおサね。一瞬では言葉の意味が理解できず、ついマヌケなことを考えてしまう。その隙に素早く動いた銀時は、彼女を肩で抱え上げると、腰の辺りをガツチリ掴んで頭上に掲げた。そしてソレをジャイアント・トードに向けて思いつきりぶん投げた。

「アクシズ、行け！ 忌わしい記憶と共に！」

シャアのモノマネをした銀時は、小惑星アクシズではなくアクシズ教の御神体に想い

をぶつける。これは主人公さまをコケにした報いなのだよ。

「うきやあああああああつ!!?」

「恨むなら、リーダーをバカにしたテメエの愚かさを恨むんだなあ!」

後方から銀時の罵りを受けながら猛スピードで空中を飛んでいくアクア。そんな彼女が向かう先には、口を開けて待ち構えているジャイアント・トードの姿があり、結局そのままパクリと食われてしまう。

「きゃばっ!?!」

「やりましたよシヤア大佐! 念願だったアクシズ落としを、とうとう成功させましたよお!」

「ちよつと待ってえ!?! なんか役どころ間違ってるよね!?! 明らかに主人公がやっていいことじゃなかったよね!?! つーか、天パのお前はアムロ寄りだろ! アクシズ落としを止める方だろ!」

ガンダムネタで誤魔化そうとした銀時にツッコミを入れる。アクアによって蓄積され続けるストレスを本人にぶつきたい気持ちはよく分かるが自重しろ。

「よーし、計画通り上手くいったあ! 今のうちにヤツちまおうぜ、長谷川さん!」

「だけどよ銀さん。流石にアレは可哀想だろ?」

「そんなこたあねえよ。アクシズと聞いたら誰でも思いつくことだからな、同じ事をす



るドSはごまんといるはずだぜ？」

「そんなクズはお前だけだろ!! あれほど鬼畜なドSプレイ、ハマーン様でもやらねよ!!」

抗議をしたらすつげえ適当に返された。命掛けの囀作戦も彼にとってはドSプレイの一つでしかなかったのだ。

「仕方ねえ……アクアちゃんの犠牲を無駄には出来ねえし、さつさと片付けるか」

この手の展開に慣れている長谷川は、すぐさま気持ちを切り替える。美味い汁を吸える時は全力で吸い尽くせ。マダオが生きていくには、時として非情にならなければならぬのだ。そんな言い訳を心の中でしながらジャイアント・トードを倒す鬼畜な2人であった。

一方、離れた場所で観戦していためぐみんは、あまりに酷い結果に驚愕していた。

「なっ!! アクアをエサにしてカエルの動きを止めたのですか!! 魔王軍でもあんなエゲつないことしませんよ!!」

汚いと言いか言いような銀時の戦いっぷりを目の当たりにして戦々恐々とする。はつきり言つてドSというものを舐めていた。

「……………まさか、私も同じ目に遭つたりしませんよね?」

嫌な未来を想像して更に顔を青ざめさせる。爆裂魔法を放った後の状態を考えると有りえなくも無いからだ。

「いやいや！ 爆裂魔法の威力を見てもらえば私の存在価値も立証できますし、何も心配はいらないはずです！ ええ、そうですとも！ たとえ、魔力が枯渇して身動きできなくなったとしても、決してカエルのエサになど……しないてくださいってお願いしなきゃダメですかね？」

考えこんでいる内に自信が無くなっていき、段々と弱気になる。そりゃあ、一切の躊躇なく仲間をブン投げていたのだから当然である。

「でも、私は逃げません！ 我が爆裂道に退却という文字は無いのですから！」

本来の目的を思い出したためぐみんは気合を入れ直す。これはピンチではなくチャンスののだ。たとえ銀時が血も涙も無い最低のドS野郎だとしても、マジで希少な爆裂魔法の理解者を見逃す手は無い。

「彼みたいな人と巡り合える機会は二度と無いかもしれないからね。そう簡単に離れやしませんよ……」

カエルのエサにされる恐怖よりも爆裂魔法に対する愛が勝つためぐみんは、小悪魔的な笑みを浮かべる。前向きな中二病は迷惑なまでにタフで怖いもの知らずだった。

クエスト再開から数分後、アクアを銜えたジャイアント・トードは長谷川によつて倒された。まったく反撃が無かつたので激弱の彼でも楽勝だった。

「尊い犠牲はあつたけど、ようやく俺も経験値をゲットできたぜ！」

調子の良い長谷川は、アクアの災難をサラツと流して初戦果を喜ぶ。モンスターから得られる経験値は命を奪つた者だけが対象となるので、一見すると鬼畜な戦法も弱つちい彼を鍛えるには最適な方法だったのだ。エサにされたアクアにとつては『冗談ではない！』と言いたい所だろうが、彼女のおかげでマダオはちよつぴり強くなれた。

テレレレツツツツテー♪ ハセガワ（のグラサン）はレベルがあがつた！

「おっ！ 今なんかレベルアップした時の曲が聞こえた気がする！」

「へえ、やつぱり日中ゲームやつてる無職は違うなあ。リアルでも効果音が聞こえるくらい脳みそが毒されてやがるぜ、ペツ！」

「ちよつと冗談言つただけで、ツバ吐きつけるほど見下さないでくんない!」

ジャイアント・トードに食われたままのアクアを他所に仲良くはしゃぐオツサン2人。その光景はあまりにシニールで、ある意味狂気すら感じさせる。つていうか、実際におかしいところだらけである。

それでも、今のめぐみに彼らの凶行（？）を止める気は無い。彼女はただ、爆裂魔法を使いたいがために命懸けで戦っている。つまり、彼女自身も十分に頭がおかしいの

だ。

「そうです！ 爆裂魔法にすべてを捧げた我が、今更なにを臆することがあろうか！ 己の信念に従って、ただ爆裂道を突き進むのみ！」

意を決したためぐみんは新たに出現したジャイアント・トードを睨みつける。距離は適度に離れているので攻撃魔法のターゲットとしては丁度良い。ならばそれを、愛すべき爆裂魔法で吹き飛ばしてやればいい。

「ギントキ！ あのカエルは私に任せてください！」

「ああいいぜ！ お前が惚れ込んでる爆裂魔法がどれほどのものか、この目で直に確かめてやらあ！」

一生懸命アピールするめぐみんに対して銀時も応えてやる。何だかんだと言っても魔法には興味があるのだ。たとえ使い手が面倒くさい中二病でも期待せずにはいられない。何となくドラクエをプレイしていた頃のワクワク感を思い出しながら、ロリっ子魔法使いの行動を見守る。

一方、自分で自分を追い込んだめぐみんは、銀時の行動を見て冷や汗を流した。今彼は、気絶しているアクアの足を掴んでジャイアント・トードの口から引つ張り出している。もし、このアピールが失敗すれば自分もあなるかもしれない。

それでも、めぐみんに諦めるといふ選択肢は無かった。

「これは、禁忌の力を手に入れし我に神が与えたもうた試練なのだ！ たとえこの身がカエルの唾液でヌルヌルに成り果てようとも、私は私の道を往くのみ！」

前向きすぎるめぐみんは、膨らむ緊張感を中二病で押さえ込む。そして、その勢いのままに魔法の詠唱を始める。

「黒より黒く、闇より暗き漆黒に、我が深紅の混沌を望みたまう——」

それっぽい言葉を紡ぎながら両手で持った杖を天に掲げると、その先端部分に付いている球状のパーツに不可思議な力が集まっていく。それと同時にジャイアント・トードの頭上に小さな光が出現し、強烈なエネルギーを蓄えていく。

「これが人類最大の威力の攻撃手段！ これこそが究極の攻撃魔法！」

詠唱を続けていためぐみんが叫ぶ。いよいよ魔法が発動するようだ。気配を察した銀時たちが息を呑む中、それは炸裂した。

「エクスプロージョンツ!!!」

その言葉を切欠にして凶悪な破壊の力が発動した。ジャイアント・トードを中心にして大爆発が起こり、あたり一面をオレンジ色の光が照らす。

「なんじやこりやあああああ!?!」

想像以上の威力にオッサン2人がビビる。例えるなら、初めてガンダムのパームライフルを見たシャアのような心境である。当たらなければどうということはないが、当

たつたら死んじやうよねアレ。辺りに吹き荒れる爆風に耐えながら、いつか起こるかもしれないフレンドリーファイアに恐怖する。

それでも、攻撃力に関しては彼女の言い分を認めざるを得ない。目の前の光景がそれを実証している。煙が晴れてから爆心地を見ると、そこにいたジャイアント・トードの姿は跡形も無く消え去り、その代わりに20メートル以上のクレーターが出来ていた。「す、すげえ……。まるでN2地雷みてえな爆発だぜ……」

爆裂魔法の威力を目の当たりにした長谷川は放心したようにつぶやく。使徒は倒せなくても、この世界のモンスターには十分通用しそうだ。これなら魔王退治も夢ではないと希望すら湧いてくる。

「おい銀さん！ あの子、めちやくちやすげえじゃねーか！ あの若さでこれほどの力があるなんて、とんでもねえ逸材だぜ！」

めぐみに才能があると実感した長谷川は素直に喜ぶ。実際、魔法に関する成績は優秀で、ステータスにもその実力は現れている。ネタ魔法としてバカにされることの多い爆裂魔法も、本来は上級魔法に分類されるほど高度なスキルで、彼女の才能があればこそ低レベルでも使うことが出来る代物なのだ。その点だけを考えれば、確かにめぐみは逸材と言える。

しかし、銀時の着目点は思いっきりの外れな方向にぶつ飛んでいた。

「こんのクソガキヤーっ!! テメエのせいで5千エリスが爆裂しちまったじゃねーかあああああ!?! 5千といやあジャンプを20冊も買える価値があんだぞ? パチンコで確変当てることも出来る立派な軍資金なんだぞ? それを無残に爆破するたあ、たとえ駄女神が許してもこの俺が許さねえ! 5千エリス分の怒りをその身に爆裂させてくれるわ!」

「ええーっ!?! この状況でそこに怒るの!? たった5千でキレるとか、どこまで大人気無えんだよ!」

金に厳しい銀時は僅かな損失にも容赦なかった。

そんな彼の理不尽な怒りにさらされた影響か、突然めぐみんに異常が起きる。なんと、直立したまま顔面から倒れてこんでしまったのである。

「えっ、なにそのリアクション。もしかして謝罪してるの? スタイリツシユな土下座なの?」

「そんなわけねえだろ!?! どう見てもぶっ倒れてんじゃねーか! おい、めぐみちゃん! 大丈夫かーっ!?!」

「わ、私の名はめぐみちゃんではありませんよ……。そこはかたなく親近感を覚えますけど……」

慌てて声をかけてみたら、結構余裕のありそうな返事が聞こえてきた。

「まったく、心配させやがって。急に倒れたからデスノートに名前を書かれて死んじまったのかと思っただぜ」

「なんですか、そのエゲつない魔道具は!? 名前を書かれただけで死ぬとか、怖過ぎますよ!?!」

銀時の嘘を信じたためぐみんは驚きの声を上げる。倒れはしたものの、とりあえず大事には至っていないようで何よりである。

ただし、うつ伏せに倒れたままで動けないようだが。

「どうしたためぐみちゃん。もしかして起き上がれねえのか?」

「はい、そうです……。我が奥義である爆裂魔法は、その絶大な威力ゆえ消費魔力もまた絶大。要約すると、限界を超える魔力を使ったので、身動きひとつとれません」

「なんてこった! 爆裂魔法つてのはイオナズンじゃなくてマダンテだったのか!?!」

「バツキヤロウ! 使った後に動けねえなら、メガンテみてえなモンじゃねーか! 自爆するしか能の無い爆弾岩と一緒にやねーか!」

めぐみんの自白でようやく爆裂魔法の欠点が見えた。それと同時に、彼女が必死にパーティメンバーを求めていたことも理解した。こんなしよーもないネタ魔法を使いたがるヤツなんか、色んな意味で危な過ぎて誰も仲間にしようとは思わないだろう。



現に今も、爆裂魔法による爆音のせいで新手のジャイアント・トードが目覚めるといふ二次災害が発生している。

しかも、出現した場所は身動きできないめぐみんの間近だ。無理やり起こされて土の中から出て来たジャイアント・トードは、脇目も振らずに彼女のもとへと接近していく。「やべえぞ銀さん！ このままじゃめぐみちゃんが食われちゃうー！」

「ああ、確かにやべえな。あんなガキンチョをヌルヌルにしちまったら、児童虐待だーとか、児童ポルノだーとかいわれの無い誹謗中傷を受けちゃうぜ！」

「そういう生々しい話は止めてくんない!? そんな心配しなくても、このSSは至って健全だからね！ To LOVEる的なお色気要素は悲しいまでに皆無だからね！」

変なところで心配性の銀時は、世間体に配慮する形でめぐみんの身を案じる。まったくもって主人公らしからぬ思考だが、彼女を助けようという気持ちは一応ある。

「さて、この状況をどうしますかねえ……」

ジャイアント・トードが迫り来る中、めぐみんを助ける方法を考える。距離が離れているので、今から走っても間に合わない。ならば、あの手を使うしかないだろう。

「いくぜ長谷川さん、合体奥義だ！」

「えっ、なにそれ？ 合体奥義とか、使ったことないんだけど？」

「いいや、ちゃんと使えるよ。テメエの身体を投げ飛ばすだけだからなあ!!」

そう叫ぶや否や、素早く動いた銀時は長谷川の身体を頭上に持ち上げる。その体勢はアクアを投げ飛ばした時とまったく同じ体勢で、使用方法もまったく同じだった。

「食らええええええつ!! マダオインパクトツ!!」

適当な名前を叫びながら全力でぶん投げる。これが唯一めぐみんを助けられる方法だ。その代わりに長谷川が犠牲になるが、マダオがヌルヌルになっても世間から非難されることはない。彼自身がゴミを見るような目で見られるだけだ。

「うぎやあああああああつ!!」

巨大な弾丸と化した長谷川は、断末魔のような叫び声を上げながら飛翔して、見事ジャイアント・トードの口に命中した。これでしばらくの間は時間が稼げる。

その結果を見届けた銀時は、気絶したアクアを引きずりながらめぐみんの傍まで歩いて来る。

「とりあえず、カエルに食われなくて良かったな」

「まあ、アクアとハセガワのことを思うと素直に喜べないのですが……助けてくれてありがとうございます」

犠牲となった仲間達の姿を見てやるせなくなるめぐみん。なんとか今日は助かったけど、明日は我が身か……。自身に待ち受ける運命を悲観してちよっぴりブルーになる。しかし、彼女の受難は既に始まりを告げていた。

「んなこたあどーでもいい。それより、爆裂魔法を使うと動けなくなるってことをどーして黙っていやがったんだ!? 下手したら死ぬとこだったじゃねーか!!」

「つ……確かにそれはこちらに非があるので謝ります。でも、私は爆裂魔法しか使えませんから……」

「ああん? そいつは一体どーいう意味だ?」

「正直に言うと、私は爆裂魔法以外の魔法が一切使えません。というより使う必要がありません。だって私は、爆裂魔法を使うためだけにアークウイザードを選んだのですからー!」

変なところで素直なめぐみんは、ありのままの本心をあっさりと暴露してしまった。これまでに何度も経験してきた展開なので、特に深く考えることなく告白したのである。とはいえ、身動きできないこのタイミングでカミングアウトしてしまったのは迂闊だったと言わざるを得ない。なぜなら、彼女が相手にしている男は常識的な一般人ではなく大人気ないDSだったからだ。

「それじゃあなにか? テメエは、爆裂魔法しか使えねえことも俺に黙ってたってことか?」

「は、はい……遺憾ながらそういうことになりますね……。つて、あの。もしかして、すっごい怒ってらっしゃいますか? なんか悪魔のような顔になってますけど。笑顔

なのに底知れぬ恐怖を感じてしまうんですけど」

「そりゃあそーだろーよ!!」 今の俺はスーパーサイヤ人に目覚めちゃうほど怒ってんだからよお!! 最終形態のフリーザだってビビりまくっちゃうだろーよ!!」

「ひいひいひいっ!!」 言葉の意味はよく分かりませんが、とにかくすごい気迫ですうううう!!」

めぐみんから真相を聞いた銀時は当然の如く怒った。

「俺あよ! 自分が隠し事すんのは大好きだけどよお、他人にやられんのは大嫌えなんだよお!!」

「ええーっ!!? なんとという唯我独尊っ!!?」

「大体、玉一発で勝てるほどモンスターもパチンコも甘くはねえんだよ! 金〇まだつて2つあるから毎日発射できるんだろーが! ドズル中將が言うように戦いは数なんだよ! 元気玉一発だけじゃあ勝負には勝てねえんだよ!!」

怒鳴っている内にパチンコで大負けした悔しきまで思い返してしまい、更にヒートアップしていく。めぐみんにとってはとんだ災難である。

とはいうものの、切欠を作ったのは彼女自身なので、致し方ない部分もある。身動き出来ないめぐみんは、オシオキするために近寄ってくる銀時から逃れられない運命を悔やむしかなかった。

「ちよつ!!」 その黒くて硬い物体は何ですか!! 一体それでナニをしようというのですかーっ!!」

顔を上げためぐみんは、銀時が着物の懐から取り出した物を見て不安にかられる。それはこの世界に無いものだったからだ。

「こいつはなあ、あらゆる場所に文字が書けるマズイックペン（油性）って魔道具なんだが、それを今からお前の身体で実証してやる」

「えっ!!」 なぜそのようなことをするのですかっ!!」

「すべては俺に嘘をついたお前が悪いのだよ。その罪を忘れないようにするために、お前の額に『肉』の字を書いてくれるわ!!」

「いやあああああっ!!」 額に肉なんて書かれたら表を歩けなくなっちゃいますっ!!」  
「っていうか、マジでやるなんて嘘ですよね!!」 今なら笑って誤魔化せますから、是非とも嘘だと言ってください! あっ、いやっ、待つて!!」 お願いですからそんな無体は、やめ……やめろおとおおっ!!」

必死に許しを懇願したが暖簾に腕押しで終わった。

結局、めぐみんはジャイアント・トードに食われずに済んだ代償として額に肉と書かれるという精神的な苦痛を受けることとなった。



無事に(?)クエストを達成してアクセルに凱旋した一行は、ギルドへ向けて夕暮れ時の道を歩く。先頭を行く銀時は魔力切れで動けなくなつたためぐみんを背負い、その後をヌルヌル状態のアクアと長谷川がトボトボとついてきている。

「うぐつ……ぐすつ……空飛ぶの怖いよう。私は小惑星アクシズじゃないよう……」

「参つたな。こいつあ相当なトラウマを負つちまつたようだぜ」

「全部お前のせいじゃねーか!」

まったく悪びれもしない銀時に怒りの箆つたツツコミを入れる。今回の被害はほぼすべてこの男のせいなのだから長谷川が怒るのも無理はない。

「私だつて泣きたい気分です。額に肉と書かれるなんて、我が人生始まつて以来最大の屈辱です」

「はっ、そいつはお前のせいだろーが。洗つていればそのうち消えっから、しばらくはその屈辱とやらを甘んじて受けやがれ」

「ぐぬぬ〜! この恨み、いつか必ず晴らしてみせようぞー!」

「おおいぜ? そしたら更に倍返しだがなあ?」

「うっ……。 や、やつぱりここは穩便に話し合ひましょう! なんとつて、私たちは命

を預けあつた戦友同士なのですから！」

あつさりと口喧嘩に負けたためぐみんは、仲良しアピールをするように銀時の首に腕を回してギュツと抱きつく。年齢以上に子供っぽい彼女は男性との距離感が異様に近く、これだけ密接にスキンシップをしてもまったく気にしない。もし、女性に免疫の無いカズマだつたらムラムラしていたところだろう。

しかし、身も心もアダルトな銀時にとつては子猫にじやれつかれている程度でしかない。大体、この手のやり取りは色気もクソも無い神楽で慣れているので、13歳のクソガキにペツタンコな胸を押し付けられても哀れに思うだけだつた。

「それにしても、爆裂魔法以外使えねえつてのは意外だつたなあ」

「おいおい、意外なんて言葉で済まねえだろ長谷川さん。あんな威力じゃ狭い場所ですえねえし、連発すら出来ねえんだから、状況次第じゃクソの役にも立たねえぞ」

「うぐつ！ いちいちごもつともな意見ですが、爆裂魔法の真価はその程度の事で霞んだりはしませんよ！ どんなに強大な敵も一撃で葬り去ることが出来る絶対的な破壊力！ そして何より、私のハートを魅了して止まない圧倒的な爽快感！ どれをとつても爆裂魔法以外に代わるものなどありません！」

「ソレのせいで死にかけたのに、どんだけ爆裂魔法が好きなんだテメエは!? 愛を通り越して、もはや正気を疑われるレベルじゃねーか！ ねえちよつと、この子ヤバイよ！

爆裂魔法の使い過ぎで頭がおかしくなっちゃってるよ!」

「勝手に人を危険人物に仕立てないでもらおうか!」

一方的な意見に怒ったためぐみんは、すかさず抗議する。とはいえ、そう言われても仕方が無いほどに彼女の爆裂愛は深かった。

「誰になんと言われようとも、私は爆裂魔法しか愛せない! 例え魔法を使った後におんぶしてもらおうことになるとしても! 爆発音に引き寄せられたモンスターの子で更なるピンチを招くとしても! それでも私は、爆裂魔法しか愛せない! それが爆裂道を進むと決めた私の運命なのだから!」

「ひたすら迷惑な運命だなあ、オイ!」

バカな宣言を堂々としてみせるめぐみに流石の銀時も呆れてしまう。その熱意だけは賞賛に値するが、命懸けでやるもんじゃねえ。

「でもよお、最強の魔法が使えるってのは確かなんだし、後はレベルを上げて連発出来るようになればマジで最強なんじゃねーの?」

「そう、そうですね! ハセガワの言う通りです! 私はまだレベル6だし、成長すれば爆裂魔法だって連発出来るようになるはずです!」

意外なところから援護射撃が来たので、調子よくそれに乗っかる。実際、爆裂魔法を連発できるようになれば最強と呼ぶに値する魔法使いになれるし、彼女にはその素質が



ある。

しかし、めぐみんを背負った時に銀時は気づいてしまった。ある部分の成長は諦めるしかねえだろうと。

「確かに、こいつが最強の魔法使いになれる可能性は十分にある。それは俺も認めてやる。だがな……おっぱいの成長は絶望的だ。これだけ密接してもまったく感触が無えほどの絶壁じゃあ、巨乳になる可能性はほとんど無えよ。おっぱいソムリエの資格を持つてる俺が言うんだから間違いないねえ。こりゃあ、お妙と同じ貧乳キャラで確定だぜ」

「なっ……なんですとおおおおっ!!?」

予想外の方向からマイナス評価を受けて愕然とする。まさか、爆裂魔法よりもこの忌々しき貧乳をダメ出しされるとは！

「っわけで、やっぱお前はいらねえわ。ついでにこの駄女神とも別れるから、後はバカ同士で仲良くやれや。ああ、こつちのことは気にすんな。てめえらの代わりにビアンカとミネアを仲間にするから」

「この人でなし!!!?」

自分の気持ちに忠実な銀時は、問題だらけの女どもをあつさりで見限った。こちらら慈善事業で問題児の面倒を見ているわけではないのだ。異性とパーティーを組むのなら、

常識と巨乳を持った美女がいい。

「ひ、酷いです!? 私というものがありませんが、ビアンカやミネアなんて人にまで手を付けていただなんて! 巨乳になるまで面倒見てくれるって約束は嘘だったのですかーっ!!」

「っていうか、さりげなく私までリストラしないしてほしいんですけど!? 可憐で健気なこの私があれば尽くしてあげたのに! たった2週間で他の女に鞍替えしようとするなんて、絶対に許さないんだからあつ!!」

突然ピンチに陥ったためぐみんとアクアが必死に抵抗する。自活していく力の無い彼女たちにとって、D.Sの銀時でもいてくれないと困るのだ。

お互いに未来を危惧した2人は、銀時に抱きついて考えを改めるように懇願する。

「銀時さあああああんっ! これからは心を入れ替えて一生懸命働きますから! 得意の宴会芸で毎晩もてなしますから! だから、どうかリストラだけは許してくださいさあああああいつ!!」

「ええい、離せバカヤロー! カエルにすら勝てねえカスは勇者パーティーにはいらねえんだよ! 回復魔法を使う前にやられちまう駄女神と攻撃魔法を一発しか使えねえ中二病など、造作も無く捨ててくれるわ!」

「うわあああああんっ! それだけは勘弁してくださいさああああいつ!? どんなこ

とをしても巨乳になってみせますから！　お願いです！　私を捨てないで下さあああああいつ!!」

もう後が無いめぐみんたちは、懸命な抵抗を見せる。めぐみんは背中からの「だいしゅきホールド」で小振りな胸や太ももを密接し、アクアは正面から抱きついて、その豊満な胸を彼の胸板に押し付ける。一見すると「リア充爆発しろ」状態なのだが、アクアは生臭いし、めぐみんは色気無しで銀時にとつては嬉しい事など一つも無かった。

それどころか、彼らの騒ぎを遠巻きに見ていた若い女性達から妙な勘違いをされてしまう。

「やだっ！　あの死んだ魚のような目をした男、2人の女の子を捨てようとしてるー！」

「ロリコンよ！　真正のロリコンだわ！」

「あんな小さい子をもてあそんで捨てるなんて、とんだクズね！」

「それに、青髪の子は謎の粘液まみれになってるわよ！」

「見てっ！　隣にいるオジサンもヌルヌル状態なんですけど！　あれがいわゆる両刀使  
いって奴なの!？」

「うわあああああ！　4人同時だなんて、一体どんなプレイをしたのよ、あの変態ー！」

黙って聞いていたら好き勝手言われていた。これは主人公として由々しき事態である。後ろを見れば、この状況を好機と見ためぐみんがあくどいドヤ顔をしているじゃあ

りませんか。ここは早めに手を打たないと、後々悪い噂が広まりかねない。

「お前から勘違いすんじゃないよ!!」 誰が好き好んでこんなガキンチョ共に出すかってんだ!! 俺が好きなのは、結野<sup>けつの</sup>アナのような大人の女であって、ケツの青いロリっ子なんざこれっぽっちも眼中にねえよっ!!」

弁解しようとしたらものすごく逆効果になってしまった。

「きやーっ!!」 あの男、公衆の面前でお尻の穴が好きとか言い出したわよ!!」

「きつと、あそこのオジサンとくんずほぐれつしてるのよ!」

「変態よ! お尻の穴が好きだなんて、まぎれもない変態だわ!」

銀時の説明を更に勘違いしたギャルどもは、完全に危険人物を見るような目で警戒しだした。

ちなみに結野<sup>けつの</sup>アナとは、江戸のテレビでお天気お姉さんをしている結野クリステルという名の美人アナウンサーのことだ。銀時は彼女の大ファンで、今でも理想の女性となっているのだが、そんなどうでもいい情報をこの異世界の少女達が知っているわけもなく、どれだけ言い訳しても通用しなかった。

「いや、俺が言ってるのはケツの穴じゃなくて結野<sup>けつの</sup>アナのことだからね!!」 そりゃあ、結野<sup>けつの</sup>アナのケツの穴には興味あるけど、それは結野<sup>けつの</sup>アナのケツの穴だからであってケツの青いガキのケツの穴も好きってわけじゃねえぞ!!」 大体、俺が好きなのはケツの穴

じゃなくて結野アナだ！ それをケツの穴と間違えるなんざ失礼にもほどがあんだろ  
!？」

「失礼なのはお前の方だろ！ 女子の前でケツのあな連呼するとか、今時小学生でもやらねーよ！ つーか、好きな女の名前を使ってセクハラするってどーなのよ!？」

「別におかしなことじゃねえだろお？ 愛ってヤツは人の心に変化を齎すモンだからな、その思いが強いほど心も歪んじまうんだよ。爆裂魔法に惚れちまったこいつのようにな」

「私の爆裂愛をあなたのセクハラと一緒にしないでもらおうか!？」

銀時の暴走に巻き込まれためぐみんが顔を赤くしながらつつこむ。弁解しようとしていたはずが、いつの間にか少女たちを困らせることに喜びを感じてしまったらしい。なんかもう、ドSというより小学生の悪ガキである。実にジャイアンタイプの彼らしいエピソードだが、流石にこれ以上評判を落とすわけにはいかない。

落ち着いて話し合った結果、2人をリストラする話は一時保留にして、今後の活躍に期待することとなった。

「いいかお前ら！ ルイードの酒場で放置プレイされなくなかったら、ケツの穴引き締めて俺の役に立ってみせろや！」

「うわーんっ！ 崇められるべき私が社畜のような扱いを受けるなんてえ！ この世界

には神も仏もないのおーっ!？」

「お前が神だろバカヤロー」

不当な扱いを受けたアクアは、自身の不幸っぷりを嘆く。一応希望通りになったのに状況が悪化しているような気がするのにはなぜかしら？

「な、なんとという暴君ぶり……もしかして私は、選択を誤ってしまったのでしょうか？」  
やたらとイイ笑顔を浮かべながらブラックな指示を出す銀時を見て、ちよっぴり先行きが不安になるめぐみんであった。

## 第9訓 美女には裏の顔がある

ジャイアント・トード討伐クエストをクリアしてアクセルまで戻ってきた銀時たちは、真つ先に公衆浴場へと向かった。アクアと長谷川は生臭い身体と衣服を一刻も早く洗浄したかったし、めぐみんもまたマジックペンでおでこに書かれた『肉』の字を消したかったからだ。

「おいお前ら、風呂に入るまでは俺に近づくんじゃねえぞ。こつちまで変態プレイ仲間だと思われたくねえからな」

「「こいつ……いつか絶対に泣かす!!」」

汗を洗い流すために同行してきた銀時は、彼らの神経を逆なでするような暴言を吐く。1人だけ仲間外れになるのが寂しくてついてきたクセにDSな口撃をしてくるとは、非常にめんどくさいツンデレ野郎である。

とはいえ、クソリーダーとケンカするのは後でいい。アクア達は早歩きで公衆浴場に到着すると、無言のまま中へ入っていく。

もちろん混浴ではないので男女別々だ。開放的な気分になったアクアとめぐみんは、女性専用の脱衣所で人目を気にせず服を脱ぎだす。

「先に行つてゐるわよ、めぐみん！」

早く汚れを落としたいアクアは、素早く真つ裸になるとヌルヌルの服を放置したまま風呂へと駆け込む。

一方、置いていかれたためぐみんもおでこに書かれた文字が気になるため、急いでパンツを脱いでから彼女の後を追う。

「私も早く呪いの刻印を消さなくては」

銀時にやられた悪戯書きを洗い落とすべく洗い場へと向かう。そこでは先に入ったアクアが髪を洗っており、めぐみんはその隣に座つて目の前にある鏡を覗き込む。

「まったく、花も恥じらう乙女の額に『肉』などという生々しい文字を書き込むなんて、頭がおかしいとよく言われる紅魔族の私ですら理解不能ですよ……」

大人気ない銀時の行動に対する怒りを再燃させためぐみんは、自虐的な文句を言いながら髪を掻き分けておでこに書かれている文字を確認する。するとそこには凶形のような左右対称の文字が書かれていた。

「……あれ？ 確か、ギントキは『肉』と書いたと言つてましたけど……」

どう見てもこれは彼女が思つていた『肉』の字ではない。それどころか、彼女の知っている文字ですらない。それもそのはず、銀時が書いた文字はこの異世界で使われていない漢字だったからだ。



しかし、元ネタのキン肉マンはおろか漢字そのものを知らないめぐみんにはまったく意味が通じなかった。漢字で書かれた『肉』の字は彼女にとつて未知の物で、侮蔑の意味が込められているなど分かるはずもない。それどころか、中二病的な効果のある魔法文字のように見えた。

「こ、これは……選ばれし者にのみ現れる特殊なルーン文字のようでカツコイイじゃないですか！」

「ぶふーっ！ まさか、そう来るとは思わなかったんですけど！ 流星はネタに生きてる紅魔族ね！」

予想外の反応を示すめぐみんがおかしくて隣に座っていたアクアが嘖き出す。まさか、キン肉マンから生まれた往年のイタズラネタを気に入る者が現れるとは。元ネタを知っている彼女が笑ってしまふのも無理はなかった。

しかし、事情を知らないめぐみんにとつては面白くない。よく分からない理由で笑われるのも不愉快だし、笑った拍子にプルプルと揺れる大きな胸が余計に忌々しい。

「ぐぬぬ〜！ こ立派な『肉』を持つているからつて調子に乗らないでもらいたいですねっ！」

ちよっぴりムカツと来たためぐみんは、自分には無い豊富な2つの塊をムンズと驚掴みにする。なんですかこれは……まさに圧倒的じゃないですか。アクアの巨乳を直に

触つて敗北感を抱いてしまふめぐみんだつたが、それ以上に嫉妬の炎が燃え盛る。

「アクアの『肉』は大きすぎてだらしなから、もつと引き締めたほうがいいと思いますよ！」

「あいたあー!? ちよつとめぐみん! 私の胸になにしちやつてくれたんのおよ!? そんなに強く掴んだら、ちよー痛いんですけど!? 握りつぶしても引き締まったりしないんですけど!」

爆裂娘に胸を揉みしだかれて悶絶する水の女神。ご覧のように、この時間の女湯は賑やかかつ艶やかな雰囲気にも包まれていた。

一方その頃、男湯の方ではマダオ2人がむさいオッサンたちと共に汗を洗い流していたが、描写しても誰得なのでバツサリと省略する。

風呂から上がった一行は、洗濯した服が乾いた後にギルドへやつて来た。クリアしたクエストの報酬を受け取るためだ。初歩的な内容だけに金額は少ないものの、冒険者として初めての稼ぎなのでちよつぱり嬉しい瞬間である。

「では、ジャイアント・トードの買い取りとクエストの達成報酬を合わせまして11万エリスとなります。ご確認下さいね」

顔馴染みとなった受付嬢のルナから現金を受け取る。これに昨日貰った報酬を合わ

せて、今回の収入は合計12万エリスとなった。銀時のパーティは4人なので、山分けすると丁度1人3万エリスとなる。命懸けの仕事にしては安い金額だったが、モンスタ―が身近にいるこの世界の社会背景を考えればこんなもんだらうと納得もできる。

そもそも、このパーティの連中が懸念すべき所はそこではなかった。金にがめつい銀時が報酬を分配する点にこそ問題があったのだ。

「それじゃあ、各人の取り分を発表しまーす。アクアは3回カエルのエサになったから3000エリス。長谷川さんは1回エサになって1匹倒したから6000エリスつてところだな。で、5000エリスの損害を出したためぐみんは、その分賠償してもらおうとして、残りは全部俺のモンな」

「「ちよつと待てええええええええええつ!!」」

あまりに横暴なリーダーにアクアたちが怒りだす。普段はやられっぱなしな彼らも金が絡めば黙っちゃいない。

「なによその偏りまくった分け方は!?! あれだけ身を挺した私の報酬がたったの3000エリスだけなんて、どう考えてもおかしいでしょ!?!」

「ああ? なに贅沢言ってるんでめえは。カエルのエサ代なんざ1回10000円もありや十分だろーが」

「私の命めっちゃ安っ!? 高貴な女神をお手ごろ価格な消費アイテムとして扱うなん

て、あんたどこまでゲスなのよ!」

「そーだぜ銀さん! 俺だつて結構命張つたのに、なんでカエルの肉代しか貰えねーんだ!」

「そんなことより賠償つてどーいうことですか!? 爆裂魔法が撃てれば食費と雑費だけでもいいとは思つていますが、流石にマイナスは納得できませんよおー!」

アクアのツツコミを皮切りに長谷川とめぐみんも反旗を翻す。こうなりやもう肉体言語で交渉するしかない。

受付にいるルナが呆れた様子で見つめる中、4人のバカによる激しい討論(ケンカ)が始まる。

「このおとおお! そのお金をよこしなさいっ!」

「へっ、誰がやるかバカヤロー! これは全部俺のモンだー!」

「あのおく、こんなところで暴れられたらとつても迷惑なんですけど……」

困ったルナが控えめな言葉で注意を試みたものの頭に血が上っているバカ共が聞くわけも無く、野蛮な話し合いはしばらく続いた。

「今だ、アクアちゃん!」

「私たちが抑えている間に必殺の一撃を!」

「行つけええええ!! ゴツドドライブシユート!!」

「つて、それ銀さんのゴールデンボールうううううううううう!!」

最後はアクアが動きを封じられた銀時の金た〇を蹴って決着がついた。金に目が眩んだ愚かな男は金〇まをやられて悶絶し、勝利者となったアクアたちは大事な給料を奪い取ることに成功した。危ない所だったが、今回の報酬は無事に山分けされたのである。

「ち、ちくしょう！ 俺の持ち金だけでなく金〇ままで奪おうとしやがつて！ テメエら、どんだけ金に汚えんだ！」

「それはこっちのセリフだよ！ 報酬を独り占めするお前の方がよっぽど金に汚えじゃねーか！ 碌に洗ってねえ金〇ま並に汚れまくってんじゃねーか！」

まったくもってその通りである。大体、金の使い方が汚い「遊び人」に報酬の管理を任せること自体が間違いなのだ。

「ええい！ たったの3万ぼつちじやババアだらけの三流キャバクラでしか遊べねえ！ こうなりや次は、もつと高額報酬が貰えるクエストをやんぞ！」

金的攻撃から復活した銀時は、ヨコシマな欲望に燃えながら掲示板へと足を向ける。痛い目に遭ったばかりなのにまったく悪びれていないようだ。アクアたちはその様子に呆れながらも、彼の後についていく。彼女たちもまた自分の欲望を満たすためにクエストを望んでいるのだ。

「さて、次はどれにするかねえ……」

「ここは思い切つて、一番報酬の良いやつを選びましょうよ！」  
「でもよお、そういうのつてすげえ危なそうなのばつかだぜ？」

掲示板に張られた紙を見た長谷川がアクアの意見に待ったをかける。手頃な難易度のクエストはすべて午前中に取られてしまつていたので、今は碌な物が無いのだ。すべて危険なものばかりで、とてもではないが初心者ができるものではない。

しかし、自身の使う爆裂魔法に対して絶対的な自信があるめぐみんは、あえて無謀なクエストを選択する。

「ギントキ、ギントキ！ これにしましょう！ 最近人里の近くで目撃されているという巨大熊の討伐クエストを……」

「バツキヤロウ！ テメエは熊の恐ろしさをまつたく理解しちやいねえ！ 熊つてヤツはなあ、少しでも対処法を間違えれば命取りになるほどヤベェんだよ！ 〔しろ〇まかフェ〕や〔く〇みこ〕の末路を見ればその恐ろしさがよく分かんだろ！」

「いや、〔しろ〇まかフェ〕や〔く〇みこ〕というものがそもそもよく分からないのですか……」

何やら危険な臭いのするクエストなので全力で却下する。大体、熊と戦うなんておつかねえじゃねえか。俺は坂田銀時であつて、ガキの頃に熊と相撲した坂田金時じゃねえ

んだぞ。なんて事を思いながら、楽しんで儲けられそうなものを探す。「それよりもこっちの方がいいだろ」

そう言つて銀時が指差した紙には『魔法実験の練習台探します。要強靱な体力が強い魔法抵抗力に自信のある方』と書かれていた。

「これならバカなアクアでも簡単にできるし、俺たちも安全だぜ?」

「ええそうね、なんて言うわけないでしょ!? 私だけ滅茶苦茶危険なんですけど、なんで私ばかりこんな役なの!」

「そりゃあ、お前が転生特典として手に入れた【道具】だからに決まつてんだろ? ちゃんと俺のアイテム欄にお前の名前が表示されてるぜ? ダメガミ・アクアってな」

「なにそのドSなウインドウ!? この私がアイテム扱いだなんて、いったいどーいうことなのよ!」女神の私に人権は無いの!? ホイミンどころかやくそう程度の扱いなの!?! というか、ファミコン風のカタカナ表示が余計にイラツと来るんですけど!?!」

改めて現実を突きつけられたアクアは、元気にツツコミを入れながらも恐怖する。このままではこのドS野郎に身も心もしゃぶりつくされてしまう。天邪鬼な銀時としては『生活力ゼロなお前の面倒を見てやつてんだからそれなりに恩を返せ』と思つていただけなのだが、表面的な態度だけを見てみると鬼畜なクズ野郎でしかないので、アクアが危機感を抱いてしまうのも無理はなかった。

更に迷惑なことに、彼らの会話を聞いていた長谷川たちが良からぬ妄想を抱いてしま  
う。

「あつ、やべえ……銀さんがアクアちゃんを【道具】として使ってる様子を想像したら、  
なんだかムラムラしてきた……」

「ま、まさか!? ギントキとアクアはそんな爛れた関係だったのですか!」

「ちよつ!? 違うわよ!? 2人がナニを勘違いしたのかは詳しく聞かないけど、私たち  
はとつても清い関係だからね!? 私は高貴な女神様で、こいつはしがない下僕だからね  
!!」

「という設定で、強者と弱者の立場が逆転するってシチュエーションのSMプレイを楽  
しんでいるんだぜ?」

「……不潔ですね」

「そんな分かりやすい嘘をあつさり信じないで欲しいんですけど!」

劣勢に追い込まれたアクアは、めぐみんから送られてくる軽蔑の視線に焦る。

違うのよめぐみん! この私は清らかなる水の女神なんだからね! ポカリ〇エツ  
トのようにちよつと濁った水じゃなくて、どこまでも透き通った汚れ無き天然水なんだ  
からね!

そう言い訳しようかと思つたが、諸悪の根源をどうにかしなきゃ意味が無い。水の女



神としてのプライドを懸けて魔王のようなドS野郎に立ち向かう。

「とにかく私は、あんたなんか束縛されたりしないわよ！ 我々は、ジャイアン以上に横暴なリーダーに対して待遇の改善を要求する！」

「あつテメツ、神様のクセに俺との契約を破るつもりか!?」

「そんな契約、結んだ記憶はありません〜！」

「コイツつ、都合が悪くなった政治家みてえなこと言いやがつて！ それでも女神かコノヤロー!!」

「あんたこそ、女神の私を魔法の実験台にしようとするなんて！ それでも主人公かバカヤロー!!」

売り言葉に買い言葉で口汚いケンカを始める2人。非常にみつともない光景だったが、誰も止めようとはしない。長谷川にとつてはいつものことだし、変態プレイの一環だと思ってるめぐみんは変な想像をして顔を赤くするばかりである。

しかし、そんな近寄り難い空間に自ら飛び込む勇者が現れる。

「ならば私が、あなたの代わりに魔法の実験台となろう」

「……ほえ？」

凜とした女性の声が聞こえたのでそちらに顔を向けると、そこには金髪の女騎士・ダクネスがいた。数日前、焼きそばパンを買いに行かせたきり音沙汰が無かった彼女が再

び舞い戻ってきたのだ。

銀時たちにとつては久しぶりの再会で、めぐみんとは今回が初めての顔合わせである。当然気になったので、いきなり現れたダクネスについて聞いてくる。

「ねえギントキ、この人は何者ですか？」

「何者もナニもコイツはタダの通りすがりの変態だ。知り合いと思われたくねえから全力で無視しとけ」

「了解です。道端に転がっている石コロだと思うことにします」

「くはあんっ!? 2人揃って見事なまでのドS口撃!!」

もはや師弟の関係になりつつある銀時とめぐみんのドS対応に悦んでしまうダクネス。辛辣な行動も彼女にとつてはご褒美でしかなかった。ぶっちゃけ、ロックオンされている銀時としてはこれ以上係わり合いになりたくない人物である。だが、魔法の実験台にされそうなアクアにとっては渡りに船だった。

「ところでダクネス。私の代わりに魔法の実験台になってくれるって話は本当かしら？」

「ああ本当だとも！ 私は防御系と挑発系のスキルに全振りしているからな。たとえば爆裂魔法の直撃を受けても耐えられる自信があるぞ！」

危険を承知で名乗り出たダクネスは、アクアの質問にイイ笑顔で応える。DMな彼女

にとつては爆裂魔法でさえ快楽を得るための手段でしかなかったのである。しかし、愛する魔法を軽く見られたためぐみんにとつては聞き流せる話ではない。

「ほう、それは聞き捨てなりませんね。我が最強の爆裂魔法に耐えられる者がいるなど、到底信じられません」

「ならば直に確かめてみるか？」

「ふっ、望むところです！」

「いや、むしろ私の方こそ望むところだ！ 最強の攻撃魔法と謳われる爆裂魔法を受けた私は、今だかつて味わったことのない痛みを強いられることだろう！ 更に、鎧や衣服は魔法の衝撃で無残にも吹き飛び、裸同然となった私の身体は周囲で見物していたむくつけき男達のいやらしい視線に晒されて心すらも辱しめられてしまうのだ！ ああ、想像しただけでもゾクゾクするっ!!」

爆裂魔法を食らった状況を想像して身悶えるダクネス。その様子を見た長谷川は、ちよっぴり興奮しながら銀時に忠告する。

「なあ銀さん。この子、想像以上にヤバイんじゃない?! エロい妄想が少年誌の限界を突破しそうなんだけど!」

「ああ、どうやら俺たちは異世界のエロ文化を舐めていたかもしれないねえな。触手プレイとか普通にやってそうだから、もしかするとT O L O V Eる以上にエロい展開も有り

得るぜ」

「おいマジかよ!? 小学生すら裸にしちまうT。LOVEる以上にエロくなったら、もはやR—18作品じゃねーか!？」

「ああそうだ。俺たちは今、エロ表現の先駆者である矢吹健○朗を超えて少年誌の限界に挑戦するのだ!」

「そんな挑戦、この私がやらせないわよ!？」

いい年こいて中学生みたいな話題で盛り上がるオッサンどもにアクアが噛み付く。自称女神としては、悪魔っぽい美少女が活躍する漫画を認めるわけにはいかないのだ。

まあ、現時点で気にするべきは別の意味でR—18作品にしてしまいそうなDM騎士の動向についてなのだが。

「それにしても、我が主に会いに来た矢先に爆裂魔法で吹き飛ばされる機会が訪れようとは、何たる僥倖! やはり、我が主にこの身を捧げることを選んだ私の決心に間違いはなかった!」

銀時たちが言い争っている間に我に返ったダクネスは、自身に舞い込んだ幸運を喜ぶ。彼女もまた、めぐみんと同じくポジティブ思考のメンドイ女だった。

「おい、メス豚! 俺はテメエを下僕にすると認めた覚えはねえぞ? こちとら既に駄女神一匹飼ってたんだからな! 焼きそばパンすら買ってこれねえ役立たずを養うほど

の余裕は無えよ！」

「ちよつ!? 私ってば飼われてたの!?!」

「アイテム扱いよりはいいだろ? 物から生物にクラスチェンジ出来たんだから」

「まったくもって良かないわよ!?! アイテムからペットになったところで根本的にアウトでしょ!?!」

勝手に話を進めるダクネスにムカツとして銀時が言い返す。そのセリフに対してアクアが何かを言っているが、彼女のたわごとを聞いている場合ではない。

考えてみて欲しい。もし猿飛あやめが神楽並に出番があったら……銀魂は変態仮面並みのアブノーマル漫画と化してしまうだろう。流石の銀時もパンティーを被るような主人公と同列にはなりたくない。

「俺の面子を保つためにも、コイツをレギュラー化するわけにはいかねえ!」

思いつきり自分のために並々ならぬ決意を固める。しかし、事態は彼の思い通りには進まなかった。

「それならば問題ない。私はあなたの命令通りにヤキソバパンを手に入れて来たのだからな!」

そう言うどダクネスは、右手に持っていたバスケットを持ち上げた。そして、上にかかっている布を取ると、そこには焼きそばパンが3つ入っていた。それも、銀時たちが

いた世界の物とまったく同じに見えるほどの完成度である。

「えっウソ、ホントに買って来ちゃったの!? 冗談で言ったのに、マジで焼きそばパンが存在してんの!? そんなの出てきたらファンタジー感台無しなんですけど! 昼休みのハイスクール感丸出しなんですけど!」

あまりに意外なアイテムの出現に銀時は驚く。まさか、冗談で言った物が本当に売っているとは思わなかった。異世界にも炭水化物と炭水化物を合体させるクレバーなヤツがいるんだなど変なところで感心してしまう。だが、よくよく考えれば特に不思議な話でもない。恐らくは、焼きそばパンを知っている他の転生者が作ったのだろうと思いつく。

実際は少し事情が異なるのだが、そんな事など知るよしも無い銀時たちは勝手に納得して話を進めていく。

「何だかとってもイイ匂いですね。初めて見ますが、この食べ物は何ですか?」  
うろたえる銀時を他所にバスケットを覗き込んでいためぐみんが興味深そうに尋ねてくる。ちよっぴり腹ペコキャラの属性もある彼女は、食欲を刺激する匂いに反応してすぐさまロツクオンしたのである。

更に、食い意地の悪さに定評のあるアクアも狙いを定めてきたからさあ大変。食欲に逆らうことなく目の前の獲物に手を伸ばす。

「へえ、美味しそうな焼きそばパンね。味の方はどうなのか私の舌で確かめてあげるわ！」

「とか言いながら全部持つてくんじゃねえ?」

「そうですよアクア! 独り占めなんて許しません!」

暴拳に出たアクアに銀時とめぐみんが怒って、ついに焼きそばパン争奪戦が勃発してしまう。

「オラオラアアアア! 俺の焼きそばパンを返しやがれえええええ!」

「うりやうりやあああああ! 私のヤキソバパンを返してくださいいいいいいい!」

「うにゃーっ!? ほっぺたいひゃいいいいいい!」

ケチな銀時と腹ペコなめぐみんにほっぺたを引っ張られる駄女神アクア。それでも、手に掴んだ焼きそばパンを必死に守る彼女に流石の長谷川も呆れてしまう。しかし、2人のSに攻められているアクアを見たダクネスは逆にテンションを上げまくる。

「くうっ! アクアばかりずるいぞ! この私の顔も激しくつねりまくってくれ!」

「ちよっ、君だけ目的違うんですけど!?! 焼きそばパンそちのけで快樂というご馳走を貰いたがつてるんですけど!?!」

ドM騎士の参戦により掲示板の前は更にカオスな状況になっていった……。

数分後。不毛なケンカに疲れた3人は、仲良く1個ずつ分け合うことで決着を付けた。最初からそうしろと言いたいところだが、バカに正論を言っても『この世は弱肉強食なんだよバーロー』と返されるだけである。

しかし、焼きそばパンを食べ終えた3人は、憑き物が取れたように満ち足りた表情になつた。

「「大変美味しゅうございました」」

「あれ、なんかキャラまで変わってね？」

先ほどまでの殺伐とした雰囲気などどこへやら、急に行儀が良くなつた銀時たちを不審がる。一体彼らにナニが起こつたのだろうか。

「あの……さっきは焼きそばパンを独り占めしようとしてゴメンね」

「いや、今更謝らなくてもいいさ。あれだけ美味しい焼きそばパンなら全部食いたくなる気持ちも分かるぜ」

「それに、最後は仲間全員で幸せを共有できたのですから結果オーライじゃないですか」  
「ええそうね！ 美味しい焼きそばパンのおかげで私たちの絆は更に深まつたわ！」

「ああ、俺たち3人は最高のパーティだ！」

同じ感動を味わつて感極まつたバカどもは、イラツとするほど爽やかな笑顔を浮かべて手を重ねあう。その様子を見ていた長谷川は、さりげなく仲間はずれにされているこ



とに気づいて憤慨する。

「おーいつ!? そのパーティの中に俺が入っていないんだけど!? 爽やかなフリして仲間の人をハブってるんだけど!? マダオにだって寂しいって感情はあるんだから、そーいうの止めてくんない!?!」

「私はむしろ放置プレイのようで心地いいぞ!」

「ドMと一緒にすんじゃねえよ! 俺はこれでもノーマルなんだ! 好きで永遠の夏休みという地獄を満喫してるわけじゃねーんだああああ!!」

ドMから羨望の眼差しを向けられて自身の境遇を嘆く長谷川であったが、そんなことはどうでもいい。哀れなマダオを無視して焼きそばパンの入手先に興味を持ったアクアが新たなアクションを起こした。

「ねえダクネス、この焼きそばパンはどこで買ったの?」

「ああ、そのパンはこの街にある「ウイズ魔道具店」というところで購入したんだ」

「え……魔道具店? なんで魔道具店なんかで食べ物売ってるの?」

いざ聞いてみたら怪しげな展開になってきた。主に对モンスター用のアイテムを扱っている魔道具店で売っている食べ物なんて、どう考えても怖すぎるだろう。

「なあめぐみん。魔道具店って人間の食べモノも売ってるの?」

「いいえ、そんな話は聞いたことがありません。でも、小型のモンスターやネズミを駆除

するための毒工サは売ってますね……」

「おおおおい!? さっきの焼きそばパン大丈夫なのかよ!? やたらと美味かったのは変なモンが混ざってたせいじゃねえのか!」

「ちよつ、変なモンってなんですか!? まさか、本当に毒が入ってたというのですか!」  
「イヤああああ!?! 焼きそばパンで死んだ女神とか後世に語られたくないんですけどおおおおい!?!」

恐怖に駆られたバカどもが仲良く焦りだした。確かめる術が無ければ根も葉もないデマも真実となってしまうのである。

「こんの駄女神エエエエ!? テメエがみんなで分けようなんて言い出すから、俺まで食っちゃまったじゃねえかああああ!?!」

「ええええええ!?! なんで私のせいにされるわけ!?! 元々アレはあんたの物でしょ!?!」

「違いますー! テメエが手に持った時点で所有権はソツチにありますー!」

さつきまで仲良くやっていたのに一瞬ですべてが台無しとなってしまった。残念ながら、こいつらの友情などこの程度であった。

とはいえ、このまま暴走させっぱなしでは話が進まないのです、ダクネスが助け舟を出す。

「落ち着けみんな！ それには毒など入っていない！ 私も期待して店主に聞いてみたのだが、普通のパンだと言っていたぞ！」

「いや、どこに期待してんだテメエは!?! もうそれDMを超えちゃってるだろ！ 画面が緑色になるだけじゃ済まねえだろソレ！」

「でも、毒が入ってないことが分かって一安心です……」

さりげなく危険なことを言っているダクネスはともかく、焼きそばパンの方は安全らしいので何よりである。

「それにしても女神の私に死の恐怖を与えるなんて、一言文句言ってやらなきや気が済まないわ！」

女神らしからぬ醜態を晒す羽目になったアクアは魔道具店の主に怒りをぶつける。すべての原因はアークプリーストの力で毒を中和できることを忘れていた自分のせいなのに、とんだクレーマーである。

「まったく、転生者のクセに恩ある私を困らせるなんて……」

大人気無いアクアは身勝手に責任転嫁して愚痴り続ける。その時、自分で言った言葉にハツとなった。そうだ、あの焼きそばパンを作ったヤツは転生者かもしれないのだ。そしてソイツは、チート能力を与えてあげた女神様に迷惑をかけた。

「（これはもう、私に対して誠心誠意の謝罪（慰謝料）が必要よねえ……）」

悪知恵を働かせたアクアは、いやらしい笑みを浮かべる。茂茂の時は失敗したけど、被害者(?)となった今度は上手くいくはずだ。もう既にたかる気満々となった駄女神は、すぐさま行動に移る。

「銀時! 明日のクエストは中止して、その魔道具店に行くわよ!」

「ああん? なんだよ急に? もしかして、さっきの焼きそばパンが気に入ったのか?

仲よし高校生じやあるめえし、んなもんテメエだけで買って来いよ。俺はもう、焼きそばパンなんざとつくの昔に卒業してんだからよ。つーか俺、購買のパンを自分で買に行ったことなんて一度も無いし? 大体、ツラとか辰馬に行かせてたし?」

「こいつ! 今、さらつと昔の悪事をぶつちやけやがった!」

アクアと違って魔道具店の主に興味がなかった銀時は、鼻をほじりながら適当に答える。確かにあの焼きそばパンはクセになりそうなほど美味かったが、食いたくなったらパシリ1号のダクネスを買いに行かせればいいだけだ。

「ちなみにお前はパシリ2号な」

「私に拒否権は無いのでしょーか!? つていうか、そんなことはどうでもいいわ! 今は大金をゲットできるチャンスなんだから!」

「ああ? そりやどーいう意味だ?」

「考えてもみなさいよ! 転生者の可能性が高いその魔道具店の主は店を持てるほど金

持ちなのよ？ たぶん、私が与えたチート能力で荒稼ぎしたからに違いないわ！ つまり、この私には感謝してもしきれないほどの大恩があるわけだから、私が頼めば喜んで資金援助をしてくれるはずだわ！」

「おお、なるほど。お前、結構頭良いな」

「ふふ〜ん！ 当然の賛辞ね！」

「いやいや！ ものすげえ頭の悪いアイデアだよソレ!? 女神じゃなくて悪魔が考えそうなことだよソレ!?!」

クズ過ぎる仲間たちに長谷川のツツコミが入る。こいつらマジで最悪だよ。一緒にいるだけでも恥ずかしい史上最低な兄妹だよ。

「ところでギントキ。さきほどから転生者という単語が普通に出ていますが、そんな存在が本当に実在するのですか？」

「ああいるぜ。何を隠そう、この俺様は大魔王バーンを倒した伝説の勇者が転生した姿なのだ！」

「ウソつけええええええ!!? なんでダイが天パのマダオに転生すんだよ！ お前なんか、ダイが出した大便みてえなモンだろーが！」

「んだとコラ!? マジでウ〇コそのものになったテメエと一緒にすんじゃねえよ！」

「あーそれ言っちゃう!? 忘れようとしてたのに、人のトラウマ掘り返しちゃう!?!」

めぐみんの質問を切欠に汚いケンカを始めるマダオたち。その様子を見た彼女は説明を聞くのが面倒くさくなり、結局、転生者の存在はうやむやになるのであった。

ただし、魔道具店の主に会うことは決定した。どうしてもいい思いをしたいアクアが駄々をこねたため、明日の朝からウイズ魔道具店へ行くことになったのである。

そして、店までの案内役としてダクネスも同行することが決まった。

「では改めて、今日からパーティに加わることとなったダクネスだ」

「はい、これからよろしくお願ひします!」

「私の従者として歓迎するわ!」

「いやあ、DMなのはアレだけど、オツパイ担当としては合格だぜ!」

「つて、勝手にDMを迎え入れてんじゃねえ!?!」

何だか知らないうちに不条理な強制イベントが発生していたらしいが、こうして銀時パーティに厄介な仲間が加わってしまった。



時間は飛んで翌日の朝。ギルドに集まった銀時たちは、朝食を取ってからウイズ魔道具店へ向かう。昨日までは興味の無かった銀時だが、店主と上手く付き合えばキャバ

クラ代くらい奢ってくれるかもしれないと思ひ直したのである。

ちなみにカズマは、桂たちとパーティを組んで初クエストに挑戦しているためこのイベントには参加していない。恐らくは、桂の強運が引き寄せたトンデモイベントに巻き込まれることになるだろうが、ギャグ補正があるから死にはしないだろう。

「ツラつちはああ見えて面倒見が良いからな。カズマ君もしつかり鍛えてもらえるだろう」

「ああそうだな。アイツがバカの仲間入りする日もそう遠くないだろう」

店へ向かう道すがら、この場にはいない桂。パーティを話題にして盛り上がる。寝坊した銀時たちを置いて先にギルドへ来ていためぐみんも出発する前の彼らと出会ったらしく、話のネタを提供する。

「エリザベスの話ではかなり報酬の良い仕事らしいですよ。カズマの顔が恐怖で引きつってましたから、相当ヤバイ内容なのでしょう。でも、カツラたちが一緒にいるから何が起きても大丈夫だと思います。なにせ、モンスターすら魅了してしまうほどの実力を持っていて『ドラゴンも股を広げる』と噂されていますから」

「ちよつ、なにそのアブノーマルな逸話!? なんかドラゴン発情してんだけど!? 金持ちにロククオンしたキャバ嬢みたいになつてんだけど!? そこは『ドラゴンもまたいで通る』的な話じゃないの!? スレイオーズのオマージュするところじゃないのーっ!」

めぐみんからもたらされた情報はあまり聞きたくないものだった。桂たちの武勇譚（？）はこの異世界でも着実に広まりつつあるようだ……。

そして、そんなバカどもと行動することになったカズマは酷い目にあっているらしい。変人の無茶振りに付き合わされるはめになった彼はいと哀れだった。しかし、彼らと同じくらい変人な銀時たちが、この程度のことと同情するわけが無い。それどころか、まとまった金が入る予定の彼らにたかる気満々である。

「まあ、ツラがモンスターとナニしようがドーでもいいとして、クエストの報酬が良いってんなら今日の晩飯はあいつらの奢りだな」

「ええそうね。丁度帰ってくる時間を狙ってギルドに戻りましょう」

「ダメだこいつら……どいつもこいつもナチュラルにクズだぜ」

「そこが2人の良いところではないか！」

「DMの常識なんて聞いてねえよ！ つーか、このパーティに常識あるヤツ1人もいねえ！」

店へ向かう道すがらバカな会話で盛り上がる。ちよつと聞いただけでもコイツらの駄目さ加減がよく分かる内容である。そんなバカどもに目を付けられた魔道具店の主もかなり幸運が低いようだ。ダクネスの説明では20歳くらいの美女らしいが……。

「みんな、店に着いたぞ」



桂たちの奢りで何を食うか話し合っていると、ダクネスから声がかかった。彼女が指差す先には、確かに小さな店がある。それは、同じような作りの建物が立ち並ぶ路地裏にぽつんとたたずむ「ウイズ魔道具店」だった。

「ここがウイズとかいう女のハウスね！」

目的地に着いた途端、アクアがすつごい活き活きとしてきた。流石は悪名高きアクシズ教の御神体である。身勝手な理由で恨みを晴らしにきたこの少女が本物の女神さまだとはエリス教の信者には到底信じられまい。

「ふうん……思ってたより儲かってなさそうだけど、出来る限りふんだくってやるわ！」  
「お前絶対女神じゃないだろ？ 言動が、かぶき町にいる女共と一緒だもん」

とても人様には聞かせられないセリフを吐きながら店のドアを開ける駄女神。

「覚悟しなさい、女神の怒りが籠ったありがたい天罰を直に味わわせてあげるんだから！」

実に迷惑極まりない事を言いながら店内を見ると、品出しをしている一人の女性が目に映る。ウェーブのかかった長い茶髪と素晴らしい巨乳を持った儂げな印象の美女だ。見るからに優しい雰囲気醸し出しており、まるでアクアとは正反対な存在である。

「いらっしやいませ〜！」

その巨乳美女は、アクアたちに気づくと朗らかに挨拶してきた。どうやら彼女がこの

店の主を務めているウイズらしい。そう判断したアクアは、話が早いとばかりに早速文句を言おうとした。しかし、その直前にとある異常に気づいて目を見開く。

「あ——っ!？」

何かに驚いたアクアは、ウイズと思われる女性店主を指差して大声を上げる。この女はまさか……!

「どうした駄女神。そこにいる巨乳美女を見て、いかに自分が汚れているか思い知ったか?」

「そんなんじゃないわよ!? っっていうか、アイツの方が汚れまくってるんですけれど! 心はおろか魂までも汚れまくってるんですけれど!」

銀時に茶化されたアクアがおかしな事を言い出した。普通に聞けば苦し紛れの悪態でしかないが、彼女の言っていることは半ば当たっていた。

「人間的にも社会的にも死んでる【リッチー】が白昼堂々街の中に現れるとは不届きなっ! 女神である私の手で成敗してやるっ!」

「きやああああああああ!？」

何を思ったのか、とうとうアクアが暴拳に出た。有無を言わせず店主の襟元を掴むとガクガク揺さぶり始めたのだ。

「やめてえええええ!?! 乱暴はやめてくださいいーっ!?!」

「リッチーの分際でナニ言ってくれちゃってんの!? やめると言われてやめてやるほど神様は甘くはないわ! 大体、女神たるこの私が不浄なアンデッドを見逃すはずはないでしょう! 悪魔に魂を売っておいて神にはーエリスもよこさない背信者なんか、女神の拳で消しとば……」

「落ち着け駄女神エ!!」

「ばぎゅっ?!」

興奮してゴッドブローを放とうとしたアクアの頭部に銀時のゲンコツが振り下ろされる。

「せっかくの金づるに何してくれちゃってんだ teme エは!? 確かに、貧乏な teme エがリッチなヤツを見ただけでイラツと来るのは分かるけど、いきなり殴りかかるのは大人げ無えだろ! 暴力だけでは何も解決しないってことをいい加減理解しやがれ!」

「問答無用で私を殴ったアンタに言われたくないんですけど!? っていうか、コイツはリッチじゃなくてリッチーなのよっ!? タダの金持ちじゃなくてリッチーなのよおっ!!」

痛む頭をさすりながら店主の正体をバラすアクア。それを聞いた本人も激しく動揺しているの、どうやら駄女神の言っていることは当たっているようだ。

「あわわわ、どうしましょう! おっかない人にバレちゃいました……!」

「えっ……バレたということは、本当にあなたはリッチーなのですか!？」

「はいそうです……私はリッチーのウイズといいます」

正体が発覚してしまったウイズは、めぐみんの問いかけに対して正直に答える。いきなりアクアに襲われて動揺したものの、本人は特に隠す気など無いようだ。どうやら見た目の印象通り素直な性格らしく、事情がよく分かっている銀時と長谷川は好印象を抱いた。

「なんだ、アクアちゃんは悪魔みたいなヤツだっけってんだけど、話してみたら結構良い子じゃねえか。オツパイもでかいし」

「ああそうだな。ナイスバディの美女だから不二子ちゃん的な小悪魔系なのかと思ったけど、人当たりも良くて最高の女じゃねえか。オツパイもでかいし」

「いやああああ!?! 堂々と私の胸見て変なことを語らないでくださいいいいいいい!?!」

「っっていうか、こんなならしないデカ乳ごときで私の言葉を流さないでほしいんですけどっ!?!」

エロ心丸出しのオツサン共にアクアがつっこむ。マダオたちにとっては巨乳美女の姿であれば大抵はオツケーなのだ。しかし、相手の恐ろしさを知っているめぐみんとダクネスは、セクハラを注意するのも忘れて体を震わせる。

「まさか……冒険者の拠点である街の中にリッチーがいるなんて……」

「どうしためぐみん。リッチーとやらが街にいたらマズイのか？ エリザベスがいる時点で何でもアリだと思うんだけど」

「それとこれとは話が別です！ 大体、リッチーというのはアンデッドの王と言われる伝説級のモンスターですよ？ 高レベルの上級職が束になっても勝てるかどうか分からないような存在が何で魔道具店を経営しているのか分かりませんが、いざ襲われたら私たちなどひとたまりもありません！」

「なん……だと……」

詳しく聞いてみたらとんでもない話だった。それが事実なら彼女たちが恐れるのも頷ける。あのダクネスすらも震えているのだから相当な大物なのだろう。

「私としては、手も足も出せず無残に敗北するのもアリだと思うが!」

「DMは黙って筋トレしてろっ!」

ダクネスが震えていたのは、恐怖からではなく変態的な悦びを感じていたせいらしい。彼女を基準に行動したらこちらの身がもたなそうだ。

実際、リッチーとは恐ろしい存在なのだ。歴戦の勇士である銀時は、めぐみんのセリフからその気配を感じ取っていた。

「ところでお前、さっきアンデッドとか言わなかった？」

「はい言いましたよ？ リッチーはノーライフキングとも呼ばれる最強のアンデッド……ようするに死者たちの王様です！」

めぐみんから説明を聞いてリッチーの正体を理解した銀時は顔を青ざめさせた。ぶつちやけると彼は怪奇現象の類が極度の苦手なのだ。つまり、ホラー的な存在であるウイズは彼にとって天敵とも言える女性だった。しかも、女神が敵意をむき出しにするほどの危険なモンスターだというのなら、一切躊躇することはない。やられる前にぶつ飛ばすのみである。

「金持ちと幽霊は俺の敵じゃあああああつ!!」

「ええええええええええつ!!」 なんですか、その偏見に満ちた敵意の向け方!? それに私はお金持ちじゃありませんつばああああああああつ!!」

急に手の平を返してきた銀時に襲われるウイズ。彼は自分の嫌いな物に対してまったく容赦が無かった。

必死に無抵抗を貫くウイズに銀時の洞爺湖が迫り来る。本来なら駄女神の暴力から守ってくれる主人公に攻撃された彼女の運命やいかに！

## 第10訓 美女には苦い過去がある

銀時一行がやって来た魔道具店で出会った巨乳美女は、驚くべきことに人間ではなかった。なんと、店主のウイズはアンデッドの王であるリッチーだったのだ。

「金持ちと幽霊は俺の敵じゃあああああつ!!」

「ええええええええええ!!」 なんですか、その偏った敵意の向け方!! それに私はお金持ちじゃありませんつてばあああああああ!!」

アクアたちの話を聞いて反射的に倒すべきだと判断した銀時は、問答無用でウイズに襲いかかった。

もし元の世界にいた頃の彼だったら幽霊的なリッチーを頭から否定していただろう。だが、異世界であるここではそうはいかない。自分も幽霊的な状態になって転生しちゃったし、なによりウイズ本人とアクアがその存在を認めてしまっているのだから、銀時が否定しても意味がない。

とはいえ、根性のひねくれた銀時は幽霊的存在を素直に認めることが出来ず、都合のいい妄想で現実を書き換えることにした。『異世界のスタンド(幽霊)なんて物理的に倒せるモンスターみたいなモンなんじゃね?』と。

「そーだよ。コイツは俺たち冒険者が倒すべきモンスターなんだよ！ 大体、ドラクエ5の主人公だってお化け退治をしてるじゃねーか！ 8歳程度のガキに出来て俺に出来ないことはねえ！」

テンパった銀時は、適当な理由をつけて無理矢理納得する。一応女神のアクアも倒したがっているし、めぐみんたちも脅威的な存在であると言っているのだから、もはや躊躇する必要はない。自分の安眠を妨げるヤツはナニがなんでも『悪・即・斬』だ。

「この世にどんな未練があろうと、つべこべ言わずに成仏せえやああああ!!」

「いやあああああつ?! 助けてエリス様あああああつ?!」

「リッチーの分際で神に助けを求めないでほしいんですけどー！」

いきなり襲われたウイズは、リッチーとなつた今でも信仰している女神エリスに助けを乞うた。悪魔に容赦のない本人(?)が聞いたらアクア以上に攻撃してきたかもしれないが、幸いながらここにいるのはおバカな駄女神だけなのでツツコミを入れられる程度で済んだ。

しかも、皮肉なことに、エリスと深いつながりのあるダクネスがウイズの助けに入った。上段から降りおろされた木刀を自らの身体で受け止めたダクネスは、荒ぶる銀時を諫める。

「止めてくれ、我が主！」



「ダクネスどけっ！ そいつ殺せない！」

「いいやかぬ！ 騎士として、無抵抗の者を攻撃するなど許しておけない！」

ダクネスは、このタイミングでようやくまともなことを言い出した。

「確かに彼女はリッチーかもしれない！ だが、穏便に話が出来のだから、ひとまず事情を聞くべきだろう！ 本当に倒すべきか判断するのはその後からでも遅くはあるまい！ それでも我が主の覚悟が変わらぬというのであれば、私を倒していくがいい！」

そう言うときダクネスは、バツと両腕を広げて勇ましく立ちはだかった。

「仲間だからとて遠慮は無用だ！ 私の覚悟も当の昔に出来ている！ たとえこの身が情け容赦ない斬撃に打ちのめされようとも、騎士の誇りにかけて耐え抜いてみせる！」

さあ、早くかかって来い！ 清らかな私の身体を、その堅くて太い棒で思う存分痛めつけてみせるがいいっ！！ もう嫁にいけなくなるほど、激しく攻めてみせりゅが  
いいいいいいっ！！」

「どさくさにまぎれてナニ言ってるやがんだよ!? もうソレお前を喜ばせるだけじゃねーか！ ドMの欲望満たしてるだけじゃねーか！」

自分の欲求に負けたダクネスに銀時たちが呆れる。かつこよくウイズをかばっていたのかと思っていたら、結局いつものアレでした。

とはいえ、バカなドMのおかげで、ウイズに弁明のチャンスが生まれた。

「あのっ！ 私には本当に敵意なんてありません！ この街で平穩に暮らしているだけなんです！」

「はああああ!? 神の敵であるリッチーがなに言っちゃってんの？ そんな話、信用出来るわけないじゃない！ どうせ、裏でアクドイことでも企んでたんでしょ？ ええそうよ、きつとそうに違いないわ！ あの焼きそばパンにリッチー菌を練り込んで、この街の人間を全員アンデッドにしようとしてたんでしょ!? バイオハザードを起こして『かゆ、うま』状態にしようとしてたんでしょ!?!」

「そんな恐ろしいこと、悪魔だつてやりませんよ!? つていうか、『かゆ、うま』つてなんでですか!?!」

とんでもなく迷惑なアクアの言いがかりに、良識人のウイズが驚く。どう見ても彼女の方が被害者であり、営業妨害以外の何者でもなかった。

「なあ銀さん。アクアちゃんはああ言つてつけど、やつぱあの子は良い子なんじゃね?」  
「ああそうだな……駄女神とは比べモンにならねえくらい神々しいぜ」

さしもの銀時も長谷川に同意せざるを得ない。だつて、あの姉ちゃんの方が碌でもない駄女神より女神っぽいもん。散々迷惑をかけられているのに、キレるところか命懸けで和解しようとしているのだから、こちらの方がよっぽど悪魔的である。

「つたく……認めたくはねえが、ダクネスの言つてたことが正しいかもしれねえな」

銀時は、涙を浮かべながらアクアの横暴に耐えているウイズを見ている内に、事情を聞いてやる気になった。駄女神とじやれあっている(?)彼女からは、幽霊的な恐怖を感じなかったからだ。

「ほーほっほっほー! 女神に抱かれて逝きなさいああああい!」

「いやあああああつ!? 消えちやう、消えちやう!? 私の身体が消えちやい  
まああああああすつ!!」

なんか、アクアに抱きつかれている間にウイズの身体が透けてきたような気もするけど、きつと気のせいに違いない……。

「おー! すごいですよギントキ! アクアの攻撃がリッチーに効いてますー!」

「はあく? お前はなにを言ってるんだ? あいつらはただ、レスリングごっこして  
るだけじゃねーか」

「でもあの人、浄化されかかって身体が半透明になってますけど……」

「バ、バーカ! あれはアレだよ! 綺麗な肌には透明感があるとか、そういう感じのヤ  
ツだろーが! あんな巨乳に育つほど健康的でイイ女なら、身体が透けても不思議じゃ  
ねえだろ!」

「いやいや、健康的どころか死んじやってますけど、あの人!」

ウイズが半透明になっている理由をめぐみんにつっこまれるが、無茶な言い訳で無

かったことにする。

とはいえ、このままアクアを放置したらウイズが昇天してしまうので、保護者として止めなければならない。

「おいコラ駄女神。みつともねえから、今すぐクレーマー行為を止めやがれ」

「ええええええつ!!? なにその急な手の平返し!!? アンタだつてコイツをぶつ飛ばそうとしてたじゃないっ!!?」

「ああん? この駄女神は、なに勘違いしちゃつてんの? さっきのアレは、その金髪DMを喜ばせるためにやった、SMプレイだっただろーが。『卑怯な暴漢から、か弱い女性をかばって一方的に攻撃される女騎士』ってシチュエーションだったんだよなあ、メス豚?」

「あひいん!? その通りだ我が主! 私の希望を見事に汲んだ素晴らしい演出だったぞ!」

「なにそのぶつ飛んだ言い訳!? どつちにしろ、迷惑以外の何者でもないんですけどっ!?!」

ある意味クレーマーよりも質が悪い銀時たちにツツコミをいれるアクアだったが、それはお互い様だった。

とはいえ、今の銀時にはウイズと敵対する意志は無い。とりあえず、彼女とじっくり

話す必要があるので、しつこく攻撃を続けようとするアクアを引きはがしてから、冷静に話しかける。

「おいウイズ」

「は、はいっ!?!」

「ここは一旦手を引いてやつから、お前がこの街に来た事情を説明してみな。それで俺達が納得出来たら、これ以上の手出しはしねえよ」

「ちよっ!?! 私を差し置いてナニ勝手に、はなぶふえっ!?!」

途中でアクアが乱入してきたが、頭を一発どついで大人しくさせる。

「ほら、このバカもすっかり聞く気になってつから、包み隠さず白状しやがれ」

「は、はいっ!?! あらいざらいお話しさせていただきますっ! ……みなさんに余計な不安を与えたくありませんから」

弁明の機会を得ることが出来たウイズは、一切躊躇することなくアクアを殴った銀時に恐れおののきつつも、これまでの経緯を話し始める。なぜ自分がリッチーとなり、この街へ住み着くようになったかを。

「私は数年前まで普通の人間でした。みなさんと同じように冒険者を生業として魔王軍と戦っていたのです。こう見えても結構名の知れたアークウイザードだったんですよ

……」

事情を話し始めたウイズは、憂いを帯びた表情になる。生前の記憶を思い出してちよっぴり切なくなつたのだ。冒険者として仲間達と過ごした思い出は、今も彼女にとって一番大切な宝物となつてゐるからだ。それを手放すきつかけになつたのも冒険者の仕事だつた。

「私は頼れる仲間達と一緒に数多くのクエストをこなして、勝利を重ねてきました。でも、そんな私達にも敗北する時が来てしまいました。ギルドの依頼を受けて戦いを挑んだ魔王の幹部に【死の宣告】という呪いをかけられてしまつたのです」

「なっ!？」

「死の宣告だど!？」

ウイズのかけられた呪いを知つて、めぐみんとダクネスが驚く。

「なんだよお前ら。死の宣告つてのはそんなにヤベエ呪いなのか？ 長谷川さんにかへられた【永遠の無職】を約束されちまう呪いぐらいのレベルか？」

「そんな約束された覚えはないんだけどっ!？」

「確かに、ハセガワにかけられた呪いに匹敵するほど危険ですね。あれは、拒絶不可能な死を約束させられてしまうというエゲつない呪いですから」

「いやだから、俺には呪いなんてかかつてないんだけど!？ さも当然みたいに話を続けないでくんない!？」



「なるほど……すでに死んでいるリッチーになつてしまえば死の宣告自体が無意味になりますし、魔王の幹部を倒せるだけの力も手に入りますね」

「はい、そうです。しかも、知り合いの助言を参考にして爆裂魔法も習得しましたから、火力も大幅にアップしました!」

「それはナイスな判断です! やはり爆裂魔法は、優秀な人物だけが選び取る最高の魔法なのです!」

「なに勝手に都合の良いことぬかしてやがんだ! お前は単なる爆裂バカだろ! バカの二つ覚えだろ!」

話の流れを利用して自画自賛するめぐみんにツツコミを入れた銀時は、ふと思った。中二病で爆裂マニアな上に自分大好きだなんて、やつぱコイツは本物のバカだぜ。しかも、厄介な爆裂ユーザーがもう一匹増えやがった……。一見まともなこの姉ちゃんも、頭のおかしい連中の仲間なのかと思うと、何だかやるせなくなつてしまふ……。――

「あの……なんで私のことを、そんなに哀れむような目で見つめるのですか?」

「まあなんだ、爆裂魔法で盛り上がるお前とめぐみんを見ている内に、こう思つただけだぜ。オツパイのデカイ女は頭が悪いとか言うけど、オツパイのサイズに関係なくバカはバカだつてな」

「ちよつ?! 爆裂魔法の話から、どうして胸が出てくるんですかー?!」



「どうか、私の胸について言いたいことがあるなら堂々と聞こうじゃないか!? でも、ウイズと比べるのは止めてください。流石の私も切なくなります」

「まったく堂々としてねえじゃねーか! おもいつきりウイズの巨乳に負けてんじゃねーか!」

「とうか、あなたは堂々としすぎですつ?!」

恥ずかしげもなく自分の胸を指さす銀時に、真つ赤になりながら文句を言うウイズ。流石のリッチーもセクハラ耐性はなかった。

「んなことより、話の続きをしてくんない? 回想が長いと、アニメのナルトみてえに不評を買っちゃまうからよ」

「は、はい……言葉の意味は分かりませんが、本題に戻ります」

『元はといえば、あなたが脱線させたせいなんですけど』……なんてことを心の中で思いつつも、素直に言うことを聞くウイズ。

「リッチーになるための禁呪を運良く手に入れることが出来た私は、苦難の末に禁断の力を得ることが出来ました。その瞬間に私の人生は終わってしまいました。今でも後悔はしていません。この力のおかげで大切な仲間の命を救うことが出来たのですから」

「くう〜! なんて心の綺麗な子なんだ! 汚れまくった俺の目玉じゃ、眩しすぎて直視できねえ!」

あまりに綺麗なウイズの微笑みを見て、彼女の巨乳に気を取られていた長谷川はすんごい罪悪感に襲われる。まさに『ウイズ、マジ天使』といったところである。

とはいえ、彼女を怒らせた場合は、その印象が真逆になる。怒りに燃えたウイズは、魔王の城に一人で殴り込みに行くほどアグレッシブだった。

「仲間の命を助けるために、すべての準備を整えた私は、魔王の城に乗り込みました。流石に強敵だらけでしたが、リッチーのスキルと爆裂魔法を駆使して立ち止まることなく突き進み、城内の奥でようやく目標の幹部を追いつめることが出来ました。そして、とうとう呪いを解呪させることに成功したのです」

こうしてウイズは大願成就を果たしたが、その代償もまた大きすぎた。

「その後、呪いが解けた仲間達は、冒険者に復帰していききました。でも、人の身でなくなってしまった私は、彼らと共に歩むことは出来ません……」

リッチーの身では冒険者登録が出来ず、下手をすると討伐対象にされかねない。仲間の安全を守るためにも一緒に行動することは出来なかった。

「だから私は、仲間達と出会ったこの街で彼らの帰りを待つことにしたのです。戦いに疲れた彼らを出迎えてあげられるように。大好きな仲間達と、いつか再会できるように……」

ウイズは感情を込めた声で語り終える。肉体は人外に成り果てたとしても、心は人の

ままだから。彼女は仲間達との絆を守りたかったのである。

「ううっ、泣かせる話じゃねえか。仲間のためにテメエの人生をかけちまうなんて、アクアちゃんより女神らしいぜ」

話を聞き終えた長谷川は、涙を浮かべながらウイズを讃える。

さらに、めぐみんとダクネスもウイズの行いに感動してその想いを述べる。

「うおおおおおっ！ 私は今、モーレッツに感動しています！ なにせ、あなたのおかげで、爆裂魔法が魔王攻略に必要不可欠であることが立証されたのですから！ やはり、爆裂魔法こそが人類を救う希望なのです！ 私が救世主となるのです！」

「はあ、はあ……私はリッチーとなつたくだりに感動したぞ！ 死が迫る中で『仲間を救うためには人を辞めなければならない』という究極の選択を迫られるなんて！ 一体、どれほどの精神的苦痛を味わえるというのだろうかつ！ ああつ、想像するだけでも身体がたぎりゆっ!!」

「感動の仕方、間違ってるだろソレ!? ウイズそつちのけで、爆裂とドM要素しか見てねーだろソレ!!」

頭のおかしい連中は、頭のおかしい感動をしていた。一応これでもシリアスシーンだったのに、何もかもが台無しである。

「ったく、これだからガキはイヤなんだよ。自分のことばっか考えやがって、他人の気持

ちなんざ、これっぽっちも気にしちやいねえ。小遣いが少ないからってジャンプを立ち読みで済ませてんじやねえぞクソガキども！ こちとら、ボランティアでマンガ作ってんじやねえんだぞゴルア!」

「えつと、ギントキが何について怒ってるのか分かりませんが、あなたはウイズの話を書いてどう思ったというのですか?」

「無論、大人として真つ当なことを考えたぜ? 『コイツの力があれば魔王軍を滅ぼせるし、討伐報酬もガツポガポで一石二鳥じゃね?』つてな!」

「あなたの方が欲まみれなんですけど?」

やつぱり、頭のおかしい少女達のリーダーもまともではなかった。

しかし、年上な分だけ頭は回るようで、バカ達の会話を聞いていた長谷川が不自然な事実に気づいた。

「あれ? そういえば、なんでウイズさんは、魔王城で暴れた時に魔王を倒さなかったんだ?」

「ん? 確かにおかしいな……魔王の本拠地で暴れられるほどの実力があるなら、いくらでもチャンスはあったはずだが……。もしかして、緊張のあまり大きい方を出したくなつたか?」

「なつてませんよつ!? トイレはちゃんと済ませてますから!? 本当になつてません

よっ!？」

下ネタに慣れていないウイズが慌ててつつこむ。確かに、大きい方を催してしまったのなら魔王討伐を断念したのも領けるが、ウイズ本人が否定している通りそんな事實はまったくない。

「変な誤解をしないでください！ 私が魔王を倒さなかった理由は、まともなものがちゃんとあります！」

「ほう。なんだよ、その理由ってのは？」

「それは……私が「死人」だからです。リッチーとなり人としての生を終えた時、私はこう思ったんです。人間でも魔族でもなく、中途半端な存在となってしまうた私が、この世の摂理に大きな干渉をしてはいけないのではないかと。これでも元は真つ当な冒険者でしたから、卑怯な手段で手に入れた力で、人間だった頃に目指していた魔王討伐という偉業を成し遂げたくなかったのかもかもしれません……」

いざ聞いてみると、ウイズの行動は納得出来るものだった。彼女の冒険者としてのプライドは、死してもなお健在らしい。だが、ひねくれ者の銀時は、ここでもいちやもんをつけてくる。

「一応筋は通っちゃいるが、その話は本当だろうか？ 『良いヤツだと思ってたら、実は魔王の仲間でした!』なんてオチだったら即刻成敗しちゃうけど?」

「ぎくつ!?!」

やたらと鋭い銀時の指摘に、思い当たることがありまくりなウイズはビビる。その様子を目敏く見ていたためぐみんが、素早く追求してくる。

「おや? あなた今、ぎくつとしませんでした?」

「いえいえ、そんなことはありませんよ!?! 確かに私は、魔王の幹部に友達がいたり、魔王城の結界維持を頼まれていたりしますけど……」

素直すぎる性格が災いして、余計なことまで喋ってしまふ、うっかりさんなウイズさん。

それがさらなる不幸を呼んで、アクアという厄介者を再起動させてしまふ。銀時に一発貫つて不貞腐れていた駄女神だったが、大人しくしているフリをしながら逆襲の機会を伺っていたのだ。そして今、容疑者の口から犯行を裏付ける証言が取れた。ならば後は、その手にお縄をかけるのみ!

「確保ーっ!!」

「きやーっ!?!」

意を決したアクアが飛びかかり、ウイズを床に押し倒す。

「ようやく尻尾を出したわね、この腐れリッチー!」

「ええええええ!?! 一体何のことですかー!?!」

「はあく？ この期に及んでしらばつくれないでほしいんですけど！ アンタが魔王の手先だつてことは、じつちゃんの名にかけてまるっと全部お見通しなんだから！ なんだつて、アンタ自身が白状しちやつてるんだから、もう言い逃れは出来ないわ！」

「ちよつ!? だからそれは誤解なんです！ 結界に関しては、魔王城に住んでいる友達に迷惑をかけたお詫びとして、仕方なく引き受けただけです！ そのせいで幹部扱いになつちやつてますけど、私自身は人に危害を加えたことはありませんから！」

アクアの追求に焦つたウイズは、またしても墓穴を掘つて余計な情報をもたらしてしまつた。実態がどうであれ、魔王の幹部というのであれば、冒険者として放っておけない。

「確保ーっ!!」

そう叫ぶや否や、銀時まででもがウイズの捕縛に参加してきた。

「このスタンド野郎があああああつ！ 世界平和のために、大人しく捕まりやがれええええええつ！」

「えええええええつ!? 何でそうなるのですかあああああつ!」

「何でもナニも、当然だろーが！ 魔王軍の幹部であるお前を倒せば、すんごい大金をゲットできんだからよお！ 冒険者として、こんなチャンスを逃すはずはねえよなあ？

ぐえへへへつ！」

「いやいや!? それもう冒険者というより、ただの悪人になっちゃってますから!!」 世界平和とは間逆の欲望に満ちてますからあああああつ!!」

正義のためと思いきや、このマダオは、おもいつきり私欲だけで動いていた。しかも、その話に駄女神まで乗っかって来たから、さあ大変。この時ウイズは、リッチーになって以来最大のピンチを向かえようとしていた。

「流石は銀時、目の付けどころが私と同じね! 魔王の幹部を倒せば、必ず億単位の報酬が手に入るもの! つまり、コイツを倒しちやえば、せこせこ働かずに済むってわけよ!」

「なにっ!? 報酬が億単位だと!」

「ええそうよ! 私とあなたでコイツを倒して、巨万の富を手に入れましょう!」

気分良く話している内にテンションが上がってきたアクアは、飛び入り参加してきた銀時を暖かく迎え入れる。だが、相手の方に彼女の手を取る気などは無かった。

「はあく? 誰がお前と協力するなんて言っただよ? 億単位の大金を、むぎむぎ他人に分けてやるわきやねえだろ? コイツは俺がぶっ倒して、報酬全部いただいてやる! そんなでもって、この街の一等地に高級キャバクラを作るんだ!」

「ななな、なんですってえええええつ!」

大金に目が眩んだ銀時は、いともあっさりとアクアを裏切った。



「つーわけで、さっさとそこをどきやがれっ！」

「ちよっ、なにすんのお銀時！ 先に捕まえた私の方に権利があると思うんですけどっ  
!？」

「んなもん関係ねえんだよ！ お前は俺の物なんだから、お前の物も俺の物だろ？」

「なんて自然なジャイアニズム!? 思わず納得してしまいそうなほどに違和感がまったく無いわ！ でも、こっちだつて、はいそうですかと引き下がる訳にはいかないのよ！  
何の不自由も無い、リッチで優雅な生活のためにねっ!!」

「結局どっちも金目当てかよっ！」

あまりに醜い争いに長谷川がつっこむ。もうコイツら、世界平和とか眼中にねえよ。  
高額報酬だけしか見てねえよ。

「オラオラ！ 沈めや、駄女神エ!!」

「あんたこそ！ 天罰受けて眠りなさいっ!!」

「えつと……なんかウイズそっちのけで、おバカな喧嘩が始まりましたね」

「あーもう、またこんな展開かよ！ 冒険者登録した時とまるでなにも変わってねー  
じゃん！ そーいうの恥ずかしいから止めてくれって言ったよね!!」

うんざりした長谷川が二人のバカ騒ぎを非難するが、当然聞き入れられるわけがない。しかし、このままアイツらを放置したら、ウイズの店が大損害を受けてしまう。

「いやあああああつ!! これ以上店内で暴れないでくださああああい!! 大切な商品が!! 一個10000万の魔道具がーっ!!」

「うわあああああつ!! マジで洒落になんねえよ!! 早くアイツら止めねえと、こっちの方がジ・エンドだよっ!!」

「分かっている! ここは私に任せてもらおう!」

アクアが凶器にしている商品の値段を知った長谷川が悲鳴を上げ、それに応えるようにダクネスが動き出す。これまで彼女は、被害を受けているウイズを羨ましそうに見ていたのだが、これ以上の迷惑行為は流石に騎士として見過ごせない。

「止めないか二人ともっ! ここはケンカをする場所ではないだろう!」

「うっせーメス豚! ケンカはルール無用なんだよ!」

「ぐはっ!!」

「邪魔よダクネス! 神と悪魔の戦いに、人が入り込む余地はないわ!」

「うぐっ!!」

強引に二人の間へ割り込んだダクネスは、双方から攻撃を食らってしまった。

「くっ、なんたることだ! 仲間同士で傷つけあうなど……私の理想通りじゃないかつ

! さあもつと、私を殴れ! 私だけを殴ってくれ! 仲間が受ける痛みはすべて、この私を受け止めりゅっ!!」

「お前、ケンカ止める気無えだろ！ ドMをエンジョイしてるだけだろ！」  
やっぱり、ダクネスは役にたたなかった。

これはもう万事休すか。長谷川がそう思った時、一人冷静な様子のめぐみんが、あわわしているウイズにたずねた。

「ちよつといいですか、ウイズ」

「は、はいっ!? なんででしょうか?」

「私はあなたの手配書を見た記憶が無いのですが、あなたにはいくらかの賞金がかけられているのですか?」

「いや、そんなことを聞かれても、手配自体されてませんよ!? 私は魔王城の結界維持だけを頼まれた【なんちやつて幹部】ですから! 人に危害を加えたことはありませんから、賞金なんてーエリスもかかっていませんっ!」

めぐみんの質問に答えたウイズは、ようやく肝心な情報を言うことが出来た。その結果、バカ二人の不毛なケンカが唐突に終了する。

「【それを早く言つてよバーニー……!」

「は、はあ……色々と言いたいことがありますけど、とりあえずごめんなさい」

これ以上話をこじらせたくないウイズは、大人の対応で乗り切った。

結局、締まりのない終わり方となったが、一連のやりとりで殴られまくったダクネス

だけは満足していた。

「はあ……快・感！」

「機関銃の弾、全弾お前に撃ち込みてえーっ！」

頬を赤く染めながら大昔の流行語をつぶやくDMにつっこみを入れる。銀時の方は、億万長者の夢を断たれて意気消沈しているというのに、変態は単純で羨ましい限りである……。

「でも、これでウイズさんを討伐しなくても済むな！」

「ちよつと、なにふざけたこと言ってるの？ この腐れリッチーは、魔王城の結界を維持してる人類の敵なのよ？ コイツが生きてたら魔王城に攻め込めないんだから、やつつけるのは当然じゃない！」

ただ一人、ウイズの浄化を諦めていないアクアが、彼女を擁護する長谷川に噛みついてくる。確かに、アクアの言うことにも一理あるのだが、彼女以外の面子は賛成しきれない。やたらと人間くさくて人畜無害なウイズを討伐するのはどうしても気が引けるのだ。それに今は、結界を維持した方が得策であると銀時は思っている。

「というわけで、たとえ誰が邪魔しようとは私はコイツを浄化するわ！ なぜならそれが、女神たる私の使命だから！」

「つたく、待てや駄女神。今結界を解いてもこつちが損するだけだぜ？」

「ほえ？ それは一体どーいうことよ？」

「ほら、長谷川さんをよく見てみる。こんなカエルにすら苦戦するクソみたいなマダオを連れて魔王に挑んでも、絶対に勝てるわきやねーだろう？ だったらよお、俺達の準備が整うまでは結界を維持した方が良いじゃねーか。そうすりゃ、他の奴らに先越される心配も無えんだからよ」

「なるほど……そう言われるとそうかもしれないわね」

「バカにされた俺としては、納得しがたいんだけどー！」

機転を利かせた銀時は、長谷川をデイスることでアクアを納得させる。

「つーわけで、その時が来るまでは生かしておいてやろうぜえ？」

「ええそうね。その時が来るまで楽しみは取っておきましょう？」

「ひいひいひいひいっ!? 助かったように助かってないですうううううっ!?」

一難去つてまた一難。ウイズのピンチはまだまだ継続していた。

「ま、まあ、どつちにしても私を倒しただけでは魔王城の結界を破ることは出来ませんけど……」

「なに？ そりゃどーいうことだ？」

「結界の維持は、私を入れて8人の幹部でおこなっているのです、全員を倒さないと解けないんです」

「つたく、そーいうことかよ……なんとなく都合が良すぎる気はしてたけどよ」

「結局は、地道に働かなきゃダメってことか」

「まさにその通りです！ 一生懸命働いて、魔王軍の幹部を3人ぐらいまで減らすことが出来れば、そこにいる青髪の子の力で結界を破れるはずですよ！」

銀時達の話に便乗したウイズは、おそろおそろアクアを見ながら予想を言う。抱きつかれた時に、彼女の力が人並み外れていると気づいたのだ。

「リッチーである私をあれほど簡単に浄化出来る力があれば、弱まった魔王城の結界を破ることも可能だと思いますよ！」

「ふうん？ だから私を見逃してくださいって言いたいわけ？ 腐れリッチーらしいじめつとした言い訳ね」

「いいえ違います！ 魔王討伐のためにどうしても必要というのなら、私を浄化しても構いません！ 私だって、元は魔王討伐を目指して戦っていた冒険者ですから、人類の宿願を叶えるために命を捧げる覚悟があります。でも、他の幹部を倒すまでは、私を生かしておいてください！ 私にはまだやるべき事があるんです……」

そう言うと、ウイズは静かに泣き出した。意地の悪いアクアと話している内に、これまで我慢していた様々な感情が一気に溢れ出てしまったのだ。

「(やべえ……こいつは絵面的にとってもマズイぜ)」

泣いちゃったウイズを見て、流石の銀時も焦る。ここは上手く取り繕わないと、自分の評価が下がりまくってしまう。こうなりや、元凶となったアクアを生け贄にするしかねえ。

「あー！ アクアの奴がウイズを泣かしたー！ いーけないんだー、いけないんだー！  
せーんせいにー言ってやろー！」

「ちよっ!? なんて私だけ悪者扱いしちゃってんの!? アンタも結構やらかしてたでしよ!?! 鬼畜の限りを尽くしてたでしよ!?!」

卑怯な銀時は、アクアにすべてを押しつけて、この場を乗り切ることにした。当然彼女は納得出来ずに反論してくるが、端から見れば目クソ鼻クソである。

そんなバカヤロードもの醜態を見て、めぐみんは鼻で笑い、ダクネスは興奮していた。  
「ふっ、まるで子供のケンカですね」

「だが、幼さの中に高度な加虐性を感じさせる素晴らしい言葉責めだ！ はあはあ……」  
「DMフィルターかけすぎだろソレ！」

このぶっ飛んだ状況にも馴染んでしまっている頭のおかしい少女達に長谷川は呆れる。

そしてもう一人、彼らに振り回されたウイズも途方に暮れていた。

「え、えくとお……結局どうなったんでしようか？」

一人でシリアスしていたウイズは、彼らのノリについていけず目を丸くしてしまふ。ふざけているのか本気なのか分からないけど、無茶苦茶にもほどがある。

でも……

「なんだか、とつても楽しそう……」

仲が良さそうな（？）彼らの様子は、仲間と容易に会えなくなったウイズにとつて素晴らしいものに思えた。

店に来て十数分後。突発的に発生したリッチー騒動もひとまず落ち着いたので、ようやく本題に入ることにした。クレマーのアクアがいちやもんをつけて金をせびり取ろうと企んでいる件である。当初は、焼きそばパンを作った店主が転生者だろうと思っていたのだが……。

「なあアクア。コイツは転生者じゃねえんじゃねーか？ 顔の作りもオツパイの大きさも日本的じゃねえし」

「うん……オツパイで判断するのはアレだけど、どうやら当てが外れたようね。たぶん、他の転生者に作り方を教わったんだわ」

銀時とアクアは、ウイズをちら見しながら内緒話をする。その様子はあからさまで、気になった本人自身が理由を聞いてきた。



「あの、私になにかご用ですか？ 何となく、胸を凝視されてるようで落ち着かないんですけど……」

「なに、そいつは巨乳に生まれし女のさだめだから、いちいち気にすることあねえ。んなことより、そこにある焼きそばパンの作り方はどこの誰から教わったんだ？」

ウイズから話しかけられた銀時は、日常会話のようにセクハラしながら本題を聞いてみた。果たして、彼女に焼きそばパンを伝授した人物とは何者だろうか？

「ああ、その新製品は、カツラ・コタロウという方から教えていただきました」  
「めっちゃ知ってる奴がキターっ!」

いざ聞いてみたら、すっげー拍子抜けする答えだった。すわ新キャラの登場かと思いきや、毎度お馴染みのバカヤローでした。

「もしかして、カツラさんとお知り合いなのですか？」

「知り合いつつーか、尻をぶっ叩きたいほどの腐れ縁なんだけど、マジでアイツうざすぎじゃね？ こんなとこまで出ばりやがって、どんだけ出番が欲しいんだよ！ つーか、なんでここで焼きそばパンなの!?! 売る店自体を間違えてるけど、それほどまでに食いたかったの!?!」

あまりに不可解な桂の行動にツッコミを入れる。なぜあのバカは魔道具店などに食べ物を作らせたのか。その答えはウイズが教えてくれた。

「あの、あまりカツラさんを悪く言わないでください。あの人が相談に乗ってくれるおかげで、私はすごく助けられているのですから」

「相談？ あのバカに？」

「はい……お恥ずかしい話ですが、私には商才が無いらしくて、知識の豊富なカツラさんに商売の秘訣や成功法などを教えてもらっているのです」

「なるほどな。確かにお前には商才なんざ微塵も無えよ。あのバカに商売の相談するなんて、ウンコに話しかけるみてーなもんだしな」

「そ、そんなことはありません！ カツラさんの助言は、とても役に立ってますよ？ この焼きそばパンもその成果の一つなんですから！」

知り合いをバカにされたウイズは、怒り気味に反論する。彼女の言う通り、桂はこの店の稼ぎに色々貢献していた。

今から数日前、客の少なさに悩んでいたウイズは、懇意の間柄である桂に相談を持かけた。商品の仕入れに茂茂の会社を利用して関係で二人は知り合い、何度か会話を交わす内に親しくなったのだ。

『……というわけで、なにかお客さん呼び込めそうな人気商品はないでしょうか？』

『ふむ、客寄せ用の品物か……』

珍しい相談をされた桂は、どうしたものかと考え込む。頭のおかしい彼は、頭のおかしい商品ばかり扱っている彼女のセンスを大いに気に入っているのだが、ネタ物商品ばかりでは普通の客が寄りつかない。それならばと桂が思いついた商品がアレだった。

『ヤキソバパン……ですか?』

『うむ、アレはマジですごいぞウイズ? 長きにわたり王座に君臨せしアレに心奪われた若者たちが、栄光を我が手に入れんがために一年の大半を血で血を洗う争奪戦に費やすほどの大ベストセラーアイテムだからな!』

「たかが昼休みの光景を、なんでそこまで誇張すんの?! 学生時代の思い出補正が限界突破してるんだけど! アイツはどんだけ焼きそばパンに思い入れがあるんだよ!」  
改めて聞いてみたら、桂の助言はかなりいい加減だった。彼の中では、学校の購買で売っていた焼きそばパンが一番印象に残っている人気商品だったらしい。

何はともあれ、ウイズの回想によって事の真相は理解出来た。ようするに、すべてはあのロン毛野郎が仕込んだことだったのである。

「まったく、何やってんだよあのバカは! 魔道具店で焼きそばパンを売ろうなんぞ、どう考えても変じゃねーか! エログッズ売ってる店でコンニャクなんか売ってても気持ち悪いだけだろう!」

「私の店をエッチな店と一緒にしないでくださいっ!？」

女の勘で銀時のたとえ話を何となく理解したウイズは、顔を赤くしてつつこむ。

「大体、何もおかしなところはありせんよ! このパンの具材には、別の土地で収穫された【早摘みキャベツ】を使つてますから、特殊効果はちやんとあります!」

「はああ? キャベツなんかにどんな特殊効果があるつてんだよ? 描くのが大変でア

ニメ制作者を困らせる効果ぐらいしかねえだろ、あんなもん」

「おや、ギントキは知らないのですか? 新鮮なキャベツを食べると経験値が得られるのですよ? それを踏まえるなら、この焼きそばパンもマジックアイテムと言えなくもないですね」

銀時の疑問に解説役と化しためぐみんが答える。この異世界のキャベツはかなり特殊で、経験値が手に入る上に味も美味しかったため、何かと重宝されている人気アイテムなのだ。

事実を知った長谷川は、風変わりなキャベツの効果に興味を持つ。

「へえ。食べるだけで経験値がゲット出来るなんて、すげーお得意じゃん!」

「しかも、今が旬ですから。味にうるさい冒険者やグルメなご婦人方にもご好評をいただいているんですよ!」

好意的な意見を述べる長谷川に気を良くして、ウイズも笑顔で相手をする。彼女の言

うように、あの焼きそばパンは、珍しさも相まって意外に売れ行き上場なのだ。それだけ美味しいということでもあるのだが、その点はアクアも認めざるを得ない。

「ぐぬぬ……悔しいけど、あの焼きそばパンだけは認めてやらないこともなくつてよ？」

リッチー嫌いの駄女神も、食べ物に関してはジャッジ公平だった。

そして、これまでの話を理解した銀時も、ようやくウイズの言い分を認める気になる。「なるほどねえ。経験値なんて栄養素が含まれてんなら、普通のパンとは言えねえな。で、そいつを何個食うとレベルが一つ上がるんだ？」

「そうですね……レベルが一桁の方でしたら、10000個ほど食べていただければ……」  
「俺たちやフードファイターじゃねえええええええつ!!」

「きやあああああつ!! ごめんなさあああああい!!」

納得しかけたと思ったら、変なオチがついていた。あんな炭水化物の塊を10000個も食べたなら、レベルだけでなく体重と血糖値まで上がってしまう。

「つたく、大金を払ってまで苦しい思いをするなんざ、真つ平ごめんだってんだ。そんなもん、ドSの俺がやることじゃねえんだよ!」

「ならば、私は挑戦せねばなるまいな!」

「お前はそこで反復横飛びの世界記録に挑戦してろ!」

とつてもアグレッシブなDM騎士は、悦びを得るためなら手段を選ばないらしい。庶

民的な惣菜パンとはいえ、1000個も買ったら結構な金額になるのだが……。

「そう言えば、アレの値段はいくらなんだ？」

「1個5000エリスです」

「俺様をぼったくる気か腐れリッチイイイイッ!!」

「きやあああああつ?! ごめんなさああああい?!」

非常識な価格に怒りが爆発する。まさか、安さが売りの焼きそばパンが、高級ステーキを食える値段で売られていようとは!

「おいコラてめえ! この銀さんをなめんじゃねえぞ!? たかが焼きそばパンが5000エリスなんて、どう考えてもありえねえだろ!? これぜってえぼってるよね!? 俺たち人間をカモってるよね!? それともナニか!? リッチーっつーのは、金銭感覚までリッチになっちまうってのか!? そこんところを分かりやすく教えてくれよ、ウイズさんよお!」

「そそそそ、そんなことはありません!? これは仕方がないんです! 早摘みキャベツは一玉3万エリスもしますから! そのくらいの値段じゃないと採算が取れないんです!」

銀時のクレームに対してウイズは必死に弁解する。しかし、「早摘みキャベツ入り焼きそばパン」は失敗作だと言わざるを得ない。変にはりきった彼女がキャベツの質を最

高級のものにアレンジしたせいで、商品の原価が跳ね上がったってしまったからだ。ウイズに好意を持つ男たちから口コミが広がり、季節限定の珍品としてそこそこ売れてはいるものの、値段の高さがネックになつて数量自体は伸び悩み、利益はそれほど出ていない。それどころか、彼女の天敵である駄女神を招き寄せてしまったのだから、いろんな意味で大失敗だ。実際今も、ウイズの揚げ足を取ろうとして、アクアがいちやもんをつけている。

「ほーから見なさい！ 悪の手先のリッチーが、まともに働いてるわけないじゃない！ 愚かな人間は騙せても、女神の私は騙されないわよ？ どうせ、その牛みたいなデカ乳で男どもをたぶらかして、お金をぼっているんでしょ!? 生気と一緒にお金までチューチュー吸い取っちゃつてんでしょーっ!?」

「けっ！ バカな男は、ぼるだけぼつてポイントか!? 可愛い顔して、やることがエゲつねえなあ!? この金の亡者めっ!!」

「ひ、酷いつ!? 私はそんなことしてませんっ!? 神に誓つてしてませんつてばあーっ!?!」

アクアと銀時のクズコンビから底意地悪いクレームを受けて涙ぐんでしまうウイズ。違うんです、私はただ真面目に働いているだけなんです。なぜかいつも残念な展開になつちやいますけど……。それでもめげずに生きて（？）るんです!

……というように言いたいことは山ほどあったけど、リッチーであるという負い目が彼女の主張を弱めてしまう。

そんな時、ウイズの窮地を救うように一人の男がやって来る。

銀時とアクアがモンスタークレーマーと化して暴れる中、突然ドアが開けられて、新たな来客を知らせるベルが鳴る。その直後に、涼やかな男の声が聞こえてきた。

「ウイズ殿。頼まれていた品が届いたので持って来たぞ」

まだ店内の異変に気づいていない男は、穏やかな声でウイズに語りかける。ずいぶんと親しい間柄のようだが、一体何者だろうか？

「なっ……コイツはまさか……」

まずいところを見られたと思い、慌てて相手を確認した銀時は、目を見開いて驚く。このドラクエ3の勇者みたいな格好をした男は……！

「将軍かよおおおおおっ?!」

おもいつき顔なじみの徳川茂茂だった。



## 第11訓 美女には素敵な彼がいる

銀時とアクアに攻められたウイズがピンチに陥ったその時、一人の男が颯爽と現れ、店の中に入ってきた。ドラクエ3の勇者のような格好をしたその人物は、銀時たちが良く知る徳川茂茂だった。

「將軍かよおおおおおっ?!?!」

「ん? そういってお前は銀時か? なぜ、そなたらがここに……」

先客の正体に気づいた茂茂は、軽く驚いた表情を浮かべる。実を言うと、彼がここに来た目的は『ウイズに会う』ことだったので、仲間に知られるのは少々気まずかったのである。

しかし、そうとは知らないウイズは、良いタイミングでやって来た茂茂に、これ幸いと助けを求める。

「うわあ〜ん! シゲシゲさあ〜ん!」

表情を輝かせたウイズは、自分を取り囲んでいたクズ兄妹を押し退けて茂茂の元へと駆けていく。そして、躊躇することなく彼の右腕に抱きついた。

「ものすごく良いタイミングで来てくださって、本当にありがとうございますうー!」

「なに、ウイズ殿が求めるならば、いついかなる時でも馳せ参じてみせるぞ」

「なんてカツコイイこと言つてつけど、鼻の下は伸びまくりだよ！ 右腕から伝わる巨乳の感触を、思う存分堪能してるよ！」

銀時の指摘している通り、むつつりスケベな茂茂は、鼻息を荒げながらウイズの柔らかさを味わっていた。

そのように卑猥な空気が漂う中、茂茂のことをよく知らないめぐみんが事情を聞いてくる。

「あのギントキ、先ほどあなたはこの人のことを將軍と呼んでいましたが、一体何者なのですか？」

「何者もナニも、こいつは俺たちの国で將軍やつた男だよ。今はこの国で冒険者から成り上がった大商人をやつてるがな」

「ほほう、それは何とも風変わりな経歴の持ち主ですね。なにやら、怪しい組織が暗躍している気配がプンプンします。もしや、裏で国を操る悪者達に暗殺されそうになり、すべてを失つた彼は、新たに再起するためにこの地へ流れてきたものでは？」

「中二病的発想が不自然なまでに当たってるーっ!」

簡単な説明を聞いたためぐみんは、赤い瞳を光らせながらやたらと鋭い妄想を述べる。妙に楽しそうなのは、將軍という肩書きが紅魔族の琴線に触れたからだ。

無論、隣で聞いていたダクネスも茂茂の正体に興味を引かれた。彼女の場合は「立場的」な事情もあるからだが、その関係で仕入れた情報からある程度の予想がついた。

「確か、街のそばで砦を建設している商人がそのような経歴であると聞き及んでいるが……もしや、この方が噂に名高い「ブリーフマスター」か!？」

「よりによつて、そつちの名前で有名なのおつ!？」 どう聞いてもブリーフマニアの変態扱いなんだけど!？」 もうそれただのイジメなんじゃね!？」

「どうやら、銀時が思っている以上に茂茂の存在は知れ渡っているらしい。とはいえ、今はブリーフマスターの活躍ぶりを気にしている場合ではない。

ラッキースケベの衝撃から立ち直った茂茂は、ウイズに何らかの問題が起きていると察して、一番の当事者だと思われる男に事情を訪ねた。

「銀時よ。ウイズ殿が泣いておられるようだが、ここで何が起きたというのだ? 事と次第によつては、余も腰の物(刀)を抜く覚悟があるぞ?」

「とか言つて、腰の物より先に股間のモノを抜いてますけど!？」 スポンを突き破らんばかりに臨戦体制になってますけど!？」

銀時は、ウイズに抱きつかれて元氣になつた茂茂のち〇こにツツコミを入れる。正直な性格の將軍様は、股間の反応も正直だった。だがしかし、モッコリした股間の間抜けさとはウラハラに、彼の視線はマジである。

「（こいつあやべえ……股間の足軽が大將軍に見えるほど怒ってやがるぜ……）」

茂茂から発せられる覇氣のようなモノを感じて焦った銀時は、慌てて言い訳を始める。

「い、いやね？ 俺たちはただ、ウイズのぼったくり行為に気づいたから、清く正しい社会人として注意してただけなんだよねー！」

「なに、彼女がぼったくりを？」

「そうよ将ちゃん！ その女は、庶民的な焼きそばパンを5000エリスという高額で売りさばく、血も涙も無い極悪人……いいえ違うわ！ 超極悪なりツチーなのよ！」

空気を読まない駄女神は、勢いに任せてウイズの正体をバラしてしまった。茂茂が持っている莫大な資産を狙った彼女が、エロい身体を使ってスケベな彼を籠絡しているのではないかと疑ったのだ。

「ほう。アクア様は、ウイズ殿がリツチーであると仰せになられるのですか？」

「ええそうよ！ 女神の私が言うんだから絶対に間違いないわ！ しかも、アンデッドのクセに店まで持って、私よりもいい暮らしをしているの！ これはもう、神に対する冒読よ！ ナメクジの親戚みたいなリツチーの分際でこんな贅沢しているなんて、どう考えても許せないもの！ こうなったら、水の女神の名において懲らしめるしかないわよねえ!!」

自分の正当性を主張しきったアクアは、イイ笑顔を浮かべながら茂茂に同意を求めた。その内容は、ほとんど八つ当たりでしかなかったが、おバカな彼女はわりと本気でそう思っていた。

「もう大丈夫よ、将ちゃん。卑怯な色仕掛けであなたのお金を騙し取ろうとしている腐れリッチーの野望は、この私が食い止めてみせるわ！ ああ、お礼の方は遠慮なくいただくわよ？ なんとたつて、私はあなたの恩人なんだから！」

良いことをしていると思いいんでいる駄女神は、厚かましいことにお礼まで貰うつもりでいた。しかし、愚かな彼女の企みは、当然ながら成功しなかった。

「アクア様。実をもうしますと、ウイズ殿がリッチーであることはすでに存じ上げております。その上で、公私を問わず、親密なつき合いをしているのです」

「えっ、なんで!? どうしてそこで仲良しこよしになっちゃうの!? 普通、リッチーが出たら、ゴキブリのように容赦なく駆除するのが常識なんですけど!?」

「ちよっ!? アレと同じ扱いは酷すぎですよっ!?」

茂茂の意外な答えにアクアが驚き、そのリアクションにウイズがつっこむ。確かに、アクアの例えはかなり酷いが、的外れとも言い切れない。もしリッチーが住み着いていることが知れ渡れば、アクセル以外の都市であつたらほぼ必ず討伐対象となるはずだからだ。ウイズもそれを知っているからこそ正体を隠し続けているのだが、なぜ茂茂にだ

け打ち明けたのだろうか。

「まさかも腐れリッチーのハニートラップにかかって、洗脳されてしまったの!? ああ、なんていやらしいのかしら! そのデカ乳を揉み揉みさせて、将ちゃんの童貞ハートをガツチリキヤツチしちゃったんでしょ!」

「そんないかがわしいことはしてませんっ!! シゲシゲさんは、私の尊敬する【お師匠様】ですから、嘘はつきたくなかつたんです!」

エツチな妄想を押しつけて来るアクアに対して、顔を赤らめながら反論するウイズ。その様子は面白かったが、彼女のセリフに出てきた場違いな単語の方が気になる。銀時は、旗色が悪くなったアクアからさりげなく距離を取りつつ、その詳細を尋ねた。

「何なんだよ、そのお師匠様ってのは? まさかお前、ブリーフマスターになりたいのか?」

「そういうことじゃありませんよ!! 私は、一介の冒険者から一流の商人として成功したシゲシゲさんに憧れて弟子入りしたんです!」

そう言いきったウイズの目は、茂茂に対する尊敬の想いに溢れてキラキラと輝いていた。確かに、これまでの状況を見れば、二人が師弟関係であるという話も納得できる。ただ、焼きそばパンのせいで起きた騒動を考えると、弟子入りした成果はあまり出ていないようだが……。

「ブークスクス！ アンタが将ちゃんの子供ですってえ？　じめじめリッチーは、冗談までしけつてるわね。普通なら500エリス以下の焼きそばパンを5000エリスで売っちゃうようなポンコツ店主のクセになに言ってるのかしら？」

「うぐつ！　た、確かに修行の成果はあんまり出てませんが、すべて本当のことなんです！」

アクアに痛い所をつっこまれたウイズは、心にダメージを受けながらも懸命に訴え続ける。そんな愛弟子の苦境を見かねて、師匠の茂茂が助けに入る。

「アクア様、彼女の言っていることはすべて事実でございます。我々は半年ほど前に出会った、師匠の契りを結んだのです」

「えっマジで？　ロン毛の不良が改心して熱血バスケットマンになるくらい有り得ないんですけど。本当にマジで？」

「はい、それはもう大マジです！　私は、大出世してこの街に戻ってきたシゲシゲさんに、おもしろい弟子入りを申し出たんです！」

我慢強いウイズは、何を言っても突っかかってくる意地悪なアクアにめげることなく、過去の出来事を語りだした。どのように二人が出会い、師匠の間柄となったのかを……。

時を遡ること半年前。魔道具店を営むウイズは、開店以来、延々と続いている赤字に頭を悩ませていた。

『はあ……私にもシゲシゲさんのような商才があつたらなあ……』

自分の不甲斐なさを痛感したウイズは、近頃有名になつてきた茂茂に対して羨望の念を抱く。このころ彼は、テレポートを大規模かつ効率良く活用することで実現したネットショッピングのような商売を大ヒットさせて、黒字を増やし続けていたのである。

実を言うところの成功は、部下であり悪友でもある松平片栗粉のおかげだった。

前世の茂茂が真選組の屯所を視察した時、同行していた片栗粉から近藤の使っているパソコンを見せられた。ネットでエロいページばかり見ているパソコンを……。

『ほおくら将ちゃん、こいつの仕事っぷりをよく見てくれい。このゴリラはなあ、空いた時間が出来る度にこいつを使って、年がら年中エロいページをパトロールしてるんだぜえ？ それもよお、エロい二ト以上に巡回しまくってるっつーんだからあ、マジで感服しちまうよなあ？ ここまで熱心に仕事をされちゃあ、毎日キャバクラ通っちゃつてる俺の立つ瀬がねえってモンだぜえ。なあ近藤う？』

『ちよつとおおおお!!』なんて恐ろしいタイミングで人の恥部を暴露してんのお!!? これもう、お母さんにエロ本見られるレベルを超えちゃってるよ!!? 好きな子にオ○ニーしてるところ見られるぐらいのレベルだよ!!?』



『なあーにぬかしてやがんだ小僧う！ 実際お前はこいつを使ってえ、毎日シコシコやってんだからあ、なあーんも問題無いっしょいい！』

『いやいやいやいや!? 問題ありまくりなんだけど!? 社会的ダメージが、元氣玉食らったベジータ並なんだけど!? ほんとマジでどーすんだよコレ！ 今日から俺は、オニの副長ならぬオ○ニーの局長として生きていかなきゃならねえよおおお!?』

大恥をかかされた近藤は、顔を真っ赤にしながらツツコミを入れる。しかし、当の茂はエロいページとインターネットビジネスの仕組みに興味津々となっており、職場でいかがわしい行為をしていたゴリラは処罰を受けずに済んだ。

何はともあれ、その際に学習したネットの知識をこの異世界で活かしたのだ。

そんな感じで、事の経緯はかなりバカらしかったりするのだが、それでも彼の努力が成功をもたらしたという事実には違いない。現に、彼の功績が認められて、辺境にいるウイズにまでその名が広まっていたのである。

『少しでも良いからお話をしてみたいな……』

アークウィザードを辞めて小さな店の主となった彼女は、冒険者でありながら巨大な会社を繁盛させている茂茂を心の底からリスベクトしており、機会があれば教えを請いたいと思っていた。

『でも彼は、王都で活躍している大商人。そんな人と会える機会なんて早々無いわよね

……』

カウンターで頬杖をついたウイズは、客のいない店内を眺めてため息をつく。

しかし、心の清い彼女の願いが天に通じたのか、思いもかけない幸運が訪れる。新人冒険者育成用の訓練施設をアクセルのそばに建設しようという計画した茂茂が、この街に引越して来たのだ。

これぞまさしく、千載一遇の好機。吉報を耳に入れたウイズは、意を決して会いに行くことにしたのである。

『フアイトよ、ウイズ……ダメダメ店主を卒業するため、今こそチャンスをこの手に掴むのっ！』

茂茂が住んでいる借家に向かう道中、自分に言い聞かせるように気合いを入れる。それほどまでに緊張しているからだ、そうなるのも仕方がない。商才が微塵も無いと言いつつも過言ではない彼女にとって、大出世を果たした彼は雲の上にいる神様のような存在だからだ。

『トクガワ・シゲシゲさんか……紅魔族の人達みたいに変変わった名前だけど、どんなお方なのかしら？ あれだけ立派な仕事が出来るんだから、きつと素敵な人だと思うけど……』

目的地が近づくにつれて緊張感だけでなく期待感も高まってくる。もし上手くこと

が進めば、魔道具店を始めて以来ずっと続いている赤字地獄から脱出できるかもしれない。

『うふふ……このチャンスをものでできれば、憧れの黒字生活も夢じゃありません！  
そうすればもう、貧乏店主とかポンコツ店主などと言われずに済みます！』

意外に楽天的なウイズは、明るい未来を妄想してニコニコと笑顔になった。

しかし、そんな幸せも長続きしなかった。その時、不意に強い風が巻き起こり、それによつて飛ばされてきた何かがウイズの顔にへばりついたのだ。

『わぶっ!?!』

いきなり視界が真っ白になって慌てたウイズは、バランスを崩して尻餅をついてしまった。浮かれていた彼女にも隙があつたとはいえ、まったくもってついていない。

『もう！ 一体何が飛んできたの?!』

お尻に受けたダメージで涙目になりながら、顔にへばりついた物体を取る。すると、解放された彼女の視界に一人の男性の姿が映つた。それは凛々しい顔立ちをした冒険者風の男で、足早にこちらへ近づいてくると、なぜか突然謝罪してきた。まったくの偶然だが、この男こそ今から会おうとしている茂茂だった。

『まことに申し訳ない。余の洗濯物のせいで迷惑をかけてしまった』

『えっ』

一瞬何のことかと思つたが、すぐにその意味が分かつた。今右手に持つてゐる柔らかい物体は、彼の洗濯物だつたようだ。状況を理解したウイズは、立ち上がつて話を進める。

『それつて、これのことですか?』

『ああ……拾つていただき感謝いたすが、そなたの身体に怪我はないか? もし痛むのであれば、完治するまで治療費を支払うゆえ、遠慮なく申し出てくれ』

『いえいえ! そこまでしていただかなくても結構ですよ!! なんとつて、私は不死身ですから、このくらいへつちやらです!』

『……なるほど、不死身であるか。確かにそれなら、治療費は無用だろうな』

手厚すぎる対応に慌てたウイズは、ついつつかり自分の秘密を漏らしてしまふが、人の良い茂茂は、彼女が気を使つてくれたのだと解釈した。そんな奇妙で優しいやり取りが面白くて、お互いに笑つてしまふ。

『ふふふつ。何だかおかしな会話になつちやいましたけど、ここはひとまず一件落着とということにしておきましょう?』

『相分かつた。そなたの優しさに甘えさせてもらつとしよう』

円満に話をまとめた二人は、再び笑顔を浮かべながら見つめ合う。

『(誠実で思いやりのある人ですね……)』

『(包容力に溢れた魅力的なお方だ……)』

まだお互いの素性を知らない状況なのだが、偶然出会ったこの瞬間からお互いに好意を抱き始めていた。まあ、ウイズの巨乳をガン見している茂茂にはヨコシマな感情が含まれているのだが、幸いなことに彼女はそれを右手に持った洗濯物に向けているのだと勘違いした。

『あつそうだ。これをお返ししなくちゃいけませんね』

照れたウイズは、気恥ずかしい空気をごまかすように話題を変えると、右手に持ったままだった洗濯物を広げた。しわくちやのまま返すのは失礼だと思つて綺麗にたたもうとしたのだが、それが何なのか分かった途端に彼女の動きが止まる。

『あの……白くて、もっさりとして、前の部分に穴があつて、後ろの一部が茶色くなつてるコレつてまさか……』

『それは余の使用済みブリーフだ』

「つて、おとおおおい!? あんだけ話を盛り上げといて、最後は結局ブリーフオチかよっ!?!」

あまりの落差に呆れた銀時がツツコミを入れる。ちよつぴりラブコメ風の話だったので茶化さず聞いてやったのに、肝心のオチが想像以上に酷かった。

おかしな回想を聞き終えた銀時たちは、哀れむような表情を浮かべた。どう考えてもアレは、男女の出会い方としては最悪の部類に入るだろう。そう思ったからこそウイズに同情したのだが、当の本人はなぜかニコニコとしていた。

「それにしても、初めて会いに行つた日にあんな偶然が起きるなんて、改めて思い返すと、すごく運命的な出会いですよね！」

「アレのどこでそう思つたのお!? あんなの全然、運命的な出会いじゃねーよ! うんこ付きブリーフと出会つた的な話だつたよ! つーか、將軍泣いてんだだけ!? 恥ずかしい過去を掘り返されて涙目になつてんだだけ!? あーもうゴメンね! さっきの話は聞かなかつたことにしとくから! ブリーフのウン筋をウイズに見られちゃつたことは、綺麗さっぱり忘れちゃつてえ!」

器用な銀時は、変なスイツチが入つたウイズにツツコミを入れつつ、傷ついた茂茂のハートも気遣う。どうやらウイズは、汚いブリーフに関する思い出すらも美化してしまふほどに茂茂のことを尊敬しているようだが、今はそれがかえつて仇となつてしまつた。

「まあなんだ! とにかくこれで、二人が最高の師弟コンビだつーことがよおしく分かつたよなあ、アクアア?」

「えつ、ええそうね! それは私も認めてあげるわ! よくよく考えれば、リッチーとブ

リーフマスターってヨゴレ者同士だし、とってもお似合いだと思ふの！ 人を見る目がある私と言うんだから安心して！ 二人の相性は、あんパンと牛乳並にバツチリよ！」

「ほおーら將軍、今の聞いたか？ ヨゴレ仲間の駄女神からも太鼓判をもらえたぜ？

これでお前ら三人は、俺公認のヨゴレトリオだ！」

「つて、さりげなく私をまぜないで欲しいんですけど!?! 芸達者なこの私を、ダチ○ウ倶楽部的に扱わないで欲しいんですけど!?!」

これまでの悪逆非道をうやむやにしたい銀時は、アクアを上手く利用して強引に話をまとめた。とはいえそれは、話題を変えたい茂茂にとつても好都合だったので、彼の茶番に乗ることにした。

「つっわけで、仲直りの印に自己紹介でもしとこうぜ。將軍もこいつらとは初対面だし丁度良いだろ？」

「ああ、そうだな」

気を取り直した茂茂は、初めて会ったためぐみんとダクネスに挨拶すべく姿勢を正す。「では、改めて名乗らせてもらおう。余の氏名は徳川茂茂。冒険者を生業とするかたわらで商人としても活動している変わり者だ」

先ほどまで涙目だった人物とは思えないほど凜とした声で自己紹介する。話した内容は簡潔だったが、彼から発せられる雰囲気は只者ではないことを物語っている。そん

な茂茂に貴族の風格を感じたダクネスは、めぐみんよりも先に前へ出ると、相手を敬うように名乗りを上げる。

「初めましてシゲシゲ殿。私はクルセイダーを生業としているダクネスという者です。貴方の噂はかねがね聞き及んでおりまして、いつか挨拶したいと思っておりましたが、このような機会に恵まれて感激の極みです」

「ほう、余に関する噂などというものが広まっているのか？」

「はい、そうです。何でも、貴方が建設している砦の中は世界中から集められた拷問器具で埋め尽くされており、無謀な侵入を試みた者は地獄のごとき苦しみを味わえるとか！

もしそれがまことであるなら、ぜひ私も試してみたいっ!!」

「お前はどこに注目してんだ!? 將軍なんかそっちのけでアブナイ遊びに夢中じゃねーか! バカなことは考えないで、ほんとマジで止めとけて! あの砦は、99機も命があるヒゲオヤジを殺せる場所だぞ!? SMプレイじゃ済まねえほどに鬼畜な仕掛けが待ってんぞ?!」

無茶なことを言うダクネスに銀時がつっこむ。無限増殖出来るマリオでも全滅しかねないクツパ城に一度限りの命で挑ませるなど、たとえDMであってもやらせる訳にはいかない。あの配管工のマネをしていたら命がいくつあっても足りないのだ。

こうなったら、厄介な展開にならない内にダクネスを引っ込めて、めぐみんに出番を



回そう。

「よし、ドMはここでターンエンド！ 次は爆裂バカの番だ！」

「おい、それは私に言っているのか!? もしそうなら表に出ろ！ 爆裂バカの爆裂魔法をバカなあなたにおみまいしてやる！」

何か余計に厄介な事態になった。どいつもこいつもマジで面倒くさい連中である。

そんなバカパーティーの一員であるめぐみんは、銀時への報復を誓いつつ、中二病という個性を遺憾なく発揮した名乗りを行う。

「こほん……では、気を取り直して……我が名はめぐみん！ アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

案の定、お馴染みの名乗りを上げて銀時達をしらけさせる。イタイ中学生の黒歴史をリアルタイムで見せつけられては、どうしてもやるせなくなってしまう。だがしかし、意外にも茂茂は動じていない。

「その特徴的な名乗りと紅い瞳……もしかやそなたは紅魔族か？」

「いかにも！ 我は紅魔族随一の魔法の使い手にして、いずれは魔王を討伐する者！ ゆえに我が名を、その頭に刻むがいい」

可愛らしい容姿とはウラハラに勇ましいセリフを吐くめぐみん。それに対して茂茂は、親しみを込めた笑みを浮かべる。

「なるほど、まだ幼くとも紅魔族の一員だな。【もよもと】や【トンヌラ】と雰囲気似てる」

「えっ、あなたはあの二人を知っているのですか?」

「うむ。以前、紅魔の里を訪ねた時にかままれてな。愚痴を聞いてやっている内に何か懐かれてしまって、現在は余の下で熱心に働いている」

「なんと!? それはすごいですよ! 生まれた時点でレベル48もありながら、名前が発音出来ないという理由でどこにも雇ってもらえず、すっかりやさぐれてしまった【もよもと】と、悪質なアクシズ教団に無理矢理入会させられた挙げ句、10年も奴隷のような社畜生活を強いられて、すっかりやさぐれてしまった【トンヌラ】を更正させてみせるとは! あなたはかなりのやり手ですね!」

「なにその哀れな二人組!? お笑いな名前に反して、人生ハードモードだよ!」

確かに、彼らの青年期はドラクエの主人公みたいに過酷だったようだが、今は楽しく暮らせているようだなによりだ。

ちなみに、建設中の砦が一ヶ月ほどで形になったのは彼らのおかげなのだが、銀時にとっては知ったこっちゃない話である。

「まあ、名前だけのモブなんざどーでもいいとして……今度はウイズに俺達の紹介すんぞ」

「はい、お願いします」

「では改めて、俺の名前は坂田銀時。こいつらのリーダーやってる、しがない遊び人で、このバカは、ノーパンノーブラの露出狂で自称女神のアクア様だ」

親切な銀時は、所有物扱いのアクアも一緒に紹介してやった。しかし、その内容はノーマルなウイズにとつて驚くべきものだった。

「へ……変態さんだあーっ!」

「ちよつまつ、違うの!? その解釈は間違いよ!? 私はマジで女神だから、出してる方が正しいの! だってほら、ミ〇のヴィーナスとかモロ出しでしょう!? あんな感じで、超自然的な女神には下着なんて必要ないの! ていうか、つけてる方が邪道なの! それなのに、この私を変態扱いするなんて、あんたたちは酷すぎるわ! 貧乳を底上げしてるエリスの方が、どう見たっておかしいのにい!!」

「このバカ、世界的な美術品をダシにして、とんでもねえこと言いだしやがった! その上、エリスって女神の恥ずかしい秘密まで暴露するなんて、こいつあ酷え悪魔だぜ!」

「私を勝手に墮天させないでほしいんですけど!」

面倒になりそうなのでアクアの紹介を代わりにしたら、話が余計にこじれてしまった。とはいえ、それほどの外れな紹介でもなかったもので、この場は「女神を夢見るイタイ子」という解釈で収まった。

「よし、これで全員の紹介が終わったな。それじゃあ、今後ともヨロシクっつーことで……」

「おおおおい!! ちよつと待てええええ!! まだ俺がやってないんだけど!!」 長谷川の紹介だけバツサリカットされてんだけどっ!」

銀時に無視されそうになったため、これまで黙ったままだった長谷川がようやく喋る。

「なんだ、いたのかよ長谷川さん。まったく会話に入ってこねえから先に帰ったのかと思ってたぜ」

「絵が無えからっていい加減なこと言ってるじゃねえよ! 2話も前からずつといただろ!」 華麗にツツコミ決めてただろう!」

喋るチャンスがなかなか無くて大人しく出番待ちをしていたというのに、ようやく機会が来たと思ったらコレである。不幸すぎる長谷川は、自己紹介すらまともにやらせてもらえなかった。

「すまねえウイズ。一人紹介し損ねてたぜ。このグラサンかけた冴えないオツサンはマダオつていうんだ」

「嘘つけええええ!! 確かにそれでも通用するけど、本名は違うからね!! こんな俺にだって長谷川泰三っつーイケてる名前があるんだからねっ!」

「は、はい……ハセガワさんですね？」

何とか名前だけは伝えられたが、ウイズに与えた印象は、結局『まるでダメなオツサン』であつた。

何はともあれ、茂茂のおかげでウイズに対する誤解が解けて、彼女は新たな仲間となつた。大金を手に入れる計画が水の泡と消えたアクアとしては面白くない結果となつたが、銀時の方には思わぬ収穫があつた。それは、茂茂とウイズの関係である。

「ウイズと話してる將軍の顔がやたらとツヤツヤしてんだけど、アレって絶対気があるよね？」

つまりはそういうことだ。ウイズの反応も満更ではなさそうなので、上手くすれば恋人同士になれるかもしれない。ならばここは、仲間として恋のアシストをしてやるべきだろう。

「なあ將軍。あんたの持つてるその箱はウイズに持つてきたんだろ？」

「ああ、そうだ。色々あつて渡しそびれていたが、ようやくこれの話が出来るな」

銀時は、あの箱の中身がウイズにあげるプレゼントであると当たりをつけて話を進める。確か茂茂は『頼まれていた品が届いた』とか言っていたが、恐らく間違いない……。

「さあウイズ殿、注文通りに出来ているか確かめてみてくれ」

「わあ、ようやく完成したのですね！」

輝くような笑顔を浮かべたウイズは、茂茂から手渡された箱を抱いて喜ぶ。しかし、根性が捻くれたアクアは、自分に対する貢ぎ物が無いことが不満で理不尽な言いがかりをつけてきた。

「なによ将ちゃん。女神の私には何も無いのに、こいつなんかの特注のプレゼントを渡しちやつて！ 常識的に考えて、おかしいんじゃないかしら？ そうよ、何かがおかしいわ！ もしかして、エッチな下心でもあるんじゃないの？ それをあげる代わりに、こいつの巨乳を揉み揉みさせろってことじゃなモガフツ!？」

「バツ、バツキャロウ!? 將軍はそんな奴じゃねえよ！ すっげムツツリスケベだけど、そこまでエロいことはしねえよ！ やつてもせいぜい、エロ本のヌードモデルにウイズの顔写真を張り付ける程度だよ！」

「オイ、それフォローになつてねーぞ!? 女子たち全員ドン引きだよ!！」

余計な邪魔をしてきた駄女神の口を塞ぎながら、茂茂を弁護(?)する。

「(この駄女神エ！ 恋のキューピッドにうんこ投げつけるようなマネしやがつてえ！)」

額に血管を浮かべた銀時は、空気を読めないアクアに怒る。しかし、この件に関して

は彼自身も間違えていた。

「あの、お二人は何か勘違いしてるみたいですけど、これはプレゼントではなくて、お店に出す商品ですよ？」

「えっ、そーなの？」

ウイズからありきたりな答えを聞いて、一気に拍子抜けするバカ兄妹。その逆に、魔道具に興味があるめぐみんが食いつく。

「それじゃあ、その箱の中身は魔道具なのですか？」

「はいそうですよ。しかも、出来たてホヤホヤです」

嬉しそうに返事をしたウイズは、めぐみんに促されるように箱を開けた。すると中には、真っ赤な色の女性用装備が入っていた。

「こ、これは……!」

「じゃじゃくん! この商品は、装備するだけでバストサイズがアップする【戦士のビキニ】ですよ!」

「よし買ったあ!!!」

「迷わず即答?!?!?!?そこまで巨乳に憧れてたの!?!」

商品の効果を聞くや否や、購入を即決するめぐみん。やたらと自信家な彼女だが、平均以下の貧乳だけは唯一の欠点だと思っていたのだ。しかし、それも今日までだ。

「ふっふっふー！　とうとう私の時代が来ました！　これでもう、無駄にデカく成長した「ゆんゆん」の胸を見ても敗北感を抱かずに済みます！」

「いや、ニセ乳でごまかしても負けは負けだろ」

銀時が正論でつつこむが、浮かれているめぐみんは右から左に聞き流した。負けず嫌いな彼女は、ゆんゆんという名の少女に胸の大ききで負けていることを根に持つっており、この魔道具でリベンジするつもりなのだ。

とはいえ、こんなきわどいデザインのビキニにそんな効果があるのだろうか。気になった長谷川がウイズに頼んで貸してもらおうと、いやらしい手付きで調べ始めた。

「触った感じは普通のビキニと変わんねえけど……どういう原理でオツパイがデカくなるんですか、上様？」

「うむ、それには筋力に作用する類の支援魔法が複数込められていてな、その効果がビキニを基点に強く現れ、胸囲が驚異的に上昇するのだ」

「なんか思ってたのと違うんだけど!?　バストアップというより大胸筋がビルドアップしてるだろソレ!?　女の魅力つつーよりも男の色気が増しちゃうだろソレ!？」

詳しく聞いてみたら、売りにしている効果の意味に偽りがあった。確かに胸は大きくなるようだが、グラビアアイドル型ではなくてボディビルダー型だった。

一瞬で夢破れためぐみんは、目からハイライトを消してつぶやく。



「どうやらソレは、アークウイザードである私には不必要な物ですね。むしろこれは、筋肉ムキムキなダクネスにこそふさわしい代物です」

「なっ、何を言うんだめぐみん!? 私の身体は、それほど筋肉質ではないぞ?!」 むむむ、胸だつてちゃんと柔らかいし、腹筋だつて割れてないぞ?!」

「ドMのクセに、そーいう所は気にすんのかよー!」

意外に純情な所があるダクネスは、自分の身体が筋肉質だということを気にしていた。苦痛を味わうために筋トレを続けている結果なので、おもいつきり自業自得なのだ。が……変態の乙女心は、複雑を通り越して混沌と化していた。

だが今は、ドMの乙女心などどうでもいい。ここで注目すべき問題は、頭のおかしい商品ばかりを出してくるウイズの商売センスにあった。

「何だよこの欠陥品は!?! こんな詐欺と一緒じゃねーか! エリスの底上げパッドよりよっぽど悪質じゃねーか!」

「ど、どこが悪質なんですか!?! 胸のサイズで悩んでいる女性はたくさんいるから、絶対需要があるはずですよ!?!」

「そのオツパイが筋肉製じゃなければって話だけどねっ!?!」

怒り狂った銀時は、ずれたことを言うウイズの致命的な間違いを指摘する。

「男の夢がいつぱい詰まったオツパイを、筋肉なんて酸っぱいモンでごまかすなんざ、絶

対に許せねえ！ お前の巨乳は筋肉なのか!? 直接揉んで確かめようかあ!」

「ぎやあああああ!? ごめんなさあああああ!」

ようやく自分のミスに気づいて反省するウイズ。もちろん彼女に悪気があったわけではなくて、色々とアイデアを考えている内に迷走してしまい、最終的には『バストサイズと同時に攻撃力も上がれば一石二鳥ですよね!』なんておバカな答えに行き着いてしまった結果の産物なのだ。そんなダメ企画を茂茂の所へ持ち込み、彼女に甘い彼が実際に作ってしまったのが、このビキニだった。

「なあウイズさんよお。貧乳の気持ちいが分からねえ巨乳のせいで、ウチのめぐみんがすっげえ傷ついちゃったんですけどお? この落とし前はどうかつけてくれんですかねえ?」

「あーん、本当にすみませえーん!!」

「まあ待て銀時、あまり彼女を責めないでやってくれ。余も間違っているとは思っていないが、その失敗が彼女を育てると思ったのだ」

「いや、間違ってるって分かってんなら止めてやれよバカ師匠! コイツがちやんと育つ前に、絶対この店潰れちまうから!」

茂茂の教育は、甘党の銀時ですらツツコミを入れるほどに甘かった。いわゆる『惚れた弱み』という奴だが、ウイズの暴走を止められないのはいただけない。実際、そこに

目をつけたアクアが早速からんできた。

「ブークスクス！ 流石の将ちゃんも、性根の腐つたりツチーをまともに教育することはできなかつたようね！ やっぱり、腐つたミカンは周りの人まで腐らせるのよ！ これでよく分かつたでしょう？ アンタみたいな腐れリツチーは、ダンボールの片隅にすら存在しちやいけないの！ 悪魔だらけの不良中学でスケバン張つてる方がお似合いなのよっ！」

「ひ、酷い!? なんにもそこまで言わなくても!？」

意外に年を食っているアクアは例えがいちいち古臭く、元ネタを知っている銀時たちから冷笑を浴びせられた。それでもウイズはかなりのダメージを受けているようなので、見かねた長谷川が助けに入る。

「まあまあ、悪口もそこまでにしときなよアクアちゃん。確かに、焼きそばパンとそのビキニは失敗作かもしれないけど、他の商品は大丈夫だろ」

そう言いながら、身近にあった品物を手に取る。それは赤い液体が入った小さな瓶だった。

「ほら見る。これなんか、いかにもゲームに出てくるポーションみたいじゃねーか。たぶん、飲むと体力が回復したりする奴だぜ?」

「あつ、それは強い衝撃を与えると爆発しますから気をつけてくださいね」

「飲むと体力減るじゃねーか！」

弁護しようと思つたら、いきなり危険物を引き当ててしまった。これでは余計に心象が悪化してしまう。

「そ、それじゃあ隣のこれは、飲むと魔力が回復する……」

「それはフタを開けると爆発します」

「だったらこれは毒消しの……」

「水に触れると爆発します」

「じゃあもうこれはエリクサー!？」

「温めると爆発を……」

「そんな危険物を店頭に並べんじゃねええええ!!」

「きやああああああ!! ごめんなさあああああ!!」

あまりの酷さに味方していた長谷川もキレた。

「何でこんなに爆発物がこれみよがしに置いてあんの!? まさかコレ、爆破コントの前振りじゃないよね!? 俺に使えつてことじゃないよね!? これだけあるとアフロになるだけじゃ済まないんだだけ!? 流石の俺も死んじゃうけどっ!？」

「ももも、もちろん、そんなつもりはありませんよ!? その棚の爆発シリーズは、この後、奥にしまっておきます!」

長谷川のリアクション芸でようやくその柵の危険性を理解したウイズは顔を青ざめさせる。本当にこれまでよく無事で済んだものだ。呆れた銀時は、爆発シリーズとやらを見回しながらそう思った。

その時、やたらと目覚めのある物が目に写り、思わず動きを止めてしまう。

「おいウイズ。そこにある雑な作りをしたこけし人形みたいな奴も爆発すんのか?」

「はい、そうですよ。それは『ジャスタウエイ』という名の目覚まし時計で、アラームが鳴ると同時に爆発します」

「もうソレただの時限爆弾! つーか、なんで目覚まし機能をつけやがった!? 目覚めた直後に永眠するだろっ! 次の朝は来ねえだろ!」

もしやと思って聞いてみたら、ウイズの答えはかなり笑撃的だった。まさか、異世界でコイツと出会うことになるとは……。

「どうなつてやがんだコレは? 作者や集〇社に断りもなくパチもんを売り出しやがって! リッチーには著作権を守る義務が無いとも思つてんのかあ!」

「つつこむ所はそこじゃねーだろ! 世界を跨いでクレームつけんな!」

銀時の訴えは速攻で却下された。

「大体、本物を知らないウイズさんには作れねーだろ、こんなモン」

「はい、そうです。ハセガワさんのおっしゃる通り、そのジャスタウエイは私が作ったも

のではなくて、別の街で買ったものです」

「それじゃあ、コイツはどこから湧いて出たんだよ？　もしかして、別の転生者が作つてんのか？」

「それは余にも分からん。時々このように我らがいた世界の物が出回ることがあるのだが……」

茂茂はそう言うと、アクアの方に視線を向けた。色々と見聞を広げた彼は、これまでアクアがばらまきまくった【神器】に原因があるのではないかと睨んでいた。実際、それらの中には、本来の所有者の手を離れて悪用されているケースがあるのだ。

しかし……

「余は、そのジャスタウエイを使って悪人を懲らしめることが出来た。ゆえに今更、出所などにはこだわらぬ」

「へえ、ブリーフ一丁にされるたびによく泣いてた將軍が悪人退治ねえ。しばらく会わねえ間に、随分と男らしくなったじゃねえか」

「いやいや!?　ここは関心するより、誰かを爆破したことにつつこむトコじゃね!」

確かに長谷川の言う通りである。なぜ茂茂が人間を相手にしてジャスタウエイを使うことになったのか。長谷川の疑問を聞いて【あの事件】の詳細を話しておいた方が良くいと判断した茂茂は、この機会に打ち明けることにした。面識が無いめぐみんとダクネ

スに関しては懸念すべき所なのだが、あの銀時が認めた者たちならば心配するだけ無駄だろう。

「銀時とその仲間たちよ。皆を信じて【とある秘密】を打ち明けるが、今から話すことは他言無用にしてもらいたい」

「ああん？　なんだよ急に。面倒そうな予感しかしねえけど、俺らが聞いた方がいいことなのか？」

「ああそうだ。これからする話は、この街の領主をしている【アルダープ】に関することだからな……」

「なにっ!?　アルダープだと!?!」

茂茂の口から出た人物名を聞いてダクネスが驚く。

「どうしたダクネス。もしかして、その【アレ脱糞】とかいう奴のことを知ってるのか？」

「い、いや……奴に関する悪い噂を耳にしたことがあったから、やはりそうかと思っただけだ。それと、奴の名はアルダープであって、脱糞しちやつた人ではないぞ」

いきなり真剣な表情になったダクネスは、当たり障りのない返答をする。さつきまでは銀時のドS調教に悦んでいた変態メス豚だったのに、今はまともな美少女騎士に見える。

「真性ドMをここまでシリアスにしちまうなんて、その【アル中シムラがだっふんだっ

て奴はそんなにヤバイ相手なのか？」

「もはやアルしか合っていないが……ともかく、その「変なおじさん」は、かなりの悪徳貴族でな。余は、砦の建設に関して奴と敵対することになったのだ」

皆の注目を集める中、茂茂は語り始める。それは、ウイズと協力して成し遂げた愛と友情の大作戦だった……。



## 第12訓 美女には悪い友がいる

ウイズの店で銀時パーティと出会った茂茂は、話の流れで過去の冒険を語ることに  
なった。この街の領主を懲らしめるきつかけとなった事件の顛末を……。

「アルダープという男は、まるで絵に描いたような悪人であった」

当時の光景を思い出すように、ゆつたりとした口調で語り出す。改めて思い返すと、  
あれはかなり危険な賭けであった。

今から4ヶ月前。アクセルに引越してきた茂茂は、弟子入りしたウイズと仲を深め  
ながら砦を建設するための準備を進めていた。王都で築いた信用と人脈を活かして王  
国発行の許可証を手に入れ、必要となる人材も順調に確保できた。後は、領主に支払う  
様々な費用について上手く交渉するだけである。

しかし、その作業こそが最大の障害となった。領主の屋敷に赴いてアルダープと会談  
した茂茂は、明らかに法外な支払いを要求されたのだ。

この領主には以前から不正を働いているという黒い噂があり、今回の訪問では裏工作  
を整えさせないようにするため、事前に知らせることなく不意を突いて来た。礼儀には

反するが相手は有名な悪徳領主だ、用心するに越したことはない。何にしても、ここまですべての金額が通常の3倍などふざけるにも程がある。余をたばかつて遊んでい

るのか?』  
『いやいや、こちらは至つて真面目だぞ? なにせお前は、平穩なこの領地に軍事拠点などという物騒極まりない物を築くというのだからな。いわばこれは、ワシの大事な領民達に危害が及んだ場合の保険みたいなものだ』

狡賢いアルダープは、もつともらしいことを言ってきた。もちろんそれは本音を、ごまかすための建前に過ぎず、彼がやっていることは不正以外の何者でもない。そもそも、国王の許可が取れている時点で通じない言い訳なのだが、アルダープの表情は何故か自信に満ちていた。

『そのような戯れ言がまかり通るなどと本気で思っているのか?』

『もちろん本気だとも。これまでお前に言つたことは、すべて我が領地と領民のことを考えてのことだからなあ。どう見ても、ワシの方に正義があるだろう。それでも不服と言うのなら、王国検察官を呼んで白黒つけても構わんぞ? まあ、その場合はたんまりと慰謝料をいただくことになるが……この国の未来を担う有能な冒険者を育てたいと

「いうお前の夢を、こんなつまらんことで台無しにしたくはなからう?」  
『……』

アルダープは、黙り込んだ茂茂を見下すように下品な笑みを浮かべる。とても信じられない話だが、ここまで強気に出られるということは、この男の力が王国検察官にまで及んでいると見て間違いなさそうだ。

『(やはり、政治に腐敗はつきものか……。だが、一介の地方領主にしては影響力が強すぎる。これには何か裏があるな)』

この時茂茂は、悪の限りを尽くした挙げ句に獄中で殺された伯父のことを思い出した。もしかすると、伯父に似ているこの男にも、何か得体の知れない秘密があるのではないだろうか。まさか、この異世界で天人が暗躍していることは無いだろうか……。

『(いや、たとえばそうであったとしても、何を臆することがあろうか。余はもう無力であることを止めたのだから)』

自身の暗殺計画が実行されたあの時から、彼は真の侍となって、己の義を貫き通すことを心に誓った。家族のために。友のために。今を生きる民のために。より良き国を作って見せると決意を新たにしたのだ。

残念ながら、その志しを前世で全うすることは出来なかつたが、女神の慈悲によつて新たな機会を与えられた。その恩に報いるためにも、この程度の障害は乗り越えてみせ

なければならぬ。

覚悟を決めた茂茂は、劣勢な状況を打破するための時間稼ぎを実行する。この悪人を油断させて、つけ入る隙を見い出すために。

『相分かった。貴殿の要求通りに計画を進められるよう検討し直すでしょう。ただ、想定以上に費用が膨らみ過ぎたゆえ、資金調達のための時間をもらうぞ』

『ああいいとも。こう見えてもワシは寛大な男だからな。こちらの条件を守るというなら、しばらくは待つてやるさ』

茂茂の期待通り、上手くいったと思ひ込んだアルダープは、満足そうに笑みを浮かべた。その醜い顔は、茂茂の目には悪魔が嘲笑しているように見えた。

そこまで話を聞き終えると、怒りに燃えたダクネスが感情を爆発させる。

「おのれアルダープっ!! 権力を傘に守るべき民を苦しめるとは、どこまで卑劣な奴なのだっ!! そのような貴族にあるまじき不埒な振る舞いは、この私が断じて許さんっ!!」

「そーだそーだ! 許さんぞー! 女神の私が将ちゃんに授けたありがた〜いお金を汚い手段で巻き上げようとするなんて、ちよー罰当たりなヤツなんですけど! たぶんソイツは、ハゲおやじの皮を被った性悪悪魔に違いないわ!」

「まったくアクアの言う通りです！ その領主の傲慢ぶりは悪魔にすら匹敵します！ ああ、思い返すだけでも腹ただしい！ こんなに爆裂魔法を人に向けてぶっ放したいと思っただのは生まれて初めてです！」

「おおいぞ！ 俺が許す！ あのハゲを爆裂させてナツパみてえに処分しようぜ！」  
「なにそのサイヤ人的思考!?! 怒る気持ちは分かるけど、ベジータの真似はマジ止めて!?!」

銀時達もアルダープに怒りを感じて、今にも殴り込みに行きそうなテンションになる。

しかし、現時点ではそこまでする必要はない。何故なら、彼らに勝るとも劣らない負けん気を持った茂茂が、すでにお仕置きを済ませていたからだ。

屈辱的な会談の後、素早くアクセルへ戻った茂茂は、早速反撃の準備を始めた。あの男の屋敷に潜入して不正の実態を暴くのだ。

『何にしても、まずは王国検察官とのつながりを確認しなければならん……』  
裁判で不正ができる限り、こちらが勝利を掴むことはほぼ不可能だろう。

だが、逆に考えれば、そこが最大の突破口でもある。ネタバレして頼りの切り札が使えないものにならなくなれば、たとえどんな強者であつてもあつけなく敗北してしまうから

だ。

『全蔵が愛読していたジャンプという書物でよく見かける展開だから、おそらく間違いなからう』

「確かに異論は無いけれど、んなもん根拠にしてんじゃねーよ!」

マンガを頼りにした茂茂の予測はいまいち信用出来ないものだったが、幸いながら今回のケースにおいては有効な手段でもある。

何はともあれ、自分の判断を信じた茂茂は、今夜から潜入調査を執行することにした。

『なに。コレさえあれば、そのようなことなど造作もない。この「ルパルゴ13世」が愛用していた「大盗賊のブリーフ」があればな』

『なにそのルパ○3世のニセもん!? つつこみ所満載だけど、何でル○ンがブリーフ派なの!? ルパ○と言えばトランクスだろ! もつさりブリーフ履いてねーだろ! つつか、ルパルゴ13世って何なんだよ!? ゴル○13が混ざってるけど、そのせいでブリーフ派なの!?』

思わぬモブキャラの登場に銀時がつつこむ。確かに、猿顔の大怪盗と名前が似ていて紛らわしいが、架空の人物という訳ではない。「ルパルゴ13世」はこの異世界に実在していた、遙か昔の大盗賊だ。ぶつちやけ、ル○ン3世と同等の能力を持っており、そのおかげで茂茂も超一流の盗賊になれるわけだ。

『後は、ウイズ殿に事情を話さなければ……』

命懸けの作戦となる以上、弟子のウイズにはすべてを伝えておかなければならない。勝手に迷惑をかけるような形にしておいて何だが、せめて彼女に謝罪してから出陣したいと思つたのだ。

支度を整えた茂茂は、夕暮れに染まり始めた街を走つてウイズの店にやつて来ると、暖かく迎えてくれた彼女にこれまでの経緯を語つて潔く頭を下げた。

『……まことに申し訳ない。余がふがいないばかりに、そなたにまで迷惑をかけてしまうことになってしまった』

『そんな、謝る必要なんかありません！ 私はどこまでもシゲシゲさんの味方ですし、どんなことだつて協力します！ それに、この街の領主が悪いことをしているなら、税金を払つてる私だつて許せませんもの！』

ウイズはそう言うと、胸の前で握り拳を作つて可愛らしく怒つてみせた。

そんな心暖まる光景に、意地の悪いアクアが突つかかってくる。

「ぶぶー！ この腐れリッチーつたら、自分の立場が分かつていないのかしら？ 明らかにOL的な年齢のクセにかわい子ぶりっ子なんかしちやつて、あまりに哀れで見てらんないんですけれど！」

「いや、かわい子ぶりっ子なんて死語を未だに使つてるお前の方が哀れだよ！ 昭和世

代丸出しで40越えが丸バレだよ!」

「ちよっ!!」このマダオはナニ言ってくれちゃってんの!? この瑞々しい私がそんな年食ってるわけないでしょう!? ご覧の通り、私はとつてもヤングなガールよ!? ピッチピチのアイドルなのよ!」

「その言い訳自体がヤングじゃねーよ! 昭和の哀愁漂ってるよ!」

ウイズの年齢をバカにしたアクアは、自身の言葉がブーメランとなつてダメージを受けてしまった。この手の欠点は、大抵自分自身にも当てはまることが多いので、他人をバカにするのは止めておくが吉である。

何はともあれ、ウイズの応援を受けた茂茂は忍者のような覆面姿となつて出陣し、再びアルダープの屋敷へと向かった。

日が完全に沈んだ頃に屋敷へ到着し、闇夜を活かして手間取ることなく潜入を果たす。警備はそれなりに嚴重だったが、「ブリーフソウル」で身につけた盗賊スキルのおかげで割と簡単に入り込めた。

『さて……叩けば埃が出てくるだろうが、鬼や蛇まで出るやもしれん!』

屋敷の奥から感じる嫌な気配に警戒しつつ、内部の探索を始める。盗賊スキルの「潜伏」と特製の「ダンボール箱」を駆使して巧みに見張りをやり過ごし、誰に気づかれることなく進んでいく。



『やはり沖田の言っていた通り、潜入任務にはダンボール箱が必須であるな』

「待て待てえええええい!? 将軍それウソなんだけど!? あのDSに騙されてるけど!?

マジで行けると思ったのソレ!? 少しも変だと思わなかったのソレ!?!」

あまりに無謀な茂茂の行動にすかさずツツコミを入れる。確かにアレを實際にやるなんて常識的には有り得ない。だが、非常識なめぐみんは何故か大いに気に入っていた。

「なにを言っているのですかギントキ。携帯できる箱を活用することによって、身を隠すと同時に移動までこなすなんて、とてつもなく画期的な潜入法じゃないですか。それを否定するなんて、あなたのセンスを疑わずにはいられませんね」

「頭のおかしい中二病が俺にダメ出ししてんじゃねえよ!? あんな無謀な一発ギャグは、スネ○クさんしか出来ねえんだよ! リアルでやったら即逮捕の上、朝のニュースで晒し者だよっ!」

銀時の言っていることはもつともである。しかし、幸いなことに、ルパルゴ13世の盗賊スキルが非常に優秀だったため茂茂が見つかることは一度も無かった。

そのように、数々の幸運に助けられながら調査を進めること1時間後。更に運が良いことに、一人で廊下を歩いているアルダープを発見した。

『（こんな夜更けにどこへ行く気だ?）』

いやらしい笑みを浮かべながらどこかへ向かうアルダープは、明らかに怪しかった。ここは後をつけるべきか。しかし、あの男が出払っている今が奴の自室を調べるチャンスでもある。

『……』

一瞬迷った茂茂だったが、最初の直感を信じて後をつける方を選んだ。

『この選択が、幸運を司る女神、エリス様のお導きであると信じよう』

運命の分かれ道に幸あらんことをこの世界の神に祈る。そうして茂茂が辿り着いた場所は、使用人用の〔女風呂〕を覗き見するための仕掛け部屋だった。

『ふおおおおお!! 何ともエロい身体をしおって! やはりアイツは脱いだらすごいな!』

『それには余も同意する』

「って、同意してる場合じゃねーだろ!! どう見ても選択ミスしてるんだけど!! これ絶対、女神エリスのお導きじゃないよね!! 女湯覗きの変態オヤジに導かれただけだよね!?!」

アルダープと一緒にあってメイドの裸を鑑賞している茂茂にやつかみ混じりのツツコミを入れる。

さらにウイズは、無自覚に嫉妬して茂茂の身体を激しく揺さぶる。

「うわあー!? 女の人の裸なんて見ちゃダメですよシゲシゲさああああんっ!」

「す、濟まないウイズ殿。たとえどんなに望もうとも、過去は決して変えられないのだ」  
「そりやそーだろーよ! 転生しても変化無しのもつっつりスケベ属性なんざ、シユワちゃん過去に送ったって、もはやどうにもならねーよ!」

確かにその通りである。異世界に来て一皮剥けた茂茂だったが、男の性には逆らえなかった。エロに目覚めた男というものは、キスも知らずに子作り出来る悟空のように淡泊ではいられないのだ。

それでも、幸運の女神は彼に微笑んでくれた。女湯覗きを堪能したアルダープは気持ちごとつてもハイになり、ついうっかり軽率な言葉を漏らしてしまう。

『はっはっは! 今日には実に気分が良いぞ! なにせ、あのシゲシゲとかいう若造から数十億もの大金を騙し取ることに成功したのだからなあ! これだから、女遊びと不正行為は止められん!』

「ぶふーっ!! バカだぜコイツ! 時代劇に出てくる悪者みてえに自分で悪事をバラしてやがるぜ!」

銀時の言う通り、調子に乗ったアルダープは、水〇黄門に出てくる悪代官のように自身の悪事をペラペラと喋りだした。思わぬ大金が手に入り、上機嫌になった勢いで酒をしこたま飲んだことも軽口の一因となっているが、間抜けであることは間違いない。

『それにしても、あの若造め。事前に断りもなく押し掛けて来た時にはどうしてくれようかと思つたが、これから末永く大金を与えてくれるお得意様となるからなあ。ワシからの感謝の印として「マクス」の力を使わずにおいてやろう。万が一、ワシに刃向かう素振りを見せたら容赦はしないが、あの程度の腑抜けにそんな勇氣はなからう』

バカなアルダープは、自分の力を過信しすぎて眞実を見謝つた。茂茂との交渉が思い通りに成功したせいで、彼のことを完全にみくびつてしまったのだ。

その驕りが心に隙を生み出して、「マクス」という切り札を使わなくても問題無いと思ひ込ませた。アルダープを油断させるために、わざと相手の自尊心を満たすような行動をとつた茂茂の機転が、偶然にも最大の危機を回避する有効策となつたのである。

とはいえ、眞相を知らない当人は「マクス」という謎の単語に疑問を抱くだけだった。『何やら不吉な印象を受けるが「マクス」とは一体なんだ？ 共犯者の名か、あるいは悪事に関する符丁の類か？』

「ああ、もしかするとこれってアレじゃね？ マッドマックスに出てくるようなヒヤッハーな連中使つて恐喝することを、ちよつとオシヤレに『マクスしようぜ』つて言つてるんじゃない？」

「絶対違うし、ネタが古いよー！」

もちろん、銀時の想像は外れており、今はまだ言葉の意味すら分からない。

だがこれで、あの男の秘密に近づけたことは間違いない。潜入初日から有益な情報を得られた茂茂は、「マクス」というヒントを頼りに調査を続行する。

翌日。日が昇る前に屋敷を脱出した茂茂は、一旦アクセルに戻って別の調査を行うことにした。今度は、アルダープと背後でつながっていると思われる王国検察官を調べてみようと考えたのだ。

昨日の潜入工作で、あの男が悪意を持って不正を働いているという確証を得られた。ならば後は、それを裏付ける証拠を手に入れればいい。

『もし「マクス」とやらが不正をごまかすための工作員だとすれば、証拠品を取り扱う検察側を調べた方が尻尾を掴めるかもしれん』

どの道、王国検察官の身辺は調べなければならぬので、まずは彼らが集めた証拠品から探りを入れてみることにした。

アルダープに容疑がかけられている事件は世間に知られている物だけでも複数あって、検察が調べた案件もいくつか存在する。しかし、検察側は、そのすべてにおいて証拠不十分による無罪と判断して裁判すらやろうとしない始末である。おそらくは不正をごまかすために証拠を隠ぺい・ねつ造していると思われるが、それらの中に何らかの痕跡が残っていれば、そこから「マクス」に近づけるかもしれない。

「おいおい、何だかマジで風車のヤシチみたいになって来たじゃねーか」

「ああそうだな。上様がヤシチでウイズさんがおギンって感じかな」

「それじゃあ、この中で一番偉い女神の私がコーモン様って所かしら？」

「ああん？ オマケでお供に加わってる分際でふざけんよ、うっかりハチベエ！ あんま調子ぶっこいてると、レギュラー枠から外しちまうぞー！」

「えっ、ちよつ、待つて!? なんか本気で外してやるぞ的な気配を感じちゃったんですけど!? ねえ止めて!? うっかり担当でいいから、レギュラー落ちだけは勘弁してえー!?」

忍者のように地道な茂茂の活動を知った銀時達は水戸〇門に例えて盛り上がる。実際彼は王都へ赴き、ヤシチのような調査活動を開始する。

まず目をつけたのは、王国検察官が取り扱った証拠品を保管する施設だ。アルダープの関与が疑われている事件は未解決のまま調査保留になっているものが多く、証拠品は処分せずに保管してあると思われる。だからこそ、確かめてみる価値は十分にあるのだが、これまでのように忍者姿で行うのは難しい。夜間は強力な結界で守られてしまうため手出しができず、明るい昼間は「潜伏」スキルも役にたたないので、中に潜入したとしても証拠調査は困難だ。

そこで代わりに活躍するのが、ルパルゴ13世が得意としていた【変装】スキルであ

る。数日かけて用意した衣装とファンタジーな技術で作られた特殊メイクを使って実在する検察官になりすませば、施設の中を歩き回っても怪しまれないで済む。

実際に潜入してから内部の職員と接触したが、変装のおかげで無事にやり過ごすことが出来た。

『ふう……何とかセナ殿を演じきることができたな』

「いや、何で女に化けてんだよ!? パンストからはみ出たすね毛と、タイトスカート越しでも分かる股間のモツコリ感が全力で男をアピールしてるんだけど、ここの奴等はどうしてコレで騙されるワケ!? この世界にはバカしかいないの!? それともセナってオカマなの!？」

銀時の疑問はもつともだが、これにはちゃんとした理由がある。セナという名の検察官はかなりお堅いメガネ美女で、この施設の職員は彼女の機嫌を損ねるのを恐れて、あまり下半身にエロい視線を向けられないようにしているのだ。そんな偶然のおかげで変装がバレなかったのだから、運が良かったと言うしかない。

ただし、茂茂が彼女に変装したのは偶然ではない。以前、商売絡みの事件で彼女の捜査に協力したことがあり、その人柄や性格を知っていたからモノマネできたという訳だ。

何はともあれ、セナという女性のおかげで潜入工作は成功したのだが、その話を初め

て聞いたウイズが、目のハイライトを消しながら茂茂に詰め寄ってくる。

「シゲシゲさん……そのセナさんという方とは、モノマネ出来るほどに親しいのですか？」

「いや、確かに彼女は好感を持てる女性ではあったが、親しいというほどの間柄では……ところでウイズ殿、なぜジャスタウェイを起動させようとしているのだ？」

「ああ、これですか？ 自分でもよく分からないんですけど、シゲシゲさんの口から女性の話を聞いたなら、一緒に爆発したくなつたんです……」

「……でまさかのヤンデレ展開!? こんな誰が得すんだよっ!」

なんと、商売センス以外はまともだと思っていたウイズが、茂茂と出会ったことでもんでもない属性に目覚めていた。それに気づいた男共は、言い知れぬ恐怖を感じて冷や汗を流す。

そんな中、これまで真剣に回想を聞いていたダクネスが、DMの欲求を我慢できずに食いついてきた。

「おおっ！ これが噂に聞く修羅場というものか！ 愛するがゆえに自分を裏切った男と共に散る運命を選ぶとは、非常に燃えるシチュエーションではないか！」

「燃えるどころか、木っ端微塵になっちゃうけどお!」

他人の修羅場に巻き込まれて命を落とすなんか真つ平ごめんである。もちろんそれ



は他の面子も同様なので、何とかウイズをなだめてから回想の続きに戻る。

ともかくにも、保管施設の潜入には成功したので、ここからは時間との勝負である。同じ手を何度も使うのは流石にリスクが高すぎるため、なるべくこの一回だけで結果を出さなければならぬのだ。つまりはぶっつけ本番の一本勝負なわけのだが、その緊張感たるや、女神に救いを求めたくなるほどだった。

『幸運の女神エリスよ。我に慈悲を与えたまえ』

「ちよーつと待って！ 何で将ちゃんは私じゃなくてエリスなんかを頼ってんのよ!？」

屋敷のシーンでも気になったんですけど、いつからエリス教に鞍替えしたの!？ 昔はあんなに敬虔なアクシズ教徒だったの!？ 天界で会った時に私をベタ誉めしていたくせに!？ 水の女神を愛する心はもう無くなってしまったの!？ ナイスボディな私に飽きて、貧乳エリスを選ぶというの!？」

「……シゲシゲさん、これは一体どういうことですか?」

「つて、おおおおお!？ せつかくなだめたばかりなのに、再びヤンデレ始まつちやったよ!？ おいコラ駄女神! お前が紛らわしいこと言ったせいでウイズ様がお怒りだろーが! 責任とって命差し出せ! 嫉妬神を鎮めるために!」

「女神の私を生け贄にしないでほしいんですけど!？」

空気を読めないアクアの暴走で話が脱線してしまった。

しかし、回想に出ている茂茂は未来の出来事などお構いなしに作業を進めていく。その結果分かったことは、あまりに奇妙な物だった。

『何だこれは……あの男を逮捕できるだけの証拠が十分に揃っているではないか……』

予想すらしていなかった状況に驚きを隠せない。もし検察官が悪事に荷担をしているなら不正の証拠を放っておくはずはないのだが、それらすべてをそのままにして保管庫に置いておくなど、どう考えても不自然である。もし第三者に発見されたら自分自身も逮捕されかねないのだから、こんな間抜けなことはしないはずだが……。

『これはどういうことなのだ?』

表面的にはアルダープを擁護しておきながら、犯罪行為を裏付ける証拠品を普通に保管しておくなど、やっていることが矛盾している。これほど奇妙な状況を作り出すには、人知を越える力が……たとえば、「心や記憶を自在に操るチート能力」でもなければ不可能だろう。もしそのような力が実在するならば、検察や被害者達に証拠は無いと思いつまさせることも出来る……いや、それどころか、上手く使われたら犯罪が起きていることにすら気づけないかもしれない。

『まさか、そのようなことが……いや、一つだけ心当たりがある』

嫌な推測を思いついて背筋が寒くなる。そうであってほしくはないが、その可能性は非常に高い。なにせ、彼女はソレをこの異世界へ大量に送り込んだのだから……。

『まことに遺憾だが、アクア様が与えた力の中にそのような能力があるやもしれん』

「やっぱお前の仕業かあああああつ!!」

「ええええええええつ!!? 何でそーいう話になるのっ!?!」

「何でもナニも、それつきやねーだろ! こんなエゲつないこと、お前がバラ撒いたチートアイテムでしか出来ねえだろうが!?! こいつは絶対、鏡花水月で幻を見せてるに違いないよ! 『一体いつから不正をしていると錯覚していた?』とか言つて藍染気分を楽しんでんだよ!」

「そんなフワツとした理由で私に罪を背負わせないでほしいんですけど!?! ていうか、斬魄刀は著作権に引っかけからチートアイテムに入つてません!」

証拠も無いのに主犯のような扱いを受けたアクアはイラツとくる喋り方でやり返してきた。実際、鏡花水月なんてチートアイテムは天界で扱っていないので、その点では嘘をついていないことを銀時たちは知っている。

とはいえ、転生者ではない者たちにはそんなことなど知るよしもないので、気になつためぐみんが質問してきた。

「あの、話がまったく見えないのですが、アクアがバラ卷いたとは一体どういうことですか?」

「ああ。実はコイツ、タイムマシンに乗つて未来からやつてきた駄女神型ロボットでな。

メガネをかけたダメ少年にねだられるたびに、未来で作られたチート魔道具を巻き散らして世間様に迷惑かけまくってやがんだよ」

「な、なんと!? アクアにそこまでぶっ飛んだ秘密があったとは!? 初めて会った時から只者ではないとは思っていましたが、未来からやって来た高性能ゴーレムだなんて予想外にも程があります!」

「あつ、でも、ゴーレムならパンツを履いてなくてもおかしくありませんよ?」

「確かにそうですね。アクアがノーパンだと知った時は正直言つて人間性を疑いましたが、元々人間じゃないなら何も問題ありません」

「いや、違うんですけど!? みんなあつさり認めてますけど、私はそんなドラ○もんの存在じゃないんですけど!」

銀時の嘘にやたらと納得しているめぐみんとウイズに対してアクアがつっこみを入れる。しかし、彼女が与えたチートアイテムが悪用されている可能性は高いため、あながち外れた話でもない。少なくとも、それに匹敵するほどの「力」が使われているのはほぼ間違いないと思われる。それでもなければ、これほど奇妙な状況を作り出すことは出来ないだろう。

『これが「マクス」とやらの力なのか?』

調べれば調べるほど謎が深まっていく。一体「マクス」とは何なのか。もしそれがア

ルダープに味方する転生者だとしたら非常に厄介である。

『だからといって手を引くわけにはいかないが……これからは、より慎重に行動しなくてはならなくなったな』

もし本当に人を操る能力があるのだとしたら、自分が操られてしまう危険性もあるのだ。その正体が分からない間は、絶対にアルダープから敵意を向けられるわけにはいかない。

『いや、待てよ？　これだけ美女になりきっておれば、好色な奴の気をごまかせるやもしれんぞ……』

「止める將軍!?　そのモツコリした股間じゃ速攻でバレちまうぞ!?　せいぜい、マニアックなオカマ好きしか騙すことはできないぞーっ!」

ちよつぴり女装に自信を持った茂茂は危険なアイデアを思いついたが、性別に関係なく見つかった時点でアウトなので実行には至らなかった。

数日後。検察側の調査を終えた茂茂は、再びアルダープの屋敷を探索することにした。状況から推察して、検察官に裏切り者はいないと判断したからだ。

『ならばここにすべての答えがあるはずだ』

意を決した茂茂は、危険を承知で潜入工作を続ける。

そうして慎重に行動を進めること一週間。屋敷中を調べ回ったが、新たな発見は何も無かった。怪しい場所は判明したのだが、常に衛兵が見張っているアルダープの寝室と結界が張られている宝物庫だけは忍び込むことが出来ないでいた。

『あの寝室に神器並の魔道具がある可能性は非常に高いのだがな……』

盗賊スキルの中に、レアなお宝の在処が分かる「宝感知」というものがあり、それを使ってみると、この屋敷から複数の反応を感じできた。幸い転生者とおぼしき日本人は見あたらないが、そのお宝の一つが人を操る能力を持っている魔道具ではないかと思われる。ただし、有効な対抗策がない状態でこちらの存在を知られる訳にはいかないのだ、今はまだ強行手段を取ることは出来ない。

『虎穴に入らずんば虎子を得ずと言うが……さて、どうしたものか』

手詰まりとなった茂茂は、ダンボールの中に潜みながら思案する。

『こうなれば、護身のために片栗粉から教えられたハニートラップとやらを仕掛けるしかないな……余の女装でアルダープを誘惑すれば、宝の在処を聞き出せるやもしれん……』

「だからそれはダメだつーのっ!?! 倫理的にも映像的にもアウトだつて理解してつー!?!」

テンパった茂茂は、無謀なアイデアを試そうとするほど追い込まれつつあった。あま

り長引かせると砦の件を催促されて、最悪の場合は業を煮やしたアルダープに操られてしまうかもしれないからだ。その前に解決の糸口を見つけないければ、あの悪人の思う壺となつてしまう。司法機関を頼れない以上、自分で何とかしなければならぬのだ。

しかし、そのような逆境の中でさらに茂茂を追いつめるような事件が起きてしまった。なんと、好色なアルダープが手下を使って浚つてきた少女を陵辱しようとしたのである。

気絶させられた少女は、使用人を立ち入り禁止にした部屋に運び込まれ、目を覚ました直後に悪夢を経験することになる。

『いやあああああつ!! 止めてえええええつ!!』

『はっはっは! ワシに抱かれるのがそんなに嫌か? 濟まないとは思うが、しばらく我慢するがいい! どうせ、すぐにワシのことを「思い出せなく」なるのだからなあ!』  
泣き叫ぶ少女に襲いかかったアルダープは、意味不明なことを言いながら彼女の衣服を強引に脱がしていく。

ああ、もうダメだ。ベッドの上でケダモノに押さえつけられた少女は、心の底から絶望しかけた。

「ちよつと待てえええええ!?! 何かいきなりヤベエ展開になつてんだけど、これ続けちやつて大丈夫なのお!? ここには、まだオ○ニーすら知らねえガキがいるんだぞ!」

「おいっ！ そのガキとは私のことを言っているのか!? 神にも等しい私の知識を年や見た目だけで判断するとは、愚かにも程があります！ 幼き頃に禁断の扉を覗いた私は真理を見てしまったのですよ？ 我が妹であるこめつこをこの世界に錬成するため、父と母が夜な夜なアブナイ儀式を行っている姿をね！」

「お前はなんつー気まずいネタを赤裸々に語ってやがんだ!? 親の子作りシーンなんて、トラウマものの黒歴史じゃねーか！ そんな話は聞きたくねえから、それ以上は黙ってろっ！」

子供扱いされたためぐみんがアダルト過ぎるネタで言い返してくるが、今はそれに構っている場合ではない。流石のアクアも洒落にならないとばかりに少女の末路を聞いてくる。

「ちよつと将ちゃん！ ちびっ子に対する配慮はこの際置いといて、その子はこの後どうなっちゃうの!? ここまでヤバいと、家族でドラマを見ている時に濡れ場が始まって気まずくなる程度じゃ済まないんですけど!?」

「そ、そうだっ！ その少女はどうなったのだ!? もし、彼女が奴に傷つけられたとしたら、私はっ……私はっ……！」

「いや。何も案ずることはないぞダクネス。彼女はこの余が助けたからな」

少女の危機に銀時たちが慌てるものの、幸いなことにその場には彼女を救い出してく



れる勇者がいた。「潜伏」スキルを発動させて背後を取った茂茂が、アルダープの意識を奪ってその凶行を食い止めたのである。

『古来より、不味い飯屋と悪が栄えた試しはない!』

『ふごっ!!? ふごおおおおおおおおっ!!?』

無警戒だったアルダープは、「1ヶ月使用し続けたブリーフ」で鼻と口を塞がれて、想像を絶する悪臭に悶絶しながら気絶した。

『こういう時には眠らせて無力化する……幼き頃に学んだ忍者の教えが役にたったな』

「いやいや!? 忍者はそんなことしないんだけど!? 汚えブリーフをクロロホルム的に使ったりしないんだけど!」

茂茂の攻撃は忍者よりもダーティだったが、結果良ければすべて良しである。

気絶したアルダープをベッドの脇に放り捨てると、状況が飲み込めずにおびえる少女を安心させるように優しく語りかける。

『あ……ああ……』

『もう大丈夫であるぞ。今からそなたを家族の元へ送り届けるゆえ、乱れた心を落ち着けるがよい』

『えっ………家に帰れるの?』

『ああ。ここは余の言葉を信じてほしい』

紳士的な茂茂の態度から誠意を感じた少女は、覆面から覗く彼の目を見て大きく頷く。

『あ、あのっ！ あなたは一体誰なんですか？ 何故こんなところにいたんですか？』

『残念ながらそれは言えん。今宵のことは悪い夢を見たのだと思うがいい』

『は、はい……』

聡明な少女は言葉の裏に隠された真意を理解して、それ以上の質問を止めた。そんな聞き分けの良い少女に感謝しつつ、茂茂は懐に入れていた風呂敷を取り出す。

『それはそうと、これで胸元を隠してくれぬか？ そのままでは目のやり場に困つてしまふ』

『えっ？ あつ、きやあつ!?!』

少女は、茂茂に指摘されてようやく自分の状態に気づき、はだけた胸元を慌てて隠す。その様子に苦笑しながら風呂敷を手渡すと、今度は気絶しているアルダープに近づく。当然ながら、この悪漢をこのままにして帰るわけにはいかない。

『貴様の犯した罪を法で裁けぬというのであれば、この余が代わりに成敗しよう』

普段は温厚な彼も、今は激しく怒っていた。明るい未来を与えるべき子供を己の欲望を満たすために傷つけるなど、人としても貴族としても決して許せるものではない。

ならば、そうできないようにしてやろう。アルダープにふさわしい罰を決めた茂茂

は、ウイズの店で入手したジャスタウエイを懐から取り出した。これは発見された場合の陽動に使えると思つて持つてきた物で、室内で使いやすいように威力を押さええてあるのだが、そのおかげで効果的な使い方ができる。

怒りのあまり暴れん坊將軍と化した茂茂は、目覚ましタイマーをセットしたジャスタウエイを剥き出しになっているアルダープの股間に置いた。

「ジャスタウエイ、そんなトコに使つたのおおおおつ!？」

『武士の情けで命までは取らないでおいてやるが、股間にぶら下がっている物は取らせてもらふぞ』

「こいつぁマジだよ!？」 マジで將軍、タマ取る気だよつ!？」

銀時の言う通り、茂茂は本気だった。この卑劣極まりない悪人を決して許してはならないと、彼の中の侍魂が言つていた。ゆえに茂茂は迷わない。たとえ、この先不利な状況に陥るとしても、己の義を貫き通してこの少女を救つてみせる。かつて、自分を助けてくれた友人たちのように……。

『あ、あの……こちらの準備は整いました……』

今はもう会えなくなった友人たちを思い出していると、風呂敷で胸元を隠した少女が声をかけてきた。アルダープには近寄りたくないらしく、離れた場所からこちらを見ている。彼女の今後を考えるなら、早めに脱出するべきだろう。

だが、その前に、もう一つだけやっておかなければならないことがある。茂茂は、懐から一枚のカードを取り出すと、部屋にあるソファに座った。セットで置かれているテーブルで字を書くためだ。

『済まないが、後少しだけ時間をくれ』

『あの……何をするんですか？』

『これに犯行声明を書くのだ。大盗賊がそなたをいただいたとな』

そうすれば、アルダープに敵意を持った賊が少女を連れ去ったと思ひ込ませることができるし、プライドを傷つけられた奴は少女の口止めよりも犯人探しを優先するはずだ。その間に彼女の家族を別の街に引っ越しさせれば、とりあえず一安心できるだろう。

後はどのような文面にするかだが、茂茂にはとっておきのアイデアがあった。その成果として出来上がったものが以下の文である。

「よお、アルダープのとつつあくん。おいら、ルパルゴ13世。お前が浚ってきた子猫ちゃん、大盗賊の俺様がいたただいたぜえ。その代わりに素敵なプレゼントを置いてやってやったけど、気に入らねえからって「マクス」を使って仕返ししようとしても無駄だからなあ？ こっちはお前の犯した悪事をぜえくんぶお見通しなんでねえ、逆にこっちが仕返しする前に自首することをオススメするぜえ？ さもないと、もつと大

事な物を失うことになっちまうぞお〜？ ウヒヒヒッ！

「將軍、めっちゃノリノリじゃねーか!? そこまでルオン大好きだったの!」

「余は、ジ〇リ映画とル〇ンのTVスペシャルを、妹と一緒にかかさず見ていた」

「あー、分かる分かる。ラピ〇タとかカリオ〇トロつて、もう何十回も見てるのに、やつてるとつい見ちゃうんだよなー」

「いい年こいたオツサンが、夏休み中の子供みてえなあるある話してんじやねーよ!」

たまたま判明した共通の思い出話で盛り上がるバカ野郎共に長谷川がツツコミを入れる。

しかし、その時点ではまだふざげられる状況ではなかった。なぜなら、相手の秘密を暴く前にこちらの存在を知られてしまったからだ。これでは間違いなく警戒されてしまい、「マクス」の真相に近づくことが出来なくなってしまうだろう。

それでも、少女の救出を優先したことに悔いは無いのだから、何も恐れることなく前に進むのみである。

『では行くぞ』

『はいっ!』

準備を整えた茂茂は、少女を連れて廊下に出ると静かにドアを閉めた。そして、犯行声明を書いたカードをナイフでドアに張り付けた。



へ引つ越した。今ある生活を捨てての逃避行ではあるが、茂茂が用意した家と資金があるのでさほど時間をかけずに落ち着くことが出来るだろう。

しかし、その代償として屋敷の警備が強化され「マクス」の調査がよりいつそう難しくなってしまう。

それでも、アルダープの非道を知ってしまったからには途中で諦めるわけにはいかない。ここで屈してしまつたら凶悪な力を持った極悪人が野放しのままになってしまうのだ。

新たな作戦を練り直すためにウイズの店にやって来た茂茂は、そうはさせまいと決意を固める。

数日後。ウイズと議論を重ねた結果、大ざっぱながら対抗策が見えてきた。

少女を救つた代わりに屋敷の警備が強化されてしまったものの、アルダープが怪我の治療で動けない現状はこちらにとってチャンスでもある。そこで茂茂は大胆な作戦を思いつく。

『えっ、宝物庫にある財宝を盗むのですか!?!』

『ああそうだ。あの男が「マクス」を使えなくなるように脅しをかけると同時に資金力を奪つて奴自身の力も弱体化させる。それに、上手くすれば宝物庫の中に人を操る魔道具

も保管されているやもしれん』

『あつ、なるほど！ そこまで考えていたなんて、流石ですシゲシゲさん！』

はしやいでいるウイズを見ると不安になるが、やってみる価値は十分にある作戦だ。

今回の件で警戒心を強めたアルダープに近づくのはよりいっそう危険になったが、それならば間接的に攻めればいい。アルダープの資産を奪えば増やした警備費用を維持できなくなつて、次第に守りが手薄になつていくだろう。それに加えて、マクスを使う限り何度でも金を奪うと脅せば十分な抑止力になるはずだ。

『奴の魔道具がいかにかに強力であつたとしても、使う相手が目の前にいなければ無力に等しいからな。向こうが根負けするまで、ひたすら裏で動いてやろう』

この時茂茂は「マクス」の力をそのように認識して対抗しようと考えていた。

ちなみに、奪つた財宝に関しては、元々不正で稼いだ金なので賠償込みで返してもらつたと解釈している。今はこちらで預かつておいて、いつかアルダープが失脚した時に隠し財産が見つかつたとしても言つて信用できる貴族に預ければいいだろう。

ただしそれは、作戦が成功すればという仮定の話である。今度の潜入はさらに命懸けとなり、茂茂一人で成し遂げるのは厳しいと言わざるを得ない。それを理解したからこそ、ウイズは茂茂と共に戦う道を選ぶ。

『シゲシゲさん！ こゝから先は、私にも手伝わさせてください！ 卑怯な能力を使つ



て街の人達を傷つけるような悪人なんかにはいきませんもの！」  
眉毛を釣り上げたウイズが茂茂に詰めよりながら宣言する。これまでは茂茂に説得されてサポート役に徹していた彼女だが、流星にじつとしていられなくなったのである。

『いや、しかし……』

『しかしもお菓子もありません！ もう私は、どこまでもシゲシゲさんについていくって決めちゃいましたから！ そこまで私の身を案じてくださるのでしたら……あなた自身の手で守ってください！』

まるでプロポーズのようなセリフを言い切ったウイズは、数秒経ってからそれに気づくと、一瞬にして真っ赤になった。

『きやああああああつ!!』 今のはアレですつ！ 好きとか嫌いとか、恋バナ的なモノじゃなくて、師匠を慕う弟子というか、お兄ちゃんに甘える妹というか、そういう感じのほんわかした話であつて、ベベベ、別におつき合いしたいと思つてるわけじゃないんですからねっ!!』

「ヤンデレの次はツンデレかよ！」

「リッチーの分際で二つも萌え属性を持つてるなんて生意気よ！」

むず痒くなるようなラブコメ展開に銀時とアクアがたまらずつつこむ。

すると、彼らの悪感情を察してくれたかのように、回想の中でも彼女にツツコミを入る人物が現れる。

『フハハハハハハ！ このような絶好の機会にヘタレるとは情けないな！ 本当はその男に良いところを見せて今より仲を進展させたい乙女店主よ！』

『いやあーっ!?! そんな恥ずかしいことを、本人の前でバラさないでくださあああああ  
い!?!』

『おっと、羞恥にまみれた悪感情、甘酸っぱくて美味であるー!』

唐突に現れた不審人物は、トマトのように赤くなつたウイズを見て大笑いする。見るとそいつは黒いタキシードを着た大柄の男性で、顔の上半分を覆っている怪しい仮面と、そこから発せられる禍々しい気配が只者ではないことを物語っていた。

『(よもや、余の敵感知をすり抜けて入ってくるとは……こやつ、できるな)』

相手の実力に強い警戒心を抱いた茂茂は、未だに顔を隠したまま恥ずかしがっているウイズを背後にかばいながら仮面の男に話しかけた。

『お主……CLOSEの看板を無視して入ってきては駄目ではないか』

『いや、つつこむところはそこではなからう。ラブコメ店主の好意を知って小踊りしたいほどに浮かれている元將軍よ』

仮面の男は、茂茂の軽い牽制を意外すぎる方法で返してきた。

『……お主は何故、余のことを元將軍であると思ったのだ?』

『いいや、思ったのではない。我輩はお前の過去を「見通した」のだ。サムライの国よりやって来たブリーフマニアの將軍よ』

『なに? 余の過去を見通しただと?』

『左様も左様! 何を隠そう、我輩こそが魔王の幹部にして、悪魔達を率いる地獄の公爵! この世のすべてを見通す大悪魔、バニルである!』

只者ではないとは思っていたが、その正体はとんでもない大物だった。

これには話を聞いていた銀時達も驚きを隠せない。

「えっこれマジ? 最初の街で中ボスとエンカウントするとか、どう考えても無理ゲーなんだけど?」

「ていうか、ここに來たってことは、ソイツはこのリッチーの仲間じゃないの!? ええ、きつと間違いないわ! コオン並に的中する私の感がそう言ってるもの! 恐らくここは、今にもつぶれそうな魔道具店を装った魔王軍のアクセル支部になっているのよ!」

「つぶれそうだななんて酷いですよっ!」

悪魔と聞いてアクアが荒ぶり出すが、彼女の予想は一部分だけ当たっていた。

回想の方のウイズが心を落ち着けると、ようやくバニルがいることに気づいて親しげ

に話しかけた。

『あれ？ 良く見たらバニルさんじゃないですか！ 何でここにいますか？』

『今ごろ気づいたのか、この浮かれ店主め。せつかく友人の我輩が遠路はるばる魔王城から出向いてやったというのに、なんとそっけないことよ。男ができると女は変わるといだが、かつて【氷の魔女】と言われるほどに恋愛下手だった汝であつても例外ではなかつたか』

『ちよつ?! その二つ名はそういう意味じゃありませんよ?! というか、昔の話をシゲシゲさんに言わないでくださあぁあぁい!!』

バニルに茶化されてウイズは見事に翻弄される。その手際の良さに銀時とダクネスが関心する。

「なるほど、大悪魔って肩書きは伊達じゃないな。セリフのすべてにSっ気が満ちてやがるぜ」

「ああそうだな！ 相手の心を読むことでの確に嫌がる部分を責め立てるなど、考えただけでもゾクゾクする！ 機会があるなら、ぜひ私も手合わせしてみたいものだ！」

「変なところにDSとDMが食いつきやがつた?!」

「紅魔族の私としては、イカした仮面の方に興味をそそられますがね！」

「女神の私としては、その悪魔の存在すべてが気に入らないんですけど！」

「中二病と駄女神まで、自由に話を広げんじやねえ！」

この場にいるバカ全員が、無茶苦茶なキャラ設定のバニルに興味を抱く。

もちろん、それは回想の中の茂茂も同様で、彼のことを知っているらしいウイズにたずねる。

『ウイズ殿。もしや、この者は、以前そなたが言っていた悪魔の友人か?』

『はいそうです。バニルさんは私の古い友人でして、最近はずっとご無沙汰してましたが、もしかして、久しぶりに会いに来てくれたのですか?』

『ああそうだ。頑張り屋の真面目店主が息災であるか気になってな』

『バ、バニルさん……そんなにも私のことを気遣ってくださるなんて……』

『というのには真つ赤な嘘だ。風邪すらひかないおバカなりツチーを心配する悪魔などいるわけなからう』

『……私の感動を返してください』

悪魔なバニルは日常会話も悪意に満ちていた。

『フハハハハハハ！ 勘違い店主の悪感情、結構な美味である!』

『まったくもう……それじゃあバニルさんは何しにここへ来たのですか?』

『うむ。我輩がここに来た理由は他でもない、そこにいる男に用があつたからだ』

そう言ううとバニルは、ビシッと茂茂を指さした。

『ほう、魔王軍の幹部が一介の冒険者に用があると申すか?』

『何も不思議がることではあるまい。お前が良質な装備品を行き渡らせたせいで、魔王軍の損害が増加の一途をたどっているのだからな。今ではもうお前の名を知らぬ者はいない程だぞ』

『わあ〜! 商売の力で魔王軍を疲弊させるなんて、すごいですよシゲシゲさん!』

無邪気なウイズは、尊敬する師匠の活躍を素直に賞賛する。しかし、迷惑をこうむっているバニルはそんな彼女にイラツとくる。

『このたわけ店主め。こちらとしては喜んでいる場合ではないわ。最近魔王の奴がストレスを溜めまくって、優雅に引きこもり生活を満喫している我輩にやたらと愚痴っておるのだぞ? それゆえ我輩までムシヤクシヤしてきたから、その元凶であるブリーフマスターに一言文句を言いに来たのだ』

『おおおおおい!! 魔王軍にまでブリーフマスターって呼ばれてんのおおおおっ!! 何かもう世界中からデイスられてる感じになってんだけど!? 誰でもいいから、いい加減本名で呼んでやれよっ!! このままじゃ、ブルマの父ちゃんのブリーフ博士みたいになっちまうから!!』

なんと、ブリーフマスターの名は取り返しのつかない所まで広まっていた。しかも、有名になりすぎたせいで魔王軍の幹部から襲撃を受けてしまうとは、まさに踏んだり

蹴ったりである。

『それでは、余を討伐するために来たというのか?』

『そんなっ!!? イラッとしたからってシゲシゲさんに八つ当たりするなんて酷すぎですよバニルさん!!』

『何を言うか、早とちり店主め。悪魔の我輩がそんな非道をするわけなからう。悪感情という美味なる食事を与えてくれる人間様を殺すなど、悪魔の風上にも置けぬ所行であるわ』

「あれ、何か正しいこと言ってるけど、悪魔が言うのはおかしくね?」

銀時は、悪魔のクセに人道的なことを言うバニルにツツコミを入れる。しかし、この異世界ではその認識の方が間違っている。ここでは人間と悪魔に共生関係が成り立っており、人間側から悪さをしなければ、悪魔といえどもちよつとイラッとくる存在に過ぎないのだ。アクアに言わせれば『あいつらなんか、人間の悪感情がないと存在できない寄生虫よ!』となるが、同族同士で殺しあえる人間と比べれば彼らの方がまともである。

『先ほども言ったように、我輩がここに来た理由はお前に文句を言うためだ。つい先ほどまでは、お色気店主にソックリな巨乳美女に姿を変えて童貞將軍を誘惑し、さんざんその気にさせてからブリーフ一丁に剥いた所で『残念、我輩でした!』とドツキリをか

ます予定だったのだ。まあ、怒り狂った嫉妬店主に残機を減らされそうなので止めることにしたのだがな』

「ああ、やつぱコイツ悪魔だわ。DSの俺が引いちまうくらい、やり口がエゲつねえもん」

「ええ……やはり悪魔は恐ろしい存在ですね。よもや、性別だけでなく胸の大きさまで自由に変えられるとは！」

「ソレ、つつこむ所が違うんじゃない？」

バニルの悪質なイタズラに銀時とめぐみんのSコンビが戦慄する。世間の認識ほど悪くないといっても、悪魔はやはり悪だった。

ただし、彼は茂茂にとって頼もしい仲間となる存在でもあった。

『それにお前は、我が野望を実現するための希望となる人材ゆえ、我輩はお前の味方になると決めたのだ』

『？ それはこちらとしてもありがたい話であるが、お主の野望とは一体なんだ？』

『フハハハハハ！ その詳細については次の機会に語るとして……今は悪徳領主を懲らしめることが先決であろう？』

『っ!? やはり聞いていたのか』

『悪魔イヤーは地獄耳であるからな。そのような面白……大変な事件が起きていると聞



いてしまつては、友として黙つておれん』

『今、面白いつて言いかけましたよね?』

ぶつちやけると、バニルが言いかけた言葉は本音だった。最近、魔王軍の間で有名になつてきたブリーフマスターなる存在に興味を抱き、王都にいた頃の彼をこつそり見通してみたところ、友人のウイズと共に面白そうな事件に巻き込まれる相が出ていたので、わざわざこの日を狙つてやつて来たのである。

『ついでに、彼奴にも会えるしな……』

『えっ? 今何か言いましたか?』

『いや、ちよつとした独り言である。それよりも、その男の記憶から領主の屋敷を見てみたが、なんてことはないな。どうやら宝物庫の結界を破る方法を思案しているようだが、悪魔の我輩から見ればあの程度の結界など紙装甲も同然!』というか、神が張つた結界であつても、我輩の行く手を邪魔するものは指先ひとつでダウンである!』

茂茂の思考を言い当てたバニルは、北斗○拳のOPみたいなことを言つてニヤリと笑う。実際に茂茂は結界の解除法について悩んでいた最中で、もしバニルが来なければ、魔族だけが扱っている「結界殺し」という魔道具を魔王城に行けるウイズが入手してやることになつていた。しかし、それでは時間がかかり、アルダープが先に動き出してしまふかもしれない。つまり、バニルの協力は渡りに船であり、その幸運を喜んだウイズ

が歓声を上げる。

『すごいですよシゲシゲさん！ 天の邪鬼でツンデレ気味なバニルさんが自分から率先して協力を申し出るなんて、私が黒字を出すくらい珍しいことですよ？』

『ええい、好き勝手に言ってくれてはいないか、この自虐店主め！ 立派な悪魔として清く正しく悪辣に生きている我輩をツンデレよばわりするだけでなく、商才ゼロの赤字店主と同列扱いにするとは、愚弄するにも程があるぞ！』

ナチュラルにバカにされたバニルは当然の如く抗議するが、そんな彼の態度を銀時があざ笑う。

「ぶふーっ！ コイツ、なに逆ギレしてんの？ まともな職にも就いてねえクセに立派な悪魔とかほざいちやつてさあ？ お前は中二病をこじらせた新手的チンピラかつーの！ 大体、立派な悪魔つてのは、デ○モン閣下みてえに成功した悪魔のことを言うんだよ！ お前みてえなクズ野郎とは正反対な悪魔なんだよっ！」

「いや、お前の方こそなに言ってるの!? 本物の悪魔と自称悪魔を本気で比べてどーすんだ!？」

どこまでも偉そうなバニルにイラツときた銀時は、尊敬する閣下を引き合いに出してバカにする。確かに、現在のバニルはムカつく性格をしている遊び人みたいな存在で、真面目に働いているデ○ン閣下とは雲泥の差である。しかし、こんな奴でも強大な力

を持った大悪魔であることは間違いない。そしてなにより、信頼しているウイズの友人でもあるため、茂茂は彼の申し出を受け入れて協力してもらおうことにした。

『悪魔の要求する報酬がどれほどのものか恐ろしくもあるが……よろしく頼むぞ、バニル殿』

『うむ、こちらこそと言わせてもらおう。ちなみに、今回は我輩にも利益があるゆえ、特別に無料で手伝ってやるぞ。この作戦で良いところを見せて愛弟子店主をときめかせたいと企んでいる青春男よ!』

『なっ、なにを申すかバニル殿! 余はそのようなことなど……』

『シツ、シゲシゲさん!? わわわ、私をときめかすって、あのっ、そのっ……本当ですか?』

『フハハハハハハ! 両思いで良かったではないか、リッチーになって諦めかけていたけど心の奥では素敵な恋愛を夢見る行き遅れ店主よ!』

『ちよっ! 私に決して行き遅れなんかじゃありませんよ!? 20歳はまだまだ若者の範疇ですし、あくまで私は自分の意志で結婚してないだけですからねっ!!』

バニルにイジられて茂茂とウイズがうろたえる。しかし、端から見れば『リア充爆裂しろ』と言いたくなるようなむずがゆい展開なので、銀時達は生暖かい笑みを浮かべる。

「まあなんだ、他人ののろけ話をここまで詳細に聞かされるのもアレだし、正直言っつてぶ

ん殴りてえ心境だけど、結構上手くいってるみたいで良かったじゃねえか將軍！」

「そうですね。私も正直言つて今すぐ爆裂魔法をぶつ放したい心境ですが、二人の交際を心から祝福しますよ？」

「とてもそんな風には聞こえませんか!?」

内心の苛立ちを隠そうともしない銀時とめぐみんから口撃を受けてウイズが半泣きになり、それを見かねた長谷川とダクネスが助けに入る。

「よせよ二人とも！ 確かに、美人で巨乳の姉ちゃんと良い仲になってる上様には嫉妬しちまうけど、ここは仲間として応援してやるとこだろ？」

「ハセガワの言う通りだぞ！ 恐らくみんなは人間とリッチーの交際が上手くいくか懸念しているのだろうが、たとえ異種間交配になろうとも、二人が愛し合っているのなら問題ない！ はあつ、はあつ……」

「いや、お前の発言に問題有りだよ！ 異種間とか交配とか生々しいこと言うんじゃねーよ!」

変態のダクネスは、異種族でえっちなことをする点に興味を抱いてしまい、その状況を想像した茂茂は鼻血を垂らして、ウイズは床を駆け回る。

そんな心暖まる光景(?)をプルプルと震えながら見ていたアクアがついに爆発する。

「ちよーつと待つて！ 将ちゃんが幸せそうだから仕方なく我慢してたけど、もう限界

だわっ！　もしこのまま将ちゃんが腐れリッチーの虜になったら、どうなると思ってるの!？　私があげたお金が全部、コイツに貢がれちゃうかもしれないじゃないっ！」

「って、気にしてるのは金のことかよ!？」

「そりや当然でしょ？　あのお金はリッチーじゃなくて人間のために使うべき物だもの！　というわけで、人間に崇拜されてる女神の私に献金しなさい！　リッチーなんかに騙し取られる前に、アクシズ教の御神体たるこの私に献金しなさい！」

「どつちかっていうと、お前の方が騙し取ろうとしてるんだけど!？」

まるで悪質な宗教団体のように金を要求するアクアにツツコミを入れる。はつきり言つて、こんな駄女神よりもウイズやバニルの方が信用出来る。

そんな訳で、バニルの協力を得た茂茂達は「宝物庫のお宝全部ゲットだけ作戦」を決行することにした。

数日かけて準備を整え、いよいよ作戦を執行する日を迎えた3人(?)は、闇夜の中を駆け抜けてアルダープの屋敷へと向かう。

そこには当然のようにバニルがおり、その展開に驚いたアクアは茂茂に抗議する。

「えっ、ちよっ、嘘でしょ!？　あんな得体の知れない木っ端悪魔を仲間にしちゃうなんて、ちよー信じらんないんですけど!？　悪魔はあくまで悪であつて、ベジータみたい

改心したりしないのよ!」

「無論、危険は承知しておりましたが、余はウイズ殿を信じておりますゆえ、彼女の友である彼のことも信じると決めたのです」

「シ、シゲシゲさん……そこまで私のことを……」

「あーもう、そういうのいいから! さっさと先に進んでくれない?」

隙あらばイチャイチャしだすバカツプルに銀時がイラついてきたので、すぐさま話を再開する。

とにかく、バニルを連れてアルダープの屋敷にやってきた茂茂達は、早速潜入行動を始める。その方法は、悪魔固有の変身能力でアルダープになりましたバニルが、衛兵に変装した茂茂とメイドに変装したウイズを伴って堂々と正門から入るといふ大胆不敵なものだった。

準備を整えた一行は、散歩から帰って来たフリをしながら屋敷の正門へと近づいていく。

『あうう、正面から入るなんて本当に大丈夫でしょうか?』

『ふん。すべてを見通せる我輩がついているというのに、いらぬ心配をするでないわ。生まれたての小鹿のようにプルプル震えるビビり店主よ』

『あつ、なるほど! 私達の未来を見通して安全確認したのですね!』

『フハハハハハ、その通りであるぞメイド店主！ 何ならついでに、汝らの関係がこの先どうなるかまで見通してやろうか？ もし汝がもの見事にフラれていたら、おもいきり笑ってやるが……』

『いいえ結構です、もし見たら爆裂魔法で吹き飛ばします』

『おっと、激おこ店主の悪感情、パンチが効いて美味であるー！』

そんな風に和やかな会話を交わしつつ正門前までやつてくると、警備についていた2人の衛兵に鋭い声で呼び止められる。

『おいっ貴様ら!! そこで止まれっ!!』

『ここを通した覚えはないが、一体どこから外に出たっ!?!』

武器を構えた衛兵は怒鳴りながら近づいて来る。茂茂とウイズの格好は身内の者だが、あまりに怪しい状況なので警戒されたのだ。

そこで、アルダープに化けたバニルが堂々と一喝した。

『このバカどもがあーっ!! 貴様らは主の顔も覚えとらんのかっ!?!』

『えっ!?! あっ、アルダープ様っ!?!』

『ももも、申し訳ございませんっ!!』

悪魔による迫真の演技に騙された衛兵達が慌てて謝罪してくる。よくよく考えると不自然な状況なのだが、宮仕えという弱点を突かれて心が萎縮してしまったのだ。

『あ、あの……なぜアルダープ様は正門を通らずに外へ出ておられるのでしょうか？』

それに今は、重傷を負われて身動きできない状態かどうかがおりましたが……』

『何だ貴様ら、使用人の分際で主の行動に文句をつけるつもりなのか!? しかも、ワシがヒマつぶしについた嘘を未だに信じておったとは、つくづく使えん奴等だな!』

『は、はあ……』

『申し訳ありません……』

偽アルダープに悪態をつかれた衛兵達は一気にやる気を失ってしまい、この厄介者から一刻も早く逃れたいと思った。その結果、悪魔の嘘をいとも簡単に受け入れてしまった。無論、それはバニルの変化能力が完璧だったからだが、あんな暴言が通用したのは日頃から嫌われるようなことをしているアルダープ自身の落ち度であった。

『フンッ！ 気分転換に夜の散歩を楽しんでいたというのに、貴様らのせいで台無しだ！ もうワシは寝るから、さっさと道を開ける!』

『ははっ!!』

すつかりバニルに操られた衛兵達は、自ら門を開いて賊を招き入れてしまった。その鮮やかな手際に銀時とダクネスも関心する。

『ほう。流石は悪魔、人を籠絡する方法をよく心得てやがるぜ』

「そ、そうだな……もし私だったら、いつまでも虜になっていたかもしれん。悪魔の言葉



攻めに身も心も魅了されてメス犬のように言いなりになる女騎士とか、興奮せずにはいられないシチュエーションだからな！」

「いつそのこと、まともな忠犬に調教されてしまいやがれ！」

やはりドMの感性は普通ではなかった。

しかし幸いなことに、SMプレイを楽しもうなどと思う衛兵は一人もいなかったの  
で、その場はすんなり通過できた。

『……何とか無事に入り込めたな』

『いや、さつきは少し危なかったぞ』

『えっ？ そんな感じはしませんでしたけど？』

『まったく、元凶の分際でのん気なことをぬかしおつて。お色気店主の胸を見た衛兵達から『あんな巨乳のメイドここにいたっけ？』などと疑われておつたというのに、もつと気を使つてもらわんと困るぞ』

『胸の大きさに気を使うことなんて出来ませんっ!!』

とんだ言いがかりを受けたウイズが顔を真っ赤にしながらつつこむ。アルダープの屋敷で採用しているメイド服は胸元を強調するデザインだったため、そこが目立ってしまったのは仕方ない。とはいえ、彼女の巨乳が立派なせいで余計に目を引いてしまったのも事実なので、アクアとめぐみんが茶化してくる。

「ブークスクス！ その無駄に育ったボインのせいでバレそうになるなんて、このポンコツリッチーはどこまで間抜けなのかしら！」

「あうう、無駄だなんてあんまりですよ!？」

「おっと、それはどうですかねえ！ 巨乳なんていやらしいものをぶら下げてるから男どもに注目されるし、胸元が憤ましい女性からも恨まれたりするのでですよ！」

「何かソレっぽく言ってつけど、結局ただの八つ当たりじゃね？」

前回のビキニで恨みを抱いたためぐみんは、絶好の機会とばかりに巨乳をディスプレイして行く。それでも問題があったのは最初だけで、その後は順調に進んでいき、数分後には目的地である宝物庫までやって来た。

入り口の前には2人の衛兵が見張っており、偽アルダープの出現で戸惑っている間に腹パンを食らわせて気絶させる。彼らには悪いが、こちらが仕事を終えるまでは静かにしていてもらわなければならない。

『さあて！ いやいよ我輩の見せ場であるな！』

元の仮面姿に戻ったバニルが、やたらと張り切った様子で前に出る。宝物庫を守る結界を破壊するには彼の力が必要なのだ。

『フハハハハハ！ それでは見せてしんぜよう！ このチンケな結界が我輩の指先一つでダウンする様を！ ああ、でもその前に、全力を出せるよう準備運動をしておかねば

ならんな！ あ、いっち、にい、さん、し……』

『もう、そういうのはいいですから、きつさとやつちやつてくださいつ！』

わざとらしくもつたいぶるバニルにイラツときたウィズは、準備運動している彼を容赦なく突き飛ばした。すると、バランスを崩したバニルの身体が結界にぶつかり、その後にはパキンという音が鳴った。大悪魔の彼は、人間が作った程度の結界なら触れただけで破壊できるのだ。

そんな訳で、最大の難関だった結界はあつけなく破壊されたのだが、活躍するチャンスを失ったバニルだけはご機嫌斜めだった。

『な、なんたることだ……意外に短気なせつかち店主のせいで、我輩の見せ場である【指先一つでダウン】が出来なかったではないか………クソオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

『そんなにやりたかったのおおおおおお!!』

『というのは冗談である！ この話を聞いて無駄なツツコミを入れた者よ、いらぬ氣遣いをしてくれてどうもありがとう！ フハハハハハハ！』

「このど腐れ悪魔があああああ!! 回想の分際でこの俺様を侮辱するたあ絶対に許さねえーっ!!」

「いや、お前も回想の中の奴とケンカしてんじゃねーよ!?!」

お互い面識すらない状態でケンカする器用なドSどもに呆れてしまうものの、とりあ

えずバニルのおかげで道は開けた。後は茂茂が【罨発見】と【罨解除】スキルを使って宝物庫の警備システムを無力化すればいい。

『……よし。すべての罨を解除したぞ』

『やりましたね、シゲシゲさん！ これで悪者をギャフンと言わせることが出来ますよ！』

『ああ、そうだな……』

無邪気に喜ぶウイズに対して曖昧な返事をする。ここまでやっておいて何だが、この作戦が成功してもアルダープが悪事を止める確証はないからだ。正体不明のチート能力に対抗する手段が他にないためやむを得ず実行したが、果たしてこれで抑止力になるかどうか……。

『ウイズ殿の言う通り上手くいけばいいのだがな……』

『無論、いくに決まっておるだろう。いざという時は己の命を捨てても初恋相手を守る気にいる、愚直なまでに勇敢な男よ』

茂茂の思考を見たバニルがニヤリと笑いながらつつこんでくる。

『そのような悲壮感あふれる覚悟などせんでも、この作戦は成功するぞ。なにせ、すべてを見通せるこの我輩が協力しておるのだから！ やたらと金を要求するクセに役立たずなエリス教やアクシズ教の駄女神どもとは違って、我輩は必ず顧客の要望に応えて

みせるゆえ、大船に乗った気でいるがいい!」

色々と思惑があるバニルは、やたらと協力的に動いてくれる。相手が悪魔だけに不気味ではあったが、ウイズの友人でもあるので茂茂は信用する。しかし、悪魔を嫌っているアクアはそうもいかず、女神をバカにするような彼の発言に怒り出す。

「あああああああつ!? この木っ端悪魔、私のことをアクシズ教の駄女神って言ったー!? エリスはともかく、この私まで駄女神って言ったわー!? ねえちよっと、ふざけないで! 悪魔ごときに駄女神扱いされるなんて、こんな屈辱許せないわ! 謝罪して! 私をバカにしたことを、誠心誠意謝罪して!」

「ああん? この駄女神はナニ怒ってやがんだよ? コイツの言ってることは全部正しいじゃねーか、なあ長谷川さん」

「まあな……神様なんて、公園でギリギリの生活をしてた俺になんもしてくれなかったもんな……」

「えっ!? えーつとお……そっち方面の話は天使達の仕事だし? 死者担当の私に言われてもよく分からないんですけど?」

「コイツっ! 責任を取りたくない役人みてえなこと言い出しやがった!」

バニルの言う通り、アクシズ教の駄女神は頼りにならなかつた。

そんな彼女とは反対に、頼りになる悪魔のおかげで宝物庫の守りをすべて突破するこ

とができた。後は、ここにあるお宝をウイズのテレポートで移動させるだけだ。

上級魔法に属するテレポートは大量の魔力を消費するスキルだが、リッチーのウイズなら魔力を回復しなくても複数回使えるので、宝物庫にある財宝すべてを転移させてもへっちゃらである。

『それではいきます……テレポートッ!』

魔法を使ったウイズは、事前に登録しておいた隠し場所へ向けて財宝を転移させた。まさに泥棒にうつつけの超便利スキルである。

ただし、この魔法をそのような目的で使う者はほとんどいない。上級者しか習得出来ないので使用出来る人材自体が少なく、それに伴って需要も多いので、この魔法を使える者はお金に困らないからだ。そのため、リスクの高い犯罪行為をわざわざやろうとしないのである。

そんな背景もあって、テレポート専用の防犯システムはほとんど発展しておらず、今回の作戦ではその弱点を突くことが出来た。

もちろん、この成功はウイズがいてこそ実現したものであり、これまで散々彼女をバカにしていたアクアも、手の平を返すように誉めだした。

「よくやったわウイズ! 宝物庫のお宝をここまで完璧に盗んじやうなんて、あなたにはドロボーの才能があるわ!」

「うっ！　あまり誉められてる気がしないのですが……」

「もう、ウイズったら！　高貴な私から直々に誉められたからって、そんなに謙遜しちゃって〜！　あなたは悪徳貴族を懲らしめるといふ善行を成し遂げたのだから、その無駄にでかい胸をドーンと張ってればいいのよ！」

「ああ、そうだな。時には法よりも義を重んじなければならぬこともある。そもそも、アルダープ自身が法をねじ曲げている張本人なのだから、ウイズが気に病むことなどない」

珍しくまともなことを言うアクアにダクネスも同意する。しかし、駄女神である彼女は良い話だけで終われない。

「……ところで、その財宝はどこにあるのかしら？　世間に出せない汚れたお金をそのままにしておけないから、アクシズ教の御神体である私が使って浄財にしてあげるわ！」

「あつてめっ!?　何か変だと思ったら、お宝を一人でがめる気だったのかあ!?!」

「人聞きの悪いことを言わないでほしいんですけど！　私は女神として、人間達の罪にまみれたお金を浄化してあげようとしてるだけよ！」

「とか言つて金が欲しいだけだろ teme エーツ!!　【徳川の埋蔵金】は絶対に渡さねえーぞ!?!　お前より先に見つけて、俺が大富豪になるんだーっ!!」

「お前も使う気まんまんじゃねーか!？」

「ほほう、トクガワの埋蔵金ですか……なにやら人生をかけて追い求めたくなるようなロマンを感じる言葉ですね！」

「めぐみんまで、昔流行ったテレビ企画みてえな茶番に乗っかって来るんじゃねーよ!」大金が目眩んだバカどもはそろって財宝を狙っていたが、まともにつき合うのもバカらしいので無視して話を進める。

作戦の後半は脱出シーンから始まった。

茂茂とウイズはこのまま使用人のフリをしながら外に出て、バニルが屋敷内で騒ぎを起こしてから安全な場所まで離れるように事前の話し合いで決めていた。

一気にレポートで脱出しないのは、最後の作業を行うためにこの屋敷から離れられないからであり、バニルが危険な陽動役を買って出たのは、それをアシストするためだった。

『本当にいいのか、バニル殿』

『なに、魔王より強いかもしれないと評判のバニルさんに対して心配など無用である。そんなことより、汝は赤字店主の商売センスを心配する方が先決だろう!』

『そんな忠告入りませんっ!』



ウイズをからかったバニルは不敵な笑みを浮かべる。どんな時でも人に嫌がらせすることを忘れないお茶目な悪魔である。そんなマイペースすぎるバニルに呆れていると、彼の身体が気絶している衛兵の姿が変わった。

『それではまた後ほど会おう、お互いに意識しあっていることを自覚しながら恋愛経験がお子様レベルでなかなか先に進展出来ない、むっつりスケベの童貞と彼氏いない歴〇〇年の年増店主よ!』

『あああああつ?! 今、年増って言いましたね?! 20歳の私を年増呼ばわりしましたね?! そんなデタラメを言う悪い人はさっさと表に出てください! 全力全開のオハナシで、あなたのウソを訂正します!』

『いや、悪い人って悪魔の我輩に言われても。それに、我輩にはまだ用事があるから、表に出る訳にはいかぬわ』

『えっ、用事って何ですか?』

『なに、ちよつとばかり懐かしき【友】に顔出ししてくるだけだ』

バニルはそれだけ言うとお宝物庫から出ていった。その背中を見送りながら、不思議そうな顔をしたウイズがつぶやく。

『まさか、バニルさんに私以外の友達がいたなんて……世の中には奇特な人がいるものですね』

「ソレ自分で自分をバカにしてるよね？」

ウイズの思考がおかしくなるほど予想外の話を聞いてしまった。用事の内容自体は普通に思えるが、彼の友達がこの屋敷にいるなんて偶然にしては出来すぎている。大体、何でこんな状況で会いに行くのだろうか。たぶん、バニルに聞いたら『その方が面白いから』と答えるだろうけど……。

『もしかして、そつちが本当の目的だったのかしら？』

冷静になったウイズがまともな推察をするが、バニルの移動と同時に脱出作戦は始まっているので気にしている時間は無い。今から10分後にバニルが騒ぎを起こす予定となっているため、それまでに屋敷の外へ出られる状態にしておかなければならない。

『さあ行こう、ウイズ殿』

『あつはいつ！』

茂茂に促されてウイズも歩き始める。途中で何度か衛兵とすれ違ったものの、暗闇と衣装のおかげで誰何すらされない。そうして7分ぐらいが過ぎた頃、2人は誰もいない部屋に忍び込んで、その窓から外へ出た。

『バニル殿が動いたら、一気に扉を乗り越えよう』

『はい！』

背の低い植木に身を隠しながらその時を待つ。すると、未来を知っていたかのようなタイムリングで騒ぎが起こった。

『盗賊だあーっ!! ルパルゴー3世が出たぞおー!!』

衛兵に化けたバニルが大声で賊の侵入を知らせる。そんなことをすれば当然大騒ぎになり、屋敷中の衛兵が賊を求めて動き出す。

『おいっ! 賊はどこだ?!』

『宝物庫の宝を盗んで屋敷内に潜伏してるぞ!!』

さらっとウソについて衛兵達を引きつける。すると、庭にいた者達まで屋敷の方に気を取られて、一時的に外の警備が緩んでしまう。その隙を突いた茂茂達は素早く塀を乗り越えて、誰に気づかれることもなく屋敷から遠ざかって行く。

こうして屋敷の脱出に成功した二人は、薄暗い森の中を全速力で駆け抜けて、十数分後に屋敷を臨むことが出来る丘の上までやって来た。テレポートでアクセルに戻る前に、ここでもう一仕事やるべきことがあるのだ。

『さあウイズ殿。最後の仕上げに盛大な一発をお願いいたす』

『はい、お任せください! 私の魔力をすべて使って超特大の花火を打ち上げてみせませう!』

慕っている師匠に重大な作業を任されたウイズは、この日のために用意していたマナ



「あ、あのく、なんか地の文が大量破壊兵器的なものを使ったように物騒極まりないんだけど。花火なんて平和的なものとはほど遠い絵面なんだけど。いくらなんでも、これは流石に話を盛りすぎなんじゃねーの？」

「いや、実際に見た余も我が目を疑ったが、あれはそれほどまでにすさまじいものであった」

実を言うと、この結果は茂茂にとつても予想外だった。彼に良いところを見せたいと思つたウイズが張り切りまくつて限界突破しちゃつたのである。距離は余裕をもつて設定していたので死傷者は出ていないが、屋敷の前方に隕石が落下したような超巨大クレーターが出来てしまった。

その話を聞いて、長谷川とダクネスが興奮する。

「す、すげえーっ！ 爆裂魔法つて、使い手次第でマップ兵器になっちゃうの!? やっぱ爆裂魔法使いは魔法の方もビッグだぜ！」

「ああ！ まさか地形を変えてしまうほどの威力があるとはな！ もしそんなものが直撃したら、この鎧だけでなく衣服や下着まで吹き飛んでしまうだろう！ そして私は、全裸にされた柔肌を目を血走らせた男どもにすみずみまで堪能されてしまうのだっ！」

「あんなもん食らったら、全裸の中身が見えちまうよっ！」

マップ兵器を生身で食らったら、DMを満喫する前に【ひでぶ】状態となってしまう。

ウイズの爆裂魔法にはそれだけの威力があり、自身の敗北を悟ったためぐみんなが悔しそうな表情を浮かべる。

「ぐぬぬ……。まさか爆裂魔法において私以上の使い手がいようとは！ 流石はリツチーと言った所でしょうか……。だがしかし、そんなものは現時点での比較に過ぎない！ せいぜい、あと数年だけ偽りの王者を演じるがいい！ その間に我は進化し、爆裂魔法も胸のサイズもあなたを圧倒してみせる！」

「は、はあ……。がんばってくださいね」

勝手にライバル視されたウイズは困った様子で受け答える。どうやら未だにビキニの恨みを引きずっているようだが、あまりに無謀なめぐみんなに生暖かい視線が送られる。爆裂魔法はともかくとして、オツパイ勝負は絶望的だろ（笑）。

「って思ってますね、あなた達っ!？」

「いや、そう思ってたんのはお前だろ！」

被害妄想を抱いたためぐみんなは墓穴を掘ってしまった。

こんな感じで頭のおかしい中二病にまで影響を与えている爆裂魔法だが、本来はアルダープに影響を与えるために用意したものだ。これは宣戦布告の合図であり、アルダープが降伏するまで絶対に退かないという覚悟を示したものである。それに加えて、彼の心を折るための脅しの効果も期待して実行するに至った。

無論それは理想であつて、実際には望んだ通りの結果が出せない可能性もある。未来を見通すことが出来るというバニルが成功すると言つていたが、結果を確かめるまでは油断出来ないだろう。

それでも、作戦をやり終えたばかりの今だけは安堵してもいいはずだ。

『大儀であつたな、ウイズ殿。実に見事な花火であつたぞ』

『はいっ、ありがとうございますっ！』

誉められたウイズは嬉しそうな表情を浮かべながら茂茂の方へ振り返る。作戦結果がどうであれ、今はこの笑顔を見られただけで十分だ。

しかし、その笑顔は長続きせず、魔力を消耗しすぎたウイズはペタンと座り込んでしまった。

『大丈夫か、ウイズ殿!』

『は、はい……ちよつとがんばりすぎちゃいました……』

マナタイトに加えて自身の魔力も使い切つたため、流石のリッチーもへばつてしまつた。

『さすれば、余の魔力を吸い取るがよい』

そう言うと、ウイズの前でヒザ立ちになつた茂茂が右手を差し出してきた。アンデッド特有のスキルには「ドレインタッチ」というものがあり、相手の体力や魔力を吸収し

て自身のものにする事が出来る。つまり茂茂は、そのスキルで自分の魔力を分け与えようとしているのである。

『あうう、ありがとうございますう』

へ口へ口になったウイズは感謝しながら茂茂の手を握った。初めて触れた彼の手はなんだかとても暖かかくて、彼女の心を幸せな気持ちで満たしてくれた。自分ですら気づいていなかった本心をバニルにバラされまくったウイズは、茂茂に抱いていた好意を自覚しつつあったのだ。そんな状態でこんな素敵なシチュエーションが発生してしまつたら、彼女が雰囲気酔ってしまつても仕方なかつた。

『あ、あの……ドレインタッチは、魔力の源である心臓に近い場所から行うと効率が良いのですが……でつ、出来ればそのつ……シゲシゲさんの胸元に直接触れさせていただけませんか?』

もう少し近づきたいと思つたウイズは思わず大胆なお願いをしてしまい、アクアを始めとする女性陣が一斉に色めき立つ。

「きゃーいやらしいっ!? 夜中に外で自分から男に言い寄るなんて! このリッチーつたら、サキュバス以上にエロエロだわ!」

「ちよつ、待つて!! 今のはそういうのじゃないですから!! 少しでも特別なことをしたいなーって思つただけですからっ!」



「いえいえ。これはどう考えても、あなたが発情しているようにしか聞こえませんか？  
女に飢えた男達なら、まず間違いないくそう受け取るはずです」

「た、確かに！ 男性の胸板に直接触れたいだなんて、いかがわしい行為に誘っているよ  
うなものではないか！ そこまで破廉恥なことは、この私でも出来やしないぞ！」

「いや、お前の性癖の方が破廉恥だからな？」

確かに、ウイズの純情な感情は清いものであり、歪んだ欲望にまみれたDMと同列扱  
いされては困る。

当然、頼まれた茂茂もそれは分かっているので、快く承諾する。

『そのくらいなら遠慮は無用だ』

そう言うと、忍服の胸元を開いて肌を露出させる。冒険者になって以来鍛え続けてい  
る肉体は男の美しさを感じさせ、照れたウイズは鼓動を早める。

『そつ、それでは触らせていただきましゅ！』

緊張のあまり嘸んでしまいがちながらも、茂茂の胸に右手を当てる。すると、ドクンドク  
ンと少し早めの心音が伝わってきて、彼も緊張しているのだと分かる。

『シゲシゲさん、お顔が赤くなってますよ？』

『う、うむ……恥ずかしながら、この年になるまで婦女子と親密に接した経験がなくてな

……』

『ふふつ。私も、男性とこんなことをするのは初めてです』

『ははつ。それは光栄なことであるな』

期せずして発生したイベントでさらに心の距離を近づけた二人は、熱い視線で見つめ合う。

そんなこつ恥ずかしい回想シーンを嬉しそうに語るウイズに銀時のイラつきが爆発しそうになるものの、他人の恋バナに興味を示した女性陣が話の続きを促す。

「それでそれで!! 二人はこの後どうなっちゃうの!?!」

「ま、まさか!?! 一気にアレまでやってしまったのか!?!」

「えっと、アレというのが何なのか分かりませんが、この後はドレインタッチしただけですよ?」

「はあ、ヘタレリッチーにはほんとがっかりだね。あれだけ期待させといてお色気シーンの一つもないとか、ジャンプのラブコメだったらクレームの嵐になるところよ?」

「まったくもってその通りですよ。アクアの言ってることはよく分かりませんが、ヘタレという意見には同意します。そこまでやったら、いつそのことアレまでやってしまえばいいのに」

「いや、だから、アレって一体何なんですかー!?!」

アダルトな展開を期待していたアクア達から責め立てられてウイズが涙目になる。

残念ながら、彼女達が聞きたかったエッチい話にはならなかった。しかし、ドレインタッチが終わった後に新たなハプニングが待っていた。

茂茂から魔力を貰ったウイズは、そのお礼として汗ばんだ彼の身体をハンカチで拭いてあげた。それは何気ない親切心から始まったのだが、ここからあのような惨劇につながるとは誰にも予想出来なかった。

『今夜は暖かいから、だいぶ汗をかきましたね』

『うむ……余の体臭は大丈夫か？ 以前、友から臭いがきついと言われたことがあるのだが……』

『いいえ、大丈夫です！ 何となくモンスターっぽいワイルドな香りがしますけど、私は全然気になりませんよ！』

『好意的なフリして普通にデイスってんじゃねーか！』

気にならないというウイズの言葉は本音だったが、同時に体臭がきついことも認めてしまった。それにシヨックを受けた茂茂は涙目になり、慌てたウイズがごまかすように話を変える。

『あつ、そうだ！ こんなに汗をかいたんだから、喉が渴いてるんじゃないですか？』

私、お水を持ってきたので、今すぐ出しますね！』

まくしたてるように言いながら持ってきたバッグの中をまさぐる。その中には、いざ

という時のために店から持ってきた魔道具が入っており、そこには聖水用のビンに入れた水が混ざっていた。

『こんなこともあろうかと用意しておいて良かったです』

出来る女をアピールしようとしていたウイズは、茂茂の要望に応えられるように水だけでなくお弁当まで用意していた。『ピクニック気分かよ』とつつこみたくなるほどの浮かれっぷりだが、とりあえず水を持ってきた意味は出来た。これでさらに茂茂の役に立てると喜んだウイズは、手探りで取り出したピンを嬉しそうに手渡した。

『はいシゲシゲさん。これを飲んで一息ついてください』

『うむ。それでは遠慮なくいただくでしょう』

ウイズの言葉に落ち込んでいた茂茂であったが、彼女の気遣いを快く受ける。しかし、その優しさが悲劇（笑）を招くことになる。

なんと、ピンのフタを開けた途端にそれが爆発したのである。

ドカアアアアアン!!

『うきやああああああああ!!』

「つて、なんでだああああ!!」

予想外にもほどがある爆破コントに銀時がつっこむ。実を言うと、ウイズが渡したピンは水の入ったものではなくて「フタを開けると爆発するポーション」だった。暗闇の

中だったことと浮かれていたことが原因で取り間違えていたことに気づかなかつたのだ。そもそも、何でそんなガラクタを持つてきたんだよと言いたい所だが、それはウイズだからと言うより他はない。

『だ……大丈夫かウイズ殿』

『は、はい……なんとというか、その……ごめんなさい』

プスプスと煙を立てた二人は地面に倒れたまま無事を確認しあう。お互いに防御力が高いおかげで大きな怪我を負わずに済んだが、もろに巻き込まれた茂茂はブリーフ一丁になり、目の前にいたウイズも腕でかばっていた胸元以外の服が吹き飛ばされてパンツが丸見えになってしまった。

それはもう見事なまでの爆破オチであり、いつのまにかやって来ていたバニルが腹を抱えながら大笑いする。

『フワーツハツハツハツ！ フワーツハツハツハツハツ！』

『いやあーっ!? そんなに笑わないでくださいいーっ!?』

恥ずかしくなつたウイズは涙目になって懇願するが、この状況で笑うなどという方が無理な話である。芸にうるさい駄女神でさえ堪えきれずに笑い出しているのだから、もう開き直るしかない。

「ぶふうーっ!? ウイズつたら面白すぎるわっ！ お色気シーンがダイナミックすぎ

て、もはやギャグになってんですけどっ！ ブリーフオチの将ちゃんと同列扱いなんですけどっ！」

大失敗をしでかしたウイズをおもいつきり笑い飛ばす。女神のクセに悪魔と気が合うようで、回想の中のバニルも彼女と同じようにウイズをいじり出す。

『これはこれは！ 爆発音が聞こえたので何事かと来てみれば、随分と過激な逢い引きをしているではないか！ あられもない姿で地面を転がり回っているパンモ口店主よ！』

『きゃーっ!? そんなとこ見ないでくださあーい!?』

言われてようやく自分の状態に気づいたウイズは、慌ててピンク色のパンツを隠す。

『ちなみに、我々悪魔には性別が無いので嫉妬するだけ無駄であるぞ、半裸店主の熟れた身体に目が離せない鼻血男よ！』

『うわあーんっ!? シゲシゲさんも見ないでくださあーい!!』

『いや、案ずるな。鼻血を出しすぎたせいかわ視界が霞んできた』

『ソレ出血多量で死にかけてんじゃね!?!』

あやうく茂茂が昇天しかけたものの、バニルの上着でパンツを隠したウイズの看病によつて事なきを得た。

『フハハハハハ！ せっかく作戦が成功したというのに破廉恥店主のお色気攻撃で死に

かけるとは、とんだ災難だったなあ!』

『あわわわ!? ごめんなさいシゲシゲさん!』

『な、なに……そなたが謝る必要などはないさ』

「そりや、ムツツリスケベが自滅しただけなんだから、謝る必要ねーだろうよ!」

銀時のつつこみ通り、鼻血に関しては不可抗力と言える。しかし、ドジっ娘ウイズに巻き込まれて不幸な目に遭っているとは言えるかもしれない。

『そこでこの親切な我輩が、ついてない汝らに幸運をもたらす素敵な呪いをかけてやろう!』

『それ自身が幸運じゃない気がするんですけど!』

ウイズがすかさずつつこむが、バニルは本気で詠唱を始める。逃げようにも茂茂はダウン中で、ウイズは彼に膝枕をしているため動けない。

『えっ、ちよっ、待つて!』 ほんとに止めて!』

『汝らに我が呪いを! カースド・ダークネス!』

ウイズの抵抗も空しく、二人は謎の呪いをかけられてしまった。

『ななな、なんてことするんですかー?!』 というか、この呪いは何なんですか!』

『フハハハハハ! 先ほども言った通り、汝らに幸運をもたらす素敵な贈り物である。別に尻の穴からアロエが生えてくるような楽しい呪いではないから安心するがいい!』

『どう聞いても不安要素しかないんですけど!』

よく分からないバニルの行動につっこみを入れる。

それは銀時達も同じで、特にアクアが食いついてくる。

「わあ、ばつちい!? 確かに将ちゃんからモンスターっぽいワイルドな臭いがするわ!

これは間違いなく木っ端悪魔がかけた呪いのせいね!」

「そりゃ將軍の体臭だろ!」

さりげなく茂茂をデイスる駄女神であったが、何らかの呪いがかかっていることは間違いないらしい。

しかし、その効果に関しては茂茂達も知らなかった。気になったウイズが答えを聞き出そうとしたが、何故かバニルは少しも説明することなく帰ってしまったのである。

『さて、困惑店主の悪感情も堪能したことだし、そろそろ我輩はお暇させていただくしよう』

『えっ、こんな無責任な状況で帰るのですか?』

『うむ、そうだ。ようやく意識し始めたバカツプルの邪魔をするほど我輩は野暮な悪魔ではないからな。このまま大人しく身を引いて、遠く魔王城から汝らの幸せを見守ることにしたのだ』

『バ、バニルさん!? 空気を読めないことに定評のあるあなたがそんなまともなことを



言い出すなんて、一体どうしたんですか!？」

『せっかく気を利かせてやったというのに友の優しさを理解せぬとは、疑り深い偏屈店主め。汝がどう思おうとも、今の言葉はすべて本音だ。汝らが結ばれた方が我が野望の実現にとって好都合であるからな。ゆえに、この先の出来事について一つ忠告しておく』

いきなり真剣な表情になったバニルは、茂茂に向かつて予言めいたことを言い出した。

『汝、この地より世界の発展に貢献せし男よ。汝、勇敢なるサムライ達と共に魔王を討伐せんとする男よ。見通す悪魔が宣言しよう。これ以上マクスに近づけば、汝の仲間が犯罪者となり死刑を宣告されるであろう。その悲劇を防ぐためには、二度とマクスに関わらぬことだ』

『!? しかしそれでは!』

『あの領主を裁けぬか? 確かに、マクスという証拠が無ければ手出しをすることは叶わんだろうな。だがそれも一時だけだ。いずれ時が来れば、あの男は自滅する。遠くない未来に、自ら破滅の道を選んで地獄に墜ちていくことだろう』

バニルは見通す力で知り得た未来の出来事を語る。その様子はかなり異様で、彼が本物の悪魔なのだと実感できた。

『それじゃあ、私達にはなにも出来ないんですか？』

『マクスに関してはそうであるな。我輩の見立てでは、向こうがボロを出すまでは放っておくが吉と出ている。それが汝らに出来る最良の対抗策だ』

『は、はあ……』

この時ウィズは『そこまで分かっているなら、今何とかしてくれればいいのに』と思つたが、そこまで求めるのは傲慢だと考え直した。自分だつて勝手な言い訳をして魔王軍との戦いを行っていないのだから、悪魔のバニルに向かつて人間のために戦えとは言えない。

大体、今回のことだけでも感謝しなければならぬのだから、ここは素直に忠告を受けておくべき所だろう。

『シゲシゲさん。バニルさんは性格が捻くれていますが、こういう時にウソはつきません』

『そうであるか……。ならば、その忠告をありがたく受け取らねばならぬ』

『辛辣店主の言い方に引つかかりを覚えるが、まあいいわ。汝らはマクスに関わることなく商売繁盛に勤しむがいい！』

二人の反応に納得したバニルはニヤリと笑うと、用事は済んだとばかりに全速力で走り出した。

『ではさらばだ！ 二人仲良くパンツ丸出しの変態カップルよ！』

『さっさと行かないと爆裂魔法撃ちますよっ!』

懲りないバニルは、去り際までウイズ達をからかいながら夜の闇に消えていった。

以上が砦建設にまつわる事件の顛末である。

話を聞き終えた銀時達は、それぞれの頭の中で情報を整理しつつ会話を再会する。

「なるほどね……最後の方はつつこみも忘れて聞きいっちゃったが、とにかく作戦は成功したんだな？」

「ああ。それから数日後に再びアルダープと会談して直に確かめた。奴の心にどのような変化があったのかは分からぬが、前に会った時とは態度が一変していたぞ」

その時茂茂は、作戦の効果を確かめるために思い切った行動に出ようとしていた。要求されていた不当な支払いを取り下げるように改めて申し出る気だったのである。

「バニル殿の太鼓判を貰っていたとはいえ、命を懸ける覚悟で臨んだのだが、それは良い意味で無駄となった」

なんと、こちらが申し出る前にアルダープの方から取り下げて来たのである。それどころか、今まで否定的だった茂茂の計画を賞賛してくる始末であった。

「無論、本心ではないだろう。あの手の輩は、一度痛い目に遭ったところで性根までは変

わらぬものだ。それでも、今の所はあの男の凶行を止める抑止力となつていようなので、ひとまず成功したと見ていいはずだ」

作戦実行以来、アルダープの行動はすっかり大人しくなつて、まるで人が変わったかのようにまともな仕事をするようになった。おそらくは、ルパルゴ13世の報復を恐れて心を入れ替えたとアピールしているのかもしれない。これまで犯した罪を公表してない所を見るに、本気で悔い改める気が無いことはバレバレなのだが。

「残念ながら、これは束の間の平穩にすぎぬ。近い将来、奴は再び悪事に手を染めるだろう」

「ならば、今すぐにでも乗り込んでマクスとやらを確保すべきではないか!」

瞬間的に怒りが湧いたダクネスは、敬語も忘れて茂茂に詰め寄る。アルダープに対する敵意を隠そうともしない彼女にとって、あの大罪人を野放しにしておくことが許せないのだ。

「何なら私を囮に使つてくれても構わないぞ! たとえアルダープに操られ、心身共に恥辱にまみれてしまふとしても、この私なら耐えられる! いや、それどころか楽しめる!」

「なんちゅー説得してんだお前は!! どう聞いてもドMの方が目的になつてんじゃねーか!!」

力み過ぎたせいで変態じみた説得になってしまった。そのせいという訳ではないが、ダクネスの意見は速攻で却下される。

「そなたの気持ちは分からんでもないが、そのような危険なことを銀時の仲間によらせるわけにはいかん。おそらくは、バニル殿の予言通りになってしまいうだらうからな」

そういうえば、あの悪魔はそのようなことを言っていた。予言という言葉に中二病の琴線を刺激されたためぐみんは、ドヤ顔になって考察する。

「つまり、こういうことですか？ ドMの欲望に負けてマクスとやらに近づいたダクネスは、いともあっさりとアルダープに操られてしまい、それを助けようとした私達があのハゲをフルボッコにして警察に捕まってしまう。そして最後は、裁判に負けて全員が死刑になると……」

「いやあああああ!? なんて私まで死刑されなきゃならないのっ!? そういうのは普通、銀時と長谷川だけの役目なのに！ ちよつとダクネス！ 変な厄介事に私を巻き込むのは止めて頂戴！」

「ええええええっ!?! 死刑になるという予言は、すべて私のせいだったのか!?!」

めぐみんの予想を真に受けたアクアがダクネスに突つかかる。さらに、銀時も面倒事は御免だとばかりにドM騎士を責め立てる。

「そうだメス豚！ 豚は豚らしく飼い主の言いつけ守ってブヒブヒ鳴いてりゃいいんだ

よ!!」

「くはあんつ!!」 な、何だこの心地良さは……! 酷い仕打ちを受けているのに抗うことがまるで出来ない! く、悔しいが、こうなつては認めざるを得ないらしいな。私はもう、ドSな主に従う哀れなメス豚になり果ててしまったということをつ!!」

「アルダープとやりあう前に操られちまつてるじゃねーか!」

仲間達から心に響く説得を受けたダクネスは、何とか殴り込みを思いとどまる。彼女にはアルダープの罪を暴かねばならない事情があるのだが、仲間を危険に晒してまで成し遂げるつもりはない。そもそも、ここまでの情報を得られたのは命懸けで戦った茂茂のおかげだ。その彼が手出し無用と言うのなら騎士として従うしかない。

「ダクネスよ。そなたの想いが叶う日は、いつか必ずやって来る。その時まで、余の言葉を信じて待つていてほしい」

「……はい、分かりました。騎士の誇りにかけて、あなたの言葉を裏切らないことを誓います」

自分のことを信じて重大な秘密を語ってくれた茂茂に最大限の誠意をもって応える。ダクネスは特殊な性癖を持つている困った少女だが、人として大事な部分は見えた目通りに美しかった。本当にドMでさえなければと悔やまれてならない。

とはいえ、これでようやく話がまとまった。ようはバニルの言う通りに放っておけば

いいのだ。悪魔を嫌うアクアとしては気に入らない話なのだが、死刑にされるよりはマシだと割り切ることにした。

「それはそうと、木っ端悪魔にかけられた呪いはこの私が解いてあげるわ！ もちろんお礼はいただくけれど、お金持ちの将ちゃんならどうってことないわよね？」

「あつテメツ!? 徳川の埋蔵金だけでなく將軍の財産まで狙つてやがんのかあ!？」

「ふうんだ！ これは仕事に対する正当な報酬なんだから別にいいでしょ！ ねえ、将ちゃん?！」

「申し訳ありませんアクア様。この呪いは、バニル殿が我々に示してくれた友情の証だと思つているので解くつもりはありません」

「なつ、なんてことなの!? あの木っ端悪魔を友達と思ひ込んで、将ちゃんはすでに呪いの影響を受けているわ！ これは危険な状態よ！ 取り返しのつかないことになる前に私の祝福を受けなさい！ 今ならアクシズ教入会特典でサービスしてあげるから!！」

どうしてもお金欲しい駄女神は、怪しい靈感商法のようなことを始めた。

一方、爆裂狂信者のめぐみんは、ウイズに対して爆裂魔法の勝負を挑んでいた。

「さあウイズ！ 今すぐ表に出て爆裂比べと洒落込みましょう！ あなたの實力がいかほどのものか、我が目でしかと見届けます!！」

「ならば、私を標的として使ってくれ！ 以前から爆裂魔法の威力を直に味わってみたいと思っていたから丁度いい！」

「ちつとも丁度よくねーよ!? あんなもん食らったらメガンテみてえに砕け散るよ!」

「あ、あのー、私はまだ仕事なのでお店から離れられないんですけど……」

頭のおかしい連中に絡まれたウイズは、目に涙を浮かべながら健気に抵抗していた。

茂茂は、そんな日常の風景を見て幸せそうな表情を浮かべる。気心の知れた友とバカ騒ぎしているこの光景こそが彼の望んでいた世界だから。生きて再び楽しむことを気まぐれな神に感謝した。



ここから先は茂茂やウイズも知らない話であり、時は「宝物庫のお宝全部ゲットだけ作戦」当日まで遡る。

その夜アルダープは、重傷を負った股間の痛みを震えながら寝室のベッドに横たわっていた。

『クソツッ！ クソツッ！ クソオーツッ！ 許さんぞルパルゴオー!!』



哀れな領主は何度目かも分からない怒声を上げる。大事なタマを取られて以来、彼の怒りは収まることになかったのである。

ただしそれは、恐怖心の裏返しでもあったが。

『今に見ておれルパルゴめえええええつ!! 必ず貴様を殺してやるううううつ!!』

まるで凶暴な獣のように吠えまくるアルダープだが、それは追い込まれた手負いの獣が恐怖におびえて威嚇しているような状態だった。

その理由は、ルパルゴ13世の異様な行動が理解できないからだ。マクスの能力を知っているながらアルダープを殺さないなど自殺行為に等しいのだが、実際にはそうなっている。このままでは呪い殺されてしまうというのに、マクスの力が怖くないのだろうか。死をも恐れぬ相手に対して得体の知れない恐怖心が膨らんでいく。

『一体何を考えているのだっ!! ワシをバカにして楽しんでおるのかあああああつ!!』

完全に冷静さを欠いてしまっているアルダープには、相手がマクスの能力を「把握していない」という可能性まで想像できなかつた。

そのように答えの出せない問題に苦悶していると、外からドアをノックする音が鳴った。

『アルダープ様! お休みのところ申し訳ありませんが、至急の報告があります!』

ドアの向こうにいる使用人は、不吉な情報を知らせにきたらしい。その内容に嫌な予

感がしたアルダープは、使用人を呼びつける。

『一体何だ!? 中に入って詳しく話せ!!』

『はっ! 失礼します!』

離れたまま話すのは疲れるので使用人を寝室に通すと、衛兵の格好をした男が入ってきた。

『報告させていただきます! つい先ほどルパルゴ13世なる盗賊が侵入しまして、宝物庫の財宝をすべて盗まれました!』

『なっ!? なんだとおおおおお!?』

嫌な予感は見事の中にしてしまった。まさか、苦勞して貯め込んだ資産をこうも簡単に奪われてしまうとは!

『あの盗人めええええええええええ!! またしてもワシの大事なものを奪いおつてえええええええええ!!』

怒りのあまり理性がぶっ飛んだアルダープは人目をばかることなく叫んだ。たかが盗賊の分際で領主である自分をここまで侮辱するなど絶対に許しておけない。

『ええい、貴様達は何をしていたっ!? 早く奴を捕らえて来んかあっ!!』

『現在、鋭意捜索中です! それと、このようなカードが宝物庫に落ちていました!』

そう言うのと衛兵は1枚のカードを差し出してきた。話を聞いただけでそれが何なの

かを察したアルダープは、衛兵の手から乱暴にカードを奪い取ると、書かれている文を食い入るように読んだ。

『ぐぬぬ〜っ……い！ 今度は汚い金〇まの代わりに美しい金銀財宝をいただいでいくだとおっ!!』

思つた通り、カードにはルパルゴ3世の犯行声明が書かれていた。

“……つーわけで、お前が悪事を続ける限り大事なものを失つてくぜえ？ それが悪ならスパツと自首して、さっさと楽になるんだなあ。そうしないと、怖〜い悪魔がやつて来て地獄に連れていかれちまうぞお？”

明らかに脅迫文だが、こんな回りくどいことをする奴の目的は一体何だ？ 直接殺さないのは悪事の証拠を公にさせるためなのか？

その意図は分からないが……いずれにしても、これではマクスの力を使えなくなるばかりか、いずれは自首する事態にまで追い込まれてしまうかもしれない。

『そんなこと出来るわけなからうがあっ!!』

自首をしてすべての悪事が露見すれば、ほぼ確実に死刑となつてしまうのだ。気位の高いアルダープにとって、そんな惨めすぎる結末など絶対に選べない。

ならば、悪事の証拠を知っているルパルゴを殺すしかないだろう。奴さえ殺してしまえば今まで通りの日々に戻れるのだ。ただ一つ、マクスを恐れていないことだけは気に



い衝撃波に晒された。

『な、なんだっ!? これは一体何なんだあああああ!?』

驚愕のあまり思考が停止してしまうが、壊れた窓の向こう側を見て一気に顔を青ざめさせる。そこには、この世のすべてを焼き尽くすかのような爆炎が出現していたからだ。その圧倒的な力は死を連想させて、目撃した彼の心に決して消えない恐怖を刻んだ。

奴だ……これは奴の仕業だ……! ルバルゴは本気でワシを死刑台に送る気だっ!

『じよ、冗談じゃないっ!! 貴族たるこのワシが盗賊ごときにやられてたまるかあああああ!!』

精神的に追いつめられてパニック状態になったアルダープは、股間の痛みすら忘れて逃げ出した。それは、この屋敷で一番安全な場所……寝室の地下に作られた隠し部屋だった。

足をブルブルと震わせながら階段を下りるアルダープは、この先にいる【悪魔】に最後の希望を見出ししていた。

『そ、そうだっ! ワシにはまだマクスがいるっ! あいつの【辻褃合わせの強制力】があればルバルゴを呪い殺せるっ!!』

我を見失ったアルダープはどうとう切り札に手を出した。今はまだ歩くのが辛い

で傷が癒えてから殺してやろうと考えていたが、もう我慢出来ない。

『ハツハツハツ！ どんな對抗策を用意したかは知らんが、たかが盗賊にマクスの強制力を防げるわけがあるまいっ！』

虚勢を張るように叫ぶアルダープだったが、実を言うとその通りだった。

とある転生者が所有していた神器をどこからか入手してきた彼は、それを使って一体の悪魔を喚び出した。それが「真実をねじ曲げる」能力を持ったマクスであり、その呪いを防ぐことは人間には不可能だった。マクスが使う「辻褃合わせの強制力」は、距離が遠く離れていても相手の素性が分からなくても効果を発揮する恐ろしいスキルで、アルダープが「屋敷に侵入した盗賊を呪い殺せ」と命令するだけで離れた場所にいる茂茂を殺せてしまうのだ。

つまり、茂茂の作戦は最初から失敗していた。マクスの力は彼の想像を遙かに超えてチートだったのだ。女神の加護をより強く受けているアークプリーストやクルセイダーならある程度の抵抗力があるものの、それでさえ完璧には防げない。目論見通りアルダープを追い詰めることは出来たが、その程度で止められるほど彼の切り札は甘くはなかった。

『さあ、マクスよっ！！ ルパルゴース世を殺せえええええっ！！』

隠し部屋についてアルダープは、視線の先にいる男に向かって叫んだ。

このままでは茂茂が呪い殺されてしまう。形勢は一瞬の内に逆転して茂茂達に敗北の危機が迫っていた。

しかし、彼には「神の救い」ならぬ「悪魔の助け」があった。

『フハハハハハ！ マクスウエルだと思ったか？ 残念、我輩でしたっ！』

『っ!? なっ、なんだ貴様はっ!?』

アルダープは、マクスと見間違えた男が別の存在であることに驚いた。よく見ると、マクスとは似ても似つかない猿顔の男で、マクスと同じタキシードを着ていたかと思ったら、安っぽい赤い上着と白いズボンを身につけた貧相な不審人物だった。

……いや、違う。こいつは人間なんかじゃない！

『このゾクゾクする感じ……。マクスと同じ感じだ！ 悪魔だな！ 貴様は悪魔だっ

！』

『大正解である！ たかが盗賊一人にやられ放題の片タマ男よ！』

『ききき、貴様あああああっ!?』

『おっと、凶星を突かれた負け犬領主の悪感情、なかなか美味である！』

ふざけたことを言う男に対して恐怖よりも激しい怒りが湧き上がる。

しかし、こいつは何者なのか。マクスのフルネームを知っているということは悪魔に違いないのだろうが、あの嚴重な警備をどうやってくぐり抜けた？

『おいマクス!! こいつは一体何者だっ!!』

アルダープは、猿顔の悪魔の後ろにいるマクスに聞いた。見た目は整った顔立ちをした青年だが、完璧な無表情が薄気味悪い悪魔である。

『ヒュー……、ヒュー……、聞いておくれよアルダープ! 僕の同胞が、わざわざ遊びに来てくれたんだよ!』

話しかけられたマクスは、喘息のように息苦しそうなしゃべり方をしながら答える。彼の言動は子供のように幼くて、余計にアルダープを苛立たせた。

『ええい!! そんなことはどうでもいいっ!! ワシはコイツが何者かと聞いておるのだっ!!』

『ヒュー、ヒュー、彼が何者かだつて? ……えつと、あれ? なんて名前だったっけ?』  
『フハハハハハハ、貴公は仕方のない奴だな。もう我輩の名を忘れてしまったか。つい

先ほども名乗ったであろう? 我輩の名は「ルパルゴ13世」であると!』  
『なあっ!! なんだとおおとおおっ!!』

アルダープは猿顔の悪魔の名を聞いて驚愕する。

それと同時に色々な疑問が解けた。マクスの力を怖がらないのも、領主相手にケンカを売るのも、人間離れた爆裂魔法も、ルパルゴ13世が悪魔だというのなら説明がついてしまう。



『フハハハハハハ！ ビックリしたか？ 貴様が必死こいて探していた盗賊は、ここで悪魔トークをしました！』

『あ……ああ……』

『おつと、これはかなりの悪感情！ ……と喜んでみたが、残念ながら我輩好みの味ではないな。絶望と恐怖が混じり込んで、からし入りのシュークリームを食ったような気分であるわ』

ルパルゴー3世と名乗った猿顔の悪魔は、嫌みを言いながらニヤリと笑う。相変わらず軽い口調だが、この悪魔はアルダープにとって恐ろしい敵だった。

『こつ、殺せええええええつ!! マクスよつ!! 今すぐコイツを殺せえつ!!』

『……? なぜ僕が同胞を殺さないといけないの? ヒュー、ヒュー……』

同胞思いなマクスはアルダープの命令をあつさり拒否した。それが初めての口答えとなり、恐怖におびえていたアルダープを逆上させる。

『きつ、貴様あああああつ!! こんな状況で、なにふざけたことを言っておるのだっ!? いいから殺せつ!! 殺さんかあああああ!!』

顔を真っ赤にしながらかぶが、マクスは言うことをまるで聞かない。

『フハハハハハハ！ まるでタコのようなな!』

『ええい、うるさいっ!! 全部貴様のせいだろうがっ!! 大体、貴様の目的はなんだっ!!』

ワシを殺すつもりなのかっ!？」

『フン。貴様の命など牛のフンほどもいらぬわ。そもそも、我輩は人を殺さぬ。特に貴様のような傲慢男は極上の悪感情を味わわせてくれるからな。生かさず殺さずいじりぬいて、旨い食事を提供し続けてもらうのが我輩の流儀である!』

なんて迷惑な存在なんだ!

『そつ、そんなことのためにワシの片タマを……!』

『おつと、すさまじい怒りの悪感情をどうもありがとう!』

『くつ、くそおおお!! この薄汚い悪魔めええええつ!! ワシの前から今すぐ消えろおつ!!』

『フハハハハハハ! 面白楽しいハプニングを演出してやった甲斐あって随分とご立腹のようだなあ! まったく、悪人いじりは最高である! とはいえ、貴様はマクスウエルのお気に入り。あまり我輩がちよっかいをかけすぎると、奥様方が大好きな泥沼の三角関係に陥ってしまうかもしれん。というわけで、もし貴様が我輩の出す試練に耐えられたら、潔くこの身を引くと約束しよう』

猿顔の悪魔は不意にチャンスを与えてきた。普通に考えれば信用出来ない話なのだ。が、追いつめられたアルダープにとっては食いつかずにはいられない。それはまさしく悪魔の誘惑だった。

『そつ、その試練とは何だ!』

『ズバリ言おう! 貴様に与える試練とは、我輩が興味を無くすほどに【心の綺麗なアルダープ】となることだ!』

『……は? 心の綺麗なワシだと!』

『ああそうだ! 捻くれ者の我輩は心の綺麗な人間が大の苦手だな、貴様が心を入れ替えて【みんなに好かれる良い領主】となつてしまえば、流石の我輩もイタズラする気が起きなくなるであろう』

いざ聞いてみたら、試練でも何でも無い至極当たり前なことだった。しかし、根っからの悪人であるアルダープにとつては死んで生まれ変われと言われているようなものだ。

『そ、そんなことつ……』

『出来るわけないか? それなら、貴様が天寿を全うするまでの長い付き合いとなるが……』

『わつ、分かつた! 貴様の言う通り心の綺麗な人間になつてやるつ!』

『ほうほうそうか! 悪魔の試練に挑戦するとは、なかなか見事な覚悟である! ちなみに、嘘をついても無駄だということを先に伝えておこう。我輩に隠れてこつそりとマクスの力を使い、ララティーナとかいう貴族の娘を手に入れようと企てている強欲男よ

！』

猿顔の悪魔は、いきなりアルダープの思考を言い当ててみせた。まさかコイツは人の心が読めるのか。悪意がバレたアルダープは、目を見開いて驚愕する。

『なっ?! なぜそんなことが分かるのだっ?!』

『フハハハハハハ！ 我輩は地獄の公爵であるからな、この程度の兇戯などは朝飯前のクソみたいなものである！ というわけで、いきなり試練を失敗しそうになったおバカさんに愛のこもった修正を加えてやろう！』

悪魔の契約に慈悲は無く、愚かなアルダープにオシオキするべく彼の顔から眩しい光が発せられた。

『バニル式殺人光線!!』

何やらネタバレ的な名前のスキルが発動して、猿顔の悪魔からビームが発射される。すさまじい速度で直進するそれはアルダープの禿げた頭頂部をかすめて奥の壁に当たった。

ジュバアアアアアアン！

『ひいひいひいひいひいっ?!』

頭に負った火傷の痛みよりも恐怖が勝って心が竦む。この瞬間、猿顔の悪魔はアルダープにとって特大のトラウマとなり、今後はずっと彼の視線におびえながら生きてい

くことになる。

『先ほど言った通り、我輩は人を殺さぬ。だがしかし、鼻歌混じりで瀕死にすることは出来る。と覚えておくがいい』

『あ……あ……』

『わあ〜！　すごく心地好い感情を発しているねアルダープ！』

恐怖のあまり固まったアルダープを見てマクスが喜ぶ。彼はアルダープのことが大好きだったが、その想いは人のそれとはまったくの別物だった。

それでも、悪魔的には仲良しに見えるらしい。

『フハハハハハ！　やはり、貴様とマクスウエルは相性が良いようだなあ！　よし決めた！　マクスウエルの熱烈な愛情に免じて、試練の期間をたったの「2年」にまけてやろう！』

『……に、2年!?　ほほほつ、本当かつ!?』

『もちろん、悪魔に二言は無い！　さつきまでは貴様が死ぬまで監視してやろうと思っていたが、それを思いとどまらせてくれたマクスウエルの存在に心の底から感謝するがいい！』

猿顔の悪魔はやたらと恩着せがましく言い放つ。こんなことをされたら、普段のアルダープなら激しく怒っていただろう。しかし今は、この悪夢から抜け出せるチャンス

手に入れられたことに安堵するだけだった。

『つてな訳で、ここに汝との契約は成立した。今この時より2年の間、一切の悪事から身を引いて清く正しく生きてみせろ！ さすれば汝、我が呪縛から解き放たれるであろう！』

最後に契約の成立を宣言した猿顔の悪魔は、ニヤリと口元を歪めると、へたりこんでいるアルダープをあざ笑いながら部屋を出て行く。

『では、さらばだマクスウエル！ 機会があればまた会おう！』

『うん、またねルパルゴ！』

悪魔達の別れは短い言葉を交わしたただけであつさりと終わり、猿顔の悪魔は一度も立ち止まることなく帰っていった。

良かった……やつと消えてくれた。その様子をブルブルと震えながら見送ったアルダープは、ようやく助かったことを実感する。

『ま、まさか、マクスがこんな形で役に立つとはな……』

『ヒュー……、ヒュー……？ 僕なんかしたっけ？』

記憶力の無いマクスは、もう猿顔の悪魔がいたことも忘れかけていた。

『……まあいい。とにかく2年我慢すれば、コイツの力も使えるようになる』

それに、アルダープにはもう一つ切り札があつた。この部屋に隠してあるもう一つの

神器が。

股間の痛みには耐えながら神器の無事を確認したアルダープは、勝ち誇ったように笑う。

『ハーツハツハツハツ！ バカな奴めつ！ 大きな口を叩いておつたクセにコイツは見つけられなかつたようだなあ！』

これまでずっとやられっぱなしだったが、何とか一矢報いることが出来た。いや、これを上手く使えば、あの悪魔を返り討ちにすることすら可能だ。

『今に見ておれルパルゴめ！ この神器を使って王家の力を手に入れてしまえば、悪魔と言えども手出しは出来まい！』

奴の監視がある以上うかつには動けないが、いつか必ず機会は来るはず。その時が来るまではどんな屈辱にも耐えてみせよう。

『フツフツフ……こんなことでワシは負けんぞ！ この国もララティーナも、ワシが必ず手に入れてやるっ!!』

まるで改心する気の無いアルダープは、反撃のチャンスを手に入れるために「心の綺麗なアルダープ」を演じきる決心をした。

一方その頃、屋敷を脱出した猿顔の悪魔は、タキシードを来た仮面男に姿を変えて大

笑いでいた。

『フハハハハハハ！ 貴様の幼稚な悪企みなど、このバニルにはお見通しである！』

そう、実を言うところの悪魔は、茂茂達を逃がすために屋敷に残ったバニルだった。彼は、同胞のマクスウエルを解放するために独自の目的で動いていたのだ。それにはアルダープとの契約を終わらせる必要があり、茂茂の未来を見通した彼は、今回の作戦を利用して目的達成のための仕込みを行った。その成果が活かされるのは、とある男が現れた後になる。

『汝、悪魔ですら呆れるほどに強欲なる悪徳領主よ。見通す悪魔が宣言しよう。汝の悪企みは、銀髪の遊び人とその仲間達によつてことごとく台無しにされるであろう。そして汝はすべてを失い、マクスウエルと共に愛と絶望に満ちた逃避行を繰り広げることになるであろう。フハハハハハハ！』

この時バニルは、悪魔らしく凶々しい笑みを浮かべた。マクスウエルには悪いが少しだけ待っていてもらおう。そうすれば、お互いに極上の悪感情を味わえるぞ。

『それにしても危なかったな。今回の作戦前にブリーフマスターを見通していなかったら、とんでもない結末になっていたぞ……』

残虐モードから切り替わったバニルは、この作戦の立案者である茂茂を思い浮かべる。もしバニルが介入していなければ、彼はアルダープに殺されていた。



『そんな事態になつていたら絶望店主が暗黒面に墜ちて店が潰れていただらうな……』  
とつてもヘビイなバッドエンドを想像して冷や汗を流す。ウイズの友として、そんな未来は回避しなければならぬだろう。

その上、とある野望を実現するために途方もない大金を必要としているバニルは、商人として成功している茂茂に大きな期待を寄せていた。

『あの男と我輩が組めば、能無し店主の店ですら王国一にすることも不可能ではないだろう！』

近い将来、ウイズの店で金を稼ごうと計画しているバニルにとつて、茂茂は願つてもない人材だ。そんな彼をこんなところで死なせるわけにはいかない。自分の野望を叶えるためと、ついでにウイズの幸せのために。

『まったく、世話のかかる友を持ったものだ。トラブル店主は我輩の予想を超えて問題を起こすからな。……もしもに備えて、マクスウエルの呪いを無効化する呪いをかけておくか』

なんだかんだと文句を言いつつウイズの世話を焼くバニルさんは、やっぱりツンデレ属性だった。

## 第13訓 バカな仲間ほど厄介な敵はいない

銀時達がウイズと衝撃的な出会いを果たした翌日の朝。馬小屋を出発した長谷川達は、朝食を取るべくギルドへと向かっていた。その道中で、疲れた顔をしたカズマがぼやく。

「はあ……。この世界は地獄だ……」

思わず、朝一から中二病っぽいセリフをつぶやいてしまう。それほどまでに今の彼は心身共に疲れていたのだが、バカな桂は勘違いな気遣いをしてくる。

「どうしたカズマ君、元気が無いぞ？　こちらに来てから2週間、そろそろ恋しくなるのも無理はないが、もういい加減ジャンプの続きは諦めろ」

「そんなことで落ち込んでんじゃねーよ!!　お前のせいで死にかけてたからテンション下がっちゃってんだろーが！」

的外れなことを言う桂にカズマがキレル。彼がやさぐれてしまっているのは、すべてこのバカのせいなのだから仕方無い。それを理解している長谷川は、カズマを宥めるように話しかける。

「まあまあ、落ちつけてってカズマ君。とにかく無事に済んだんだから、結果オーライでい

いじゃねーか」

「クエスト一回目から殺されかけたつてのに結果オーライで済まされてたまるかーっ！

レベル1の引きこもりにあんな無茶させやがって、こいつらマジでまともじゃねーよ！俺は負けると強くなるサイヤ人じゃねーんだぞゴルア！」

人事のように言う長谷川にイラッと来たカズマは怒りを込めて言い返す。桂の選んだクエストは想像以上にデンジャラスかつバイオレンスだったからだ。

昨日カズマは桂のパーティに加わって初めてのクエストに挑戦した。その内容は「人を襲うようになってしまったペットの駆除」というものだった。

数週間前から行方不明となり搜索願いが出されていたそのペットは、知らぬ間に街の外へ逃げていたらしく、数日前に近隣の山で発見された時にはもうすっかり野生化していた。その際に、捕獲しようとしたベテラン冒険者が重傷を負わされたため、街での飼育は無理だと判断したギルドが討伐対象に切り替えてしまったのだ。

そして今、討伐クエストを受領したカズマ達は、森の中の開けた場所でそのペットと対峙していた。

『ほ、本当にやるのか、桂さん!?!』

『残念だが、人々の安全を守るためには致し方無い。たとえ可愛いワンちゃんといえど

も、心を鬼にして倒さねばならん』

『いや、アレのどこが可愛いワンちゃんなんだよ!? どう見てもオオカミなんですけど!? トリコに出てきたバトルウルフみたいな奴なんですけど!?』

カズマは、目の前で唸り声を上げている「ホワイトウルフ」にビビりながらつつこむ。彼らが受けたクエストは、ペットとして飼われていたオオカミ型モンスターの討伐だったのだ。

ホワイトウルフは真つ白な毛並みが美しいイヌ科の大型肉食獣で、育て方次第では手懐けることも出来るため街の中で飼っている迷惑な愛好家が少数ながら存在しているのだが、元々はモンスターに分類されるほどの危険生物なので、ひとたび野生化してしまつたらもう討伐するしかない。

『グルルルルル……!』

『ちよっ!? コレ、マジでヤバいんじゃない!? どう考えても甘噛みで済むとは思えないんですけどっ!?』

『まったく、この程度で臆するとは、最近の若者は軟弱過ぎるな。ちよつと大き目とはいえ、ワンちゃんを怖がつていては立派な攘夷志士になれんぞ!』

『だからアレ、ワンちゃんじゃねーし、攘夷志士も目指してねーよ!』

どこまでもホワイトウルフをイヌと言い張る桂にイラッと来る。彼がそう思うのは

神楽が飼っている定春が原因なのだが、あのサイズを基準にされたら迷惑以外の何者でもない。

実際、ホワイトウルフはかなり強くて、中級レベルの冒険者でも一人で倒すのは難しいモンスターだ。そんな相手にレベル1のカズマが挑戦するなど無謀もいいところである。

『(おいノルン！ 何かいきなり俺の冒険者ライフがクライマックスなんだけど、どうしてこうなった!?)』

《そんなの、キミがカツラのパーティーに入るなんて頭のおかしい選択をしたからに決まってるじゃん》

『(はい、そーですわねっ!)』

相棒のノルンにあっけなく論破されて己の失敗を悟る。アクアと一緒にいると酷い目に遭いそうな予感がしたので銀時パーティーに入ることを躊躇したのだが、こつちもこつちで地獄を見そうだ。

《でも、カズマはもうカツラ達と同じギャグキャラ扱いだから何とかなるんじゃない?》  
『(なんだそのメタ過ぎる慰め方は!? 扱いが雑過ぎて余計にへこむわっ!!)』

慈悲深い(?) 女神の助言に涙が出てくる。ギャグキャラだって痛みや苦しみは感じるんだからね!

『なんてこと思ってたらこっちキター!?!』

『グオオオオオオオン!!』

カズマの恐怖心を隙と見たのか、ホワイトウルフが彼に向かって襲いかかって来た。その速度はすさまじく、心の準備が整っていないカズマはまったく反応出来ない。

ダメだ、やられる!

恐怖心に負けて目を閉じたカズマは、じきに感じるだろう痛みにも身構えた。しかし、予想した痛みが来ることはなく、代わりにホワイトウルフの悲鳴が聞こえてきた。

『キャイン、キャイン!?!』

『はーっはっはっはっ! 我らの怒りを思い知れや真選組のクズ共があーっ!!』

へオラオラ! くたばれ真選組いいいいっ!!

目を開いて見てみると、イイ笑顔を浮かべた桂とエリザベスがホワイトウルフをタコ殴りにしていた。何故か真選組に怒りをぶつけながら。

『素手でオオカミフクロにしている!?! つーか、何で真選組デイスってんの!?!』

『いやね、真選組っていつも群れで襲ってくるから、俺達の間では「狼(笑)」って呼んでただけだよあ、コイツを見てたらあの頃の怒りがフワツと湧いてきちゃったんだよねー!』

『ただの八つ当たりでホワイトウルフさん瀕死なのお?! さつきまでの緊張感が全部台

無しじゃねーか!!』

一人でビビっていたカズマは急激に恥ずかしくなった。そういえば、この人達は世界観をガン無視した強さを持っていたじゃないか!

『でもまあ、これなら無事にクエストをクリア出来るな……俺はなんもやってないけど』  
正直言つて情けないと思わなくもないけど、とにかく今は危険生物と戦わずに済んで何よりである。

なんてことを思っていたら、この直後に事態が急変した。

『よし。ワンちゃんも良い感じに弱ってきたことだし、ここからはカズマ君にバトンタッチして止めを刺してもらおうか』

『えっ、止め!? いやでも、ソイツまだ動けるみたいなんだけど……』

『当然だろう。相手が動かなければ戦闘訓練にならんからな』

『なん……だと……?』

とつても体育会系な桂の言葉に驚愕する。実を言うと、彼は最初からカズマを鍛えるためにこのクエストを選択したのだ。

これは主に紅魔族の間で行われている「養殖」と呼ばれる育成法で、高レベルの者が瀕死にしたモンスターを低レベルの者が止めを刺すことで簡単に急速成長できるというものだ。

しかし、精神的な成長も必要だと考えている桂はレベルアップやスキルに頼るだけではないけないと判断し、生きの良い獲物を与えて実戦経験まで積みさせることにしたのである。

『いやいやいやいや?! レベル1の引きこもりが、捕獲レベル30のバトルウルフとやりあうなんて無茶振りにもほどがあんだろっ?!』

『はいそこ黙って、さっさと刀を構えるー! そんなんじゃ、いつまでたつても卍解できないようにはなれないよー?!』

『元からそんなつもりはねーよ! そもそも、お前も使えねーだろ! って、おいコラ止めろ!』 俺はまだ死にたくなあなああああいつ!!』

へええい、つべこべ言わずに行つて来いやー!』

必死の抵抗も空しく、エリザベスに蹴飛ばされたカズマは、唸り声を上げるホワイトウルフの前にその身を投げ出された。

はつきり言つてすっげえ怖い。桂達の攻撃でかなり弱つているとはいえ、闘争心の方は衰えるどころか逆に上がっている。

『死が目前に迫つても彼は生きること諦めない。なぜなら、彼には成し遂げなければならぬ夢があるからだ。屈辱という名の鎖を碎き、野生という名の自由を取り戻した彼は、故郷へ帰るといふ夢を叶えるために必死に足掻いてここまで来た。それこそが誇



り高き父と母の願いだから。大好きだった彼らと交わした大切な約束だから。そこに辿り着くまでは決して死ぬわけにはいかない。志半ばで諦めるわけにはいかない……。ああ、天国にいる父さん母さん。僕は最後まで戦うよ。そうしないと二人に胸を張って会いに行けないから……』

へこんちくしようめ！　ごつつええ話やないか！

『って、おとおおおいっ!?　なに勝手に感動的なストーリーでつち上げてくれちゃってんの!?　んなもん聞かされたら倒しにくくてたまらねえだろ!?』

妄想力の豊かな桂は、バカな小話をしてカズマのテンションを下げまくった。その際に大きな隙ができてホワイトウルフに先制されてしまう。

『グオオオオオオオッ!!』

『うぎやあああああっ!?』

迫りくる鋭い牙を見て悲鳴を上げる。だが、その牙が届くことはなかった。危険を察知した桂が、カズマの横つ腹を蹴飛ばして無理矢理攻撃を回避させたのである。その代わりに、木に激突してダメージを受けてしまったが。

『ぐほあああああっ!?』

『戦場で隙を見せるなっ!』

『って、お前が変な小話しやがったせいだろおとおおおっ!?』

確かにカズマの言う通りなのだが、彼の危機感が足りないのもまた事実である。

『ふざけるのもいい加減にしろ！ 生死を懸けた戦場でツツコミをかますなど、うかつにもほどがある！ そんな浮ついた覚悟では、地獄のようなこの世界で生き残ることなどできやしないぞ！』

『だつたらお前もボケンじゃねーよ!? お前が一番ふざけてんだろっ!!』

自虐的な説教をしてきた桂に激しい怒りが沸き上がる。銀時の言う通りこの男は大バカヤローだ。一応カズマが死なないように気を使っているようだが助け方が雑過ぎる。もしかして、やられそうになるたびにぶつ飛ばされるのか!?

『おいマジかよ!? このままじゃコイツらのサンドバッグになつちまうじゃねーか!?』  
へそれが嫌ならとつと倒せや!〜

エリザベスに蹴飛ばされて再びホワイトウルフの前に放り込まれる。とりあえずオオカミの餌とならずに済むようだが、その代わりに桂とエリザベスの攻撃を食らうてしまふ。しかもそれは戦闘不能になるまで続くだろう。やたらとやる気満々の桂達を見れば分かる。あれは頭のおかしいことを考えている顔だ。

『な、なぜだ!?! なぜS側の俺がDMプレイを強いられるんだ!?! この手のネタはダクネスの役目だろーが!?! エロくてDMな女騎士の出番だろーがああああ!?!』

テンパったカズマは、言動までおかしくなった。しかし、現実逃避しても事態は改善

しないのでノルンに助けを求めろ。

『(うわーん、ノルえもーん！ あいつの倒し方を教えてくれよー！)』

《もう、しよーがないなあカズ太君は》

カズマに懇願されたノルンはやれやれとジエスチャーしながらホワイトウルフを観察する。これぞまさしく困った時の神頼み。こうなりや、ノルンの力で勝利を手繰り寄せるしかない。

幸い、相手は足にダメージを受けているので積極的に攻撃を仕掛けられない。その隙に素早く分析を済ませたノルンは結果を報告する。

《ふむふむ……。戦闘力は5%以下まで低下してるけど、ホワイトウルフの体毛は防御力が高いから、カズマの力じゃあまりダメージを与えられないな。かといって、柔らかい目や口を狙うのも得策じゃないね。その辺は相手も心得てるから、弱つちいカズマだと返り討ちに遭つちやうよ》

『うむ、なるほど！ 俺が勝てる要素は微塵も無いな！ って、それじゃダメだろ!? そんなこつたるーとは思ってたけれども、マジで何ともならないの!?!』

このまま桂達にボコられるのはイヤなのでカズマも必死である。しかし、他人に見えないノルンと議論を繰り返している様子はかなり不気味で、気になった桂が声をかけた。

『どうしたカズマ君！ 恐怖のあまりに現実逃避して、可愛い妖精さんと戯れる幻でも見てしまったているのか？』

『ぎくつ!? な、なに言ってるんすか桂さん！ 土日の朝にやってる少女向けアニメじゃあるまいし、可愛い妖精なんて見えてないっすよ〜！（こいつバカのクセにやたらと鋭い!?）』

まるですべてを知ってるかのような桂の言動にビビる。人前でノルンと会話するとどうしても挙動不審なアブナイ奴になってしまうのだが、女子に引かれたらイヤなのでこれからは気をつけよう……。

『じゃねーだろ！ 女子の目を気にする前にこの窮地をなんとかせねば！』  
 女の子達に嫌われるのもイヤだがバカ共に蹴られまくるのもイヤ過ぎる。

『（でも、どうすりゃいいのか分かんねえー!? ノルンちゃん!! たあーすけてええええええええ!!）』

『もう、仕方ないなあ。こうなったらあの手をつかうしかないようだね』

『（おつ、何か良い作戦があんのか!? 流星は女神！ 頼りになるうー!）』

調子の良いカズマはイラツとするほど元気になるが、その反対にノルンの表情は曇っていく。その理由はこれから攻撃する場所にあった。

『いいかいカズマ。ボクがキミの頭に乗って動作を指示するから、何とかホワイトウル』

フの後ろを取るんだ。一番の弱点である「お尻の穴」を攻撃するためにね!」

『よし分かった! 　って、お尻の穴ああああああ!? 　おいノルン! 　ここがギャグ寄りの世界だからって、その方法は流石にねえだろ!? 　お尻の穴を狙うとか、友人達からクズマと呼ばれて恐れられた俺でさえもドン引きだぞ!』

『ああもう、それしか良い方法が無いんだから文句言わないでよ! 　そりやボクだってお尻の穴に攻撃なんてしたくないよ! 　だって、お尻の穴なんて女神にふさわしくない場所だもん! 　でも、激弱のカズマが勝つにはお尻の穴をぶっ刺すしかないんだよ! 　もつとも無防備なお尻の穴しか!』

『あつコラッ! 　年頃の女の子がお尻の穴なんてえっちな言葉を連呼しちやいけません!』

真つ赤になって力説するノルンを可愛いと思いつつも不適切な言動を注意する。

それにしても、お尻の穴を狙うのか……。ファンタジー物のライトノベルでそんな所を攻撃する主人公とかいねーよな普通。遠くを見るような目をしたカズマは、ふとそんなことを思った。だが、今の彼は主人公ではないのでヨゴレ仕事も問題なくやらせられる。というわけで、カズマの意志は完全無視してノルンの作戦を実行することになった。

カズマの誘導役を引き受けたノルンは、彼の頭頂部に乗って気合いを入れる。

《パイルダーオン！ 行け！ マジンカズマー！》

『（俺はスーパーロボットじゃねえー！）』

微妙な扱いにツツコミを入れるカズマだが、心の中では頭部に密着しているノルンの感触にエロ心を刺激されていた。柔らかくて暖かい太ももが童貞少年のハートを驚掴みにする……。

『はっ!? いかんいかん！ 俺は決してロリコンではない！ 貧乳も捨て難いけど、やっぱ巨乳が一番なんだ！ せめてアクアくらいはないと合格ラインは越えられないぜ！』

《おいコラ、カズマ！ ボクにケンカ売るとは良い度胸してるじゃないか！ オツパイの大きさが女神の力の決定的な差でないことを教えてやる！》

ロリっ子扱いされて怒ったノルンはカズマの髪の毛を前に引っ張って無理矢理前進させた。

『いつてえーっ!?』

『グオウ!?!』

変な動きで向かって来たカズマにホワイトウルフの反応が遅れる。その隙に駆け抜けて一気に距離をつめる。

『ぐおおおおお!? 毛が抜けるうううううう!?!』

カズマの髪の毛がヤバそうだが、今はそちらを気にしている場合ではない。桂に危険だと判断されないようにホワイトウルフの攻撃を避けなければならないのだ。しかし、未来を見通すことが出来るノルンにとっては造作もない仕事である。

《良い感じに引き付けてから……右に飛ぶ!》

『ぐほおほおほお!!』 毛根が死ぬううううう!!』

意外に力が強いノルンに髪の毛を引っ張られたカズマは無理矢理身体を動かされ、不自然な動作をしながら攻撃を避ける。そのタイミングは絶妙で、機敏なホワイトウルフも捉えきれない。ただし、攻撃を食らわなかった代わりにカズマの髪の毛が数本犠牲となったが。

《今度は左!》

『ぐぎやあああああ!!』

《次は後ろ!》

『おほおほおほお!!』

ノルンの反応は非常に的確で、半ば操り人形と化したカズマはすべての攻撃を回避する。ホワイトウルフも必死でなかなか後ろを取ることは出来ないものの、隙を突いては足に攻撃を加え続けて少しずつ機動力を奪っていく。それに伴いカズマの髪の毛も奪われていくが、とてもレベル1の初心者とは思えないほどの健闘ぶりである。

『ほう。初めての戦闘だというのに良い動きをするではないか。それだけ戦えるなら、監督役の俺達もキャッチボールが出来るほど安心していられるな』

『とか言ってマジでキャッチボール始めんじゃねーよ!? お前らがヒマだからやりたかっただけだろソレ!?!』

カズマが必死こいて戦っているというのに、監督役に飽きたバカ達はキャッチボールをやり始めた。

『よーし行くぞー、エリザベス!』

へんどと来いや桂さん!〜

『つて、おとおおおおい!? どーいう状況なんだよコレは!? 命懸けで戦ってる仲間の横でキャッチボールするとかシユール過ぎにもほどがあんだろ!?! せめてヤムチャやピッコロみたいに解説役でもしてくれよ!!』

こちとらお前らのせいで酷い目に遭っているのに、人の気も知らないでのん気に遊びやがって……。現在進行形で髪の毛を失い続けるカズマは怒りと同時にストレスを蓄積していく。

『このままではいろんな要因で俺の頭頂部にハゲが出来てしまう!』

それだけはなんとしても防がなければならぬ!

『うおおおおお! プロの引きこもりをなめんなよおおお! 高校にも行かず



にネットで仕入れた雑学を駆使して異世界無双してやるぜええええええつ!」

怒りを爆発させたカズマはとうとう覚醒する。本気を出した彼は意外に出来る子になるのだ!

《うわっ!?》 家という名のATフィールドに引きこもっていた貧相なエヴ○ンゲリオンが暴走した!》

『誰が貧相なエヴア○ゲリオンだゴラア!? 俺はスーパーロボットでも汎用人型決戦兵器でもねえーっ!』

急に荒ぶりだったカズマは驚くノルンにツツコミを入れつつ独断で動き始めた。

『これ以上、俺の財産(髪)を筆り取られてたまるかああああああつ!』

このままノルンに任せていては頭のとっぺんがハゲてしまう。彼はもう大事な髪を失いたくはなかったのだ。

とはいえ、何の勝算も無しに暴走したわけではない。ノルンの指示に従いながら戦っている間に相手の動きにもだいたい慣れたし、使えそうな作戦も考えてある。おもいきつてそれを実行することにしたカズマは、右手で足元にある土を掴むと、ホワイトウルフめがけて走りだした。

『うらああああああ! 貴様のタマ取ったらああああああ!』

『ウガアアアアア!』

挑発するように適当な言葉を叫んだら上手いこと乗ってきてくれた。その結果、互いに駆け寄っていく形となり、カズマとホワイトウルフは急速に接近する。

《どうする気なの、カズマー!》

『どーするって、こーすんだよっ!』

そう言うときカズマは目の前で飛びかかろうとしていたホワイトウルフの目に向かって右手の土を投げつけた。それと同時に左側へすぐさま飛び退き、巨体との衝突を回避する。

『グオオオオオン!』

飛びかかろうとした瞬間に目つぶしをされたホワイトウルフは視界を奪われた驚きと焦りで着地に失敗して転んでしまう。

『見たかノルン! クリリンからヒントを得た目つぶし攻撃の威力を! やっぱ、異世界ファンタジー物は現代知識でチートしてなんぼだぜっ!』

《って、マンガの知識しか使ってないし!? 子供のケンカレベルじゃん!》

確かに、カズマらしいセコい手だが、この状況においては非常に効果的でもあった。ずっこけたホワイトウルフはこれまでに蓄積したダメージもあつてすぐには体勢を整えられない。その間に後ろを取ったカズマは余裕をもって攻撃できる。

《今だよカズマ! お尻の穴に刀をぶち込めえーっ!!》

『お前、実はお尻の穴って言いたいだけだろ!』

見た目通りに子供っぽいノルンの言動にツツコミを入れながら必殺の一撃を繰り出す。

やっただけくしよう。これでようやく、頭のおかしいロン毛野郎によつてやらされるハメになったクソみたいなクエストも終わる……。

『フハハハハハ！ 恨むならそこでキャッチボールをしてるバカ共を恨むんだなああああああああつ!』

ちよつぱり危険な目をしたカズマは、これまでの鬱憤を晴らすように力強い突きを放った。そして、致命傷となる一撃がお尻の穴に決まり、ホワイトウルフは何とも切なそうな断末魔の声を上げた。

『ツ?! クオオオオオオオオオオオオオオ……』

最後に振り絞った遠吠えは悲しげな様子で辺りに響き、その後まもなくホワイトウルフは力尽きた。

『あれ……なにこのすげえ罪悪感とやるせなさ。勝ったのに全然嬉しくないんだけど、やっぱお尻の穴を狙うなんてやっちゃいけないことだったのか?』

『うん、そうだよ。本当ならお尻の穴なんて攻撃したらいけないかったんだ。でも、キミはまだ弱かったから、お尻の穴を狙うしかなかった……。キミの弱さがお尻の穴を引き裂

くという悲劇を招いてしまったんだよ!」

『やっぱお前、お尻の穴って言いたいだけだろ!? 見た目は子供で中身はビッチとか、めっちゃ興奮するじゃねーかつ!!』

《ヤバツ!? 調子に乗って眠れる変態を覚醒させちゃったあーっ!?》

永遠にお子様なノルンは経験する機会が無いエツチなネタに興味津々なのだが、そのせいでカズマのロリコンレベルが一段階上がってしまった。残念ながら、かなり高位の女神である彼女もまたアクアと同様に駄女神成分を持っていた。

それでも、彼女のおかげでホワイトウルフに完勝することが出来たのは間違いない。

《まあなんだ! カズマのロリコンが重傷化しちゃったのはともかく、身体の方に怪我が無くて良かったね!》

『怪我の代わりに毛が犠牲になったけどな……』

そう言えば髪の毛という代償があったものの、それを差し引いても彼女には感謝しなければならぬだろう。なぜなら、桂が企てていた特訓をともに受けていたらもつと悲惨な目に遭っていたからだ。勝てるかどうか分からない敵と無理矢理戦わせて限界ギリギリの実戦経験を積みませようと考えていたのだから傍迷惑な話である。

しかし、彼の計画は良い意味で台無しとなった。キャッチボールをしながらカズマの戦いつぶりを観察していた桂は、予想を超えた戦果に舌を巻く。

『これはまた予想外な結末になったものだな』

当初の予定では、カズマがホワイトウルフを倒すまでに1000回ほど蹴り飛ばすことになるだろうと考えていたのだが、それが1回で済んでしまったのだから驚くのも当然だ。

『よもや、これほどの逸材だったとはな……。見えない妖精さんと会話してるような独り言がやたらとキモいし、正直言つて『頭おかしいんじゃないかね?』と思わずにはいられないが、攘夷志士としての素養は申し分ないようだ。少なくとも、常人離れた度胸と勝機を手繰り寄せる機転の良さは十分評価に値する。もしかすると、これはかなりの拾い物かもしれないな。独り言はキモいけど』

こう見えても人を見る目がある桂は、この戦いだけでカズマのセンスを見抜いてみせた。アイツの得意な戦い方は、多彩な戦術で相手の裏をかくテクニカルタイプである。今回の戦いも冷静に弱点を見抜いて迷うことなくお尻の穴を狙ったのだろう。都合のいい解釈をした桂は勝手に納得してうんうんと頷く。

まあ、そう思われている当人はと言うと、刀についた血やう〇こを拭いながら、ここに至るまでの選択をひたすら後悔していたのだが……。

『よくやったぞカズマ君。どうやら君には冒険者としての才能があるようだなエンガチヨ』

へふつ、合格だぜ新入り。これでお前も一人前の冒険者だなエンガチヨ

『おいしい!? 誉めてるフリをしながら不自然な語尾でデイスらないでほしいんですけど!? まるで汚物を見るような目で見下さないでほしいんですけどおおおおお!?』

大人げない桂達は、いろんな意味で汚い勝ち方をしたカズマに露骨で幼稚な嫌悪感を示す。戦果はちゃんと認めてもばつちい物はエンガチヨである。

『こんちくしよー! 散々酷い目に遭った俺が何でエンガチヨされなきやならねーんだよ!? 幸運が高いって設定はいつたどこにいつたんだあーっ!?』

あんまりな展開にやさぐれたカズマは大げさに嘆く。しかし、彼の高い幸運はしっかりと仕事をしていた。

『はっはっはっ! 確かに、妖精さんが見えてしまうほど怖い目に遭ったり、刀にう〇こが付いてエンガチヨされるハメになったかもしれないが、そう悪い話ばかりでもないぞ!』

『元凶のお前が言うんじゃねーよ! これまでに起こった惨事のどこに良い話があるってんだよ!』

『まあそう焦るな。とりあえず気を鎮めて冒険者カードをしてみるがいい』

『ああん!? 冒険者カードを見てみるだああ!? んなこと言ってごまかそうったってそ

うは行くかうお、めっちゃレベル上がってるうううううっ!!』

気になってチラ見してみたらレベルが一気に10も上がっていた。最弱職の冒険者はレベルが上がりやすいという理由もあるが、ホワイトウルフを倒して得た経験値もかなり多かつたのだ。

『驚いたかカズマ君。紅魔族からパクった【養殖】による育成は実に効率的で素晴らしいだろう。しかも、君が得た物はそれだけではないぞ。見事に討伐目標を倒したカズマ君に今回の報酬をすべてプレゼントしてあげよう!』

『えっマジで!? 20万エリスを全部くれんの!?』

思いもかけないオイシイ話に我が耳を疑う。ホワイトウルフは中級クラスのモンスターなので一匹でもかなりの高額報酬なのだが、それをすべてくれるとは太っ腹な話である。

『なにこの気持ち悪いほどにラッキーな展開。まさかコレ、さらなる災難の前振りじゃねーだろうな?』

これまでの経緯を考えると警戒せざるを得ない。でも、20万エリスは貰っておこう!

『そんじゃ、遠慮なくいただきますっ!』

『うむ。大金を手に入れたからといってあまりハメを外さんようにな。それと、半分く

らしいは貯金して将来のために残しておきなさい！ あんたはいつもゲームやマンガばかり買つて、すぐにお小遣いを使い切つちやうんだから！ 少しは我慢するつてことを覚えなないと、父さんみたいにだらしのないダメな大人になつちやうわよ、まつたくもう！』

『お前は俺の母親かつ！』

保護者つぽく注意していたら桂がオカン化してしまった。気を使つてくれるのはありがたいが、正直言つてキモいしムカつく。

『つたく、何であそこでオカンになんだよ！ セリフが妙にリアルで引くわ！』

《カズマ……カツラを見て日本にいるお母さんのことを思い出しちやつたんだね》

『（ナニ言つてんだチビツ子ビツチ!? アレ見てホームシックになつたとか、勘違いにもほどがあんぞ!!）』

なんかノルンまで変な気を使つて来た。こいつら全員良い奴等なのかもしれないけど、付き合わされるこっちはすんごい疲れる……。

『はあ……早く帰つて休みたい』

『確かに、俺達も久しぶりにキャッチボールを満喫したから、ほどよく疲れたなあ』

《まつたく、イイ汗かけたぜ》

『つて、お前らの遊びと俺の死闘を一緒にすんじゃねーよ!!』

あまりに空気を読まないバカ共にツツコミを入れる。今なら、こいつらをバカにしま



くっている銀時の気持ちがよく分かる。だって本当にバカなんでもん。そんな奴らとこれ以上一緒にいたら更なるアクシデントに巻き込まれるかもしれない。そう思ったカズマはさっさと帰ることに決めた。

しかし、彼が危惧していたアクシデントはもう既に起きていた。

《ねえカズマ。ちよつといいかな?》

『(なんだノルン。俺は一刻も早く帰りたいんだ。お兄ちゃんと一緒に遊びたいのどワガママ言うのは後にしてくれ)』

《そんなこと思っていないし、後にするのも無理だよ。だって、キミの後ろからとんでもないのが近づいてるから》

『(えつ、なにそれ。俺の気を引くためにお茶目なドツキリかまそうとしてんの? まつたくノルンはお兄ちゃんが大好きな困ったちゃんだなーって、クマ出たあああああああああああつ!!』

イヤな予感があったので楽しいことを妄想しながら後ろを見たら過酷な現実が待ちかまえていた。何と、目覚めたばかりで腹ペコな巨大熊がカズマ達を狙ってこちらに接近してきていたのだ。

『あつそーいやあ、この辺は一撃熊の住処になってるから気をつけてくださいねって胸のでかい受付嬢が言ってたなあー!』

『ちよつとおおおおお!!』 そーいう命に関わることをうっかり忘れてたで済ませんじやねえええええ!! お前のせいで一日に二回も死にかけそうになってんじやねーかああああああ!!』

ム力つくほどいい加減な桂に文句を言いつつ、猛スピードで迫りくる巨大熊から逃げる。とはいえ、殺る気満々な巨大熊から逃げ切ることは不可能なので、このピンチを作り出した元凶共を盾にする。

『かかか桂さん! こうなつたのはあんたのせいなんだから、何とかしてくださいよーっ!!』

『ふつ、案ずるなカズマ君。こんなこともあるうかと熊対策は仕込んできてある』  
やたらと自信満々な桂は凛々しい笑顔で応える。

『以前、熊と遭遇した時は死んだフリすればいいという都市伝説に騙されてマジで死にかけたが、今度こそは問題ないぞ。なにせ、あの後すぐにググって正しい方法を調べたからな』

『アレ、なんかもうこの時点で失敗フラグが立ちまくってるんですけど、その方法ってなんですか?』

『それはな……歌を歌うことで熊と仲良くなるという平和かつデカルチャーな対抗策だっ!』

『なんだそのマク○ス的なガセネタはーっ!? 確かに歌は有効だけど熊は文化に目覚めねーぞ?!』

そもそも向こうは襲う気満々なので歌を歌っても無意味である。この世界の熊は臆病な野生動物ではなく凶暴なモンスターなのだ。

しかし、迷惑なまでに前向きな桂は無謀な挑戦を始めた。

『何事もやってみなければ分からない! ゆえに俺は歌を歌うぞ! 魂込めた熱いソングで熊のハートを掴んでみせるっ!』

へへっ、オレもつき合うぜ桂さん!〜

『やってくれるかエリザベス! だが、本当にいいのか? 声を出さないというキャラ付けのお前は、銀魂本編でさえ歌を歌おうとしなかったではないか』

へそれなら心配無用だぜ。このSSなら字だけでオツケーだからな!〜

『ふっ、そうであつたな……。ならば俺に着いて来い!』

『ああもうダメだ! このバカ共は制御できねえーっ!』

呆れるカズマを余所に盛り上がったバカヤロー達は巨大熊を迎え撃つ。

『さあ行くぜ! アニメで大好評を博したカツラップの第二弾だYO!』

桂達は持参していた帽子を被ると、ラップっぽいポーズをとってオリジナルのラップを歌いだした。

『異世界来たってキメるぜ攘夷♪ ZURRAが来たならキまるぜJOY♪』

〈攘夷でENJOY♪ M字でJOYTOY♪〉

『ジョジョ立ちかましてじよじよにTENCHU♪』

なんともふざけた歌詞である。実際、後ろで聞いていたカズマ達は、何かに耐えるような表情を浮かべながら固まっている。

言葉が通じる女神や人間でさえそうなのだから当然熊に効くわけもなく、気持ちよく歌っていた桂達は突進してきた巨大熊の剛腕でぶつ飛ばされてしまう。

『あふんっ!?!』

へうぼあー!?!>

『バカラツパーが揃ってやられたあああああああ!?!』

一応頼りにしていた先輩冒険者の敗北にカズマは焦る。相棒のノルンは大笑いしているが、なにげにピンチである。

《アハハハハハハッ! やっぱカツラは、ちょーおもしろいねー! どの時間を見てもバカなことしかしてないもん!》

『つて、笑ってる場合じゃねーだろ!?! リアルくまオンがこっち見てるよ!?! 可愛さの欠片も無い目でロックオンしてるよおおお!?!』

桂達を倒した巨大熊は一人残ったカズマを狙う。全員を殺った後にゆっくりと食事

を取る気なのだろう。

『い、いやだーっ!! 美少女とあんなことする前に死にたくなああああああいつ!!』  
間近に迫る死に恐怖したカズマは鼻水垂らして泣き叫ぶが、もちろん彼が想像したような鬱展開になどなるわけがない。いつの間にか復活していた桂が巨大熊を返り討ちにしてしまったのである。

『俺の歌を聞けええええええええええ!!!!』

どこかで聞いたようなセリフを叫んだ桂は、怒りの形相を浮かべながらすさまじい威力のワンパンを放ち、たったの一発で巨大熊を倒してしまった。つい先ほどまで仲良くなるとかほざいていたのに、最後は結局暴力を用いて強引に終わらせた。なんと言うかもう無茶苦茶である。

『とまあ、歌が通用しなかった場合はパンチでぶっ飛ばしてしまいましょね!』

『んなもん出来るかあああああああああつ!!』

怒りゲージがマックスに達したカズマは、無理矢理ごまかそうとする桂に全力でツツコミを入れた。

こんな感じで、カズマが経験した初めてのクエストは波乱に満ち溢れた内容だった。ちよつと前までパンピーだった彼にとっては少々ハード過ぎたのだ……。

トラウマになりかねない回想から戻ってきたカズマは、長谷川を相手に愚痴り続ける。

「なあ長谷川さん。攘夷志士ってみんなこうなの？ この世界もおかしいけど、こいつらもつとおかしいよ！」

「まあ、革命家ってのは現在の常識を変えてやろうって考えてる奴等だから、おかしく見えるのは仕方ないかもなあー」

「そう、長谷川さんの言う通りだ。たとえ人々に非常識と蔑まされようとも、更なる高みを目指すためには古い常識などに捕らわれていてはいけないのだ」

「お前らは非常識どころか異常過ぎなんだよバーローー！」

長谷川の意見に便乗した桂はもつともらしいことを言うが、残念ながらカズマの方が正しかった。

「でも、苦勞した見返りに小金持ちになれたじゃねーか。カエルに食われたつてのに3万しか稼げなかった俺から見たら羨ましいかぎりだぜ」

「その報酬の半分は、あんたらの夕食代として消えたけどなっ！」

哀れなことに、苦勞して手に入れた報酬はマダオと駄女神によつて既に半分喪失していた。

「クツソー！ いい年こいたオツサンと駄女神が高校生にたかんじゃねーよ！ 普通は

そっちが大人の甲斐性を見せるところだってに、何で一番年下の俺が金を出さなきゃならぬーんだよ!」

《そりゃあキミが、魔道具店を営んでる巨乳美女を紹介してやるなんて甘言に乗せられたからじゃん》

どうやら、カズマの方にも問題があったようだ。それでも、ついでにゲットした巨大熊の討伐報酬と合わせて30万以上稼げたのだから、出だしの成果としては上々である。

《後は手に入れたスキルポイントを使ってスキルを覚えなきゃね》

「(おつ、そういえばそんなのもあったな……)」

ノルンに言われてスキルの存在を思い出す。これを上手く利用できれば昨日のような苦勞をしなくても済むかもしれない。

「(フツフツフツ! どうやら、ゲームで鍛えたキャラメイク術を活かす時が来たようだなあ! 長期にわたる引きこもり生活によって身についた無駄知識が火をふくぜえーっ!)」

《悲しいまでに納得できる自虐ネタになってますけど!》

スキルに対して急激に興味を湧いたカズマは、ノルンを呆れさせるほどにテンションを上げた。



カズマが昨日のクエストを回想していた同時刻、彼らと同じようにギルドへ向かう者達がいた。ドMクルセイダーのダクネスとその友人であるクリスだ。

遠出の仕事から帰ってきたクリスは久しぶりにダクネスと朝食を取ることにしたのだが、そこで驚くべき報告を受けることになった。

「ええーっ!? あの銀髪剣士の仲間になったのお!?」

「ああそうだ。苦痛と恥辱に満ちた試練をこの身に受けて、私は彼だけのメス豚となれたのだ!」

「それ仲間と違うんだけど!? 人扱いすらされてないけど!? いったいナニをその身に受けたの!? どんな経験しちゃったのおおおおお!?」

とんでもない告白に仰天してクリスがパニックる。しばらく会わない内に友人がメス豚になっていたのだから当然である。

「つていうか、どうしてそんな話になっちゃってるのさ!? 確かキミは、冷静になるまであの人とは会わないってあたしに約束してくれたよね!」

クリスの言う通り、2週間前にそのようなやり取りがあった。ギルドで夕食を取って



いた時、初めて銀時と出会ったダクネスは偶然視線が合っただけで彼のドS属性に惚れ込んでしまい、興奮した勢いに乗ってご主人様になってほしいと申し出ようとした。しかし、ドMの欲望剥き出しの状態ではダクネスが犯罪者として逮捕されかねないので、友達思いのクリスが必死に説得したのである。とりあえず、人に迷惑かけちゃダメでしよ、と……。

それがどうしてこうなった!?

「確かに私はお前との約束を破ってしまった。そのことは本当に済まないと思っっている。だが、あのゴミを見るように蔑んだ視線がどうしても忘れられなくてな。つい出来心で尾行してしまった所を見つかってしまったんだ」

「もうそれ立派なストーリーカー行為なんだけど!?! なんでそこから仲間になれたの!?!」

「それはすべてが必然だったからだ。尾行が見つかって夜、酔っぱらっていた我が主とその仲間達に嘔吐物をぶっかけられた私は確信した。我らはきつと幸運の女神エリス様に導かれて出会った最高のパートナーであるとな!」

「いやいやいやいや!?! エリス様はそんな出会いを導かないから!?! 嘔吐物をかける酔っぱらいを運命の人にするわけないから!?!」

聞けば聞くほどおかしくなってくるダクネスの話に連続でツッコミを入れる。女神エリスは変態同士の出会いをプロデュースしたりはしません!

「つて、それはともかく、どうしよう!? ダクネスは喜んでるけど、これは絶対、不健全な関係だよな!?」

本人が悦んでいるとはいえ、18才の少女をメス豚扱いしているのだからどう考えても健全ではない。心優しいクリスは、DS男のせいでDMに磨きがかかってしまったダクネスの未来を心配する。元々手遅れだった気もするけど、変な男が絡んでいるなら友人として放っておけない。

「(こうなったら、あの人のことをちゃんと調べなきゃね……)」

クリスは、死んだ魚のような目をした銀髪の剣士を思い浮かべて決心する。果たしてあの「サムライ」は、友人の仲間としてふさわしい人物なのか。

「(あのシゲシゲさんが信頼してるみたいだし、冒険者としての活躍はあだし自身も期待してるんだけど……)」

人間性については不安を感じると言わざるを得ない。だって、明らかにDSなもの。幸せそうなダクネスを見ると思っているほど悪い人ではないのかもしれないが、ここはやはり直に会って確かめなければ。

「まあ、仲間になっちゃったのなら仕方ないけど、やっぱりダクネスが心配だから、そのギントキって人が危険じゃないか確認しておきたいね」

「それならすぐに紹介しよう。皆も朝食を取るためにギルドへやって来るからな」

話を理解したクリスがとりあえず譲歩すると、ダクネスは嬉しそうに微笑んだ。

「はあく、そんなにニコニコしちゃつてもう……。あたしはまだ納得したわけじゃないんだからね？」

「ああ、それでいい。汚れた女騎士である私には友の非難がお似合いなのだ。いけないことだと知りながらも我が主の攻めから決して逃れることができない、哀れで卑しいメス豚にはなっ！」

「いやいや、そこまで思っていないんだけど!? キミの奇妙な妄想にあたしを勝手に巻き込まないでよね!」

なんだか心配している自分がバカらしくなってきた。どう反論してもダクネスの言動はおかしくなっていくばかりでまったく話にならないのだから当然だ。

「(そうだった……。この子は酷い目に遭うことに悦びを感じてるんだったわ……)」

つまり、銀時が酷い男だったとしてもダクネスにとっては望むところであり、クリスが反対しても逆効果にしかならないわけだ。DMとは、まったくもって理解不能な生き物である。

「でもまあ、ダクネスが幸せならあたしはそれでいいんだけどねっ！」

「うん、ありがとうクリス」

ちよつとだけ拗ねたクリスの強がった物言いに苦笑するダクネス。なんだかんだと

言いながらも仲良しな二人であった。

それから数分後。奇妙な女子トークで盛り上がりながら歩みを進めたダクネス達は、わき道から右折してギルド前の通りに出た。その時、偶然後方を歩いてきた長谷川がダクネスに気づいて声をかけた。

「おーい、ダクネスちゃん！」

「ん？ 誰だ？」

突然名を呼ばれたダクネスが後ろを振り向くと、そこには顔見知りのマダオ達があった。

「ああ、ハセガワとカズマか。それにあの白いモンスターは我が主と一緒にいた……」

ロン毛男の隣にいる奇妙な生物を見たダクネスは、すぐに2週間前の出来事を思い出して、何故かぶるりと身震いする。

「はあ、はあ……あの虫ケラを見るような目を見ればよく分かるぞ……。アイツも私を痛ぶつてくれるドSだということがな！」

欲望に忠実なDM騎士は、白いモンスターことエリザベスに興味を惹かれて卑猥な妄想を膨らませる。

一方、ロン毛男こと桂小太郎は、初対面のダクネスを見て何故か驚いた表情を浮かべ

ていた。

「ま、まさかつ!? このパツ金ネーチャンが、あの有名なアグ〇ス・チャンだといふのか!? イメチェンし過ぎて、ジャ〇キー・チェンですら判別不能な別人になつてゐるではないかつ!」

「いや、真正銘別人だつてば!? ア〇ネス・チャンとダクネスちゃんを聞き間違えてるだけだからね!」

何かと思えば、くだらない名前ネタをかましましただけだった。コイツ絶対、アグ〇ス・チャンとかジャ〇キー・チェンつて言いたかつただけだろ……。呆れた長谷川は内心でそう思ったが、このやり取りで二人に面識が無いことに気づいた。

「そう言えば、ヅラつちとダクネスちゃんは初対面だったな」

「ああ、確かにそうだが、実は丁度こちらにも紹介したい友人がいるんだ」

「ならば、この機会に挨拶しておこう」

話の流れで互いに自己紹介することになり、年長の桂から名乗りを始める。

「初めましてお嬢さん。俺の名は桂小太郎。勇者王を生業としてゐる【んまい棒】愛好家だ。そしてこつちは、魔物使いを生業としてゐる相棒のエリザベスだ」

〈そこんとこ夜露死苦!〉

桂の自己紹介はツツコミ所だらけだった。実際、クリスは頭の中で疑問符をたくさん

浮かべる。

「(えっ、ちよっ、待って!? 勇者王とか言ってたけど、そんな職業あったっけ!? 魔物みたいな相棒まで魔物使いとか言ってるし、なんかもう色々目茶苦茶だよ、この人達!?)」

ようやくこの世界に発生しているバグに気づいたクリスは、理解が追いつかずパニックになってしまう。そして、彼女のとなりにいるダクネスも桂達の名を知って何故か驚愕する。

「なっ、カツラ・コタロウとエリザベスだ?! あなた方はもしや、凶悪なエンシエントドラゴンを倒した報酬を使って作り出した「んまい棒」を大ヒットさせ一躍有名になった最強の菓子職人・カツラとエリザベスなのか!」

「いかにも! 俺こそが、んまい棒の開発者である桂小太郎その人だ!」

「魔王討伐そっちのりで、んまい棒作ってたのおおおおおお!」

なんとこの勇者王は、冒険者としてよりも国民的駄菓子の開発者として有名になっていた。こんな奴に倒されて、その報酬をんまい棒の製造に使われたエンシエントドラゴンが哀れである。

「おいしいおいしい!! 何で勇者王が駄菓子屋に転職してんだ!! 何故にお前はんまい棒を作ろうと思ったんだああああああ!!」

「いや、どうしても大好物のんまい棒コーンポタージュ味が食いたくなくなってな。手に入る材料で再現してみたところ、思いのほか上手く出来たので『じゃあ、いっちょ駄菓子屋でもやってみつか』と王都で売り出してみたのだ。そしたらなんと、これが見事に大ブレイク！ んまい棒はこの国の新たな名物になりましたとさ！」

「とさ、じゃねーよバカヤロー！ クツパ城だけでなく、そんなもんまで作りやがって！ 現代知識の使い方が根本的に間違ってるよ！」

長谷川のツツコミ通り、んまい棒をヒットさせても魔王をヒットする（殺す）ことは出来ない。しかも、儲けた金を使って強化し続けているクツパ城は辺境の街にあるので、それもまた効果があるとは言い難い。確かにアクセルは冒険者の数を安定させるために必要な重要拠点であり、魔王軍の攻撃に備えることは強ちの外れとも言い切れないのだが、どう見てもアレは桂の趣味以外の何者でもなかった。

それでも、転生前の知識を活かして商売を成功させている点は着目すべきところである。それは最近になってカズマも考え始めていたアイデアだった。

「まさか、異世界でんまい棒まで再現するとは、バカの行動力は侮れないぜ……」

んまい棒を作るといふ選択はアレだが、それを実現させてしまう桂の行動力には感心する。転生前の世界にあった物を再現して売り出せばポロ儲けできることを彼は実証してみせたのだ。茂茂も日本刀のレプリカなどで実績を上げているし、この異世界に無

いチート知識を上手く使えば億万長者になることだって十分に可能だろう。

「(そうすりゃあ、働かなくてもものんびり暮らせる夢のような自堕落ライフをマジで実現できちゃうな!)」

欲にまみれたカズマの思考も、マリオとんまい棒に熱中している桂と大して変わらなかった。

「おーいカズマ君! エロい妄想に耽つてる最中に悪いけど、自己紹介を済ませてくれよ」

「なっ、ちっげーよ?! エロい妄想なんてしてねーよ! いやらしい金の妄想はしていいんだけど!」

ニート好きな未来を想像してほくそ笑んでいると、変な勘違いをした長谷川が声をかけてきた。下品な笑みを浮かべながらポーっとしている間に順番が回ってきたらしく、ダクネスのとなりにいるボーイツシユな美少女がカズマのことを見つめている。

「(うむ。あからさまに変態を見るような視線が妙に気になるが、俺はキミが気に入ったぞ。オツパイは慎ましいけど、健康的な色気が眩しい俺好みの美少女だ。オツパイは慎ましいけど)」

初対面のクリスをナチュラルにいやらしい目線で分析する。子供の頃からクズマヤカスマと呼ばれてきた彼にとってエロはもはや息をするほどに自然なものであった。



一方、そんな目で見られていることなど知る由もないクリスだったが、彼女もまたカズマのことを凝視していた。もちろんエロ目的ではなく、彼の肩に座っている異様な存在に視線を奪われていたのだ。

「(な、なにあれ……。すっごい見覚えのある小さな女の子が彼の肩に座ってるんだけど、あれって人形なのかなあ？ でも、時々動いてるし、生きてるような気もしなくもない……。っていうか、何でみんなはつつこまないの!? アレに疑問を持たないのおおおおおお!)」

クリスは、カズマの肩に座っている小さな少女の存在に混乱する。みんなが何も言わないのは、お人形趣味のある彼を氣遣つてのことだろうか。その辺りの真相はよく分からないけど……。アレの正体については心当たりがある。

「(もしかしてアレは、彼が所有してる【神器】かもしれない)」

とある理由で転生者の存在を知っているクリスがそう連想したその時、彼女の頭に正体不明の念話を送られてきた。

《おつと残念! 神器の本体はボクじゃなくて彼がかけてるメガネだよ〜ん!》

「……………え?」

聞き覚えのある幼い声がクリスの脳裏にこだまする。その念話の出所を探ると、カズマの肩に座っている小さな少女だと分かる。

「ま、まさか……あの方とあまりにソックリだから、何か関係あるのかなーとは思ってたけど……」

衝撃的な事実に気づいたクリスは冷や汗を流し、それを見た小さな少女はニヤリと笑みを浮かべる。

ああ、間違いない。この小さな少女はあの方の「分霊」だ。天界の上層部で働いているあの方が新米女神の担当する世界に来ることは無いと思っていたから、彼女の出世を妬んでいたアクアが悪意を込めて作った呪いの人形的な神器かと決めつけていたけど……この子はマジで本神（ほんにん）だっ!?

《やあ、久しぶりだねエリスちゃん!》

「(ノノノノノ、ノルン先輩いいいいいいいい!?)」

小さな少女ことノルンによって正体を見破られたクリスは心の中で絶叫する。なんと彼女は、幸運を司る女神エリスだったのだ。

# 第14訓 女神みたいな女だつて裏では結構ヤンチャしてる

カズマ達と出会ったクリスは運命を司る女神ノルンの分霊と予期せぬ遭遇をしてしまい、あつさりとは正体を見破られてしまった。なんと彼女は、幸運を司る女神エリスだったのだ。

《へえ、エリスちゃんショートヘアにしたんだ。胸元はスレンダーだし全体的にシヨタっぽいから、ジャニ〇ズ顔負けの美少年に見えるねっ☆》

「あの、誉めてるフリして貶してますよね!? 私の女子力、全否定してますよね!? そりや確かに私の胸は小さいですけど、ノルン先輩よりは大きいですし、こんな胸でもお嫁さんにしたいたい女神ナンバー2になれるんですよっ!」

ノルンのウィットなジョークにイラツときたクリスは自虐的に反論した。優秀な先輩であり「特別なつながり」もある彼女のことは心の底からリスペクトしているのだが、お互いに気にしているバストサイズのことでは会う度に衝突してしまう面倒な間柄でもある。

ちなみに、クリスのショートヘアは神の力を使って変装した姿であり、ロングヘア

だった彼女が髪を切つてイメチェンしたわけではない。永遠の存在である女神には散髪もヅラも必要ないのだ。

ただし、持って生まれた貧乳も永遠なので、胸の大きさを気にしている彼女はパッドを使つたりしているのだが……。

「つて、今は髪とか胸の話をしてる場合じゃないでしょ！」

とにかくここはノルンと話し合う必要があるだろう。ダクネスと友達になりたくて人間のフリをしているクリスは自分の正体がバレてしまうことを危惧しているのだ。もちろんノルンがそんなことをするとは思っていないが、中には崇められたくて自分から女神であることをアピールしまくる輩もいるので、一応確認しておかなければ安心できない。

「まあ、そんなことをするのはアクア先輩ぐらいだと思っけど……」

色々と思案している間にさりげなくアクアをデイスる。あの駄女神には散々迷惑をかけられているので、クリスがそう思ってしまうのも仕方がない。何はともあれ、ここにいるのが彼女じゃなくて本当に良かった……。

「つて、安堵してる場合じゃないでしょ!? とりあえず、ノルン先輩にこつちの事情を説明しなきゃ！」

《だつたら、別の場所に移動して二人きりで話をしようか》

「(え? 二人きり?)」

《だって念話じゃ落ち着かないし、久しぶりの再会だもん。せつかくだから、お邪魔虫のいないところで秘密の女神トークと洒落込んじやおう!》

「(は、はあ……【お姉様】は相変わらずマイペースですね)」

脳天気なノルンの言葉を受けて心が落ち着いたクリスは思わずプライベートな呼び方をしてしまう。彼女達はそれだけ特別な関係であり、二人きりになりたいと言われたら喜んで受けるしかない。

なので早速カズマから神器を借りるべく行動に移る。出会ったばかりで不自然に思われるかもしれないが、依り代となっているオサレメガネを持っていかないとノルンは移動できないのだ。

「えっと、キミ! 確か名前はシンパチだっけ?」

「誰だよソイツは!!」 なんとなくシンパシーを感じるけれども、俺の名前はカズマだよ!!」

かつこよく名乗ろうとしていたところで出鼻をくじかれたカズマは憤慨するが、今は彼に気を使っている場合ではない。

「ああゴメン、カズマだね? あたしはクリス、よろしくね! で、突然なんだけど、キミのメガネを貸してくんない? 後でちゃんと返すから!」

ちよつぱり焦り気味なクリスは、かなり話をすつ飛ばしてきた。そんな慌てん坊の後輩を見てヤレヤレと肩をすくめつつ先輩のノルンが助け船を出す。

《ねえカズマ。彼女にメガネを貸してあげなよ。ちよつとお洒落して歩きたいだけみたいだからさ》

「いやでも、そりゃあ危険だろ？ ダクネスの友人で俺好みの美少女とはいえ、初対面のヤツに大事なお前を貸すなんて……」

「ねっ、お願い！ このお礼は後でちゃんとしてあげるからっ！」

「オツケー分かった！ もってけ泥棒！」

《ボクとの絆が目の欲望にあっさり負けたーっ!?》

美少女に顔を近づけられて可愛らしくお願いされたら童貞少年に抗う術は無い。ノルンにとつては面白くない結果になったが、とりあえず当初の目的は達成できた。

何故かいやらしい笑みを浮かべるカズマに引きつつメガネを受け取ったクリスは、適当なことを言つてその場を離れる。

「それじゃ、あたしはこのメガネをかけて街をブラついてくるから！ カズマはダクネスと一緒にギルドで待つてて！」

「お、おう、分かった……」

有無を言わせぬ勢いに気圧されたカズマが弱々しく返事をする、クリスはいずこか

へと駆けだしていった。

期せずして放置される形となったダクネスはちよつぱり悦びつつも、初めて見る友人の奇行に首を傾げる。

「急にどうしたんだあいつは？　メガネをかけたいただけならこの場でもいいだろうに……」

「きつと俺達に見られるのが恥ずかしかつたのだろう。『メガネは顔の恥部』とも言っし、彼女にとってはパンツを見られるように感じたのかもしれんな」

「それを言うなら『メガネは顔の一部』だろーが!?　何でメガネがパンツみたいな扱いなんだよ!?　俺たちや全員パンツを被った変態仮面かつ!？」

世界中のメガネユーザーにケンカを売るようなことを言う桂にグラサンユーザーの長谷川がつっこむ。メガネを愛用なさっておられる皆様、ほんとどうもすみません。

こんな感じで真相を知らないバカ達が間違いだらけの解釈をする中、それに感化されたダクネスもいかがわしい妄想に耽る。

「な、なるほど！　メガネを下着に例えるとは、なかなか斬新なアイデアだな！　常にパンツを晒しているようなものだと思像したら、とっても興奮するではないか！」

「斬新すぎて悪質な変質者になってんじゃねーかつ!？」

どんなネタでもドMにつなげてくるダクネスに心底呆れたカズマがつっこむ。変態

の会話につき合うのはマジ大変だぜ……。

「しかし、パンツは俺も好きだ。クリスのお礼とやらにパンツを頼むのもアリかもしれないな！」

自分では気づいていないが、彼もまた変態の一人だった。



ノルングラスを貸してもらったクリスは、カズマ達の元から離れて人気の無い路地裏へとやって来た。

「ここなら大丈夫ですよ、お姉様」

《オツケー、エリスちゃん。早速「リアルバージョン」になるからメガネを外して》

「はい分かりました」

頼まれたクリスは、かけていたメガネを外して手の上に置いた。するとそれが空中に浮かんで彼女の手前にフワリと進み、まばゆい光を放ちながら子供の形に姿を変えた。その眠そうな目をしたツインテールの美少女は、元の姿のまま実体化したノルンである。彼女は霊体だが、神器を核にすることでバニルと同じようにその辺の土くれなどから疑似的な肉体を作り出すことが出来るのだ。



「ふう、エリスちゃんのおかげでようやく実体化できたよ。ボクみたいな完璧美少女を連れていたら、いかにも不審人物なカズマがタイーホされちゃうからね」

「はいそうですね……。こんなに可愛いらしいお姉様を見たら、誰だってお持ち帰りしたくなっちゃいますもの……」

そう言うときクリスは膝立ちになり、愛しむようにノルンの体を抱きしめた。

「うふふ……。お姉様の抱き心地はいつも最高ですねえ」

「ああもう、やっぱこーなるのかーっ！」

路地裏にノルンの叫びがこだまする。小さい先輩が大好きなエリスは彼女と会う度にスキんシップを求めてくるのだ。妙に熱を帯びた視線がそこはかとなく妖しいが、もちろんヨコシマな心があるわけではない。

実を言うと彼女達には血縁よりも強いつながりがある。それは二柱が共通して【運】にまつわる属性を司っているからだ。運命と幸運は切っても切れない関係にあり、お互いが必要不可欠な概念であるため、それがノルンとエリスの関係にも反映されているのである。

「えへへ、いつまでもこうしていたいです」

「ちよっコラやめろっ!? 貧乳を押しつけられると何だか切なくなってくるからっ!! 五十歩百歩のこっちまでやるせなくなっちゃうからああああああっ!!」

ノルンの抵抗も空しく、興奮状態になったクリスのなすがままにされる。困ったことに彼女の親愛表現はちよっぴり百合っぽかった。だが、アクアとは違って常識を持ち合わせているので、これ以上アブノーマルな展開にはならないだろう。たぶん……。

ちなみに、アクアとノルンは同世代なのだが、頭の良いノルンが飛び級して出世したので、心の狭い駄女神はせこい嫉妬を抱いている。そんな背景があるため、もし彼女と再会したらさらに面倒な騒動が起こるだろうが、今はおバカな同級生など気にせず可愛い後輩と話し合う時だ。

「うふふふ、お姉様〜♪」

「つて、何かトリップしちゃってるし、話し合える状況じゃないんですけど!？」

執拗にほっぺすりすりしてくるクリスに呆れながらツツコミを入れる。

「もう、ボクを抱っこしたままでもいいから話を進めるよ?。」

「はい、分かりました〜!。」

小学生と接するように頭を撫でてくるクリスにイラツとするが、ここはお姉ちゃんらしくグツと堪えて本題に入る。

まずはこの地の担当者であるエリスの事情から説明してもらうことにする。過去を見通せば聞かなくても分かるが、お喋り好きなノルンはスキルを使わず直接たずねる。「どうしてエリスちゃんはおへソ丸出しのえっちい格好で地上に出歩いているんだい？」

まさか、ノーパンアクアに影響されて羞恥心を捨てちゃったのかな？」

「あの方と一緒にしないでくださいっ!? この格好はちゃんとした盗賊装備だし、パンツだつてはいてますから!!」

とんでもない誤解を受けては堪らないと必死に否定する。いくらアクアが先輩とはいえ、あんなノーパン痴女と同類にはされたくない。

「アクア先輩のようにハレンチな格好をマネしようとするわけないじゃありませんか……。この格好だつて慣れるまではかなり恥ずかしかつたんですよ?」

「それは分かるよ。そこまで軽装だと愛用してる胸パッドが使えないしね!」

これまでのお返しとばかりに貧乳ネタで攻撃するが、お互いにダメージを受けてしまうのでこの話題はここまでにしておく。何故か「運」に関する属性の女神はみんな貧乳なのだ……。そのことを改めて思い出した彼女達は、気まずい空気をごまかすように本題へ戻った。

「そ、それでは説明しますね……。私がクリスとなつて地上で活動している理由は二つあります。一つは、本来の所有者がいなくなった神器を回収するため。そしてもう一つは……熱心に教会へ通い詰めて冒険者仲間が欲しいと私に願っていたダクネスの想いに応えてあげたかつたからです」

「ふむふむなるほど。ダクネスと一緒にいたのはそういう事情があったからかー。ボクはてつきり、アクアに悪影響を受けたキミが露出趣味に目覚めてDMの彼女と意気投合しちゃったのかと思つてたけど……」

「だからそれは誤解ですよ!? 本当ですから信じて下さいっ!!」

少しばかり認識にズレがあつたようで、クリスがすかさず反論する。基本的にノルンは他者のプライバシーを尊重して無闇に過去を見通すことはしないので、今回のように事実を間違えることもある。まあ、清純派だった後輩がグレて露出狂の盗賊になつてしまったなどというぶつ飛んだ勘違いをするのはどうかと思うが……。

「と、とにかく、私の事情は理解していただけたと思いますので、今度はお姉様の事情をお聞かせください! なぜ神器のフリをしてこの地にやつて来たのですか!」

露出狂と思われて取り乱したクリスは、話を変えようと慌ただしくたずねる。

意外に思われるかもしれないが、エリスはこの異世界に持ち込まれた神器の存在をすべて把握しているわけではない。資料をまとめる作業を面倒だと思つたアクアが『私にすべて任せときやいいのよ!』とごまかして何も教えてくれないからだ。そのせいで彼女がばら巻きまくつた神器は管理不能になり、エリスにとっては魔王について厄介な悩みの種となつていた。

「(でも、今回は事情が違うみたい……)」

やたらとプライドが高いあの先輩が、一方的にライバル視しているノルンの関与を許すはずがない。だとすれば、ノルングラスはアクアによつて送られてきたものではないのかもしれない。聡明なクリスはそう考えたが、その予想は見事に当たつていた。もつとも、その真相は聞かなきゃ良かったと思うような内容だったが。

「え〜つとねえ、コツチの事情は話すと長くなるんだけどお……ボクがここにいるのは【カグヤちゃん】に頼まれたからなんだよねえ〜」

「えつ……ま、まさか!? あの悪名高きカグヤ先輩が絡んでいるのですかーっ!」

ノルンからもたらされた情報を聞いてクリスが仰天する。よもや、この異常事態に【娯楽を司る女神カグヤ】が関わつていたとは……。納得すると同時に大きな不安が広がっていく。果たしてノルンは、アクア以上の問題児であるカグヤから何を頼まれたと云うのだろうか。それを説明するには、ノルンが銀時達と関わるきつかけとなつた出来事から語る必要がある……。

事の起こりは銀魂本編が始まる少し前のことだった。

その日ノルンは、早めに仕事を終えて時間を持て余していた。そんな気の緩みが、一人きりの部屋でイケナイ遊びをさせてしまう。

『か〜め〜は〜め〜波アアアアアッ!! 今のはちよつと脇が甘かつたな……』

ご覧の通り、あまりにヒマだった彼女は、つい魔が差して「かめはめ波」の練習をやつてしまった。イケナイ遊びといつてもR—18的なものではなくて黒歴史に属する類のものだった。

まあ、どちらにしても他人に見られたくない姿なのだが、そんな最悪のタイミングで来客が訪れた。

『かゝめゝはゝめゝ……』

『ノンちゃん、そろそろ止めるアル。じゃないと回想が進まないネ』

『……うぎゃあああああああ!!?』

いつの間にか部屋に入っていた知り合いに声をかけられて悲鳴を上げる。この意地が悪い少女こそが娯楽を司る女神カグヤであった。見た目はオレンジ色のロングヘアと青い瞳が特徴的な18才程度の美少女なのだが、エセ中国人風の胡散臭い喋り方で中身が残念なことがうかがい知れる。

『カカカカカ、カグヤちゃん!? 一体いつからそこにいたのお!?』

『ノンちゃんが、かめはめ波をやるかギャリツク砲をやるかで悩んでるところからずっといたアル(ニヤリ)』

『ほぼ全部見られてるううううう!?』

無慈悲なカグヤの答えを聞いてノルンはものすごい羞恥に襲われる。まさか、あの

こつ恥ずかしい行動をすべて見られていたとは！

『あまりに面白かったからこそつそり動画も撮っておいたネ。これをエリスちゃんに見せれば高値で買ってくれるから、まさに一石二鳥アル』

『こんのド腐れ女神がああああああつ（涙）!?!』

さらに黒歴史を拡散しようと企てる情け容赦の無いカグヤに涙目でツツコミを入れる。この女、まさに外道である。

『うわーん!! どうせボクは見た目も心もお子様なんだ!! コ〇ンみたいに頭脳は大人な小学生にはなれないんだあーっ!!』

『そもそも年齢的に無理アルからな。1000才以上の小学生とか、サバを読むにもほどがあるネ』

アクア以上に女を捨てちゃっている感じのカグヤは、女神にとってタブーとされている年齢ネタでツツコミを入れた。いくら女神が永遠に老いることのない存在だとしても実年齢は残酷なまでに加算されていくのだ。その事実を認めたくないアクアなどは『天界と地上では時間の流れが違うのよ!』と中二病のような言い訳をしているが、彼女が銀時達より遙かに年上だという事実は変えようがない。無論それは永遠のロリっ子であるノルンも同じで、ロリババア扱いされることを大いに嫌がっているのだ。

しかし、数字が増えるだけの話などに興味が無いカグヤは、ヘコんでいるノルンに構

うことなく話題を変えてきた。

『そんなことより、私の話を聞いて欲しいアル。実はノンちゃんにお願いがあつてここに来たネ』

『ボクのハートを完膚無きまでに打ちのめしといて、凶々しいにもほどがあるよね!』

……で、お願いって一体何さ?』

面倒見の良いノルンは、散々酷い目にあわされながらも話を聞いてやることにした。こんなやり取りをしていても二柱の仲は結構いいのだ。

『流石ノンちゃん、話がわかるうー! ノンちゃんの半分は優しさで出来ているネ!』

『ああそうかい!? ボクをバファオン扱いするなら、頭痛のタネとなってるキミをぶつ飛ばすべきだよねえー!』

『ふーやれやれ。ノンちゃんはヤンチャアルなー』

再びからかわれたノルンがついに殴りかかり、それをカグヤが軽くないです。仲がいいからこそ仲良くケンカするのだが、これでは話が進まないのようやくカグヤが本題に入る。しかし、彼女の話は実際のパンチ以上に衝撃が強かった。

『私がお願ひしたいこと。それは……私の【子孫】を助けるためにノンちゃんの力を貸して欲しいネ』

『ふーん、子孫を助けるためにねえ………つて子孫?! 今もしかして子孫つて言った



!？」

『そうアル。子供な孫悟空じゃなくて子孫アル』

カグヤはあつけらんかと答えてくるが、これはかなりのスキヤンダルだ。娯楽を司る女神がアダルトなことをしていただなんて、エロ同人のネタを公式扱いするようなものだからだ。

『えっウソ!? カグヤちゃん子供いたの!? っていうか、子孫までいるなんて、どんだけ昔の話なのお!』

とんでもない話を打ち明けられて取り乱したノルンがつっこみながら聞いたです。

『こんちくしょーっ!! 出産経験があるからこんな巨乳になったというのか!? 子供と旦那に吸わせるためにこれほどポインになったのかあああああああっ!』

『つっこむところはそこアルかっ!』

驚きのあまりテンパってしまったノルンは、思わず目の前にある巨乳に八つ当たりをし始めた。しかし、カグヤの双丘に往復ビンタを食らわせている内にとある疑問が湧いてくる。

『あっそうだ! 子孫がいるってことは旦那さんがいるんだよね! でも、そんな相手は見たことないなあ……』

『そりや当然アル。私が最初に所帯を持った男は人間だったアルからな。まあ、もつと

正確に言うと「宇宙人」だったアルが』

『へっ!? 宇宙人!』

これまたぶっ飛んだ話が出てきた。『奥様は女神だったのです』というだけでもえらいこつちやなのに、まさかダーリンまで只者ではなかったとは……。

『ああ、なにもかもみな懐かしい……。当時の私は、女神としても社会神としてもまだまだ若かったアルよ』

遠くを見るような瞳をしたカグヤは、思い出深い過去を思いだしながら語り出す。

今から1000年以上前、彼女はアクアの前任として日本を担当する女神の仕事を務めていた。しかし、アクアを超えるほどにおバカな彼女は、まともに仕事をする事なく遊びまくっていた。

『あの頃の私はマジでイケイケなヤングギャルだったアル。ナウい服を着こなして地上に出かけては、現地のダチと「カプトムシ狩り」をしまくっていたネ』

『つて、やってる遊びが全然イケてないんですけど!? めっちゃヤング過ぎるんですけど!』

このエセ中華女神は昔から無茶苦茶なことをしていたらしい。それを知ったノルンは呆れてしまうが、当然ながら当時の天界でも問題視されており、ある日上司に呼ばれたカグヤは大目玉を食らってしまう。

『ああもう、今思い返しても腹が立つネ！ あのクソ真面目野郎、可愛いらしい私のほつぺに2回もビンタかましたアルよ!? パピーにもぶたれたことないのにつ!!』

『そりゃあキミが10年間も仕事サボってカブトムシ狩りに熱中してたらぶつ叩きたくもなるでしょうよっ!?』

どう解釈しても全面的にカグヤが悪いとしか言いようがなかった。それでも当時のカグヤは反発してしまい、自分を叩いた上司に腹パンを決めた後に天界から家出してしまった。

『大神（おとな）の敷いたレールからはみ出した私は盗んだバイクで走り出したアル。そして、着の身着のまま土地感のある日本へ転がり込み、一人の女として生きていこうと覚悟を決めたネ』

とはいえそれは、言葉で言うほど簡単なことではない。ほぼ不老不死の女神とも言っても衣・食・住が必要なのだが、願えば何でも手に入る天界と違って、地上ではすべてを自分で確保しなければならぬのだ。

『まずは、寝床をゲットするためにタイミング良く竹取りに来たジジイを騙くらかすことにしたネ。ジジイが切ってる竹の中に小人サイズの分霊を潜りこませて、竹が切れたら『なに勝手にワイの家壊してくれとんのやワレ!?』と因縁つけて代わりの住処を要求する作戦アル』

『どこかで聞いたことあるっていうか、女神にあるまじき所行ですけど?! これってまさかアレじゃないよね?!』  
「本当はクズだったかぐや姫」ってオチじゃないよね!』

賢いノルンは冒頭を聞いただけでティンと来たが、まさにその予測は当たっていた。カグヤはこの後もどこかで聞いたことがあるような行動を取り続けたのだ。

『何はともあれ、ジジイとババアの家で世話になることになった私は、あいつらへの恩返しに悪徳貴族からぶん盗ってきた金銀財宝を与えてやったネ。そしたら二人とも大喜びして『流石はカグヤの姉御だぜ! 同業者同士、今後とも仲良くやっていきましようや』と私を可愛がってくれるようになったアルよ!』

『いやいやいやいや!? 竹取り爺さんが金盗り爺さんになってますけど!? 盗人女神を仲間に入れて盗賊団を作ってますけど!? なにこの最低なかぐや姫!』

確実に改悪されていく物語にツツコミを入れるノルンであったが、かぐや姫の真歴史にはまだまだ続きがあった。

『ジジババと組んでスリーマンセルとなった私達はしばらく盗賊稼業で荒稼ぎしていたアルが、次第に警備が厳しくなってきたから、今度は私の美貌を活かしてバカな貴族共に貢がせる【婚約したきや金出しな】作戦にシフトしたアル』

『なんかもう、かぐや姫の原型とどめてないんですけど?! そこから貴族の求婚話につながつてくのお!!』

『その通りネ。高価なお宝をガツポリと貢いでくれるイケメン貴族をほべらして、まさにヘヴン状態だったアル。でも、調子に乗ってたらバカ貴族共に訴えられちゃって全国に指名手配されたから、とうとう私は誰も追ってこれない宇宙へと逃亡をはかったアル』

『最後までクズ過ぎでしょコレッ!? もはや、子供に読ませられない有害図書になっちゃってるよ!! っていうか、さりげなくSF要素ぶっ込んでるけど、どうやって宇宙に行ったの!』

『こんなこともあろうかと、恒星間航行が出来るヤ○ト的な宇宙戦艦を用意してたネ』  
『もう世界観まで滅茶苦茶じゃないか!? ご都合主義が暴走し過ぎて真田さんもビツクリだよコレ!!』

何というか、あまりにツツコミ要素満載の前振りだった。まだ本題に入っていないのにノルンはもう疲れてしまった。

ちなみに、地球へ残ることにしたジジイとババアは、一連の経験をおもいつきり改算して竹取物語という名のラノベを作り、それが大ベストセラーとなつて後世にまで伝わっているのだが、そんなことはどうでもいいから本題に入るとする。

『こうして、地球から追い出されるように宇宙へと旅だった私は、これまでの行いを省みて大いに反省したアルよ。もつと自分が強ければ、無様に逃げることなく国ごとぶっ飛

ばせたのに、ってネ!』

『いや、まったく反省してないんですけど?!』 どうしてそんな答えになるわけ?!』

『それは私が破壊神としての血をパピーから受け継いでいたからアル。頭がハゲ散らかる前の若かりしパピーは、地獄へ殴り込みに行つてはストリートファイトに明け暮れて身体を鍛えまくつてたネ。だから私は、パピーを見習つてサイヤ人的な戦闘民族とガチでドツカンバトルしてやろうと考えたアル』

『動機も行動も頭おかしいとしか言いようが無いんだけど?!』 本当にサイヤ人と会つたりなんてしてないよね!』

本題に入つて早々に話が怪しくなつてきた。これはまさかのサイヤ人編に突入か?

『もちろん、そんなことあるわけないアル。所詮サイヤ人なんてサンタクローズやデーモン○暮と同じ空想の産物ネ。でも、その代わりに「夜兎族」というサイヤ人のパチモンには出会えたアル』

『えっ、マジで?!』 カブトムシ狩りをきっかけにして宇宙人と接触するとか、波瀾万丈にもほどがあるでしょ?!』

冗談でつつこんでみたらそれを肯定するような答えが返つてきた。すべての事象を娯楽と化してしまうカグヤの強運は、時として運命すら無視した結果を呼び込むことがあるのだ。ただし、それが良い話になるとは限らないのだが、その時は運良く彼女の希

望通りにいったようだ。

『星の海を渡り徨安（こうあん）という名の惑星にたどり着いた私は、そこに住まう夜兎族と出会ったアル。彼らは宇宙最強を誇る戦闘種族であり、まさしく私が求めていた強者そのものだったアルよ』

そう言うのと、当時の興奮を思い出して嬉しそうな笑みを浮かべる。彼女の中に流れる破壊神の血が心と身体を熱くさせるのだが、その笑顔の中には愛しさと切なさも含まれていた。

『ようやくくまともに戦える相手を見つけた私は、喜び勇んで地獄の特訓を繰り広げたアル。血で血を洗い、肉を切り裂き、骨を砕きあうこと10年間、私と奴等は仲良くケンカし続けたネ』

『これっぽっちも仲良さげな絵が脳裏に浮かんでこないんですけど!? そんなバイオレンスな過去を学生時代の思い出みたいに笑顔で語らないでくんない!』

確かにその通りだったが、この後カグヤに学生時代のような甘酸っぱい出会いが起きた。

『特訓開始以来、一度も敗北することなく常勝を続けた私は、いつ頃からか【天の霸王】と呼ばれ畏怖と畏敬の念を抱かれる存在となり、次第に勝負を挑んで来る者達も減っていったアル。戦闘種族とはいえ所詮は人間、神と肩をならべられる者など現れるはずも

ない。不満足な結末に悲嘆した私はその星から去ろうと決心したネ。そんな時に不屈の闘志を持ったアイツが現れたアル……。はつきり言つて、アイツに勝機などは微塵も無かった。毎回私にボコられては色んな意味で昇天しそうになつてたアル。それでもアイツは諦めることなく立ち上がり、私にこう言い続けたネ。『お前に惚れた！ お前が欲しい！ だから俺の女になれ！』と！』

『なんか目的変わつてますけど?!』 恋が生まれる要素なんて今のどこにあつたというの?!』 世紀末な展開から、なんでその人求婚してんの?!』

頭の打ちどころが悪かつたのか、ただのDMだつたのかは定かではないが、その青年は勇氣とチ○コを奮い立たせてカグヤに勝負を挑んではプロポーズを続けた。そして数年後、決して折れない青年の心とチ○コに根負けしたカグヤは、ついに乙女心を動かされてプロポーズを受け入れた。

『バカな奴ほど可愛いというか母性本能を刺激されたというか、なんでそういう気持ちになつたのか自分自身でもよく分からないけど……結局私も女だつたということアルな。やつぱり、惚れた男のチ○コには勝てなかつたヨ……（恥）』

『ちよつとおおおとおお?!』 最後のオチがあまりに下品ですべて台無しなんですけどお?!』 そこんところはチ○コを省いて惚れただけにしといてくんない?!』

アダルトなノロケ話を聞かされてしらけたが、とにかくカグヤはその青年と結ばれて



一人娘を授かった。

そしてさらに時間は過ぎて、その娘の子孫から「江華」という名の女が生まれ、後に宇宙最強の掃除屋と呼ばれる「星海坊主」と結ばれることになる。

そんな二人が天より授かった娘こそが、奇跡的な遺伝子継承によってカグヤと瓜二つの存在となった……

『超絶最強美少女ヒロイン神楽ちゃんの爆誕ネ!』

なんと彼女は銀魂レギュラーの一人である神楽のご先祖様だった。ゴリラ原作者もビックリな裏設定である。

ただし、この時点ではまだ変わった血筋の少女に過ぎないので、ノルンは特に反応することなく話を進める。

『なるほどねえ。つつこみどころ満載の説明だったけど、カグヤちゃんに子孫がいるって話は分かったよ。で？ その子がどうかしたの?』

『うん……。実は今、神楽ちゃんが地球に来てるんだけど、頼れる大人や友人もいないからかなり苦勞してるアルよ』

そう言うとかグヤは不安気な表情になる。どうやら本当に困っているらしく、真剣に力を貸す気になったノルンは神楽の過去を見通してみた。天界にいる場合は能力を最大限まで発揮出来るので、本人が目の前にいなくてもすべてを見通せるのだ。

『……ふむふむ。出稼ぎするために地球へ密航して来たけどまっとうな働き口が無くて、仕方なくヤクザの用心棒をしてるのか……』

不法滞在な上に知り合いもいないため、アウトローな道へ進むしかなかったようだ。これではカグヤが心配するのも無理はない。

『こんなの絶対おかしいアルよね!? 激かわヒロインの神楽ちゃんが、何でこんなしよっぱなからしよっぱ扱いされてるアルか!? 普通だったら、ラブ○イブを目指す美少女JKとかシン○レラガールズに選ばれた美少女アイドルになるとこだヨ!?』  
『んなもん元から無理なんですけど!? 著作権とかジャンルとか、なにもかもがアウトじゃないか!!』

『でもでも私は神楽ちゃんを幸せにしてあげたいアルよ!! あの子の未来が明るくあれと強く望んでいるアルよっ!!』

いつになく真面目な態度で本心を吐露するカグヤ。すでに他界している母親の代わりをしたのか自分似ている彼女に感情移入しているのか。真意は分からないが、その気持ちはわからなくもない。

『もうしようがないなあ……。とりあえず、神楽ちゃんの未来がどうなるか見通してみてあげるよ』

『ありがとうノンちゃん! やっぱりノンちゃんは最高のツンデレ貧乳美幼女アルな

！』

『誰が貧乳ロリだゴルア?!』

KYなカグヤのせいでもちよっぴりやる気が失せたものの、実際にツンデレなノルンは神楽の未来を見通してやった。

『……うゝむ。どうやら神楽ちゃんは無闇に人を傷つけることに嫌気がさして用心棒を止めるようだね。でも、無収入になってお腹を空かしているところを狙われて、敵対していたヤクザ達に復讐されちゃうみたいだよ。完璧な殺人計画を練った犯人は『酔昆布をあげるから』とウソをついて腹ペコの神楽ちゃんを断崖絶壁におびき出し、渡された酔昆布に気を取られた彼女を崖の下へ突き落としてしまうんだ!』

『なにそのサスペンスドラマ的展開!? いったいどこでヤクザ物から火サスに変化しちゃったアルか!? とうか、崖から落ちた神楽ちゃんはいったいどうなってしまうアルかー?!』

『大丈夫、何とか一命は取り留めて孫悟飯つて名前のお爺さんに保護されるみたいだよ。でも、頭を強く打った影響で記憶と一緒に夜兎族の凶暴性まで消えちゃうから、その後は平凡なモブとして平凡な一生を過ごすようだね!』

『えええええええええ!』 途中から初期のドラゴンボール的な展開だったのに、どうしてモブになっちゃうアルか!? 神楽ちゃんはブルマどころかランチさんにもなれない

アルかーっ!?!』

予想外な結末に流石のカグヤも取り乱す。

『うがあああああああつ!! 神楽ちゃんがモブなんて、そんな未来は認めないアル!!  
あの子は絶対、ジャンプで一番きやわわなヒロインとして君臨しなきゃいけないアル  
よおおおおおおおっ!!』

『えええええええっ?!? そんな無茶振りをボクに言われてもーっ?!?』

興奮したカグヤに理不尽な要求をされてノルンが困惑する。しかし、彼女には実際に  
【未来を変える力】があった。正確に言うとなんか【運命を変える力】なのだが……。

『ノンちゃんお願いアル!! ノンちゃんの【縁結び】で神楽ちゃんをヒロインにクラス  
チェンジしてあげてヨ!!』

ノルンに抱きついたカグヤは運命を司る彼女だけが使えるスキルの使用を求めた。

【縁結び】とは、対象者の縁を操って人生の岐路となる要因と巡り合わせ、その後の運  
命に大きな影響を与える女神スキルだ。運命の女神に愛され導かれた者達は、英雄や偉  
人と呼ばれる傑物に成長して後の世に名を残す。カグヤはその力を神楽に使ってほし  
いと願っているのだ。

『そりゃあ確かに【縁結び】を使えば神楽ちゃんをヒロインにすることも出来るけどさあ  
……あの国はアクアが担当してるから、ボクが干渉しようとしたら絶対いちゃもんつけ

てくるよ?』

『ああ、そんなことは問題無いアル。アクアは私と仲良しだから『つべこべ言うならモモパーンすんぞ』と説得すればきつと快く承諾してくれるはずだよ』

『それ説得じゃないんですけど!? 肉體言語を用いた脅迫なんですけど!? ここまでリアルにの○太的な扱いされてるなんて、流石にアクアが不憫に思えてきたよ……。でもまあ、今回の件はアイツにとつても悪い話じゃないからいつか』

この国の未来を知っているノルンは、アクアの意志を無視して勝手に納得する。

彼女には見えたのだ。神楽をヒロインにする運命を持った人物がこの星の歴史を動かす姿を……。

神楽にはその男が必要であり、彼もまた神楽の力を必要としていた。愛すべきこの国を守るために。腐れ縁で結ばれた悪友たちと生き抜くために。そして、失われた家族との絆を取り戻すために。

その男……坂田銀時と神楽の縁を結ぶことは必然だったのかもしれない。

『(まったく、運命を司るボクが自分の運命に弄ばれるとはね……。なんかムカつくけど、こうなったらやるしかないか)』

覚悟を固めたノルンは、ため息をつきながらも【縁結び】を使う決心をする。その結果として色気もクソも無いガキンチョヒロインが誕生しちゃうんだけど、後のことは

知ったこっちゃやない。絶対に正統派ヒロインになどなれないギャグマンガの世界でせいぜい足掻いてみせるがいいさ！

『分かったよカグヤちゃん。キミの可愛い神楽ちゃんをヒロインにしてあげる。これから始まる物語の主人公と縁を結んでね』

『なっ!?! マジアルか!?! ストレートヘアのイケメンで目元が涼しい王子様のな主人公とイチヤイチャパラダイスするアルね!?!』

『ううん。天パのフヌケ顔で死んだ魚みたいな目をしたマダオ的な主人公とグチャグチャバイオレンスする話だよ』

『まるつきり真逆じゃないかあつ!?! 私はチエンジを要求するネ!?!』

もちろんそんなワガママは却下して、ノルンは「縁結び」の力を神楽と銀時に使った。こうして運命を変えられた神楽は、崖から落とされる未来を回避して銀時と出会うことになり、銀魂のヒロイン的ポジションを獲得するのだった。

そこまで話し終えたノルンは一旦回想を止めると、呆れ顔で聞いていたクリスの反応を確かめる。

「とまあ、カグヤちゃんが持ってきた無茶振りイベントがすべての始まりなんだよね〜」  
「な、なるほど……。お姉様とギントキ達の間にはそんなつながりがあったのですか

……。でも、お姉様がここに来た理由がまだ見えてきませんね。カグヤ先輩はいつたい何をお姉様に頼んだのでしょうか？ それに、なぜお姉様はカズマという少年と一緒にいるのでしょうか？」

「うん……。ぶっちゃけ、こうなった原因は全部カグヤちゃんのせいなんだけど……。あのバカの不祥事レベルは、お茶の間に半ケツ晒したアクアすら超えちゃってるね！」  
怒りのあまりメタ発言をかましてしまったノルンは元凶であるカグヤを罵る。果たして彼女はいつたいナニをやらかしたのでらうか。

再び問題が発生したのは今から2週間ほど前のことだった。

その日ノルンは、早めに仕事を終えて持て余した時間にマンガを読んでいた。かめはめ波の練習は前回の件で懲りたため、今回はちよつぱりえつちいTO LOVEるを見てアダルトな雰囲気を楽しんでいた。

『うわあく。これもうアソコが見えちゃってるじゃん。矢吹○太朗マジパネエ！』

まるで性に目覚めたばかりの中学生みたいな反応である。ある意味かめはめ波以上にこつ恥ずかしい状況なのだが、間の悪いことに以前と同じようなタイミングでカグヤが飛び込んできた。

『うわーんっ!! ノルえもーんっ!!』

『うぎゃあああああああああつ!!?』

またしても恥ずかしい場面を見られてうろたえるノルン。

『ちよつ、おまつ、なにやっつてんだよ!? 部屋に入る時は必ずノックしろつていつも言つてんだろつ!? ベ、別に見られちゃイケナイことなんてしちやいないけどさあ〜? ボクだつてお年頃の女の子なんだから、ほんとマジで勘弁してよねっ!』

『ええい、お黙り!! 今はノンちゃんが、エロに目覚めたばかりの中坊みたいにT O L O V E する見てたことなんてどうでもいいアル!! そんなことより私の頼みを黙って聞きゃあいいんだよゴラア!!』

『どう見ても頼みにきた奴の態度じゃないんですけど!? 今度はいったいなんなのさ!?!』

理不尽な扱いにイラツときたものの、いつになくテンパっているカグヤの様子が気になったので話を聞いてやることにした。普段はノルンのことを我が子のように可愛がっているのに、今は何があったのかそれどころではないらしい。そんな彼女を見て、こりやまたとんでもない問題を持って来たなど予感したが、娯楽を司る彼女の起こしたトラブルは想像の範疇を超えていた。

『ノ、ノンちゃん!! 私はまたとんでもないことをやらかしてしまったアル!! 私のせいで銀ちゃんとマダオが死んじまったアルよおおおおおおおお!!』





気して作った異母姉妹ではないかと邪推していた。もしそうだとしたら気まずいなんでもんじゃないと、一旦は誘いを断ろうとする。だが、結局最後は奢ってくれるという旨い話に負けて彼女と共に馴染みの飲み屋へ行くことにした。

『そこまでは一昔前に流行ったトレンディドラマとかでよく見る感じのある話だったアル。でも、悲劇は楽しい酒宴の後に待ちかまえていたネ。やっぱり、私と銀ちゃんは出会ってはいけない運命だったアル!』

『あーもう、そういう昼ドラ的なあおりはいいから、早く話を進めてくんない!』  
テンパっているクセにいつも通りボケて来るカグヤにイラツとしつつも、いよいよ判明する銀時達の死の真相に緊張感が増していく。

『すべては調子ぶっこいた私がいけなかったアル!! あの時、銀ちゃんにアルコール度数96%のスピ〇タスを一瓶丸ごと一気飲みする勝負を挑んでしまったばかりに、泥酔したアイツは路上で寝ゲロして窒息死しちゃったアルよおおおおおおお!!』

『ほんとにキミはナニやってんのおおおおお!!』

いざ聞いてみたら色んな意味で酷かった。

『しかも、悲劇はそれだけでは終わらなかったネ! あの時、イイ感じに盛り上がった私と銀ちゃんに絡んできたピッコロっぽい天人をしこたまフクロにしていなければ、そ

の八つ当たりでマダオが魔貫光殺砲を食らうことも無かったアルよおおおおおとおおとおお!!』

『なにそのとんでもない展開!? しよーもない不幸に巻き込んだ挙げ句、魔貫光殺砲を死因にさせちゃうとか、人の運命ねじ曲げるにもほどがあるでしょっ!?』

やはりと言うべきか、長谷川に起きた惨事もかなり酷かった。

『というか、マジでナニしてくれちゃってんの!? 生存力の高い彼らは天寿を全うするはずだったのに、どうしてこんな惨たらしい死に様晒しちゃってるわけ!?』

『そんなこと私に言われてもよく分からないアル! あつても、今年は私の「厄年」だから、そのとぼっちりを受けたのかも……!』

『それで他人が死んじやうとか、どんだけ迷惑な厄なんだよ!?』

どうやら、娯楽を司る女神の力が厄年の効果に余計な影響を与えたらしい。そこまで不条理な要因で銀時達の運命に変化が起きてしまったのは、流石のノルンでも見通せない。

創造神の母を持つカグヤはそれほどまでに特殊な女神であり、「現実世界を舞台にした壮大な娯楽」を創り出すデタラメな存在なのだ。破壊と創造という相反する属性を混ぜこんだら、世界の常識を壊してギャグマンガ風に創り変えてしまうトンデモ女神が生まれてしまったのである。

そして今、パルプンテのようなその力が厄年の影響で暴走しているらしい。主人公すら死なせてしまうこの厄災を放置したら世界の運命まで台無しにされかねない。

『いいかいカグヤちゃん！ 今年のキミは、一護すら超える最凶の死神と化してるんだ！ いや、それどころかデスノートを手に入れたライト並に危険な状態だと言えるだろう！ だからこそ、これ以上被害を拡大しないように、銀魂関係者とのエンカウントは絶対に回避するんだ！』

『……ごめんよノンちゃん。せつかく、ジャンプ的な解りやすい説教で私の罪を食い止めようとしてくれたけど、実はすでに犠牲者は出ているアル』

『なん……だと……？』

これまた予想外な展開になって来た。せめて、悲劇の連鎖を食い止めようとしたら、すでにコンボは始まっていた。

『あれは今から半年ほど前のことアル。なんとなくヒマぶっこいてた私は、旅をしてるヅラ達のことを思い出してちよつくら見物しに行ったアル。そこであんな悲劇が起こるなんて夢にも思わなかったアルよ……』

その日、桂達の様子を見に行ったカグヤは、好物のバナナを食べながらこっそり彼らを観察した。旅の目的そっちのけで初代たまごつちにハマっているバカな彼らを見て大いに満足した彼女は、機嫌良くその場を離れた。しかし、カグヤが立ち去った数分後

にそこを通った桂は、彼女が捨てたバナナの皮ですべった拍子に頭を強打し、意識不明の重体となってしまふ。

その後、桂はエリザベスの適切な処置によってカツパンマンとして復活するが、それも長くは続かなかった。ヒーローとして活躍し始めたカツパンマンに興味を抱いたカグヤが、またしても好物のバナナを食べながら彼らの行動を楽しんでいたのだが、ゴリラストーリーカーを追跡していた彼は不運にも彼女が捨てたバナナの皮で再びすべって頭を強打し、今度はジエノザベス共々帰らぬ人となってしまった。

『私がブームに乗ってバナナダイエツトなんかハマっちゃったばかりに、ツラとエリーを殺っちゃったアルよおおおおおおおおおおおお!!』

『アンタ、マジでナニやってんのおっ?! あまりに不幸を呼び込みすぎて、もはや悪魔と化してますけどっ!』

さらっと打ち明けられた衝撃的な事実には驚愕する。どうやら、桂達の死は不幸な事故として隠ぺいする気だったようだが、とうとう罪悪感に負けたりらしい。

『(まあ確かに、バナナの皮で二回も転ぶカツラもどうかと思うけど……。カグヤちゃんのおかげは、もはや呪いのレベルだよ!)』

このままでは厄年が終わる前に銀魂のレギュラーキャラが全滅しかねない。彼女自身には悪意など無いのだが、ある意味ラスボスよりも恐ろしい存在と化していた。

『とつ、とにかく!! 他のメンバーを死なせないように、あと半年だけはじつとしててよ!! 死んじやつたギントキ達はもうどうしようもないけど……』

『そんな、じつとしていているなんて私には出来ないネ!! 悲しむだろう神楽ちゃんの為に、私は銀ちゃん達を必ず生き返らせてみせるアルよ!!』

これでも責任を感じているらしいカグヤはとんでもないことを言い出した。確かに、神の力をもつてすれば死んだ人間を生き返らせることも可能なのだが、天界のルールでは魔法などによる蘇生手段に成功した場合に限るため、そういった能力が存在しない地球では不可能なことだった。その代わりに不老不死すら実現する「アルタナ」というエネルギーが存在するが、そんなものに頼つても新たな悲劇を生み出すだけだし、そもそも天界で手続きを終えた者は何をしてても手遅れである。

『なに言つてんだよカグヤちゃん? ドラゴンボールじゃあるまいし、死んだ人間を生き返らせるなんてホイホイ出来るもんじゃないでしょ。出来てもせいぜい、別の人間に転生させることぐらいしか……』

そこまで言つて、その奇跡を可能とする裏技を思い出す。確か、エリスの担当している世界で猛威を奮っている魔王を別世界出身の転生者が倒せば、神々から送られる褒美で元の世界に生き返ることも出来るはず……。

『なるほど。魔王討伐の特典を利用するとは、考えたねカグヤちゃん』

『流石はノンちゃん、もう気づいたアルか。心の相棒であるアクアにお願いして、銀ちゃん達の転生はすでに済ませているアルよ』

以前、茂茂が死んだ時にアクアとつるんで無理矢理転生させたことがあり、桂や銀時達も同じ手でチャンスを作り出したわけだ。これはアクアにとつてもオイシイ話で、英雄クラスの転生者を送れば魔王を倒してくれる可能性が上がるし、もしそうなれば上層部から感謝されて棚ボタ的に彼女の神格がアップする。だからこそ、あの駄女神も喜んで協力しているのだが……

『でもあれは、若くして死んだ少年少女だけが対象のはずだけど?』

『もちろん、その辺も抜かりは無いネ! マヌケな上司を欺くために年齢の記録を詐称しといたから、ヤツラはみんな老けた顔した永遠の17歳アル!』

『もうそれ普通に犯罪だよね!? 女神にあるまじき悪意をもつて罪を重ねまくってるよね!』

確かに、女神がやってはいけないことのオンパレードではあったが、彼女達駄女神のおかげで銀時達は生き返るチャンスを得られた。こうなったら、後は彼らの努力次第である。

『つていうか、そこまでお膳立てしてるなら、ボクに助けを求める必要なんて無いんじゃないの? アクアから貰えるチートアイテムもあるし、ギントキやカツラほどの実力者

なら魔王を倒すことも十分に可能でしょ』

『問題はそこアルよ！ 銀ちゃん達はチートアイテムを貰わずにクソアイテムを持って行っちゃったから、私は心配してるアル！』

『えっ、クソアイテムっていったいなにさ？』

『お金を選んだ将ちゃんはまだまもだけど、ツラのバカはツインファミコンなんてしょーもない物を頼みやがったし、銀ちゃんはなにをとち狂ったのかアクアを持っていったアル』

『うん、確かに両方ともクソアイテムだね……って、アクアを持っていったのおーっ!?』  
まさかの展開にツッコミを入れるが、それでは確かに心配になる。

『そこでノンちゃんにあいつらのサポートを頼みたいアル！ 運命を見通せるノンちゃんがいれば、運無し金無しパンツ無しのアクアがいてもどうにかなるネ！』

『はあなるほど、そういうことね……』

やたらと時間がかかったが、ようやくカグヤの作戦が分かった。

『でも、それは出来ないよ。ボクにはやらなきゃいけない仕事がたくさんあるから、ヒマなカグヤちゃんと違って天界を離れられないもん。それに、アクアと会ったら絶対絡んでくるだろうし……』

『ふっふっふー。その対策もバッチリしてるネ！ マミーの部屋からパクって来たこの



オサレメガネにノンちゃんに分霊をしこんで「なんちゃって神器」を作れば、ノンちゃんの本体が行かなくてもいいしアクアのバカとも会わずに済むアル。後は生きの良い死人が来るのを待つて、ソイツにノンちゃんを選ばせればいいだけネ」

確かに、神器クラスの寄り代があれば分霊単体でも活動出来るし姿を隠すことも出来る。そして、ノルンの「縁結び」を使えば、次の転生者に自分が宿った神器を選ばせることも可能である。

『でもそれじゃあ、自由に神器を選べなくなる転生者に悪いじゃないか!』

『もちろん、それも大丈夫ネ! ちゃんとノンちゃんみたいな貧乳美幼女にただならぬ興味を持つてるロリコン野郎を選ぶから!』

『それ別の意味で大丈夫じゃないんですけど!』そこはせめて健全なシスコンとかにしといてくれない!』

確かにノルンが嫌がるのも無理はなかったが、結局はカグヤの熱意に押し負けて彼女の計画に巻き込まれてしまった。その直後に、主役の座を持つていかれたカズマが送られて来て、彼の運命を見通したノルンが相棒として選り抜いた。

『可愛い義妹を欲してるような変態シスコンだけど、真性ロリコンよりはマシかな……』

判断基準は微妙だったものの、とにかくカズマが選ばれてノルンと共に異世界へ転生することとなった。幸か不幸か、カグヤのワガママによってカズマの運命まで書き換え

られてしまったのだ。担当女神がいないと異世界転生が中断されるので、本来ならそのまま地球で転生して無難な人生を送るはずだったのだが……結局彼は過酷なファンタジー生活を強いられることになった……。

頭が痛くなるような回想を聞かされたクリスは、口元をHの形にしながら顔をしかめる。もちろん厄介事に巻き込まれたノルンも同じ心境で、やれやれと肩をすくめながら締めくくる。

「つてな感じで、カグヤちゃんの尻拭いをするためにボクはここにいてるってわけさ」

「は、はあ……。なんと言いますか、その、お疲れ様ですお姉様……」

とりあえず、災難をもろに受けたノルンを労っておく。お互いにとんでもない先輩を持つてしまいましたねお姉様……。

「それにしても驚きましたよ。ギントキ達が転生してきた事情が私の想像とまるで違っていたなんて……」

これまでクリスは彼らのことを上層部の粋な計らいで送られてきた優秀な人材だと思っていたのだが、実際は不良女神の独断行為によって紛れ込んだマダオだった。サムライとしての実力は折り紙付きとはいえ、あのカグヤが気に入った人間なのだと考えると『アイツら絶対、禄でもないことしかすんじゃね?』という予感しか湧いてこない。

「しかも、共犯者のアクア先輩までこの世界に来てるだなんて、不安を抱かずにはいられませんよ……」

「だいじょーぶだよエリスちゃん！ もしアクアが胸をパッドで底上げしていることを言いつらしてもエリス教は不滅だから！」

「そんな心配してませんけど?!」

見当違いな気を使うノルンにツツコミを入れる。確かに、胸を底上げしていることを言いふらされるのは困るが、それよりも彼女に自分の正体がバレないように気をつけな  
いと……。

「お姉様もうっかり漏らさないように注意してくださいね?」

「分かっているつてばエリスちゃん！ こう見えてもボクは口が堅い方だし、アクアはバカだからどうせ気づきやしないよ」

そこはかとなく失敗しそうな雰囲気を感じるが、未来を見通せるノルンが言うのだからまず間違いないだろう。

「それはそうとエリスちゃん。だいぶ話が長引いたから、そろそろギルドに行かないと」「え、ええ……。名残惜しいですけど、これ以上ダクネスとカズマさんを待たせてはいけませんからね……」

「とか言つて、めっちゃすりすりしてくるのはなぜ?」

「今の内にお姉様成分を補充しておきたいんです〜♪」

妹好きのカズマに劣らず、クリスもかなりのシスコンだった。

「まったく、エリスちゃんも甘えん坊だなー。ところで話は変わるけど、カズマにお礼をするって約束したのは覚えてる？」

「うっ……もちろんちゃんと覚えてますよ……」

お礼の件を思い出したクリスは困ったような表情を浮かべる。あの時はとつさに言ってしまったが、改めて考えるとなにをすればいいか……。

「あっそうだ！ 武器系の神器を貰っていないのなら、このダガーを差し上げるといのはどうでしょうか？ 魔法がかかっている強力な一品ですし、かなりの値打ち物ですから換金するのもありですよ？」

「うん、確かにそれも良いんだけど、今回はエリスちゃんが習得してる盗賊スキルを教えてやってくれないかな？ 【潜伏】と【敵感知】は最弱職の冒険者にとって有効なスキルだし、幸運だけやたらと高いカズマには【窃盗】も効果的だからさ」

ノルンが提示してきた案は実に簡単なものだった。そのくらいのことなら、ギルドにいる冒険者達に頼んでも気軽に教えてもらえるはずだが……。

「お姉様がお望みなら喜んで教えますけど、そんなに簡単なことでもいいのですか？」

「うん、いいのいいの。その方がボクにとっても楽しいことになるからねえ〜」

「は、はあ……。お姉様の笑顔からドス黒いオーラが出ていて、とってもイヤな予感がするんですけど……」

この時クリスは、何かが起こると思われるノルンの提案を警戒したが、姉に対する愛情ゆえに彼女の頼みを聞いてしまう。その判断があのような惨事を招くことになるかも知らずに……。

## 第15訓 遊びも仕事もスキルが大事

一旦クリスと別れたカズマ達は、彼女の行動に疑問を抱きながらもギルドへ向かうことになった。

親友に放置プレイされたダクネスにとってはちよつとしたご褒美だったが、一番迷惑をかけてしまったカズマには友に代わって謝罪しておく。

「すまないカズマ。いきなりクリスのわがままに付き合わせるようになってしまった……」

「ああ、あのくらい構わないさ。可愛い女の子の願いに応えるのはモテる男の役目だからな。それに、後でお礼してもらえらるし……」

「はっ！ そのいやらしい目付き……やはり貴様は、お礼と称してクリスに恥ずかしい行為を要求しようとしているな!? お前のパンツが欲しいと言って嫌がるクリスに脱衣を強制し、ギルドにいる男共の前で羞恥プレイをさせる気なんだろうっ!」

「ちよつ、おまつ!? ナ二人聞きの悪いことを言ってくれちゃってんだよ!? ドMの勝手な妄想で俺を鬼畜にすんじゃねーよ!? あの子のパンツが欲しいとか、これっぽっちも思っただろー!! 人前で剥かれる部分は、お前自身の願望だろーがっ!!」

ダクネスに疑われたカズマは懸命に否定するが、あからさまにウソだと分かる狼狽えっぷりである。残念ながら、彼女の妄想と彼の本音は見事に合致していた。

だからと言って、それを言い当ててみせたダクネスを誉める気になどなるわけないが、バカな桂は常人とは真逆の反応を示す。

「はっはっは。朝っぱらから卑猥なY談で盛り上がるとは、元気があつて大変よろしい！」

「ちつともよろしい要素は無えよ！ 朝っぱらからエロ談義とか、どう考えても不健全だろ！」

こいつらと一緒にされたくないとばかりに長谷川がつっこむ。エロ本やAVを愛好していた彼でも現実で羞恥プレイをやらされるのは御免である。

周囲の視線が気になった長谷川は、エロい会話で盛り上がる仲間達と距離を取って先にギルドへ入っていく。

「さて、変態は放っておいて銀さん達を探すとしますか……。おつ、いたいた！」

カウンター席に視線を向けると、やたらと目立つズンボラ星のジャージを着た銀時を発見した。彼はそこで朝食を取っている最中らしく、両隣の席にはアクアとめぐみんもいる。

「こっやって見ると、T o L O V E 的 な ハ ー レ ム 作 品 みたい だ な ……」

美少女二人に挟まれながら食事をしている銀時を見てふと思う。こんな甘酸っぱい絵面なんて、DＳな激辛味が売りの銀魂じゃ絶対には有り得ねえ……。

「つーかアレ、実際にイチチャイチャしてね？」

改めて確認した長谷川は我が目を疑う。それほどまでに信じられないようなことが目の前で起こっているからだ。現に今も、アクアが銀時に「アーン」しようとしている……。

「ほら銀時！ 遠慮せずに私のお肉を食べなさいよ！ あつ、勘違いしないでよね！

これはひもじそうな顔してるアンタを哀れに思つて、女神の施しを与えてあげてるだけなんだから！」

なんと、あの駄女神が唐突にツンデレキャラと化していた。

しかも、その変化はめぐみんにまで及んでいた。

「ならば私はこの唐揚げをあげますから、喜んで食べるとういんです！ 最強のアークウイザードたる我から命の恵みを分け与えられることを光榮に思うがいい！」

顔を真っ赤にしながらフォークに突き刺した唐揚げを突きつけるめぐみん。その様子は年相応に可愛らしかったが、明らかにナニかがおかしい。この一晩で彼女達にいったいどのような変化が起きたのだろうか？

「な、なんだこりゃあーっ!? いつの間はこのSSはラブコメに変わったんだあーっ!?」



奇妙な現象に気づいた長谷川は思わず立ち止まり、追いついたカズマが不思議そうに声をかける。

「なにやってんの長谷川さん？　なんか恐ろしい物と出くわしたみたいプルプル震えてるけど」

「カ、カズマ君！　確かに俺は恐ろしい物を見ちまったのかもしれないねえぜ！　まさか、あの銀さんがハーレム作品の主人公になっちまうなんて……」

「はあ？　朝っぱらからつまらない冗談は止めてくれよ。顔を会わせる度にジヤイ○ンとの○太のような騒ぎを起こすあの三人がハーレム関係になるなんて、そんなバカことか……」

「はい、アーンして！」

「起こってたあああああああああああつ!!」

アクアとめぐみんのアーン攻撃を目撃したカズマは、盛大につっこんでしまう。

「えつ、ナニこれ!?　昨日まではバカなプータローと接するような関係だったのに、なんでいきなりバカツプルみたいになっちゃってんの!」

「ああん!?　誰がプータローだクソニート!?　朝っぱらからふざけたことぬかしやがって、俺たちや別にバカツプルでもなんでもねえぞ?」

「いやでも、実際にアーンとかしてるし……」

「デメエはどこ見てそんな寝言をぬかしてやがんだ？ パフェを食ってる俺に肉を食わそうとするとか、嫌がらせでしかねーじゃねえか！ ご飯にマヨネーズかけて食うよりもエゲつない組み合わせだろコレ！ 酢豚の中に入ってるパイナップルがまともに思える状況だろコレ！」

カズマにつっこまれた銀時は、変な勘違いに腹を立てて言い返してくる。しかし、その反応を不服に思ったアクアとめぐみんが拗ねた恋人のように仕返ししてきた。

「もう、銀時ってば往生際が悪いわよ！ 女神である私にあんなことをしておいて、今更言い訳なんて許さないんだからね！」

「まったくアクアの言う通りですよ！ 汚れを知らぬ私の身体にあんなことをしたのですから、ちゃんと責任を取ってもらわなきゃ困りますね！」

頬を赤く染めた二人は、とつても危険な発言をかましてきた。

まさかこいつ、マジでヤツちまったのか!? しかも、いきなり3Pで……。そんな妄想を膨らませたダクネスが我慢できずに突っかかる。

「なっ、なんとということだっ!! 私という肉奴隷がいるというのに、年端もいかぬ少女達までその毒牙にかけるとはっ!! 我が主がそこまで鬼畜であったなんて、私はっ、私はっ……心の底から感動しているっ!!」

「いや、なんでそこで感動してんだ!? 意外に年食ってるアクアはともかく、めぐみんみ

たいなロリっ子に手を出すとか、少年マンガの主人公にあるまじき行為じゃねーかっ!?」

「ちよつ、意外に年食ってるってどーいうことよ?」

「わ、我がロリっ子……」

さりげなく漏れてしまったカズマの本音によつてアクアとめぐみんは傷ついた。

さらに、ヤバい濡れ衣を着せられた銀時もカズマ達のせいでピンチに陥ってしまった。

「まったく、なんだよこれは。まるで人を性犯罪者扱いしやがって。こちとら、法律に反することはおろかオ○ニーすら碌にしてないってのに!」

「ぎ、銀さん……あんたまさか、禁欲生活に耐えられずにととうやツちまったか?」  
〈このロリコン野郎!!〉

「ええい、勝手に人を変態扱いしやがって、いい加減にしろよ teme ー!! 何かおもいきり勘違いしてるようだが俺は無実だ!! そのドMを肉奴隷にした覚えもねえし、こつちの駄女神と爆裂バカにも R—18 なことは何一つやっちゃいねえぞ!! いやマジでっ!!」

理不尽な展開に怒った銀時は、勘違いしている冒険者達に訴える。とはいえ、見るからに遊び人な男の言うことに説得力などありはしない。当然、長谷川も納得せずに詳し

い説明を求めてくる。

「じゃあ、なんでこの二人はあんなこと言い出したんだよ？ やっぱ、銀さんがエロいことをやらかしちまったんじゃねーの？」

「ったく、しつげえぞウンコ野郎！ お前らが妄想してるようないかがわしいことなんざ何一つやつちやいねえよ！ 俺はただ、昨日の夜に習得した【遊び人スキル】をこいつらに味わわしてやつただけだ！」

「あーなるほど、そういうことね……って、やっぱやらかしてんじゃねーか!? 大体、遊び人スキルって何なんだよ!? それもう普通にアダルトな遊びしてるだけじゃねー!」

どう考えてもまともではなさそうな銀時のスキルに長谷川達は疑念を抱く。果たして、この天パ野郎は遊び人スキルとやらでどんな変態プレイをしがったのか。エロい展開に興味を抱きつつも、嫉妬や侮蔑の意識が勝って身勝手な嫌疑を押しつける。

そのように不穏な空気が広がる中、ただ一人、桂だけは戦友を信頼して、あたりまえのように弁護する。

「まあ、とりあえず落ち着けみんな。銀時が問題無いというのであれば、仲間である俺達は只それを信じるべきではないか？」

「ツ、ツラ……お前って奴は、極たまに良いこと言うなあー!」

「なに、仲間として当然の配慮をしたまです。しかし、この手のやり取りは懐かしさを覚

えるな。女性関係の揉め事と言えば、攘夷戦争をしていた頃も晋助達と遊廓に行つては問題を起こしまくつていたつけなあー！」

「おい、それフォローになつてねえぞ?! 火消しどころかささらにガソリンぶっかけてんぞっ!」

おバカな桂は、信じると言つた矢先に更なる燃料を投下した。すると、それを聞いた野次馬達がザワザワと騒ぎだす。

「あの野郎、ダセエ格好してるクセに女遊びの達人かよ!」

「変態よ! 三人の少女に手を出すなんて本物の変質者だわ!」

「だがしかし! ある意味、勇者と言えなくもない!」

「ああ! リアルで美少女ハーレムを実現するなんて、羨ましくて反吐が出るぜ!」

目立ち過ぎる彼らは他の冒険者達の注目まで集めていたので、騒ぎは大きくなるばかりである。

とはいえ、これ以上はギルドに多大な迷惑をかけてしまうので、桂も本気でフォローを始める。

「朝っぱらからくだらん騒ぎを起こしてすまんみんな! こいつの女性問題はこつちで片をつけておくから、この場は俺に免じて大人しく引いてくれ!」

「ちえ、面白くなつてきたとこだけどカツラさんがそう言うなら仕方がないな」

「ええそうね。カツラさんに任せておけば、あの変質者も更正するでしょ」

「え、なにこのすげえカリスマっぷり!? どう見てもバカなのに、なんでこんなに慕われてんの!？」

すんなりと桂に従う冒険者達に驚いていると、近くにいたモヒカンヘッドのおっさんが説明してきた。

「そりやおめえ当然だろう。この街にいる奴等はみんな、ドラゴンスレイヤーの称号を持つ勇者王のカツラさんをリスベクトしてるからなあ!」

「テメエみてーなモヒカン野郎は世紀末霸王でもリスベクトしてやがれ!!」

イイ笑顔を浮かべながらサムズアップしてくるモヒカン親父に八つ当たり気味なツツコミを入れる。それでも彼は怒ることなくニヤリと笑って去っていき、気がついた時にはモブのみなさん全員が元の場所へ戻っていた。

その茶番を呆れた顔で見ていたカズマだったが、状況が落ち着いてくると今度は遊び人スキルに対する興味が純粋に湧いてくる。単純バカなアクアはともかく、男女関係に關しては常識的と思われるめぐみんがこんなにチョロい反応を示すなんて、好奇心を抱かずにはいられない。

「おいめぐみん。銀さんのスキルでどんなことされたんだ?」

「なっ?! まさかカズマはこの私に、淫らなるあの惨劇を説明しろと言うのですか!？」

そのような羞恥プレイを公衆の面前で強要するなんて、あなたもかなりの鬼畜ですな  
！」

「そーよ、そーよ！ エロニート！ あんな屈辱的でこつ恥ずかしい話を清純派なこの  
私にさせようとするなんて、女神の従者としてあるまじき所行だわっ！」

「いや、従者になった覚えは無いし、ヨゴレのお前に聞いてねーから」

「えっ、ちよっつ、なんで!? アイドル的な女神の私がどうしてそんな扱いなのよ!? 私に  
も興味を待ってよ!! もっと私に注目してよっ!!」

「ええい、ウザいわ!! さびしんぼうの構ってちゃんが!!」

カズマの疑問は女性陣からの猛反発にあって聞き出せなかった。しかし、彼女達の反  
応からエツちな内容だということは推察できる。

「なあ銀さん、こいつらに使ったスキルっていったいなんなの？ 個人的に詳しく教え  
てほしいんだけど……」

密かにエロい能力であることを期待したカズマは、張本人の銀時から直接話を聞こう  
とした。

視線を向けると、彼はこっそり席に戻ってパフェを食べていたのだが……

「つたく、どいつもこいつも朝っぱらから面倒ばかり起こしやがって！ バカらしくて  
糖分取らなきややってらんねーっつーの！」

「ちよつ、銀さん!! 今あんたが座ってんのダクネスの背中なんですけどおおおおお  
おおおおお!!」

「なっ!! お前、いつの間につ!!」

「はあつ、はあつ! 私もアクア達に負けてはいられないからな! 誰が一番、我が主の  
メス豚としてふさわしいか見せつけなければ!」

「いつからDM勝負になった!?! 戦い方がおかしいだろソレ!?!」

変なところで対抗心を燃やしたダクネスにツツコミを入れるカズマだったが、銀時の  
スキルによって様子がおかしくなっているアクアとめぐみんは、彼女の行動を肯定する  
ようなことを言い出した。

「あつ、ちよつと! 抜け駆けなんて卑怯よダクネス! 銀時の所有物である私こそが  
一番いじられるべきなんだから!」

「いいえ、それは違いますね! ギントキと一番相性が良いのは、SでもMでも対応出来  
る両刀使いの私ですよ!」

「アレ、なにこの会話? なんかアクアとめぐみんからMっ気が出てるんだけど?」  
今のやり取りで二人の変化に気づいたカズマは戦慄する。

これはアレだ。愛とか好きとか健全な物じゃなくて、ダクネスと同質のアブノーマ  
ルな奴だ。よく見ると、二人の瞳がギャグマンガのようにグルグルと渦を巻いてるし!



「ごくり……。あの二人をここまでおバカなメス犬にしてしまうだなんて……。遊び人スキル、恐るべしっ!!」

この時カズマは、いろんな意味でスキルの力を思い知った。美少女を手懐けられるそのスキルを使つてみたいとは思うけど、目の前で起こっているような面倒事に遭うのは真つ平御免である。

「女の子とイチヤイチャできるなら習得したいなーって思ったけど、恐らくこれは十二かが違うな」

「ああ、そうだな。こいつはたぶん、銀さんにしか使いこなせねえギャグスキルだ。もし主人公補正がなければ、タダの性犯罪者になるだろうぜ……」

遊び人スキルの正体を何となく察した長谷川とカズマは、同じ結論に達して肩を落とす。

そのように微妙な空気が漂う中、空気を読まないことに定評のある桂が何事も無かつたかのように口を開く。

「さて、会話も一段落しことだし、そろそろ朝食をいただくとするか。お前達も、話の続きは後でやればいだろう」

「あ、ああ。そうだな……。つっこみたいことは色々あるけど、とりあえず飯でも食つて気分を落ち着けるか」

桂に促されて長谷川達もようやく席に着く。

銀時達は未だに揉めているが、構っても疲れるだけなので放置する。

「それにしても銀さんが羨ましいぜ。遊び人のクセに専用スキルがあるなんてなあ」

頬杖をついた長谷川は、しつこくまとわりついてくるアクア達に手を焼いている銀時を眺めながらぼやく。彼が職業にしている冒険者（仮）には専用スキルが無いからだが、その辺りの知識に乏しいカズマは習得方法を質問してみた。

「なあ長谷川さん。スキルの習得ってどうやんのか知ってる？」

「おうよ！ 受付嬢のルナさんから根掘り葉掘り聞いてあるぜ？」

長谷川は、ルナの巨乳を間近で拝むついでに聞いた情報をカズマに教える。

初期職業の冒険者は、専用スキルが無い代わりに他の職業のスキルをすべて習得することが出来る。ただし、それにはスキルを使える者から教えてもらう必要がある、スキルポイントの消費も専門職より余計にかかるというデメリットが存在する。

それに加えて、ステータスの成長もあまり良くないので、大抵は器用貧乏で終わってしまう中途半端な職業なのだ。

「だがしかし、俺達の頭脳にはゲームとネットで培ったチート知識がある！ それを駆使すりゃ、たまねぎ剣士であっても一流の冒険者になれるだろうさ！」

「ああ、そうだな！ 今こそ、貴重な時間をゲームに費やしてきた無職とニートが輝く時

だぜ！」

イヤなところで似た者同士な二人は、仲良くやる気を漲らせる。

そんな彼らの傍らで静かにメニューを選んでいた桂は、片手を上げて顔見知りのウエイトレスを呼んだ。

「コレット殿、例の奴は入荷してるか？」

「はい。今朝の便で届いてますよ」

「では、それを頼むとしよう」

〈俺も同じく〉

「かしこまりました！ 例の奴二つですわ〜！」

おっとりした口調のウエイトレスは、注文を確認すると短いスカートをヒラヒラさせながらカウンターの奥へ向かっていく。その様子を目敏く見ていた銀時達は、「例の奴」とやらがものすごく気になり、一旦ケンカを中断して桂のそばに寄ってくる。

「おいヅラ。今頼んでた例の奴っていったい何だよ？」

「もしかして、王都からお取り寄せした高級料理とかですか？」

「そうだな……。アレは確かに、俺にとつては高級料理に勝るとも劣らない一品であると言えるだろう」

めぐみんの問いに対して、桂は肯定の意を示す。

すると早速、食い意地の張ったアクアが露骨にたかってくる。

「ねえカツラさん。その高級料理を私も食べてみたいんですけど。女神のお願いなんだから、当然叶えてくれるわよね？」

「あつテメツ！ 上手いこと言って俺の高級料理を横取りする気か!」

「元からアンタの物じやないでしょ!?! で、でも、銀時がどうしても食べたいって言うなら半分こにしてあげなくもないわよ？」

「なっ!?! ズルイですよアクア! ギントキと一緒に高級料理を食べるのはこの私です!」

「フンツ、そうはさせんぞお前達! 高級料理を献上することで我が主に媚びを売るつもりだろうが、卑猥なメス豚サーヴアントの座は誰にも渡さんつ!」

未だに遊び人スキルの影響下にあるアクアとめぐみんは銀時に対して従順な態度を示し、それに危機感を抱いたダクネスが頭のおかしい対抗心を燃やす。そのとぼちちりをもろに食らう形となった桂であったが、変な所で度量が大きい彼は特に気にすることなくケンカを諫める。

「まったく、仕方のない奴等だな。ケンカなどせずとも、ちゃんとみんなに分けてやるさ」

大人げない銀時達とは真逆な神対応である。

しかし、おバカな彼がこのままオチ無しで終わらせるはずが無い。しばらくしてウエイトレスが持ってきた例の物が新たな騒動を巻き起こすことになる。

「お待たせしました。【んまい棒コーンポタージュ味、特盛りセット】でございませう」  
「めっちゃ安いし料理ですらねえっ!?!」

なんと、高級料理と期待していた物は子供の小遣いでも買える駄菓子だった。厳密に言うと、王都からの輸送費が上乘せされているので高級菓子の値段になっているのだが、目の前にあるブツが駄菓子であるという事実は変わらない。

「おおおおおおおい、何だよコレは!?! この状況でんまい棒とか予想外にも程があるだろ!?! ガツカリするよりビックリしたけど、なんでコイツがココにあんだよ!?! ファインタジーでこんなの出たら、アニメで声優出演しちゃった原作者並に場違いだろうが!?!」

「フン! あのような『誰が得すんだよ』と関係者に小一時間ほど問い質したくなるようなムカつくファンサービスと一緒にするな。このんまい棒は、熱烈なファンであるこの俺がリスペクトの念を込めて忠実に再現したものだからなあ!」

「やっぱ、テメエの作業かよっ!?!」

何となく予想していたが、当たっても嬉しくなかった。これはアレだ。ウイズの店で売られていた焼きそばパンと同じオチだ。

「異世界でんまい棒作るとか、マジでお前ナニやってんのお!! グローバル化の時代といつても、色々垣根を飛び越え過ぎだろ!!? そもそも、世界観に合つてねーし! こんなしよーもないモンは俺の胃液で溶かしてくれるわっ! ガツガツ、モグモグ!」

「あつ、コラツ、止めろ!!? 俺のんまい棒を全部食うな!」

「ああん? 駄菓子ぐらいでガタガタ騒いでんじやねーよクソが。つーか、このんまい棒すつげえ旨くないんだけど? スナック部分がモツサリして食いにくいし、コーンの味も微妙だから、コーンポタージュつーよりコーンサボタージュつて感じだぜコレ。大体、甘党の俺はチョコ味の方が好きなんだから、最初から気を使つてそつちを注文しやがれよ?」

「きつ……きつさまあーっ!! 人が大人しく聞いていれば好き勝手言いおつてえーっ!! 俺の頼んだんまい棒を食い散らかすだけでは飽き足らず、我がフェイバリットフレーバーであるコーンポタージュ味をさらりとテイスリ、あまつさえ、お取り寄せしていないチョコ味を出せなどという無茶振りまで強要するとはっ!! お前はそれでもサムライかあああああああつ!!」

「んまい棒でキレてるテメエなんざ、サムライ以前のバカじゃねえか!」

銀時のツツコミは正しかったが、傍若無人な振る舞いをしてる彼の方も十分に大人げない。自分の好物をバカにする行為に堪忍袋の緒が切れた桂は、勢いよく席を離れて

腰の物を抜刀する。

「刀を構えろ銀時!! 今日こそ我が剣でお前の腐った性根を叩き直し、その死んだ魚のような目をプリ〇ユアみたいに純真無垢なキラキラアイにしてくれるわっ!!」

「ほう……戦闘力のインフレが進み過ぎて、最近巷じゃ『人間じゃないんじゃね?』と噂されてるこの俺とやろうってのか?」

ケンカを売られた銀時は、額に青筋を浮かべながら桂の前方に進み出る。その手にはすでに洞爺湖が握られており、ケンカを買う気満々である。

途中までは呆れた様子で静観していたカズマだったが、これは流石に洒落にならないと慌てて止めに入る。

「ちよつ、止めるよ二人とも!? んまい棒でケンカするとか、いい大人のやることじゃないから!!」

「黙れクソガキ!! エロ本も買えねえ分際で大人のケンカに口出しすんな!!」

「そう、これは言わば大人のけじめをつける戦い……ゆえに、子供は口出し無用! そこで静かに見ているがいい!」

「あつはい、どうもすみません……」

二人のサムライから殺気を込めた眼で睨まれたカズマはさすがと引き下がる。

「(お前達の方が子供だろとつっこみたいところだけど、めっさ怖くて言い返せねえーっ

「！）」

歴戦のサムライにメンチを切られては、パンピーのカズマに抗う術はない。しかも、追い打ちをかけるようにKYなアクア達がビビった彼をバカにしてくる。

「ブークスクス！ カズマったら、カツコつけて仲裁しようとしたクセに返り打ちにあっちゃって、ちよー情けないんですけど！」

「まあ、いかにもヘタレなカズマとしては至極妥当なオチですね」

「しかし、あれほど見事な負け犬っぷりはなかなかお目にかかれないぞ！ できれば私が代わりたいくらいだ！」

「コンチクシヨオオオオオオオオツ!? ちよつと良いことしただけなのに、何でこんな目に遭うのおっ!?!」

理不尽な扱いを受けたカズマは無力な自分を嘆いてへこむ。そんな彼をあざ笑うかのように間抜けなケンカが開始される。

意を決した桂は、刀を反転して峰打ちの構えにすると、間髪入れずに飛び出した。

「我が怒りを思い知れや腐れ天。パアアアアアアアアアッ!!」

間抜けなかけ声と共に一瞬で間合いを詰めた桂は、鋭い斬撃を振りおろす。その動作はあまりに速くて周囲の者は反応すらできていないが、同等以上の達人である銀時は難なくそれを受け止める。



「けっ！ こいつマジでキレてやがるぜ！」

「古来より、恋と食い物の恨みは恐ろしいと決まっているっ!!」

刀を交えた二人は、仲良く罵りあつた直後にすさまじい剣舞を開始した。目にも止まらぬ速さで互いの刀を打ちつけあい、嵐のような攻防を繰り広げる。

それはまぎれもなく達人同士の戦いであり、目撃したカズマ達はあまりの迫力に度肝を抜かれる。

「なっ……」

「……なんじゃこらあああああああああっ!!」「……」

バカなマダオだと思っていたアラサー野郎共の豹変振りにギルド中の冒険者達が驚きの声を上げる。見慣れている長谷川は呆れ顔をするだけだったが、新参者のカズマ達はそうはいかない。

「えっ、ちよっ、ウソでしょ!?! あの人達、とんでもなくバカなクセにこんな強かったのおーっ!?!」

これまでサムライという存在と関わったことがなかったカズマは、彼らの戦闘力を知って戦慄する。んまい棒をきっかけに最終決戦レベルのケンカするとか、こいつらある意味、魔王軍よりもヤバいんじゃないかね？

なんてことをカズマは思ったが、おかしな状態が続いている女性陣は真逆の反応を見

せる。

「見直したわよ銀時！ 流石は宇宙最強のサムライね！ 今までは『いい年こいて木刀持ち歩いてるこつ恥ずかしいドS野郎』って密かにバカにしてたけど、これなら女神の従者として合格点をあげてもいいわ！」

「ほう、宇宙最強とは何とも素晴らしい響きですね！ サムライとやらが意味不明ですが、最強の爆裂魔法を操る私の相棒としてふさわしい二つ名です！」

「おい、なにを言ってる二人とも！ 今はふざけている場合ではないだろう！ 早くケンカを止めなければ、どちらもただでは済まなくなるぞ！ しかし、今あそこに飛び込めば、私も無事ではいられまい！ 嵐のごとき攻撃によつて鎧や衣服は見るも無惨に引き裂かれ、ギルドの男達に裸体を晒された私は騎士にあるまじき恥辱を受けることになるだろうっ！ そう考えたら、いろんな意味で身震いせずにはいられないっ!!」

「お前らもつと現実見ろよ!! あいつらだけでも厄介なのに、こつちの方まで問題起こすなっ!!」

頬を赤く染めながらマイペースなことをほざいてるアクア達にイラツとしたカズマは、怒り気味にツツコミを入れる。クソみたいな理由のケンカなのにあのバカ共に見惚れるとか、頭おかしいと思えねえーっ！

嫉妬を抱いたカズマは八つ当たり気味に罵るが、周りの冒険者達もまた、次元の違う

二人のバトルにどんどん引き込まれていく。

「おいおい、あの銀髪野郎は何者なんだよ!? ドラゴンスレイヤーのカツラさんと互角に渡り合ってるぞ!」

「つーか、こいつら人間なのか!? 動きがすごすぎて逆にキモいぜ!」

「きゃーっ!? 巻き添え食ったダストが壁まで吹っ飛ばされたあーっ!」

何か約一名だけ酷い目に遭っているようだが、二人のケンカによつてギルド内が盛り上がっていく。

そんな所へ慌てて飛び込んできたルナは、これ以上騒がれては堪らないと、すぐさま仲裁に入る。

「二人とも止めてくださいっ!! ギルド内での揉め事は固く禁止されていますっ!!」

「ああん!? これが揉めてるように見えるのかよ姉ちゃん? こんなのは俺たちにとつちや昼休みにバスケットしてるようなモンだよなあー、ツラ?」

「ツラじゃない、桂木花道だっ!」

「すみませんけど、まったく意味が分かりませんっ!」

ルナの仲裁は、不条理なへ理屈で突っ返された。

「ダ、ダメだわ! ステータスが出鱈目なこの人たちには常識も通用しない!」

こうなったらもう、彼らと同じ出鱈目仲間頼るしかない。最近よく話しかけてくる

グラサン野郎に目を付けたルナは、巨乳を揺らしながら助けを求める。

「ハッ、ハセガワさん!! お願いですから、ギントキさんを止めて下さい!! これでもしギルドの評判が落ちてしまったら、私の婚期にまで悪影響がっ!!」

「えっ、えっつとお……ルナさんの必死さは十分伝わってきてるんだけど、それはできねえ相談だな。なにせ相手は、悪名高い【白夜叉】だし」

「えっ……白夜叉ですか?」

銀時の異名を聞いたルナは、聞き慣れない単語に首を傾げる。

「夜叉って確か、ここよりずっと東方の国にいてという亜神の一種だと聞いたことがありますけど……。まさか、ギントキさんは、亜神に等しい力を持つているのですか!」

「まあ、おおむねそんな感じかなあ? 頭の方は亜神というより中坊程度の阿呆だけど」

とても信じられないような話に訝しがるルナだったが、目の前で行われている戦いは確かに人間の域を超えている。たまたま傍にいて話を聞いていた者達の一部はその事実を認め、モヒカン頭の荒くれ親父が代表するように宣言する。

「フッ、白夜叉か……。こいつあ、とんでもねえ大物が現れたもんだぜ。もしかすると俺達は今、歴史の転換点に立ち会っているのかもしれないねえ……」

モブのクセにやたらとカッコいいセリフを吐いて新たな英雄(?)の出現を喜ぶ。

こうして、白夜叉という二つ名は徐々に広まっていくことになり、銀時が何かをやらかす度にその名で呼ばれることになる。

ただし、今は単なる迷惑野郎ではない。んまい棒を原因としてケンカしている奴等など、冒険者以前に大人としてダメだろう。

「はあ……。いつまで続くのこの茶番？ 俺もう朝飯食べていいかな？」

お祭り好きな連中が歓声を上げる中、小さな声でカズマがぼやく。この手のやり取りは、いかにもギルドで起こりそうな冒険者っぽいイベントだけど……あらゆる意味で次元が違くない？

異世界に抱いていた淡い期待をマダオ達にぶつ壊されたカズマは、どっちでもいから早く負けろと心の中から邪念を送る。すると、彼の願いが届いたのか、この傍迷惑なケンカは唐突に終わりを迎えた。

「あれっ？ もしかしてあそこにいんの、かの有名なマリオさんじゃね？」

「なっ、なんだとおっっ!! 異世界ならばあるいはと密かに期待していたが、よもや本当にあの方がっ!!」

「いるわけねーだろバカヤローっ!!」

「はぶろっ!!」

銀時の卑怯な罠にまんまと引っかかった桂は、マリオを探そうとした隙を突かれて洞



「はいはいどうもご苦労さん。おーいマスター、パフェもう一つ追加ねー!」

「す、すげえ!! アクア達の傷害行為を何食わぬ顔でスルーして、なおかつ何もなかったかのようにパフェを注文するなんて、真正正銘のクス野郎だぜ!! しかも、またダクネスの背中に座ってるしっ!?!」

「なっ!?! お前いつの間に!?!」

「はあっ、はあっ! このパターン化された恥辱プレイ! 単純ながらも癖になりゆっ!」

「ああもうイヤだ、この人達っ!!」

朝からずつと変態共に振り回されればなしなカズマは、ツツコミ役の過酷さを知って嘆いた。何ていうかもうね、精神的に色々くるね!

「(うおーっ、早く帰ってきてくれノルン! やさぐれたお兄ちゃんが闇墜ちしてしまう前にっ!)」

思わず、愛すべき相棒にヘルプを求める。

すると、彼の意志が伝わったかのようなタイミングでノルングラスを持ったクリスがやって来た。数分前に到着した彼女は、カズマ達と同様にサムライ同士の超次元ケンカを観戦して、しばらくフリーズしていたのである。

そして今、銀時のイスになっているダクネスを見て再び固まってしまっていた。

「ちよっ!? ナニやってんのダクネスーっ!?」

「ああつ、クリス!? こんな屈辱的な姿をお前に見られてしまっただなんて! この素晴らしい巡り合わせに感謝します、エリス様!」

「そんなの感謝しないでよ!」

いろんな意味で、クリスにとってはいい迷惑である。

しかも、彼女をイスにしているドS野郎はもつと厄介な相手だし……。

「(ダクネスの扱いがアレなのはともかく、彼の強さは凄いですね……。お姉様の話通りか、それ以上かもしれません)」

暢気にパフェを食べている銀時をジト目で見つめながらクリスは思う。確かに、カグヤ先輩が気に入るような問題児ではあるが、冒険者としての実力は間違いなくトップクラスだ。

「(性格には難ありだけど、英雄レベルの戦闘力を持っていることは評価せずにはいられませんね。しかも、あのプライドの高いアクア先輩まで手懐けてるし……。つていうか、懐き過ぎてる!?)」

クリスが視線を向けた先では、我が目を疑うような光景が起こっていた。なんと、あのアクアが、シッポを振る子犬のごとく銀時にべたついているのだ。

「ところで銀時! この際ズバリと聞いちゃうけど、正直言つて私のことをどう思っ



いるのかしら?」

「ああ? んなもん前から言ってるじゃねーか。テメエなんざ『ホイミを覚えて使い道が無くなったやくそう』ってところだよ」

「こんだけアピールしてるのに、やっぱりふくろのゴミ扱いな?! で、でも、女神である私に対してそこまではつきり言えるあなたは、少しだけ男らしく思えなくもなくてよ?」

「今のどこにもデレる要素が無いんだけど!? なんでツンデレしちゃってるのーっ!」

これは何かの冗談だろうか。まさか、恋人にするなら年収100億円以上のイケメン以外はお断りと明言しているアホな先輩が、理想とはほど遠いマダオにここまでなびくとは……。

「(いったいアクア先輩にナニがあったのーっ!?)」

知り合いの豹変っぷりに驚いたクリスは、思わずエリスとしての表情を覗かせてしまう。そんな彼女の様子を目敏く見ていたカズマは少しだけ気になったが、今はノルンを返してもらおう方が先だと声をかける。

「おーいクリス! 待ってたぜ!」

「えっ? ああ、カズマ! これ、貸してくれてありがとね!」

カズマの声で我に返ったクリスは、笑顔でお礼を言いながらノルングラスを返却す

る。しかし、その後の彼を見てクリスの笑顔は凍り付く。

「おおつ、我が義妹よ！ 会いたかったぞーっ！」

《まったく、カズマは甘えんぼだなあーっつて、ボクの依り代に頬摺りしないで!? あまりにキモくて鳥肌がっ!!》

「ちよっ、お姉様になんてことを!?!」

「ん？ オネエサマってなんのこと？」

愛すべき先輩に対するセクハラ行為にムカツとしたクリスは、ついネタバレ的な発言をしてしまい、怪訝そうな顔をしたカズマに慌てて言い繕う。

「えっ？ あっ!?! いやっそのっ!?! あそこにいる銀髪の「お兄さん」がちよつと気になってさあーっ！ 確か彼は、キミ達の仲間だったよねえーっ?」

「ああ、あの人は坂田銀時って名前の遊び人だよ」

「へっ？ 遊び人？」

「ゲームみたいで笑えるだろ？ それでもギルドに正式登録されてるれっきとした職業なんだぜ？」

「ごまかすついでに銀時のことを聞いてみたら更なる問題が発覚した。どうやら、桂と同じく彼の職業にも異常が起きているらしい。

「（やはり、ダクネスのためにも彼のことを調べなければ……）」

アクアの異常も気になるし、こうなったら何が何でも彼に接触するべきだろう。おかしな使命感に燃えたクリスは、密かに決心を固めて頷く。

しかし、そんな彼女の覚悟など知る由もないカズマは、何故かいやらしい顔をしながら空気を読まない会話を進める。

「ところでクリスさん。何か大事なことをお忘れではありませんか？」

「……ん？ ああ、もしかしてお礼のこと？ もちろんちゃんと覚えてるよ！」

「おっと、そいつあ話が早い。ならば早速……」

「スキルを習得したいと思ってるキミに、とつても便利な盗賊スキルを教えてあげよう！」

「つて、俺は選択出来ないのねっ!？」

もちろん『ギヤルのパンティー、おーくれ!』なんてエッチなお礼が許されるはずもない。

とはいえ、クリスの提案も魅力的だ。恐らくは、長谷川とスキルについて話していたのをこっそり聞いていたのだろうが、実にタイムリーでありがたい展開である。

「とりあえず、どんなスキルがあるのか教えてくれよ」

「そうこなくっちゃ! 盗賊スキルは使えるよー!」

素直に乗ってきてくれたカズマにニヤリと笑うと、クリスは簡単に説明を始める。彼

女が紹介したスキルは、罨の解除、敵感知、潜伏、窃盗といった内容で、戦闘スキルは一つも無いが、それらは確かに初期職業の自分にとって都合が良いものばかりだった。

「……つてな感じで習得にかかるポイントも少ないしお得だよ！」

「オーケー、分かった！ お願います！」

直感的に習得するべきだと判断して即答する。何となく自分の性に合っている気がするし、なによりも美少女に教えてもらえるって所がいい！

すると、同じことを考えたのか、後ろで聞き耳を立てていた長谷川までその話に便乗してくる。

「なあクリスちゃん。よかったら俺にも盗賊スキルを教えてもらえないかな？」

「ん？ あなたも冒険者なのかい？」

「あ、ああ。(仮)が付いてるけどな」

「ふうん……。まあ、別に構わないよ。カズマと一緒に見ていければ、ついでに覚えられるしね。でも、その代わりに、あのギントキって人も連れてきて欲しいんだけど……」

「それまたなんで？」

「ほら、遊び人なんて職業、これまで一度も聞いたことないし、やっぱりスキルも変なのかなーってすつごく興味があるからさ！」

機転を利かしたクリスは、長谷川の申し出を利用してごく自然に銀時との接触を試み

る。もちろん、長谷川の方には異論など無く、快く引き受ける。

「ああ、それなら丁度良いや。実は俺も興味があつたから一緒に頼んでやるぜ」

長谷川はそう言うのと、カズマとクリスを伴つて銀時の元へと向かう。

「おい銀さん。紹介したい子がいるから、ちよつと顔貸してくれよ」

「はあく？ 碌に話が進んでねえのに、また新キャラのご登場かよ？ そういうのはも

う間にあつてるから、ちよつくら謝礼でもあげてとつとお帰りもらいなさい」

パフェに集中している銀時は、顔すら向けずに追い返そうとする。めぐみんとダクネスという失敗例を踏まえての対応策なのだが、どう考えてもジャンプマンガの主人公がやることではない。

「つたく、口を開けば髪の毛みてえに捻くれ曲がつたことを言いやがつて……。こいつはいつもこんなだから、気にしないで進めちまおうぜ」

「は、はあ……」

問答無用で無視してきたドＳ野郎にクリスはドン引きするものの、このまま黙つて引き下がるわけにもいかないので普段通りに話しかける。

しかし、大人げない銀時もまた、黙つてそれを受け入れるはずがなく、彼女の姿を見るなり、エゲつない口撃を加えてきた。

「やあ、初めまして！ あたしはクリス……」



「おいコラ、ギントキッ!? 私の胸まで巻き添えにした貧乳いちめは止めないかっ!? そんなに胸ばかり攻められたら、恥ずかしくってドキドキしちゃうじやありませんかっ!?」

アクアと同様に様子がおかしいめぐみんは、文句を言いながらも嬉しそうにモジモジする。そこだけ見れば可愛いで済むんだけど……。遊び人スキルでおかしくなっているという現実を知っている長谷川とカズマは、なんだかやるせない気持ちになっとう。

しかし、原因を知らないクリスだけはめぐみんの様子を深読みし、銀時が幼い少女にイケナイことをしたのではないかと疑ってしまう。

「ま、まさか!? 貧乳に興味が無いフリをしないと、裏ではこんなロリっ子に手を出してたのーっ!?」

「またしてもロリっ子扱い!? この私を侮辱するのもいい加減にしてもらおうか!

で、でも、手を出されたという点については認めざるを得ませんね……(恥)」

「ちよっ!? なに誤解されるよーなことを言い出してくれちゃってんの!? これはアレだよ! 試しに使ったスキルの効果が出まくってるだけだっつーのっ!」

めぐみんの爆裂発言に焦った銀時は、ロリコンにされてはたまらないと必死に抵抗する。その際にスキルという単語を聞いてクリスが瞳を光らせる。よしいいぞ。これは

遊び人スキルを調べるチャンスだ。

「ふうくん？ 人の心にこんな影響を与えるスキルなんて聞いたこともないけどなあ？ その話って本当なのお〜？」

「いやマジで本当だって！ 疑うってんなら、直に使って見せてやるよ！」

「よし、だったら今すぐ見せてもらおうじゃないか！ 丁度、これからカズマ達に盗賊スキルを教えようとしてたところだから、ついでにそっちも済ませちゃおうよ！」

「おういぜい！ テメエの身体で俺のスキルを思う存分味わわしてやらあ！」

簡単な挑発にあっさりと乗ってきた銀時に対して、クリスは不敵な笑みを浮かべる。正直言っただけの不安を感じるものの、銀時を調べる必要がある以上、あえて火中に飛び込むしかない。

「（お姉様が意味深なことを言っていたし、何となくイヤな予感がするけど……これもダクネスのためよ！）」

健気なクリスは、自分の身を危険に晒してでも友達のために尽力する。たとえば彼女がドS野郎のイスになって興奮しているDMの変態だとしても……。

なんてことを思っていたら、そのダクネス自身が実験台に志願しちゃった！

「我が主っ！ そのスキルの相手役は、私に任せてくれないかっ!？」

「イスは黙って汚え尻に敷かれてろ」



「くっふうくんっ！ 敗北を喫した女騎士には、自由など一欠片も無いということかっ  
！」

「あまりにも自由過ぎて、こっちが迷惑してるんだけど?」

DM騎士の申し出は即座に却下された。ナチュラルにメス豚扱いを望むような変態では、スキルで心に変化が起きてもどうせ分かりやしないっつーの。

もちろん、現在進行形でスキルの効果が持続しているアクアとめぐみんも意味がないので、彼女達はギルドに放置していくつもりである。この状態についてこられても面倒事が増えるだけだし……。

「っつーわけで、お前達は留守番な」

「ええーっ!? 何で尊いこの私を仲間外れにするのよーっ!? 昨夜はあんなに情熱的な時間を過ごした仲なのにつ!!」

「やっぱり、アレは単なる遊びだったのですね!」

「真正正銘、遊びだったろ!? 昨日はUNOで盛り上がって、無様に負けたお前達が罰ゲームを食らっただけだろ!」

留守番に納得いかない二人は紛らわしい言い方をして銀時を責め立てるが、実際はカードゲームで遊んでいただけだったりする。もう少し詳しく言うと、ウイズの店で買ったUNO（桂の作ったパクリ商品）で銀時に敗北した二人が、罰ゲームとして遊び

人スキルの実験台となったのだ。

「つたく、そんな俺のスキルを喰らいたいのかお前らは？ 仕方がねえな。ここで大人しく待っているとか約束してくれるなら、今夜もクレバーに可愛がってやるよお！」

「おっふ?!」

銀時の言葉に何故かおふるアクア達。客観的にはクス発言でしかないのに、ナニを感じたのか頬を真っ赤に染めてしまう。

「し、しようがないわね！ あんたがどうしてもって言うのなら、今回だけは我慢してあげるわよ！」

「その代わり、今夜はあなたにとことんサービスしてもらいますよ！」

「あーもう、早く戻れよお前ら！」

お妙にストーキングする近藤並のしつこさで付きまといつてくる駄女神と中二病に、流石の銀時も辟易する。そもそも、この状態はいつまで続くのだろうか。気になった長谷川は小声でたずねる。

「なあ、銀さん。これってちゃんと治るんだらうな？」

「んー、まあ、たぶん大丈夫なんじゃね？ 冒険者カードにも『効果は半日ぐらい持続す

るかも?』って書いてあるし」

「随分とアバウトな説明だなあオイ!？」

どうやら、彼の冒険者カードは持ち主に似ていい加減らしい。

ただ、幸いなことに、スキルの効果はもうすぐ切れると思われる。スキルの習得イベントが終わる頃には、いつもの二人に戻っていることだろう。たぶん。きつと。恐らくは……。

まあ、何はともあれ、イベントの発生条件は整った。後は、挑戦あるのみである。

「さて、バカ二人も納得したことだし、さっさと行くぞお前らー」

「あつ、待つて！ ギルドの近くに良い場所があるから案内するよ！」

銀時を呼び止めたクリスは、思惑通りにいったことを喜びつつ場所案内を買って出る。そこで自分がとんでもない目に遭わされることになるとも知らずに……。

果たして、この先どのような展開が待っているのだろうか。その真相は、未来を見通せるノルンにしか分からない。

《許しておくれクリスちゃん。ボクはどうしてもアレを生で見たいんだ……》

「（おいノルン！ 何だよアレって!? 俺もすんごい気になるんだが!?）」

カズマも興味津々なアレとはいったい何なのか。次回、クリスの身にかつてない衝撃が走る！



銀時達がギルドで騒いでいる頃、遠く離れた紅魔の里では、ゆんゆんという名の美少女が近場の森へ出かけようとしていた。

「よし、今日もがんばるぞー！」

ゆんゆんは、発育の良い胸を揺らしながら可愛らしく気合いを入れる。

彼女は今、同じ年でありライバル視しているめぐみに勝つため魔法の修行に励んでいる最中だった。これから里の外へ行くのもレベル上げが目的である。

「スキルポイントも順調に貯まってきてるし、これならもうすぐ上級魔法を習得出来るわ！」

まるで誰かと話しているかのように独り言を言うゆんゆん。何となく奇妙な光景だが、筋金入りの「ぼっち」である彼女にとっては、大体いつもこんな感じだ。

「……………寂しくなんて、ないもん」

もちろん、孤独を強いられているんだということはゆんゆん自身も自覚しており、時々それを痛感しては死んだ目をして落ち込んだりする。

「……ただ、私は一人じゃない！ こんな時には「あの子」がいるもの！」

ベルトに付けた道具入れから筒状の物体を取り出したゆんゆんは、何故かそれに向かつて楽しげに話し始めた。

「あなたがいるから大丈夫だもん。ねえー、ジャスタウエイ？」

なんと、ゆんゆんが話しかけているのは、銀時達も発見したあのジャスタウエイだった。これは以前、ウイズの店に立ち寄った際に偶然見つけたもので、目と目が合った瞬間に『ボクと友達になつてよ』という都合の良い幻聴を聞き、思わず衝動買いしてしまったものだ。そして現在、ジャスタウエイは、一緒に出歩ける【疑似友達】として彼女に愛用されていた。

「えっ、張り切るのもいいけど無理はしないでね？ うん、私は大丈夫だよ！ 心配してくれてありがとう！」

なんかもう痛々しくて正直見ちゃいられない。

それでもぼつちのゆんゆんは、健気に（？）一人芝居を続ける。

「だけど、油断は禁物よね。この間、襲いかかってきた正体不明のゴリラ型モンスターは、追い払うのがやっとだったし……。アレとまた出会っちゃったら、かなりイヤだなー」

彼女の会話にジャスタウエイが返事をすることはない。けどいいの。友情とは、見返りを求めるものじゃないんだから。

「でも、心配する必要は無いと思うよ。だって、そのモンスターはオークの縄張りの平原地帯へ逃げちゃったから、たぶんもう今ごろは……」

何か、記憶を思い出している内に独り言を楽しんでいる気分じゃなくなってきた。

ゆんゆんは、哀れなモンスターの末路を想像しようとして止めた。

「そうよ、私は悪くないわ。悪いのは全部、このおかしな世界の方なんだから！ 私の名前が変なものも、私に友達が出来ないのも、すべては世界が悪いのよっ!!」

何となくニートの考え方で自己弁護しつつ、ゆんゆんは里の外へ出かけていく。自分のことを観察していた少女の存在に気づくことなく……。

「とうとう無機物にまで話しかけるようになるとはね。哀れなり、ゆんゆん」

その眼帯をつけた少女……あるえはニヒルにつぶやく。気分転換のため散歩していた彼女は、偶然ジャスタウェイと会話しているゆんゆんを目撃したのだが、彼女を観察することで作家としてのインスピレーションを大いに刺激された。

「ふむふむ……。『孤独に負けた族長の娘は、無機物を相手にしてその身を慰めるのであった』……。次の作品は、アブノーマルなアダルト路線で行くとするか」

こうして、ゆんゆんの奇行は、作家志望のあるえによって卑猥な小説ネタにされてしまふのだった。

## 第16訓 必殺技は無闇に出すな

スキルイベントを行うために外へ出た銀時達は、クリスの案内でギルドの裏手にある広場にやって来た。広めの路地裏と言った方が正しいこの場所は普段から人影も無く、多少騒いでも苦情は出ない。その点を十分に確認した銀時は、さっさと用事を済ませることにした。

「さあて。それじゃあ早速、俺から行くぜ？」

「うっ……何かすっごく悪そうな顔してるんだけど!？」

どう見ても悪役な笑みを浮かべる銀時にクリスがビビった声を出す。話の流れで彼女自身が遊び人スキルを試すことになったのだが、正直言って不安しかない。

「(だって、アクア先輩があんなになっちゃってるんだよ!?) いくら先輩がチョロいといつても、人間のスキルで女神の精神に影響を与えるなんて、普通だったら有り得ないよ!?)」

冷静になったクリスは、かなりヤバい状況になってしまったことによく気づいて焦り始めた。純粹に興味があるし、ダクネスのためにも調査を進める必要があるけど……はつきり言っただけ怖いです!







あまりに予想通りの結果に長谷川がつっこむ。こんなこつたるーとは思ってたけれども、銀時の遊び人スキルは、ドラクエ風のソフトなヤツではなくてアダルト風のハードなヤツだった。

「ふざけんじやねーぞ、ドS野郎!! これのいったいどこらへんが冒険者のスキルなんだよ!!? こんなもん、お前が元々習得してたSMスキルと変わらねーだろっ!!?」

確かに、そう言われても仕方がない。最初のバインドは魔法みたいだったし、ムチも何故かピンク色の光を放っているが、その後のやり取りはAVとかエロ本で見かけるようなSMプレイでしかなかった。

しかし、これでもファンタジーな要素は一応ある。

「なに言ってるんだよ長谷川さん。俺のムチにはちゃんとした特殊効果があるんだぜ?」

「はあ? それってムチがうつすら光るだけじゃねーの?」

「もちろん、こいつはそんな程度のもんじゃあないぜ!」  
「ラブ・ウィップ」を使ってダイレクトアタックが決まった時、相手プレイヤーが受けたダメージは快感ポイントとして加算され、攻撃を受ける度にマゾの呪いが進行していく! さらにここで【調教】スキルの効果発動! このスキルを発動中に相手プレイヤーがダメージを受けた時、俺に對する服従心がダメージ分だけ増大していき、ターンが終了するまではメス犬状態が持続される! どうだお前ら! これが俺の編み出した、SMデュエル最強コンボだつ

!

「なんか遊戯王的に説明してまとも感出そうとしてっけど、中身は結局、SMプレイではないよねソレ!?!」

見事なまでに銀時の性格を主張しまくっている遊び人スキルに心底呆れる。ようするに、「ラブ・ウィップ」と【調教】のスキル効果で、ノーマルな人間ですら強制的にDM化してしまうというわけだ。

何と言うか、いろんな意味で恐ろしい力を持ったスキルであり、その正体を知ってしまったカズマとダクネスは思わず身震いしてしまう。

「ご、ごくり……。あれを使えば、元ニートな俺でさえも美少女ゲット出来るんじゃないやねっ!?! ああ、これこそ異世界転生ドリーム! あのスキルを習得して、ハーレム王に俺はなるっ!!」

「ご、ごくり……。あれを食らえば、どんなに清純な女性であってもDMに変わってしまうのか!?! ああ、なんとという奇跡なのだ! よもや、この快感を親友と分かち合える時が来ようとは! 女神エリスよ、この幸運に心から感謝しますっ!!」

「バカなニートとDMな騎士までDSスキルに飲まれちまったっ!?!」

あまりに異常な光景を前にして、カズマ達の思考まで毒されてしまう。

そうしている間にも、クリスはお尻を叩かれ続け、徐々に遊び人スキルの虜となつて

い〜く……。

「ほおーら、ここがええのんかあーっ!」

「あんっ! やんっ! どうしてえっ!?! なんでこんなっ! お尻をぶたれてっ! 気持ち良いとっ! 感じるのおんっ!?!」

どこからどう見ても警察沙汰な光景だが、クリスの表情はどこか嬉しそうでやたらと色っぽい吐息を漏らす。遊び人スキルの効果によって、彼女はすでにマゾの快感を植え付けられてしまったのだ。

「はあっ、はあっ! なんだろうこの気持ちっ!?! 酷いことをされる度に、あたしのナニかが満たされていくっ!?! この不思議な感情が、ダクネスを惹きつけてるのっ!?!」

「ああ、そうだよお嬢さん! その相反する感情こそが頭のおかしいDMの証! ようこそ、クリス! 変態共のパラダイス、アブノーマルな新世界へっ!」

「ようこそじゃねーよ、クソ野郎っ!」  
「ぶるあっ!」

悪者の笑みを浮かべる銀時の顔面に、正義と怒りを込めた長谷川のドロップキックが炸裂する。一応、クリスの同意を得ているとはいえ、良識ある大人としてはヤツの横暴を止めねばなるまい。絵面的には完全にアウトだし……。

「いつてえーっ!?! いきなり、なにすんだよ長谷川さん!?! あんたも好きだろ、こーいう

の!？」

「違いますーっ!! 俺の好みはOL相手の痴漢プレイ……っつて、そうじゃねーだろ!? ようやくまともな女の子が登場してくれたっつのに、なんでお前は速攻で変態化させちゃってんのお!？」

超希少な健全キヤラであるクリスに癒しを感じていた長谷川は、女神を墮天させようとするDS悪魔の暴虐行為をくい止める。しかし、勇気ある彼の行動は残念ながら遅かった。

頬を真っ赤に染めたクリスは、グルグルと渦を巻いた瞳で銀時を見つめ、恥ずかしそうにもじもじしている。この、ご主人様にいちめられたがっているメス犬のような様子は、ギルドで見たアクアやめぐみんとおんなじだ。

「し、仕方がないなっ! ちよっと恥ずかしいけど、こんなことをされたからには、あたしはあなたを【お兄様】って呼ばなきゃねっ!」

「なぜそうなるっ!？」

まるでしつぽを振りまくる子犬のように嬉しそうなクリスを見て、長谷川達は驚愕する。その仕草はとても可愛らしくて、免疫の無いカズマなどは思わずドキリとしてしまうが、あまりにも状況がおかし過ぎる。気持ちの良い青空の下、亀甲縛りをされた美少女がムチを持った遊び人をお兄様と慕うシーンなんて、ラノベはおろかエロゲーですら



る女騎士とか、あまりに惨めでご褒美過ぎりゆっ!!」

「こいつ、ほんとに遅いな。ポジティブ過ぎて逆に引くわ」

どんな状況でも楽しそうなDMにカズマは呆れてしまう。とはいえ今は、彼自身もちよつとだけ浮かれていた。

「ふっふっふ……。銀さんの遊び人スキルは、この目でしかと見させてもらった。つまりは俺も、アレを習得出来るわけだっ!」

遊び人スキルで遊ぶ気まんまんなカズマは、いやらしい笑みを浮かべながら冒険者カード取り出して、熱い視線をそちらに向ける。確認すべき場所は、中間付近にあるスキルの項目だ。

「どれどれ……よし、あつた!」【タートルシエル・バインド】10万ポイント、【ラブ・ウィップ】50万ポイント、【調教】100万ポイント……って、どれもべらぼうに高いじゃねーか!? なにこの、あからさまにぼったくられてる感じ!?! 必要ポイントまでドSとか、どんだけ根性曲がってんだよっ!?!」

怒りのあまり、冒険者カードを地面に叩きつけてしまう。

「つーか、さりげなく【スマイル】0ポイントなんてゴミスキルが紛れ込んでたけど、そもそも入らんわ、そんなサービス!!」

どこまでも徹底したドSつぷりに、バニルが小踊りして喜びそうなほどの悪感情を放

つ。さらについでに、カズマと同じく期待していた長谷川もまた、残念な結果に落胆する。

「はあく……俺も密かに使ってみてえと思つてたけど、やつぱアレは主人公専用スキルだったかー」

「主人公とは思えないほどの鬼畜スキルなんだけど!!」 あんなもん、魔王退治のいつたいどこで使うのかなあーっ?!

確かに、相手を従順なマゾにするスキルなんて、まともな使い道があるのかと疑わずにはいられない。例えば、サキュバスなどのお色気悪魔に使つてこちらの仲魔に出来たとしても、魔王を倒すロープレというより魔女を墜とすエロゲーだよな?

「ちつきしようっ!! 正直言つて羨ましいぞ!! 俺も可愛い美少女に調教とかしてみた  
いっ!!」

いやらしい妄想を膨らませて嫉妬の怒りが再燃したカズマは、クリスやダクネスとイチャイチャ(?) している銀時に恨みを込めた視線を送る。

しかし、こんなへぼい彼にも美少女に好かれる可能性があった。

《元氣出しなよ、カズマ君。平凡極まりない容姿とクズとしか言いようのない性格が災いして16年間彼女無しだったキミだけど、今この時がモテ期を招くチャンスだからね  
!》



「なんだと、ノルン!? ごく自然に最上級の侮辱をされてた気がするけど、モテ期の話は本当なのかつ!?!」

《もつちろん。なにせボクは、すべてを見通す運命の女神だからね。キミと縁のある女の子と仲良くなるには、クリスちゃんから盗賊スキルを学ぶが吉と出ているよ?》

「(ほう、それは実に興味深いな)」

ノルンの助言に気を良くしたカズマは、あつさりと機嫌を直す。

そうか……とうとう俺にもモテ期が来るのか。そして、その栄光を掴むカギは盗賊スキルにあるという。ならば、ここで確実に習得せねばなるまいて!

「よっしゃ、クリス! 今度は俺に盗賊スキルを教えておくれっ!」

やる気スイッチが入ったカズマは、すぐさまクリスに催促する。しかし、当の彼女はというと、未だに銀時とイチヤつており、嫉妬に燃えたダクネスと女の戦いを繰り広げていた。

「ねえ、お兄様! この後、あたしと宝探しに行かないかな? 幸運の高いあたしにムチを入れまくって馬車馬のように働かせれば、がっぽりお宝稼げるよ?」

「アピールの仕方がDM過ぎて、もはやキャラまで変わってる!?!」

「おのれクリス! 私のアイデンティティーであるDMキャラまで奪うつもりか!?! 愚かな女騎士には、そのいやらしい肉体しか存在意義など無いというのかつ!?!」

「こっちはいつも通りだけど、変な所で張り合うんじゃないっ!!」

こちらをガン無視して欲望につっ走るDMフレンドにツツコミを入れる。不運なことに、遊び人スキルというイレギュラーのせいでカズマにお礼をするという当初の目的がぶっ飛んでしまっていた。まったくもって迷惑極まりない主人公スキルである。

とはいえ、カズマも元主人公。このまま黙って泣き寝入りするほどヘタレな男ではない。

「ちよつと銀さん、なんとかしてよ! ここが俺の見せ場だって、そんな気がして止まないから!」

「つたく、しゃーねーなあ。おいクリス。宝探しの件は、俺の取り分9割つてとこで受けてやつから、今はこいつらの相手をしてやれや」

「うん、分かった! あたしとの約束を守ってくれるなら、お兄様の命令に喜んで従うよ!」

「あるえ、おつかしいなー? 元からスキルを教えくれるって話だった気がするのだが?」

状況を利用してちゃっかりクエストの約束を取り付けるクリスに呆れてしまう。これまででは遊び人スキルの効果でおかしくなっているだけだと思っていたけど、実は素のまま楽しんでいないのではないかと疑ってしまうほどにノリノリである。

「あーなるほど。『類は友を呼ぶ』ってことで、ダクネスの友人にもマゾの素質があったわけね？」

そう思ったら、なんか悲しくなってきた。異世界に来て出会った女の子はみんな美女ばかりだけど、何故かそろって残念過ぎじゃね？

「くっ、ようやくまともな美少女に出会えたと思っていたのに！　またしても俺の期待は裏切られてしまったのか！」

「ん？　今なにか言ったのかい？」

「いんや別に？　そんなことより、俺にスキルを教えてくださいよクリス先生！」

良くも悪くも前向きなカズマは、つい先ほどまで変態扱いしていたクリスに媚びる。何故なら彼女は、モテ期という福音を彼にもたらす存在だからだ。

「俺のモテ期がかかっているらしい、このスキルイベント……。そのきっかけをくれたクリスは、まさに幸運をもたらす女神そのもの！　そんな大恩ある彼女が変態であるわけがない！」

勝手にマゾ扱いしていた自分を余所にクリスを祭り上げたカズマは、彼女に向かって手を合わせる。

「ありがたや、ありがたや」

「??　なんかよく分からないけど、とにかく始めるよ？」

まさか自分の正体と同じ扱いをされているなど露知らず、クリスはようやく本題に入る。思わぬアクシデントで脱線してしまっただが、ノルンの頼みを叶えなければ。

「じゃあ、まずは【敵感知】と【潜伏】からいってみようか。ハセガワも準備はいいかい？」

「おう、バッチ来いや！」

生徒達に確認を取ったクリスは、軽く頷いてから行動を始める。

とりあえず、今回はノルンから頼まれたスキルのみを教えていくつもりだ。クリスとしては【罨解除】と【宝感知】も勧めておきたい所だが、どちらもここでは実践できないので、別の機会に保留しておく。

「そんなわけでお兄様、少し手伝ってくれないかな？」

「ああん？ 手伝えって何させる気だ？」

「とりあえずお兄様は、ちよつと向こう向いてよ」

「やれやれ、今度は手品の助手かよ」

ぶつくさ文句を言いながらも銀時は指示に従う。

すると、クリスは銀時の後方にあるタルへ向かい、何故かその中に入り込んだ。その様子を見たカズマ達が不思議に思っていると、彼女は何故か銀時の頭に石を投げ当て、そのままタルの中へ身を隠した。

「……なあ長谷川さん。ひよつとして、これが「潜伏」スキルなのかなー？」

「まあ、ダンボールに隠れるよりはバレにくいんじゃないかね？」

「ああん!! あんなもんでごまかせんなら、スネ○クさんも苦労しねえよ!!」

「ぎ、銀さん!! とつても怒っていらつしやる……!」

当然あんなマネをされて、この男が黙っていられる訳がない。凄惨な笑みを浮かべた銀時は、ぽつんと置かれた一つのタルへと真つ直ぐに向かつていく。

一方、その中に隠れているクリスは、外から伝わってくる異様な気配にめっさビビつていた。

「敵感知……、敵感知……って、なにこのすごい怒りの気配!! 悪感情がエゲつなくて、

悪魔が食べてもリバーズしちゃうよ!!」

「そりゃあそーだろうよお!! なんせ俺あ、女神ですらメス犬にする最凶のドSだからよお!!」

「ひいーっ!!」

タルの上部から見下ろしてくる恐ろしい眼光に、無力な少女が悲鳴を上げる。この状況ではもう、どこにも逃げ場などは無い。ヤンチャが過ぎたクリスは、蹴飛ばされたタルの中から成す術も無く引きずり出され、再び「ラブ・ウィップ」の餌食となってしまうのだった。

「オラオラ、鳴けや！ メス犬がああああああつ！」

「ああーんっ！ あんっ、あんっ！ 恥ずかしいのに、なんかイイよおおおおおっ  
！」

「つて、おいもう止めろっ!? マジでマゾになっちまうからっ!?」

クリスの様子に危機感を抱いた長谷川がつっこむ。アレはもう、ムチでお尻を叩かれることに快感を得ている顔だ！

げに恐るべし遊び人スキル。間抜けながらもすさまじい効果に、カズマだけでなくダクネスさえも戦慄する。

「くっ！ 最初はクリスが目覚めてくれたことを無邪気に喜んでいたが、よく考えるとこれはマズイぞ！ このままクリスがDM化したら私とキャラが被ってしまうし、酷い目に遭うチャンスまでもが奪われてしまうじゃないかっ！」

「気にするのはそこじゃねーだろ!? 友達だったら、ここは普通にクリスのことを心配しとけよ!」

この理不尽な状況にカズマはキレル。お尻を叩かれて悦んでいるクリスとか、DM担当を脅かされて危機感を募らせるダクネスとか、見ていてとても悲しくなるんで、もう勘弁してください。

「っーか、俺のモチ期がかかっているのに、お前らなにしてくれちゃってんの!? こんな調

子で、まともにスキルを習得出来んのかよ!？」

「まあまあ、そう怒るなつて。なんかドタバタしちまったけど、肝心のスキルはちゃんと登録されてるみたいだぜ?」

クリス達が揉めている間に冒険者カードを確認した長谷川が吉報を知らせてくれる。実際に見てみると、確かに【潜伏】と【敵感知】の項目が追加されている。結果オーライでとりあえず安心したけど、スキルの習得つて、あんなんでいいのかよ……。

改めてこの異世界のデタラメさに呆れていると、ムチ打ちプレイから解放されたクリスが幸せそうな顔をしながら話しかけてくる。

「さ、さて。お兄様のごほう……お仕置きも済んだ所で、次はあたしの一押しスキル、【窃盗】をやってみようか!」

「お前今、ご褒美つて言いかけたよな?」

「なななな、ナニ言つてんだよ!」 お兄様から受ける悪魔のようなムチ攻めに愛を感じて悦ぶなんて、エリス教徒のこのあたしが思っちゃったりするわけないでしょ!?! そんなことより【窃盗】の説明を始めるよっ!!」

明らかに凶星を突かれた様子のクリスは、慌ててごまかしながら話を進める。

【窃盗】は、対象の所持品を何でも一つ、ランダムに奪い取ることが出来る美味しいスキルだ。成功確率はステータスの幸運値に依存し、運さえ良ければ強敵の武器やお宝ま

でゲット出来るため、場合によつては戦局すらひっくり返せるポテンシャルを秘めている。

「ほほう。一押しと言うだけあって、確かにそいつは使えそうだな」

《まさに、幸運だけしか取り柄の無いカズマに見合つたスキルだねっ!》

「(はい、そーですわねって、悲しいリアルを肯定させんなっ!?)」

辛口な相棒に文句を言うカズマであつたが、内心ではその意見にすんなりと納得していた。

そうだ、これだよ。やたらと高い幸運を活かせるこのスキルこそが、モテ期を招く勝利のカギだ!

「上等だぜ【窃盗】スキル! アウトローなキャラであつても、モテさえすれば人生勝ち組! このスキルでチャンスも盗み、愛しい彼女をゲットだぜっ!」

「……キミはいきなり、なにバカなことを言ってるんだい?」

楽しい妄想をしている内に心の声を漏らしてしまい、それを聞いたクリスの視線が急激に冷たくなる。

「念のために言っておくけど、【窃盗】スキルで女性の心を盗むことは出来ないからね?」

「そんなもん分かつとるわ!! 　いつ俺が、クラ○スの心を盗んでいったル○ンのマネをすると言つた!」



この貧乳美少女は、なんちゅー誤解をしやがるのか。頭のおかしい連中と同列にされては堪らないので、割と必死に言い返す。そんな所で、性格の悪い銀時が横槍を入れてくる。

「ほう。その若さでク○リス押したあ、なかなかイイ趣味してんなお前。ちなみに、俺が好きなのはハヤオキキャラは、胸が大きいナウ○カだぜ?」

「だから、クラ○ス関係ねーし!? あんたの好みも聞いちやいねーよ!」

中学生が昼休みにするようなどうでもいい話でイラツとさせられるカズマ少年。なんかもう、この二人がマジで兄妹に思えて来たよ……。

「もうクラ○スの件はいいから、早く【窃盗】スキルを見せてくれよ」

「うん分かった。それじゃあ、お兄様に使ってみるからよく見ててね?」

「はあく? また俺が助手役なのかよ?」

「まあここは、可愛い妹の頼みだと思って、仲よしこよしでいってみよう! 【ステイール】ッ!」

嫌がる銀時を無視したクリスは、そのまま【窃盗】スキルを使う。

手を前に突きだして叫ぶと同時に光のエフェクトが発生し、それが消えた後の手には『とある物』が握られていた。その物体を見ると、安っぽい作りをした銀時のサイフだった。

「なっ!!? 俺のサイフをスリやがった!?!」

「おっ! 当たりだね! まあ、ご覧の通り【窃盗】スキルは、こんな感じで使えるわけさ……って、お兄様!?! さつきよりもドス黒いオーラを放ってらっしゃいますけど!?!」

「そりゃあそーだろーよお!?! 一度ならず二度までも、俺を侮辱したんだからよお!?! 当然ながら、それ相応の罰を受ける覚悟はあるよなあ!?!」

「ひいひいひいひいひいひいっ!?!」

天然なのか故意なのか、クリスはまたもやドSの逆鱗に触れてしまう。その結末は、やはりと言うか「ラブ・ウィップ」によるスパンキングプレイの刑だった。

「悪いことしたメス犬にやあ、愛情込めてお仕置きだあああああああつ!?!」

「ああーんっ! あんっ! あんっ! お兄様の過激な愛を、あたしのお尻が感じりゅっ!!」

「それ絶対愛じゃないよ!?! お尻の痛みでドMの快感、感じちやってるだけだからな!?!」  
ドSなお仕置きによってダクネス化が進んでいくクリスがあまりに哀れで泣けてくる。初登場時は、とても貴重な『常識側』にいたつてのに。しかも今は、酷い目に遭っている本人自身が幸せそうだから質が悪い……。

「ええい、もう我慢出来ん! 我が親友を守るため、私は騎士の誇りを捨てて、忠義を誓った主に逆らう! さあ、ギントキよ! それほどまでに乙女の悲鳴が聞きたけれ

ば、この私にムチ打つがいい！ どうした、遠慮は無用だぞ！ むしろ、滅茶苦茶叩いて欲しい！ この火照まくったやらしい身体に、激しいヤツをイッパイくりやさいっ！！」

「もはや願望丸出しじゃねーか!? おい、コラ止めろ!? お前まで混ざったら、收拾つかなくなるだろーがっ!!」

「く、くうくんっ!! これほどの好機を前に邪魔をしようというのか、カズマ!? 友がそこで待っているのに、手が届かぬとは口惜しいっ!! だがしかし、この状況でお預けとか、それはそれで身体が燃えりゅっ!!」

「どう転んでも興奮するとか、DMは永久機関かよ!?!」

一連の騒動に呆れたカズマは、目を細めてバカ共を見る。なあ、みんな。お願いだから、俺の幻想壊すの止めて?

届かないこの想いを心の中で叫んでいたら、心の友である長谷川が再び立ち上がってくれた。

「いい加減にしとけヤクソがああああああつ!!」

「ぶげらっ!!」

堪忍袋の緒が切れた長谷川は、調子に乗ってる銀時にジャーマンスープレックスを食らわせた。習得したばかりのスキルを使ってみたい気持ちはよく分かるが、ちったあ

自重しやがれや！

「ペッ！ お前が絡むと面倒だから、しばらくそこでネンネしてな！」

「はっ、長谷川はんっ！ あんた、ほんまに男前やつ！」

フィニッシュホールドを決めて悪魔超人を地べたに沈めた長谷川は、なんだかとも輝いて見えた。

しかし、何故か助けたはずのクリスから罵声を浴びせられてしまう。

「おい、あんたっ!! あたしの大事なお兄様になんてことをするんだよっ!!」

「えっ、ちよっ、なんで!? どうして俺が責められてんの!？」

「そんなことも分からないのか!? ドS愛に満ち溢れし我が主こそ、哀れなDMに救いをくださる神のごとき尊いお方っ！ 言うなれば、地上に降臨せし女神エリスと同じような存在だ！ それにも関わらず、私が食らいたいと思うほど見事な格闘術で我が主をいたぶるなど、非常識にもほどがあるぞっ!!」

「いや、そっちの方が非常識だろっ!? もうこれほとんど、悪質極まる宗教詐欺と化しちゃってるよねっ!？」

DMキャラに対してのみ強大なカリスマ性を発揮する銀時は、ダクネス達の中で神格化されていた。はつきり言って、迷惑過ぎる個性である。

ただし、遊び人スキルにも隙が無いわけではない。幸いなことに、銀時が気絶したこ

とでクリスにかかっていた呪縛が弱まったらしく、中断していた講習を再開することが出来た。

「とういわけで、気絶してるお兄様は、息を荒げて膝枕してるダクネスに任せておくとして。カズマとハセガワには、いよいよ盗賊スキルを覚えてもらうわけなんだけど……それで終わりじゃつまらないよね？」

再開早々に何か面白いことを思いついたのか、クリスはにんまりとした笑みを浮かべる。いったい何をやらかす気だと野郎共が警戒する中、彼女はあまりにアブナイことをイタズラっぽく言い出した。

「ねえキミ達、あたしと勝負してみない？ 運が良ければ、あたしの持つてる『イイ物』を一つだけ奪えるよ！」

何かいきなりとんでもないことを言い出しましたよ、この子……。まさかとは思うけど、彼女の言うイイ物って、今身に付けている『エツチな物』でもオツケーということかっ!?

「クリスさん。その話をもっと詳しく聞かせてくれ！」

「おつ、なかなか良い反応だね！ では、改めてルールを言うけど、やることは至って簡単！ キミ達のステイルであたしの所持品を一つ奪って、その結果で勝敗を決めちゃおうというわけさ。それが10万エリス以上入ったサイフでも40万エリスの値打ち

があるダガーでも、盗れたらちやんと二人にあげる。もちろん、ハズレもあるけれど、当たりが出たら大儲け！ さあ、どうする？ 運試しの真剣勝負をこのあたしとしてみるい？」

いぎ聞いてみたら、まともな意味で美味し過ぎるイベントだった。貧乏な長谷川にとつては願ってもないチャンスだし、幸運値が高いカズマにとつてはボーナスも良いところである。

「だけど、何かおかしくないか？ 勝負とか言つといて、クリスにうま味が無いんだが？」

「ああ、その点は気にしないで！ これでもちやんとあたしにだってメリツトはあるからさ！ 悪気なんて抱かないで、窃盗の爽快感を素直に楽しめばいいんだよ！」

「どう聞いても窃盗犯が悪の道に誘い込もうとしてるセリフだけど、そこまで言うならとにかく分かった！ その勝負、受けてやるぜ！」

何となくごまかされた気がしないでもないが、せっかくなのでクリスの提案に乗つてやる。何と言つても、この世界に来て初めての冒険者っぽいイベントなのだ。こんな絶好の機会を断つてしまうなど、あまりにももつたいない！

当然ながら長谷川にも異論は無く、カズマに続いて勝負を受ける。

「覚悟しとけよクリスちゃん！ こう見えても、レアアイテムをゲットする確率は高い

んだぜ？ ゲームの中では！」

「ふふつ、いいねキミ達！ そういうノリのいい人って、あたしは好きだよ！」

二人の返答を確認したクリスは不敵な笑みを浮かべる。あからさまに含みを感じる仕草だったが、浮かれたマダオ達は気がつかない。

「それじゃあ、サクツと【窃盗】スキルを覚えちゃおうか！」

やたらと楽しそうなクリスに促され、暢気な二人はそれぞれの冒険者カードを操作していく。

習得可能スキルという欄を指で押すと、そこに8つのスキルが表示された。

「とりあえず【遊び人】スキルと【スマイル】は削除だな」

4つのゴミはさっさと消して残ったスキルに注目する。今現在表示されているのは……【花鳥風月】5ポイント、【敵感知】1ポイント、【潜伏】1ポイント、【窃盗】1ポイント……。

「って、また変なのが混ざってるけど、【花鳥風月】っていったいなんだ!？」

「あー、それはアレだよ。アクアちゃんとツラつちがカエルに食われる前に使ってたヤツ」

「ああ、アレかあー……」

長谷川に説明されて、お笑い芸人達の敗北シーンを思い出す。まったくその気は無

かったのだが、あの時オートで覚えていたのか。

「つーか、宴会芸のクセにやたらと大層な技名だなオイ!? スキルポイントも無駄に高いし、まるでアクアそのものだけ!」

役立たずなイメージしかない「花鳥風月」に、まったく使えない駄女神の姿が重なって余計にイラツとする。だが今は、そんなどうでもいいことより本命の盗賊スキルを修得する方が先決だ。スキルポイントを10ポイント持つているカズマは【窃盗】【敵感知】【潜伏】の3つを習得し、1ポイントしかない長谷川は【窃盗】だけを覚えた。

「なるほど、この世界のスキルはこんな感じで覚えるのか」

「うおっ!? 何か今、遺伝子レベルで変化が起きてる絵が見えた!」

長谷川だけには見えちゃいけないものが見えているようだが、とにかくこれでイベントの準備は整った。

「それじゃあ、早速やろうぜクリス! お前のイイ物を賭けた真剣勝負とやらをなあ!」  
いろいろな意味でワクワクが止まらないカズマは、右手を突き出して挑発してくる。まるで負けフラグのようなセリフだけど、クリスには好意的に受け取られた。

「やっぱりキミは面白いね! お兄様の仲間だけに、一筋縄ではいかなそうだ! そんなキミが盗賊スキルをどう使うのか、あたし自身も楽しみだよ!」

妙に親しみ易いカズマを気に入ったクリスは、興味深そうな視線を向ける。幸運を司



る女神は、自身の属性と深い関わりがある強運の持ち主に惹かれるのだ。ようするに、彼らが仲良くなったのは偶然ではなく必然だった。

「ただどねカズマ。神器を持つているのに盗賊の話丸飲みしちゃったキミは、正直言っていただけじゃないよ？」

「さあ、キミ達は何を奪い取れるかな？ 敢闘賞のサイフを引けるか、当たりのダガーを得られるか！ 結果はやつてのお楽しみだよ！ ちなみに、残念賞のハズレ品は、さつきお兄様に当てるために多めに拾つといたこの石だから、誤つて盗らないようにせいぜい注意することだね！」

クリスはそう言うと、隠し持っていた複数の石ころを取り出して見せた。

「あああつ!! きつたねえ!! そんなのありかよつ!!」

「えー、あたしは何も汚いことはしてないよ？ ハズレがあるって説明は、さつきちゃんとしたじゃないか。むしろ、非があるのは、それが何かを確かめないで勝負を受けたキミの方にあるんじゃないかな？」

「くっ！ 痛いところを突きやがって！ 憎たらしいが言い返せないっ！」

かなりグレーなやり方だけど、こちらに落ち度があるのも確かだ。

自分達はまだ、この異世界を甘く見ていたのだろう。ここは平和な日本じゃない。弱き者は容赦無く淘汰される、紛うことなき修羅道なのだ。それを証明するように、クリ

スは更なる無茶振りをふっかけて来やがった。

「ようやく失敗を悟ったようだけど、過ちはそれだけじゃないよ？ 何故ならキミは気づいていない！ ハズレを引いた敗者にはペナルティーがあるってことにね！」

「ちよつ、待てよ!? そんな話は初耳なのだが!？」

「またまた何言ってるのさ。これは【勝負】だよって、最初に宣言したじゃないか。勝負するからにはあたしも勝者になれるわけだし、敗者がリスクを背負うことも当然理解出来るでしょ？ というわけで……そっちが負けたら、今度はあたしがスタイルを使うターンだよ！」

「そんなバカなっ!？」

「ちなみに、あたしが狙ってるのは、キミ達がかけてるお洒落なメガネなので覚悟してよね?。」

「なん……だと……!？」

ヤンチャなクリスは、最後の最後にとんでもない爆弾を置いていきやがった。ハズレの石に関してはまだ笑って許せるが、敗者のペナルティーに関してはどうしても納得出来ない。色々と勉強させてもらったとはいえ、ノルングラスと引き替えなんて授業料としては高すぎる。

「もうソレほとんど詐欺じゃねーかつ!? 俺は認めん！ 断じて認めん！ こんな勝負

は無効だ無効!!」

「え、さつきはあんなに勇ましく、やるって宣言してたのにい？ まあ、あたしに勝てる自信が無いなら逃げるつてもアリだけどお？ あたしよりもお兄さんなキミが、この程度で勝負を投げ出す「チキン」ってことはないよねえ？」

私的な思惑があるクリスはあえて辛辣な挑発をする。こんなことをわざわざするのもカズマを鍛えるためののだ。

「(神器を所有しているのに、この程度のアクシデントもクリア出来ないようじゃ話にならないからね。たとえ、この試練に失敗して神器を失ったとしても、それはキミ自身が選択した運命つてことなんだよ。でも、安心して神器を失ったとしても、それはキミ自身が責任を持ってお世話させていただきますから！ お兄様とタッグを組んで楽しくあたしをいぢめてもらおうわっ!）」

なんと、遊び人スキルの呪縛がこんな所にも影響していた。隙だらけなカズマに灸を据えるフリをして、裏ではこっそり自分の欲望を叶えようと企てていたのである。

そんな後輩の変わりようを生暖かい目で眺めつつ、ノルンはカズマに問いかける。

《で？ 分かりやすい挑発されちゃってるけど、どうするのかなカズマ君？ 強制力は無いんだから無視することも出来るけど？》

「(ああ、そうだな……。ノルンの言う通り、こんな茶番に付き合うなんてナンセンスで

しかないし、お前を盗られかねない危険をあえて犯すなど、もつてのほかだろう……。だがしかしっ！ 男には退いてはいけない時があるっ！ 年下の小娘にチキン呼ばわりされたとあっちゃあ、平和主義な俺であつても流石に黙っちゃいらねえっ！ 二度と生意気言えないように、お兄さんの恐ろしさを思い知らせてくれるわっ!!」

《めっちゃ挑発効いてるうーっ!?!》

あまりに単純なカズマは、あからさまな罠に自ら飛び込んでいく。

「いいだろう。その勝負に乗つてやる。ただし、ぜつてえ泣かしてやるぞー!」

「何というか、見事にクズな反応だね……。それで、ハセガワはどうするの?」

「そうだなあ。本体のグラサンを盗られちまうのはマジで死活問題だけど、仲間がやるつて言うんなら一人で逃げ出すわけにはいかねえ! その勝負、俺も乗るぜ!」

「満場一致で可決だね。では、思い切つてやつてみようか! 二人同時にスティールして、一気に勝敗決めちゃおう!」

バツと両腕を広げたクリスが勝負の開始を宣言し、それを合図に右手を突き出した男達は、互いを見やつてニヤリと笑う。

「よっしゃ、いくぞ長谷川さん! 俺達二人であいつのイイ物ゲットしようぜっ!」

「了解だ、カズマ君! この一撃に俺のすべてをかけてやるっ!」

初めてスキルを使う二人はノリノリで気持ちを合わせ、まるで必殺技のようにその名

を叫ぶ。

「ステイルツ!!」

欲にまみれた野郎共の声が広場に響き渡り、眩しいエフェクトが彼らの右手から発生する。そして、光が消えた後には、その手に何かを握っていた。とりあえず、【窃盗】スキルの発動には成功したようだが、果たして何を奪ったのか。硬くはないので、間違いなくハズレの石ではないようだが……。

「……なんだコレ?」

握っていた物を広げてマジマジと観察する。何かアニメで良く見かけるような物体だが……。この白くて、イイ匂いがして、ほんのり人肌の温もりがある布切れはまさか!?

「ヒヤツハー! 当たりも当たり、大当たりだあああああああつ!!」

「いやあああああああつ!?! ぱ、ぱんつ返してえええええええええつ!?!」

カズマが天に掲げている物が自身のパンツであると気づいたクリスは、涙目になって絶叫する。強制的にノーパン状態にされたのだから当然の反応で、恥ずかしい状態となつてしまった股間を必死に隠す。

その瞬間、左手を当てたその場所に本来ならあるべき物が無いことに気づいてしま

「(えっ、あれっ? 何かとつてもイヤな予感がするんだけど……これってまさか、ショートパンツもはいてない!)」

やたらとスースーするなと思つて股間を見たらショートパンツまで無くなつていた。つまり、今のクリスの下半身は、素肌にスパッツをはいただけの滅茶苦茶エロい格好だった。

「ハ、ハセガワ……その手に持つてる物つてまさか……」

「えつと、すまねえクリスちゃん。そんなつもりは無かつたんだけど、キミのショーパーンツ盗つちまつた」

なんと、長谷川のステイルは、カズマのラッキースケベを見事にアシストしていた。

「グツジヨブだぜ長谷川さん!」

「俺にとつちや、グツジヨブで済む話じゃないんだけど!? どう見ても、少女のズボンを剥いちまつた変態オジサンだよねコレツ!? 他の奴等に見られたら性犯罪者確定だろコレツ!?!」

サムズアップしながら誉めてくるカズマに割と必死でツツコミを入れる。一見すると運の良い結果のように見えなくもないのだが、幸運値がマイナス方向に振り切つていゝる彼がこんな不祥事をしでかしといて無事に済むはずがない。この状況は、満員電車で痴漢に間違われたオッサンと同じようなものであり、ラノベ主人公のようにラッキース

ケベで済ませられる話ではないのだ。

實際、今のクリスには長谷川の姿が痴漢のように見えており、あまりの恥ずかしさに我を忘れた彼女は、ショートパンツを返そうと近づいて来たマダオを見てパニツクに陥ってしまう。

「あああああああ……！」

「ちよつ、待つてえ!!? お願いだから、ここはひとまず落ち着けて!! 羞恥心のあまりめつちや激しく身悶えてるけど、その格好でやられると色んな意味でアウトだから!!? とにかく今はこれをはいて理性的に話し合いを……！」

「いいいいいいいやああああああああつ!!?」

理性的な話し合いをする前にクリスの理性が崩壊した。

目の前には二匹のケダモノがいて、未だかつてないほどに貞操の危機(?)が迫っているというのに、頼りにしたいお兄様はこの後に及んで気絶中だし、頼みの綱であるダクネスは親友を助けるどころか卑猥な妄想を膨らませてトリップしちゃう始末である……。

この状況下からクリスが下した判断は……今すぐここから逃走することだった。

「うわああああああああん!! もうあたし、お嫁に行けなあああああああいつ!!」

可愛らしい絶叫を上げながら後方へ走り出す。死ぬほど恥ずかしいのにちよつぱり

悦んでしまっている自分に耐えられなくて、とうとう精神が限界突破してしまったのである。よもや、遊び人スキルによって付与されたDM属性が、運の良い彼女をここまで追い込むことになろうとは！

「これが遊び人スキルの威力か……。我ながら、恐ろしい能力に目覚めちゃったみたいでなあ！」

「つて、すべての元凶のクセに中二病みてーなことほざいてごまかしてんじやねええええええええええつ!」

起きて早々に露骨な責任逃れを شدした銀時に怒りをぶつける。しかし、ここまで事態が悪化してしまった今、彼を糾弾している余裕などは無かった。

「待てやグラサン！ 今は何より、クリスを止める方が先だろうが！ 恥ずかしい目に遭わされて暴走してるあいつが、駆けつけた警察官にある事ない事言い出してみろ！ パンツとショーパンをひん剥いたお前らは、まず間違いないブタ箱行きだぞ！」

「えっ!? 俺も!？」

もちろん、パンツを盗ってしまったカズマも常識的に見ればアウトである。言い出しつぺのクリスがこちらに不利な証言をすればと思えないが、パンツなんて恥ずかしい物を盗られた彼女がどう出るかは、正直言って分からない。

そもそも、公の場で少女のパンツを剥ぎ取ったと知れたら、流石に無罪放免とはいか



ないだろう。

「こんちくしよおおおおおつ!? またこんな展開かよおおおおおつ!?」

イヤな未来を想像した長谷川は即座に走り出した。冤罪で捕まるのはもう二度と御免である。

もちろん、それはカズマも同じで、すぐに彼らの後を追う。

《急いでカズマ! 今のクリスちゃんは、エッチな気分以身悶えてスピードが落ちてるけど、それでもキミと良い勝負だから!》

「(なにつ!? エッチな気分で走れないとか、いろんな意味で見過ぎせないなっ!!)」

お色気というニンジンに釣られたカズマは、一気に速度を増していく。

そして最後に、銀時もまたダクネスにムチを入れつつ後を追う。

「はあつ、はあつ! クリスの次は私のパンツが奪われるのかと密かに期待していたというのに! まさかの放置プレイで来るとは、あの二人もなかなかやるなっ!」

「おらメス豚! いつまでも卑猥な妄想に浸ってないで、とつととあいつら追いかけてぞー!」

「くはあく〜んっ!? 分かりました、クリスを追いましゅっ!」

形の良いお尻をムチで叩かれ、DMの走りも加速していく。こんな奴でも親友だ、こいつがちやんと説得すればクリスの暴走も止められるだろう。これ以上の面倒事は御

免だと、あえて樂觀的に考えながら仲間達を追いかける。

しかし、事態は希望に反して悪い方へと向かっていく。変なおジサンに追いかけられているクリスの姿は、多数の街人に目撃されて徐々に目立ち始めていたのだ。

「待ってくれよクリスちゃん!! ショーパンを返すから、俺の話聞いてくれっ!!」

「いやああああああああつ!! こつちに来ないでええええええええええつ!!」

「何だ何だ、この声は!?!」

「あれを見て! 泣いてる子供が変な男に追いかけてる!」

「もしかして、あの不審者に襲われてるのか!?!」

「警察よ! 早く警察を呼ばなきゃ!」

とても分かりやすい展開で最悪な誤解が広がっていく。事態を改善しようとしたら、更に悪化しちゃったよ!?

「や、やべえ!! このままじゃあ、誤認逮捕まったなしだっ!?!」

現実となりつつある不吉な未来にビビるマダオであったが、恐れていた警察官が、まもなく登場してしまう。

「お巡りさん! あいつです!」

「おいつ! いかにも無職なその男! 今すぐ止まって縛につけっ!」

「余計なお世話だコンチクショオオオオオオオオツ!」

知らせを受けて急行してきた警察官がわき道から現れて、そのまま長谷川の追跡を始める。カズマ達の前に割り込んだため彼らの存在に気づいていないが、いずれにしても厄介な状況になってしまったことには代わりない。

「やばいぜ銀さん!!? もうサツが嗅ぎつけてきやがった!!」

「落ち着けカズマ! 今はとにかく様子を見て、サツがマダオに気を取られてる隙に俺らがクリスをかつさらうぞ!」

「おい、お前達! 今のはどう聞いても悪者の会話じゃないか!? パンツを奪った暴漢に追いつめられる少女とか願ってもないプレイだが、そろそろ真面目にクリスを助けろ!」

「ドMファーストのお前が言うなあああああああつ!!」

ダメだこりゃ。頭のおかしい仲間達はこれっぽっちも頼りにならない。長期連載で培ってきた経験と勘で仲間の思考を読んだ長谷川は、自分で何とかしなければと悲壮な覚悟を固める。

「もうこうなつたら、クリスちゃん本人に俺の無実を証明してもらおうつきやねーつ!!」

結局それしか方法がなく、警察官に追いつかれる前にクリスを捕まえて説得しなければならぬ。

出来るのか、マダオの俺に……。いや、諦めなければ何とかなる。それがジャンプの



勢い余って地面から離れてしまった二人は、もつれ合いながら落下していき、2メートル下の河川敷に着地した時には、何故か長谷川がクリスを担いで「キン肉バスター」をキメた状態となっていた。

「なんでだあああああああああつ!!?」

土手の上から笑撃的瞬間を目撃した銀時とカズマが絶叫する。警察官に続いてその場に到着した時には、もう手遅れだったのだ。

それにしても、まさかこんな所である有名な必殺技を見ることになるうとは、誰に想像出来ようか……。

《ゴメンよクリスちゃん。ボクはキミがえっつい目に遭うことを事前に知っていた……。それでも、キン肉バスターを生で見たいという欲求には勝てなかったんだあああああああつ!!》

「(お前が言っていたのはコレのことかよっ!?)」

どうやら、運命の女神だけは分かっていたらしい。

「つーか、コレどーなってるの!?! 土手から落ちたら偶然キン肉バスターかましてたとか、もはやミラクルなんですけど!?!」

「はっ! んなもん正直どーでもいいが、俺も一つだけ気になったことがある。やっぱ、キン肉バスターって自分の尻も痛いんじゃないかね?」

「今更過ぎるし、そっちの方こそどーでもいいわっ!!」

「はあつ、はあつ! あんな大胆に恥ずかしい部分を晒されてしまうだなんて、なんとやらしい技なのだ! 是非私もスパッツ姿で、キン肉バスターとやらを食らってみたいぞっ!」

「確かに、あの体位には興奮せざるを得ないが、お前もちったあー空気を読めやつ!」

銀時とダクネスの主張は速攻で否定された。

そもそも、今はキン肉バスターに注目している場合ではない。変なオジサンが幼い少女にフィニッシュホールドを決めちやつてる瞬間を警察官に目撃してしまったことが問題なのだ。

現に、その惨劇を見た警察官は、危険な技を使った長谷川のことを凶悪な犯罪者と断定してしまう。

「た、逮捕だあーっ!! 強制わいせつ……じゃなくて、暴行罪で逮捕するっ!!」

罪状を叫びながら土手を駆け下り、目を回したクリスを地面に寝かしている長谷川に飛びかかる。

「観念しやがれ変態野郎っ!」

「いやいやいやいや!! だからそれは誤解だつてば!! 土手から落ちた時にもつれ合つて、たまたま着地の体勢がキン肉バスターになつちやつたけど、俺は何も悪くねえええ

えええええつ!!」

「この後に及んでウソをつくな! あれほど見事な格闘スキルが、たまたま決まってきたるかよ!」

必死の説得も空しく、問答無用で確保される哀れなマダオ。その逮捕劇を見届けた銀時は、全力でスルーすることにした。

「さあ〜て。用事も済んだことだし、そろそろギルドに戻るとしますか」

「えっ、マジで?! この状況で見捨てていくの?!」

「そりゃ当然だろうが? なにせ、あいつは盗んだショーパン持ったままキン肉バスター決めてんだからな。敏腕弁護士つけたとしても逆転すんのは不可能だろコレ?」

「はいはい。くっだらねえへ理屈こいてないで、さっさと助けに行きますよーっ!」

「私だつて、クリスをあのままにはしておけん! ここは素直に観念して、ついて来てくれ我が主!」

「ちよっ、おい止めろ!?! 俺の腕を放しやがれ!!」

逃げようとした銀時を捕まえて、長谷川達の救援に向かう。親友を助けなければと思ったダクネスは当然として、パンツを奪ったカズマにも一応は負い目があった。

何にせよ、このまま仲間を誤認逮捕させる訳にはいかない。リーダーはまったく当てにならないため、この中で一番説得力を持ったダクネスが代表して交渉を始める。

「待つてくれ警官殿！」

「おお、みんな！ 助けに来てくれたのか！」

「黙れ変態！ というか、キミ達は何なんだ？」

「私はダクネスという名のクルセイダーで、そこにいる二人の仲間だが、不当な扱いを受けている彼の無実を証明するためにここへ来た」

「なに？ こいつが被害者の仲間で、しかも無実だと言うのか？ しかし、こいつがその子に危害を加えたのはどう見ても間違いないぞ？」

「確かに、この状況だけを見ればそう思われても仕方がない。だが、これらはすべて不幸な事故で犯罪などでは決してない！」

仲間の窮地を救うために立ち上がったダクネスは、クルセイダーにふさわしい真摯な態度で言葉を続ける。

「そう。この男はただやるべきことをやっただけだ。私の親友のショートパンツをスティール勝負で剥ぎ取ったことも！ 恥ずかしさのあまり逃げ出した彼女に奪ったショールパンをはかせようと執拗に迫ったことも！ いやがるクリスを無理矢理捕まえた挙げ句にキン肉バスターなる卑猥な技で恥ずかしい体位を強制させてしまったことも！ すべては不幸な事故なのだっ！」

「あ、あの。キミの言ってることはすべて、犯罪行為にしか聞こえませんか？！」



長谷川をかばうつもりが、DM表現のせいで逆に追いつめる形となった。いろんな意味で痛過ぎる人選ミスである。

「本当に仲間を助ける気があるのかよく分からん話だったが、やはりこの男は変質者なんじゃないか!!」

「そうだな……。変質者かと問われたならば、すべてを否定しきれない」

「おいっ!？」

「だがしかし! 彼が無実であることは、この私が保証する! 女神エリスの名に誓つて、ウソはつかんと約束しよう!」

弁護に失敗したダクネスは、小さなお守りを掲げて最後の手段に出る。彼女が出したお守りは敬虔なエリス教徒が所有する物で、アクシズ教徒のように安易なウソはつかないという証明にもなる。

「う、うむ……。確かにキミはウソをついていないようだが、とにかくここは被害者からも事情を聞かないと……」

流石にダクネスの話だけを鵜呑みには出来ないの、職務に忠実な警察官は規定に則った行動を続ける。そんな融通の利かない彼にイラッときた銀時は、得意の屁理屈に口撃してくる。

「おいおいあんた、そんなことしてほんとに後悔しねえのか? 捕まえた後で冤罪が証

明されたらどうなるか想像してみな。上司にグチグチ責められるは、逆に訴えられるはで良いことなんざ一つも無えし、当然あんたの出世にも悪影響が出るよなあー?」

「うぐつ……。わ、分かったよ。ここはクルセイダーであるキミの言葉を信じよう」

宮仕えの弱みにつけこんだ汚い策略により、真面目な警察官もようやく折れた。釈然としないまま帰途につく彼の背中に向けて、調子に乗ったドS野郎が理不尽な言葉を投げつける。

「けっ! 国家権力にしつぽを振る犬ところが、納税者様に向かつてキャンキャン吠えてくんじゃねーよ!!」

「ごめんなさい、お巡りさん。真面目に働いてただけなのに、こんな茶番に巻き込んでしまって、本当にごめんなさい……」

不当な扱いを受けて肩を震わせている警察官に申し訳なくなったカズマは心の底から謝った。

「まあなんだ! あの人には悪いけど、捕まわなくて良かったなあー!」

「ああ、ありがとうカズマ君! キン肉バスターを決めちまった時はもうダメだと思っただけど、みんなのおかげでマジ助かったぜ!」

拘束を解かれた長谷川は、カズマの言葉を聞いてようやく緊張感から解放される。

「ダクネスちゃんと銀さんも、助けてくれてありがとう! 『ソレおかしいんじゃね

「?」って思う所も多々あったけど、とにかく感謝感激だぜ!」

「なに、仲間として当然のことをしたまっだ。後でキン肉バスターの一つでもかけてくれれば、それだけで十分さ」

「もちろん、俺もこいつと同じだ。別に礼とか入らねーからさ、弁護士料の100万エリスを今月中に払いやがれ」

「どいつもこいつも、あからさまに見返り要求してんじゃねーかああああああああつ!?」  
助かって早々に酷い扱いを受けてイラツとするが、逆にそれが逮捕されずに済んだ喜びを実感させてくれる。

何にしても、最悪の事態にならなくて本当に良かった……。

「後は、気絶しているクリスをどうするかだな」

ダクネスはそう言うのと、寝ているクリスを抱き起こして一通り確認する。キン肉バスターの衝撃で気を失っているものの、特に問題は見られないので、しばらくすれば目覚めるだろう。後は、被害者である彼女と和解するために話し合うだけだ。

ちなみに、クリスのショーツパンツは既にダクネスがはかせており、今はもう素肌にはスパッツ状態ではない。そのえっちな姿を密かに堪能していたカズマは露骨にガツカリとするが、しばらくしてクリスが起きると嬉しそうな声を上げる。

「う、うん……」

「おつ、クリスが目を覚ました!」

「はあく、良かったあく!」

ゆつくりと目を開けるクリスを見てカズマと長谷川が安堵する。故意ではなかったとはいえ、彼女を酷い目に遭わせてしまった張本人としては気を遣わざるを得ないのだ。

しかし、遊び人スキルの影響でパニック状態が続いている彼女には、その思いやりも逆効果だった。二人の顔を見た途端に再び錯乱してしまい、傍にいたダクネスにも気づかず逃げだそうとしてしまう。

そんな時に、鼻をほじっている銀時と視線が合った。

「ひぐつ!? おおおお、お兄様あああああああああつ!!」

銀時の姿を見た瞬間、これまで蓄積されていたストレスが一気に女の悦びへと変貌した。色々と追いつめられていた彼女の目には、このドS野郎の姿が世界でもっとも頼もしい守護者のように見えたのだ。

ええそうよ! お兄様がいてくれるなら、もう何も怖くない!

「うわあああああああつ!! お兄様あああああああああつ!!」

「なつ、コラ止めろ! いろんな水分出しながら抱きついてくるんじゃないっ!」

クリスの中で様々な要因が影響しあった結果、キュ○ベえ並に胡散臭い銀時がアル

ティメットま○かのような神々しい存在へと格上げされてしまった。

《まさか、娯楽と水だけでなく、幸運の女神まで身内に引き込んだんじゃうとはね……》

この状況はノルンにとっても予想外のことだった。改めて、ご都合主義という最強のスキルで守られた主人公の恐ろしさを実感する。

《正直言つてなめてたよ。こうも簡単に運命を変えられるほど、概念に捕らわれない存在だとはね。これが、第四の壁すらも無効果してしまうギャグ世界の法則……某魔法少女風にたとえるなら「銀環の理（ぎんたまのことわり）」と言つた所か!》

そんなしよーもないもんを円環の理と同列に扱ったら、怒りのほむほむにパンパンされてしまうだろう。

それでも、クリスの中で常識を覆すほどの変化が起きてしまったことは間違いない。きつかけはどうであれ、クリスにとって銀時はもう「異性として気になる相手」になつてしまったのだから……。

「んふふ♪ お兄様に抱きついてると、なんだか心がポカポカするよ! まあ、サイフの中身は寒いけどね!」

「おいテメエ。懐いてるフリして、俺をバカにしてんだろ?」

《えつと……クリスちゃんが幸せそうなら、それはそれでまあいいか!》

基本的に放任主義なノルンは、悪い男に引つかかってしまった後輩の行く末を生暖か

く見守ることにした。経緯はアレでも、彼女にとつては大切な「初恋」になるかもしれないのだ。ここは先輩として応援する体を装いながら、甘辛い恋愛を楽しませてもらおうとしよう。

こうして、本人の知らぬ間に幸運の女神との恋愛フラグ立ててしまった銀時は、不幸なことに周囲からヘイトを受けるハメになる。

特に、ダクネスとカズマはあからさまに嫉妬の炎を燃やしていた。

「おのれクリス！ 親友の私を差し置いて、我が主の寵愛を奪い取ろうと企てるとは！ 待望のネトラレ展開には期待が膨らむ所だが、やはり女盗賊は油断ならんということかっ！」

「なあ、長谷川さん……。何となくだけどさあー？ 俺の未来の恋人候補も銀さんにネトラレてる気がすんだけど、これって気のせいかなあー？」

「ああ、そいつは仕方ねえさ。あんな奴でもジャンプマンガの主人公様だからよおー、ぺっ！」

何だかんだと言いつつも、長谷川自身が納得出来ずにツバを吐いて怒りを示す。

果たして、幸運の女神と凶運のDSは、彼らが邪推しているようなお熱い関係になるのだろうか。そして、未だにやくそう扱いのアクアは、ヒロインポジションを脅かす後

輩の存在に気づくことが出来るのだろうか。その答えは、運命の女神ですら見通すことが出来なかった。

## 第17訓 キャベツの作画には細心の注意を払え

スキルイベントは一応無事に終わり、目的を済ませた銀時達はギルドへ戻ってきた。その間、クリスはずっと銀時の腕に抱きついており、ダクネスの妄想プレイを大いに撈らせつつ、自身も同時に幸福感を満たす。

「んふふ〜♪」

「おいクリス、いい加減離れろよ。このままだと、ギルドの奴等にシヨタコン扱いされちゃうから」

「ちよつ、シヨタコンってどーいう意味さ!?! そこはせめてシスコンって言うところでしょ!?!」

会話の方も大分馴染んできているようだ。

それにしても、恋愛要素など微塵も無かった銀時が美少女とイチヤイチャしている光景なんて、どう好意的に見ても違和感しかない。遊び人スキルの効果が切れれば『クラスの問題児にちよつぱり惹かれてる初な女子中学生』程度の状態にレベルダウンするのだが、今はまだイケナイ交際をしているバカツプルにしか見えない。

「なあノルン。今回のイベントでクリスとラブラブになるのは一気に厳しくなったわ



けだが、俺にモテ期が来るって話はマジで本当なんだろうな?」

《ファツ!? そ、そそそ、そーだねえー? 恐らく、たぶん、何人かは君に惚れると思うけどおー?》

「(露骨に動揺してるじゃねーか!? 俺のモテ期はどーなっちゃうの!? 始まる前に終わっちゃうの!?)」

あからさまに狼狽えるノルンに文句を言うカズマであつたが、運命の女神とて完璧に見通せないものがある。厳密に言うと、彼女やバニルが見通している未来は「予測」の範疇に過ぎないのだ。彼らは高次元的な視点によつて可能性に揺らぐ未来像を見通すことが出来るのだが、それは常に変動しているので、実際のところは確定した未来だと言ひ切れるものではない。ゆえに、彼らが干渉することも出来るし、銀時やカズマのような強運の持ち主が突発的に改変してしまうこともある。

つまり、今回の読み間違いは不可抗力ということになり、濡れ衣を着せられた彼女は我慢出来ずに反論する。

《なんだよチクシヨウ! 自分のへボさを棚に上げてボクばかり攻めちゃつてさ! 優秀な女神だつて間違える時もあるんだよ! ドヤ顔でした予言が外れて、ファ○マガのウソテクに騙された小学生のように恥をかく時もあるんだよ!》

「(たとえば古くて伝わり難いわ!)」

お互いが銀時の被害者なのに不毛な言い争いを繰り広げる。これはこれで仲の良いカップル(?)と言えるのかもしれないが、ノルンの姿を見ることが出来ない長谷川にとってはカズマが不気味な一人芝居をしているようにしか見えない。

「はあ……何なのコレ? 銀さんとクリスちゃんは何かイチャイチャしまくってるし、カズマ君とダクネスちゃんはアツチの世界にイッチャッチャってるし。何とも言えない孤独感が心に染みて来やがるぜ……」

現状に不満を覚えた長谷川は、ぼやきながらギルドに入る。

すると、そこでは大変な騒ぎが起こっていた。

「おお、すげーっ! やっぱ、カツラさんの『花鳥風月』が一番サイコーだな!」

「お前はなにを言ってるやがんだ! どう見たって、アクアさんの方が華麗で美しかっただろーが?」

「オイオイ、そこのご両人。これほど素晴らしい芸を前にしてケンカするなんざもったいないぜ。今はこの幸運を、大いに楽しむ時じゃねえか?」

「へっ、ちげえねえ!」

「女神エリスよ、この瞬間に巡り合わせていただいたことを心から感謝します!」

酒場に出来た人だから熱の入ったやり取りが聞こえてくる。そいつらの会話だけで何が起きているのか大体分かった。というか、テーブルの上に立って宴会芸に興じ

ているロン毛野郎と駄女神の姿がモロ見えになってる。

「つたく、仕事もしねえで昼間つから酒場でバカ騒ぎするとか、救いようもねえクス共だな」

「白昼堂々、女の子にSMプレイをかましてたお前の方が禄でもねえけどな」

「いやいや。白昼堂々、女の子にキン肉バスターをかまして警察沙汰になりかけたテメエとは比べもんにならねえよ」

自分たちの不始末を棚に上げた銀時と長谷川は、どこぞの政治家たちのようなブーメラン発言で見事な自爆芸を披露する。

一方、ノリノリで宴会芸を披露していたアクアは、銀時の姿を見るや否や、顔を真っ赤にさせて取り乱し始めた。

「うわきやあああああつ!? 心構えが出来る前に銀時さんが戻ってキターっ!? ちよっ、コレ、どうしよ!?! 恥ずかしいやら気まずいやらで、会わせる顔が無いんですけど!?!」

先ほどまでのドヤ顔はどこへやら、得意気だったアクアの様子が急激におかしくなる。どうやら、遊び人スキルの効果が切れたことで生まれた羞恥心を芸に没頭することでごまかしていたらしい。

さらに、もじもじしながら近づいて来ためぐみんなもアクアと同じような反応をしてお

り、恥ずかしい妄想を書き記したノートを見られてしまった中二病のようにワタワタしている。

「あああああ、あのその、えっと！ 唐突ですが、これまで私が言つてたことは綺麗サツパリ忘れてください！ こつ恥ずかしいあのセリフは、鬼畜な洗脳効果を持った遊び人スキルのせいであつて、純情可憐なこの私の本心ではありませんので！」

「はあ？ 爆裂狂のお前のどこが純情可憐だつてんだよ？ 大体、遊び人スキルに洗脳なんて効果は無えぞ？ あれはただ、お前たちの中で眠つていた黒き獣を覚醒させただけだからなあ。今はまだ目覚めたばかりで、制御が利かない闇の力に翻弄されてる状態なんだよ」

「なんてふざけた言い訳ですか!? どつちにしても、DMという黒き獣を生み出すだけじゃないですか!? ……でも、闇の力に覚醒したという解釈には大いに興味をそそられますね！ 暴走する狂気に抗いながらも強大な闇の力を使役するアークウイザードとか、最高にイケてますよ！」

「なにあつさり食いついてんのお!! 闇とか覚醒とかそれっぽいこと言われただけでノツて来るとか、チョロいにもほどがあるだろ!？」

紅魔族らしく悪ノリとライブ感で生きているめぐみんは、気持ちの切り替えもアグレッシブだった。

「ところでギントキ。やたらとあなたに懐いているクリスの様子がずっと気になっていたので、やはり彼女まで遊び人スキルの毒牙にかけてしまったのですね！」

「うん、そうだよ！ あたしはお兄様に弄ばれて、身も心もメス犬になっちゃったのさ！」

あまりに衝撃的なクリスの告白にギルド中が静かになる。何故か本人はニコニコしているけど、周囲の人々はドン引きである。

ただ、空気を読まない桂だけは、注目を集めたいがためにひたすら芸を続けているが……。

「どうしたみんな、俺の芸はまだまだあるぞー！ ほおーら、どうだ！ すごいだろう！

もっと見たいと望むなら、じゃんじゃんバリバリサービスするよー？」

「止めてくれ桂さん！ あんたはもう十分やったよー」

クリスの爆弾発言に観衆の興味を持っていかれて、桂の芸はあつという間に注目されなくなってしまう。

もちろん、そんな話を聞いてはアクアも黙っちゃいられない。人だかりを掻き分けて近づいて来るなり、とんでもないことをやらかした相棒を問い詰める。

「ちよつと銀時!! お兄様ってどーいうことよ!! 同じ銀髪だからとか言つて、無理矢理妹にしちやったの!? そんなもつて、髪色の似てる私まで巻き込んで、美人姉妹を

「ゲットしよう」と企てているんでしょ!」

「まつ、まさか!? S M だけでは飽き足らず、禁断の兄妹プレイにまで手を出そうと画策するとは!?! よもやあなたは、年の離れた妹にイケナイ行為をして喜ぶ変態野郎だったのですか!?!」

「おいコラ待てや、ビッチ共!?! ダクネスみてえな被虐妄想こじらせてんじゃねーぞゴルア!?! そんな変態プレイなんざこれっぽっちも興味ねーし! そもそも、クリスは他人だから乳繰り合ってもセーフですう〜!」

「年齢的にはアウトですけど!?!」

周囲から向けられる冷たい視線に焦った銀時は、更に自分を追いつめるような言い訳をしてしまう。

すると、ここまで静かに興奮しながら出番を待っていたダクネスが、主のピンチを救うために満を持して立ち上がる。

「待つんだみんな! 我が主は何も悪いことなどしていない! むしろ、この方はクリスの窮地を救ってくれた恩人なのだぞ!」

「はあ? なに言ってるのよダクネス。S M プレイでその子をいちめてた遊び人が、どう転んだら恩人になるってのよ?」

アクアの疑問はもつともだったが、ダクネスの話を聞いて考えが変わってしまう。

「みんながどう思おうとも、私の言葉は真実だ！ 可哀想なクリスは、カズマとハセガワにパンツとショーパンを剥がれた挙げ句、逃げ出したところをハセガワに捕まってキン肉バスターなる格闘スキルを食らい、スパッツ一枚の下半身を天に晒されながら気絶していた場面で、駆けつけた私たちに救助されたのだ！」

「ちよつとおおおおおおつ!!? 何勝手に紛らわしいクソ説明をしてくれてんだ!!? 待てよ、おい待て！ お前らすでに性犯罪者を見るような目をしてっけど、それは大いなる誤解だからな!? 間違つてないこともないけど合つてもないからマジで待つて!!? ねえ、お願いっ!!?」

どう聞いても誤解を招く説明にカズマが抗議するが、時すでに遅しだった。ダクネスの証言によつて形勢が逆転し、今度はカズマと長谷川に非難の視線が向けられる。

もちろん、それには仲間たちも含まれており、氷のように冷たい目をした水の女神が冷水を浴びせるような口調で二人を責める。

「いつかはやらかすんじゃないかなーとは思つてたけど、ここまでやるとは予想外だったわ。公の場で少女のパンツとショーパンを剥ぐだけでなく、キン肉バスターでトドメまで刺すなんて、悪魔超人ですらやらない残酷ファイトなんですけど。というか、ファンタジー世界のイベントなのに、何がどうしたらキン肉バスターなんて単語が出てくるわけよ!? あまりの唐突さに笑いを禁じ得ないんですけど!!?」

「んなもんこつちが聞きてーよ!」 つーか、パンツを盗る事態になったのもキン肉バスターを決めるハメになったのも、すべてはクリス自身がステイル勝負を挑んできたせいだし、俺はちゃんと泣いてるクリスにパンツを返してあげましたっ!」

アクアから責められたカズマは、すかさず反論する。流石の彼も、あそこまで酷い目に遭わされたクリスがあまりに不憫で、素直にパンツを返さずにはいられなかったのだ。

「なあクリス? 俺はなあーんも悪いことなんてしてないよなあー?」

「うん、そうだね。お兄様に似てるキミなら、ぱんつを返す代わりにもつと意地悪な要求をしてくるんじゃないかと思っただけど、意外に紳士で助かったよ!」

「うはははははは、そんなこたあ当然だろ!」 あの状況で『自分のぱんつの値段は自分で決める』とか言い出すクズがいるわきやねえよ!!」

《よく言うよ。本当はちよっぴりやろうとしてたクセに》

いくらウソをつこうともノルンにはごまかせない。残念ながらこの男は、クズマと呼んでも差し支えないほどのクズ野郎だった。もしも、キン肉バスターというイレギュラーが無かったら、クリスはぱんつを取り返すために有り金のすべてを失っていただろう。

幸か不幸か、キン肉バスターのおかげでクズとならずに済んだカズマは、黒歴史をこ



まかすように問題の終息を急ぐ。

「とにかくだ！ ぱんつの件もキン肉バスターの件も、すべては不運な事故でしたっつーことで！ ドウ・ユウ・アンダスタン？」

「そうそう、カズマ君の言う通りだぜ！ 俺のキン肉バスターも不運な事故だったんだよっ！」

「はあ？ なに言ってるのよ変態無職。事故なんかで、難易度の高いキン肉バスターが決まるわけないんですけど？ キン肉マンが努力を重ねてようやく習得したキン肉バスターを侮辱するにもほどがあるんじゃないかしら？」

「はっ、お前の方こそなに言ってるの？ 食っちゃ寝ばかりで碌な筋肉も無い駄女神にキン肉バスターの何が分かるってんだよ？ お前がキン肉バスター語るなんざ1000万パワー足りねえんだよ！」

「あの、ちよつといいですか？ そもそも、私はカズマたちの言うキン肉バスターというものがよく分からないのですが、キン肉バスターとはいったい何なんですか？」

「それならば、直に見てきた私が語ろう！ キン肉バスターとはm「ああもう、ごちゃごちゃうるせえなあ！ 黙って聞いてりや、キン肉バスター、キン肉バスターって、キン肉バスターばっかり連呼しやがって！ どんだけキン肉バスターが気になってんだテメエらは！ 確かに俺も、キン肉マンが使う必殺技の中ではキン肉バスターが一番好き

だが、代表的な必殺技はキン肉バスターだけじゃねえだろう!? にわか共はキン肉バスターばかり注目しがちだけど、有名なキン肉バスターばかりじゃほやしないので、たまにはキン肉ドライバーのことも話題に……」

「しなくていいよっ!? つーか、お前もキン肉バスター連呼し過ぎ!」

激しい論争を繰り広げている内に、何故かキン肉バスターをネタにしたケンカに発展してしまった。それでも一応最終的にはみんなの説得に成功して、周りにいた野次馬たちもだらだらと散っていく。

クリスとダクネスのぶっちゃけ話によって危うく変質者扱いされるところだったパッツ泥棒たちは、自己弁護に成功して安堵のため息をつく。

「ふう〜っ! 何かガキの頃よりキン肉バスターって叫んでた気がするけど、何とか嫌疑は晴らせたぜ!」

「まあ、当然の結果ね! 女神の私には、あなたが無実だつてことは最初から分かってたもの!」

「ウソつけええええええ! ついさつきまで俺にギャーギャー噛みついて、不毛なキン肉バスター論争を繰り広げていたじゃねーか!」

「あらあら、なんのことかしら? そんなことより、ケンカの最中も銀時に抱きつきっぱなしだったそのあなた。確か、クリスといいましたっけ?」

「う、うん。そうだけど……あたしに何か用かな?」

「用というか忠告よ。遊び人スキルのせいで『勘違い』しているのは分かっているけど、今すぐそいつから離れなさい。じゃないと、あなたもギント菌に感染して頭と髪がクルクルパーに……」

「誰がギント菌だ、汚水の女神! つーか、なに? やたらとクリスにツンケンしてる感じがすつけど、もしかしてお前、こいつにジエラシー感じてんの?」

「なっ!? なななななな、何を言っているのかしら、この遊び人はっ!? めめめめめ、女神である私が、地上のノミみたいなマダオごときのこととジエラシーを感じちゃったりするわけないでしょ!」

自覚していないアクアは必死に否定するが、実を言うと凶星だった。銀時にベタついているクリスを見てると何故かイラツとしてしまい、ムラムラと対抗心が沸き上がってしまうのだ。この感情が『後輩』に対しての幼稚な意地なのか銀時に対しての特別な想いなのかはアクア自身にも分からない。

ただ、一つだけ確かなことは、メインヒロイン（笑）の立場を脅かす強敵が現れたという事実のみ。女神が敵と認めたからには、一切の慈悲もなく全力で排除する!

「と・に・か・く! あんたなんかどーでもいいんだから、余計な口出しはしないで頂戴! これは、女神にふさわしいパーティとして必要なことなのよ!」

そう言うとアクアは、クリスにビシツと人差し指を向ける。

「いいこと、あなた！ 高貴で清純な私のパーティに、おへソ丸出しのチャライキャラなんて場違いも甚だしいの！ だから、あなたの居場所なんて微塵も無いのよ、ほほほのほーっ！」

「なっ?! 女神とか言ってたクセに、なんて心が狭いんだ!? 大体、こんな格好してる人は一杯いるし、お兄様と一緒にいるくらい別に問題ないでしょう!」

「いいえ、問題ありまくりですうー! やたらと既視感を覚えるその貧乳を見る度に、パッド入りの後輩を思い出してたたまれなくなるんですうー!」

「くうう〜! まったく気づいてないのに、ピンポイントでムカつくことを〜っ!」

変なところで勘の鋭いアクアがクリスの逆鱗を刺激してしまい、人知れずに女神大戦が勃発してしまった。

「くうんっ……! よもや、親友だけでなく女神までもが我が主を略奪せんと動き出すとは! いやらしい性癖に溺れ、墮落してしまった女騎士に屈辱という名の神罰を与えようというのか!」

「お前のその性癖自体が罰ゲームなんだけどお!」

銀時のモテ期到来(?)に嫉妬したカズマは、隣で身悶えているダクネスに八つ当たりする。実際は、好きとか嫌いとかを語る以前の段階なのだが、美少女のオツパイを左

右同時に当てられている奴は十分にリア充だろう。

「ちつくしよう！ 年増のアクアはどーでもいいけど、可愛いクリスの貧乳とそんなに密着しやがって！ 正直言つて羨ましいから、今すぐ俺と代わってください！」

「クズな本音がダダ漏れ過ぎてドン引きですよ、カズマ」

長い禁欲生活のせいでつい本性を晒け出してしまい、めぐみんから蔑んだ視線を向けられる。

「まったく、呆れてしまいますね！ カズマはともかく、銀時までがクリスにデレデレしちゃうなんて！ 何ですか！ うわべでは巨乳が良いとか言っておきながら、相手がクリスなら貧乳でもいいのですか！ 同じ貧乳にも関わらず、私の身体にはまったく無関心だったクセに！ このような不当な扱いは、断じて納得出来ませんよっ！」

「お前はどこに怒ってんだよ!? 自虐過ぎてこつちが泣けるわ！ つーか、俺はともかくってどーいう意味だ!？」

ナチュラルにロリコン扱いされたカズマが、おかしな怒り方をしているめぐみんに突つかかる。彼女がイラツとしているのは、クリスと仲良くしているように見える銀時が原因なのだが、今のところは『仲の良いダメ兄貴を取られたくないツンデレ妹』と言った感じだ。

「何にしても、これは後でオハナシする必要がありますね……。ところで、話は変わりま

すが、カズマとハセガワは、無事にスキルを覚えられたのですか?」

一通り外に出して落ち着いためぐみんは、本来の目的について質問する。長谷川にとっては微妙な結果で答え辛かったが、前向きなカズマは逆に名誉挽回のチャンスと捉える。

「そりやまあ一応、覚えることは出来ただけだな……」

「おや、もしかして問題でもありましたか?」

「いいや、バツチリ使えるぜ。ほおーら、よく見ろ、「ステイール」ッ!」

ドヤ顔で叫んだカズマは、めぐみんから盗み取った物を広げて見せた。それは、黒くて、イイ匂いがして、ほんのりと人肌の温もりがある布切れだった。もつと正確に言う、めぐみんがつい先ほどまで身に付けていた黒いパンツである。

ようするに、懲りないカズマは再びパンツを引き当ててしまったわけで、同じ光景を目撃した銀時が被害者であるめぐみんよりも先につっこむ。

「おいおい、ナニしてくれちゃってんだよ。ロリっ子担当が黒パンツとか、あざと過ぎにもほどがあんだろ」

「つて、つっこむところはソコなんですか!?! 私はロリっ子担当じゃないですし、あざとくもありませんよ!?!」 というか、ここは私の趣味よりも、冒険者から変態にジョブチェンジしたカズマの趣味をデイスるところでしょ!?!」

「俺の趣味を捏造すんな!! これは単なる不可抗力だ! つーか、このスキル自体がおかしいんだけど! ランダムで何か一つ奪い取るって聞いてたのに、何でこんなに男の欲がモロに反映されちゃうのっ!」

慌ててめぐみんにぱんつを返して必死に言い訳をするものの、周囲にいる女性たちの視線は冷たいものになっていく。そりゃ二回連続で少女のパンツを盗み取ったのだから当然である。

「女の敵ね」

「最低のクズだわ」

「恥を知れパンツフェチ」

「少女の下着を公衆の面前で剥ぎ取るなんて、素晴らしい鬼畜っぷりだ!」

「攘夷志士にあるまじき破廉恥行為の数々には虫唾が走るわ、変態野郎っ!!」

「って、なんかいつの間にドM女とロン毛男混ざってますけど!! 仲間のピンチを利用して打ち解けてんじゃねーよ!」

いつの間にか、カズマにロックオンしていたダクネスと芸を止めた桂が紛れ込んでいた。二人とも、長いこと構ってもらえなくて寂しくなったのだ。

「いやはや、まったく情けない……。誉めた途端にこのような不祥事を起こすとは、監督として甘過ぎたか。せつかく、命懸けでホワイトウルフを倒したというのに、こんなこ

として他の部員に申し訳ないとは思わんのかああああああっ!」

「いや、他の部員で何なんだよ!? いつから俺たちや部活をしていた!」

「何を言う。俺とエリザベスはちゃんと部活動をしていたではないか」

「それってあの、クソみたいな状況でやってたキャッチボールのことかああああああっ!」

何ふざけたことをぬかしてやがんだと、ムカつく桂に怒りをぶつける。

しかし、怪我の功名というべきか、桂の発言によってカズマを見る周囲の目が変わった。

「なっ、マジかよ!? あんなに弱そうな奴がホワイトウルフを倒したのか!」

「もしかして、彼はカツラさんの弟子なんじゃない?」

「なるほどな。それならホワイトウルフを倒したつても納得出来るぜ」

「まあ、ぱんつの件は有罪だけだね」

「ええ、ぱんつの件はアウトですね」

「いや、そこも流れで納得してよ!」

流石にパンツの件までは無かったことに出来なかったものの、ズタボロになっていたカズマの名誉はかなり回復された。

「あの、桂さん。微妙に納得出来ないんですけど、一応感謝ときます」



「なに、礼など不要だ。いずれは魔王を討伐する勇者パーティの一員に【華麗なるばんつ泥棒】の称号を与えるわけにはいかんからな」

「確かに、ツラの言う通りだ。ただでさえ『あぶないみずぎを買うために命懸けてる勇者つてただの変態じゃね?』とかバカにされそうなのに、これ以上のマイナスイメージは是非とも避けたいところだぜ。じゃないと、魔王を倒した後に作られる勇者像なんか【セクハラ装備をコンプせし者】とか刻まれちゃうかもしれねえからな」

「そりゃあ確かにイヤだけど、心配するところおかしくね?」

どこまで本気が分からないバカたちの未来予想図に苦笑する。果たして、ちゃらんぼらんないつらに魔王を倒す気などがあるのだろうか……。

半信半疑なカズマが二人の真意を計りかねていると、それを真に受けためぐみんが紅い瞳を輝かせる。

「ほほう! 一切の迷いなく魔王討伐を公言するとは、その意気や良し! もちろん、我にも異論は無いぞ! 我が命である爆裂魔法を以て、汝等と共に魔王を討つことをここに誓おう!」

「おお、めぐみん殿! 偉大なる魔道の力で未来を明るく照らしてくれるか!」

「我が名はめぐみん! 紅魔族随一の魔法の使い手にして爆裂魔法を操りし者! 最強のアークウィザードたる誇りに懸けて、交わした契りは必ず守る! すべてを滅する我

が魔法で、最強を騙りし愚かな魔王を消し飛ばしてみせましょう！」

シラケた周囲を放置してイタイ会話が展開される。中二病が魔王と聞けばこうなるのは当然だろう。

さらにもう一人、ドMの女騎士もこういうシチュエーションには食いつかずにはいられない。

「無論、私も同行し、皆を守る盾となろう！ 魔王討伐のパーティと言えば女騎士が定番だからな！ たとえ、この身が傷つこうとも、クルセイダーとして覚悟の上だ！ いや！ むしろ、そうなることを誰よりも望んでいる！ 力及ばず捕らわれの身となった私は、鎧や衣服を剥ぎ取られて、性欲に飢えた魔族共から耐えがたい恥辱を受けるだろう！ そして、激しさを増していく過酷な責めに身も心も溺れていき、ついには自らm「待って待ってええええええええいつ؟!」 それ以上はR—18な内容だから公共の場で言っちゃダメええええええええいつ?!」

危うくアダルト作品になりかけたところで長谷川が止めに入る。こういう時、エロ関係の知識が豊富な彼は行動が早くて助かる。

「ははは……。ダクネスも良い仲間巡回会えたみたいだね」

一連の出来事を静かに見ていたクリスは、順調にドMを悪化させている親友にがつくりとしながらも、口元には笑みを浮かべる。一見するとバカの集まりに過ぎない連中だ

が、幸運の女神が世界の命運を賭けてみたいと思わせるほどの魅力が彼らにはあった。「いいねキミたち、すごくいいよ！もしかしたら、本当に魔王を倒す勇者になるかもしれないね！」

「はっ、そいつあやつてみなきや分からねえが、俺に期待するっつーんなら、有名になる前にサインでも書いてやろうか？ 1枚1万エリスで」

「う、うん……。あからさまにぼったくりだけど、お兄様が書いたものなら買ってみてもいいかな」

「あつ、だったらセットで私のサインも買いなさいよ！ 勇者を導いた水の女神のサインなんてとんでもないプレミアア物だから、知り合いのよしみでうんとサービスしても1枚につき100万エリスが妥当かしら？」

「高ーっ!! お兄様以上にぼったくるなんて、女神にあるまじき行為だよ!!」

詐欺紛いなことを言い出した駄女神に良識的な盗賊が驚く。魔王討伐そっちのけで女神の威光を悪用したお金稼ぎをするなんて、いかにも先輩らしいですけど、お願いですから止めてください……。

「(はあ……。今からこんな状況では、この先も心配ですね)」

ダメな先輩のバカな行動に不安を覚えたクリスは、これ以上厄介な問題を起こしませぬようにと真剣に願ってしまう。

その時、彼女の想いをあざ笑うかのように緊急事態を知らせるアナウンスが響き渡った。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まってください！ 繰り返します……』

魔法か機械を使ったのか、拡大されたルナの声が街中の冒険者たちに呼びかける。

すわ、魔王軍の襲撃か？

真つ先に反応した桂と銀時に緊張が走る。

「くつ、なんてことだ！ 勇者の育成が終わる前にデスピサロに感づかれたか!？」

「いいや違うな！ 魔王の手下に操られたラインハットが攻めて来やがったんだ!？」

「どっちも絶対違うんですけど!?! どこまでドラクエこじらせてんの!？」

長谷川の言う通り、これはドラクエ的な襲撃イベントではない。経験のある者たちは何が起きたのか察しており、ドヤ顔をしためぐみんが嬉しそうに説明してくる。

「恐らくこれは「キャベツの収穫」でしょう。時期を考えれば簡単に推測出来ます」

「はあ？ キャベツの収穫う？ まさか、俺たちに農家の手伝いをしろっていうのか？」

「人手が足りぬというのであれば、鉄ODASHでスローライフを堪能しているTOK I Oのごとく土にまみれるのもやぶさかではないが、これはいささか大げさ過ぎるのではないか？」

めぐみんの話の話を聞いたら、疑問が解消されるどころかさらに意味不明になってしまった。

そんな中、放送室から戻ってきたルナがギルドに集まった冒険者たちに説明を始め、謎のクエストはとんとん拍子に進んでいく。

「なあ、カズマ。一玉で一万エリス貰えるっつーのは良いとして、『パンピーは避難させたい』とか『冒険者は怪我すんな』ってのはどーいうことだ?」

「さあ、どーいうことでしょうね? もしかして、キャベツつてのはモンスターの名前かなあ?」

嫌な予感がした銀時とカズマは互いに表情を曇らせる。

果たして、キャベツの収穫とは何なのか。アクセルの外壁から出た彼らは、その真実を目撃する。遠くの空からこちらにめがけて飛来してくるキャベツの大群を。

「キャベツが空を飛んでいるだど……?!? まさか、この世界の野菜は全部、サイヤ人的な化け物なのか!?!」

「つて、違うんですけど!! この世界のキャベツはサイヤ人みたいに空を飛ぶけど、そこまですっ飛んだ戦闘力は流石に持つちやいなわよ!? でも、その代わりに普通の野菜よりも味が良くて、ついでに経験値までゲット出来ちやう素晴らしい食材なのよ!」

「ああ、ウイズの店の焼そばパンに使ってたアレか……!」

アクアから話を聞いてようやく納得した。あの時は値段が高いと文句を言ったが、これだけ収穫が面倒なら原価が上がっても仕方がない。

つまりアレはお宝の大群であり、このクエストは大金を儲けるチャンスなのだ。キャベツと戦いたくないカズマはまったく乗り気ではないものの、金に目が眩んだマダオたちはヤル気満々になる。

「俺、もう馬小屋に帰って寝てもいいかな？」

「おう帰れ帰れヒキニート！ お前がいなくなつた分だけ俺が幸せになるんだからなあ！」

「ヒヤツハーツ！ 一万エリスが大量に飛んで来やがるぜええええええつ！」

こうなればもう仲間であつてもライバルである。あからさまに敵意向き出しな銀時と世紀末状態の長谷川を見てカズマは一つの答えを出す。

「よし決めた。今すぐ馬小屋に帰って寝よう」

「それは残念だな。せっかくの祭りだというのに、カズマは参加せぬのか？」

「はあ？ これのどこが祭りなんだよ？ キャベツ共を血祭りに上げて収穫祭でもしろつてか？ って、將軍かよおおおおおおおおおつ！」

後ろから話しかけてきた人物に気づいたカズマは驚きの声を上げる。その凜々しい顔立ちをした騎士は、クルセイダーの鎧を装備してきた茂茂だった。

「あ、あのー。もしかして、將軍様もキャベツを狩りに来たのですか？」  
「うむ、そうだ。焼そばパンの具材に新鮮なキャベツが必要なのでな」

やる気丸出しな格好でおかしな答えを返してくる。ようするに、茂茂の参加理由は、ウイズにプレゼントする食材をゲットするためだった。お金で解決出来るにも関わらず、自分の努力も惜しまない辺りに、不器用ながらも誠実な性格が現れている。

そのおかげか、金持ちや貴族に対して不寛容なアクセルの住人たちも茂茂のことは好意的に受け入れており、彼に気づいた冒険者たちから歓迎する声上がる。

「おおっ、我らがブリーフマスターの登場だぜ！」

「ブリーフマスターと一緒に戦えるなんて身に余る光栄だ！」

「やつぱり、何度見てもブリーフマスターってイケてるわよねえ〜♪」

「へっ、ブリーフマスターを口説こうってんなら、無駄だから止めとけよ。やつこさんの隣には、あのウイズさんがいるんだからな」

「はあ、まったくもって羨ましいわ。スーパージョーカーのブリーフマスターを落とすなんて、ウイズさんもなかなかやるわね！」

「って、どう見てもイジメ現場じゃねーかコレツ!? 好意的なフリしてっけど、お前ら絶対徒党を組んでブリーフマスターおちよくってるだろ!? ああほら、ヤベエぞつ!! あまりにあだ名でからかわれるから將軍様も辛くなつて、ちよっぴり泣いちゃってんじや

ねーか!？」

愛されキャラとなった茂茂はいじられキャラにもなっていた。リッチな身分であることに加えてウイズと仲が良いことに対するやっかみも含まれているのだが、これも幸せを得るために必要な対価だと思えば安いものだろう。

「あ、あの……大丈夫ですか將軍様？」

「う、うむ……余のことは気にしなくていい。それより、カズマよ。帰るなどと言わずに、この祭りを堪能するといいだろう。上手くすれば百万以上は稼げるやもしれんしな」

「えっ、マジでそんなに儲かるの!？」

《しかもさらに、アタックチャ〜ンス！ ボクの力を合わせれば、二百万は確定だよ！》  
「よっしやああああああっ！ 狩って狩って狩りまくるぜっ！」

現金なカズマは現金に釣られて前言を撤回した。プライドも大事だけど、やっぱり世の中お金だと思うの。

何はともあれ、殺る気に満ちたハンターたちが門前に揃いぶみ、空飛ぶキャベツとの壮絶かつマヌケな戦いが開始される。

欲に燃えた冒険者共が一斉に駆け出そうとする中、桂&エリザベスのツーマンセルが



真つ先に飛び出して銀時を挑発してくる。

「ふははははは！ 先ほどは遅れを取ったが、今度こそは勝利をもらおうぞー！」  
 〈俺たちの前で無様にひざまずかせてやんよ！〉

リベンジする気満々なバカ共は勢いに任せて先行する。しかし、それは遊び人スキルを覚えた銀時の前でやってはいけない失策だった。彼に後ろを見せたことで大きな隙が生まれてしまい、いとも簡単に「ターゲットルシエル・バインド」の餌食となってしまうのである。

「なんじゃこりやああああああつ?!」

〈恥ずかしいから見ちやらめえーっ!〉

「はっ、バカめ！ テメエらはそこで縛りプレイでも堪能してな！」

汚い手段であつという間にライバルを無力化すると、呆気にと取られている周囲を放置して猛然と駆けだした。もちろん、彼のように「バインド」で妨害するようなクズ野郎は他におらず、そのまま誰にも邪魔されることなくキャベツの群れに突っ込んでいく。「オラオラオラアアアアアアアアツ!! 一万エリスのキャベツは全部、この俺のものだあああああああつ!!」

非常に大人げない氣勢を上げながら洞爺湖を振り回し、瞬く間に十数玉のキャベツを撃墜する。性格には難ありだが、剣の実力だけは手放して誉めるしかない。

「す、すげえ！ 汚え手を使ってたクセにやたらと強えぞあの野郎!」

「こいつあやバイぜ!? 早くしないと、あいつに全部やられちまうよ!」

数少ないボーナスチャンスを奪われては堪らないと、他の冒険者たちも一斉に動き出す。もちろん、縛られている桂たちを放置したままで。

「おいみんな! 手間をかけてすまんが、この縄を解いてくれぬか……。つて、あのちよつと聞いてます? お急ぎだとは思いますが、こつちも非常事態なんで、少しだけお時間をいただけませんかでしょうかねえ? つーか、頼まなくても助けてくんない!?! 知人が亀甲縛りされて困ってるのに素通りするとかおかしいだろう!?! ここは俺を助けることが大人としてのマナーでしょーがつ!?!」

「うっせーぞロン毛野郎! マナーなんざ守ったつてマナーは稼げねーんだよ!」

金銭欲に取り憑かれた冒険者たちは、助けを求める桂などに目もくれずに走り抜けていく。お金に対する執着だったら、彼らも負けてはいないのだ。

さらに、クリスとダクネスも、自身の欲望を満たすために銀時を追いかける。

「あたしもやるよ、お兄様ーっ! 取ったキャベツは全部あなたに貢いであげるからあーっ!」

「ならば、私は囷として我が主に貢献しようっ! 私ごと奴らを倒せば一石二鳥だぞおーっ!」

一見すると熱烈なラブコールなのに、内容は残念過ぎる。この二人が合流したら、さらに厄介なことになりそうだ。

一方、後衛陣にいるめぐみんは、状況を見守りながら自分の出番を待っていた。

彼女の狙いは、キャベツを追って街に近づいて来るモンスターの集団だ。爆裂魔法でキャベツを倒したら売り物にならなくなるため収穫自体には参加出来ないのだが、邪魔なモンスターを排除した場合もギルドから特別報酬をもらえるので、彼女はそちらだけに賭けているのだ。

「ふっふっふっ！ もうすぐです！ もうすぐ私の爆裂魔法が皆の前で力を示し、偉大な歴史のページがまた一つ刻まれますよー！」

マイペースなめぐみんは、目の前で起きている騒動などに構うことなく、おかしな妄想に酔いしれる。

しかし、そんな余裕はあつという間に無くなってしまう。あまりに銀時が暴れたせいでキャベツたちの動きが乱れ、比較的安全な場所だったはずの後方にまでキャベツの大群が押し寄せて来たのである。

「ちよっ、なんでコツチに来るんですか!? とうか、動きがやたらと早いですけど!? これはヤバいんじゃないですか!？」

危機迫るようなキャベツたちの動きにめぐみんは恐怖する。銀時の放つドス黒い殺気におびえたキャベツたちは、生存本能を刺激されて通常よりもパワーアップしてしまつたのだ。

まさに火事場のクソ力で、レベル2の長谷川ではまつたく歯が立たなかつた。

「ぐぎやあああああああつ!? こ、こいつら……的確にチ○コを狙つてきやがるつ……」  
股間に痛恨の一撃を食らい、そのまま地面にダウンする。追い詰められたキャベツ共は手段を選ばなくなつたようだ。

周りを見れば、他の冒険者たちにも被害が多発しており、暢気にはぐれキャベツを追いかけて回っていたアクアも逆襲を受けていた。

「きやあ、やめてえ!? そんな執拗にお尻をパンパンしないでえええええええええつ!?」  
お尻を天に突き出すような格好で倒れ込んだアクアは、しこたまケツをスパンキングされ続ける。楽しい野菜狩りだったはずが、一瞬にしてデンジャラスな生存競争の場と化してしまつた。

どうしてこんなことになつてしまつたのだろう。仲間たちの悲劇を目の当たりにしたためぐみんは呆然と考えるが、そんな彼女にもバーサーカーと化したキャベツが襲いかかる。

「何ですかこの状況は? 私は白昼夢でも見ているのですか? ええきつとそうに違い

ないです！ 恐らくすでに爆裂魔法を使って満足感に満たされながら気を失ったとかそんなオチ……じゃありませんえええええええんっ!？」

軽く現実逃避をしている内にキャベツが目の前まで迫って来ていた。

しまった。このままでは、腹パンのなダメージを受けてしまう。避けられないと察したためぐみんは、痛みに備えて目をつむる。

その時、間一髪のタイミングで彼女を助ける者が来た。

「【ステイル】 ツ！」

「……………えっ?」

聞き覚えのある声に反応して目を開けると、そこにはキャベツを手にとってニヤリと笑うカズマがいた。めぐみんに体当たりしようとしていたキャベツをステイルで捕獲したのだ。

「ふっ。危ないところだったな、めぐみん！」

「は、はい……。助けていただきありがとうございます……」

爽やかなイケメン風の喋り方にイラツとしつつも、助けてくれたことには感謝する。露骨に意識しているのがあざとくてアレですが、ヒロインのピンチを救ったのは、かなりポイント高いですよ。

「それにしてもやりますね。覚えたばかりの盗賊スキルを早速使いこなすとは。どうや



カズマが地味に活躍を始めた頃。最前線で暴れていた銀時は、キャベツたちの変化に怒って悪態をついていた。

「ちいい、小賢しいキャベツ共めっ！ 俺の間合いから逃げ出しやがって！」

追いかけていたキャベツを撃墜しながら盛大に愚痴る。あまりに強すぎるせいでキャベツたちから避けられるようになり、収穫率が悪化してしまったのだ。その分、群れが周囲に分散して後方にいたアクアたちが酷い目に遭っているのだが、実力のあるクリスは逆に収穫数を延ばしていた。

「ステイール」ッ！ 「ステイール」ッ！ 避けてからの「ステイール」ッ！

【窃盗】スキルを連発して上空にいるキャベツたちを一方的に狩りまくる。にわかなかズマよりも慣れた動作で、銀時も感心する。

「ほう、パンツを盗られて泣いてた割には結構やるじゃねえか」

「ぱんつの件は関係ないでしょ!?! あれはもう忘れちゃってよ!?! で、でも、お兄様に褒めてもらえるなら、ネタにされてもいいかな！」

遊び人スキルが効きまくっているクリスは、Sっ気を含んだ褒め方をされて喜んでしまう。正気に戻った後で、恥ずかしさのあまりに天界の床を駆け回ることになるのだが、今はとても幸せそうだ。

「もつとたくさん収穫して、お兄様の寒い財布を暖めてあげるからね!」

「ああいいぞ、どんどん稼げ。代わりにハードな礼をすつから」

「う、うん、分かった! あたしがんばりゆ!」

銀時のドSな対応に何故かクリスは真つ赤になる。この時彼女が十二を想像したのかはともかく、完全に遅れを取る形となったダクネスはさらに危機感を募らせる。

「我が主! もつと私を囮として存分に使つてくれ! まだまだ私は耐えられる! いや、鎧や衣服を引き裂かれて力尽きても構わない!」

「つたく、DMがギヤーギヤーうっせーな。囮とか言つてつけど、キャベツの群れに突つ込むだけでクソの役にも立たねーじゃんか。大体お前は硬いだけで、攻撃は当たらないは動きはノロいは、クロコダインのおっさんよりも使い勝手が悪いんだよ!」

「んんっ! ……ああそうだ。我が主のおっしやる通り、私など、ただ硬いだけの女だ。すべてにおいて不器用で、皆を守る盾になるしか能の無い存在だろう。だがしかし、こんな私でも騎士としての誇りがある! たとえ、硬いだけの役立たずと罵られようとも、エロい身体にしか価値は無いと辱められようとも、忠義を誓ったあなたのために私は役に立ちたいのだ!」

熱くなつたダクネスは、自分の言葉で興奮しながらおかしな懇願をしてくる。

そんなことを言われても、硬いだけの変態DMをどう使えというのだろうか。こうも



乱戦になってしまうと囿の効果はあまりないし、キャベツの攻撃は避ければいいので壁役も必要ない。

これで攻撃が当たればまだ使いようもあるのだが……

「いや待てよ。逆に考えれば、当たるような攻撃法をすればいいんじゃないか？」

「ん、なんだ!?! 何か良いプレイを思いついてくれたのか!?!」

「ああ。お前のおかげで、とつてもイカしたアイデアを思いついちまったぜ……」

そう言うのと銀時は、ゾクリと来るような笑みを浮かべてダクネスを魅了する。

「んくっ!?! そそそそそ、それで、そのアイデアとはっ!?!」

「ふっ、それはな……」

思わせぶりな銀時からアイデアを聞いたダクネスは、一瞬も迷うことなく即座に賛成する。

果たして、そのアイデアとはいったい何なのだろうか。最初に目撃することになったクリスは、我が目を疑うほどに驚愕する。

「いいかダクネス! 今からお前は、鍛え抜かれた一振りの【剣】だっ! 決して折れず、すべてを砕く、最硬の人型剣! それが新たに編み出された、お前のバトルフォームだああああああああっ!!」

「了解したぞ我が主! 私は今から剣になりゆー!」

「つて、二人共なにやっつてんののおおのおおおつ!?」

目を見開いたクリスが視線を向けた先には、棒のように背筋を張ったダクネスを両手で【装備】した銀時がいた。フルプレート製の鎧を着ている彼女はかなり重いはずなのだが、ギャグマンガ特有の理不尽なパワーで物理法則をガン無視していた。

「あ、あのく、お兄様。まさか、その状態でキャベツと戦うつもりかなあ?」

「もちろん、そうに決まってるだろっ! さあいくぜ! 最狂の性剣、ダークネス・エクスカリバー!」

「承ったぞ、マイマスター! 思う存分私を振るい、キャベツと我が身に苦痛を与えよっ!」

妙に息の合った二人は、中二病的なノリでおバカな作戦を始めた。

銀時のクソ力でダクネスの身体をブン回し、キャベツのいる所に突っ込んで手当たり次第に暴れまくる。モラルを捨て去った代わりに攻撃範囲が拡大して、キャベツの撃破数が格段に増加していく。

「なんだありや!?! 女の子をぶん回して暴れてる奴がいるぞーっ!?!」

「ひ、酷え!?! あんなこと悪魔でもやらねえぞ?!」

「つーか、どーしてあれでキャベツ狩れんの!?!」

あまりにシュールな光景を見て、常識の範疇にいる冒険者たちは度肝を抜かれてしま

う。

「はあーっはっはっは！ 最高にクールだぜ、ダークネス・エクスカリバー！」

「くっはああああああんっ!! あなたも最高にイカしているぞ、マイマスタートツ!!」

まともな冒険者たちが戦慄する中、変態コンビは笑いながら猛威を振るい続ける。何というか、いろんな意味で危険過ぎて近寄ることも出来なくなった。

もはや、狩り場はD&DとDMの独壇場となつてしまふのだろうか。手も足も出なくなった皆が困り果てたその時、茂茂によつて解放された桂が駆けつけて、銀時にドロツプキックを食らわせた。

「ぐはあーっ!?!」

「ふんっ！ 貴様の狼藉もそこまでだ、銀時！ 皆が楽しみにしていたキャベツの収穫を台無しにするなど、侍として断じて許せん！ 体験学習が楽しいからって、はしやぎすぎてはいけませんよ！」

「侍っつーより引率の先生だろソレ!?!」

間抜けな怒り方をする桂にツツコミを入れつつ起き上がった銀時は、洞爺湖を抜き放つてすぐさま反撃に移る。

「どうやら、もう一度ぶつ飛ばされたいようだなあ、ツラー！」

「ツラじゃない、キャベ○太郎も大好物な桂小太郎だ！」

お決まりのやり取りをした直後に、再び達人同士の超次元ケンカが始まる。しかも、今度は屋外なので、ギルドの時よりさらに過激になっていた。

剣技による衝撃波で土煙が巻き起こり、健脚による足捌きで硬い地面が吹き飛ばされる。速く重い剣撃がいくたびも踊る様子は、華やかで美しく、暴力に満ちていた。

「なななな、なんだこりゃー!？」

「もうキャベツの収穫どころじゃねーっ!？」

唐突に再開された侍同士のガチンコバトルは、周囲の冒険者まで巻き込んでさらに加熱していく。

「うわっ、こつち来んなああああああっ!？」

「ちよっ、まつ、ぐふうーっ!？」

「きゃああああああっ!？ ダストがまた吹っ飛ばされたああああああっ!？」

巻き添えを食った冒険者たちが次々と空を舞う。残念なことに、桂が来たことで事態が悪化してしまった。

「ちいいい！ このままじゃ埒があかねえ！ こうなりや、再びダークネス・エクスカリバーの出番だっ!？」

「つて、それダクネスじゃなくて将軍ーっ!？」

土煙のせいでダクネスと間違われた茂茂がブンブンと振り回されて人間鈍器となる。

不運にも、防御重視の戦闘に備えてクルセイダーの格好をしてきたことが仇となつてしまったのだ。

その結果、お役御免となつたダクネスは悔しさに咽び泣く。

「くううっ！ よもや、シゲシゲ殿にオイシイところを持つて行かれようとは！ 私  
はもつと棒切れのように扱われていたかつたのにつ！」

「うんうん。キミの気持ちは分かつたから、とりあえず鼻血を拭きなよダクネス」

過剰な興奮状態となつたダクネスは鼻血を垂らし、それを見たクリスがやるせない表情で拭いてあげた。

それから数時間後。

銀時と桂のケンカは結局相打ちで終わり、肝心な収穫数を伸ばすことが出来なかつた。その反対に混乱を回避したカズマは、逃げ惑うキャベツを狩りまくつて、一人で大儲けをしていた。

それでも何故か嬉しくないと、爆裂魔法を使って動けなくなつたためぐみを背負いながら思う。

「ふっふっふ……見ましたかカズマ！ 最強を誇りし、我が爆裂魔法の威力を！」

「はいはい見ました！ お前もあいつらと同類だつてことをな！」

長谷川から聞いてはいたが、マジで一発屋なめぐみんに心底呆れてしまう。

やっぱり、俺の仲間はバカばっかだぜ。背中に感じるめぐみんの柔らかさにムラムラとしつつも、ちよっぴりやさぐれてしまうカズマであった。



銀時たちがキャベツの収穫を終えた頃、アクセルより遠く離れた紅魔の里では、ひよいざぶろーという名の男が疲れた様子で帰宅していた。

彼はめぐみんの父親で、変な魔道具を作る職人なのだが、今日は外で試作品の試験をしてきたのである。

「ただいま……」

「あつ、おかえりなさいお父さん！」

家に入ると、めぐみんを小学校低学年くらいにした少女が現れた。彼女の名はこめつこと言つて、少し年齢が離れているめぐみんの妹だ。

「ねえねえお父さん、おみやげはー？ 細かくなくて透き通つてないじゅーしーなお肉

はどー？」

「はっはっは、そんな良いものがあつたら、父さんが一人でこっそり食べているさ」

こめつことひよいざぶろーは、聞いているこつちまで切なくなってしまう会話を交わす。貧乏な彼らは、とつてもワイルドな暮らしをしているのだ。

それでも家族の仲は良くて、彼の妻であるゆいゆいも笑顔で夫を出迎える。

「お帰りなさい、あなた。お土産に期待していた、細かくなくて透き通つてないジュシーなお肉が無くてとつても残念ですけど、無事に帰つて来てくれて嬉しいわ」

「何やら露骨に嫌みを言われているように感じるが、そもそもワシは狩りに行つていたわけではないぞ?」

「あら、そういえばそうでしたね。それで、試作品の試験結果はいかがでした?」

「ん? ああ、アレはな……ワシの想定を遙かに超えた性能を秘めていた。しかし……」  
成果を聞かれたひよいざぶろーは苦い顔で言葉を濁す。その理由は、自身の魔道具によつておぞましい光景を作り出してしまったからだ。

今より数時間前。魔道具の試験をするために出かけたひよいざぶろーは、紅魔の里の近隣にある平原地帯にやつて来た。この地域には厄介なモンスターが数多く生息しており、試験をする際の被験体として利用しまくつていた。

『人に仇なす怪物共よ。我が発明の糧となれ』

紅魔族らしく中二病なセリフをつぶやいたひよいざぶろーは、球状の魔道具を手

持つて哀れな標的を探す。

その魔道具は、野球ボール程度の大きさに作られたトラップアイテムだ。これを相手に当てると、いろんな手法を用いて培養したスライムのヌルヌルが飛び出し、一緒に封じ込めていたクリエイトウォーターの水でさらにヌルヌルが増殖して、全身がヌルヌルとなった相手はヌルヌルと滑ってまともに動けなくなる。ぶつちやけると、ファンタジーなローションである。

『この「ヌルヌルボール」を使って突進力の強いオーク共を無力化出来れば合格だ』

もう名前からして失敗フラグしかない。彼の作る魔道具は大抵おかしな物ばかりで、あのウイズから高い評価を受けるほど使えない作品だらけなのだ。

こうなると、彼がオークにやられてしまわないか心配になるところだが、たとえ失敗したとしてもレポートで逃げればいいので安全は確保済みだ。

『後は、奴等と出くわすだけ……ん？ あれはもしや』

周囲を見渡していると、遠くに土煙が立っているのが見えた。どうやら、モンスターの群れがこちらに向かって駆けて来ているようだ。

『ふん、飛んで火にいる夏のブタだな』

紅魔族で伝わっていることわざをもじってニヤリと笑う。行動パターンから考えて、あれはオークの集団だろう。



『向こうから来てくれるとは、手間が省けてありがたい！ 偉大なワシの発明に恐れおのけオーク共っ！』

見る見る近づいてくるモンスター集団に向けて勇ましく吠える。

その時、ひよいざぶろーはある違和感に気づいた。姿形まで見えるようになった集団の先頭が見慣れないモンスターだったのだ。

『なんだあのゴリラは？ この辺では見かけないタイプだが、もしや新種か？』

目を凝らしてよく見ると、そのゴリラ型モンスターは黒いズボンをはいており、腰には細身の剣までぶら下げている。見た目に反して知能の高い種族のようだが、たった一匹でオークの縄張りに迷い込んでしまったのなら、狩られる側になるしかなかるう。

『まあ、そんなことはどうでもいいか。お前もついでにこいつを食らえいっ！ ギャラクテイカマグナムツ!!』

ゴリラならどうでもいいので、一切の迷いなく試験を開始する。どこぞのイ○ローバりにレーザービームのような遠投を決めて先頭のゴリラにヌルヌルボールを命中させると、後ろにいるオーク共にもどんどん投げまくる。そして、用意していた球をすべて投げ終えた時、そこには見るもおぞましいヌルヌル地獄が出現していた。

『ごくり……我ながら恐ろしいものを作り出してしまったようだな……』

ひよいざぶろーは、自らの行為に恐怖した。彼の眼前には直視に耐えない光景が広

がっていたのだから無理もない。ヌルヌルとなったゴリラとオークがヌルヌルでもにも動けずヌルヌルを巻き散らしながら悶え狂っているのだから。

『ま、まあ、無力化には成功したし、結果良ければすべてよし……ん?』

近寄りながら観察していたひよいぎぶろーは、耳に届いてきたオークたちの会話から奇妙な変化に気づいた。

『ああああああんっ?! なにこの初めて○○した時のような胸の高鳴りいいいいいいっ?! このヌルヌルにまみれていると、それだけでもう○○○○で○○○○を○○○○してみたいに身体がたぎって来るわああああああああああっ?!』

『あはあんっ、もうらめえええええええっ! 今すぐあなたの○○○○を○○○○で○○○○させてアタシの○○○○『気持ち悪いんだよメス豚があああああああああっ!!』

禁止用語の連発に気分が悪くなったひよいぎぶろーは、欲情しまくるオーク共に火の魔法をぶっぱなすと、その場から逃げ出した。

『はあ、はあ……。汚物を消毒したい衝動に抗えんかった……』

一応ご近所さんのよしみで穩便に済ましてやろうと思つてたけど、あれは無理ですごめんなさい。ヌルヌルのおかげで大したダメージはないだろうが、闇の炎に抱かれて消えろ!

それにしても、この結果は想定外だ。どのような影響か、明らかに奴等の様子がおか

しくなっている。オーク共は普段から発情しつばなしな連中だが、あそこまで禁止用語を連呼するほど盛ってはいないはず……。

『もしや、あのヌルヌルには【媚薬】のような催淫効果があるのでは？』

オークの反応から即座に推察する。どうやら、ヌルヌルを再現する際に使用した素材のせいで何故か媚薬的な副作用が生まれてしまっていたらしい。

『ワシが手で触った時には何ともなかったのに、全身の素肌に付着すると効果が出るのかーっ!』

思いもかけない欠点にガツクリとする。これではモンスターが興奮して余計に危険度が増すかもしれないし、人間相手に悪用されたら自分にも罪が及びかねない。というか、あんな光景はもう二度と見たくねえ。

つまり、結論を言うと、アレは失敗作だった。

『認めたくないものだな、貧乏ゆえの過ちというものを……。経費削減のために【ドラゴンのふん】を【ドラネコのふん】で代用したのが不味かったのかもしれん。こうなれば、忌まわしいヌルヌルボールの量産は止めて、新たな魔道具開発に取りかかるしかあるまい』

心が強いひよいざぶろーは、あつさりと失敗を認めて次回の糧にするのだった。

ただ一つだけ心残りなのは、最悪な状況に陥らせてしまったゴリラのことだ。モンス

ターとはいえ、媚薬でさらに欲情したオーク共の餌食になってしまふなんて、同じ男として同情を禁じ得ない……。

『すまないゴリラ。ワシの作ったヌルヌルボールが、お前の運命を茨の道へと滑らせてしまった……。しかし、お前の犠牲は決して無駄にはしないぞ』

あまりに後味が悪かったので、一応謝っておくことにした。せめて、生まれてくるだろうブタゴリラたちと仲良く暮らせよ……。

とまあ、試験の内容は散々なものであった。もう二度と思い出したくもないし、こめつこの前で語るなどもつてのほかである。

そんなわけで、二人には適当なことを言っでごまかすことにした。

「……あれは非常に危険なものだ。もしも世に出回れば、魔王軍に蹂躪されるよりも恐ろしい光景が現出することになるだろう。ゆえに、ヌルヌルボールはワシの中で永久封印することにした」

「ようするに、『また』失敗したというわけですね」

「ぶっちゃけるとその通りだが、身も蓋もなき過ぎるぞ」

超少ない収入でやりくりしているゆいゆいは夫の無駄遣いに容赦なかった。

「さあ、こめつこ。お土産に細かくなくて透き通ってないジューシーなお肉も買ってこ

れないようなお父さんは放っておいて、私とご飯を食べましょう?」

「はーいっ! シャバジャバのおかゆしかないけど、たくさん食べるーっ!」

「こら、待ちなさい二人共。確かに、ヌルヌルボールはクソの役にも立たない駄作だったが、ワシだって精一杯がんばっているのだから、ここは家族としてももう少し労うべきだと……って、あのちよつと、待ってよねえ!?! 無視しないで話を聞いて!?!」

めぐみんの実家は今日も平和だった。

## 第18訓 ロリっ子は変態共を引き寄せる

降って湧いた臨時収入に浮かれた銀時は、キャベツの収穫から二日ほど経った今も自堕落な生活を満喫していた。桂に妨害されたとはいえ、たつた一日で100万以上も稼いだのだ。取引に時間がかかるためギルドからの支払いは後日となっているが、もうすでに勝ち組気分の銀時はおもいつきりだらけていた。

「なんかさ、金稼ぎが楽勝過ぎて世知辛い日本に帰りたくなくなって来たんだけど、魔王討伐とかもうどうでもよくね？」

「まったく全然よかねーよ!? スライムどころかキャベツ倒しただけで勇者止めないでくんない!？」

冒頭から主人公を放棄しようとする銀時に長谷川がつっこむ。クエストに行きたいめぐみん達は、渋る銀時をギルドに連行して『いい加減に働けやコラ』と催促している最中なのだ。

「もうしつかりしてくださいよ! セつかくパーティを組めたのに、クエストに行かなければ意味がないじゃないですか! リーダーならば、もつと私に爆裂魔法を撃つ機会をください! この身体から溢れ出る黒き衝動を満足させる機会をください!!」

「お前の方こそしつかりしろよ!」 アブナイ願望をぶちまける犯罪者みてーになつてんぞ!?」

爆裂魔法が撃てず欲求不満なめぐみんは、かなりストレスを貯めていた。そこに魔王討伐を進めたいアクアも加わり、さらに銀時を責め立てる。

「マジでダメダメなクセになに言い訳しちやつてるのよ。おバカな銀時は、回復魔法のエキスパートであるこの私をまったく活かさきれていないもの。どうせなら、私が全力を出せるほどのクエストをバンバンこなしてくれないかしら?」

「はっ! ナニ言つてやがんだ尻出し女神が! キャベツ相手に自分の尻ばかり治療してたテメエなんざ、天才リーダーの俺でさえも活かすことは出来ねえよ!」

「ひぐつ!」

銀時よりもおバカなアクアは一瞬にして言い負かされてしまった。幸運が低いせいかキャベツにお尻を狙われ続けた彼女は、半泣きになりながらお尻の治療をしまくるハメになつていたので、そこを突かれてはぐうの音も出ない。

しかし、アクアよりもダメージを受けたダクネスは、鎧を修理に出すハメになりながらも満たされた様子で話しかけてくる。

「我が主よ! この私なら剣として役に立つぞ! 今なら生身でダメージを受けられるから、さらに私も気持ち良くなる!」

「お前も普通に懲りてくれない!? そんな薄着で振り回したらモザイク必須になっちゃうから!」

今のダクネスはタイトな黒いスカートに黒いタンクトップという普通にエロい格好なので、キャベツ狩りの時のように振り回したら色々すんごいものが出てしまう。

その姿を想像してしまったカズマは、内心のムラムラを隠しつつも会話に加わる。

「なあ銀さん。こいつらの言い分はともかく、そろそろマジでクエスト行こうぜ? せつかく装備も整えたし、レベル上げもしたいからさ」

お金を持っているカズマは昨日の内に新しい装備を買い揃えていた。桂から貰ったホワイトウルフと一撃熊の討伐報酬で購入したのだ。もちろん、すべてを使いきってはならず半分以上は残っているが、装備を一新したからにはクエストをやってみたくなくなるってものだ。

「ああ!」 金に物を言わせて装備を整えやがった課金野郎が偉そうに意見しやがって、スツピンの遊び人をなめてんじやねーぞゴルア!? つーか、自然に紛れ込んでやがっけど、なんでカズマがここにいんだよ? お前は攘夷志士という名の犯罪者予備軍としてツラのパーティーに入ったんだろ?」

「誰が犯罪者予備軍だ!? 俺は別に桂さんのパーティーに入ったわけじゃねーし、攘夷志士にもなってるよ!」



あんな奴等と一緒にされては堪らないとすかさず否定する。何かと面倒を見てもらっているので感謝はしているけど、アレと同列には扱われたくねえ。

それに、こっちの方が女つ気がある分だけ遙かにマシだし……。

「? なんですかカズマ、さつきから私のことをジロジロと見て。もしや、最強のアークウィザードたるこの私に見取れていたのですか?」

「ばつ、ちっげーよ!? お前みたいなのチンチクリンの膨らみかけに欲情したりするわきゃねーだろ!」

「なっ!? 言いましたねっ!? あなたは今、『チンチクリンの絶壁フラット貧乳ロリっ子』と私を罵倒しましたねっ!? いいでしょう! 紅魔族は売られたケンカを買う種族です! あなたの股間を叩きまくって粗末なアレを縮めてやるっ!」

「おいコラ待てや中二病!? いくら頭に来たからって、勝手に話を盛るんじゃねーよ!! 怒りのあまりに本音が漏れて盛大に自爆してんぞ!」

密かに意識していたことを本人に指摘されたせいで、友達に好きな人がバレた中学生のように取り乱してしまう。彼女の容姿は慎ましやかな胸を除けばトップクラスの美少女なので、ロリコンではないと自負しているカズマも無意識の内に惹かれていたのだ。中二病で爆裂マニアというマイナス要素は正直言っただけかなり痛い、それを差し引いてもすごい美少女であることは間違いない。バカなロン毛とキモいオバQとでは

比べるべくもないだろう。

《がんばって、カズマ君！　ここでパーティ入りを逃したら、めぐみんとお近付きになるどころか攘夷志士Aという名のモブになっちゃうぞーっ！》

「(ちよっ、メタな煽り方しないでくんない!?　割と本気で恐ろしいから!-)」

相棒からの怪しいアドバイスに身震いしながらも素直に従うカズマ君。

実を言うと、彼が銀時パーティに入ろうとしている理由は、めぐみんが気になるといっただけではない。ぶっちゃけると、ノルンから進言されたからだ。出来れば無難にまともな奴等と組みたかったけど、ノルンが言うには彼らと組むのが一番『楽しい』らしい。『楽しい』という表現からしてどうにも胡散臭いが、お兄ちゃんとしては可愛い妹の言うことを聞いてやるしかあるまい……。

「とにかく、俺はフリーだからこっちのパーティに入れてくれよ！　そもそも、桂さん達は將軍様と出かけちゃってこの街にいないしさあ」

「あつ！　そういうやあ、今日は試作兵器の進捗確認してくるとか言ってたなあ」

話を聞いていた長谷川は、馬小屋から出かける際に伝えられた内容を思い出す。彼の言う通り、桂達は別の街で制作中の試作兵器を視察しに行っており、アクセルには不在だった。

「まあ、ツラっち達もいねえことだし、ここは俺の顔に免じて仲間に入れてやってくれ

よ」

「その意見には私も賛成してあげるわ！ 一見すると、ぱんつ泥棒が上手いだけのヒキニートだけど、こんなんでも何かしらのチート能力を持っているはずだから、たぶんどこかで役に立つと思うの！」

「うむ、応援してくれるのはありがたいが、バカにすんのは止めるよ駄女神。キャベツに尻をしこたまぶたれてピーピー泣いてたお前なんか、俺をデイスる権利なんぞ微塵も無いんだからよお？」

「うわああああああん!? カズマにまでバカにされたーっ！」

偉そうなアクアにイラツとしてついやり返してしまったものの、彼女達の援護はカズマ的にグツジョブである。

その上、キャベツ狩りの時に助けてやっためぐみんと彼の性格にドM心を刺激されたダクネスまで援護してきた。

「あのギントキ、私からもお願いします。カズマにはぱんつ泥棒の前科がありますけど、それを補って余りある狡猾い知略がありますから、きつと活躍してくれるはずす」

「ああそうだ。カズマには、我が主とはまた違う違うクス人間の素質がある。彼ほどの手腕があれば、この私を淫らに使いこなしてくれるだろう！」

「お前ら、援護するフリして貶してんだろ!」

半分ほどバカにされてる感じがして腹が立つ。それでも、彼女達の願いは銀時に届いたらしく、仕方がないといった様子でパーティ入りを了承する。

「つたく、しゃーねーなあ。特別サービスで補欠の馬車要員として入れてやつけど、俺の報酬はビタ一文も譲らねえから、そのつもりでいるよーに」

「それじゃあ、俺の報酬は？」

「んなもん、言い出しつぺのこいつらが出すに決まってるが。ただでさえ人数が多くて分け前が少ねえんだから、カズマの分はお前らでシエアすのが筋つてもんだろコノヤロー」

「ええっ!? ……や、やっぱりカズマさんは、攘夷志士という名の犯罪者予備軍がお似合いだと思うの」

「金の話出されただけで裏切ってるじゃねーよ駄女神えっ!?!」

報酬が減ることまで考えていなかったアクアはあつきりと寝返った。だがそれも、長谷川の説得によってすぐに解決する。

「大丈夫だよアクアちゃん。カエルの時のように銀さんをぶっ飛ばして、6人全員で報酬を分ければいいじゃん」

「そうか、その手があったわね! 私達の力を合わせて、パワハラドSリーダーに正義の裁きを受けてもらうわ!」

内緒話で制裁行為に合意したマダオと駄女神は互いにサムズアップする。この後しばらくの間、報酬を受け取る度に彼らの醜い争いがギルドで目撃されるようになる……。

なんやかんやでカズマの飛び入り参加が決まった後、銀時達はギルドの掲示板前に集まっていた。駄々をこねていた銀時もアクア達のしつこさによく折れて、これからクエスト選びをすることになったのである。

中でもレベルが低い長谷川が一番乗り気になっており、ゲームの知識を頼りに持論を述べていく。

「やっぱ序盤は金稼ぎよりもレベル上げが優先だろ。次のイベントに進むには、最低でもレベル6ぐらいはないと危険だしな」

「ああ、そうだな。スライムどころかキャベツにすらやられちゃうんじゃないや話にならんもんな」

「ぐはあっ?!? それは言わないでお願いだから!?!?」

流石の長谷川もキャベツ相手に惨敗したことがかなりのショックとなっていた。一応何匹か倒してレベル3に上がったけれども、その代償に人として大事な何かを失った気がして止まない。

そんな悲劇を繰り返さないためにもレベル上げは必要だろう。

「いいぜ長谷川さん。俺もその意見に賛成してやるよ。この駄女神もキャベツに尻をスパンキングされて無様に泣かされてたし、お前らを鍛えねえとまともな仕事も出来やしねえ」

「うわああああああん!!」 女神の私が無職のマダオと同列扱いされたあーっ!!」

キャベツとドSのダブルパンチでアクアのプライドもズタズタにされてしまった。マジ泣きしている彼女がとつても哀れでやるせない気持ちになる。それでも、銀時の意見が正しいと思つたダクネスは解決策を提示する。

「ならば、まずはアクアのレベル上げがしやすいクエストを選ぶべきだな」

「ほう、このバカにでも勝てる雑魚が都合良くいやがんのか?」

「ああ、聖なる力を宿したプリーストの魔法はアンデッドに有効なのだ。神の理に反して不死と化したモンスターは、回復魔法を受けるだけで身体が崩れて滅んでしまう。だから、攻撃手段に乏しいプリーストはアンデッドを好んで狩るのだ」

ダクネスの説明を聞いてカズマと長谷川は納得する。

「あー、あるあるそういうの。ファンタジー物のゲームやラノベでちらほら見かける設定だよな」

「ゾーマがベホマでダメージ食らうのと同じ理屈だな」

ちよつと違うけど大体そんなところである。それならアクアでも何とかかなりそうだし、銀時がいれば長谷川の養殖作業も出来るだろう。

「なあ銀さん。ここはひとまず、ダクネスちゃんの提案で行ってみようぜ？ ほら、掲示板にも『共同墓地に湧くアンデッドモンスター討伐』なんておあつらえ向きなクエストもあるし、これはもう決定じゃね？」

目敏く掲示板をチェックしていた長谷川が即座にアンデッド絡みのクエストを見つけて出す。それは確かに彼らの要望を満たす内容で、他の面子にも異論はない。ただ一人、顔を青ざめた銀時だけは違ってたけれど。

「ババババ、バツキヤロウ!? わざわざ夜中に墓場まで行って、そんな胡散臭え仕事なんざやりたきやねーっつーのっ!! 大体、この世に幽霊とかアンデッドなんて存在してませんしいーっ!? どーせソレも墓場でバカなガキ達が肝試しやってるだけに違いねーよっ!! はい論破完了うっ!!」

あからさまに狼狽した銀時は、滅茶苦茶な言い訳をしながらアンデッド討伐を拒絶する。その情けない姿をジト目で見ていた一同は、ドS野郎の弱点を知って一斉にほくそ笑む。

「あらあら銀時さんったら、そんな必死に抵抗しちゃって！もしかして、いい大人のクセに幽霊ごときが怖いのかしら？ プークスクス！」

「まあ、人には苦手な物が一つや二つはあるものですから、私は別に気にしませんよ？  
(笑)」

「くっ、私も我が主のようにお化けの類が苦手ならば、アンデッドと遭遇した時にもっと興奮出来るのに！」

「おいコラお前ら、勝手に人をビビり扱いしてんじゃねーぞっ!! 俺は別にアンデッドなんざこれっぽっちも怖かねーしっ!! ドラクエ5でも、腐った死体のスミスさんと仲良く冒険してましたあーっ!!」

「説得力皆無だろソレ!! そこはせめてバイオ○ザードぐらいにしようとしてくれよ!!」  
なめられたくない銀時は小学生のような悪あがきをする。うん、どう見ても幽霊がダメなんですわ、分かります……。

「とにかく、俺は行かぬーからなっ!! お前らだけでそこに行つて、スタンド使いに呪われてしまいやがれっ!!」

「いや、相手はスタンド使いじゃなくてゾンビメーカーなんですけどー!」

どうしても行きたくないのので大人げない抵抗を続ける。流石の銀時もホラーの類だけはダメなのだ。

すると、それを察したように突然背後から彼を助けるような声がかかる。

「だったら、あたしと二人で宝探しに行かない?」



「えっ?」

聞き覚えのある声に反応して振り向くと、そこにはニヤリと笑みを浮かべた女盗賊がいた。

「ああ、なんだクリボーか」

「なにその踏まれただけでやられそうなネーミング!? あたしの名前はクリボーじゃなくてクリスだよ!」

「あーそうそう、お前の名前はセイラ・マスの親戚のクリス・マスだったな」

「いやいや!? セイラ・マスなんて人は知らないし、私の名前もそんなお祭りっぽい感じじゃないから!」

「可哀相なクリスは登場直後にいじられまくる。せっかく助け船を出してやったのにとんだ災難である。彼女が先ほど言っていた宝探しのお誘いは本当のことなのだ。」

この件に関してはダクネスも初耳で、奇妙な行動を始めた親友に訪ねる。

「おいクリス、宝探しとはどういうことだ? そもそも、なぜ私ではなく出会ったばかりの我が主を誘うのだ」

「ゴメンねダクネス、これには理由があるんだよ。初めて会った日に、宝探しの約束をおにい……ギントキとしちゃったからさ。遊び人スキルでおかしくなっていたとしても、敬虔なエリス教徒としては守らないと気が済まなくてね。こうして改めておにい……



うか！　ここまで露骨に存在意義を侮辱されたのは生まれて初めてですよ！」

「くふうんつ！　所詮、エロ担当の女騎士などゴミのように扱われる脇役でしかないというのか！」

先ほどの劣勢から形成逆転して、今度はめぐみん達が地団太を踏む。それでも、クリスがダメだというなら大人しく引き下がるしかない。

「それじゃあ、数日はギントキを借りることになるから、しばらくみんなで頑張つてね！」

「えっ!?　二人つきりでお泊まりすんの!?　なんて羨ましいことをっ!!」

「クツ、クリス!?　そそそそそ、それはあまりに軽率じゃないかっ!」

「出会ったばかりだというのに、いきなり二人で外泊なんて破廉恥にもほどがあります!!」

「ああ、余計な心配すんじゃないよ。これまでだつてアクアと一緒に泊まつたし、少年マンガの主人公はラッキースケベ以上のことは絶対に出来ねーから」

「そんなメタな説明されてもはいそうですかと納得出来るか！　大体、ヨゴレのアクアちゃんと清純なクリスちゃんじゃ比べもんにならないよー!」

「ちよつ、何で私がヨゴレなのよ!?　本当のヨゴレは銀時とイチヤイチャしようとする貧乳盗賊の方でしょーっ!」

「そんな企みしてないよっ!」 っていうか、貧乳盗賊ってなんだよっ!」

クリスのトンデモ発言に色めき立って全員が突っかかる。銀時は適当に受け流しているけど、クリスはちよっぴり意識しているようで女性陣は面白くない。

だからといってドSな銀時が繊細な乙女心(?)に気を使うはずもなく、さっさと話を進めてしまう。

「つつーわけで、俺が不在の間は新人のカズマ君に臨時リーダーを任せまーす」

「えっ、俺がリーダー?!」 さっきは補欠の馬車要員とか言ってたクセに!」

「はいそのヒキニート、つべこべ言わないでリーダーの言うこと聞きやがれ。お前つてよく見りや、そこはかとなくラノベの主人公っぽいから、そんなこんなで後は頼むわ」  
「おいしいいいいいっ!」 選び方が雑つつーか、こいつらのリーダーなんて絶対やりたくないんだけどお!」

恐ろしい役目を背負わされたカズマは、無責任野郎に突っかかる。

その間を利用して、ノルンがクリスに話しかけた。

《流石は幸運の女神、実に良いタイミングで銀時を動かしたね》

「(えっ? 良いタイミングってどういうことですか?)」

《詳しいことは秘密だけど、今回エリスちゃんが持ってきた宝探しは、もっと大きな宝を作り出すことになるかもしれないよ?》

「(は、はあ……もつと大きな宝を作り出す、ですか?)」

ノルンの言葉に皆目見当がつかない。どうやら悪い話ではないようだけれど、意味ありげに口元を歪めているノルンを見るに、彼女好みのアクシデントが起こるに違いない……。

それが何なのか気になったクリスはノルンに話を聞こうするが、空気を読まない銀時がその機会を奪ってしまう。

「おいクリス、さっさと行くぞ! こいつらが暴れ出す前に!」

「えっ!? ちよつ、待って!? まだ話がつ!?」

《バイバーイ、エリスちゃん! 油断するとえらい目に遭つちやうから気を付けてねえー!》

銀時に腕を捕まれたクリスは強制的に走らされ、ノルンの言葉に返事をする間も無く遠ざかっていく。

果たして、ノルンはクリス達の未来になにを見たのか。こうなつてはもう自分の目で確かめるしかなかった。



ギルドから飛び出した銀時達は、ひとまず事情を話したいというクリスに従って人気の無い路地裏に來た。

「で、俺に言いたいことってなんだ？ 事情というからには、ただの宝探しじゃないんだろ？」

「流石に察しが良いね。申し訳ないんだけど、これから手に入れる予定のお宝はギントキにあげるものじゃないんだ。もちろん、あなたにあげるお宝はちゃんと別に用意してあるけどね」

当然、ウソをつくつもりはないので、彼に見合つたお宝はしつかりとあげるつもりだ。ならば、彼女が手に入れようとしているお宝とは何なのだろうか？

「ここから話すことは他言無用にしてほしいんだけど、あたしは訳あって「神器」と呼ばれる物を集めているんだ」

まっすぐに銀時を見つめるクリスは、神秘的な表情で語りだした。

神器とは、神が作ったと言われる超強力な装備や魔道具の総称であり、その正体はアクアが転生者に与えまくったチートアイテムだ。クリスはその辺りの事情を大まかに理解しているらしく、フワツとした内容で説明してくる。

「つまり、神器と呼ばれる物は、あなた達みたいに『変な名前』の人達だけしか手に出来ない特別なアイテムで、他の人には使いこなすことすら出来ないんだよ」

今の話を聞いて天界でのやり取りを思い出す。どうやら彼女は、転生者が持つているチートアイテムに興味があるらしい。

しかし、捻くれ者の銀時はどうでもいいところに意識を向ける。

「ああん？ 俺の名前が変だつて？ 坂田銀時のいつたいナニが変なのか、もつと詳しく教えてくれよクリ○○スさんよお？」

「ちよっ!? なんてところを伏せ字にしてんの!? あたしの名前はそんなじゃないし、言ったらイケナイ単語ですけど!」

「はあ? 『クリス・マス』のどこらへんが言ったらイケナイ単語なんだよ? もしかしてお前、なんかすんごい卑猥なヤツと勘違いしたんじゃない? 俺が思うに、お前が想像したのはクリト「うわああああああつ!? 変な名前つて言つたことは謝るからもう許してええええええええつ!」

銀時の卑劣な罠にはまったクリスは真つ赤になって恥ずかしがる。心の清い幸運の女神は下ネタに弱かった。

「こほん……話を戻すけど、神器というのは本来なら、あなた達のような個性的な名前の人だけが所有してる物なんだ。でも、本来の持ち主から別の人に手渡つてしまう場合がたまにあつて、それを悪用する輩もいるんだよ」

残念ながら、クリスの言う通りのが実際に起きている。何らかの理由で転生者の

元から離れた神器をこの世界の人間が偶然手に入れ、その特殊な力で悪事を働くといったケースが度々起こっているのだ。以前、茂茂から聞いたアルダープの件がそうであり、今回彼女が仕入れてきたお宝情報もその一つだった。

「つまり、あたしが狙ってるお宝ってのは、本来の持ち主じゃない人が所有してる神器なんだ。アレは選ばれた者にしか使いこなせないから、他の人が使ってもほとんど力を発揮出来ない。でも、中には使い方次第で恐ろしい結果を招いてしまう物もある。だから、あたしはそういういった神器を回収して二度と悪用されないように封印しているんだよ」

「ここまでの説明で、ひとまず彼女の目的は分かった。真意はどうあれ、義賊のようなことをしているようだ。」

「しかし、どうにも腑に落ちねえな。なんで盗賊のガキンチョが命懸けで正義っぽいこととしてんだよ？ 普通、盗賊って奴は、盗んだ物を売ったり使ったり匂いを嗅いだりするもんだろ？」

「匂いを嗅ぐっていったい何の!? じゃなくて、あたしは確かに盗賊だけど悪いことはやらないよ！ 敬虔なエリス教徒として、クリスという人間として、この世界を守るために作られた神器を悪用されるのが許せないんだ！」

クリスの言葉は嘘偽り無い本心であり、銀時にもそれは分かった。一点の曇りも無く



まっすぐ見つめてくる彼女の瞳がその事実を雄弁にもの語っている。まだなにか裏がありそうな気もするが、少なくとも神器の扱いに関しては本当のことを言っているだろう。

「つたく、盗賊のクセにまともなことをほざきやがって。ブラジャーも必要無えほどの貧乳が、いつちよ前に心のキレイな不二子ちゃん気取りかよ」

「バストサイズは関係ないし、不二子ちゃんつてどこの誰さ!？」

胸をネタにされてプンプンと怒るクリスに笑みを浮かべながら考える。彼女の熱意は理解出来るし、仕事の内容次第では手伝ってやってもいい。ただ、一つだけ不可解なことがある。

「なあクリス、この件はダクネスにも秘密にしてるみてえだが、どうして知り合ったばかりの俺なんか話を持ちかけやがったんだ？」

そこだけがどうにも理解出来なかった。親友にすら黙っていたことを、なぜこんなドSの遊び人なんかにあっさりと明かしたのだろうか。クリスの真意を確かめたくて素直に聞いてみると、彼女の方も素直に答えてくれた。

「……それはもちろん、ギントキのことを信頼しているからだよ」

とても綺麗な笑顔を浮かべて、とても意外な気持ちも明かす。その言葉を聞いて銀時の疑問はさらに深まってしまったものの、彼女がそう思う理由はしっかりと存在してい

た。

キャベツ狩りの後、遊び人スキルの効果が切れたエリスは、恥ずかしさに耐えられず天界の床を転げ回った。

『きゃあ、きゃあ、きゃあああああああああつ?! 私は何て恥ずかしいことをしてしまったのとおおとおおおつ?!』

調子に乗ってメス犬宣言したり、大胆になって銀時に抱きついたり……思い返すだけでも顔が火照ってしまう。

それでも、なぜか悪い気はしない。あんなに酷いことをされたのに、なんだか楽しかった気さえしてくる。

『……も、もしかして、私はダクネスと同じ性癖を持っていたのでしょうか?』

そう思うと、ちよっぴり落ち込んでしまいそうになる。こんなしょっぱい事実なんて知りたくありませんでした!

『まったくもう! こうなったのも、すべて銀時さんのせいですからね!』

落ち込みから一転してプリプリと怒り出したエリスは、諸悪の根元であるDS野郎を思い浮かべる。

『坂田銀時さんか……』

少しだけ気になりだした男の名をつぶやいてみる。カグヤ先輩やお姉様に気に入られるほどの変わり者で、達人クラスの実力を持った最強の侍。これだけでもエリスの興味を引くには十分だった。

『……ちよつとだけ調べてみようかな』

何気なくそう思い、仕事の合間に地球のデータを閲覧してみた。そして、彼女は彼の生き様を知った。

確かに彼は善人ではない。見方を変えれば、悪人と呼ぶべき側にいるとさえ言えるだろう。人を斬り殺しては返り血で真つ赤に染まり、アダルトビデオを鑑賞しては垂れる鼻血で真つ赤に染まり、パチンコでボロ負けしては金欠で真つ青に染まる……。そのような素行を見れば、誰もが彼をクズ野郎だと蔑むはずだ。

でも、それは彼の一部であってすべてではない。

『そう。彼の本質は、大切なものを護り抜くという揺るぎない覚悟にあります』

これまで彼は多くのものを護ってきた。命を、誇りを、家族の愛を。奪われ、失い、傷つきながらも、決して退かずに護り続けた。

なぜなら彼は【万事を護る者】だから。

『そうして彼は、とうとう世界まで救ってみせたのですね……』

真相を知ったエリスの心は、言葉にしがたい感情に溢れていた。この気持ちは【尊敬】

……いや、「憧憬」と言い表すべきだろうか。自分の力で魔王を排除することも出来ず自責の念に駆られているエリスにとって、地球を救うという偉業を成し遂げた銀時は、兄のように慕い、敬うべき存在であるように思えた。

銀時の過去を知り、信頼すべき存在だと再確認したクリスは、神器回収のパートナーとして彼を選択した。しかし、女神の裏事情など知るよしもない銀時は、唐突に臭いセリフを言い出したクリスを笑いものにする。

「ぶぶーっ！ 遊び人を信頼するとか、アクア並にバカだろお前？ 自分で言うのもなんだけど、俺のどこにも信頼なんて要素は無えぞ？」

「フフーン、それはどうかな？ 遊び人スキルの効果を堂々とバラしたのは、自ら悪用出来ないようにしたからでしょ？ 黙っていれば、悪いこともやりたい放題だったのにな？」

「はっ、なに勘違いしてやがんだへソ出し野郎。俺あただ、使いたいように使っただけだ。こんな感じでなああああああつ！」

「いやあああああつ!? お願いだから今は待つてえ!? お宝探しが出来なくなっちゃう!？」

ムチを振り回し始めた銀時から必死に逃げる。これから大事な仕事をやるというの

にドM化されては堪らない。

「そういやあ、まだ宝探しの内容を聞いてなかったな」

「はあ、はあ……今更過ぎて呆れちゃうけど、興味を持つてくれたようだし本題に入るとしようか。あたしが今回見つけた神器は「年齢や性別を自在に変化させるステッキ」でね、何者かがそれを使って犯罪を起こしてるから、何とかして奪い取りたいんだよ」

「なるほどな。つまり、変化の杖でイタズラしてるバカをぶっ飛ばせてことか」

「まあ、大体そんなとこだけけど、その男は本当に酷い奴なんだ！ 幼い女の子に化けたそいつは、標的にした少女を騙して人気の無い場所に連れ込み、逃げ場を奪ったところでお医者さんごっこを強要する最低最悪な奴なんだよ！」

「神器まで使つといて変態ロリコンプレイかよ!?!」

残念ながら、どこの世界にも変態はいてクソつたれなことをしているようだ。

「最近、王都で同じような事件が何回か起きててさ。幼女にしか化けられないことまでは分かったんだけど、カツラや服で変装されて未だに逮捕出来ないんだよ」

「なにそのハイブリッドな変態プレイ!?! ロリコンだけじゃ飽きたらまず女装趣味までこじらせてんのお!?! 大体、変化が幼女限定つてのがおかしいよね!?! 変態野郎が幼女になるとか、どんだけ最低な魔法少女なんだよソレ!?!」

あまりにもおぞましい犯罪者に鳥肌が立ってしまう。そんな外道は、クリスに言われ

なくともぶっ飛ばしたくなるってもんだ。

「これであたしの説明は終わりだけど、手伝ってもらえないかな？ 必要経費はこっちで持つから、変態退治に協力してよ！」

「ああ、いいぜ。せっかくお宝まで用意してくれたんだ、【万事屋銀ちゃん】としては引き受けるしか道はねえよ」

「うん、ありがとう！ ギントキならそう言ってくれると思ってたよ！」

嬉しくなったクリスは、思わず銀時の腕に抱きついてしまう。

何はともあれ、話はすべてまとまったので、ただ今から宝探し改め神器回収クエストが開始される。

「それじゃあ早速【テレポートサービス】で王都に行こうか」

やる気満々なクリスは、すぐさま現場に向かおうとする。

彼女の言うテレポートサービスとは、テレポートを使った運輸業で、一瞬の内に遠く離れた街へ行ける便利な移動手段である。ただし、値段が高いといったデメリットも目立つため、時間に余裕のある客は馬車を利用する場合が多い。

その辺りの事情を茂茂から聞いている銀時は、金も時間もかからない方法を思いつく。

「待てよクリス。俺の知り合いにテレポートを使える奴がいるから、まずはそいつに頼

んでみようぜ」

「おっ、いいね。そうしてくれると助かるよ!」

クリスマスにとつても魅力的な提案なので、迷わずに賛成する。こうして、幸運の女神とぼんこつりツチーの奇妙な出会いが実現することとなった。

魔道具店に入ると、客のいない店内でウイズが掃除を行っていた。悲しいかな、他にやることはないのだろう。

「あつ、ギントキさん! いらっしやい!」

「ようウイズ、相変わらず繁盛してんな」

「やって来て早々にあからさまなウソは止めてください!」

挨拶代わりに軽くからかっておく。彼女と会うのはこれで二回目だが、茂茂という共通の知り合いがいるおかげか妙に親しみを感じる。

「ところで、そちらの女の子はギントキさんのお仲間ですか?」

「うん、そうだよ。あたしはクリスマス。よろしくね!」

「はい、こちらこそよろしくお願ひします。私はこの魔道具店を営んでいる店主のウイズと申します」

女神とリツチーは、互いの正体に気づくことなく朗らかに挨拶する。本来なら天敵同

士であり、アクア以上に悪魔を嫌っているエリスが知ったらプチハルマゲドンが起こりかねない危険な状況である。

ただ、幸いなことに、クリスの姿の時は女神の力が無いので、今は互いに普通の人間として認識していた。

「店主さんのことは前から知ってたけど、ギントキの知り合いだとは思わなかったなー」  
「実は最近知り合ったばかりなんですけどね。……それはそうと、今日はアクアさん達とご一緒じゃないんですか？」

ちよつぴりアクアが苦手なウイズは、キョロキョロと警戒しながら訪ねてくる。

「ああ、今日はこいつに依頼されて俺だけ借り出されてな。これから王都に行つて捜し物をしなきゃならねーんだわ」

「はあ、王都で捜し物ですか……。あつ！もしかしたら、私のテレポートで送つてほしくてここにやって来たのですね？」

「ご名答だよウイズさん。正解したあなたには、賞品としてこのジャスタウエイを差し上げましょう！」

「あの、それは賞品じゃなくてウチの商品なんですけど！」

近くにあったジャスタウエイを使って再びウイズをからかってみる。リアクションする度に豊満な巨乳がプルプルと揺れて実によろしい！



「ちよつとギントキ! さつきからどこ見てるのさ!?

「そうだな……あえて言うなら、『男のロマン』かな?」

「そんなロマンは捨ててしまえっ!!」

ウイズの巨乳をガン見したら、いろんな意味で嫉妬したクリスに怒られた。

「なんだよもう! 店主さんの胸が大きいからって、あんなにデレデレしちゃってさ!

「ここまで格差を感じるほどに巨乳が偉いのかーっ!」

「ま、まあまあ、落ち着いてくださいクリスさん。レポートの件は快くお受けしますから」

「えっ、いいの? ありがとう店主さん!」

「いえいえ、どういたしまして」

ウイズの心遣いによってクリスの機嫌も少しづつ回復していく。流石はベテラン店主、相手をするお客は少なくてもトーク術に長けている。

「それにしても残念ですね。明日になったら私も王都へ買い物に行くので、クリスさんの探し物をお手伝い出来たのに」

「いやいや、そこまでしてもらうわけにはいかないよ!」

予想外な気遣いを見せるウイズに慌てて遠慮する。ありがたい申し出だけど、神器を回収していることを無闇に広めるわけにはいかない。

「俺はウイズに手伝ってもらった方がいいと思うがな。腐っても商人だから王都の事情に明るいだろうし、なによりこの二つのボインが疲れた俺の癒しになる！」

「お兄様は少し黙っててくれるかな？」

ちよっぴりヤンデレっぽくなったクリスは、銀時の首元にダガーを突きつけて強制的に黙らせる。リッチーの巨乳に魅了される銀時に対して女神の勘が働いたのか、はたまた単なる女の嫉妬か。どちらにしても、彼にとつてはとんだ災難である。

「ほら、ギントキも武者震いするほどやる気満々だから、店主さんは全然気にしないでいよー！」

「は、はあ……別の意味で震えているような気がしますけど、とにかく分かりました……」

なぜかクリスの微笑みに恐怖を感じたため大人しく引き下がる。リッチーの本能が彼女に逆らつてはいけなないと警鐘しているような気がする……。

「そ、それじゃあ、準備はよろしいですね？」

「うん、いいよ。パパッと王都に送っちゃって」

「それではいきます、「テレポート」ッ！」

助けを求めるような目をした銀時から視線をそらせて二人を王都に送り出す。

「ごめんなさい、ギントキさん。無力な私にはこうするしかありません……」

心優しいウイズは哀れな銀時に懺悔しつつ、彼らの無事をエリスに祈った。



王都に到着した二人は、犯人の手がかりを掴むために人が集まる商業地域へ足を運んだ。

「ほう、この国の首都だけあってなかなか立派な作りじゃねーか」

銀時の眼前には、アクセルとは比べ物にならない規模の街並みが広がっている。特に、全国から人が集まる商業地域の盛況ぶりは目を見張るものがあった。

しかし、激しい人の交流が仇となってロリコン犯の周知を徹底出来ず、外から来た観光客などを狙うケースが増えていた。

「それで、これからどうすんだ？ 俺をここまで引っ張って来たからには、なんか考えてあるんだろ？」

「まあ一応はあるけど、基本的には運任せだね。盗賊スキルの【宝感知】で神器の反応を探るか、怪しい行動をしている幼女にあたりをつけるかってところかな」

なんとも樂觀的なことを言うクリスに怪訝な表情を向ける。

確かに、普通に考えれば成功の望みは薄い。【宝感知】は有効範囲が限られる上にノイ

ズが多い街中では使い勝手が悪過ぎる。ましてや、変装している犯人自体をこの人混みから特定するなど至難の技だろう。だが、世界でもトップクラスの幸運を持つクリスならば、奇跡のような結果だって引き寄せることが出来る。

「じゃあ俺まったく必要なくね？」

「そんなことはないよ。暇な時はあたしの話し相手になるし、ダクネスが忠誠を誓うほどのドSだから変態の相手も手慣れてるでしょ？」

「けっ、お前一人で変態野郎と絡みたくないから俺を連れて来たってわけかい」

「うん正解！ こう見えても、あたしはか弱い少女だもん」

「か弱い少女は首元にダガーを突きつけたりなんてしません！」

クリスの本音に呆れた銀時は大人気なく抗議する。

その時だった。通り過ぎようとしていた店を覗いた銀時の目にアンビリバボーな光景が飛び込んで来たのは。

「えっウソマジで!? こんなミラクルほんとにあんの!？」

「ん？ どうしたのギントキ？ なんか気になるものでも見つけた？」

「ああそーだよ！ ジャンプでハンターハンターが載ってるのを見かけるぐらい信じられねーもんを見つけたよ！」

興奮気味な銀時は、意味不明なことをわめきながら目の前の服屋を指差した。そこに

なにがあるのかと興味を抱いて見てみると、店の中には見覚えのある服がズラリと陳列されていた。

「これはいつたいどーいうこつた!?　なんでズンボラ星人のジャージがこんなところで売られてやがんだ!?!」

あまりに奇妙な発見に驚きを隠せない。どう見ても、彼のトレードマークであるズンボラ星人のジャージとまったく同じデザインをしているが、なぜアレがここにあるのだろうか。まさか、この世界にも天人が来ているのか。そう思った銀時は少しだけ緊張するが、実際には心配する必要などこれっぽっちも無かった。

「違うよギントキ。アレはジャージとかいうものじゃなくて『ズンボラ族のパジャマ』だよ」

「なにその微妙なクロス要素?!　被り方が雑過ぎて紛らわしいったりやありやしねえーっ!?　つーか、これパジャマだったの!?　なんでそんな改変してんの!?　これじゃ俺は、パジャマでうろつく不審者みてーに見られちまうよっ!?!」

真相を聞いてみたら別の心配をするハメになってしまった。やっぱ、この世界っておかしいよね。イラッとさせられることがやたらと多過ぎるよね。

「まあ、今回はまだマシか。とにかく、これで着替えを調達出来るようにはなったから、ここは良しとしといてやらあ。実を言うと、結構困ってたんだよねえー。主人公的に

は、安易に服のデザインを変えるわけにもいかないからさ」

「ふ、ふうくん……。良く分からないけど良かったねえ……。」

キャラ的にメタ発言との相性がすこぶる悪いクリスは苦笑しながらやり過ごす。

こんな感じで、賑やかなやり取りをしながら神器の探索を進めるものの、ロリコン野郎の動く気配は一切捉えることが出来ず、大した収穫も得られないまま一日目が終了した。結局、今日は二人で観光しただけになってしまい、ズンボラ族のパジャマというしよーもない戦利品を手に入宿探しをするのだった。

宿を決定した銀時達は、二人部屋で一緒に泊まることとなった。今日は一人客が多いらしく、一人部屋の空きがどこにも無かったのである。

「ううっ、なんか緊張しちゃうなあ……。」

ベットに腰掛けたクリスは、あからさまにソワソワとした様子でつぶやく。これまで男性と二人きりでお泊まりしたことが無かったからだ。

「ね、ねえギントキ。あたしってこういうことは初めてだからさ、もし変なことしちゃっても絶対に笑わないでね？」

銀時を意識しまくったせいで誤解を招きかねない言い方をしてしまう。しかし、当の相手はというと、ベットに寝転んだ直後に爆睡していた。

「んごおー、んごおー……」

「脇目も振らずに眠ってるうーっ!? もうなんだよ! 普通こういう時は男の方がムラムラしちゃうところでしょうっ!? 実際にされても困るけどっ!」

自分と一緒にいることをまったく意識していないドS野郎に腹を立てる。えっちはのはダメだけど少しぐらいはドキドキしたい、愛情と友情の間で揺れる純情な感情と言ったところか。

「はあ……。そういうえば、アクアさんと一緒にいても大丈夫とか言ってたっけ……」

性格はアレでも容姿は女神なアクアに手を出さないというのであれば、この状況にも納得出来る。

少しだけ先輩よりも魅力があると思われたかったけど、これはこれで良かったのかな?  
?

「ギントキって普段はタダのお子様だよね」

昼間は繁華街でバカ騒ぎして、夜中は酒場でバカ騒ぎ。挙げ句の果てには、相棒を放っておいて勝手に熟睡する始末。

それでも、一緒にいて居心地が良いと感じてしまうなんて本当に不思議な人だ。

「はあ……。人の気も知らないで暢気に熟睡しちゃってさ。あたしのお金であんなに飲み食いしたんだから、明日はもつとバリバリ働いてもらうからね」

そう言うところクリスは、いたずらっぽいな笑みを浮かべて銀時のそばに近づいた。ちょっとだけ恥ずかしいけど、どうせ眠っていて聞こえないだろうからおもいきつて言ってしまうおう。意を決して、眠っている銀時の顔に自身の顔をそつと寄せると、優しい声でつぶやいた。

「それじゃあ、お休みなさいお兄様」

「ああ、お休みなさいマイシスター」

「……きやああああああああああああああ!!?」

眠っていたと思っていた銀時からいきなり声をかけられてビツクリする。このドS野郎はクリスにドッキリを仕掛けるために眠ったフリをしていたのだ。

「ふはははははははっ！ 一体いつから眠っていると錯覚していた?」

「うわああああああああっ!! めっちゃムカつくのに言い返せないっ!!」

藍染気取りの銀時に騙されたクリスは、怒りと羞恥で身悶える。頼れる兄のように慕っていたらこの様だよコンチクシヨウ!

結局、クリスのドキドキ感は無事にされてしまい、仲良く兄妹ゲンカをしながら初日の夜が過ぎていった。

翌日。宿を出た二人は、再び商業地域へやって来た。クリスの勘では、この付近で次



の事件が起きると感じており、幸運の高い自分とトラブル体質の銀時がいれば犯人達の方から近寄って来てくれるだろうと踏んでいた。はつきり言って行き当たりばつたりな作戦なのだが、ノルンの言葉から推測するに、恐らく上手く行くはずだ。

「さて、今日から真面目に探していくよー！」

「はいはい、真面目に探しますよー。俺好みの良い女をね」

「んなもん探すなっ！」

やる気に満ちたクリスに反して、けだる気な銀時は鼻をほじりながら不真面目なことを言う。トラブルを引き寄せることを期待されている彼は、動きがあるまでやることもないのだ。

しかし、ジャンプを代表するトラブルメーカーは、すぐさま力を発揮した。なんと、目の前からウィズがやって来るではないか!?

「あーっ！ ギントキさんとクリスさん！ こんなところで偶然出会えるなんて運が良いですね！」

「えっ、あーうん、そーだねえー！」

銀時達に気づいたウィズは、胸を揺らしながら駆け寄って来ると嬉しそうな笑顔を見せる。確かに、二人のことを気にかけていた彼女にとつては運の良い出来事だろう。そのおかげで困った状況になってしまった幸運の女神としては苦笑するしかないけれど。

そう言えば、昨日会った時に王都へ行くと言っていたが、まさか現地でばったりと再会してしまおうとは。

「それで、クリスさんの探している物は見つかったのですか？」

「う、ううん、残念ながらまだ探してる途中なんだ」

「それなら、昨日言った通り私もお手伝いいたします。ここで二人に会えたのも、きつとエリス様の思召しだと思えますし」

「(私はそんなこと思召したりしてませんけど!?)」

女神を過大評価しているウイズに心の中でツツコミを入れる。人々の暮らしを見守る女神と言えども、そんなに細かいところまでは見てませんから！

大体、今のウイズは、人の手伝いなんてしている場合じゃないほどに疲れているように見える。

「あ、あのく、店主さんの方こそ具合が悪そうだけど大丈夫かな？ 顔色がすごく悪いように見えるんだけど……」

「ああ、そういうやあそうだな。普段も血色悪い顔してっけど、今はなんかデスラ○総統みてえに不自然なくらい真っ青だぜ？」

「はあ……。デ○ラー総統という方は存じませんが、顔色が悪いのは自覚しています。

実は昨晚、アクアさん達と一悶着あったもので……」

「えっマジで？ あいつらなんかやらかしたの？」

銀時の問いかけに対してウイズは乾いた笑みを返す。

事の真相はこうだ。銀時抜きでゾンビメーカー討伐クエストを行ったカズマ達は、現場となっている共同墓地でウイズと遭遇してしまった。迷える魂達の声が聞ける彼女は無償で彼らを成仏させていたのだが、善行をするリッチーに逆ギレしたアクアがウイズごと浄化魔法をかけて色々台無しにしゃがんだのだ。最終的には、暇なアクアが定期的に墓場の浄化を行うということで解決したものの、ウイズにとつて大変疲れるイベントだったのは言うまでもないだろう。

「（私を消す気は無かったみたいですけど、リッチー相手に手加減まで出来るなんて、とんでもなくおっかない人です……）」

昨夜の悪夢を思い浮かべて冷や汗を流したウイズは、不思議そうな顔をしているクリスから突っ込まれないように話をごまかす。

「そ、それにしてもアクアさんはすごいですよー！ とても人間とは思えないくらい神聖な力を持っていますよー！」

「そりゃあ、あんな奴でも一応女神だからな。ありがたみは微塵も無えけど、それなりに小宇宙（コスモ）はあんだろ」

「あ、あの……『一応女神』とおっしゃいましたが、ひよつとして本物の女神様だった

りするのですか?」

「残念ながらその通りだ。確か前に、ア・バオア・クー教団の御神体とかほざいてたぜ?」

「それを言うならアクシズ教団でしょ!」

「ヒイツ!」

クリスのツツコミを聞いた途端におびえ出したウイズが小さな悲鳴を上げる。よりにもよって、アクシズ教の女神だなんて!

「どうしたウイズ!? 顔色が悪化し過ぎて、デスラ○化が進んでんぞ!」

「だ、だつて……アクシズ教団の人は頭のおかしい人が多くて、関わり合いにならない方がいいというのが世間の常識なのに、アクシズ教団の元締めの女神様と聞いたら怖くなるのは当然ですよ!」

「(せ、先輩……あなたの教団は悪魔のように恐れられていますよ……)」

悲しい現実を見せつけられたクリスは、女神なのに恐怖の存在と化している先輩に対して同情した。

「やっぱりなー。あいつが崇められるなんておかしいなーとは思ってたけど、アクシズ教つてのは救いようもねえバカの集まりだったわけか」

「たとえそうでも、そこまで言い切るのはやめてあげて!?! とうか、今はアクシズ教をデイスるよりこつちの話を進めないと!」

クリスとしてはウイズの方も問題だ。彼女の善意を無碍にはしたくないけど、神器のことは広めたくないし、犯罪行為に巻き込むわけにもいかない。そう思ったクリスは、銀時の耳に唇を寄せてコソコソと相談する。

「……ねえ、ギントキ。善良な店主さんを巻き込めないから、上手いこと言つて止めさせてよ」

「ああっ？ 俺は善良じゃねーから巻き込みやがったんですかあーっ？ つーか、こいつもみんなが思つてるほど善良じゃねーから気にする必要は無えよ。これでも昔は「氷の魔女」とか呼ばれるほどのヤンキーだったらしいし、將軍とは外でばんつを見せ合うほどの淫らな仲だから十分に不良だぜ？」

「きゃあーっ!? そんなことをクリスさんに言わないでくださいあああああいつ!?」

銀時に恥ずかしい過去を暴露されて涙目になるウイズさん。確かに、アクセルでは凄腕の魔法使いとして有名で戦力としては申し分ないのだが、やはり参加を許可するわけには……。

「つっわけで俺が許可する！ 粉骨碎身の覚悟で精進してくれたまえ！」

「わ、分かりました！ 誠心誠意がんばります！ でもその前に、買いたい魔道具があるので、少しだけ時間をください。すぐに終わらせませんから」

「オツケー分かったすぐ行くこう！」

「つて、なに勝手に決めちゃってんのーっ!？」

一人で考えている間にウイズの飛び入り参加が決まってしまった。

当然クリスは納得出来ず、銀時の腕を引っ張ってウイズから距離を取ると小声で抗議を始める。

「あーもう、いきなりなにやってんの!？」事情も知らない人を巻き込むなんて、なにを考えてるんだよ!？」

「なにつて別におかしかねーだろ? 人手は多いにこしたこたあねーし、スリーマンセルで動いた方が隙も減って助かるしな。大体、あいつはエリスを信じて手伝うと言ってるのに、エリス教徒のクリスさんが拒否したらダメなんじゃね?」

「うぐっ!？」

そう言われては、クリスに言い返す言葉などない。

結局、銀時に言い負かされたクリスが折れる形で話はまとまり、まずはウイズの用事を済ませることになった。

数分後。ウイズに案内された二人は【ジオン商会】という名の卸売り店にやって来た。どこかで聞いたことがあるような胡散臭い名称はともかく、商売内容は至ってまともで、おもに魔道具を取り扱っているウイズの仕入れ先の一つだ。

「おはようございます、ラルさん」

「おお、ウイズ。よく来たな！」

店に入ると、ごつい体格をしたヒゲ親父が現れた。全体的に青を基調とした服を着ているその男は、あの有名な大尉にソックリだった。

「あれ……どつからどう見てもランバ・ラルなんだけど。なんであんたがここにいんの？」

「ええい、うかつな奴だ！　ワシの名は『ランバ・ラル』ではなく『ルンバ・ラル』だ！　」  
「一文字違いでロボット掃除機みてーな名前だったああああああああつ！」

またしても微妙なパクリキャラが出て来た。はつきり言つてランバ・ラルと瓜二つだが、それでも彼はこの世界の住人であり、顔馴染みのウイズが簡単に紹介する。

「この方は『青い巨星』の異名を持つほどのベテラン戦士で、現役を引退した今でも魔王軍が襲撃してきた際には必ずお呼びがかかるほどなんですよ」

「なあに、今やどこも人手不足だからなあー！」

ウイズに誉められたラルさんは真つ赤になつて照れまくる。良い年こいたオッサンの照れ顔なんざ見たかねえよ。

「ところで、そちらのお嬢さん。君に似合う商品が丁度入荷しているぞ」

「えっ、あたし？」

ふざけた展開に銀時が苛立つ中、クリスの容姿に目を付けたラルさんは、とある商品を薦め始めた。

「君にはこの【小悪魔のスク水】をオススメしよう！ これには【チャーム】の効果があって、胸の慎ましい美少女が着ればさらに魅力が倍增するぞ！」

「すんごいセクハラ行為な上に余計なお世話なんですけど!?! 大体、小悪魔扱いするか失礼にも程があるでしょ！ これでもあたしはれっきとした女神系女子だよっ！」

小悪魔的に見られた女神はプンプンと怒ってしまふ。

それでも懲りないラルさんはウイズにまでちよっかいを出す。

「ならば、この【リッチな下着】をウイズに薦めよう。これには【ブレッシング】の効果があつて、身につけているだけで運が上昇するから、貧乏店主と呼ばれる君にはまさにうってつけだろう！」

「こつちもセクハラ行為な上に余計なお世話ですよーっ!?! 確かに私は貧乏で、ちよっぴり心引かれますけど、流石にそこまでスケスケなのは着ることなんて出来ません！」

クリスに続いて犠牲となったウイズは真っ赤になって顔を隠す。スク水はギリセーフだとしても下着はばっちりアウトである。ラルさんとて欲には勝てず、巨乳美人と貧乳少女が同時にやって来たせいであつて浮かれてしまったのだ。

「青い巨星がナニやってんのお!?! ランバ・ラルかと思いきや、単なるスケベなオヤジ



じゃねーかつ!? 今度セクハラしやがったら、白い悪魔をけしかけてこの店潰してやんぞゴルア!!」

「このルンバ・ラル、商売の中で商売を忘れた!」

激怒した銀時につっこまれて、暴走していたラルさんもようやく反省した。

「気に入ったぞ小僧! それだけハッキリものを言うとはな!」

「うっせーよスケベ野郎! もうガンダムネタはいらねーから、さっさと話を進めやがれ!」

「ふははははは! 一本取られたな、この小僧に! それで、このルンバ・ラルにどのようなく用かな?」

「はい。今日は、ジャスタウェイシリーズの新型を見せてもらいに来たんです」

「んなもん買いに来てたのかよ!? それだけのためにここまで来るとか、どんだけアレを気に入ってんだ!? つーか、ジャスタウェイシリーズっていったいなあー!? そこまで出すほど需要があんの!? ガンプラ的な人気があんのっ!?」

やっと話が進んだと思ったら、またもおかしな展開になって来た。

ウイズの言う新型とやらは本当にあるらしく、注文を聞いた途端にラルさんの瞳がキラリと光る。

「ほう。あの新型を所望するとは、いい目をしているな。よろしい、ならば見せてやろう

！ ジオン脅威のメカニズムを！」

暑苦しくそう叫ぶと店の奥へ歩いていき、それほど大きくない木箱を手にして再び戻ってくる。その蓋を開けて中を見ると、頭部にツノが付いたジャスタウエイがずらりと並んでいた。

「高純度のマナタイト・フレームを全身に組み込んで爆発魔法に匹敵するほどの威力を実現した最強の携帯兵器……その名も『ユニコーンジャスタウエイ』!!」

「ふざけんじゃねえええええええつ?! こんな奴にツノ付けてユニコーンとか無理があらんだろ!?! どう見てもシャアザクですけど! 指揮官用のザクですけど!」

「ええい! ザクとは違うのだよ! ザクとはっ!」

「はいはい、言うと思ったよっ! せっかくだから言わせてやったよっ!」

ジャスタウエイの魔改造つぷりに流石の銀時もビックリする。しかし、元ネタを知らないクリスにとってはどうでもいいことなので、さっさと話を戻そうとする。

「と、とにかくすごい魔道具だねー! こんな安っぽい人形が爆発魔法並の威力なんて!」

「確かに性能は良いのだがな、いかせんコストが高くて使い勝手は良くないのだ」

「良いものつてのは値段が高くなるからね。で、これはいくらで売ってるの?」

「こいつは1つ500万エリスだ」

「高あああああいつ!! 使い捨てアイテムをなんでそこまで高価にしてんの!!」

あまりにおかしな値段を知って驚愕してしまう。これを買うぐらいなら高レベルのアークウィザードを雇った方が遙かに安上がりであり、そんなことはこの世界に来て日が浅い銀時ですら分かっている。それなのに、ウイズさんは迷うことなく買っちゃいました!

「じゃあ、それを20個買います!」

「おいしいおいしい!! こんなもんに1億も使うとか、商才が無えーってレベルじゃねーぞ?! これはもう呪いなんじゃね?! 爆発物を爆買いするって呪いがかかっているじゃね?!」

「そんなものはかかっていません! それにこれはシゲシゲさんと共同販売するものですから、私の支払いは5000万だけですよ!」

「それでも十分高いんですけど!! お前ら二人は、ただでジャスタウェイ欲しがっているだ!!」

あくまでアレを買うつもりなウイズに呆れてしまう。なぜか茂茂も協力しているらしく、ユニコーンジャスタウェイの購入は避けられそうにないようだ。

「こうなったら仕方ねえ。後はどこまで値切れるかだな」

「えっ、値切りなんてするのですか?」

「んなもんだたり前だろーが？ 標準価格つつーのは基本的にぼったくりみてーなものだからな、それを上手くディスプレイスカウントすんのは商売の常識だぜ？ つつーことで、このゼロを一つ減らせや」

「ほ、ほう……思い切りの良い値切りだな！ 手ごわい！ しかし！」

「あーもう、そーいうのいいから！ 俺の言うこと聞かねえと、さつきこいつらにセクハラしたことを内縁の妻であるハモンさんに言いつけんぞー！」

「いや、内縁の妻なんて元々いないし、ハモンさんって誰!？」

滅茶苦茶な交渉で理不尽な要求を突きつけてくるクズ野郎にラルさんは追い込まれる。ゼロを一つ減らすなんて絶対に無理なんですけど、下手に逆らったらセクハラ店主という風評を巻き散らされちゃうかもしれない。

「ええい、分かった！ 思い切ってここは1割……いや、2割引きでどうだ!？」

「よおーし、今すぐハモンさんのところに行くか」

「ああーっ!! こうなりやもう3割引きでいいから、セクハラの件は内緒にしてっ!!」

激しい攻防の末、歴戦の勇士であるラルさんがDSの前に陥落した。やつぱり、変態という名のニュータイプには勝てなかったよ……。

「見ておுகがいい！ 商談に破れるとはこういうことだあああああつ!! (泣)」

「ごめんなさい、ごめんなさい！ なんかとにかくごめんなさい!」

申し訳なくなつたウイズはペコペコと謝罪する。それでも、契約書にはしつかりとサインする辺り、彼女も結構バカ共に毒されて来ていた……。

コントのような商談を済ませて表に出てきた銀時達は、こちらの事情を何も知らないウイズにこれまでのあらましを説明した。すると、彼女は激しく怒つてクリスの行動に共感する。

「神器や魔道具を悪用して女の子にイタズラするなんて、絶対に許せません！ 私も全力でお手伝いしますので、必ず犯人を捕まえましょう！」

「うんでも、無理はしなくていいよ？ あたし達は、用意してある一週間分の軍資金を使いきるまでねばつてみるけど……」

「ああ、宿泊費のことなら問題ありませんよ。私はいつでもテレポートで帰れますから。それに、お店の方もめつたにお客さんなんて来ませんから、数日くらいお休みしたつて全然へつちやらです！」

「いや、全然へつちやらじゃねーだろソレ。永遠にお休みするほど追い込まれてんだろソレ」

クリスに余計な心配をさせないように気を使つたら、逆に自分を追いつめる結果になつてしまった。

「え、永遠にお休み……」

「店主さんの顔色がさらに悪化しちやつてるうーっ!? ちょっとギントキ!! これからって時になってことしてくれてんだよ!」

「つたく、あの店の経営状況なんざ今更気にするこでもねーだろ。なんせ、お前はリツチな將軍とラブラブなんだからよお。もういつそのこと結婚して玉の輿に乗っちゃいなYO!」

「きやあああああああつ!! 私とシゲシゲさんが、けけけけ、結婚だなんて、ナニ言ってるんですかあーっ!? 確かに、ちよっぴり夢見ちやつたりはしてますけど! 子供は二人がいいですねとか夢想しちやつたりしてますけど! まだ出会って間もないですし、心の準備が出来てませんよおーっ!!」

「いや、滅茶苦茶ヤル気満々じゃぶるあつ!!」

照れ隠しに放たれたウイズの右ストレートが銀時の顔面にクリーンヒットする。予想以上に意識していた気持ちをつ突っ込まれて、羞恥心がマックスまで跳ね上がってしまったのだ。そのおかげでへこんでいたウイズが復活したものの、殴られて鼻血を吹き出している銀時にとっては災難以外の何者でもない。

「はは……胸だけじゃなくパンチまでいいもん持つてんじゃねーか。これだけ強くて覚悟もあんなら、クリスマスも安心出来るんだろ?」

「その代わりに、ふらついちゃってるギントキの方に不安を感じるけどね！」

ロリコン野郎とやりあう前にダメージを負ってしまったドS野郎をジト目で睨む。本当にこの人は地球を救った英雄なのでしょうか……。

「はあ……なんかどんどんおかしな状況になって行くけど、あたしの幸運はちゃんと仕事してるのかなあ？」

ペコペコ謝るウイズに鼻血を拭いてもらっている銀時を見つめながらため息をつく。このままの調子でドタバタと騒いでいたら、神器の回収に失敗してしまわないかしら……。悲観的になったクリスは思わず不安を感じてしまう。

だが、幸いなことに、その心配はまったくの無用だった。繁華街にて探索すること一時間後、クリスの「宝感知」に大きな反応が現れる。間違いない、これほどの力を放つのは神器だ。

「出たよギントキ！　ロリコン野郎か勇者候補かは分からないけど、神器を持った奴がいるー！」

興奮気味に叫びながら反応のある方へ走り出し、それを見た銀時とウイズもすかさず追随する。

「これは……メインストリートから路地裏に高速で移動してる!？」

「もしかして、犯人が女の子を連れ込もうとしているのではないですか!？」

「てめえら、全力で走りやがれっ！」

銀時が叫ぶと同時に走る速度を上げていく。

相手の動きから推測するに、勇者候補の転生者よりロリコン野郎である可能性の方が高い。しかも、犯行の真つ最中となれば絶対に阻止しななければならないだろう。

「あそこの路地裏に出たらもつと速度を出すよ！ 相手はとなりの道を直進してるから先回りをするんだ！」

クリスの指示に従って、人気の無い路地裏をひたすら爆走する。運動神経が良い銀時やクリスは言うに及ばずだが、不健康っぽく見えるウイズも意外に足が早く、あつという間に目標を追い抜くことに成功する。

「はあ、はあ！ アクア様に浄化されかけた後の全力走はとつてもきついですよっ！」  
流石の私も力尽きて死んじやいそうですよおっ！」

「ええい、こんな時に弱音を吐くな！ 誰だって、死にもの狂いできつい現実と戦ってるだよ！ 死にそんな目に遭ってんのはお前だけじゃねえんだよ！ つーか、そもそも死んでんじやね！ お前はすでに死んでんじやね！」

「ちよっ！ 店主さんの顔色がゾンビ以上にヤバいからって、お前はすでに死んでるとか言っちゃダメでしょっ！」

疲れのせいで警戒が緩んだウイズがうつかり正体をバラしそうになるものの、ロリコ



ン野郎に気を取られているクリスは気づくことなくスルーする。次の十字路で先回りすれば相手の前に出られるのだ。

「準備はいい？　そこを右に曲がったら神器を持った奴がいるよ！」

「おう、一発で当たりを引けるといいがなっ！」

幸運を祈りつつカーブを曲がりきる。すると、目の前から走ってくる三人の男が見えた。自分のような二人は黒装束に覆面を付けたいかにもな風体をしており、主犯と思しき男は、身体を縛られた少女を右腕に担いで先頭を走っている。クリスの幸運のおかげか銀時のトラブル体質のおかげかはどうあれ、一発でロリコン野郎を引き当てることが出来たらしい。

「つーか、なにあのムキムキ野郎!?　パツンパツンの子供服を窮屈そうに着てるけど、なんで変態ロリコン野郎がゴンさんになってんだああああああああっ!!」

全速力で接近しつつ先頭の男にツツコミを入れる。そんな銀時の姿を涙目で見た少女は、美しい碧眼を見開きながらこう思った。銀髪の勇者様が助けにきてくれたと。

## 第19訓 王女様は万事の守護者に憧れる

ロリコン野郎に捕まってしまった少女は、急激に悪化した状況についていけず混乱していた。少し前までは、自分の方がこの犯罪者を捕まえようとしていたのに……。

「ぐすつ……どうしてこんなことになってしまったの……」

己の無力さを痛感して青い瞳から涙を流す。

少女には力があつたのに。王族としての権力も騎士としての武力も持っていたというのに。なぜ、卑劣極まる犯罪者などに遅れをとってしまったのか。なぜ彼女が……この国の王女たる「ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリス」が、このような窮地に陥ってしまったのだろうか……。



王女の私が城下町に出かけるようになったのは、シゲシゲ様と出会ったことがきっかけでした。

今から1年ほど前。一介の冒険者から大商人となった彼は、優れた武具の量産化や新

兵器の開発といった軍事的な事業にも積極的に力を注いで、王国軍の戦力強化に多大な貢献を果たしました。その素晴らしい活躍ぶりはお城にいる私の耳にも届いてくるほどでした。

『トクガワ・シゲシゲ様……勇者候補の方々みたいに変わったお名前ですね。ブリーフマスターという職業もかなり変わっていますし……。とうか、ソレ職業じゃないですよね？ ただのブリーフマニアですよね？』

ちよつびり怪しいところもあるようですが、周囲の噂を聞けば聞くほど直にお会いしてみたいと思うようになりました。お城から出る機会の無い私にとって、シゲシゲ様のような英雄から胸踊る経験談を聞かせていただくことがなよりの娯楽だったのです。

『アイリス殿下、お初にお目にかかる。拙者は〔万南無屋〕の代表を務める徳川茂茂と申す者だ』

『まあ……。一般の方だというのに、なんて威風堂々とした佇まいなのでしょう……。』  
これまでの功績を誇るという体でシゲシゲ様をお城に招待した私は、冒険者でありながら王族にすら匹敵するほどの風格を持った彼にお父様やお兄様と接するような親しみを感じました。そんな彼に興味を抱くのは当然の結果であり、その後も度々招待しては様々なお話を聞かせていただくことになりました。

『シゲシゲ様！ 今日も〔暴れん坊大將軍〕の冒険活劇をお聞かせください！』

『相分かった。ならば今回は、江戸に隕石が墜ちてくるという、ネタに詰まった脚本家が酒に酔った勢いで作ったとしたか思えない衝撃的なエピソードを語るとしよう』

私の願いを聞き入れてくださったシゲシゲ様は、優しくも威厳に満ちた態度で答えます。所作や言動だけでなく、雰囲気そのものが並の貴族など足元にも及ばないほどに洗練されており、私の護衛として部外者に厳しい目を向けているクレアやレインまで尊敬の念を抱くほどです。

『やっぱり、大將軍は最高ですね！ 悪者達に身分を明かして絶望のどん底に突き落としてからの成敗タイムは何度聞いてもスカッとします！』

シゲシゲ様の国で流行っていたという物語にのめりこんで、つい子供のようにはしゃいでしまいます。この頃、貴族以上に高貴な活動を行っていらっしやるシゲシゲ様に感化されていた私は、大將軍のような世直しを試みたいと夢想するようになっていました。

『クレア、レイン！ 王族である私も大將軍のように自ら城下町に赴いて、民衆を苦しめるアクダイカンを懲らしめに行きますよ！』

『失礼ですが、アイリス様。この国にはアクダイカンなる役人などおりません……』

『そもそも、一人で敵地に乗り込む大將軍のマネなんてとんでもないですよ!』

調子に乗ってクレア達を困らせてしまいます。普段は王女としてふさわしい態度を

心がけておりますが、シゲシゲ様と過ごす時間は、なぜかお父様やお兄様と一緒にいる時のように本当のアイリスでいられたのです。

しかし、楽しい時間にも終わりが来てしまいます。シゲシゲ様が辺境の街で大がかりな事業を始めることになり、王都を離れることになったのです。

『感謝するぞアイリス殿。そなたと過ごした数カ月間、実に楽しいひとときだった。まるで、遠い地にいる我が妹と再会出来たような気持ちになれたよ』

『はい……私もお兄様がもう一人増えたような気がしておりました……』

別れ際の言葉を聞いてシゲシゲ様の寂しさが心に伝わってきました。魔王軍の侵攻に備えて前線にいるお父様やお兄様と容易に会えない今の私には、彼の気持ちがよく分かります。

これで、私がシゲシゲ様に親しみを感じていた理由が分かりました。お互いに会えない家族の温もりを求めあっていたのですね……。

『あの……またあなたのお話を聞かせていただけますか？』

『うむ、この国が安泰ならばいくらでも機会はあるだろう。ゆえに、余は新人冒険者を育成アクセルを守り、この国の平和を支える土台造りに専念しよう』

『だったら私は、大將軍のように王都を守ってみせます！ シゲシゲ様が心おきなくお仕事に専念出来るように！』

お別れの寂しさをごまかすようにシゲシゲ様と約束します。王族として。妹として。この国を救いたいとすべてを懸けて尽くしておられるシゲシゲ様の熱い想いに心の底から共感したから。多くの者に迷惑をかけ、大切なお金をたくさん消費すると分かっている、私自身の手でこの国を護るお手伝いをやってみたくなったのです。

シゲシゲ様が王都を離れてから数週間後。お父様に私の想いをお伝えしたところ、お忍びの城下視察を月に1回行えるようになり、4回目のその日が本日巡って参りました。

でも今日はいつもと違って、クレアとレインが必死に止めようとしてきます。ここ最近、幼い少女を狙った犯罪が王都で多発しているらしく、心配症なクレアは外出を止めるよう進言してきましたのです。

『この日を楽しみにされていたアイリス様には申し訳ありませんが、せめて犯人が捕まるまでは堪えていただけませんか？』

『なにを言っているのですクレア。こんな時こそ暴れん坊大將軍の出番ではありませんか。私の実力なら勇者候補の方々にだって勝てる自信がありますし、なによりあなた達が護衛についているのですから、変質者などに負けたりなんてするわけがないでしょう？』

『は、はい。無論、我らが変質者ごときに負けることなど有り得ませんが……』

まだ納得出来ない様子のクレアは言葉を濁します。11歳の私も犯人のターゲットになりかねない年齢なので、彼女が懸念するのも仕方がありません。

それでも、私が動いた方がいと思いました。護衛として私服を着た騎士達が町中に配置されるため、その分犯人を捕まえられる可能性も高まります。だから、この機会はチャンスでもあるのです。

『さあ、行きましようクレア。言うことを聞いてくれたら、あなたのお願いを何でも一つだけ叶えてあげますから』

『なっ!? アアアア、アイリス様に何でもお願い出来るのですかっ!? 分かりました行きましようっ! 御身は必ずこの私が命を懸けてお守りしますっ!』

『はあ……。普段は冷静沈着なクレア様も、アイリス様のことになると人が変わってしまうのですから……』

疲れた様子の子のレインはまだ渋っているようですが、クレアを味方つけてしまえばもうこちらのものです。

二人の気持ちが変わらない内に素早く変装して身支度を整えます。服装は一般的な平民風にまとめ、フード付きのケープとまん丸メガネで貴族の証である金髪碧眼を出来るだけ目立たなくします。後は、護身用のダガーを見えない場所に装備すれば準備完了

です。

ちなみに、クレアは男性用の白いスーツ、レインはごく普通の魔法使いスタイルで私と同行します。

『では参りましょうか。アクダイカンを懲らしめに!』

『あの、アイリス様。以前にも申し上げましたが、アクダイカンとやらはこの国におりませんよ?』

何やらクレアが無粋なことを言つて来ますが、にこやかに聞き流します。こういうのは事実よりも気分が大事なのです。

馬車でお城を出て商業地域にやって来た私達は、いつも通りの賑わいを見せるメインストリートを歩きます。流石に女の子だけで歩いている姿は見かけませんが、この中のどこかに変質者が潜んでいるかもしれません……。

『犯人は女の子に化けて近づいてくるのですよね?』

『はい。忌むべき手段で純真無垢な少女を騙す卑怯極まりない変態です。とはいえ、王都に住む少女達は保護者無しでの外出を禁止されておりますから、現在はその手口も容易に使えないでしょう』

クレアの言う通り、犯罪を抑止する効果は間違いなくあるでしょう。でもやっぱり、



犯罪者自身を捕まえなければ安心出来ません。

『さあ、始めますよ二人とも！ オニワバンの実力を存分に見せてください！』

『は、はあ……オニワバンとやらはともかくとして、イリス様のご期待にそえるよう勤めさせていただきます』

クレアは戸惑いながらも事前に決めた偽名で呼びます。今の私はベルゼルグ王国の第一王女ではなく、メグミに居候している貧乏貴族の三女なのです。

『それでは、これからどうしますか？』

『まずは、事件が起きた現場付近で聞き込み調査をするとしましょう。犯人を捕らえるためにもキャバ嬢に好かれるためにも現場百遍が近道だと、シンセングミの話をされていた時にシゲシゲ様が言っていました』

『イリス様。キャバ嬢とやらのくだりは絶対には冗談なので真に受けなくてください』

またしてもクレアが突っかかって来ますが、折りよく学んだ知識を活かして行動を始めます。レインが事前に調べてきた情報を元に現場を巡り、私達は聞き込み調査を進めました。

その途中で、予期せぬ出来事が起きたのです。

『あの、もしかしてお姉さん達はロリコン犯を探しているの？』

『……………え？』

次の現場に向かう途中で突然声をかけられて、私達は一斉に視線を向けました。するとそこには6〜7歳くらいの少年が立っていました。青いジャケットに半ズボンという格好で、赤い蝶ネクタイと黒縁メガネが特徴的な身なりの良い男の子です。少女ではないので例の変質者とは無関係だと思えますが、クレアは警戒するように質問します。

『お前はいったい何者だ?』

『エドガー・コナン、探偵さ』

不敵な笑みを浮かべた少年は意外な返答をしてきました。探偵というのは確か、色々な調査を行うお仕事で、警察でも解決出来ない難事件の謎を解くこともあると聞いています。……。

『ふざけるな! お前のような子供が探偵であるわけないだろう! どうやら、私たちの会話を聞いて興味を持ったようだが、危険な遊びは今すぐ止めろ!』

『違うっ! これは遊びなんかじゃない! 僕の大切な友達も事件の被害に遭ったから……。その子の無念を晴らすために僕は探偵をやっているんだ!』

クレアに叱られた少年は、怒りを込めて反論してきました。遊びかと思っていた彼の行動には、ちゃんとした理由があつたようです。

それでも、無謀な行為には違いないとレインが諫めようとしています。

『あなたの気持ちは分かりますが、子供だけで犯罪の調査をするなんてあまりにも危険です!』

『もちろんそれは分かっているけど、無茶したおかげで犯人の手がかりを掴めたんだ!』  
『なに、それは本当か?!』

少年の意外な言葉に私達は驚きます。警察ですら手を焼いているというのに、彼一人で手がかりを掴むなんて、到底信じられません。でも、お友達のために危険を犯している彼がウソをつくとは思えませんし、ようやく見つけた希望なのだから、まずは確かめてみるべきでしょう。この時の私はそのように判断して、素直に少年の情報を聞き入れることにしました。

『それで、その手がかりというのは、どのようなものなのでしょうか?』

『実は、数日前に怪しい女の子を見かけたから、こつそりと後をつけてみたんだ。すると、その子は悪い噂をよく聞く貴族の屋敷に入っていたんだけど、肝心の警察は冤罪を怖がってちつとも動いてくれなくて、どうしようかと思っていた時に同じ貴族のお姉さん達と出会うことが出来たんだよ』

『ふむふむ、そういうことですか! やはり、この事件の裏ではアクダイカンが暗躍していたのですね!』

『えっ? うん、まあ……アクダイカンっていうのはよく分からないけど、女の子が入っ

ていった秘密の裏口を教えてあげるから、とにかく僕と一緒に来てっ!」

そう言う少年は私の右腕をがっしりと掴んで、いきなり走り出しました。意外に力の強い彼に引つ張られる形で走り出した私は、思考が追いつかない内にどんとクレア達から離れていきます。

『きゃっ?! ちよっ、待って?! あの二人と離れちゃう……!』

『大丈夫だよお姉ちゃん! あの年増……じゃなくて、彼女達の無駄に育った足で走ればすぐに追いつくから!』

気持ちが逸っているせいか、少年はおかしな言い訳をするばかりで足を止めてくれません。彼の事情を考えると無闇に手を払うことも出来ず、そのまま勢いを緩めることなく人波の中を走っていきます。

『真犯人が貴族だしたら、王族である私には彼の願いに報いる責任がありますけど、このままでは警護体勢が機能しなくなっちゃいます……!』

そのように心の中で葛藤している間にもクレア達との距離はさらに開いていき、二人が追いつく前にとうとう路地裏へ入ってしまいました。

『あつ、あのっ! 二人が見えなくなっちゃったのですが!』

『大丈夫だよお姉ちゃん! あのババア……じゃなくて、彼女達の無駄に育った身長でこっちの動きは見えてるから!』

私の意見はまたしても聞いてもらえませんでした。

そうこうしている間に、人気の無い路地裏の奥へと進んでいってしまいます。これは、距離をおいて警護していた騎士達はほぼ無力化してしまい、頼みのクレア達もすぐに駆けつけられないという非常に危険な状況です。

『コ、コナンさん！ 申し訳ありませんが、ここで一旦止まってください！』

意を決した私は、少年の手を強引に振り解いてその場に立ち止まりました。王族の者は、幼い頃から経験値を得られる食材をふんだんに摂取しており、ベテラン冒険者以上にレベルが高い私にはかなりの力があるのです。

『……なにしてんのお姉ちゃん？ こんなところで止まってる場合じゃないでしょう？』

『すみませんが、こちらにも事情があるのです！ それに、クレア達と一緒にの方が断然有利になりますよ？』

『だから急いでただけで、こうなったら仕方がないか』  
『……え？』

その怪しい言葉の意味を正しく認識する前に、事態は思いもよらない変化を起こしました。私よりも小さかった少年の身体が、筋肉ムキムキな成人男性の姿に変化したのです。

『ええええええええええええつ?!』

信じられない光景に驚いた私が固まっている中、筋肉男はジャケットの中に隠していたワイヤーを素早く手に持ち、私に向かって盗賊スキルを使ってきました。

『【バインド】 ツ!』

『つ?! きゃあああああああつ?!』

突然ワイヤーで拘束されてしまった私は、抵抗する間も無く捕らえられてしまいました。こうなってしまうと、いくらレベルが高くても意味がありません。

『なっ、なにをするのですか?!』

『もちろん、ナニをするために君を浚うのさ!』

『えっ、えっ、待つて!? ナニってなに!? っていうか、私を浚うってどういうことなの!?!』

急速に悪化していく状況に思考が追いつかず、パニック状態になってしまいました。

『ま、まさか!? あなたが少女達に酷いことをしている変質者なのですか?!』

『正解だよ、お姉ちゃん。いや、今はお嬢ちゃんと言うべきだな』

私に背を向けた筋肉男は、ポケットから取り出した黒い布で顔を覆いながら犯罪者であることを認めました。

『(ああ、なんてことなの。この変質者は、少年に変装することで、犯人は少女に化けて

いるという情報を逆手に取ったのですね……)』

最悪の事実気づいてシヨックを受けてしまいます。そのような場面で、ようやく追いつくことに成功したクレアとレインが、それぞれの武器を構えてこちらに駆け寄ろうとします。

『アツ……イリス様ーっ?!』

『貴様っ!? 今すぐそこから離れろっ!!』

『チツ! もう追いつきやがったか。年増ババアのクセに足が速いじゃねえか』

急に言葉遣いが悪くなった筋肉男は、装備したダガーを私の首筋に向けます。

『おっと、それ以上近づくなよ? じゃないと、あんた達の可愛い主が痛い目に遭っちまうぜ?』

『くっ!! なんと卑劣なっ!!』

『ああつ、イリス様!?!』

私を人質にされたクレアは悔しそうに剣を下げ、レインは涙を浮かべます。ごめんなさい二人共、私が油断したせいでこんなことになってしまっ……。

『さて、乱暴なお姉さん達も大人しくなったことだし、ここらで退場してもらいますかねえ』

そう言ってニヤリと笑った筋肉男が口笛を吹くと、建物の屋根からロープを使って二

人の男が降りてきました。残念ながら彼らは筋肉男の仲間らしく、抵抗出来ないクレアとレインにバインドを使って、二人を拘束してしまいました。

『きやあーっ!!』

『くっ!! 共犯者がいたのか!?!』

手足を縛られ、地面に倒れたクレアは、盗賊風の格好をした男達を睨みます。どうやら、これまで屋根伝いにこちらを尾行していたようです。

『お頭。後ろの方にこいつらの仲間みたいなの奴等が数人いたから、ちよいと足止めしときましたぜ』

『なにっ!!』

『騎士のみなさんになにをしたのですか!?!』

『ああん? 今言つてた通り足止めしかしてねえよ。寛大な俺達は、バカにされた程度で人を殺しちゃうほど横暴な貴族様みてえに無駄な殺生はしねえからなあ!』

『お、おのれえーっ!! 犯罪者ごときが我らを侮辱するか!?!』

『ははっ! そんな状態でも貴族の誇りとやらを貫かなければならねえとは、尊い血筋つてのも難儀だねえ。まあ、そんなもんを守ったところで、お前らの大事なイリスちゃんは守れねえんだけどなあ!』

人としての誇りすら無い筋肉男は、決して引かないクレアに侮蔑の眼差しを送ると、



近くで寝転んでいた私の身体を軽々と持ち上げました。

『きやあああああああああつ!!』

『きつ、貴様あああああああつ!!? イリス様を放せえええええええええつ!!』

『テメエみてえな年増ババアの言うことなんざ聞くかバーカ!』

怒りに燃えるクレアに口汚い罵声を浴びせると、男達は再び走りだしました。標的だった私を誘拐して……。

『クレア! レイン! 助けてえええええええええつ!!』

『はっはあーっ! 可愛い声で叫んだって助けなんざもう来ねーよ! 貴族と言つても、所詮は力押ししか能が無えバカな連中ばかりだから。ちよいと頭を使ってやればどうとでもなるぜ!』

筋肉男の言葉を聞いて絶望感に満たされます。

もう私は助からないのかな……。ポロポロと涙を流しながら諦めかけたその時、私の前にあの人が見えたのです。美しい銀髪を持った異国の勇者様が!



逃げる犯人の先回りに成功した銀時は、ゴンさんみたいなムキムキ野郎にツツコミを



「おつ、お頭あああああつ!」

異常事態に慌てた子分達は、倒れた主をかばいながら銀時達を睨みつける。いきなり攻撃してきやがるなんて、何なんだこいつらは。初めから自分達を狙っていたようだが、警察や騎士には到底見えない。

「おつ、お前達は何者だっ!」

「うっせーロリコン！俺たちや通りすがりの【万事屋】ですが、なんか文句あんのかゴルア!」

「あ、あのー。私はヨロズヤではなくて魔道具店の店主なんですけど……」

おバカな銀時は、うっせーと言いつつも律儀に自己主張してしまい、ウイズはウイズでおバカな反論をしてしまう。クリスとしては苦笑せざるを得ない光景である。

それでもアイリスは、彼の存在に頼もしさを覚えた。言動には品が無いし、格好もだらしない。はつきり言って、チンピラにしか見えない三流冒険者である。しかし、不思議と安心出来る、そんな魅力を感じるのだ。

「(上手く説明出来ませんが、これがヨロズヤとやらの力なのでしょうか……)」

この時アイリスは、ヨロズヤという異国の単語に強く心を惹かれていた。

とはいえ、今はのんきに考えごとをしている場合ではない。バインドを解いている時間は無いので、アイリスはウイズに預けて後方に移動させる。

「店主さん、この子のことを頼んだよー」

「はい、分かりました!」

こくりと頷いたウイズは身動き出来ないアイリスを抱いて後方に下がっていき、後に残った銀時とクリスは子分達をぶっ飛ばそうと互いに武器を装備する。

「さて、これからロリコン共にお仕置きをするわけですが……。ここはやつぱり後腐れなく玉と棒をぶっ潰して、心も股間もスツキリとさせておきましょうかねえー?」

「ひいひいひいひいひいひい!」

洞爺湖で肩を叩きつつ恐ろしいことを言う銀時に、子分達が悲鳴を上げる。数々の修羅場をくぐり抜けて来た彼らはこの男の強さを肌で感じとっていたのだ。まともに戦ってはとて敵わないということ。

しかし、まともに戦えないようにしてしまえば自分達にも勝機が出てくる。背後に視線を向けた途端に子分達はニヤリと笑い、銀時たちがそれに気づく前に素早く左右へ飛び退いた。すると、その先には、ファンシーなデザインのステッキをこちらに向ける筋肉男の姿があった。

「なっ!?! あれは!?!」

「ロリロリナルナル・ロリナル! みんな仲良く幼女になあれっ☆」

「なにその最低な魔法の呪文!? イヤな予感がするんですけど、変なビーム飛んでキ



だったおかげで神器の力が効かなかったウイズが、すかさず反撃に出たのだ。

「これ以上はやらせません!」「フリーズガスト」ッ!」

力強くウイズが叫ぶと中級の氷結魔法が発動する。襲いかかろうとしていた子分達は、冷気を帯びた白い霧に包まれて氷漬けになっってしまった。後方にいた筋肉男には避けられてしまったものの、不利な状況を脱することには成功した。

「クツソオオオオオオッ! あのおツパイバアはアークウイザードだったのかっ!

っ!か、なんであいつには神器の力が効かねーんだ!? まさか、あの下品なまでにかい乳で弾かれちゃったのかっ!」

「私の胸にそんな効果はありません! っていうか、おツパイバアってなんですか!」

気にしている年齢と胸の大きさを侮辱されてプンプンと怒るウイズさん(20)。彼女にかばわれて難を逃れたアイリスはちよっぴり気の毒に思うものの、今は幼女にされてしまった銀時達の方が気になる。

「この方の胸はともかくとして、これ以上の抵抗は今すぐ止めなさい! 大人しく投降してそちらの二人を元に戻せば減刑も考慮しましょう!」

「ふんっ! ついさつきまでピーピー泣いてたクセにもう勝ったつもりかよ!? ガキをかばってる魔法使いのババアなんざ、俺一人だっでどうとでもならあ!」

アイリスの言葉に怒った筋肉男は彼女の方に意識を向ける。そのちよっとした隙が

命取りとなり、彼の敗北が決まってしまう。

「よし今だ！ 【タートルシエル・バインド】 ツ！」

「なっ、なにいいいいいいいっ!?!」

突然ロープで縛られて筋肉男は狼狽する。ウイズ達が騒いでいる間に、脱げそうになるトランクスを結び留めて動ける準備を整えていた銀時がスキルを使ったのだ。無力な幼女になったと油断していた筋肉男は、『見た目は子供、頭脳はドS』な遊び人によってあっけなく拘束された。

「なっ、なぜだっ!?! 幼女化した奴は、それまでに習得したスキルも使えなくなるはずなのにつ!!」

「バカかお前は？ 生まれた時からドSの俺は、ガキにされようが、チ○コを消されようが、SMスキルを使えんだよ！」

「なにそのへ理屈!?! それでスキルが使えるとか、どんだけ法則無視してんの!?! つーかコレ、SMスキルじゃないんだけど!?! 普通にバインドなんだけど!?!」

「黙れや変態っ! 男気溢れる銀さんを二度も女体化させやがって、ぜってえに許さねえーっ! チ○コを奪われたこの恨み、暑苦しいテメエの身体に思い知らせてくれるわっ!?!」

怒りに燃えた銀時は、右手に持った洞爺湖を振りかざして筋肉男に襲いかかった。幼

女に変わり果てたとしても、このくらいの頃から戦いに明け暮れていた銀時にはかなりの戦闘力があり、身動き出来ない相手をボコるにはそれだけで十分だった。

「これは、お前に傷つけられたガキンチョ達の分！」

「ぐはあっ!!」

「これは、お前に幼女化されてチ○コを奪われた俺の分！」

「ぐほおっ!!」

「そしてこれは、お前に幼女化されてチ○コを奪われた俺の分だああああああああっ  
！」

「うぼあーっ!!」

「って、なんか同じ内容のものが繰り返されてるんですけど!? そこまでソレを気にしてんの!?!」

チ○コを失ったことを気にしまくる銀時にクリスは呆れる。幼女姿も意外に可愛くていいのに。

「まあ、アクシデントはあったけど、女の子も助けられて目的も果たせたから、めでたしめでたしだね！」

「これっぽっちもめでたくねえよ!? 俺のチ○コを取り戻すまで、この話は終わらせねえよ!?!」



無論、まだまだ話は続く。

荒ぶるDSにボコられて気絶した犯人達を拘束した一行は、幼女にされた二人の服装を手持ちの物で整えることにした。クリスの説明では時間が経てば元に戻るらしいのだが、いつ戻れるか分からない以上、服の方をなんとかしなければならぬ。

「つーても、クリスはそのままでいいんじゃないやね? 胸を見ても違和感ねーし」

「これでもかなり縮んでますけど!」

軽く一悶着起こしつつ、ウイズやアイリスも交えてあーだこーだとコーデを試す。その結果、背が縮んでズボンが合わなくなつた銀時は、白い着物を工夫してワンピース風にアレンジし、クリスの方にも昨日買った同じ物を着せることにした。すると二人は銀髪美少女の姉妹がパールツクをしているような姿になり、その様子を眺めていたウイズとアイリスはついホッコリとしてしまう。

「まあ! 二人ともお似合いですね!」

「はい! とつても可愛らしいです!」

「お前ら俺で遊んでるだろ!?! 心の中で笑ってんだろ!?! 絶対こいつら『いい年こいた天パ野郎が幼女のコスプレとかマジキモいんですけど』ってバカにしてるよ、コンチクショウめっ!」

「被害妄想酷すぎですよーっ!?!」

見た目は可憐な幼女になっても中身はいつものマダオだった。

それにしても、彼らはちゃんと元に戻るのだろうか。巻き込んでしまったと思ってるアイリスは、自分より幼くなってしまうた恩人達に改めて謝罪する。

「この度は本当に申し訳ありません。私を助けるために、こんなことになってしまっ……」

「いやいや！ キミが謝る必要なんてこれっぽっちも無いよ。あたし達の方にもこいつらを倒す理由があつたからさ」

優しい笑みを浮かべたクリスは、罪悪感に心を痛めているアイリスを慰めるように秘密の一部を打ち明ける。神器を回収したことを黙認してもらわなければならぬのだが、無理矢理口封じをする訳にもいかなないので、誠意を見せて説得するつもりなのだ。

ただ一つ、相手が貴族だという点が気がかりだったが……。

「なんとなくアイリス王女に似てる気がするんだけど、あの子がこんな場所にいるわけないよね。それに、この子も良い子みたいだからなんとかなるかな」

自分の幸運を信じたクリスは楽観的に考えると、回収してきた神器を取り出してみせた。彼女が手に取ったそれはプリ○ユアに出てくるようなデザインの短いステッキだった。

「あ、あの。もしかして、それがあなた方の理由ですか？」

「うん、そうだよ。これは誰にも言わないでほしいんだけど、あたし達は悪用されている神器を悪い奴等から回収しているんだ」

「まあ！ そうだったのですか!?」 ということは、あなた達は正義の味方で、ヨロズヤとこののは悪を懲らしめるために作られた秘密組織なのですね!」

「えっ!? うん、まあ、当たらずも遠からずってところかなあーっ?」

なぜか目を輝かせながら興奮しだしたアイリスに困った様子で返答する。どうやら彼女はこの手の話が大好きらしく、それに気づいた銀時が、この場をごまかすために使えろと判断して勝手に設定を盛ってしまう。

「いいかガキンチョ。ここだけの話だがな、敬虔なエリス教徒である俺達は、女神エリスの命を受けて秘密裏に活動している選ばれし聖闘士（セイント）なのだ!」

「ええーっ!? 女神エリスから直々に命を受けておられるのですかーっ!?」

「ああそうだ! エリス教の繁栄を妬む駄女神によってバラ卷かれしチートアイテムを、悪人から取り戻して封印するが我らの使命! だからキミには、俺達のことを誰にも話さないと約束してほしいのだ! 女神エリスの名に誓って!」

「は、はいっ! 女神エリスの名に誓って、命の恩人であるあなた方の秘密は絶対に守ります!」

「よーし、良い子だお嬢ちゃん! ご褒美に、アクアのオヤツからパクってきたアメちゃ

んをくれてやろう！ (くつくつく……ガキを言いくるめるなんざチヨロいもんだぜ！)

純真無垢なアイリスは、遊び人のついたウソにあっさり引つかかってしまった。命の恩人が言っているにしてもウツカリし過ぎである。

とはいえ、これはどう考えても騙した銀時の方が悪い。クリスとウイズは慌てて彼に近寄ると、アイリスに聞かれぬように非難する。

「ちよつとおおおおおおつ！ あんな良い子になんてウソをついちやつてるのさ!?

アイリスのくだりはともかくとして、聖闘士なんて設定はふざけすぎだと思っただけ!?

「クリスさんの言う通りです！ 私はヨロズヤでもセイントでもなく、魔道具店の店主だと何度も言っているじゃないですか!」

「いったいどこに食いついてんだよ!? ツツコミどころがおかしいだろう!? ガラクタ売ってる店主なんざアピールしたって迷惑じゃね!? そもそも、大体合ってたんだから、エリス様も許してくれるよ！ 俺たちや悪から世界を護る女神エリスの聖闘士なんだよ!」

「(確かに大体合ってますけど、勝手に許されなくてください!?)」

文句を言ってもまったく悪びれない銀時にクリスとウイズは呆れてしまう。

ただ、彼の言っていたことも強ち間違つてはいないところがエリスにとって厄介だった。

ぶつちやけると、この神器が生まれるきっかけを作ったのはカグヤとアクアだった。カグヤに付き合わされている内に日本のサブカルチャーの影響を受けていたアクアがアニメからアイデアをパクりまくった神器を乱造しなければ今回の事件は起きなかつたのだ。

もちろん、神器を悪用する人間こそが悪いのだが、後始末を強いられているエリスとしては、いい加減な先輩達も十分に迷惑である。

「はあく。一応みんな良かれと思つてやっているから強く言えないんだよね……」

良い意味で諦めがついているクリスは、ため息をつきながら苦笑いを浮かべる。そんな様子を不思議そうに見守っていたアイリスは、おずおずと声をかけた。

「あ、あのく、なにか問題でもあったのでしょうか？」

「いやいや、なんも無いよ？ それより、そろそろあたし達は退散しなきゃいけないから、キミには申し訳ないけど後始末をお願いするよ」

被害にあつたばかりの子供にこんなことを頼むのも気が引けるけど仕方がない。この子の関係者が近くで探していると思われるので、話がややこしくなる前にここから離れなければならないのだ。

「えっ、もう行ってしまわれるのですか!? 助けていただいたお礼をさせてほしいので、もう少しだけお時間をいただけませんか!? それに、このまま帰ってしまうと感謝状や報奨金も貰えなくなってしまうですよ!」

あっさり別れたくないと思ったアイリスは引き留めようと懇願する。その表情はとても悲しそうで、見ているクリスも心が痛む。でも、ゴメンね。キミの気持ちは嬉しいけれど、あたし達は名誉やお金が欲しくてこんなことをやっているわけじゃないんだ……。

「なに、報奨金だと!? そいつはいつたい、おいくらなんだ!」

「はい、確か500万エリスほどだとレインが言っておりました!」

「よーし、今すぐ警察行くぞ! 500万は俺のモンだあーっ!」

「つて、めっちゃお金に食いついてるうーっ!」

欲深い銀時によってクリスのモノローグは台無しにされてしまった。

「もう、こんな時になにやってんの!? バカなことしてないで、さっさとここから撤退しようよ!」

「バカはお前だクリス・ペ○ラー! 500万って大金をみすみす逃してたまるかよ!」  
「あたし達の目的はお金なんかじゃなかったでしょーっ! エリスの聖闘士とか言ってたクセに、正義の心はどこいったんだよ!」

「うるせーっ!! 正義の味方だって先立つモンがなけりや生きていけねんだーっ!!」  
報奨金をきつかけにして銀髪の幼女達がケンカを始めてしまった。やはり、この男が絡むと綺麗に終わることは出来ないようだ。

「ああ、どうしましょう!?! 私のでエリス様の聖闘士達に分裂の危機がーっ!?!」

「えっと、そのっ!?! とにかく、みなさんもちついてくださあーいっ!?!」

おかしな雰囲気にも飲まれたアイリスとウイズまで取り乱し始めてしまい、混乱はさらに広がっていく。

そうこうしている内に時間はどんどんと過ぎて行き、とうとう恐れていた事態が発生してしまう。なんと、バインドを解かれたクレアとレインが他の騎士達を従えながらこちらに向かって来たのである。

「アイリス様ああああああああっ!!」

「あつ、クレア達が来ちゃいました」

「「……えっ?」」

アイリスのつぶやきで事態の変化にようやく気づく。

「しまった!?! バカなケンカをしてる間に人が来ちゃったーっ!?!」

クリスは冷や汗を流して焦り出した。すぐにテレポトすれば簡単に解決するけど、肝心のウイズはテンパってるし、大金を手に入れたい銀時が駄々をこねているので、ど

う考えても失敗する未来しか想像出来ない。

だからと言って、このまま彼らと接触するのも非常にまずい。これまでの経緯を聞かれても真相を打ち明けることが出来ないからだ。

「神器の存在を公に出来ない以上、あたし達が幼女化してすることも知られるわけにはいかないし……」

世間では幼女化の仕組みが不明となっているため、それを直に使われたと知られたら警察署で詳しい説明を求められることになってしまう。もしそうなったら、最悪の場合、回収した神器を見つけられて没収されてしまうかもしれないのだ。

このクエストを円満に終わらせるためには決してボロを出すわけにはいかないのだが、いったいどうすれば……。

「こうなったら仕方がねえ、ここはC2パターンで対応すんぞー!」

「えっ!? C2パターンとか初耳なんだけど、いったいどうする気なの?」

クリスが頭を悩ませていると、事態をややくしくした張本人がなにやら思いついたらしい。

「ようは、あいつらに気づかれないうちに完璧なウソをつきやいんだよ! 俺達三人は王都に遊びに来た観光客という設定で、『たまたま買物に来たら、たまたまこいつらと遭遇して、たまたま強かつた俺達が、たまたまぶっ飛ばした結果、たまたまこのガキ



を助けられた』ってことにすりやあいいだろ!」

「なんだか、たまたまばかりですな……」

玉が消えた股間を気にしていたら言動まで玉だらけになってしまった。

「つーわけで、大人のウイズは、俺達の保護者として魔道具店の店主を演じてくれ」

「はい、分かりました! ……って、私は元から魔道具店の店主ですけど!」

「そんでもって俺とクリスは、こいつの買物物についてきた近所のクソガキだ」

「クソは余計だけど、とりあえず了解したよ」

こういう時に悪知恵が回る銀時は速攻で配役を割り当てていき、最後に残ったアイリスにも大切な役割を与える。彼女の行動次第で結果はがらりと変化するため、この説得はとても重要である。

「後はお前の役目だが……。しよっちゆうマリオに助けられてるピーチ姫的なヒロインとして、俺達の芝居に話を合わせてもらいたい」

「えっ、私がヒロイン!?!」

「ああそうだ。お前の協力次第で俺達の運命が決まるという、まさにヒロインにふさわしい役目を担うことになる。もちろん、無理強いはしないが、俺はお前に【仲間】として頼みたい。俺達を助けるために力を貸してくれ!」

「っ!? 私がみなさんの仲間……。わ、分かりました! あなたの頼みを謹んでお受け



「ああっ、ああっ!! ご無事でしたかイリス様っ!!」 どこもお怪我はされてませんかっ!?」

「は、はい、私は大丈夫です。どこも大事はありませんよ」

「ああ、よかった……本当によかった……っ!」

感極まったクレアは涙を流しながらアイリスの無事を歓喜する。もちろん、レインも泣いており、笑顔で出迎えてくれたアイリスを見て心と体を震わせる。

「ぐすっ……女神エリスよ、哀れな私達に慈悲深い幸運を与えてくださったことを心より感謝します……」

涙で頬を濡らしたレインは幸運の女神に祈りを捧げる。そのエリス様は、すぐ近くでマダオとケンカしているけれど……。

「これでも食らえ!」【バインド】ッ!」

「なっ、まさか!?」ドSの俺がDMのように縛られちまうだとおっ!」

「ふふーん! さつきは肌を隠すのに必死でなにも出来なかつたけど、あたしだつて盗賊スキルは使えるんだよ!」そして、ここからはずっとあたしのターンだああああああああっ!」

銀時にやられっぱなしだったクリスは、ここぞとばかりに逆襲を始める。そんなことしている場合ではないのだけれど、幼女化したせいで思考や行動まで幼くなってしまう



込めて声をかけた。

「すまない、ご婦人殿。子供達の世話で苦勞しておられるところを失礼するが、我らの言葉聞いていただきたい」

「えっ!? あつ、はい、なんででしょうか?」

「この度は、窮地に陥っていた我が主をお救いいただき、誠にありがとうございます。我ら一同は、勇敢なるご婦人の英断に対して、心の底から感謝しております」

クレアはそう言うのと素直な気持ちで頭を下げ、レインや他の騎士達も彼女の後に続いた。基本的に傲慢な貴族が平民に対して頭を下げるなど滅多にあることではなく、成り行きで参加しただけのウイズはさらに焦ってしまう。

「いえいえいえいえ!? この結果はたまたまなんで! ほんとのほんとにたまたまなんで! そんなに畏まらないでくれませんかーっ!?」

「いいや、それは出来ません。きつかけはたまたまであつても、あなたが成しえた結果は誉め称えるべき立派なものだ。ゆえに、我らは最大限の礼を以てこの恩に報いましょう。だがその前に、我らは貴族としてのけじめを着けねばならぬゆえ、しばし時間をいただきたい」

おろおろしながら謙遜するウイズに好意的な笑みを送ると、クレア達は再びアイリスの元へと戻り、片膝をついて礼をする。

「申し訳ありません、イリス様。無能な我らは主の期待に応えることが出来ないばかりか、護衛に失敗するという取り返しのない罪を犯してしまいました。こうなれば、いかなる処分をもこの身に受ける所存ゆえ、お心の赴くままにご裁量ください」

クレアを始めとする騎士達は、頭を垂れたままイリスの言葉を待つ。主君の身を犯罪者から守れなかつた護衛など、たとえ高貴な貴族であつても重罰は避けられない。誇りと規律を重んじる彼らにとつては受け入れるべき宿命だつた。

しかし、それを実行すれば、クレアやレインとは二度と会えなくなつてしまう。

「わ、私は……」

かつてない選択を迫られてアイリスは困惑した。小さい頃から一緒にいる二人と別れるなんて絶対にイヤだけど解決法が思いつかない。たとえ自分が許しても国王や他の貴族を納得させるのは難しい。

困り果てたアイリスは、思わず銀時に視線を向ける。

「(こんな時、彼ならどうするのでしょうか……)」

銀時を過大評価しているアイリスは彼の考えを聞きたいと思つた。すると、空気を読んだのか、縛られたDS幼女が彼女の期待に応えるように行動を始める。どうやら、あのガキンチョは貴族みたいな権力者で、あの姉ちゃん達を裁く立場にいるようだが、めつつや仲良しだからやりたくないってところらしい。

「つたく、プライドの高え連中つてのは、どこでもめんどくせえなあ。そりやまあ確かに、護衛を失敗したんなら相応のペナルティーは必要だがよ？ ヒロインが助かったのに、大団円で終わらせねえのはどう考えたって野暮つてもんだろ。この場合、すぱつとリストラしちまうよりも、毎回クツパにやられてクソの役にも立ねえキノピオ共を慈悲深い心で許してやるピーチ姫のように寛大な裁きをした方がファミコン世代にウケるって俺は思うぜ？」

「で、でも！ なにも罰を与えないでお父様達を納得させることが出来るのでしょわか？」

「んなもん、やってみなけりや分からねえよ。だがな、お前に覚悟があるつてんなら、そこにいる姉ちゃん達とがんばるつきやねーだろう？ もし俺がお前の立場だったら、仲間を護るためにすべてを懸けて戦うが、お前ならどうすんだ？」

「っ!? そうです！ 私も一緒に戦わなければいけないんですっ！」

銀時のアドバース(?)でアイリスは気がついた。彼らは自分のワガママを叶えるためにその命を懸けてくれた。ならば、今度は自分自身が彼らの未来を救うために全力を懸ける番だろう。

「それでは、私の下した裁決を言い渡します。あなた達には失敗した分、これまで以上に一生懸命働いてもらいます。お父様が感心するほどの成果を見せていただきたいので、

私と一緒にがんばっていきましょね！」

アイリスの決断はあまりに意外だった。ようするに、『今のままの役職で汚名返上してください』という意味で、ほとんど無罪扱いだ。それを理解したクレア達は、主の優しさに感動しつつもあまりに甘い内容に彼女の未来を危惧してしまう。

「そつ、それだけはいけません!? 我らを特別に扱うようなことをすれば、必ずイリス様にご迷惑をおかけすることになってしまいます!!」

「それは違いますよクレア。元はと言えば、私がワガママを言い出したせいで起きてしまったことなのですから、迷惑だなんてちつとも思っておりません。いいえむしろ、あなた達に余計な負担をかけてしまった私の方こそ、主としての誠意と覚悟を見せる義務があるのです。それにより、こんなことで私は二人と離れたくありません。ですから、これからもずっと私のそばにいてください」

「っ!? ははっ! イリス様のお望みとあらば、我が生涯をかけておそばに仕えさせていただきます!」

「及ばずながらこの私も御身にすべてを捧げます!」

声を震わせたクレアとレインは改めて忠誠を誓う。この短期間の間に急成長した主に喜びと誇らしさを覚えながら。

「(ふう、よかった……。お父様を説得するのは大変だと思えますけど、この選択に後悔



なんて微塵もありません。これもギントキ様がいてくれたおかげですね」

とりあえず安堵しつつアイリスは思う。銀時達の存在があつたればこそ取るべき道が見えた気がする。正しいと思つたことを心のままに実行出来る、彼らのような聖闘士に私はなりたい。

「(だつて私は「ヨロズヤの一員」ですから！ 女神エリスの聖闘士として、その名に恥じぬ人物にならなければいけないのです！)」

遊び人の冗談を真に受けた王女様は、女神様も知らぬ間に万事屋の仲間となつていた。はつきり言つて非常事態である。

ところがどっこい、万事屋サイドに至つては少女の名前すら把握しておらず、彼女の素性が気になつた銀時がここでようやく聞いてみた。

「ところで、お前は何者なんだ？ そこはかとなく、やんごとなきお嬢様のな気配がするんですけど？」

「無礼であるぞ、その少女！ 先ほどからイリス様に向かつて下品な口をききおつて！ 恩ある方の関係者だからと今まで黙認していたが、これ以上の非礼は子供といえども許さんぞ！」

アイリスに許されたクレアは、いつも通りの調子に戻つて生意気なクソガキを叱り飛ばす。主を守る護衛として当然の対応だったが、この場面においては無用な気遣いだつ

た。彼女の主は、このクソガキのことを信頼すべき仲間であると認めていたからだ。

「いいのですよクレア。彼は……げふんげふん！ 彼女は私のお友達になったのですからー！」

「は、はい……。イリス様がそうおっしゃるのでしたら、この少女をご友人として扱います」

どこか納得しない様子ながらも大人しく引き下がる。真剣な主の目を見て並々ならぬ意志を感じ取ったからだ。

その証拠にアイリスは、恩ある銀時達に誠意を見せるため、自らの口から王族であることを明かす。

「勇敢なる女神の戦士よ、ご挨拶が遅れました。私はこの国の第一王女、ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリスと申します。以後は気軽にアイリスとお呼びください」  
「お、お、お……王女様かよおおおおお!?」

銀時の絶叫が辺りに響き渡る。そんな予感はずらとしていたけれども、これってやっぱ將軍のパターンと同じじゃね？

「えっ、ウソ、マジで王女なの？ 外を見たくて城を飛び出たアーリーナのお転婆姫なの？」

「はい、そうです。騙すつもりではありませんでしたが、これまでの非礼をお許しください

い、ギントキ様」

冷や汗をダラダラと垂らす天パ幼女に優雅な動作で謝罪する。その姿から溢れ出る雰囲気はまさしく王女のそれであり、これまでの言動をかえりみた銀時は顔面蒼白になる。

「やいクリス！ これはいつたいたいどーいうことだ!! こんなところで王女様とエンカウン  
トするとか、事前に説明されてねえーぞ?!」

「そんなのあたしが知るわけないでしょ!! そうじゃないかなーとは思ったけど、まさ  
か本人だったなんて幸運の女神ですら気づかないよーっ!!」

「そりゃそーだろうよ!! どーせパッドのエリスだってアクアと同じ駄女神なんだろう!!  
頭がパーでノーパンな駄女神に決まってんだろ!!」

「あらぬ誤解をしないでください!! 私はパンツをはいてますし、頭もパーじゃありま  
せん!! というか、パッドというのは何なのですか!! どこでそれを聞いたのです  
かーっ!!」

銀時と同様に滅茶苦茶焦っているクリスは、思わず素を出してしまう。幸い、小声で  
ケンカしていたので、誰にも疑われることはなかったけれど、銀時の反応が気になった  
アイリスが遠慮がちに聞いてきた。

「あの、ギントキ様? もしかして、私がすぐに素性を明かさなかったことを怒ってい

らっしやるのですか?」

「えっ? いやあーっ! 怒るだなんてとんでもない! 私のよな遊び人が王女様と出会えるなんて恐悦至極なことですよ?」

「もう、そんな堅苦しい言い方はなさらないでください。私とギントキ様は仲間なのですから」

銀時の返事にほっとしたアイリスは人懐っこい笑みを浮かべる。クレア達の件があつたせいで彼のことをさらに心酔してしまった彼女は、いつの間にかドS野郎に懐いてしまったのである。

「やいクリスマス! なんかやたらと王女様がフレンドリーに接してくるけど、これはいったいどーいうことだ!」

「だから、あたしも知らないってば! あなたには妹属性を惹き付けるお兄様属性があるんじゃないのーっ!」

「んなもんねーよ、ブラコン野郎!」

再び顔を寄せ合つた銀髪姉妹は、またしても口論を始める。ストップパーとなるべきウイズが未だにフリーズしてしまっているため、二人の争いは止まらない。

「しかし、これは逆にチャンスだ! この国の王女様が味方をしてくれんなら、報奨金をいただいちゃつても大丈夫なんじゃね?」

「ちよっ!! この後に及んで、まだ諦めてなかったのーっ!!」

「まあ、なるほど! ギントキ様は報奨金のことを気になさっていたのですね?」

「ぎくーっ!!」

いつの間にか近寄っていたアイリスがいきなり会話に乱入してきて仲良くビビッてしまう。聞かれちゃいけない内容ではなかったのは幸いだったが、これはこれで問題がある。そもそも、神器の回収は「駄女神の尻拭いを兼ねたボランティア活動」なので、報奨金という浄財をもらうわけにはいかないのだ。

「それでしたら、今すぐ手配いたしましょう。クレア!」

「はい、直ちに!」

「ちよつと待つてえー、アイリス様!! あたし達はお金なんていりませんからあーっ!!」

「あつ、テメエ!! なに勝手にっ……」

「いいからギンコは黙ってて!!」

あまりのしつこさにイラツときたクリスは、そばにいたウイズの巨乳にクソガキの顔を押し付けた。

「店主さん! 余計なことを言えないように、そのままソイツを押さえ込んで!」

「は、はい! 分かりました!」

「もがむぐううううううっ!!」

豊満な胸に顔を挟まれて銀時は沈黙する。身体をロープで縛られた状態では流石の彼でも抵抗出来ない。最強の侍も圧倒的な乳圧の前に屈服するしかなかった。

「クリス様、いったいどうされたのですか?」

「ああ、いや、その、あの!? ウチの姉がそそをしまして、どうもすみません! 先ほども言ったように、あたし達はお金をいただきませんので、報奨金の方は被害者のために使ってください!」

「えっ? でも、それでいいのですか?」

「うん、いいのいいの! こう見えてもあたし達はお金に困ってませんから! ねえー店主さん?」

「はい、そうです! 本当はものすごく困ってますけど、シゲシゲさんと一緒に一生懸命がんばって、いつかはリッチな生活を実現してみせます!」

クリスから無茶振りされて慌てふためくポンコツリッチー。その際に、たまたま飛び出た人名に対して、聞き覚えのあるアイリスがすぐさま食いついた。

「シゲシゲさん? もしかしてその方はトクガワ・シゲシゲというお名前ではないでしょうか?」

「ええ、そうですけど……アイリス様はシゲシゲさんをご存知なのですか?」

「はい、よく存じております。実を申しますと、私はあのお方を兄のように尊敬してい

るのですよ。ところで、彼とあなたはどのような関係なのでしょうか?」

「はい、私はシゲシゲさんの一番弟子で、商売の手ほどきを受けております」

「まあ!　なんて運命的な巡り会わせなのでしょう!　まさか、ウイズ様がそれほどまでにシゲシゲ様と近いお方だったなんて……」

「ですが、これで納得しました。あなたがシゲシゲ殿の弟子というなら、この度の活躍も当然のことでしょう」

「そうですね。流石はブリーフマスターの一番弟子です!」

「あ、あの、私は商人として弟子入りしたんですけど……」

期せずして同じ知り合いがいることに気づき、こちらの話の説得力も自然に上昇する。ブリーフマスター茂茂は、女神エリスを影から助けるナイスな仕事をしていた。

「ふう〜っ!　なんとかこれでギンコの野望は食い止められたね……」

思惑通りに事が進んでクリスは安堵の息をつく。その反対に、ウイズの乳圧で息が出来ない銀時はピクピクと痙攣しており、地味に気づいた地味なレインが地味に知らせてきた。

「あ、あの、先ほどからその子が動かなくなっているのですが大丈夫なのでしょうか?」

「えっ?　あっ!?　きゃあーっ!?　ギントキさああああああんっ!?!」

ぐったりしている銀時を抱いて半泣きのウイズが叫ぶ。子供の身体でばふばふするのは、いろんな意味で危険だった……。



銀時が意識を取り戻した後、万事屋とアイリス一行は商業地域へと戻って来ていた。銀時達との別れを惜しんだアイリスが、せめて自費でお礼をさせてほしいと懇願してきたからだ。もちろん、大金を貰い損ねて不貞腐れた天パ幼女に情けをかけたわけではなく、純粹な気持ちで一緒にいたいと思ったのだ。

「先を急いでおられるのに、ご無理を言つてすみません」

「いえいえ、とんでもありません！ アイリス様にお礼をしていただけるなんて光栄なことですから！」

謝られたウイズは慌てて微笑み返す。銀時達の幼女化が人前で解けてしまう危険性はあるが、王女様のお願いとあつては無闇に断れない。

「そ、そうです！ この子達の服と靴を買いに行こうと思つてましたし、丁度良かったと思えますよ！」

「そういえば、二人共おかしな格好をしているな」



「あつ、はい。お恥ずかしい話ですけど、旅先だということのに着替えをすべて汚してしまいまして、とりあえず宿屋にあった物をお借りしているのです」

「ああなるほど、そういうことか。やんちゃな子供に振り回されてウイズ殿も大変だな」この状況に慣れてきたウイズは饒舌にウソをつく。流石はリッチー、ポンコツだけども魔性の女である。

そんな彼女に騙されたレインが彼女の望みを叶えるべく連れてきた場所は、金持ち用の子供服を取り扱う高級店だった。

中に入って少女用の服が並んだ売場を見ると、ロリコンが喜びそうなフリフリしたもののばっかりで、イヤな未来を想像した銀時は戦慄する。

「おい！ まさか、俺にもアレを着ろって言うんじやねーだろうな？」

「成り行き上、仕方がないでしょ？ それに、今ならすぐく似合うよ？（笑）」

「適当なことほざきながら『かつこ笑い』してんじやねーよ!! 俺はぜってえゴスロリ少女のコスプレなんざしねーからな!?! この銀髪を上手く活かして、キルアっぽい格好のイカしたシヨタになるんだーっ!」

女装したくない銀時はささやかな抵抗を試みる。しかし、この手のイベントが大好きなお姉様方の熱意には敵わず、強引にゴスロリ化されてしまった。

「ふふっ！ とつてもお似合いですよギントキ様!」

「本当にクリスさんと双子の姉妹みたいですよ！」

「だつてさ、お・姉・様♪」

「お前ら後でぜつてえ泣かす!! (泣)」

現在進行形で泣かされている銀時は、あからさまに復讐を誓う。とはいえ、今は生意気な幼女が強がっているようにしか見えず、苦笑したレインは気にすることなく話を進める。

「それでは次に下着を選びましょう」

「せっかくだから、あたしとおそろいのパンツにしようか？」

「それだけは絶対止めてえーっ!!」そこはせめて、ちびっ子用のもっさりブリーフで勘弁してよ、お願いだからっ!!」

男のプライドを踏みにじられた銀時は本格的に泣き出した。こちとら、王女様のピンチを救ったヒーローなのに、どうしてこうなった!?

「(ええい、状況を利用して好き勝手やりやがって! そっちがその気つつーんなら、こつちだつてやってやんぞ!!) こうなったら、お前らの持ち金全部、綺麗サツパリ使い尽くしてくれるわっ!」

とうとうDSが怒り出して、せこい逆襲がこつそりと計画される。

そして、その企みは高級な靴屋から出てきたところで実行された。全身見事な口リッ

子と化した銀時が、可愛い容姿とは真逆なオッサン臭い要求を言い出したのだ。

「よし、勝負服も買ったことだし、今度はカジノでギャンブルすつぞー！」

「いきなりナニ言つてんのーっ!？」

王族相手に絶対しない提案を聞いてクリス達はビックリする。この遊び人は、王様様のポケットマネーでギャンブルするつもりなのか。

「申し訳ありませんギントキ様。残念ながらこの国にはカジノのような施設が無くて、賭事を楽しむには隣国のエルロードに行かなければなりません」

「アイリス様も真面目に答えなくていいですから!？」　ていうか、この状況でギャンブルとか常識的にありえないよね!？」　王女様と一緒にいるのに夢の無いこと言わないでよ!？」

「夢が無えのはお前だクリス!　そこにカジノがあるならば、すべてを賭けるが男の華だ!　それが男のドリームなんだ!」

「ゴスロリ幼女が男を語るなっ!？」

クリスのツツコミ通り、ゴスロリ幼女の姿で男の生き様を語られても説得力は微塵も無い。そもそも、ここにはカジノが無いので彼の主張も意味が無い。

それだったら、普通に遊んでやるまでだ。王女様もいることだし、滅多に出来ない庶民派ライフを体験させてやるとすつか。

「まったく、しゃーねえなあ！ こうなったら、カジノ以外のイケナイ遊びを王女様に教えてやるぜ！」

「えっ、イケナイ遊びをするのですかーっ!? それはとても楽しみですよ！」

「ちよっ、アイリス様の食いつき方が思った以上に良いんですけど!？」

「おい貴様！ これ以上、アイリス様におかしなことを吹き込むなっ!？」

再び暴走を始めた遊び人に好奇心旺盛な王女様が飛びつき、お目付け役のクリスとクレアは新たなストレスを受けるのだった。

楽しく遊び回っている間に時間が過ぎて、いよいよお別れの時がやって来た。クリスの推測では、ほとんど猶予が無いようなので、これ以上一緒にいるのはもう限界だった。「せっかく仲良くなれたのにとても残念です……」

銀時と手を繋いだアイリスは悲しそうな顔をする。それほどまでに、この奇妙な男と一緒にいる時間が心地よかったのだ。

護衛の騎士達によって人払いされた公園で、クレアやレインと共に勇者の帰還を見送る。王女として当然の仕事だったが、寂しい気持ちは隠せなかった。

「顔を上げろアイリス。ダチが家に帰る時は笑顔で見送るもんだぜ。それが再会を約束する一番の証になる」

「は、はいっ！ 私は笑顔でみなさんを見送りたいと思います！ また一緒にお友達とイケナイ遊びをしたいから！」

決して後ろ向きにならない銀時らしいセリフにアイリスも笑顔を見せる。そこには確かに身分を超えた美しい友情があり、彼女達を静かに見守っていた大人達は心を震わせる。事情を知っているクリスとウイズだけは、遊び人と王女様という滅茶苦茶なコンビに苦笑せざるを得ないのだが……。

「ふう……。一時はどうなることかと思っただけど、何とか無事に終われそうだね」  
クエストクリアを確信したクリスは、感動的(?)な光景を眺めながらつい気持ちを緩めてしまう。

だが、それは早過ぎた。ノルンが言っていた『油断するとえらい目に遭っちゃう』という言葉はまだ終わっていないかったのだ。なんと、この最悪なタイミングで幼女化が解けてしまったのである。

「あっ」

ボシユンという音と同時に銀時とクリスの身体が元通りになってしまう。こうなることを考慮していたクリスは、余裕のある服を着ていたおかげでピチピチになるだけで済んだものの、銀時のアダルトボディには流石に耐えられない。ケンシロウばりの勢いでゴスロリ衣装を突き破り、もっさりブリーフ一丁のアブナイ格好になってしまった。

「へ……変態だあああああああつ!!」

アイリスと手を繋いだ半裸野郎を見てクレアとレインが絶叫する。かろうじて残った男児用ブリーフが不幸中の幸いだったが、この状況はかなりまずい。事情を知っているアイリスもいきなりパンツを見せられたせいで悲鳴を上げてしまったため、クレア達はあらぬ勘違いをしてしまう。

「きゃあああああああつ!!」

「アツ、アイリス様あああああつ!!」

「お、おのれえーつ!! 貴様達も我らを騙していたのかあああああつ!!」

「えっ!? ちよつ、待って!? それは誤解……」

「問答無用つ!! アイリス様に仇なす者は誰であろうと切り捨てるつ!!」

怒りで我を忘れたクレアが愛剣を振りかざして銀時に切りかかる。こうなれば戦って黙らせるしかない。アイリスを巻き込まないように素早くそばから離れると、洞爺湖を装備してクレアを迎え打つ。

「何なんだよこの展開!! トランクス派の銀さんが、なんでブリーフ一丁で戦わなけりやならないわけっ!?!」

「黙れ変態つ!! アイリス様の友情を踏みにじりおつてえーつ!! 貴様のような不埒者は絶対に許さんぞおおおおおつ!!」

「つたく、宝塚の姉ちゃんは王女様を愛し過ぎだろ！ キャラ的にも九兵衛と被りまくってやがるしよお！ もしかして、こいつにもソツチの気があるんじゃないかね？」

軽口を言いながらクレアの猛攻を余裕であしらう。王女の護衛だけに彼女の實力は高かったが、今回はどう見ても相手が悪かった。化け物共とやりあっていた銀時から見れば新八に毛が生えた程度でしかなく、圧倒的な力の差を見せつけられてしまう。

「早く服を着てえから、さっさと終わらせてもらうぜ？」

「なっ、なにっ!？」

一瞬だけ向けられた白夜叉の眼光に気を吞まれた瞬間、勝敗は決していた。クレアが大振りをした隙に剣の根本めがけて洞爺湖を振り抜き、彼女の手から武器を弾く。その手際はあまりにも鮮やかで、やられたクレア自身も完敗したことを認めるしなかった。

「くっ、バカなっ!?! この私が、木刀を使う悪党ごときに手も足も出ないとはっ!!」

「こつちはお前のせいで棒も玉も出てるけどな！」

「つて、ツツコミはいいから、さっさと服を着てよっ!？」

手で顔を覆ったクリスは、股間の物が出てしまっている銀時に文句を言う。ちなみに、ちよっぴりだけ興味があつたアイリスは、間一髪のところでは、レインに目を塞がれて汚物を見ずに済んだ。

「そ、それにしても、ギントキさんつてもものすごく強かったですね……」

真つ赤になったウイズは、いそいそと服を着ている半裸野郎から目を背けてつぶやく。彼女が抱いた感想はこの場にいるほとんどの者が感じたことで、クレアを援護しようとしていたモブ騎士達は完全に気圧されて近づくことさえ出来なかった。

ただ一人、アイリスだけは彼の強さに驚くことなく受け入れていたが。

「流石です、ギントキ様！ やはり、女神の聖闘士は伊達じゃありませんね！」

「ア、アイリス様？」

無邪気に喜ぶアイリスは、異常事態を起こした銀時を責めるどころか誉めだした。そんな主の行動に、事情を知らないクレア達はおもいきり困惑する。

「ごめんなさいクレア。彼らが少女にされたことは最初から知っていました。犯罪者の攻撃から私とウイズ様をかばうために盾となってくれたのです」

「そ、そうだったのですか……。ならば、なぜその事を我らに隠しておられたのですか？」

「それは……彼らの意志を尊重したからです。あの時、彼らはこう言いました。敬虔なエリス教徒として当然のことをしたまだから、自分達が被害に遭っても迷惑はかけたくない。そう彼らが望まれたから、私は事実を黙っていました。それが、命の恩人に対する礼儀だと思ったからです」

万事屋の仲間であると自負しているアイリスは、ギントキ達のために考えていた作り



話を堂々と語ってみせた。真実も混ざっているそのウソはかなりの説得力があり、クレア達も簡単に納得してしまう。

「申し訳ないギントキ殿！ すれ違いがあつたとはいえ、アイリス様の恩人に刃を向けてしまったことを心から謝罪する！」

「なあに、気にするこたあねえよ。あんなもん、俺にとつちや日常茶飯事だからな」

「な、なるほど……常に激しい訓練を重ねているからあれほど強くなれたわけか。私も見習わなければならんな」

「いや、おもいつきり勘違いしてるんだけど。常に激しい暴力に晒されてるだけなんだけど」

神楽やお妙を思い浮かべつつ反論するものの、銀時の強さに感銘を受けてしまったクレアの耳には届かなかつた。

ただし、彼女の勘違いも結果オーライと言ったところだ。話が余計にこじれなかったのも、アイリスが機転を利かせてくれたおかげである。いつの間にか銀時の隣に来ていた王女様は嬉しそうに自分の成果を報告する。

「こんな感じでよろしいですか、ギントキ様？」

「ああ、上出来だぜアイリス。流石は俺のダチンコだ」

そう言つてアイリスの頭に右手を置くと、ポンポンと優しく叩く。その感触がこそば

ゆくて、アイリスは気持ち良さそうに笑みを浮かべた。

「さあて、それじゃあ今度こそ本当のサヨナラだ」

「は、はい……」

おかしな決闘イベントのせいで中断していたが、彼らとのお別れはどうしても避けられない。それでも、アイリスは笑顔を保ち続ける。

「ギントキ様。この度の件で、私は己の未熟さを痛感させられました。けれども、これからは違います。さらに精進して聖闘士の名に恥じない王女になってみせます。だって私は、あなたと同じ「ヨロズヤ」の一員ですから！」

最後の最後でアイリスは爆弾発言をぶちかます。それを聞いたクリスだけは頭を抱えてしまうものの、彼女の予想を遙かに超えて王女様は成長していく。万事屋の仲間として、銀時達と肩を並べられるように……。



神器回収イベントが終了した翌日。ギルドで昼食を取っている銀時の元にクリスがやって来た。

「やあギントキ！ 元氣無いみたいだけど、昨日の疲れが残ってる？」

「ああそーだよ。棒と玉を消された挙げ句に、500万を貰い損ねるわ、ウイズの巨乳で窒息しかけるわ、思い返すだけでも疲れが溜まってきちゃうよ」

「ふうーん、そう？　可愛い妹系美少女に懐かれて、まんざらでもない感じだった気がするんだけどなー？」

「けっ！　あんなもん、協力してくれた札に、ちよいとサービスしたただけだー！」

ドSキャラに反して子供に気を使っていた銀時を楽しそうにからかう。もちろん、彼女の口調には好意が含まれており、それを察したドS野郎も仏頂面を浮かべるだけで文句を言おうとはしない。その代わりに、周りの奴等が騒ぎ出したが。

「なに、可愛い妹系美少女に懐かれただど!?　そこんところをもっと詳しくー！」

「いったいどこに食いついてんだ、変態ロリコンニート野郎!？」

「それより俺は『ウイズの巨乳』ってくだりがスツゲー気になるんだけど！　まさか彼女のデカ乳で『ばふばふ』してもらったの!？」

「お前も黙れやスケベ野郎！　あいつの巨乳は凶器なんだよ！　あれはもはや拷問器具だよー！」

女に飢えた男共は、自分が気になる点だけに強い興味を示す。もちろん、女性陣も黙ってはおれず、マダオ達に続いて口撃してきた。

「まったく、あなたはナニをしに行ったのですか!?　ヒロインであるこの私を置いて

いったクセに、巨乳のウイズを連れていったばかりか、私とキヤラが丸被りな妹系美少女を現地でゲットしていたなんて、節操が無いにも程があります!」

「はあ? お前のいったいどこら辺が妹系美少女なんだよ? お前なんざ、どうやっても『頭のおかしい爆裂女』としか形容出来やしねーよ」

「な、なにおう?! 私のどこが頭のおかしい爆裂女のですかっ?!」

「くうう〜っ! よもやクリスに出し抜かれるだけでなく、ウイズにまで裏切られてしまうとは?! 我が主の寵愛だけでは飽きたらず、私のアイデンティティーとも言える巨乳キヤラという地位までも脅かそうというのかーっ?!」

「心配すんなダクネス。お前は無様なドM要員だから。カッチカチの筋肉要員だから。女としての魅力なんざ元からオマケだったんだよ」

「くふうくん!? ドMな筋肉女子と罵倒するばかりか、女としての魅力すらオマケ扱いしてくるなんて!? そこまでされたら私も泣くぞ?!」

個人的な理由で絡んで来たためぐみんとダクネスをすかさず撃退する。口から生まれてきたと揶揄されるDS野郎に口ゲンカで挑むなど無謀でしかなかった。

しかし、まだ彼女がいる。水の女神アクア様が……。

「プークスクス! 意気揚々と宝探しに行つたクセに収穫ゼロだった奴がなに偉そうなこと言つてr「うるせー駄女神! こうなったのも全部テメエのせいだろがーっ!」

「ええーっ!! なんのことだか、まったく心当たりが無いんですけど!? 私の扱いだけすこぶる理不尽なんですけどーっ!!」

やっぱり、知力の低い駄女神では相手にならなかった。

結局、いつものように敗北したアクアは、ワーワー泣きながらテーブルに顔を伏せる。そんな彼女を哀れに思いつつ、ダクネスは気になったことを親友に尋ねた。

「それはそうと、なにか用事でもあるのかクリス? なにやら見慣れぬ物を持っているようだが」

「おっ、いいところに気がついたね。実はギントキに渡す報酬を持って来たんだけど、これがその約束していた『お宝』なんだ」

「えっ、お宝っ!?!」

その単語を聞いた途端、テーブルにつつぶしていたアクアが勢い良く反応する。もちろん、他のメンツも興味を抱き、クリスが持っているお宝に視線を集める。それは、綺麗な布に入れられた細長い物体だった。

彼女がそれを手に入れた経緯は、神器の回収を始める前まで遡る。その時エリスは、天界で仕事をしながら考え込んでいた。銀時に渡すお宝を何にすべきか迷っていたのである。

『ど、どうしましょう!? 改めて考えたら、私には男性にプレゼントを送った経験が無いじゃないですかー?!』

ちよっぴり痛い事実に気づいて思わず慌ててしまう。よくよく考えれば仕事の報酬でしかないのだが、兄のように慕うべき英雄に渡すプレゼントをいい加減なものにはしたくない。

とはいうものの、自分だけでは答えが出ないし、友達や天使達に聞くのは何だか恥ずかしい。だからといって、運命を見通すノルンに頼るのは流石にやり過ぎだし、いったいどうすれば……。

『あつ、そうだ! 結婚経験があつてギントキさんのことをよく知っているカグヤ先輩なら最適です!』

起死回生の妙案を思いついたエリスは、後の仕事を分霊に任せてカグヤの元へと向かった。

現在彼女は天界軍の幹部を勤めており、来るべきハルマゲドンに備えるフリをしながら毎日遊びまくっていた。現に今も、仕事をサボって私室でファミコンをやっている。

『あ、あの〜。お久しぶりですカグヤ先輩』

『おいおいエリスちゃん。こんな真つ昼間に堂々と出歩いちゃって、仕事をサボるのは感心しないアルな!』

『堂々とサボってるあなたに言われたくはありません!』

再会して早々にイラツとさせられたものの、時間が惜しいので早速質問する。こんなぶっ飛んだ先輩でも可愛い後輩の悩みには親身になってくれるはず……。

『ふむふむなるほど。つまり、ドMに目覚めたエリスちゃんは、ドSの銀ちゃんに惚れちゃったわけアルな?』

『どうしてそうなるのですかー?! 私にはドMじゃありませんし、これはただ女神として、彼との約束を果たそうとしているだけです!』

『はいはい、ツンデレ乙アルね。やっぱりエリスちゃんは「本心を隠している間に主人公を奪われるサブヒロイン」タイプだし、このプレゼント選びは重大な仕事になるネ……』

『勝手に私をサブヒロインにしないでください!?!』

真つ赤になつて抗議するエリスのことなど物ともせず、マイペースなカグヤは質問の答えを思索する。

『銀ちゃんが絶対喜ぶ、すべらなくいブツと言え! ここは無難に地球で売ってる工口本なんかどうアルか? 銀ちゃんはどスケベだし、そっちの世界じゃ結野アナのぱんつ並に入手困難なブツだから、涙とかヨダレとか○○○○とかいろいろな汁を出しまくつて狂喜すると思うアル』

『いや、無難どころか難だらけなんですけど! もっと、英雄にふさわしい贈り物はない

んですか!？」

いざ答えを聞いてみたらクソの役にもたない提案だったため、すぐさま却下して別のアイディアを求める。そうして再び考え始めたカグヤであったが、何となく視線を向けた先度とある物体を見つけた。

『おつ、これは銀ちゃんに最適なんじゃないアルか!』

声を弾ませながら歩き出したカグヤは、部屋の角でゴミのように放置されていた棒状の物体を手を取った。

『カグヤ先輩、それはいったい……』

『じゃじゃーん! これは私が宇宙をさまよってガチンコバトルを繰り広げていた時にぶっ倒した奴がドロップしたから戦利品としてゲットしといた超堅い木刀ネ!』

『それって、ただ盗んだだけじゃないですかー!? っていうか、その木刀も普通の木刀ですよネ!』

『ちつちつちつ! こいつをそんじよそいらの木刀と同じに見てもらっては困るネ!

何を隠そう、この木刀は「妖刀・星砕」と呼ばれる名刀アルよ! 価値が気になって【なんであつても鑑定団】で見てもらったから間違いないネ!』

『やっつてることが女神として間違っているんですけど!?!』

確かに、カグヤの行動は誉められたものではないのだが、この木刀に関してはマジで



誉め称えるべきお宝だった。

これは本物の妖刀・星砕であり、辺境の星にある金剛樹という樹齢一万年の大木から作り出された最強クラスの名刀だ。木製でありながら真剣を遙かに凌ぐ硬度を持ち、達人が扱えば神器に匹敵する威力を発揮する非常に異質な宝具である。

『これを銀ちゃんにあげるといいネ。前に地獄で試し振りした時に悪魔共を1000匹ぶっ飛ばしても壊れなかったほど頑丈だから、きつと魔王もボツコボコに出来るはずだよ』

『なんかさらつととんでもない話を暴露しちやつてるんですけど!? それほどまでに貴重な物をいただいてもいいのですか?』

『まったく全然構わないアル。使い道は無いわ置き場にも困るわけで、はつきり言つて邪魔だったネ』

『貴重な名刀を修学旅行中の勢いで買った木刀みたいに扱わないでください……』

どこまでも滅茶苦茶なカグヤに付き合わされて妙な疲労感に襲われる。それでも、努力は報われてエリスはすんごいお宝をゲットすることが出来た。

とまあ、奇妙な縁によつて異世界にやつて来たお宝が銀時達の目の前にあり、クリスは適当にでつち上げた作り話で説明する。

「つてなわけで、このお宝は神器や魔剣に勝るとも劣らないスペシャルな一品なんだ!」  
「ふうくん、妖刀・星砕ねえ。なんかどつかで聞いた気がするご立派な名前だけど、結局ただの木刀だよな?」

「ち、違うってば!」 見た目は普通の木刀だけど、これは世界で一つしかないとっても貴重な木刀なんだよ!」

「うん、だから木刀だよな? 今自分で言ったよな?」

あくまでコレをお宝だと認めたくない銀時は幼稚な難癖をつけてくる。

さらに、おこぼれを狙っていたアクアまでネチネチと文句を言う。

「はあく、まつたくもつてがっかりだわ。お宝と言うから期待したら、なにこのへボい棒っ切れ? こんな売つても1000エリスにすらならないじゃない。まあ、貧乏臭い銀時には笑えるくらいお似合いですけど!」

「ああ!?! この俺が貧乏臭えってんなら、ここにいる貧乏神をぶつ飛ばせば全部解決すんよなあーっ!?!」

「うきやーっ!?! 私は貧乏神じゃないんですけどおおおおおっ!?!」

わざわざDSの怒りを買ったアクアはこめかみをグリグリされて撃沈する。それでも憤りは収まらずに、きっかけを作ったクリスにまで八つ当たりを始めた。

「とにかく、俺はこんなのいらねー! ここはチェンジを要求する!」

「キャバクラじゃあるまいし無茶なこと言うんじゃねーよ!」

長谷川のツツコミにカズマが頷き、めぐみんとダクネスも呆れた表情を浮かべる。

そのように微妙な空気が漂う中、クリスは顔を俯かせていた。銀時の態度に気分を害したわけではなく、むしろ自分の行為に対して反省しているところだった。

「(改めて考えれば、ギントキさんに怒られても仕方ないですよね……。私が望んだお礼なのに、貰い物だけで済まそうとしたことがそもそも失礼だったのですから)」

心の隅で気にかけていたことを再認識したクリスはお詫びの方法を考える。この気持ちに彼に伝えるには何をすればいいのだろうか……。

「よし決めたっ! 勇気を出すのよエリス!」

意を決したクリスは別のお宝をあげることにした。みんなの前でソレをあげるのとはとても恥ずかしいけど、こうなったらやるしかない。

「もう、しょーがないなあー。そんなに納得いかないんだったら、星砕に加えてもう一つとびつきりのお宝をあげるよ!」

「おつ、マジで? 催促しちやったみたいでなんだか悪いなあー!」

「あからさまに要求してたと思うけど、まあいいや! 特別貴重なお宝を今から進呈してあげよう!」

頬を赤く染めたクリスは、凶々しい発言に苦笑しながら遊び人のそばへと歩いてい



## 第20訓 魔王の幹部が近所に引つ越して来てもこつちが話しかけるまで動かないからとりあえず放置

エリスの手伝いをした銀時が、妖刀・星砕とクリスのキス（ほっぺ）というお宝を得てから数日後。以前行ったキャベツ狩りの報酬がようやく支払われ始めた。先に順番が来ためぐみんとダクネスは、ゲットしたばかりの収入を使つてすでに装備を新調しており、早速仲間達に見せびらかす。

「ハア……ハア……！ 見れば見るほど素晴らしい杖ですね！ 芸術品のごとき色艶と溢れ出るほどの魔力といい、マナタイト製でしか味わえない特別感がたまりません！ ハア……ハア……！」

「けつ、マナタイト製の杖をまな板みてえな胸に擦りつけて盛つてんじやねーよロリビッチ」

イラツときた銀時は、抱きかかえた杖に頬摺りしているめぐみに悪態をつく。朝からずつとこの調子で短気な彼はうんざりしていた。

さらにもう一人、鎧をグレードアップしたダクネスもイラつくドSに絡んでくる。

「我が主、私の鎧も見てくれないか？ 想定以上に報酬が良かったからアダマタイト

の量を増やして強化してもらったのだ！」

「ああ？ んなもん大して変わってねえじゃん。俺に自慢してえんなら黄金聖衣（ゴールドクロス）を持って来いや」

「黄金の鎧なんて成金趣味のボンボン貴族ですら持っていないぞ！」

予想外な感想に流石のDMもつつこんでしまう。ジャンプ好きの遊び人に立派な鎧を見せても星矢ネタが出て来るだけだった。というか、今まさに報酬を手に入れようとしている彼の頭には金の文字しかなかった。

「そんなことより金じゃ金！ なんせ一人で300以上は狩ったからなあ！ とうとう俺も勝ち組の仲間入りじゃあーっ！」

ギルドの受付カウンターで報酬を待っている銀時は、ギャンブルで小金持ちになったチンピラのように高笑いする。共闘したダクネスにいくらか分けたとはいえ、それでも十分ぼろ儲けしているはずだ。その大金を見せびらかせてアクアを悔しがらせてやろう。なんて主人公にあるまじきことを思っていたのが悪かったのか、ルナから手渡された報酬は予想よりも遙かに少ない30万エリスだった。

「え、なにコレ。なんか一桁ほどゼロが少ないんだけど、頭の悪い職員が計算間違いでんじやね？」

「いいえ、計算間違いないです。残念ながらギントキさんはこの度のクエストで

違反行為をしてみましたので、その分の罰金を報酬から差し引かせていただきました」  
「はああああああ!?」 ちよつと乳がデケエからつて調子乗ってんじやねーぞテメエ!?  
俺がいったいどんな違反をしてたってんだよコノヤローツ!」

「いや、滅茶苦茶してたじやありませんか!?」 女性の身体を武器として使った挙げ句に、他の冒険者達まで攻撃するなんて前代未聞の重大事件ですからね!? 本来なら警察沙汰になるほどの案件ですけど、シゲシゲさんが被害者の方々を説得してくれたおかげで特別に治療費と罰金だけで済んだのですから素直に納得してください!」

肩を掴まれて激しく揺さぶられたルナは、大きい胸をブルブルと揺らしながら必死に反論する。彼女の言い分は完璧なまでに正論であり、駄々をこねる銀時も黙って引き下がるしかない。

「クソオオオオオオツ!」 ギャグ寄りなファンタジー世界のクセにまともな法律作りやがって! 自由にダンスを調べられるドラクエ世界を見習いやがれ!」

「まあまあ、そんなに怒るなつて。一日で30万も稼げりや十分立派じゃねーか」  
「黙れマダオ!」 狩ったヤツが全部レタスで、たつたの8000エリスしか稼げなかつたバイト野郎にエリート正社員である俺の気持ちが分かつてたまるか!」

「ちよ!?!」 せつかくフオローしてやったのにそこまで言わなくてもいいんじゃないの!?!  
正社員ならバイトの気持ちを察してくれてもいいんじゃないの!?!」

大人らしいマダオの気遣いも傷心のドSには届かなかった。せっかくの高額収入が10分の1になってしまったのだから仕方ない。その反対に、大差をつけられて悔しがっていたアクアは喜んでいられるけれど。

「ブークスクス！ 日頃の行いが悪いヤツはやっぱ報いを受けるのね！ その点私は清く正しい女神ですから、まったく心配いらないわ！」

「ああん!? 酔っぱらう度にドブ水みてえなゲロ吐いてる駄女神のいったいどこが清く正しいっつーんだよ!?!」

「ほーっほっほっほっ！ 今はなんと言われようと負け犬の遠吠えにしか聞こえませんかわ〜?」

勝ち誇ったように高笑いしたアクアは、怒れるドSを見下しながら手続きを行う。果たして彼女はいくらほど稼いでいるのか。ルナが持ってきた報酬を確認してみると、そこには3万エリスしかなかった。

「なんでこれっぽちなのよ!? お尻を何度も叩かれたけど20以上は捕まえたわよ!?!」

「そ、それがその、申し上げ難いのですが、アクアさんの捕まえた物はほとんどがレタスです……」

「はあああああああ!? ちょっと乳がデカイからって調子乗ってんじゃないわよアンタ



「!? 私がお尻をスパークキングしてまで収穫したキャベツになんでレタスが混じってんのよ!?!」

「そんなことを言われましても、私は関係ないんですけど?!?!」

可哀想なルナは銀時に続いてアクアにまで絡まれてしまう。胸倉を掴まれて巨乳をブルンブルンと揺さぶられる光景は嬉しいけれど、ウチの仲間が面倒かけて本当にごめんなさい。この面子の中で一番の勝ち組となったカズマは、哀れな敗北者達の迷惑行為を心の中で謝った。

すると、余裕のある彼から金の気配を感じたのか、ルナに八つ当たりしていたアクアがニコニコしながら寄ってきた。

「そう言えば、まだカズマさんの報酬を聞いていないんですけど、おいくら万円だったのかしら?」

「200万ちよい」

「!!!にひゃくーっ?!?!」

想像以上の高額に仲間達が絶句する。幸運の高いカズマはノルンの援護も味方につけて大儲けしていたのだ。

「よし、今夜はカズマの奢りでパーっとパーティしようぜみんな!」

「!!!おーっ!!!」

「つて、勝手に決めんじやねーよ天パ!! この金の使い道はもうすでに決まってるんだ!  
! たとえ土下座で頼まれたつて、びた一文渡しはしねえーっ!」

「理不尽な要求を即座に拒否する。前に大金を手に入れた時もウイズを紹介すると誘惑されて大きな損失を被ったからだ。良識的でオツパイのデカイ彼女と仲良くなれたのは確かに嬉しいイベントだったが、飢えたハイエナみたいな奴等に何度も奢らされてたまるか。悪夢を繰り返したくないカズマは断固として拒否する構えを見せる。

それでも、のつびきならない事情があるアクアはしつこく絡んでくる。

「カズマさあああああん!! そんなこと言わないでこの私を助けてよおーっ!! 大金が入るつて見込んで持ち金全部使っちゃつて、ここの酒場にも10万近いツケがあるのに、報酬が足らなくて大ピンチなんですけどーっ!!」

「んなもん知るかっ!! 女神のクセになんつー刹那的な生き方してんだ! 俺は無計画なお前と違って地に足をつけて生きていくんだ! そのために金を貯めて拠点をゲツトするんだよ!」

半泣きですがりついてくるアクアを引き剥がしつつ金の使い道を説明する。馬小屋生活を強いられている彼にとつては至極まっとうな望みと言えるが、根性がひねくれ曲がつている銀時はいやらしい視点で理解する。

「お前の気持ちはよく分かるぜ。オープンな馬小屋じゃあプライバシーとか微塵も

無えから、自由にオ○ニーしまくれる自分の部屋が欲しいんだろ？」

「おいしいおいしいっ!? あんたのセリフがオープン過ぎてプライバシーを侵害してるよ!!」

凶星を突かれたカズマさんは必死になってつつこむが時すでに遅し。意味を理解した女子達の視線がゴミを見るような物になり、恥ずかしくなったカズマと長谷川は真っ赤になって狼狽える。

「お、俺たちや別にいかがわしいことなんてしてねえよなあー、カズマ君!!」

「お、おう、そうだ! アレはほら、めぐみんの爆裂魔法やダクネスのDMと同じようなもんだろう!!」

「な、なんだとうっ!? 破廉恥極まるアノ行為と崇高なる爆裂魔法を一緒にしないでもらおうかつ!!」

「くふうんっ! 私の性癖とアノ行為が同じだなんて、なんとという侮辱発言!!」 だがしかし、心で怒りを感じながらも身体は歓喜に震えているっ!!」

カズマ達の言い訳に対してめぐみん達も反論する。騒ぎの発端を作った銀時は、杖に抱きついてハアハアしたりエロい妄想に耽ってハアハアしてる奴等も大して変わらねえと思っただが。

「ちよーつと待って! あんた達の変態行動なんてどーだっというから、今は私を助け

なさいよ！ どうしてもつて言うのなら、私の脱ぎたてばんつだつてカズマさんにあげるからあーっ!？」

「そんなもんいらねえし、そもそもばんつはいてねえだろ!? つーか、もう周りの視線が痛くてたまらないんだけど、誤解を招くセリフを言うのはお願いだからやめてくれっ!？」

まるで痴漢の冤罪をかけられた心境になったカズマは、アクアの執念に根負けしてお金を貸すハメになった。

《あちやう。やつぱ、アクアが近くにいるとトラブルだらけになっちゃうかー。でもまあ、ボク的に楽しいからどうでもいっつか!》

「俺は全然楽しくねえーし、どうでもよくもねえーっ!!」

アクアだけでもメンドイのに、ノルンからもからかわれてカズマのストレスメーターは鰻登りに増えていく。マジ頼むからこういう時に仕事をしろよ俺の幸運っ!

カズマの尊い犠牲によって騒ぎをおさめた一行は、今日の仕事を探すために掲示板へと足を運ぶ。なぜか依頼が激減しているものの、新調した杖を試したいめぐみんと一文無しでお金が欲しいアクアがやたらと張り切っており、あえて危険なクエストに挑もうと言いつ出す。

「こうなったら一番高額なクエストを選んで、てっとり早く稼ぐわよ!」

「ならば、これに決まりでしょう! 最近山に出没するブラックファンクと呼ばれる巨大熊を……」

「バツキヤロウツ!! 熊はすつげー危険だつて前にもがつつり説明しただろ!! 安易な気持ちでたつた一つしかねえ命を粗末にしゃがつて、殺すぞテムエーツ!!」

「そつちの方こそ命を大事にしてくださいよ!」

熊という単語に反応した銀時は即座に拒否する。二次でも三次でも、なにかと問題になることが多い熊を警戒してか頑ななまでに関わることを避けていた。

そもそも、レベルの低いこのパーティでは危険すぎる標的だ。銀時が拒否してくれたことにホツとしたカズマは、頭のおかしい奴等の代わりにもつと無難なクエストを探し出そうとする。しかし……

「何だよこれ!? 高難易度のクエストしか残つてねーぞ!」

おかしい状況に驚いて思わず叫んでしまう。無難どころか自分達の手に残るクエストしかないではないか。突然起こつた異常事態にカズマが取り乱す中、たまたま事情を聞いていた長谷川が説明しだした。

「あつ、そういやあ、魔王の幹部らしき者が近くの小城に住み着いたから、そいつの影響で弱いモンスターが隠れちまつてるとかルナさんが言つてたなあ」

「えっ、魔王の幹部!?　なんでそんな大物が始めの町に来てんだよ!」

恐るべき情報にカズマは驚愕する。ゲームだったら中盤辺りになるまで出てこない幹部キャラが序盤の街に来るなんて、どう考えても無理ゲーじゃね?

「もうイヤだこの世界……」

あまりにクソゲーな展開を嘆かずにはられない。しかし、彼とは反対に銀時とアクアはニヤリと笑う。

「フッフッフ……結界の中にいる幹部様が自らノコノコ来てくれるたあ実に好都合だぜ」

「ええそうね、実に好都合だわ」

「えっ?　ちよつ、待って?　好都合って、まさか倒しに行く気じゃないよね?」

「そのまさかに決まってんだろ!　億単位のお宝を見逃すなんて有り得ねえ!」

「そーよ、これは常識よ!」

「お前らの常識なんざ知ったこつちやねえんだよ!?　どう見ても高額報酬に目が眩んだだけじゃねーか!」

カズマさんのおっしゃる通り、このバカ兄妹は億万長者になることしか考えていなかった。

「大体、カエルに食われた駄女神とクマにビビる遊び人が、どうして魔王の幹部を倒せる

と思つてんだ!? 駆け出し冒険者の俺達じゃ、そんな奴に勝てやしないよ!」

「うつせーぞロリコンニート! そう言つてグダグダと言ひ訳してやる前に諦めてつから、お前らニートは飛べねえんだ! さあ、今こそ勇気を出して羽ばたいてごらんよ! がんばつて働けば億万長者も夢じゃねーから!」

「夢見る前に現実見ろよ!! レベル15の元ニートにクソな無茶振りしてんじゃねーよ!!」

「そうだぜ銀さん! ここは慌てず間を置くべきだ! この街で幹部と戦おうなんて思つてる奴は他にいねえし、ギルドが呼んだ討伐隊が来るのは来月とか言つてたから、それまでは別のクエストをやってレベルと装備を整えようぜ?」

自分の命がかかっている冒険者コンビは、殺る気満々なドS野郎を必死に説得する。特に、長谷川の意見には一理あつて銀時も納得した。時間があるなら修行するのもジャンプ的でいいだろう。

「しゃーねえなあ。とりあえず、今日のところは勘弁しといてやらあ。その代わりに、一番難易度の高いクエストでテメエらを鍛えてやる!」

「ええーっ!」

「結局、ヤバい奴と戦うのかよ!」

カズマ達の抵抗も空しく、地獄の修行は避けられなかつた。

果たして、魔王の幹部の代わりにどんなモンスターと戦わされるのだろうか。それは、テンションを爆上げしたためぐみんがノリで選んだクエストで決まった。

「この報酬額を見てください！ 600万ですよ600万！ 未確認の『白い大蛇』とか書いてありませんが、金額から推測するに亜竜クラスの大物ですよ！」

「そんなヤバいの選ぶんじゃねーっ!?! 報酬が高額なのに未確認って適当過ぎだろ!?!  
あまりにフワツとした表現でイヤな予感しかしないんだけど!?!」

楽しそうに物騒なクエストを押しつけてくるめぐみんを見てカズマは日本に帰りたい  
なくなった。



大蛇討伐に出発した銀時パーティは、目撃証言に従ってアクセルの北部にやって来た。森と草原で構成されたのどかな風景だが、付近の古城に魔王の幹部がやって来たせい  
いで今は不気味に静まりかえっている。今回の討伐対象が未確認なのもそれが原因で、  
ギルド職員の安全を考慮して確認調査を断念したからだが、被害が出ている以上は放置  
することも出来ないためフワツとした内容で募集したのだ。

ぶつちやけると、カズマが抱いた悪い予感がドンピシャで当たっていた。



「え〜つと……あれが白い大蛇か？　なんかずいぶん雰囲気が違うみたいなんですけど？」

冷や汗をかいたカズマがぼつりとつぶやく。そいつは今、草原のと真ん中でとぐろを巻いて眠っており、カズマと長谷川の「潜伏」スキルを使って近づいた一行は未確認モンスターの意外な姿に驚いてしまう。

「なあ長谷川さん。あれって大蛇じゃなくて神龍（シエンロン）じゃね？」

「あ、ああ……ウンコみてえにとぐろを巻いたシエンロンだな、ありやあ……」

茂みに隠れたマダオ達は驚きを隠せない。だってアレ、どう見てもシエンロンだもの。手と足が付いてるし立派なお髭も生えているもの。スケールが小さくなって色が真つ白という点以外は確かにシエンロンそのものだ。少なくともヘビではないと分かったが、アレの正体に気づいたためぐみんが目を見開いてその名を叫ぶ。

「あ、あれは!?　ベンザイテン・ハクリユウオウ・ダイゴンゲンじゃないですか!？」

「シエンロンじゃなくて弁財天白龍王大権現だったああああああああつ!？」

予想外の事実に思わずシャウトしてしまう。弁財天白龍王大権現とは、福井県のとある神社に奉られている龍神なのだが、まさか異世界でその名を聞くとは思わなかった。

「おいしいおいしい!？」　弁財天白龍王大権現がなんでここにいるんだよ!？」　弁財天白龍王大権現は日本の神様なんですけど!？」　つーか、そもそも存在しない空想上の生き物です

けど!？」

「なにを言っているのですかギントキ。空想どころか、今日の前にいるじゃないですか？」

「そりやまあ確かにいらつしやるけど、日本人の俺としてはつつこまざるを得ないよコレ!？」

銀時の指摘はもつともで、あのドラゴンに和風の名前が付けられた経緯には当然日本が絡んでおり、何故か事情を知っているアクアがドヤ顔で解説しだした。

「あのドラゴンはかなり珍しい種族で遙か東方の土地からやって来た新種なんだけど、福井県出身の転生者がたまたま最初の発見者になっちゃって、ギルドに報告した際に『弁財天白竜王大権現にソックリだ』と伝えたら、なぜかそのまま弁財天白竜王大権現って名前で登録されちゃったの。ようするに、アレは弁財天白竜王大権現の偽物ってことよ」

「弁財天白竜王大権現じゃなくて弁財天白竜王大権（偽）だったああああああああっ!？」

いざ聞いてみたら、やはりアクアが絡んでいた。普段は転生者のことなどこれっぽっちも気にしちやいないが、こういうどうでもいいことだけは何気に詳しくかった。

「なるほどね、言いたいことはたくさんあるが、とにかくアレがシエンロンでも弁財天白

竜王大権現でもねえことは分かった。だったら後は、普通にぶっ倒すだけだな……」

「待つてくださいい！ アレと戦うのは止めておきましょう……」

衝撃から立ち直った銀時が戦う決意をした途端に、めぐみんが意外なことを言い出した。爆裂バカな彼女が爆裂魔法を使う絶好の機会を自ら放棄するなんて信じられない。

「どうしためぐみん。爆裂魔法を撃つ前にお腹のウンコが爆裂しそうになったのか？」

「ち、ちがわいつ!? ベンザイテン・ハクリユウオウ・ダイゴンゲンは精霊に匹敵するほどの高い魔法防御を持っているので、爆裂魔法をもつてしても傷一つ付けられないのですよー!」

真っ赤になっためぐみんは悔しそうに言い放つ。あのタイプのドラゴンは魔法防御がやたらと高く、ウィザードにとつては天敵とも言える存在となる。バカが付くくらい勝ち気なめぐみんも爆裂魔法を封じられては大人しく引き下がるしかなかった。

「ぷぷつ、だっせー! クエスト3回目でもう必殺技効かねえでやんの! 『爆裂魔法は最強』とかさんざん自慢してたクセに速攻で負けてんだけど! いったい全体どこら辺が最強なんでしょーかねー?」

「ぐぬぬぬぬっ! せっかくの見せ場を台無しにされてヘコんでいる仲間を慰めないどころか、一切の迷いも無くどめを刺しにくるなんて、あなたは鬼畜な悪魔ですか!」

DS野郎に容赦無く笑われて涙目になるめぐみん。とはいえ、それは期待の裏返しで

もあり、その様子を羨ましそうに見ていたダクネスも攻撃力の低下を心配する。

「それにしても困ったな。めぐみんの爆裂魔法を封じられては正直言つて厳しいだろう。だが、諦めるのはまだ早い！ 私が囹を務めるから、隙を見て攻撃するなり見捨てて再起を図るなり、みなのお好きにするがいいっ!!」

「それつてもう、お前が好きにしてるだけじゃね?」

ドラゴンにいたぶられる妄想をしてハアハア言つてるドMにつっこむ。本人は喜んでいるけど、ドラゴン相手に囹をするなど流石にシヤレでは済まないだろう。リアルなジユラ○ツクパークなんて見たくねえと思つたカズマは、ノルンに助けを求めた。

「(おいノルン、アイツの弱点を教えてください!)」

《うんいいよ。アイツの弱点は……喉元にある【逆鱗】だね》

「(え、逆鱗? それつて、触るとめつちや怒るつて場所じゃなかった?)」

《確かにその通りだけど、そこが弱点でもあるんだよね。逆鱗を破壊するものすごい激痛で魔力が暴走しちゃうから、それを使って維持してる防御力も弱まるんだ。アダマタイト並に硬くて並の冒険者では無理だけど、星砕を持った銀時なら打ち砕くことも可能だよ》

ノルンの情報はとても簡潔で役に立つものだった。これを元に攻略法を練ればめぐみんの魔法を活かすことが出来るし、弁財天白竜王大権現もなんとか倒せるはずだ。

後は、この情報を銀時達に伝えればいい。そうすれば、あいつらが勝手に倒してくれ  
るだろう……。と、思った直後に長谷川が屁をこいた。

ぶふうーっ！

「あつ悪い。屁が出ちまった」

「うわ、くつさ!? こんなところでなにすんだテメエー!?!」

「女神の前でオナラするとか信じられないんですけど!?!」

【潜伏】スキルを効かせるために長谷川の肩につかまっていた銀時とアクアが犠牲と  
なり、激しい怒りを巻き散らす。その時に発せられたアクアの神気が弁財天白竜王大権  
現に刺激を与えて眠れるドラゴンを目覚めさせてしまった。

「グオオオオオオオッ!!」

「うぎゃーっ!! 弁財天白竜王大権現が目覚めちまったああああああつ!?!」

空気を震わす雄叫びに銀時達が怯む中、眠りを妨げられて怒ったドラゴンがアクアめ  
がけて飛んでくる。

「ちよっ!?! なんかこつちに来るんですけど!?! めっちゃ狙ってるんですけど!?!」

「に、逃げろーっ!?!」

突然のアクシデントにパニックだった銀時達は、迎撃するという手段も忘れて一目散に逃  
げ出した。

一方カズマは、めぐみんとダクネスを連れて別方向に避退する。ノルンから話を聞いてアクア達が狙われていると知ったからだ。

「放せ、カズマ！ 誇りある騎士として仲間の窮地を見捨てておけん！ ドラゴンに追いかけられるなど、どれほど恐ろしい思いをしていることか！ 滅多に味わえないスリルと興奮を私も一緒に味わいたいぞっ!!」

「黙れやDM!! 今はお前の変態プレイに付き合ってる余裕は無え!」

となりで息を荒げているダクネスに怒りをぶつける。実際、今はかなりのピンチで、必死に逃げ回っているアクア達は、背後から迫る炎のプレスに焦りまくっていた。

「あちちちちちっ!! 俺の髪がちりちりパーマになっちまうよ!」

「その天パは元からだよね!! 生まれた時からちりちりだよね!!」

「そんなことより、アレをなんとかしなさいよ!! 直に熱せられてる無防備なお尻が我慢の限界なんですけどーっ!!」

「お前は元からぱんつをはけよ!! 生まれたままでいるんじやねーよ!!」

セリフからは余裕を感じるけどこのままでは話が進まない。

《カズマ君、ここはアレを使う時だよ! アレをアイツの口に当てれば一気に形勢逆転だ!》

「ん、出来ればボス戦まで取っておきたかったが仕方ない!」

「……？ なにかいいアイディアでも思いついたのですか？」

カズマのつぶやきが聞こえたためぐみんが疑問を感じて質問すると、彼はその答えとして背負っていた弓を装備した。これはノルンのアドバイスを受けて用意していたもので、弓が扱えるようになる【弓】と命中率が上がる【狙撃】というスキルも桂に紹介してもらったアーチャーから教わっている。

「まさか、それで援護するつもりですか？ ベンザイテン・ハクリユウオウ・ダイゴンゲンのウロコは非常に硬くて弓矢なんて通じませんよ？」

「もちろん、そんなことは百も承知してる。だからここは、こんなこともあろうかと用意していたスペシャルウエポンを使用する！」

「えっ、そんなものがあるのですか!？」

スペシャルという単語に琴線を刺激されたためぐみんが期待の眼差しを向ける中、カズマは一本の矢を取り出す。その矢は茂茂に頼んで作ってもらった特注品で、鏃の部分に小型化したジャスタウエイが付いていた。

「俺はコイツを【爆裂アロー】と命名した」

「その名は止めろおおおおっ!？」

爆裂の名を侵害されてめぐみんが怒り出す。しかし、カズマはさらりと流して、早速行動を開始する。爆裂アローは形や重量の関係で射程が短いという弱点も存在するが、

スキルのおかげでそれもある程度軽減される。今の彼なら命中させるのも十分に可能だ。

少し走って狙撃ポイントに来たカズマは、近づいてくる標的に向けて弓を絞る。狙うは、ブレスを吐く瞬間に大きく開いた口の中！

「狙撃ツツ!!」

抜群のタイミングで飛び出した爆裂アローは、スキルによつて正確な弾道を描き、吸い込まれるように弁財天白竜王大権現の口内へ直撃した。すると、吐き出されようとしていた炎のブレスと混ざりあつて大爆発を引き起こした。

「グガアアアアアアアアアッ!!?」

口内を傷つけられて激しく悶える。これでさらに怒りを買つただろうが、一番厄介なブレス攻撃を封じることが成功した。

「カズマさああああああんっ!? あなたならやってくれるって私は信じてたわーっ!!」

「おいコラ止めろ!! 鼻水とか涎を垂らしながら抱きつくんじやねーっ!!」

助けられて感激したアクアに熱くて汚い包容を受ける。ポリユームのあるオツパイがムニユムニユと当たってるけど、なぜかちつとも嬉しくねえ!

それに、まだ戦いは終わっていない。アイツが怯んでいる隙を突いてさらに追撃する



べきだろう。

「さて、ラ○ボーからパクったカズマの攻撃も効いてることだし、こつからアイツにリベンジするぞー！」

「いや別にラン○ーからパクったわけじゃないけど。とにかく銀さんは、あいつの喉元にある逆鱗を壊してくれ！ そうすれば魔法防御が弱まって爆裂魔法も使えるから！」

「なんと、そんな弱点が!? でしたら早く逆鱗とやらを壊してください！ この杖によつて強化された爆裂魔法でドラゴンスレイヤーに私はなるっ!!」

朗報を聞いたためぐみんがワンピース的なノリで催促してくる。

とはいえ、それは言葉で言うほど簡単なことではない。空を飛んでいる相手に普通の攻撃は当たらないからだ。

「ならば、普通じゃない攻撃をするまでだ！」

良いアイデアを閃いた銀時は、アレを倒すために必要な人物を呼んだ。

「来いダクネス！ いやいよお前の出番だぜ！」

「その言葉を待っていたぞー！」

慕っている主に呼ばれ、しつぽを振るメス犬のように走り寄るダクネス。この状況で攻撃の当たらないクルセイダーを呼ぶなんて、まっ、まさか……。

そこはかたなく既視感を覚える光景に身構えていたら、このDSはまたしてもダクネ

ス自身を装備した。

「今度も頼むぜ、ダークネス・ゲイボルグ！」

「承知したぞマイマスター！」

「つて、またソレかよおおおおおつ?! 罰金取られたばかりなのに同じことを繰り返すとか、どんだけFate気に入ってるんだ?! つーか、さりげなく宝具が変わって腹立つんだけど、このまま続ける気なのソレ!?!」

懲りることを知らないSMコンビに仲間達が呆れる中、ダークネスを頭上に持ち上げた銀時が標的めがけて駆けだした。

「オラオラアアアアアアアアアッ! こっちを向けやウンコ野郎っ!!」

銀時が罵声を浴びせると、痛みに苦しんでいた弁財天白竜王大権現が怒ったようにそちらを振り向く。その間に一瞬だけ隙が出来て、絶好のチャンスが生まれる。喉元に一枚だけ青色のウロコが見えた!

「今だ食らえいっ!! ダークネス・ゲイボルグツツツ!!」

「ダクネスを槍のようにぶん投げたあああああああつ?!」

ギャグ補正という最強のチートスキルによって必中必殺の魔槍と化したダクネスは、直立不動の体勢で青空を飛んでいくと見事に喉元へ命中して逆鱗を破壊した。彼女の石頭がアダマントタイト並に堅いウロコに勝ったのだ。

「グギャアアアアアアアアアアアッ!」

急所を破壊された弁財天白竜王大権現は絶叫を上げて落下していく。それと一緒に満足そうな顔をしたダクネスも落ちていくが、地面に叩きつけられる前に駆けつけた銀時によってお姫様だっこされる。

「わ、我が主っ!?! 私を助けに来てくれたのか!?!」

「舌噛むから黙ってる!」

「いや、ドラゴンにぶん投げといてそのセリフはおかしくね!?!」

唐突に始まったラブラブ展開にカズマがつっこむものの、構わず無視してその場を離れる。背後では、正気を失った弁財天白竜王大権現が暴れ始めていたからだ。

「うわちゃちゃちゃちゃ!?! 俺の髪がアフロになるうううううっ!?!」

地面をのたうち回りながら形振りかまわず炎のプレスを巻き散らして、もはや近づくとことさえ出来ない。

ただし、もうその必要はなかった。

「おい、めぐみん! 望み通りのお膳立てをしてやったぜっ!」

「ええ、感謝しますよ二人共! これでようやく爆裂魔法を放つことが出来ます!」

いよいよ最終兵器めぐみんの出番である。彼女のネタ魔法があれば、バーサーカーと化したドラゴンも安全地帯から爆殺出来る。

中二病的な詠唱を始めたためぐみんは、銀時達が安全な場所まで離脱した瞬間を見計らって爆裂魔法を放った。

「エクスポロージョンツツツ!!」

ドヤ顔で叫んだ途端に最強の魔法が発動し、凶暴なドラゴンが無慈悲な力で蹂躪していく。新調した杖で威力を増したおかげで30メートル以上もある巨体を完全に消し飛ばしてしまった。

「うお、すげえーっ! 弁財天白竜王大権現をたつたの一撃で倒しやがった!」

「よくやったわ、めぐみん! あなたこそ、このチームのエースよ!」

「ふっふーん! 私力をもつてすればこのくらい当然なのです!」

長谷川とアクアから誉められてお調子者のめぐみんはぺったんこな胸を張る。そんな彼女を横目に見つつ、カズマはノルンに話しかける。

「なあノルン。弁財天白竜王大権現を倒せたのはいいんだけど、お前の話と違うんじゃない? 妖刀・星砕使わないで逆鱗砕けちゃったんだけど。代わりにDMなゲイボルグが頭で砕いちゃったんだけど!」

《まつ、まあ、ここは異世界だし? たまにはこんなお茶目なことも起きちゃったりするよねえーっ☆》

「(ウソつけえーっ?! さっきまで滅茶苦茶ビックリしてたじゃねえーか!)」

あからさまに目が泳いでる相棒につっこむ。彼女が見た未来では、物理攻撃をするために地上へ突っ込んで来たところを狙って星砕を振り抜き、すれ違いざまのカウンターで逆鱗を破壊していたのだが、蓋を開けて見てみたらこんな茶番になっちゃいました。しかも、めぐみんやダクネスまで普通に参加しちゃってるし、常識はどこへ行つた。

「はあ……。やっぱここはファンタジーな世界じゃないな。バカしかないギャグ世界だ」

勝利に酔いしれているバカ共を見ている内にイヤな事実を再確認して落ち込むカズマであつた……。

なんとか無事にクエストを達成することが出来た銀時達は笑顔で帰路についていた。特に、人生初のお姫様だつこを経験したダクネスが普通の美少女みたいにはしゃいでいた。

「ああ、まさか！ この私にお姫様だつこされる時が来ようとは！ 性格が堅くて身体も硬い私など柄ではないと思っていたのだが、いざ経験してみるとやはり嬉しいものだなあー！」

「なんかこのエリス教徒、イラツと来るんですけど！」

さりげなく自慢してくるダクネスを意識してアクアが不機嫌になる。お前をドラゴ

ンに投げつけたドSにだっこされて嬉しいのかよとつつこむべき状況だが、銀時に対して親しみを感じているアクアとしては少しだけ嫉妬してしまう。

「でも今は特別に寛大な心で許してあげるわ！ だって、私達のパーティーは優雅な勝ち組なんですよ！」

アホなことを言い出したアクアは速攻で機嫌を直した。なんといつても600万エリスという大金が手に入るのだ。いや、それどころか、未確認の標的が弁財天白竜王大権現だったと証明すればさらにプラスされるだろう。それを知った駄女神とマダオが浮かれないわけがなかった。

「怖い思いをさせられたけど大金をゲットしたわ！ 6人で分けても100万以上は確実だし、借金を払っても余裕でお釣りが来るわね！」

「俺もようやくくまともな貯蓄が出来るようになったぜえーっ！ 無職の身分になって以来、この日をどんなに夢見たことかつ（泣）！」

暢気なマダオ達は大金が手に入ることを無邪気（？）に喜んでいる。この直すぐに谷底へ落とされることになるとも知らずに……。

「あー、前もって言つとくけど、アクアと長谷川さんは今回の報酬ゼロだから」

「えっ、なんでっ!?!」

「なんでもナニも当然だろう？ お前ら今回、クソの役にも立ってねえんだからよお？」

「うぐっ！」

そう言われてはぐうの音も出ない。色々と邪魔ばかりしていたクセに戦闘ではヤムチャ以下の存在感だったのだから、銀時としては文句の一つも言いたくなる。

そもそも、これは強くなるための修行なのだ。幼い悟飯をスパルタ教育していたピッコロさんのように厳しくいかなければならない。

「なにもしないで金だけくれとか、いつまで甘ったれてんだ！ 魔王の幹部が攻めて来るかもしれない今、これまでみたいなお遊び気分は絶対に許されねえ！ 俺達勇者パーティは、ベジータの襲来に備えるZ戦士のように強くなればならないのだ！ そのためならば何でもやる！ たとえ鬼と呼ばれようが、ジャイアンと呼ばれようが、仕事をサボるお前らに給料なんて渡さねえ！ 全部俺の物にしてカジノでフィーバーするんだあーっ!!」

「お前が遊ぶ気満々じゃねーか!! 思わず騙されかけたけど、軍資金を作るために給料ピンハネしてるだけじゃね?」

思わず漏れた銀時の本音に長谷川が食らいつく。アイリスからカジノの存在を聞いて以来、そこで遊びたくてウズウズしていたのである。彼女にあると言ってしまった【万事屋】を作る資金も欲しいと思っていたところだし、これは正しい決断なのだ。

何にしても、アクア達にとっては横暴な話でしかないけれど。

「こんな時にカジノだなんて、アンタの方こそふざけないでよ！ 私も行きたくなっちゃったから報酬をきっちり出して！」

「お前もちゃんとしてくれよ!? 女神のクセにカジノと聞いて目の色変えんじやねえーっ!!」

バカ兄妹の思考パターンは見事にシンクロしていたものの、妹がおバカ過ぎて将来が不安になる。ならばここは彼女のためにも、お灸を据えてやるしかない。

「いくらギャーギャーわめこうと報酬は渡さねえ！ これに懲りたら、クリフト以上にAIを鍛えやがれ！」

「うわああああああんっ！ 銀時の人でなしにいいいいいいいいっ!!」

あまりにDSなしつけ方にアクアの心はあつさりくじけてその場から逃げ出した。親にしかられた小学生のように泣きながら走っていく様はとても女神には見えない。

《なんだろう、アクアを見てたら涙が出てきた……》

「（ああ、俺もだ……）」

友達とケンカ別れしたようなやるせない空気が哀愁を感じさせる。そんな中、彼女に同情したためぐみんは銀時の真意を聞いてみた。

「流石にアクアが可哀想になって来ましたが、本当に報酬をあげないつもりですか？」

「そんなわけはねえだろう？ 俺もマジの鬼じゃねえし、10万くらいは払ってやるさ」







銀時達が弁財天白竜王大権現と死闘を繰り広げていた頃、アクセルより遠く離れたアルカンレティアではセシリーという名のシスターが血眼になって温泉街を走り回っていた。ここは「水と温泉の都」と呼ばれる観光地であると同時に悪名高きアクシズ教団の総本山でもあるのだが、魔王軍の幹部ですら関わりたくないと思わせるその土地で珍しいモンスターが出没するという騒ぎが起こっていた。

「ふっふっふ！ 新種のゴリラ型モンスターは私が捕まえてみせるわあーっ！ そして、そいつを売りさばいてガッポリお金を稼ぐのよっ！」

敬虔なアクシズ教徒であるセシリーは、シスターらしからぬ欲望を恥ずかしげもなく晒け出す。見た目は綺麗なお姉さんなのに中身はとつても残念で、女神を自称する誰かさんと思惑パターンがよく似ている。それもそのはず、駄女神の同類であるアクシズ教徒の連中は全員漏れなくズだからだ。現に今も、新種のゴリラを捕まえて一山当てようと企てたアクシズ教徒が大騒ぎしている。

「あのゴリラこそ、アクア様が与えたもうたお恵みに違いない！ 必ず俺が捕まえて臨時収入ゲットだぜっ！」

「そんなことはさせないわ！ アレは私が捕まえて王都にいる愛好家に高値で売りつけ

るんだからっ！」

アクアを崇める信者達は、アクシズ教のふざけた教義を忠実に実行する。『汝、何かのことで悩むなら、今を楽しく生きなさい。楽な方へ流されなさい。自分を抑えず、本能の赴くままに進みなさい』……女神アクアの教えに従い、本能のままに金を求める。

ようするに、セシリーにとってはどいつもこいつもライバルだった。

「まさしく彼らはアクシズ教徒の鑑ですね。欲望に逆らわず自由に生きるその様は、アクアの尊い教えを見事に体现しています。ゆえに、私もシスターとして模範を示してみせましょう。あのゴリラは私のもんだっ！　どこの誰にも渡しはしないっ！」

普通の人達から『変人』と思われているアクシズ教徒の思考は確かにヤバかった。そんな奴らに追われているゴリラが不憫でならない。醜いオークに襲われて傷ついた心を癒そうとして混浴風呂に入っていたただけなのに……。

「いたぞおーっ！　ゴリラの野郎、ダンボールの中に隠れてやがった！」

「ちいっ！　今度はどこに逃げる気だっ!？」

「噴水広場の方へ向かってるぞ！」

哀れなゴリラが狂信者達に見つかってしまった。そこにセシリーも加わって、ゴリラ争奪戦はさらにヒートアップしていく。

「待て待てえーっ！　大人しく捕まって私のお金になりなさいあああああいつっ！」

「たまたま近くのわき道にいたセシリーが運良く先頭になり、凄惨な笑みを浮かべながら逃げるゴリラを追いかける。」

「一体なんでこんなことになっちゃったんだ。股間のち○こをブラブラ揺らして逃げ続けるゴリラは涙を流しながら考える。オツパイの大きな女の子や学ラン着たおっさんに攻撃されて上着とズボンを失い、淫乱なメス豚共と争っている間に靴とふんどしまで奪われてしまった。そして今、変な奴らが寄つてたかつてマツパの自分を追つてくる。」

「そりゃあ、こつちも落ち度はあるよ？ 勝手に温泉に入った挙げ句に女性の裸をガン見したよ？ それでも、これはおかしいだろう!? 檻とか用意しちゃってるし、俺をゴリラと見なししてるよね!」 凶暴なゴリラとして捕獲しようとしてるよね!」

「理不尽過ぎる状況に我が身の不幸を嘆いてしまう。しかもそれは続いており、事態はさらに悪化していく。」

「あのゴリラ、やたらと機敏でムカつくわ! こうなったら、アクシズ教秘伝のアイテムを使わざるを得ないわね!」

「勝手にキレたセシリーは、持っていた石鹼をゴリラの足元に投げつけた。この石鹼はアクシズ教の入信特典として大量に作られているもので、同じものを持つている他の連中も彼女に続いて投げまくる。」

「ふはははははっ！ アクシズ教の祝福を存分に味わいなさいっ！」  
最低な祝福がゴリラを無慈悲に打ちのめす。

しかもこの石鹼がさらなる不幸をもたらした。全速力で走っている状態でモロに踏んづけてしまい、制御不能な状態で滑り出したのだ。そしてそのまま猛スピードで噴水の縁にぶつかると、勢い余ったゴリラの身体が空中に飛び上がり、中央にある石像へ頭から突っ込んだ。

「きゃああああああつ!? アクア様の石像があああああああつ!」

衝撃的な光景にセシリーが悲鳴を上げる。女神アクアを再現した美しい石像が、長年親しまれてきたアルカンレティアのシンボルが、卑猥なゴリラの頭突きなんかで壊されてしまうなんて！

「許さない……! 罪無きアクシズ教徒に迷惑をかけるだけでなく、この街の観光名所まで台無しにするなんて! 絶対に許さないわ、変態ゴリラ野郎おおおおおつ!!」

「そつ、そつだ! 俺たちや全然悪くねえ! 全部アイツが悪いんだつ!」

「アクア様をぶつ壊した罪深きゴリラを捕まえようつ!」

「「おおおおおとおおおつ!!」」

ほとんど自分達のせいなのにすべての責任をゴリラになすりつけるセシリーとその他大勢。実にアクシズ教徒らしいクズっぷりである。

そんな彼らに罰が当たったのか、アクシデントをごまかしている間にゴリラは街を脱出する。

おのれ異世界人め！ どいつもこいつも話を聞かずに襲いかかって来やがって！  
この恨み、いつか必ず晴らしてくれるわ！

アルカンレティアを背にして旅立ったゴリラは、負のオーラを発しながら行く当ての無い道を進む。その先にあるアクセルという街でアンビリーバボな体験が待っているとも知らずに……。

第21訓 城の宝を勝手に持つてく勇者つて正直どうか  
と思うけど仕方がないよね人間だもの

弁財天白竜王大権現(偽)を討伐した帰り道、アクアは森の中で熊さんに出会った。もちろんソイツはファンシーなゆるキャラではなくデンジャーな野生動物なので、すぐさま逃げる。

「うわああああああん!! なんで私ばかりこんな目に遭うのよおおおおおおお!!」

綺麗なフォームで走りながら自身の不幸を嘆く。ついさつきドラゴンに追いかけられたばかりなのに、この展開はあんまりじゃないかしら。メインヒロイン(笑)にあるまじき扱いに怒りを燃やすが、今はそんな場合ではない。

「だずげで銀時さああああああんっ!!」

プライドよりも命を取ったアクアは、ちよつと前にケンカ別れしたばかりの銀時に助けを求めた。なんだかんだと言いながらも強敵を倒してきた彼だったら熊くらいどうってことないはず……。

「おい銀さん、熊がこっちにやっ来て来るよっ!!」ポ○トみたい綺麗なフォームの二足

歩行で爆走してるよっ!」

「魔力が切れた今の私はただのか弱い美少女ですから、リーダーのギントキがなんとかしてくださいあああああいつ!」

「おおお、落ち着けお前らっ! こういう時は死んだフリだっ! 俺が半殺しにしてやつから、後は上手く演技しろっ!」

「それもう演技じゃ済まねえーだろう!? お前の方こそ落ち着けよ!」

こいつはダメだ、戦う前から負けてるよ。アクアの期待に反して銀時はすでにへたれていた。

その逆にダクネスはやる気に満ちた顔をするが、やられる気満々なDMに端から期待など出来やしない。

「壁役もダメだというなら、どうするつもりだ我が主!」

「んなもん逃げるに決まってるんだろ! 9秒台を切るつもりで必死に走れええええええっ!」

「熊を切るより無理なだけだ!? そういうボケはもういいから、アイツをさっさと倒して来いや!!」

何故か熊を警戒しまくっている銀時にしびれを切らした長谷川は、逃げようとする彼を捕まえて強引に押し出した。逃げるなんて主人公として許されない選択だし、このま



まだとアクアがヤバイ。

「コンチクショーツ！　こうなりや自棄だ！　りら〇くまだろうがくま〇ンだろうがぶつ飛ばしてやらあーっ!!」

ようやく覚悟を決めた銀時はアクアをすばやく抜き去ると、彼女の背後に迫っていた熊に先制攻撃を食らわせた。目にも止まらぬ速さで洞爺湖を振り下ろし、相手の反撃も許さないまま一撃で昏倒させる。腐ってもジャンプマンガの主人公、やれば出来る子である。

「けっ、ビビらせやがって！　いざやってみたらなんてこたあねーじゃねーか！　この熊公がっ！」

「銀時さああああああん！　助けてくれてありがとぉっ！」

「うわ汚ねっ!?　俺の服で鼻水ふくんじゃねーっ!?!」

仰向けに倒れた熊に蹴りを入れていたら感極まったアクアが感謝のハグをしてきた。普通は喜ぶところだが、相手が普通じゃないので逆に嫌な気分になった。

さらに、間の悪いことにアクアが逃げてきた辺りから別の熊が現れてこちらに近づいて来るのが見える。この駄女神はとことん疫病神らしい。

「おいおい、こゝは熊牧場か!?　遭遇率高過ぎだろコレ！」

不自然なほどのエンカウントぶりにうんざりしてしまう。まさかこのまま野生の熊

と戯れ続けることになるのか。そう思っていた所で、目敏いめぐみんが異常を見つめる。

「待つてください。あの熊おかしくありませんか?」

「ああん? そういやあ、ここの熊は二足歩行が異様に上手いな……」

「そんなところではありませんよ!?! あいつの胸元を見てみてください! あ、あの熊公、ケダモノの分際で見事な巨乳をぶら下げてやがるんですよっ!」

「お前はどこに注目してんだ!?! 熊の胸にコンプレックス刺激されてんじゃねえよっ!」

頭がおかしいと言わざるを得ないめぐみんの指摘に思わずつつこんでしまう。しかし、その指摘は意外にも的確だった。彼女の言うようにあの熊には『人間の女性みたいなおっぱいの膨らみ』があるのだ。というか、よく見ると体型だけでなく走り方や仕草などが妙に色っぽい。

「あれ、なにこの違和感。嫉妬に燃えるめぐみんに賛同するのはアレだけど、やっぱあの熊おかしくね?」

「あ、ああ。なんかやたらとセクシーで、見てるとムラムラしてくるような……」

銀時の問いかけに長谷川がアブノーマルな意見を返す。まさか、重度のケモノに目覚めてしまったのかとカズマは密かにドン引きするが、もちろんマダオがおかしな性癖

に覚醒したわけではない。

なんと、走ってくる熊の頭が後ろにめくれて、中からウイズが現れたじやーありませんか!?

「はあはあ、待ってくださいギントキさん!」  
「私達」は熊なんかじゃありませんえーんっ!

「へっ、私達?」

どういう理由か分からないが、熊の毛皮を着込んだウイズはこちらに向かつて走りながら気になる言葉を叫んだ。私達というのはもしかして、さっきまで蹴りまくっていたこの熊のことかなあ?

嫌な予感を抱きつつ倒れた熊の頭をめくる。すると、中から白目を剥いて気絶している茂茂の顔が出てきた。

「將軍かよおおおおおっ!」

予想通りの展開にお約束の台詞を叫ぶ。なんと、銀時がぶっ倒した熊は、着ぐるみのような毛皮を着た茂茂だった。

意外な形でウイズと合流した銀時達は、くわしい事情を聞く前に気絶した茂茂を運ぶことになった。彼女の案内で森の中をしばらく歩くとテントが張られたキャンプ地に

到着する。どうやら二人はここでナニかをしているようで、想像の翼を広げたアクアが鋭く言い放つ。

「こんな人気の無いところで熊のコスプレをした男女がケダモノのように汚れた遊びをしているだなんて……。とんでもない変態プレイをやっちゃってくれたわね！」

「そんないかがわしいことは一切やっていませんよおーっ!」

アクアの想像はまったく当たっていなかった。

もちろん茂茂達があんなことをしているのにはちゃんとした訳があり、意識が戻った本人からくわしい事情を説明される。

「で? 変態プレイじゃねえんなら、將軍達はここでなにをしてたんだ?」

「うむ……。そなた達も聞いておろうが、あの丘に見える廃城には魔王軍の幹部がいてな。そやつに怪しまれぬよう偵察するためにこの格好をしていたのだ」

「ほう、それは見事な作戦ですね!」

「これっぽっちも見事じゃねーよ! こんなことしなくても盗賊スキルで十分だよね!」

変なところに力を注ぐ茂茂とそれに共感するめぐみんにカズマがつっこむ。それなりに効果はあるし照れてるウイズが可愛いのでまったくの無駄ではないけれども、やっぱこれはおかしくね?

「でも待てよ。つーことは、まさか將軍も幹部の討伐報酬を狙ってるっていうことか？」

「いや違う。余の目的は、あの廃城に隠してある【財宝】の回収だ」

「財宝の回収ですって!?!」

金目の話題が出たところでアクアが元気に食いついてくる。

「ねえ将ちゃん! もしかしてあの城に徳川の埋蔵金が眠っているのかしら!?!」

「はいそうです。以前お話したアルダープの財宝をあの地に封印したのです」

「なに、アルダープの財宝だと!?!」

興味を惹くようなDM要素も無くこれまで静かに聞いていたダクネスが宿敵の名を聞いて勢いよく反応する。

「それはもしや、例の作戦で奴の屋敷から奪い取ったと言っていた物か?」

「ああそうだ。あの時は時間が無くて隠し場所を用意できなくてな。急場しのぎとして、あの廃城の地下室を利用することにしたのだ」

ダクネスに領いた茂茂は簡潔に説明する。数十年も前から荒れ果ててモンスターの住処となっているあの廃城に近づく物好きはほとんどいないため、財宝を隠すにはもつてこいな場所だったのだ。もちろん見つかると危険はあるため密かに別の隠し部屋を用意していたが、その準備が整う前に魔王軍の幹部が引越してきてしまい、急いで回収しなければならぬ状況になったのである。

「ウイズ殿に張ってもらった結界があるゆえ容易に手出しは出来ないだろうが、魔王軍の幹部を相手に楽観などしておれぬ。こうして入念に準備を整え偵察しているのもそのためだ。そんな時にアクア様を偶然お見かけしてな。幹部を討伐しに来られたのなら互いに協力出来ると考え、思わず追いかけてしまったのだ」

「だったら最初に一声かけてほしいんですけど!?! 協力以前に対話力が必要なんですけどおーっ!?!」

無駄に怖い思いをさせられたと知り、アクアはプンプン怒り出す。どうやら、声をかけ忘れるくらい茂茂も焦っているようだが、いかなる理由があろうとも女神を泣かせた罪は重い。

「これはもう慰謝料を払わなきゃ済まないほどの大罪よ! さあ出して! 女神にドツキリかました罪を償うためにお金を出して! 埋蔵金を差し出せば許してあげないこともないから!!」

「徳川の埋蔵金に目が眩んで暴走してるうーっ!?!」

唐突に当たり屋みたいなことを言い出した駄女神に周りのメンツがドン引きする。流石の銀時もここまでがめつくはないだろう……。

「ふざけんなよ駄女神! 埋蔵金つてのは最初に見つけた奴のモンだ! いや、俺のモンだあーっ!」

「こいつもゲットする気だったあああああああつ!」

残念ながらこの男も埋蔵金の魅力に心を奪われていた。

だからといって、アクセルの住人へ返すことになる財宝をやるわけにはいかないの  
で、代わりのチャンスを用意する。

「あの財宝は譲れぬが、そなたらが協力してくれるというのであれば、仕事に見合った報  
酬を存分に支払うぞ」

「ま、まさか、魔王軍の幹部がいるというあの城に忍び込むつもりでしょーか?」

「うむ、そうだ。アクア様のお力を貸していただければ奴等など恐るるに足らん」

「ふっふふーん! 流石は将ちゃん、私のすごさを誰よりも理解しているわ!」

恐る恐るカズマが聞くと、さも当然とばかりに茂茂が頷く。普通にアクアを敬つてい  
る彼は偶然女神と出会えたことを好機と捉えてしまい、誉められた駄女神も乗り気にな  
ってしまったのだ。

や、やべえ。この展開はマジやべえ。嫌な予感がしたカズマはすぐさま抵抗を始  
める。

「おい銀さん! 将軍様はこう言ってるけど、めぐみんはガス欠だし俺達も疲れてるか  
ら今日のところは止めとこうって説得してくれよ!」

「バッキヤロウ! 俺達の将軍様が乗り込むって言うてんなら黙って一緒についてくの

が筋ってモンだろーが!? 信念を貫く侍として、勇気を誇る冒険者として、目の前にある困難から逃げ出すわけにはいかねえんだ! そうして、ついには幹部を倒し、億万長者に俺はなるっ!!」

「やっぱ金かよコンチクショウ!」

恐れていたことが現実になってしまった。どうせ近いうちにこうなるとは思ってたけど、なにこのウルトラハードモード!?

「はあ……童貞を卒業する前に第二の人生も終わっちゃうのか……。ごめんよ、未来のハーレム達! 恋する前に逝ってしまうこの俺を許してくれ!」

「つたく、なにが未来のハーレムだよ、ムレムレ包茎チ○コ野郎。ギャーギャー心配しなくても、いきなりボスとは戦わねえよ。大体、ボスなんざ勇者が話しかけるまで何も出来ない悲しき存在なんだから、目の前で屁えこいたって素通り出来るぜ」

「いやそれゲームの仕様だから、マジでやったらアウトだよ!?! つーか、俺は包茎じゃねえーっ! ちよっぴり鞆に入ったエクスカリバーだっ!」

ドラクエ感覚で語る銀時の話にはまったく説得力が無かった。それを聞いていた長谷川もカズマと同じ心境だったが、頭のおかしい女性陣は逆にテンションを上げていく。

「ふっふっふ! 敵の拠点に乗り込むなんて素晴らしいシチュエーションです! あの



城を見た時から爆裂魔法をお見舞いしたいと思つていましたから幹部と一緒にぶつ飛ばしてあげますよ！」

「ピクリとも動けずにテントで寝てる奴が頭のぶつ飛んだことほざいてんじゃねえーっ!?!」

「確かに、魔力が尽きたためぐみんを連れていくわけにはいかないが、私は絶対ついていぞぞ！ なにしろそこは魔王軍の幹部が手ぐすね引いて待ち受けているとても危険な場所だからな！ 女騎士に襲いかかるイヤらしいイベントが大いに期待出来るだろう！」

「お前も趣味に走んじゃねえーよ?! エロいイベントは見たいけどー！」

相手は世界中から恐れられている幹部だというのに、こいつらは相変わらずマイペースにふざけやがる。頼もしいというよりも、頼むからマジ止めて。

「(なあノルン。俺はこのイベントを生きてクリア出来るのか?)」

《まあ、大丈夫なんじゃない？ ギャグキャラつてのは死んでも死ねない概念みたいな存在だから》

「(なにその『まどマギ』みたいな理屈?! もはや悪質な呪いじゃねーかつ?!)」

可愛い女神に慈悲を求めたが、そこに救いは無かった。

そんな悲嘆に暮れるカズマに楽しそうなウイズの声が聞こえてくる。

「みなさーん！ お昼の準備が整ったので、ひとまず休憩いたしましょうー！」

呼ばれてそちらに目を向けると、場違いに暢気なバーベキューが用意されていた。なんでそんな物が都合良くあるのかと言えば、茂茂と二人きりでお出かけ出来ることに浮かれたウイズが張り切って用意し過ぎた結果だった。銀時達に加わるといいうハプニングは起きたものの、友達と一緒に楽しく食事をするのもいい。トングを持ちながらニコニコと笑っている魔王の幹部は、とても友好的だった。

「よっしやーっ！ 肉は全部いただきだあーっ！」

「あつ!!? ちよつと待ちなさいよ！ あんただけにお肉は渡さないわあーっ！」

食欲に忠実な遊び人と駄女神が真つ先に反応して早速肉を焼き始める。もちろん長谷川も後に続き、タダ飯をむさぼりだした。その光景を見てため息をつきつつ、カズマはあることが気になった。

「なあ銀さん。盛大に煙が出てるんだけど、これって幹部に気付かれるんじゃないかね？」

「ああ？ んなもんいちいち気にすんな！ 近所でバーベキューしてるくらいでキレてきやがったら逆ギレすりゃあいんだよ！」

「そういう話じゃないんだけど!! 生死を懸けた問題をご近所トラブルみたいに言うんじゃないえーっ!!」

ダメだ、やっぱり話にならねえ。こんなところで暢気に肉を食っている銀時達といい、偵察するのにバーベキューセットを持ってきてるウイズ達といい、こいつらまとめ

て頭が変だよ。

とはいえ、自分も肉を食べたい。腹が減っては戦はできぬとも言おうし、とにかく今は腹を満たして気分を落ち着けるとしよう。心の中で言い訳しつつ、カズマもバーベキューに参加する。動けないめぐみんをテントに残して。

「おおおおおおい!! さりげなく私を放置しないでもらおうかつ?! ていうか、お願いですから助けてください! 私もお肉を食べたいので、なんとかしててくださいーっ!」

「そーいや、お前動けなかったな。仕方がない、カズマお兄ちゃんが『あーん』してやろう」

「えっ、ちよっ、それは待つてください!! なんだか恥ずかしいといいますが、まだ早いといえますか……」

「つたく、ノリが悪いなあ。せつかくだから『義妹』とイチャイチャする気分を満喫しようと思つたのに」

「邪な欲望がさらつと漏れてますけど!?!」

危うく義妹プレイを強いられそうになったためめぐみんは鳥肌を立たせる。そんな彼女の窮地を見て、ウイズが助け船を出す。

「すみません、めぐみんさん! 昼食に気を取られて、回復させてあげるのをすっかり忘

れてました!」

「おおウイズ、助かりましたよ! お肉が全滅する前にちやつちやつと回復しちやつてく  
ださい!」

「分かりました。〔ドレインタッチ〕で魔力を補給しましょう」

そう言うとうイズは傍にいるカズマに声をかけた。

「あの〜カズマさん、ちよつとだけでいいですから魔力をいただけませんか?」  
「えつ、まあ別に構わないけど、魔力を吸うんだつたらアークプリーストのアクアから  
吸つた方が効率良いんじゃないか? あれでも一応女神だし」

「うつ、アクア様から吸うのですか?」

カズマに正論を言われてアクアの方に目を向ける。リツチーなウイズにとつて天敵  
である彼女にはまだまだ強い苦手意識があるのだ。当の駄女神は、となりのドSと大人  
気無いやりとりをしていただけれど……。

「おいアクア。そのご立派なキノコはなんだ?」

「あらあらやつぱり気になるかしら? なんとこのキノコは、ここに来る途中で運良く  
見つけた松茸よ! 街に帰つてからこつそり食べようと思つてたけど、どうせならあん  
た達に見せびらかせながらいただこうと……つて、なに勝手に食べてんのよつ!」

「女神のクセにケチケチすんな! 2本あんだから1つくらいいいだろう?」

「まったく全然よくないわよ!」 神聖なる女神の松茸を盗んだ不届き者よ! 我が必殺の拳を受けてその罪を購いなさい!」

「上等だよ! やれるもんならやってみやがれ!」

「……」

二人そろって同レベルのバカ共は、しょもない理由でケンカを始めた。

しかし、これはチャンスでもある。銀時を誘導してアクアを拘束してしまえば余計な面倒をかけずに済む。

「銀さん! 俺もアクアにあんなことしたいから、ちよつくら捕まえといってくれよーっ!」

「よおーし分かった任せとけえーっ!」

「ええ!! あんなことつてどんなことっ!」

「そんなこと知らねえが、つべこべ言わずに観念しなっ!」

アクアが狼狽している間に背後を取った銀時は羽交い締めにして彼女を拘束する。流石はDS、女神が相手でも容赦がない。

「うきやーっ!?! 超絶可愛い女神様になんてことしてくれてんのおーっ!?! 逮捕よ逮捕よ! 痴漢罪で逮捕よおーっ!」

「うっせー駄女神! 存在自体が公然猥褻罪みてえな奴に非難されるいわれはねえ!」

「くうっ！ ぱんつをはいてないだけであそこまで徹底的に侮辱されるなんて、アクアの奴が羨ましいぞ！」

なんかドMまで騒ぎだしたけど、とにかく準備は整った。

めぐみんを背負ったカズマは身動き出来ないアクアへ近づくと、後から付いてきたウイズに無慈悲な指示を出した。

「今だウイズ！ アクアのアレを奪っちゃまいな！」

「は、はいいっ！ ごめんなさいアクア様！」

「まつ、待つてよウイズ!? 親友の私にナニする気つて、あああああああーっ!?」  
なにをされるか分からなかったアクアは、なんの抵抗も出来ずにおもいつきり魔力を奪われた。彼女の胸に触れた右手から魔力が吸われていき、めぐみんの首元に触れた左手から送り込まれていく……。

「ふおおおおおおーっ!? キテますキテます、魔力がキテます!!」

「ど、どうですか、めぐみんさん? 身体に問題ありませんか?」

異様に興奮しているめぐみんの様子が気になりおずおずと聞いてみるが、身体よりも頭を心配する方が適切な気がする。

「ヤバイです、これはマジでヤバイですよ! ノーパンで女神を自称するヤバイアクション教徒だとは思ってましたが、魔力の方までヤバイとは! これなら過去最大級の爆裂

魔法が使えます！ なんなら、今すぐあの城を一発ドカンとやっちゃいますか？」

「やらんでいい」

アクアの犠牲によつて復活を果たしためぐみんは、カズマの背中から降りた途端におかしなことを言い出した。城の外から攻撃してボスを倒すとか、もうそれ只の爆破コントだよね？

「……まあ、とりあえず爆裂魔法は置いて、俺達も飯を食おうぜ？」

「おっと、そうでした！ 魔力の次はお肉の補給をしなくては！」

あまり調子に乗らせると本当にやりかねないので、ここは適当に話を流してひとまず落ち着かせよう。

めぐみんの世話を終えてようやくバーベキューを始めたカズマは、育て中の焼き肉を互いに奪い合っているバカ共を無視しながら静かに野菜を食べまくる。そんなボツクの彼に、となりでなにかをやっていた長谷川が話しかけてきた。

「おい見ろよカズマ君！ もしやと思つて確認したら、リッチーのスキルも冒険者カードに表示されてるぜ！」

「えっマジで？」

教えられて見てみると、確かに「ドレインタッチ」の文字がある。どうやら、人間以外が使うスキルも習得出来るようだ。

「こいつあもう覚えるつきやねーだろ？ なんとってリッチー固有の特殊スキルだし、触るだけで相手を弱体化出来るんだから、最弱職の俺達にとっちゃ相性抜群だぜ！」

「そう言われるとそうだな……。よし、決めた習得しよう」

カズマ的にも気に入ったので即座にスキルを覚えてしまう。ちなみに、スキルポイントが足りない長谷川は、後で習得することになる。

《女神であるボクとしては反対すべきんだけど、今回は特別に許してあげるとしよう。アレが使えないとカズマのクズっぷりも中途半端になっちゃうからね。やっぱクズマさんは、ドレインタッチがあつてこそだよ！》

「俺の価値はクズさにあんの!? クズマさんがお似合いなのお!?」

相棒想いなノルンは、自分の役目に反してまで彼のアイデンティティーを尊重してやるのだった。



騒がしい昼食を終えて財宝回収作戦を開始した一行は森の中を歩いていった。目的の廃城は断崖絶壁のようにそそり立った丘の上に建っており、城の周囲まで続いている深い森を利用して気づかれぬように進んでいく。



「おい將軍、このまま門前まで行くとして、その後はどうすんだ？」

「うむ、余が敵を引きつけるゆえ、お前達はその隙に目的を果たしてくれ。なに、こちらのことなら心配無用だ。熊の格好をしていれば怪しまれぬからな」

「どう考えても心配要素しかないんだけど!? 熊が出たら怪しい以前に大騒ぎになるんだだけ!? どうしてそんなに自信があんだよ!? 相手の幹部はクロコダインか!? 百獣魔団が来てるのかあーっ!?」

そんなダイの大冒険的な設定は当然ながら存在しない。

「だったらなぜ茂茂達は、こんなに異様なペアルックをしているのだろうか。もちろん、そこにはちゃんとした理由があり、変な誤解をされていることを察したウイズが慌てて説明する。」

「何やらみなさん呆れた顔をしていますけど、ふざけてるわけじゃないですよーっ!? あの城を守っている敵は知能が低くて、生きた人間以外には基本的に襲いかからないので、この姿ならある程度ごまかすことが出来るんです!」

「プークスクス! なにそのおバカなモンスター! こんな手に騙されるなんて、頭が悪いにもほどがあるんですけど!」

「お前もさつき騙されたよね? めっちゃビビって泣いてたよね?」

鳥頭なアクアは、過去の醜態をすでに消去していた。

それにしても、駄女神レベルに知能が低い敵とはいったいどんな奴等だろうか。ちよつとだけ気になったが、アクア程度の奴なんかどうでもいいかと思ひ直す。

そうして静かに歩みを進め、数十分後によく城の前まで来た。

「さて、量産型アクアの正体を拜んでやるとすつかかな」

「はあ？ 私少量産型ってどーいうことよ？」

遮蔽物に隠れた銀時は、絡んでくるアクアを適当にあしらいながら門番をしている敵の姿を確かめた。すると、そこには腐った死体が立っていた。

「どうやら、門番をやっているのはアンデッドナイトのようですね」

「百獣魔団じゃなくて不死騎団だったああああああーっ!!」

めぐみんの説明によって嫌な現実を理解してしまう。よりによって、もつとも苦手なホラー系が来ていたとは！

「あらあら、銀時さんったら冷や汗出まくりなんですけど？ もしかしてあいつらを怖がっているのかしら！」

「バババ、バッキヤロウ!? この俺があんな奴等にビビるわきやねえだろう!? 大体、あいつら不健康で痩せちやつてる人間だしっ！ 肌荒れが酷いのもそのせいなんだよバカヤローツ！」

「いや、不健康を通り越して死んじやつてますけど!？」

銀時の幼稚な悪あがきにアクアが呆れた声を上げる。すると、それに反応したのか、門番をしていた2体のアンデッドナイトが彼女めがけて突進してきた。

「ぎゃーっ!!? 腐った死体がこっちキターッ!!?」

「ちよっ!!? 主人公のクセにヒロインを置いて逃げないでほしいんですけどおっ!!?」

恐怖に負けた銀時は、あつさりアクアを放置して一人で逃げてしまった。こうなったら、自分の力であいつらを返り討ちにするしかない。

「プークスクス! アンデッドの分際で女神にケンカを売るなんて、身のほどをわきまえなさい!」

意外なことに、アクアはまったく怯んでいない。それもそのはず、神聖魔法のエキスパートである女神にとってアンデッドは雑魚にも等しい敵なのだ。茂茂が彼女の協力を欲したのもそれが理由であり、仲間の期待に応えるべく、ドヤ顔をしたアクアがターンアンデッドを放つ。

「魔に墜ちた死者達よ、聖なる力に抱かれながら安らかに眠りなさい!」

勝利を確信して決め台詞を叫ぶ。

しかし、魔法は効かなかった!

「えっ、なんで!!? 私の魔法を食らったのに、どうして成仏しないのおっ!!?」

信じられない光景にアクアはパニックってしまう。どういう仕掛けか分からないが、唯

一の取り柄である神聖魔法がほとんど効いていないらしい。

「予想以上に使えねえーっ!？」

「なにやっつてんだ駄女神エーっ!？」

アンデッド一匹すら倒せない女神様にマダオ達が失望する。しかし、そんな彼女に救いを手を差しのべる奇特な男がここにいた。

「女神に仇なす物の化め、天に代わって成敗いたす!」

アクアの前に躍り出た茂茂は、勇ましく啖呵を切ると愛剣を振りかざして襲いくる敵に立ち向かう。熊のコスプレをしたブリーフマスターは見た目に反してクルセイダーの力を得ており、瞬く間にアンデッドナイトを倒してみせた。

「切り捨て御免!」

「きゃーっ! 流石ですシゲシゲさん!」

時代劇の主役みたいな台詞をキメる茂茂に、頬を赤く染めたウイズが賞賛を送る。客観的には二匹の熊がじゃれあっている感じでアレだけど、こんなんでもアクアにとつては恩人だ。ここは尊い女神として、彼の活躍を称えてやるべきだろう。

「よくやったわ茂茂! 熊の毛皮で汗が蒸れて吐き気をもよおすほどに臭いから正直参ってただけど、これまでに受けた精神的苦痛はチャラにしてあげるわ!」

「あのバカ、感謝する体を装いながら將軍の体臭をディスプレイやがった!?! 一応雇い主だ

から、気を使つて必死に我慢してたのに!」

「お前も普通にデイスつてね!? 確かにあれはキツいけど!」

KYなアクアに便乗して銀時と長谷川まで本音を漏らし、哀れな茂茂をへこませてしまふ。見張りを排除したここからが本番だと言うのに、なにをやっているのやら。

アルダープが絡んでいるため意外に真剣なダクネスは、辺りを警戒しながらバカ野郎共を窘める。

「おいみんな、今はシゲシゲ殿の体臭を気にしている場合じゃないだろう。すぐ間近には、我らが宿敵である魔王の幹部がいるのだぞ。敗北した女騎士に、果たしてどれほどハードコアな変態プレイを要求するか、考えるだけで興奮すりゅっ!!」

「お前も変態ドMプレイを気にしてる場合じゃねーだろ!」

どうやらコイツは、魔王の幹部という燃料をぶっこまれていつも以上にドMの炎を燃え上らせているらしい。

「めぐみんはめぐみんで今にも爆裂魔法を暴発させそうだし、ホラーが苦手な銀さんは逆にテンション下げてるし、こんな奴等と突入して大丈夫なんでしょうか?」

この先の展開にカズマは不安を覚えたものの、熊やドM達は気にすることなく進んでいくので仕方なく付いていく。

するとその時、なにかに気づいたアクアが鋭い声で呼び止めた。

「ちよーつと待って！ この廃城、生意気にも結界が張つてあるわ！」

「はあ、結界？ それってアレか？ 魔王の城にも使つてるATフィールド的なヤツか？」

「まあ、大体そんなとこよ。あれは根暗な魔王軍が引きこもりたい時に使う心の壁みたいなものだからね！」

「そういう例えは止めてやれよ!? なんだかともても魔王軍に親近感が湧いちまうから！」

明らかに嘘だと分かる説明につっこむものの、結界があるという話は本当だ。そのことはウイズも事前に気づいており、くわしい事情を語りだした。

「恐らく、その結界は爆裂魔法を警戒したものでしょう。以前、私が魔王の城へ行つた時に爆裂魔法の連発で無理矢理結界を破壊しましたが、ベルディアさんにとつてはトラウマになっているのかもしれないけど、なんだか懐かしいですね」

「とんでもなく物騒なことを楽しい思い出みたいに語らないでくんない!？」

「なにを言っているのですか！ 爆裂魔法の素晴らしさが存分に伝わってくる、とつてもハートフルな思い出話じゃないですか！」

「ハートフルどころか、ベルディアのハートがフルボッコになってんだけど!?! つーか、ベルディアアってどこの誰!？」

めぐみんの感想はともかく、ウイズのせいで面倒が増えてしまっていたらしい。

だが、ここには結界を壊せるアクアがいる。神の力を持った彼女であれば、この程度の障害などどうということはない。

「ふっふっふ！　とうとう、この時が来たようね！　偉大なる女神の力をあんた達に見せる時が！」

「いや、だいたい前からたくさんありましたけど？」

どうしても自分のへボさを認めたくない駄女神は、カズマのつつこみを聞き流しながら仲間の前に進み出る。見てなさいよあんた達、今度こそ私が出来る子だつてことを思い知らせてあげるんだから！

「忌まわしき障壁よ、神の前より消え去りなさい！　〔セイクリッド・ブレイクスperl〕ッ！」

ノリノリのアクアが中二病のような言葉を叫ぶと、彼女の周囲に複雑な魔法陣が浮かび上がり、構えていた手の平に光の玉が出現する。それをかめはめ波のような動作で撃ち出して、行く手を阻む結界にぶち当たった。

「うお、すげえーっ！　かめはめ波的なエネルギーが結界に当たって、目に見えない膜のような物が一瞬だけ抵抗したけど、結局は力負けしてガラスみてえに砕けやがったあーっ！」

解説役の長谷川がやたらと詳しく説明する。どうやら、今回の魔法は無事に効いたらしく、憎たらしいまでにドヤ顔をしたアクアが自画自賛を始める。

「あらあら、そんなに驚いちゃって！ 私のすごさを理解して今更後悔してるのかしら？」

「いや別に？ どっちかつつーと爆裂魔法の方が見栄え良いし、お前のアレは『凍てつく波動』を思い出すからなんかイラツとくんだよなー」

「なにその感想!?! あんなに活躍しちゃったのに、なんで誉めてくれないの!?! 大体、凍てつく波動ってなによ!?! 高貴な私をドラクエのボス扱いしないでほしいんですけど!?!」

ちゃんとした成果を出しても難癖をつけられるとつても哀れな女神様。しかし、この駄女神はそうされても仕方がないことを既にやらかしていた。

なんと、必要以上に放出された神聖な気配に引き寄せられて、城の中にいたアンデッドナイトがすべて出て来てしまったのだ。

開いた門の向こうから大挙して押し寄せてくるゾンビの大群に全員が青ざめる。

「バカな女神がハッスルしたらバイオ○ザード起こったああああああああつ!?!」

間抜けな叫び声を上げると、一番ビビった銀時がまっさきに逃げ出して、他の連中も蜘蛛の子を散らすようにその場を離れていく。しかし、壁役を買って出た茂茂とダクネ



スだけは後に残って武器を構えた。

「ここは我らで押し止めるぞ！」

「当然、私に異論はない！ このような絶体絶命のシチュエーションを見逃す手などないからなっ！」

仲間のピンチを救うため、二人のクルセイダーが立ちはだかる。ダクネスの方はおかしな欲望丸出しだけど、仲間を助けたいという気持ちは嘘偽りの無い本物だ。

「さあ、かかってくるがいい！ たった一人の女騎士に集団で襲いかかり、その醜く朽ち果てた身体で淫らに汚してみせるがいいっ！」

なんかもう目的が変わってきた気もするが、幸いなことに（？）彼女が望むようなエロゲー展開にはならなかった。襲いかかってくるかと思われたアンデッドナイト達は彼らの横を素通りすると、なぜかアクアだけを追いかけ始めたのだ。

「わあああああーっ!! なんで私ばかり追われるのおーっ!! 私は清い女神なのに！ 日頃の行いも完璧だし、世界の愛されキャラなのにいっっ!!」

「くうーっ!! アクアばかりずるいぞ！ 私の方こそ本当に日頃の行いが良いはずなのに！ どうして私にはアンデッドが襲いかかってくるこないんだ!？」

「いや、日頃の行いが良いから襲ってこないんじゃないかね？」

欲求不満なダクネスは、お預け状態に興奮しながらアクアに抗議する。彼女の言い分

は正直どうでもいいのだが、アクアだけ追いかけている点は確かにおかしい。

「(ノルンは分かるか、ああなる理由?)」

《そりやまあもちろん分かるけど、アレは仕方ないんだよ。女神から発せられる神聖な気配は、成仏したいアンデッドを引き寄せちゃうからさー。例えるなら、異性を惹きつけるフェロモンみたいな感じ?》

「(どちらかと言えば誘蛾灯じゃねーか!?)」

女神の意外な欠点を知ってカズマはガツカリしてしまう。幸いノルンは分霊なのでアクアほど酷くはないが、アイツ一人だけでも十分に厄介だ。

「っていうか、いつまで私を放置する気!? そろそろ本気でヤバイから、早く私を助けなさいよおおおおおーっ!」

「つたく、しゃーねえなあ。おいウイズ、こんなところじゃ爆裂魔法は使えねえから、お前のマヒヤドでアイツ等を氷漬けにしてやれや」

「あの、申し訳ないのですが、私は手助け出来ません。以前、魔王に中立でいる条件をつけてまして『戦闘に携わる者以外の人間を殺さなければ干渉しない』ことになっているので……」

「このパーティーの魔法使いは揃いも揃って使えねえーっ!」

魔法が使えない魔法使いに怒りが湧いてくる。最初から期待していないめぐみんは

ともかく、ウイズまで戦力外とは……。

「どうすんだよ銀さん！ このままだとアクアちゃんがゾンビの仲間に入っちゃまうぜ  
!？」

「ええい、こうなりやもうヤケだ！ リアルなバイオ○ザードをやつてやろうじゃ  
ねえーかあーっ！」

覚悟を決めた銀時は洞爺湖を抜いて走り出した。考えてみれば死体自体は見慣れて  
いるし、アンデッドには物理攻撃が効くので幽霊ほど怖くはない。だったら後は、ゴリ  
スのように暴れてやるのみだ。

「ゴリス役は近藤の方がお似合いだけどなあーっ！」

その本人が意外なところにいるとも知らず、ヤケクソになった銀時はアンデッドナイ  
トの群れに飛び込んでいった。

## 第22訓 最大の敵は己の中にある

ようやく戦う気になった銀時は、アクアを追いかけ回しているアンデッドナイトの群に飛び込むと定番の雑魚無双を始めた。

「フハハハハハッ！ こいつぁ【銀魂乱舞】のステマに持つて来いだぜえーっ！」  
「ステマっつーか、モロに宣伝してますけど!?!」

さりげなく自分のゲームをアピールしつつアンデッドナイトを狩りまくる。その混乱に乗じて他の連中も参戦し、銀時をアシストする。地味に強い茂茂は普通に戦い、ドMなダクネスは自らサンドバッグになり、ビビりな長谷川とカズマはダクネスをフクロにしている敵を背後から攻撃する。

「はあ、はあ！ 敵を倒しやすくするために私を囿にするだなんて、やはりカズマにはクズ人間の素質があるな！」

「気持ち良さげな顔しながら、人聞きの悪いこと言ってるんじゃないよ?! ドMな仲間が自爆してボコられまくってるから助けてやってんだろーがっ！」

軽いケンカをしつつも、見事なチームプレイ（笑）で敵の数を減らしていく。ただし、単なる見物客と化している僧侶と魔法使いはクソの役にも立っていないが。

「いいわよみんな！ 水の女神である私のために汗水垂らして働きなさい！ ご褒美に私の華麗な宴会芸を披露してあげるから！」

「そんなもんより、スカラとかバイキルトを使ってくんない!？」

「そうですよアクア！ こんな時こそ魔法の支援が必要なんじゃないですか！」

「メガンテしか使えない奴に文句を言う資格は無えよ！」

残念ながら後方支援はまったく当てにできなかった。

それでも、この程度の相手なら銀時の敵ではない。あれだけの大群を相手にしたにもかかわらず、わざと攻撃を受けていたダクネス以外はノーダメージで勝利した。

「つたく、やたらとわんさか湧き出やがって。リアルで【銀魂乱舞】すんのはやっぱ楽じゃねえな。もちろん、ゲームの方は楽しいけどな！」

「まだステマ続けてるよ!? どんだけ売り込み必死なの!？」

激闘を繰り返したばかりなのに、我らが主人公は余裕のある発言をする。だが、それも長谷川の言葉でひっくり返る。とにかく、これで城の中に入れるようになったけど……。

「ごくり……改めて見るとやっぱ怖えな……。ゾンビが住んでるくらいだし、幽霊とかも出るかもしれねえ」

「よおーし、分かった！ 俺はここで留守番するから、後のことはヨロシク頼む！」

「潔いほどの即決で主人公の役目を投げ捨てたあーっ!？」

恐怖心に負けた銀時は城に入ることを拒絶した。肉体があるアンデッドはともかく、物理攻撃の効かない幽霊は流星に相手が悪過ぎる。わざわざ無敵状態のマリオに立ち向かうほど無謀ではないのだ。

「つーわけで、お前等だけでさっさと用事を済ませて来いやー!」

「ちよ!?! リーダーのクセになに無責任なこと言ってるんだよ銀さん!?!」

「うっせーマダオ! 正社員じゃないからって、なんでもかんでもリーダーに責任背負わせてんじゃねえーっ! リーダーだって人間なんだよ! 心の弱い人間なんだよ!

だから、時には逃げ出して、過度のストレスから命と髪を守らなきゃならねえーんだよっ!」

「なに勝手に中間管理職の悲哀を代弁しちゃってるの!?! お前はただ幽霊が苦手なだけじゃねえーか!?!」

バカなマダオ達は互いに精神的ダメージを与えつつ罵り合う。そこへウイズがおずおずと言葉を挟んだ。

「あ、あの。この城にいた幽霊達は以前私が供養しましたから、今はなにもいませんよ?」

「流星はウイズだ、口ばっかでクソの役にも立たねえ駄女神とはウンコとカレー以上に

出来が違うぜ」

「うわああああああんっ?! 腐れリッチーより格下に見られた上にウンコ扱いされたああああああーっ!?!」

あんまりな物言いに災難続きなアクアが泣き叫ぶ。その姿に少しだけ同情するもの、誰一人として銀時の言葉を否定する者はいなかった。

いろいろなアクシデントを乗り越えた一行は、いよいよ城内へ乗り込んだ。内部は意外ともぬけの空で、警戒していた敵はいない。アクアのおかげ(?)でほとんどのアンデッドナイトが城外に出てしまったのだ。

「ええい、なんたることだ! 魔王軍の拠点だというのに敵が出ないばかりか罠の一つも仕掛けてないとは! 常識外れにもほどがあるぞ!」

「お前の方こそ非常識だろ! マリオの城じゃあるめえし、こんな汚え廃城に『クツパの方が苦痛なんじゃね?』って思うほどのふざけた罠があるわきやねえーだろ!」

欲求不満なDM騎士が変なところに突つかかる。とりあえずつつこんだものの、ここまで静かだと確かに拍子抜けしてしまう。

「つーか、なに? やたらと掃除道具が置いてあるんだけど、あいつらここでナニやってんの?」

「それは当然、大掃除に決まってるじゃありませんか。長らく人が住んでいない中古物件に引越すなら常識的なことですよ」

「魔王の幹部が越してくること自体、常識的じゃないんだけど!? 心も体も腐った奴等が侵略そつちのけでハウスクリーニングとか、明らかにおかしくね!?」

めぐみんの説明で、奴等が暢気に引越し作業をしていることが判明した。ここに来ている魔王の幹部はかなり人間臭い性格をしているようで、そいつと面識があるウイズはなるほどと納得する。

「生前のベルディアさんは大国に仕える立派な騎士だったらしいですから、自分のお城が持てて嬉しかったのではないのでしょうか? たぶん、前から一国一城の主に憧れていたのかもしれないね」

「一国一城の主どころか、空き屋を勝手に使ってる住所不定のマダオそのものなんだけど!? つーか、ベルディアって誰なんだよ!? もしかして幹部の名前!」

「はい、そうです。アンデッドの軍勢を率いているのは、デュラハンのベルディアさんです」

ここに来てようやくウイズから事情を聞く。どうやら、彼女は幹部の素性を知っているらしいとカズマが気づいて質問する。

「そーいやあ、さつきもベルディアとか言ってたけど、もしかしてウイズはそいつと仲良



いのか？ 一応、幹部同士だし……」

思ったことを何気なくつぶやいてみたら、目を光らせたアクアが予想外に食いついて来た。ちゃらんぽらんな彼女の脳内で良からぬ妄想が爆発したのだ。

「あくっ！ もしかして、そのベルディアって奴、アンタの元カレなんじゃないの〜？」  
「なっ、それは誠かウイズ殿?!」

「ちちち、違いますよシゲシゲさん!? ベルディアさんはただの知り合いであって、むしろ私は苦手なんです！ だって彼は、私と会う度に自分の首をわざと転がしてスカートの中を覗こうとしましたから……」

「な、なんと破廉恥な！ ウイズ殿のぼんつを卑猥な角度から覗こうとするとは、許すまじベルディア!」

「っーか、その人ナニやってんの!? 頭が取れるみたいだけど、利用の仕方が頭悪いよ！ 盗撮に使ってる隠しカメラと代わんねえーよ!」

ポロリと明かされた真実に全員が呆れてしまう。よもや、世界中の人々に恐れられている魔王軍の幹部が別の意味で恐ろしい変態野郎だったなんて、いろんな意味で切な過ぎる。ただ一人、ノルンだけはやたらと楽しそうだが。

《ぎゃはははは！ ベルディアって奴は面白いねー！ ウイズは気づいてなかったみたいだけど、彼女が魔王城にいた頃に、ソイツははあはあ言いながら後を付け回してたみ

「たいだよ?」

「(もうそれただのストーカーじゃね?!)」

ウイズの過去を見たノルンからさらに嫌な情報を聞いてしまった。どうやら、ベルディアという幹部はウイズに好意を抱いているらしい。

《ぶふーっ! ウイズは茂茂に惚れちゃってるから、すでにムリゲーなんですけど!

知らぬ間にヤムチャのような負け犬となっていた事実を知った時にベルディアちゃんがどれほど間抜けな顔を見せるか、とつても楽しみだなあー!》

「(お前、女神のクセにすっげえエグいな……)」

悪魔や魔族に容赦ない女神の危険な一面を見て、流石のクズマもドン引きする。これまで酷いとベルディアって奴に同情してしまいたいものになるもの、相手は倒すべき魔王軍の幹部だ。人類の生存を脅かす敵に情けなど無用だし、今は他にやる必要がある。

雑談している間に地下の宝物庫へ到着し、ウイズはすぐに結界の無事を確認する。

「どうだウイズ殿」

「はい、まったく問題ありません。解除しようとした痕跡はありませんけど、結局断念したようです」

笑顔で茂茂に答えながらウイズは魔法的な作業を進める。すると、宝物庫の周辺が一瞬だけ光った。

「お待たせしました。結界を解除したので部屋に入れますよ」

「よっしや、お宝ご開帳じゃーっ!」

「待ちなさいよ銀時! 最初に入るのは高貴な私の役目でしょうっ!」

ウイズの許可が出た途端に遊び人と駄女神が部屋の中へと駆け込んでいく。その様子を呆れ顔で見ているためぐみんは、どうせ自分の物にならないのにと冷めた気持ちで後が続く。しかし、実際に財宝を見たら、クールぶっていた彼女もテンションを上げてしまふ。

「うお!? なんですかこの眩しさは!? まるで絵に描いたようなお宝じゃないですか!」

「眩しくて当然だ。ここにある財宝は、この領地の人々が賢明に働いて稼いだ尊い資産なのだからな……」

驚くめぐみんに対して、申し訳なきような顔をしたダクネスが言葉をかける。ここに  
ある財宝は、悪徳領主のアルダープが不正を働いて領民から巻き上げたものを茂茂達  
が取り戻した大切な成果なのだ。そして、今度は魔王軍の略奪からも守ることが出来た。  
込み入った事情があるダクネスとしても喜ばしい勝利である。

「しかしまあ、随分と貯め込んだもんだなあ……。中には変な物体もあるみたいだけど」  
最後に入って来たカズマが辺りを見回しながらつぶやく。お金、宝石、貴金属といっ

た普通のお宝に紛れて、アルダープが集めたらしい珍品がいくつか目についた。

すると、財宝を物色していたためぐみんが、その中の一つを手にとって紅い瞳を輝かす。それは、どこかで見たことがあるような「ゴスロリ風の折りたたみ傘」だった。

「こ、これはっ!?」なんと素晴らしい魔道具でしょうか! なぜだか理由はわかりませんが、紅魔族として見逃せない極上の一品ですよっ!」

「異世界の中二病が、小鳥〇六花のシユバルツゼクス・プロトタイプMk-2と奇跡のコラボを実現したあーっ!」

時空を越えた中二病の共鳴にカズマは思わず感動してしまう。あいつらは世界を隔てていたとしても分かりあえるんだな……どっちも頭がおかしいから。なんの説明も無くシユバルツゼクス・プロトタイプMk-2（折りたたみ傘）を使いこなしているめぐみんを眺めながらそんなことを思った。

すると、今度は別のベクトルで頭がおかしいダクネスが騒ぎ出した。

「見てくれカズマ! こんなところに素晴らしいデザインのアクセサリーがいっぱいあるぞ! これを装備すると身も心も引き締まって、なんだか気持ち良くなってくりゅ!」

「どう見てもSMPプレイ用の拘束具なんだけど!? つーか、普通に使ってるじゃねえーっ!」

ドM騎士がSMグッズを発掘してきて興奮している。どうやら地球で作られた質の良い物らしく、こんな変態アイテムでもこの異世界ではお宝になるようだ。

「それ以前に誰が持ち込んだんだよこんなモン!!? 転生者だとは思うけど、死んだ時に持ってたの!!?」

もしかして、SMプレイ中にお亡くなりになったのかと悲惨な絵面が脳裏に浮かんでげんなりとしてしまう。すると、それに追い打ちをかけるようなタイミングで長谷川がナニかを持って来た。

「おい、すげえぞカズマ君! 地球産のエロ本がこんなところにあつたぜえーっ!」

「なに!!? 俺にも見せてくれ!」

「お前も使う気満々じゃないか!」

スケベ心に負けたカズマはダクネスにつっこまれた。結局は、どいつもこいつも自分好みのお宝に引き付けられてしまいました。

こうなると、気になるのは最初に飛び込んだバカ兄妹の反応だが……。

「つたく、貧乏人共はこれだから嫌だねえ。しがたない冒険者が宝の山を前にしてバカみてえにテンション上げちまうのは無理もねえが、この埋蔵金はお前らのモンじゃあねえ! 街のみんなのモンなんだ!」

「ええ、そうよ! ここにある財宝は、この地の民に返すもの! そのような浄財に手を

つけるなど、水の女神の名において許すわけにはいかないわ!」

「とか言いながら、財宝で作った服を華麗に着こなしてるうーっ!?」

珍しく真面目なことを言っていると思つたら、あからさまにお宝をパクろうとしてました。これまで静かにしていたのは財宝を繋ぎ合わせた金ピカの服を作っていたからであり、あわよくば着たまま持ち帰ろうとしていたのではないかと疑つたためぐみが直接確かめてみた。

「もちろん、そのまま持つていこうだなんて思つていませんよね?」

「えっ!? ああ、そうよ!? そんなのモチのロンじゃない!」

「バ、バカだなお前ら! 仮にも魔王を倒そうつて勇者がそんなマネをするわきやねえだろ!? これはアレだよ、財宝でワンピースを作つて『ひとつつなぎの大秘宝』を再現しようという、ちよつと小洒落たお遊びだよ!」

「ジャンプを代表する名作をアホな言い訳に使うんじゃないっ!?」

本気が冗談か微妙な感じのバカ共に冷たい視線を向ける。まったく、どいつもこいつも好き勝手に暴れやがって……。クレイジーな仲間のせいで新八並につっこみをやらされたカズマは、ボスと戦う前に疲弊した。

「おいウイズ。俺はもう疲れたから、さっさとコレを片づけてくれ」

「あつ、はい、そうですね!」

これまでのやり取りを苦笑しながら見ていたウイズは、やつれた様子のカズマに言われてようやく仕事を開始した。そう言えば、いつ敵が来てもおかしくない状況なので、ふざけてばかりはいられなかった。

めぐみん達がしぶしぶ宝を返したのを確認すると、ウイズはすぐさま魔法を使う。

「それでは行きます！ 【テレポート】 ツ！」

凜とした声でウイズが叫ぶと、光輝いた財宝が一瞬のうちに転移していく。それを数回繰り返して、あつと言う間にすべての宝を事前に登録した隠し場所へと移し終わった。魔力消費の大きいテレポートの連発が可能なりツチーならではの仕事っぷりである。

「ああ、私の埋蔵金があーっ！」

「行かないでください、シユバルツゼクス・プロトタイプMk-2うーっ！」

「未練がましい奴等だなあ、オイ!? 俺もエロ本欲しかったけど！」

欲深いバカ達はお宝との別れを惜しむ。最後まで間抜けな状況になってしまったものの、とにかくこれで茂茂達の目的は達成できた。

「皆の衆。此度の働き、誠に大義であった。敵地より脱出する仕事が残っているが、ひとまず礼を言わせてもらおう」

「ふっ、なに水臭えこと言ってやがんだ。俺らはただ、困ってるダチのために手を貸して

やっただけだぜ。ところで話は変わりますけど、今回の報酬は、魔王軍の幹部に襲われるかもしれないという危険手当も含めて、たんまりとお願いします」

「前半の友情が最後のセリフで台無しじゃね!？」

カズマの意見はもつともだったが、それはそれ、これはこれである。しかも、がめつ  
い遊び人はさらなる戦利品を狙う。

「とまあ、將軍の用事も済んだことだし、次はこっちの番だな」

「えっ!?! まさか、本気でベルディアって奴と戦う気なの!?!」

「ああ? さつきも言ったが、そんなことあしねえよ。ウイズと將軍がいる状態でベルディアとかいう変態幹部とエンカウントしたら、一昔前の昼ドラみてえな修羅場が起きちまいそうだからな。中ボス戦は日を改めてやることにするさ」

「だったら、これからなにすんの?」

「んなもん、決まってるじゃねえーか。勇者が敵の城に来たら、まず最初になにをする? 宝探しでしょう!」

「そーよ、そーよ! その通りよ! デュラハン程度の小物とはいえ、腐つても幹部なんだから、きつとそれなりに金目の物を持つてはるはずだわ!」

おやおや、遊び人だけでなく駄女神まで碌でもないことを言い出しましたよ?

さらに、中二病やDMまで話に乗って来た。



「それは面白そうですね。もしかしたら、シユバルツゼクス・プロトタイプ Mk-2 の代わりになるほどの発見があるやもしれません」

「もちろん、私に異論はないぞ！　まだ発見していない、残忍かつ卑猥な罠があるかもしれないからな！」

「俺は、お前らをまともにしてくれる医者が発見してえよ！」

どうしても厄介な方向に行きたがるバカな仲間が涌く。しかし、所詮は新人の身。彼の意見を聞く者なんて誰もおらず、結局危険な宝探しが始まった。

「いいかお前ら。こういう時ボスつてのは玉座にドンと構えてジツと動かねえもんだ。それゆえに、謁見の間だけ避けておけばなんも問題ねえ！」

「お前の頭に問題アリだよ！　マジで命かかってんのに、ドラクエ思考で行動すんなっ！」

幼稚かつ無謀なリーダーにカズマは戦慄する。桂もかなりの変人だったが、こいつはもつとヤベエな……。心の中でバカなリーダーをディスりつつ、しぶしぶ後についていく。木刀を振り回して辺りの物を破壊しながら家捜ししていくアブナイ遊び人を見ていれば誰でもそう思うよね。

「これでなんも収穫が無かったら、エロ本の代わりに女子共のぱんつをスタイルしてやる！」

「最低な企みが口に出ちゃってますよ?」

隣にいたためぐみにクズ過ぎるぼやきを聞かれてしまった。しかし、彼がぼやくのも仕方がないほどに収穫が無かった。所詮、相手は腐った死体。金目の物など何一つ持つてはいなかったのだ。

期待していた成果も無く怒りに燃える銀時は、最後に残った【王の部屋】に一縷の望みを懸ける。

「ふざけんじゃねえぞ?! アイツらぜつてえーどつかにお宝隠してあんだよつ! 今度こそマジで見つけてやんよつ!」

ニコチンが切れた土方のようにイライラしながらドアを蹴破る。恐らく、ベルディアが使っているだろうこの部屋ならばあるいは……。そう思つて入つてみたら、予想に反してなんも無かった。

「チクシヨオオオオオオオオツ!! こんだけ探して宝箱の一つも無いとか、どう考えてもおかしいだろう!?! 魔王軍の給料は、それほどまでに悪いのか!?! 幹部ですら安月給のブラック企業なのかあーっ!?!」

「そういう話じゃないんじゃね?!」

銀時がついにキレて、魔王軍の経済状況にケチをつけ始めた。実際には、その辺りの事情がどうなっているのか分からないけど、単身赴任先に全財産を持つてくる方が不自

然な話だろう。一応社会人の長谷川はどのように納得したが、諦めの悪いアクアはしつこく食い下がる。

「まだよ、まだ終わらないわ！　いかにも貧乏そうな感じを装ってる奴の方が意外に貯め込んでいるんだから！」

「お前、実は盗賊だろ？　僧侶に転職した盗賊だろ？」

ジト目のカズマに蔑まれながらも、懲りない駄女神は探索を始める。その様子に呆れた他の連中も仕方なく付き合っていると、引き出しを調べていためぐみんが何かを見つけた。

「こ、これは!?　とんでもないものを見つけましたよー！」

「なになにめぐみん！　もしかして、デツカイ宝石でも発見したの!？」

「いいえ、違います。私が見つけたのは「ベルディアの日記」です」

「やくそうよりも使えないゴミアイテムなんですけど!？」

ガツカリさせられたアクアはあからさまに脱力する。他人の日記なんて、お宝どころか使い物にならないでしょう。アクアは元より、普通の人ならそう思うところである。しかし、我らがクズマさんは違った。これで弱みを握ってしまえば、ボス攻略に使えんじゃね？

「おい、めぐみん。その日記を読ませてくれ」

「フッフッフ、流石はクズマ。他人の日記すら良心の呵責も無く読むことが出来るのですね」

「誰がクズマだ中二病!? つーか、お前も読む気満々じゃねーか!」

ニヤリとしながら日記を広げたためぐみんは、近寄って来たカズマと一緒にそれを読み出した。その光景を見てなぜかダクネスが興奮するが、銀時にとってはもはやどうでもいいことだった。

「くうんっ! 魔王の幹部が書いた日記とはいえ、決して他人に見られたくない恥ずかしい秘密をあそこまで無慈悲に晒け出されてしまうなんて! もし私が同じことをされたとしたら、いろんな部分が耐えられないっ!」

「もうすでに、見るに耐えない状態ですけど!? これ以上、こんな茶番に付き合っていないか! もう宝探しは終わりだ終わり!」

「そうだなあ。もう宝は無さそうだし、とつとと帰ってメシでも食おうぜ」

銀時の意見に長谷川や茂茂も同意して、ようやく城から脱出することになった。

だがしかし、最強クラスのトラブルメーカーである銀時とアクアがいるというのに、このまますんなりと終わるはずがない。なんと、王の部屋から出てそのまま帰ろうとした一行を、謁見の間から飛び出してきたベルディアが呼び止めたのである。あれだけ騒いで破壊活動をしていれば、そりゃあ怒って来るよね。

「おい、貴様等あああああーっ!! ちよつと待てえええええええいつ!!」

「はあ? なにアイツ。取れた頭を手に持つてるけど、アラレちゃんの口ポットキャラ?」

「違いますよ! あれはデユラハンという高等モンスターです!」

怒声を発した者の正体に気づいたためぐみんが驚いた様子で説明する。もちろん、カズマも理解して、たたりと冷や汗を流す。

「デユラハンってことは、まさかアイツがベルディアなのか!」

「ああ、そうだよ哀れな小僧! 俺の名はベルディア! 魔王軍幹部が一人、デユラハンのベルディアだっ!」

「まあ、聞きましたか銀時さん! あちらのお方は、ウイズのばんつを覗き見たって噂になってる、あのベルディアさんですって!」

「へえ、そうなのかいアクアさん? あいつが、ウイズのばんつを覗き見してたっつうベルディアって変態ですかあ!」

「ちよっ!?! なんてお前らが知ってるの?!? まさかウイズが広めてんのか?!? もしくはバニルのイタズラかあ!?! 大体、今それ関係ねえだろ!?! お願いだから忘れてくれよっ!?!」

女神とドSの先制口撃を食らって、ベルディアは心にダメージを受けてしまった。熊

の頭でとつさに顔を隠したウイズに気づいていないだけマシだけど、この口撃は精神的にも社会的にも痛恨の一撃だ。しかし、ベルディアの方にも口撃するネタはあった。

「ええい、チクシヨウ！ 雑魚だと思つて優しくしてりやあ調子に乗りおつてえーっ！ 我が城に攻め込むほどの勇者が来たかと待ちかまえておればいつまで経つても来る心配がなく、気になって見に来てみれば変な熊とチンピラが部屋を荒らし回つていたりか、いつたいこれはどういうことだよ!? お前らはなにしに來たんだ!? なんで部屋を破壊する!? せつかく綺麗に掃除したのに、汚すどころかぶつ壊すとか、どんだけ頭がおかしいのだっ!」

「うっせーぞ、ジオング野郎！ お前の方こそおかしいだろう!? 頭の位置がおかしいだろう!? そんなテメエの頭なんざ、ぱんつを覗くぐらいいしか使い道が無えんだよ!」

「ぐぬぬぬっ! この俺の身体的特徴を上手いことディスプレイおつてえーっ!」

ドS野郎に口ゲンカで負けた瞬間、パンパンに膨らんでいた堪忍袋の緒が切れた。

「もう許さんぞ貴様らあーっ! 雑魚を狩る趣味は無いが、魔王軍の幹部を侮辱した報いはきつちりと受けてもらうっ! まずは『こいつ』で精神的に追いつめてくれるわっ!」

そう言つてニヤリと笑つたベルディアは、左手の人差し指を銀時へと突き出した。これはまさか……!」

「汝に死の宣告を！ お前は一週間後に死ぬだろう!!」

その瞬間、デュラハン固有の特殊スキルが発動して、凶悪な死の呪いが銀時に襲いかかる。しかし、彼も只者ではない。歴戦の勘によって危険を察知し、間一髪のところ回避に成功する。ただし、外れた呪いは、たまたま後ろにいたウイズにヒットしてしまっただが。

「きやああああああっ!!」

「銀さんが避けたせいで呪いがウイズに当たったあーっ!!」

「ちよっ、待てよ!! これはいわゆる不可抗力で俺はなんも悪くねえーっ!! つーか、ウイズは大丈夫かあーっ!!」

「は、はい……私は元々死んでいるので、死の宣告は無意味なんです」

「だったら、私に当たってれば良かったのに!」

「DMは全裸で日光にでも当たってろ!」

ダクネスの戯言はともかく、ウイズが無事だなによりである。それをアピールするよ  
うに呪いが当たった胸元を叩いてみせるが、つがいの熊である茂茂は心配そうに彼女へ  
寄り添う。

「ふう、良かった……。ウイズ殿にもしものことがあつたら余は……」

「シ、シゲシゲさん……（恥）」

「そんな不気味な格好でイチヤイチャしないでくんない!? リアルな熊のラブシーンとかケモノーですら需要無えからっ!」

多少のやつかみも含めて銀時がつっこむ。しかし、ウイズに気があったベルディアにとってはやつかみどころでは済まない。

「おい、ちよつと待て。今お前からウイズと言ったか? その熊がウイズだと?」  
「ああそうですけど、それがなにか?」

適当な銀時はあつさりとバラしてしまうが、死の宣告を無効化してしまつてはどちらにしろごまかしきれない。ウイズはすっぱり観念して素顔を明かした。

「お久しぶりですベルディアさん」

「ほんとにウイズだったあああああつ!? えつ、なんで!? どうしてお前がここにいの!? よもや、魔王様との契約を破るつもりかあーっ!」

「そんなことはしませんよ! 私は、契約に反しない範囲でシゲシゲさんのお手伝いをしているだけです!」

「なにっ、シゲシゲだと!? 紅魔族のようになられた名だが、そいつはいったいどこのどいつだ!」

「おい、紅魔族の伝統に文句があるなら話を聞こうじゃないか!」

ベルディアの言葉に怒つたためぐみんがヒートアップするものの、彼女が暴走する前に



茂茂が名乗り出た。

「ベルディアと申す者よ、お主が言っている茂茂とは余のことだ」

「な、なにい!?! 仲良さげにウイズとパールックをしている貴様がシゲシゲだとおーっ!?!」

「いやこれ普通ペアルックとは言わないよね? どう見てもリアルな熊だし、仲良しアピールしてないよね?」

確かに、そこは勘違いしているものの、恋敵の登場にテンパっているベルディアにとっては大体同じことだ。本名の方が知られていないおかげで魔王軍に危険視されているブリーフマスターであることまでは気づかれていないものの、嫉妬を込めた激しい敵意がすでにビンビン向けられていた。

「おっ、おのれっ! 俺の大切な仲間を籠絡しやがってえーっ! どうせ貴様も、巨乳なウイズのワガママボディーを狙って近づいてきたスケベ野郎なんだろう!?!」

「それはお前のことじゃねえーか、アクロバティック痴漢野郎」

茂茂の代わりに銀時がつっこみ、他のみんなも同意する。

それにしても必死ねコイツ。明らかにおかしいベルディアの様子から事情を察したアクアは、キュピーンと目を光らせる。

「ねえ、あんた。もしかして、ウイズのことが好きなんじゃない?」

「フアツ!? ななななに言ってるんだお前っ!? おおお俺がこいつを好きになるとか、絶対あるわけないだろうっ!?」

「ブークスクス! このデュラハン、露骨に動揺しちゃってますけど! イタイところを私に突かれて涙目になってますけど!」

「なっ、泣いてないやいっ!! (泣)」

人を小バカにする時だけ輝けるアクアのせいで、ベルディアの純情ハートは大ダメージを受けてしまった。

さらに、この状況を好機と見たカズマは、さきほどゲットした日記を使ってどぎつい追撃を加える。

「おい、めぐみん。アレを読んで、さっきの呪いを返してやれ」

「了解です! 封印を解かれし禁書の威力、しかと思いきるがいい!」

「あーっ、それは俺の日記!」

ベルディアの悲痛な声が響く中、カズマの指示に応えためぐみんは、ポーズをキメつつ例の日記を音読しだした。

『今日俺は、占い師の言っていた「強い光」とやらを調査するためにこの地へとやって来た。その正体がなんであるかはまだ見当もつかないが、調べを進めていけばいずれ判明するだろう。そもそも、ここにはもう一つ、強い光を放っている眩しい存在がいる。』



「なんだその詠唱は!? まさかそれは、悪魔や幻獣を喚び出す高度な召喚魔法かぁーっ!?」

「確かに召喚魔法だが、俺が喚ぶのはテムエの想像を遙かに超える代物だぁーっ!」

「なんだとおーっ!?」  
「反応が遅れたベルディアは足元に現れた魔法陣に気づいたが、もはや逃げることはできない。」

「これでも食らえい!」【トライアングル・ホース】ツ!!」

「ぐほおおおおおおおおおーっ!」

「つて、ただの三角木馬じゃねえかああああああああつ!」

想像を遙かに超えるふざけた展開にカズマが吼える。これをみんなに見せたかった銀時は、この重要な場面で披露しちゃったのだ。

ていうか、どこから出したのこんなもん……。ものすごい勢いでベルディアの股間を直撃した三角木馬に、ダクネス以外の全員が顔をしかめる。

「説明しよう! このスキルを受けた者は、アソコやケツが敏感になって歩き辛くなるのだ!」

「三角木馬でダメージ受けてるだけじゃねえーか!」ムカつくほどにどうでもいいわ!」

調子に乗ったバカリーダーのせいで、せっかくのチャンスが台無しになってしまった。このままでは、怒り狂ったベルディアの逆襲が始まってしまう。

そんな危機的状况の中、我らが女神が立ち上がる。

「ふーやれやれ。ギャグキャラはこれだからバトルの時に使えないのよねえー」

「なんだとテメエ!? 俺よりクソなギャグキャラのクセに、いつたいナニができるってんだ!？」

「ふん、そんなに分からないと言うんだったら、その腐った目を見開いてよく見てなさい! 超絶優秀な女神たる私の真価をね!」

何度失敗しても懲りないアクアは、荒ぶるDSを放置して必殺の魔法を放つ。今度こそ、手加減無用の女神パワーでビシツと決めてやるんだから!

「ウイズの巨乳にムラムラしているいやらしいアンデッドよ、私の威厳を回復するため消えて無くなんなさい!」【セイクリッド・ターンアンデッド】ーツ!!」

「ふおおおおおおおーっ!!」

三角木馬に跨がされたまま股間の痛みを堪えていたベルディアは、さらにアクアの魔法を食らった。天に向かって突き上がる神聖な光がアンデッドの肉体を浄化していき、全身を包み込む鎧の間隙から黒い煙が吐き出される。

「あひいいいいいんっ!? なんだこの感覚はっ!? 神聖魔法が股間に沁みて心地良く

なつてイクウウウウウーツ!!」

「女神の神聖魔法よりドSスキルが効いてるうーっ!!」

アクアが放つた渾身の一撃はなぜかあまり効果がなく、遊び人スキルのせいでDM化していた相手を喜ばせるだけになってしまった。

「えっ、なんでえ!!? どうしてこんな変態に私の魔法が効かないのおーっ!!」

「それはあいつもドMだからだ! 同じ性癖を持つこの私には分かる! あいつにとつて痛みとは忌み嫌うべきものではない。自ら受け入れ、享受するべき最上級の幸せなのだ!」

「まったく違うわボケエーツ!? この俺は、魔王様の加護により神聖魔法に対して強い抵抗力を持っているのだ、はあくんっ!!」

「否定しながら感じてますけど!? オツサンの喘ぎ声とかキモ過ぎだから止めてくれよ!」

「ち、ちきしようっ! あんな職にも就いてなさそうなオツサンにまでバカにされるなんてっ!」

ダクネスや長谷川からおちよくられて悔し涙を浮かべたベルディアは、とある決意を固めた。もう我慢の限界だ。ウイズの知り合いなので、適当に脅したら見逃してやろうと思っていたが、ここまでコケにされては、もはや許しておけない。

「どいつもこいつもふざげやがって！ 貴様ら全員、皆殺しだあああああーっ!!」  
ベルディアの目が不気味に赤く光った瞬間、カズマが恐れていたリベンジが始まった。忌々しい三角木馬を左腕で叩き壊すと、後方に待機させていたアンデッドナイト達を呼び寄せる。

「雑魚だからとて、手加減などは一切せんぞ！ 貴様らみたいな頭のおかしい連中なぞ、全力で叩き潰してくれるわあーっ！」

「きゃーっ!? どうしよう銀時さん!? あいつ、めっちゃ怒ってますけど!? 股間の痛みでプルプルしながらプリプリ怒ってらっしゃいますけど!?!」

「落ち着け、駄女神！ こうなりやもう殺るしかねえだろ！ 億万長者になるために！」  
「はっ、そうだ！ 今こそあいつを殺る時なのよね！ 億万長者になるために！」

「ベルディアの言う通り、こいつら頭おかしいよ！」

ベルディアの怒号と同時に襲いかかってきたアンデッドナイトに焦りながらも、覚悟を決めた銀時達は敵を迎え討つ。

出てきた雑魚は10体ほどしかおらず、銀時と茂茂がそれぞれ数を減らしていく。

だが、すべてを倒しきる前にベルディアが動いた。2体目のアンデッドナイトを切り倒した茂茂の前に、股間のうずきを我慢したベルディアが高速移動してきたのだ。

「思っていたよりはやるようだが……」

「なっ!?!」

「それでも俺の敵ではないわっ!!」

「ぐはあぁーっ!!」

声に気づいた瞬間にベルディアの大剣が振り下ろされていた。袈裟懸けに切られた衝撃で熊の毛皮が無惨に飛び散り、ブリーフ一丁になった茂茂が激しく床を転がっていく。

「きゃあああああああつ?! シゲシゲさぁーんっ!!」

想い人のピンチに悲鳴を上げながらウイズが駆け寄っていく。幸い、守備力が一番高いクルセイダーをチョイスしていたおかげで切り傷の方は大したことなかったものの、強い衝撃によってかなりのダメージを受けていた。

「ベルディアさん……」

「は、はいっ!?!」

「魔王との契約があるので、私はあなたに手を出すことはできません。でも……シゲシゲさんにもしものことが起こったら保証できませんからね?」

「ひっ、ひいひいひいひいっ!?!」

リッチーから向けられる絶対零度の眼差しがベルディアの心を凍らせる。嫉妬の感情に負けて恋敵を狙った結果、片想いの相手に嫌われてテンションを下げてしまう。ま



るで、『中学生あるある』みたいなイタイ光景である。

熱くなった空気が一気にしらける中、リッチーモードから元に戻ったウイズが泣きそうな顔でアクアを呼んだ。

「アクア様！ シゲシゲさんに回復魔法をお願いしますー！」

「はっ、はいいい!? もちろん、やらせていただきますー！」

おつかないウイズにビビッて銀時の背中に隠れていたアクアが、愛想笑いを浮かべながら近づいていく。やっぱり駄女神では恋するリッチーに勝てなかつたよ……。

それでも、自分に活躍の場が来たことは喜ぶべきところである。気を取り直したアクアは、ニコニコとしながら横たわっている茂茂の傍にひざをついた。

「お待たせ、将ちゃん！ 今すぐ私が回復魔法をかけてあげるオゲエエエエーッ！」  
「回復魔法じゃなくてゲロかけたああああああああつ！」

まさかの事態にみんなで驚く。果たして、アクアの身にいったいなにが起きたのだろうか。

「ど、どうしたんですか、アクア様ーっ!？」

「しよ、将ちゃんの身体から、牛乳を拭いた雑巾みたいな悪臭が……ウツプー！」

「あー、それはアレだよ。熊の毛皮を着て暴れたもんだから、中で汗が蒸れまくって、ただでさえ臭い將軍の体臭がさらに濃縮されたんだよ」

「それでアクアがやられたのお!? 吐くほどに臭いつて、どんだけ体臭きついのが將軍!」  
銀時の解説に、カズマ達だけでなくベルディアまで引いてしまう。つまり、熊の毛皮という封印が破壊されたせいで、恐るべき毒ガスが解き放たれてしまったのだ。愛という力に守られたウイズはまったく気にならないようだが、アクアという犠牲者を見たカズマ達は近寄ることを躊躇する。

しかし、この手の逆境に強いダクネスだけは違った。

「おい、みんな! そんな態度は世話になつてるシゲシゲ殿に失礼だろう! 大体、モンスターと戦う冒険者にとつては、この程度の悪臭など気にするほどではないオゲエエエエーッ!」

「気になり過ぎてゲロ吐いたああああああーっ!?!」

尊敬する茂茂をかばったダクネスは、問題無いことをアピールしようとして失敗した。DMの欲求に負けて、おもいつきり吸い込んだことが災いしたのだ。

「お前までなにやつてんだ!? DMなのにDSしてるぞ!? キャラ崩壊つてレベルじゃねえぞ!」

「はあつ、はあつ! ここまで私を狂わすとは、なんて危険なフェロモンなのだ!」

「お前は元々狂つてますけど! DMの狂戰士なんですけど! それでも負けちゃうなんて、絶対に嗅ぎたくねえ!」

とんでもない事態にカズマは驚く。まさか、あのダクネスまで茂茂の体臭に負けて、ゲロインの仲間入りを果たしてしまっただなんて……。

あまりに酷い状況にみんながドン引きする中、その惨状を見かねた長谷川が無謀にも助けに入った。

「大丈夫か二人共？ とりあえず、君達は離れた場所で休んでろつて。將軍様の方は俺がなんとかしとくオエエエエエーッ！」

「やつぱ、お前もかいイイイイイッ!？」

やはりというか、当然のように長谷川もやられてしまった。

吐き戻した三人はぐったりと座り込み、傷を負った茂茂はゲロまみれで横たわり、状況についていけないウイズはあわあわしながらパニックっている。なんてこった。大切な仲間達をこんなに苦しめやがって……。

「よくも俺の仲間達を！ 許さんぞ、ベルディアアーツ！」

「えっ、なんでえ!? どうして俺が怒られてんの!? 俺はそいつを倒しただけで、後は勝手に自滅してただけじゃないか!？」

「黙れや変態！ 貴様のようなストーカー予備軍は、問答無用でぶつとばすつ!!」

理不尽な怒りを爆発させた銀時は、残っていたアンデッドナイトを切り裂きながらベルディアに突撃する。驚いている間に強烈な連撃を浴びせられ、必死に大剣で捌きつつ

も防戦一方になってしまふ。まさか、このような辺境でこれほどの実力者と遭遇するのは。予想外過ぎる強敵の出現にベルディアは驚愕する。

「くつ、まさか!? この俺が、たった一人の冒険者に圧倒されるだとおーっ!? 貴様はいつたい何者なんだ!? 王都から来た勇者なのか!?」

「違いますう〜! 俺は勇者じゃありません〜! 陽気で愉快的な遊び人です!」

ふざけた返事をしながらも銀時の攻撃は止まらない。素早さに自信があつたベルディアも次第に対処しきれなくなり、ついには体勢を崩されて強烈な一撃を胸元に食らつてしまふ。自慢の鎧に不名誉な亀裂を入れられてしまったのだ。

「そんなバカなあーっ!? 木刀ごときで、魔王様の加護を受けたこの鎧に傷をつけるとはあーっ!」

「へっ、見た目だけで判断したテメエのミスだよバカヤロー。世の中にはなあ、テニスかと思つたらテニス又だつたーって話は良くあるもんさ」

「あるわけねえだろ、あんなもん!? しかし、すげえな銀さんは……。ただの願望かと思つてたけど、マジで幹部を倒せそうだけ」

「ええ、そうですね。私の出番を奪われるのは正直言つて悔しいですが、仲間としては誇らしいです」

勝利の希望が見えてきたおかげで、カズマとめぐみんの口調も明るくなる。このまま

行ければ勝てるかもしれない。まだ経験の浅い子供達は、思わず楽観してしまう。

だが、命を懸けた戦いに絶対なんてものはない。それを彼らに教えるようにベルディアが笑い出した。

「フツフツフツ……ハアハツハツハツハツ！ 確かに、お前は愉快な奴だよ！ 人の身でありながら化け物を超えた力を持つとは！ 騎士として、この出会いを喜ばずにはいられない！ なぜならば、この俺が全力で戦える機会を与えてくれたのだからなあ！」

「ほう、どうやら強がりじゃねえみてえだなー！」

相手の感情を読み取った銀時は、油断することなく飛び込んでいく。すると突然、ベルディアの身体に変化が起こった。どういう仕掛けか、異常なまでに筋肉が増強されたのだ。

「なんの説明もなく戸愚呂弟みてえになったあああああーっ!!」

「フハハハハハツ！ 不死の肉体を持つ俺は、限界を超えた筋力を発揮することができるのだあーっ！ こんな風になっ!!」

「ぐおっ!!」

今度はこちらの速度を超されて強烈なカウンターを食らってしまう。なんとか洞爺湖の防御が間にあったものの、そのまま派手に吹き飛ばされて城の壁に激突する。

「銀さぁーん!?!」

「大丈夫ですか、ギントキーツ!?!」

「あー痛え……神楽にぶっ飛ばされたぐらい痛かったぞコノヤロー」

カズマ達が心配そうに見守る中、銀時は文句を言いつつ立ち上がった。額から血を流しているもの的大してダメージを受けていない。それどころか、元気に悪態をつき始める。

「つーかテメエ、急に変身してんじゃねえーよ。あーいうのはもつとこう、フリーザ様をリスパクトして絶望感を演出しなきや、良い悪役にはなれないよ?」

「そんなことを言われても、フリーザ様ってどこの誰だよ!?! そもそも、こつちは貴様のよう遊んでいるヒマはない! 俺が本気を出したのだから貴様も本気で戦えい!!」  
いつまでもチャランポランな銀時に苛立ちつつも、勝負を急ぐベルディアは逆に挑発する。限界突破モードは膨大な魔力を消費するため、不死者と言えども使い過ぎれば動けなくなってしまう。だから、どうしても短期決戦に持ち込む必要があるのだ。

ただし、それは銀時の望むところでもあったが。

「んなもん、テメエに言われなくても自ら進んで出してやるさ。大金を前にして、ギャンブル好きな遊び人が本気を出さねえわけがねえだろ?」

不敵な笑みを浮かべた銀時は洞爺湖を腰に戻すと、これまで温存していた切り札をつ

いに取り出した。それは以前、クリスから貰った妖刀・星砕である。

「そんな古びた棒つきれで戦うことが貴様の本気か？」

「ああそうだよ、筋肉ムキムキ変態野郎。テメエはこの棒つきれでボロ切れみてえにボコられるのさ」

「フンッ、限界突破したこの俺を前にして大層な口を叩きおつて！ その自信を棒つきれごと切り裂いてくれるわあああああーっ!!」

ベルディアの怒声を合図に決闘が再開される。驚異的なパワーアップを果たしたボスに対して、不利に陥った遊び人はどうなってしまうのだろうか。カズマ達が心配する中、激しく武器を打ち付けあう実力者同士の戦いは、意外にも拮抗していた。

「す、すげえ！ パワーアップしたベルディアについていけてるぞー！」  
「それどころか、押し始めていますよおーっ!」

カズマとめぐみんは、本気を出した白夜叉の強さを初めて目の当たりにして興奮する。この迫力は、ギルドで桂とケンカしていた時とはまるで次元が違う。この姿こそがサムライの……坂田銀時の本領か！

「なっ、なぜだっ!? なぜ、ただの人間にこれほどの力が出せるのだっ!」

「それは、テメエが人つてもんを分かっちゃいねえからだよ！ 人つてヤツは生きてる限りどこまでも強くなれる！ 己の中の弱さに勝てば、成長期は止まらねえ！ いくら

年を取ったとしても心の中で信じていれば、俺らはずっと【永遠の17歳】でいられるんだからなあーっ!!」

「いらねえよ、そんなもん!」

珍しく良いこと言ってると思つたらやつぱり間抜けなオチがあつた。それでも、彼が今現在も成長し続けていることは間違いない。これこそが【主人公補正】という名の最強チートスキルなのだ。

「つーわけで、死にぞこないの変態は、さつさと成仏しやがれええええええええええーっ!!」  
「ぐわあああああああーっ!!」

会心の一撃がベルディアの胸部に決まり、魔王の加護を受けた鎧を粉々に打ち砕く。その衝撃によつて彼の身体はぶつ飛ばされて、すさまじい勢いで城の壁を突き破り、四散した瓦礫の中にその巨体を横たえた。

「や、やった……マジで幹部を倒しちゃった!」

「いやまだだ。手応えはあつたが、そいつはまだくたばつてねえ。やつぱ、ボスレベルのモンスターはHPが高えようだな」

「フツ、そのボスを圧倒した貴様の方こそモンスターと呼ぶべきだが……。しかし、俺はこの出会いに感謝しているぞ。騎士として敬うべき強者と全力で戦つて逝けるのだから……。さあ来い、銀髪の剣士よ! このベルディアを見事に討ち取り、貴様に見



合った名誉と誇りをその手に掴むがいいっ！」

敗北を認めたベルディアは、良い笑顔を浮かべながらその時を待つ。魔に墜ちた身であつたとしても散り際くらいは潔くありたい。

「あー俺、名誉とか誇りなんてどーでもよくて、お金が貰えりゃいいんだけど」

「御託はいいからさっさとやれエエエエツ!!」

「なんといいですか、DS野郎がクズ過ぎてベルディアが可哀相になってきました……」

「ああ、そうだな……」

めぐみんの感想を聞いてクズマさんまで同意する。そんな主人公にあるまじき言動に罰が当たったのか、銀時の身に不幸が起きた。

「せめてもの情けだ。心を込めた一太刀で、楽に逝かせてやるよオエエエエエエーッ!!」

「一太刀浴びせる前に別のもん浴びせたあああああああーっ!!」

どういう訳か、ベルディアに止めをさそうとしていた銀時がゲロを吐き出した。

「えっ、ちよっ、なにコレ!?! なんて突然吐いちゃってんの!?! もしかして、銀さんも將軍の体臭にやられてたのかあーっ!?!」

「いや、違う……。吐き気と腹痛が同時多発的に襲ってくるこの症状は……【食中毒】

だアアアアアッ！ オロロロロロロロッ！」

「こんなところで食中毒かよオオオツ!?」

「すんごい重要なこのタイミングでとんでもないハプニングが発生してしまった。

「いったいどこで当たったの!? 俺達はなんともないけど!」

「あつ! もしかして、アレじゃないですか? アクアが拾い食いしてた松茸が、実は毒キノコだったとか」

「そつ、ソレだあああああーっ!!」

めぐみんの指摘で間抜けな事実が判明した。まさか、あの時の伏線がこんな形で回収されるだなんて……。

「それじゃあ、アクアもヤバいんじゃない?」

「あー、私なら大丈夫よ。前に起きた『毒入り焼きそばパン事件』の教訓を活かして、食事をした後には必ず魔法で解毒してるから!」

「お前はいったいどこの暗殺者に狙われてんだ!」

いつの間にか復活していたアクアが能天気は無事を伝える。でも、それがなんだと言いたい。彼女が拾ってきた毒キノコのせいでピンチになってしまったのは間違いないのだ。銀時にもキアリーの魔法をかけさせて毒状態だけは治したが、今にも外に出ようとしているウンコの方はどうにもならない。

さらに最悪なことに、消滅を覚悟したはずのベルディアがこのハプニングに乗じて復

活してしまった。

「フツ……フハハハハッ！ どうやら、まだ俺の命運は尽きていなかったようだなあーっ！」

「やつ、やべえ!!? ゲロまみれの変態幹部が蘇っちまったあーっ!!?」

フラつきながらも立ち上がったベルディアにカズマ達は驚愕する。こいつあはヤバい、このままでは下痢ピー状態で戦えない銀時がやられてしまう。出番が欲しい長谷川と快感が欲しいダクネスは、便意に耐える銀時をかばうように進み出た。

「ちよいと待ちな、首無し野郎！ 相手がウンコ漏らしそうな時に攻撃しようなんざ、いんな意味で汚えぞ！ ウンコを出すまで待つてやるのが騎士道つてもんだろうっ!!?」

「そんな騎士道どこにもねえよ!!? 普通の奴は戦闘中にウンコ出そうとしねえだろっ!!?」

「ならば、貴様は我が主にお漏らしプレイを強要するのか!? よもや、それほどアブノーマルな性癖をしようとは！ 見るがいい、あのデュラハンの兜の下のいやらしい目を！ そこまでして、スカ○ロプレイを堪能したいと望んでいるのか!? 男も女も見境無しに変態プレイをさせる気か!?!」

「すべてが違うわ、変態女っ!!? 俺は至ってノーマルだっ!! いや、ほんとマジだから、そんな目で見るんじゃねえーっ!!?」

あらぬ疑いをかけられたせいか、デユラハンの人が狼狽えている。この隙に対抗策を考えるとしよう。

「ウンコが漏れそうな銀さんはひとまず外に逃がすとして、ベルディアはどうする？あれだけ弱ってるなら俺達だけでも倒せるか？」

《うんそうだね。上手くやれば銀時抜きでもギリギリ倒せるよ。まあ、カズマの首がすぼーんとやられる確率の方が高いけど……》

「（よし分かった、今すぐ逃げよう！）」

死にたくないカズマは速攻でへたれた。大体、自分はボスを倒す気なんて元から無いし、銀時にウンコを出してもらえばなにも問題ないじゃないか。とにかく今は、用を足す時間さえ稼げればいいのだ。

「おいみんな！ 一端ここから逃げるぞ！」

「ふんっ！ 良い判断だが、このまま黙って行かせるとでも思ったかあーっ!？」

「そんなことあ思つてねえよ！ だから、こいつを食らいやがれ！」

そう叫ぶと、腰の袋から細長いアイテムを取り出してベルディアの足元に叩きつけた。その道具は、いざという時のために桂が与えた【煙幕発生装置】だった。

「んまい棒・混捕駄呪（コーンポタージュ）っ!!」

「ぐわっ!?! なんだこの煙はあーっ!?!」

視界を奪われたベルディアは、初めて見た異世界の道具にビビッて必要以上に警戒した。少しだけでも時間を稼げればいいと思っただけが、想定以上の効果が出た。

「よし今だ！ 全力で走れえーっ！」

「うおおおおおおおっ！ 外に出るまで耐えてくれよ、俺の肛門括約筋ッ！」

「えっ、ちよっ、待って!? シゲシゲさんはどこかしら!?」

辺りに広がる煙幕に身を隠してカズマ達は逃げ出していく。ダメージが大きいベルディアは足元がフラついていたから、たとえ追いかけてきたとしても全力で走れば追い付けない。目敏いカズマはそう思ったが、ベルディア自身も同じ判断をしていた。

「逃げられたか……。いや、この場合は俺の方が助かったと言うべきだな」

追撃を諦めたベルディアは、その場にドカリと座り込んだ。限界突破モードを限界まで使ったせいで予想以上に魔力を消費していたのだ。その上、身を守る鎧も手足となる軍団も失ってしまったては一時退却するしかない。

「こうなつては、あの男が戻ってくる前に脱出しなければならぬが、もう少し回復しないと転移はできん……。この俺としたことが、なんてザマだ……」

あまりにおかしな銀髪 of 剣士を思い浮かべてため息をつく。死んだ魚のような目をしてるクセに、その奥には得体の知れない強さを秘めている。それは、魔王の幹部から見てもあまりに異質な存在だった。

「もしや、あいつが占い師の言っていた強い光とやらなのか？」

納得し難い想像に思わず頭を悩ませる。あんなDSのクズ野郎が魔王軍を脅かす光だなんて絶対に認めたくねえ！

一方、変な勘違いをされている銀時は、絶対ウンコを漏らすまいと凄まじい速度で城から出てきた。

「ふおおおおおおおつ!? キテル、キテル、すつげーキテル!! スパーキング寸前だアアアアッ!!」

いろんな意味で危機的状況の中、お尻に手を当てながら森の奥へと駆け込んでいく。ボス戦の途中で野グソとか前代未聞の珍事だったが、とりあえず最悪の事態は避けられたようだなによりである。

一方、後から遅れて外に出てきた長谷川達は、城から距離を取りつつもベルディアの追撃を警戒する。

「後は、ベルディアが来る前に銀さんがウンコを出せるかだな！」

「私達の運命は、ギントキのウンコにかかっているのですかあーっ!」

真剣な顔をしながら間抜けなことを言う長谷川にめぐみんが食らいつく。他人の排泄行為に自分の運命をかけるとか、かつこわるいにも程がある。そもそも、当のベルディアは追撃をするどころか逃げ出そうとしているので、彼女達の懸念はすべて無駄で

しかない。しかし、そんなことなど知らないアクアが余計なことを思いつく。

「ねえ、めぐみん！ 今なら爆裂魔法を使えるんじゃないかしら？ 邪魔な結界はこの私の素晴らしい活躍で破壊済みだし、あのデュラハンも私の神聖魔法でかなり弱ってるはずだから、デカイの一発お見舞いすれば、お城ごとぶっ飛ばせるかもしれないわ！」

「おお、そうですよ！ 今こそ爆裂魔法を放つ絶好の機会じゃありませんか！ この私としたことが、これほどまでに最高の見せ場を見過ごすところでした！」

駄女神と中二病が力を合わせたら常識が爆裂した。そんな方法でボスを爆殺するのは、クズマ的にオツケーだけどゲーマーとしてはどうかと思う。

「おい、めぐみん。本当にやるつもりか!？」

「フツ、愚問ですね。今爆裂魔法を撃たないでいつ撃つというのですか!？」

「お前は、いつでも所構わずぶっばなしてんじやねえーか!？」 街の近所でバンバンやってクレーム来てんの知ってんだからな!？」

「ええい、うるさい！ たとえ、カズマが文句を言っても爆裂愛はびくともしない！ 我が栄光の爆裂道は何人たりとも止められません！」

一応注意してみたけど、頭がおかしい爆裂マニアはやっぱり止められなかったよ。無力感を抱いたカズマが冷めた視線を向ける中、テンションマックスなめぐみんが爆裂魔法を放った。

「エクスプロージョン」ツツツ!!」

めぐみんの声が辺りに響くと視線の先で強烈な爆発が発生した。アクアの魔力によつて強化されたソレは堅牢な廃城すらも瞬く間に瓦礫と化して、すべての破壊活動が終わった後には景色が変わっていた。

魔力を使い果たして前のめりに倒れ込んだめぐみんは、情けない姿も気にせず満足そうにつぶやく。

「フッフッフ、我ながらナイス爆裂でした……」

「なんだろう、助かったのにスッキリしないよ。逆に切なくなってくるよ……」

個性が爆裂しくまっているヒロインを見て、カズマの心は大きなガツカリ感に襲われる。

しかも、それは彼一人だけではない。ウンコを出してスッキリしたはずの銀時が、なぜか不機嫌そうに怒鳴り込んで来た。

「おイイイイイツ! 俺がウンコを爆裂中に城を爆裂してんじゃねえーよ! 危うく身体がウンコまみれになっちまうとこだっただろおーがっ!!」

「ああ、それはどうもすみません。爆裂魔法に気を取られて、ついうっかり忘れてました。って、なんですかその怪しい手つきは!?! 私にナニをする気ですか!?!」

「なあに、お前のせいで俺の手にちよっぴりアレが付いたから、手頃な物で拭き取るだけ



だよ」

「手頃な物って、私のマントじゃないですかあーっ!? お願いですから待ってください！ 誠心誠意謝りますからそれだけは本当に……ヤメツ、ヤメロオオオツ!!」

汚い報復を受けたためぐみんの絶叫がこだまする。バカバカしい犠牲は出たけど、魔王の幹部を相手にして全員が生還できたのだから、そのくらいは許容すべきだろう。

後は、ベルディアがどうなったかという点だけだが、それを確かめる前にウイズが話しかけてきた。

「あのすみません、ギントキさん。シゲシゲさんの治療をしたいので、私は先に帰ります」

「そーいやあ、アクアのバカは、ホイミをかけずにゲロをかけてやがったな」

あの惨劇を思い出した銀時は、ウイズに背負われた茂茂に哀れみの目を向けた。

あれ、おかしいな。どう見ても腐った死体なただけ。將軍って、あんなに不健康な面してたっけ？

「つーか、ソレ將軍じゃねエエエツ!!」

「えっ!? きゃああああああーっ!? シゲシゲさんがアンデッドナイトに変わってらうーっ!!」

ここまで来てようやく間違いに気づき、ウイズはパニックを起こす。彼女が背負って

きたのは茂茂ではなく、銀時にやられてブリーフ一丁になったアンデッドナイトだったのだ。逃げようとしたあの時、煙幕によって視界が悪化したせいで、ゲロまみれの茂茂と近くにあった腐った死体を取り間違えていたのである。

「ということとは……」

「シゲシゲ殿は、爆裂魔法で破壊された城の中に……なんと羨ましいっ!」

「つて、そうじゃねえだろバカヤロー!?! 将軍、爆裂しちまったんだぞ?! 爆破コントじゃ済まねえぞ、コレツ!?!」

「イヤアアアアアツ!?! シゲシゲさああああああんっ!?!」

まさかの事態に混乱する中、涙を流したウイズが城へ向かって駆け出していく。

「こつ、こつしちやいらねえ! 俺達も助けに行こうぜ!」

「そつ、そつだな!」

罪悪感に負けた長谷川をきっかけにして他の連中も救援に向かった。動けないめぐみんはカズマが背負い、惨劇が起きてしまった現場へと急行する。

それにしても、どうしてこうなった?

ギャグ属性のブリーフマスターはやたらと防御力が高いので生きている可能性が高いし、たとえ死んでいたとしてもアクアの魔法で生き返らせることが可能だが、後で顔を合わす時にめっちゃ気まずいことになる。主犯にされたくない連中は必死に罪を押し

しつけ合う。

「わつ、私は悪くないんだからっ!? 爆裂魔法を使ったのはめぐみんだし、一番悪いのは毒キノコなんか当たった銀時なんだからねっ!?」

「あつ、汚えぞテメエ!? 女神のクセに偏向報道やらかして罪を捏造する気かあ!? 大体、テメエが毒キノコなんて拾ってこなけりや悲劇は起こらなかつたんだよっ!」

「そつ、そうですよ、アクア! 私が爆裂魔法を使ってしまったのも、私のマントがウニコで汚れてしまったのも、すべてはアクアのせいですよっ!」

「うわああああああんっ! 二人がかりで責めるなんて、私があまりに不利なんですけど!? 女神であるこの私がどうして悪者扱いなのよおーっ!」

「はあつ、はあつ……エリス教徒として罪を犯すわけにはいかないが、アクアのように責められるのも楽しそうだな!」

「もう嫌だ、この人達……」

あまりに見苦しいやり取りを見せられて、カズマはポロリと涙を流す。

幸いなことに茂茂は生きており、アクアの魔法で全快するものの、罪悪感を抱いた銀時達は仕事の報酬を辞退するのだった。

ウイズが城に戻り始めた頃、瓦礫の山と化した爆心地では、なんとか助かったベル

ディアがヨロヨロと立ち上がっていた。城の壁があつた分、爆裂魔法の衝撃が和らいだおかげだが、頭の方は吹き飛ばされてどこかにいつてしまった。

「チツクシヨオオオオオツ!! あいつらマジで何なんだ!! クソしに行つたと思つたら爆裂魔法を撃つて来たよ!! 力んだ拍子に魔法が出んのか!! ウンコと一緒に爆裂すんのか!! もう訳が分かんねえーよ!! 頭がおかしいってレベルじゃねえーぞっ!!」

行方不明中の首が激しく喚き散らす。

それにしても、目の前にあるコレはなんだろうか。あまりに近くてよく分からないが、白くてモツサリとして、牛乳を拭いた雑巾のような臭いが……

「つーか、くっさ!! コレくっさ!! いったいなんだよ、この臭い物体は!!」

「それは余のお稲荷さんだ」

「……………へ? オイナリサン?」

予期せぬ第三者の声にドキリとする。まさか、奴等が戻つて来たのか?

青ざめたベルディアは慌てて首を見つけ出し、それを急いで持ち上げた。すると、彼の視界には、茂茂の黄ばんだブリーフが映し出された。

「オエエエエエツ!! ソレってブリーフだったのおーっ!!」

すべてを知つてかつてない程のショックを受けたベルディアは、涙を流しながら逃げ出した。憎き恋敵である茂茂に止めを刺すことも忘れて……。

パニックっていたせいで崖から落下し、さらにボロボロになりながらもその場から遠ざかる。男の金〇まにキスしてしまった事実を忘れるために、今は少しでもここから離れたい。

しかし、それも短い間だけのことだ。

「今に見ておれ、銀髪の剣士とその仲間達よ！ 俺は必ず戻ってくるぞ！ 憎き貴様らに復讐を果たすためになあーっ!!」

心に深い傷を負った化け物が、怒りを力に変えてリベンジを誓う。遊び人との第二ラウンドは、さらにとんでもないことが起こりそうな不吉な予感がした。

## 第23訓 たとえゴリラにソックリでも全裸で外を徘徊したら公然わいせつ罪

偶然ながらもベルディアの撃退に成功した銀時達は、思わぬ収入を得ることになった。討伐までには至らなかったものの、街を滅ぼしかねない強敵を追い返した功績が評価されて、ギルドから特別に報奨金を貰ったのだ。さらに、そこへ弁財天白竜王大権現（偽）の討伐報酬も加わり、活躍した連中は300万エリスという大金をゲットすることになった。

ちなみに、クソの役にも立たなかったアクアと長谷川は討伐報酬を大幅カットされたものの、棚ボタで手に入れた報奨金のおかげで100万以上の収入を得ることに成功した。

「マ、マジかよ……。マダオの俺が100万も稼げるなんて、夢オチなんじゃねえだろうな?」

「確かに、それは有りうるから、ぶっ叩いて確認しよう」

バキッ!

「ぶっ叩いて確認しよう!」

「私も不安になって来たからゴッドブローで確かめとくわ！」

ズガツ！

「ぐはぁーっ!? って、なんで俺がボコられてんの!? 夢みたいな現実が悪夢と化してるんだけど!」

このように、夢オチ疑惑が持ち上がるほどビックリな展開である。もちろん、大金に縁の無いマダオ達は思わぬ幸運に狂喜乱舞し、調子に乗った勢いでどこかへ遊びに行ってしまった。

銀時・長谷川・アクアの3バカトリオが行方知れずとなって数日が経ち、ギルドでドラダラとしていたカズマは、めぐみんとダクネスから不満をぶつけられていた。

「さあ、カズマ! 今日もまた爆裂魔法の標的を探しに行きますよ! こうむしゃくしゃしては、手当たり次第に爆裂させなきゃやっていられません!」

「お前はむしゃくしゃしてなくても爆裂しまくってるよね?」

「だが、お前だって私達の気持ちがかかるだろう? ドSな主に放置プレイを強要され、淫らな声で鳴くことしか出来ない哀れなメス犬の悲しみが!」

「俺にはお前が喜んでるようにしか見えねえよ!」

バカなりーダーのせいだ、いらぬストレスを受けるハメになった。ノルンの能力によ

ると、あの3バカ達は今日帰って来るらしいが、それはそれでストレスを受けそうではないだ。  
ヤダ。

「(はあく……あいつらが帰って来た途端に変なイベントが始まる気がするのはなんだろう?)」

《それはキミがギャグ世界の住人だから仕方ないよねー。ぶつちやけて言えば『運命』って感じ?》

「(運命の女神が適当なこと言ってるじゃねえー?!)」

近い未来を嘆いていたら、運命の女神から残酷な(?)宣告を受けてしまった。しかも、それを肯定するようなタイミングで銀時達が帰って来た。なぜか暗い表情で……。

「あつ、ギントキー! ようやく帰って来ましたね! 別に心配してたという訳ではありませんが、これまでいっただいどこで遊んでいたのですか!？」

「バツキヤロウツ! 俺達は決して遊んでたわけじゃねえーつ! あの戦いは、己のすべてを賭けた真剣勝負だったんだよっ!」

「な、なにっ!? 我が主がすべてを賭けるほどの真剣勝負だと!? 私達の知らぬ間に、それほどうごい戦闘があつたというのか!？」

「ああそうだ、今思い出しても震えるほどに熾烈な戦いだつた……。いくら戦力を注ぎ込んでも砂漠にまいた水のようにあっけなく飲み込まれていく地獄のような戦場で俺



達は戦い抜いたが、持てるすべてを使い果たしても我が身を守ることしか出来なかった。あの恐るべき「カジノ」という戦場ではなっ！」

「ただギャンブルで負けただけじゃねえーかアアアアアッ!？」

いざ話を聞いてみたらしよっぱいオチが待っていた。このマダオ共は、テレポートサービスで隣国のエルロードまで足を運び、アイリスに教えてもらったカジノで遊んでいたのである。その結果、せっかく手に入れた大金をあつさり失ってしまった。やはり、こいつらは筋金入りの貧乏野郎だった。

「なるほど、そういうことですか。カジノで負けてすっからかんになったから暗い顔をしているのですね」

「ばっ、ちっげーよ！俺らは別に負けてねーし!? カジノという名の銀行に貯金してきただけだっつーの!」

「ええ、そーよ！心の広い私達は無利子でお金を預けただけよ!」  
「無利子どころか無一文になってますけど!？」

大人気無い言い訳にめぐみん達は呆れてしまう。手に入れた大金をすぐさまギャンブルで失うなんてマダオにも程がある。

それでも、済んでしまったものは仕方がない。この手の逆境に慣れた長谷川は、よくある話だとヘラヘラしながら次のイベントを持ちかける。

「まあ、イヤな過去はさっさと忘れて、今は地道に仕事をしようぜ！」

「ええ、そうね！ 早くお金を稼がないと、あの忌々しい取り立て地獄が復活しちゃうもの！」

「両さんみてえにツケを溜めなきやいいだけの話じゃね？」

カズマの指摘はもつともなれど、それが出来たらアクシズ教の御神体などやってはいられない。

どのみち、持ち金ゼロとなった駄女神には仕事をするしか選択肢が無く、50万エリスほど残しておいた銀時も損した分を挽回すべく掲示板へと足を運ぶ。

「よし、お前ら気合いを入れろー！ いつまでも、休日気分でダラダラしてんじゃねえぞ、ゴルアー！」

「カジノ帰りのお前が言うなよ！ まるで説得力が無えんだよ！」

バカなりリーダーにつっこみつつ、そろそろと付いていく。なんだかんだと言いながら、カズマも暇を持って余していたのだ。

「まあ、そろそろ頃合かな。魔王の幹部はいなくなったし、俺達向きの簡単なクエストも復活してるだろ」

「ふん、なに甘つちよろいことを言っているのですか。今回も高難易度のクエスト以外に選択肢はあり得ません。ドラゴンスレイヤーとなった私は、簡単なクエストでは満足

出来ない身体になってしまったのですから、責任をとってもらわなければ困ってしまいますよ！」

「頭のおかしい欲求をエロい感じに言うんじゃねえーよ!? そんな理由でモジモジされても、こっちの方が困るわ！」

「まったく、カズマは甲斐性無しだな。鈍いと言われる私ですら、めぐみんの気持ちがよくわかるぞ。あれほどまでに荒々しい被虐行為を味わったら、もはや並の代物では満足出来ないだろうからな！ 私も、もっと激しい恥辱を受けられるクエストを望んでいりゅー！」

「こいつに至っては、本当にエロい意味で欲求不満だしよおーっ!? そういうプレイをクエストに求めないでお願いだから！」

道すがら中二病とドMがふざけたことを言ってきたが、こんな奴等は無視だ無視。今度こそ、命の心配がない安全なクエストをのんびりしたらなら楽しむんだ。そう思いながら掲示板を見てみると、彼が望んでいるような易しい仕事は一つも無かった。

「あれ、おかしいな。魔王の幹部がいなくなったのに、高難易度のクエストしか出てないぞっ。」

これはいったいどういうことだ。ギルドのお姉さんから聞いた話では、ベルディアにおびえて隠れていたモンスターも次第に戻ってくるらしいのに……。

予期せぬ状況にカズマ達が困惑していると、まるで狙っていたかのようなタイミングで桂とエリザベスが現れる。

「それについては、この俺が説明しよう」

「ああ、ツラか。なんか久しぶりだなあ。俺あてつきり、引きニートのカズマに出番を取られたから、出づらくなつて引きこもつてたのかと思つてたぜ」

「ツラじゃない、桂だ！　そもそも、俺をこのような引きニートと一緒にするな。出番が無い間、大いに暇を持て余した俺達は、どうにかツインファミコンを使えないかと任天堂的な技術を求めて世界中を駆け巡る摩訶不思議アドベンチャーを繰り広げていたのだからな」

「確かに引きこもつちやいねえけど、アクティブ過ぎてこっちが引くわ！　っーか、お前ら、俺達が魔王の幹部と戦つてる時にそんなことやつてたのおーっ！　もつと他にやることあんだろ！　勇者王の仕事があんだろ！　大体、いつまでツインファミコンに捕らわれ続けてやがんだよ！？」

相変わらずバカなことしかしてないバカコンピに怒鳴り散らす。

しかし、これでも社会人、茂茂から頼まれていた仕事はしっかりやり遂げていた。

「落ち着け、銀時。そのようなこと、貴様に言われるまでもない。ツインファミコンに対する熱意は元より、仕事の方も抜かりは無いさ」

「いや、どう見てもツインファミコンの方に気を取られまくってるけど」

「ふっ、そんなことはないぞ。その証拠に、俺と将ちゃんが完成させた超兵器をみんなに披露してやろう」

「ああ？　超兵器だあ？」

なんだか話がおかしな方向に向かいだした。確かに、そんな伏線が大分前からあったけど、こいつらが絡むとなると碌なことにならない気がする……。カズマがそう思った途端に、奴等の同類であるめぐみんが食いついて来た。

「ほほう！　超兵器とは、なんともロマンを刺激される素敵な言葉ですね！　それはいつたい、どのようなもののですか？」

「論より証拠、興味があるなら直に見るといいだろう。実を言うと、これからソレをぶっ放すつもりなのだ」

「ぶっ放すって、試射でもすんのか？」

「ああ、そうだ。その標的として、この街のクエストに悪影響を及ぼしているという新種のモンスターを選択した」

そう言いながら、桂は掲示板の一角を指差した。見るとそこにはギルドからの依頼書が張り出されており、近くにいたダクネスが内容を確認してみた。

「どうやら、こいつが元凶で間違いないようだ……。異様なオーラを放つモンスター

がベルディアと入れ替わるように近隣の草原地帯に住み着いてから、弱いモンスター達が隠れてしまったという観測データが出ているようだ。さらに、そいつの戦闘力も想像以上に強力で、討伐に向かった者達は弄ばれるようにあしらわれて、ことごとく敗走している」と記されている……んくっ！」

「お前今、モンスターに『弄ばれる』ってところで興奮しただろ？」

「っ!? していない!」

ジト目になったカズマは、頬を赤らめて否定するダクネスを睨みつつ考える。クエストの異常が続いている理由は、ベルディアと入れ替わるようにやって来たモンスターのせいらしい。しかも、そいつはかなり強く、冒険者は元よりギルドの方でも困り果てているという。幸い死人は出ていないが、アクセルの住人に被害が出る可能性は当然否定出来ないため、それを知った桂達が超兵器の試験も兼ねて討伐する気になったのだ。

「ルナ殿の話によると、俺より先にダストというチンピラが討伐依頼を受けたらしいが、『どうせ負けちゃうと思いますから、彼らがトラウマを背負う前に助けてやってください』と快く頼まれたぞ」

「可哀想なダストさん。どんな奴かは知らないけど、同情を禁じ得ないよ……」

あまりに哀れなチンピラ冒険者の扱いに、カズマは奇妙な親近感を覚えてしまう。

一方、金のことしか眼中にないアクアと銀時は、抜け駆けしているダストに向けてあ

からさまな敵意を抱く。

「他人に敵しいカズマさんが、なに甘つちよろいこと言ってるのよ！ ヤムチャがベジータを超えるくらいの超絶ミラクルが起きて、そのチンピラが勝つちやつたら、私の高額報酬が全部ペアになつちやうのよ!」

「んなもん、許しちやおけねえだろう!?! そうなる前に、そいつごと超兵器でぶつ飛ばしてやるっ!」

「強欲なるチンピラよ！ 己の罪を悔いながら、審判のいかづちを受けるがいい!」

「お前らの方こそ強欲だよね!?! 罪にまみれた守銭奴だよね!?!」

高額報酬に目が眩んだバカ達は、勇者らしからぬことを言い出した。

「(ダスト、逃げて! 超逃げて! 早くしないと悪魔が来るよ!?!)」

《だいじょぶだよ、カズマ君! ダストとかいうヤツは、超兵器を使う前にやられちゃうから!》

「(まったく大丈夫じゃないんだけど!?! いったいナニをやられちゃうの!?!)」

急速に進展していくおバカなイベントに一抹の不安を感じてしまう。しかし、超兵器とやらを見てみたい欲求にはカズマも勝てず、結局みんな『謎のモンスター討伐クエスト』に参加することになった。



アクセルから出て砦に到着した一行は、門前の広場で桂達が来るのを待つていた。奥にある倉庫から、馬を使って超兵器を移動させているのである。

「どのような代物なのか、とつてもワクワクしますね！ 超兵器と言うほどですから、さぞすさまじい威力があるイカした魔道具なのでしょう！」

「おいおい、めぐみん。あんま期待し過ぎてつと後で激しく後悔すんぞ？ あのバカのことだから、予想以上に使えねえゴミ兵器に決まってるぜ。たとえば、時速160キロの球が投げれるロポピッチャとかな」

「それはそれで凄いいんじゃね?！」

身も心もお子様なめぐみんは素直に期待し、身も心も汚れちまった銀時は端から期待の欠片もない。果たして、どちらの予想が当たるか。みなが答えを求め中、渦中の兵器を取りに行った桂が馬を引いて戻ってきた。

「さあ、心して見るがいい！ これこそが魔王に対する人類の希望だあーっ！」

「なんだよオイ。【ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲】じゃねーか。完成度高けーなオイ」

「予想以上の珍兵器が出て来やがったああああああああつ?！」



あまりにも笑撃的な出会いに銀時が驚く。この男性器にしか見えない卑猥なデザインは、間違いなくネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲だか……。まさか、アレの実物を異世界で見ることになるうとは！

「つーか、なんでコイツを作った!? こんな卑猥な大砲よりも、ギヤリック砲とかカッコイイのがもつとたくさんあんだろう!？」

「なんだと貴様!? 人類の希望として作られし大砲を、サイヤ人編だけしか出番のなかったギヤリック砲よりもかつこ悪いとほざくかあーっ!？」

「お前らどつちもおかしいんだよ!! チ○コ型の兵器とか恥ずかしくて使えねえーし、ギヤリック砲に至っては兵器ですらねえーだろっ!？」

頭の悪いサムライ同士が頭の悪い論争を始めた。そりやまあ確かに、期待していた超兵器が超卑猥なチン兵器だったのだから、銀時が荒ぶるのも無理はない。

ただ、いちやもんをつけているのは彼だけで、女性陣からの反応は残念ながら好評だった。変な感性を持ったためぐみんは、楽しそうに玉の部分をペタペタ触りまくっており、変な性癖を持ったダクネスは、竿の部分に頬摺りしながらナニかを連想して興奮している。

「これはいい、すごいです! この絶妙なテカリ具合といい、ピンピンと身体に感じてる膨大な魔力といい、なんと見事な玉でしょうか! どうやら、かなり濃いモノが溜

まっているようですねえーっ!」

「はあっ、はあっ! よもや、これほどまでにいやらしい拷問器具が存在していようとは!?! こんなにも巨大なモノで激しく責められまくったら、私の身体はいつたいどうなっ  
てしまうだろうかつ!?!」

「ちよつと待てえーっ!?! そこまで生々しいヤツはジャンプ的にアウトだから!?! それ  
以上はやめてくれえーっ!?!」

R—18な内容になりそうだったので、慌てて長谷川が止めに入る。そもそも、見た  
目がすでにヤバイよ。どう見ても2人の美少女が巨大なチ○コと戯れているようにし  
か見えないんだけど、画的に大丈夫なのかコレ?

卑猥な大砲に興味津々な女子共にカズマ達が引いていると、その騒ぎに加わっていな  
かったアクアが珍しく真面目な様子で言葉を発した。

「ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲……まさか、こんなも  
のが地上に持ち込まれていたとはね……」

「えっ、なにソレ? なんか唐突に思わせぶりなこと言い出したけど、もしかして、お前  
もあのわいせつ物を知ってんの?」

「ええ、あの日の光景を忘れることなんて絶対に出来ないわ……。私がまだ美少女だつ  
た頃に勃発した第7億4687万5289次神魔大戦。その時初めて実戦投入された

あの大砲によつて地獄軍は敗退し、私達天界軍は栄光ある『優勝旗』を手にすることが出来たのよ!」

「ハルマゲドンかと思いきや、世紀末的な運動会じゃねえーかあああああつ!」

壮大かつ間抜けな回想にカズマが怒声を上げる。神と悪魔がバイオレンスな運動会を楽しんでいたという話もアレだし、そこであの大砲が活躍していたという事実にもつつこまざるを得ない。特に、アレをこの世に生み出したと自負している銀時にとつては晴天の霹靂である。

「これはいったいどういふことだあーっ!? なんて卑猥な雪像が、時空を超えて神様の兵器になつてゐるワケ!? 大体、ツラはこんなモンをどこから見つけて来たんだよ!」

「ああ、それはウイズ殿の店で売つていた設計図を元に再現したものだ」

「あの店は天界の兵器まで売りさばっていたのかよ!」

まさに、死の商人である。

ぶつちやけると、茂茂を手助けするためと称してカグヤが密かに持ち込んだものであり、真相を知つたノルンは呆れてしまう。

《またアイツの仕業かよ!? アクアがバラ卷いたチートアイテムだけでも厄介なのに、カグヤのヤツまで加わつたらエリスちゃんの胃が持たないよ!》

「(どうしたノルン!? なんかいきなり叫びましたが、カグヤっていったい誰だ!?)」

急に荒ぶりだした相棒を見て、なにも知らないカズマは驚く。なんとなく真相を明かさないう方がいい気もするけど、プンプンと怒る美少女を眺めながらトークをするのはいいものだ。現実逃避を始めたカズマは、イイ笑顔を浮かべて目の前に浮かぶノルンを見つめる。

そんな奇妙な空気の中、砦の中にある小屋から茂茂が出てきた。

「なにやら朝から賑やかだな」

「おお、将ちゃん。どうやら、そっちも出かけるようだな」

「うむ、ウイズ殿に用事があるゆえ、これから魔道具店に行つて来る。ところで、そちらは何用だ？」

これだけ騒げば当然事情が気になるわけで、質問してきた茂茂にこれまでの経緯を説明する。

「とまあ、かくかくしかじかで、試し撃ちをしたいから、この大砲を使わせてもらうぞ」「相分かった。お前がそう望むのであれば是非もない」

「えつ、人類の希望とか言つてたのに、そんな適当でいいの!？」

純粋な茂茂は、一度信じた人間にはどこまでも寛大になれるので、ちゃらんぼらん桂の行動も許されてしまった。

それでも、一つだけ注意しておかなければならないことがある。

「念のために言っておくが、撃ちすぎには注意しろよ。特殊な素材を用いているゆえ、1発につき5000万エリスもかかってしまうからな」

「あんなの撃つのにそんなかかんのおーっ!？」

あまりの高さにカズマが叫ぶ。確かに、近代兵器は億単位の値段がつくものばかりだけど、あんなものにはかけたくねえ。

とはいえ、アレでも絶大な攻撃力を持った決戦兵器であることには違いない。その性能を確認するべく、銀時達は戦場へと向かっていった。



謎のモンスターが出没するという草原地帯に急行した一行は、数キロ先で戦闘をしている複数の人影を発見した。先行しているダストのパーティが謎のモンスターと交戦しているらしい。

遠目が利くようになる【千里眼】というスキルを使えるカズマは、戦況をいち早く確認する。

「あつちの4人がダストってヤツのパーティで、あのゴリラっぽい顔をした全裸のオッサンが例の迷惑モンスターか……って、全裸のオッサン!？」

謎のモンスターの正体を知って思わず二度見してしまう。

「つーか、モンスターじゃないよねアレ!? 身体は全裸の人間だもの! 顔以外はオツサンのもの!」

「はあ? なに言ってるのお前? ありやあ、どう見たってゴリラ型のモンスターじゃねえーか。ドラクエとかでよく見るようなゴリラ面してんだろ?」

「確かにゴリラ面だけど、ゴリラなのは面だけだよね!」

「ゴリラツラじゃない、ジャニ〇ズ顔の桂だ!」

「テメエの話はしてねえんだよ!? 昭和臭えバカ面野郎!」

遠目が利かないせいとか、銀時と桂は、あの全裸野郎をゴリラだと言い張る。そして、それを肯定するようにダスト達は戦い続ける。理由は分からないが、彼らもアレをモンスターと認識しているらしい。

「こいつあマジでどういうことだ!? みんなと違うものが見えるとか、ものすげー怖いんだけど!? まさか俺は邪王真眼の使い手に覚醒しちゃったのかあーっ!」

「いったい、なにごとですか!」

テンパったカズマが発狂したように叫び出して、となりにいたためぐみんを不必要にビビらせる。彼だけゴリラに見えない理由はノルングラスをかけているおかげなのだが、事情を知っているノルンの方は一切説明することなく人間観察に熱中していた。

《へえ。あのダストって人、ただのチンピラじゃなかったんだー》

彼の過去を少しだけ見て面白い事実が分かった。あのチンピラは、軽薄な見た目に反して意外な特技を持っており、偶然それを見ることになった銀時も一目で高い評価をつける。

「ほう、あの金髪の槍捌きはなかなかのもんだな」

巧みに槍を使いこなすダストの実力は、戦歴豊富なサムライから見てもかなりのものだった。

皮肉なことに、ダストが本来の力を出せるようになったきっかけは銀時にあった。遊び人が起こしたバカ騒ぎのせいで酷い目に遭わされまくったダストは、溜まりに溜まった悔しさから一方的に対抗意識を抱くようになってしまい、ベルディアの件でさらに差をつけられたことに焦った彼は、分が悪いと言わざるを得ないこのクエストを受けてしまったという訳だ。

それでも今は勝てそうな空気感を出しており、ダクネスですらDMを忘れて素直に感心する。その反対に、報奨金を取られたくないアクアは因縁をつけてくるけど。

「まさか、あれほどの実力者がアクセルにいたとはな……」

「確かに、チンピラとは思えない戦いっぷりですけど、『ランサーは噛ませ犬』というお約束には決して抗えないわ！」

「がんばってるランサーさんに失礼なこと言ってるじゃねえーよ!」

駄女神の心無い言葉を叱りつける。あいつらだって真剣なんだよ。脚本の犠牲になっても一生懸命戦ってんだよ。

しかし、アクアの言葉が呪いとなったのか、ダストの攻勢が終わってしまう。

「あつ、ゴリラに槍を奪われました」

めぐみんの言う通り、槍を掴まれた瞬間にダストはゴリラに蹴り飛ばされて、頼みの武器を失った。こうなってはもう勝ち目などなく、地面に転ばされた彼はその場から逃げようとする。

だが、そこで更なる悲劇に襲われる。なんと、起き上がる途中で四つん這いになった瞬間に攻撃を受けてしまい、丁度いい感じの高さにあつたケツ穴に槍の石突を突っ込まれてしまったのである。

「ダストの出すところが槍でやられたアアアアアッ!」

ノルンが予言した通り、ダストはゴリラにケツ穴をやられてしまった。ケツに槍を刺したまま仲間に運ばれていく様はとても悲しい光景で、流石のアクアも思わず祈りを捧げてしまう。ただ一人、ダクネスだけはイイ笑顔を浮かべていたが……。

「くふうんっ! 仲間の前であれほどまでの恥辱を与えるだなんて、どこまで鬼畜なやつなのだ! こうなれば、クルセイダーとして私が仇を取らねばなるまい! いいや、



止めても私は行くぞ！ たとえヤツに敗北し、みなの前でア○○○○○○クされたとしても、必ず耐え抜いてみせりゆからっ！」

「今この瞬間にも耐えられてないんですけどおーっ?! つーか、テメエが騒いだせいでゴリラ野郎に見つかったあーっ?!」

逃げていくダスト達に興味を失ったゴリラは、数キロ先で騒いでいる銀時達の存在に気づいてしまった。命を狙われ続けた今の彼にとつて人間はすべて敵でしかなく、いつさいの迷い無く防衛行動を始めた。

「お妙さんのペチャパイをこの目で拝むまで、俺は死ねないんだああああああっ!! (日本語)」

「なんか、気持ち悪いこと叫びながらこっち向かってきたアアアアアッ!!」

怒りとエロスに精神を支配されたゴリラは、ドス黒いオーラを放つてこちらに接近してくる。見た目は全裸の変態だけど、鬼気迫る雰囲気は凶暴なモンスターのそれであり、魔王の幹部に匹敵するスーパーゴリラだと言えなくもない。

だが同時に、カズマはあれが人間であると確信する。

「だって、今おもいつきり日本語で喋っていたもの！ はつきりとペチャパイつて卑猥な単語が聞こえたもの！ 分かりやすく(日本語)とかあざとい語尾になってたし、あの人は俺達と同じ転生者かもしれないぞ!!」

「はあ？ なに言ってるんだよカズマ君。確かにペチャパイとか言ってた気もすっけど、ありやどう見てもモンスターじゃねえーか」

「そうだけカズマ。そりゃあ、異世界なんだから、日本語話すゴリラくらいいてもおかしかねえーだろう？」

「いるわけねえーだろ、そんなゴリラ!? つーか、アレ、ゴリラじゃねえーし! ゴリラみたいなオッサンだから!」

「こんな時にふざけるな! 黙って聞いてやっていけば、頭のおかしいことばかりほざきおつて! 不可視境界線があるとか妄想してるイタイ中二病の戯言などに構ってなごいられぬわつ!」

「誰がイタイ中二病だ!? 俺の頭はめぐみんと違って至極まともだあーつ!」

「おい、それはどういう意味だ!? 爆裂魔法を詠唱しながら聞かせてもらおうじゃないか!」

カズマが必死に訴えてもマダオ達には伝わらず、挙げ句の果てには、めぐみんの怒りまで買ってしまう始末になった。

第一、凶暴化したゴリラは止める必要がある。そのために来た桂達は、カズマを無視して立ち上がる。

「さあ、いくぞエリザバス! 波動砲用意!」

〈了解！ 波動砲発射用意！〉

「そんな下品な波動砲があつてたまるかあーっ!? つーか、これヤバいんだけど、このままやらせていいのかあーっ!?」

良いも悪いも、走り出したバカ共を止める手段はカズマに無い。ようやく完成したネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲の実戦射撃を成功させるべく準備を進めていく。

〈目標、正面！ ゴリラ型モンスター1体！ 距離、2300！ 高速で我が隊に接近中！〉

「照準合わせ！ 目標、正面のゴリラ型モンスター！ 対ボスキャラ榴弾装填！ ヤツのどてっ腹に食らわしてやれ！」

なんかそれっぽい号令を言つてテンションを上げていき、それに釣られたノルンもまた、カズマの頭上でかっこつける。

《見せてもらおうか、地上の技術で作られた、超兵器の性能とやらを！ 天界のヤツは波動砲だったからバニルのバカも一発でぶっ飛ばせたけど、こっちはどうかかなー?》

「(オリジナルは本当に波動砲だったのおーっ!? つっこみどころ満載だけど、バニルってヤツはどうなつてんだ!? ウイズの友達とか言つてたけど、波動砲食らつてんのになんでピンピンしてんだよっ!?)」

本来の力を発揮した神と悪魔の出鱈目さを知って、カズマは一人戦慄する。まさか、運動会で本物の波動砲をぶっ放していただなんて、撃つてたこいつも死なないバニルもどうかしてるぜコンチクショウ。

「つてことは、あの巨大チ○コは、マジで波動砲なのかあーっ!」

《だいじょーぶだよ、カズマ君。流石の桂でもイスカ○ダルの技術は再現出来なかったから、火薬の代わりに魔力を使ったファンタジーな野戦砲に改造したみたいだよ?》

ノルンの言うように、あの大砲は、実体弾を撃ち出す野戦砲だ。

2つの玉に納めた高純度のマナタイトから魔力を抽出して薬室に送り、圧縮したそれを使って砲尾に仕込んだ【爆発魔法】のスクロールを複数同時に起動させ、その圧力で実体弾を発射する。従来の科学技術に魔法の力を合わせた仕組みである。

もちろん、弾の方にも工夫があつて、対ボスキャラ榴弾の中には改良型ジャスタウエイが6個も内蔵されており、運動エネルギーを合わせると部分的な破壊力なら爆裂魔法に匹敵する。

コストが高くて量産出来ない上に、デザインについても問題だらけだが、性能に関しては折り紙付きで、銀時達も興味が湧く。

「見てろよ女子共! いよいよ、巨大なチ○コから熱いものが飛び出すぜえーっ?」

「お前はなんつーこつ恥ずかしいセクハラしてんだアアアアアッ!? 好きな子にイタズ

ラする小学生みたいで痛々しいから、そういうのはいい加減卒業しろよ、頼むから!」  
内心のワクワクを隠せない遊び人とマダオが大人気無い会話ではしゃぐ中、その瞬間は訪れる。

〈魔力チャンバー内、圧力上昇! エネルギーチャージ、120%!〉

「よし、テエーツ!」

桂の合図に従って、本来ならもっと未来で開発されるはずの近代的な矢が放たれる。回転しながら飛び出したソレは猛スピードで空を飛翔し、激走しているゴリラに向かって流星のように落下していく。

これは間違いなく直撃だ。自分の技術に自信があつたエリザベスは、撃つた直後に勝利を確信する。

だが、彼の予想した歓喜の瞬間がやって来ることはなく、代わりにとんでもない事態が起こつた。なんと、ゴリラは超反応でとつさに身体を一回転させ、体勢を整えた直後に飛び込んできた砲弾をこちらに蹴り返してきたのである。

「当たらなければどうということはない! (日本語)」

「シヤア的なセリフを言いながら弾を蹴り返したあああああーっ!」

まさに非常事態である。この世界に於て以来、命懸けの戦いを強いられ続けたゴリラは、砲弾を蹴飛ばせるくらいに強くなつていたので。

「つーか、こつちに飛んで来るけど、これってすっぱーヤバいんじゃない?」

「総員退避イイイイツ!! あれはもうじき爆発するぞっ!!」

桂が指示を出すや否や銀時達は逃げ出した。幸い、弾は大きな放物線を描くように飛んでいるので、逃げる時間はかろうじてある。その代わりに、ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲は諦めなければならぬが、今は人命を優先する時である。

だがしかし、自分の命よりも世界平和を優先するダクネスは、卑猥な大砲を守るように両手を広げて立ちほだかった。

「こんなことで人類の希望を破壊されてなるものかつ! この巨大なチ○コこそ、我らを変更する快樂へ導いてくれる救世主! それをお守り出来なくてDMを名乗っていられるかアアアアアツ!!」

「そんなもん、命懸けで名乗ることじゃないんだけどおーっ!」

つっこんだ銀時は、こんな時でもまったくブレないダクネスに呆れつつも、無謀な彼女を助けようと自然に身体を反応させる。砲弾が当たる前に妖刀・星砕を投げつけて爆発させたのである。そのおかげで直撃するよりかは被害を押さえられたものの、それでもダクネスは大ダメージを受けてしまった。

「ああ……快・感!」

「こいつあやべえ！ 爆発の衝撃で感覚が狂ってやがる！」

「いや、その症状は元々あったものだから。その人は、登場した時からナチュラルに狂っているから」

唐突に始まったSMコンビのコントに、カズマが冷静なつつこみを入れる。

幸いゴリラは、素足で弾を蹴ったせいで、すねを痛めて止まっているが、のんびりとコントをしている余裕などはない。

「今のうちにダクネスの治療を頼んだぞ、衛生兵……じゃなくて、エセ女神！」

「誰がエセ女神よ、引きニート!？」

せつかくの出番にケチをつけられたと、幼稚なアクアが突っかかってくる。そんなことをするよりも、さっさと回復してやれよ。イラついたカズマが心の中でぼやいていると、彼女の役目が奪われるという珍事が発生してしまう。

「エリザベスよ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を守ってくれた礼に、アレをかけてやってくれ」

〈オツケー分かった。【ベホマ】ッ!〉

「おお、なんということだ!?! あれほどのダメージが一瞬で全快したぞ?！」

「世界のルールをガン無視してドラクエの呪文使ったあーっ!?!」

エリザベスはベホマをとまえ、痛みを楽しんでいたダクネスを一瞬で回復させた。ま

さか、あの超有名な回復呪文をこの目で見ることになるうとは。ファミコン時代からお世話になってる銀時と長谷川は興奮し、若手ゲーマーのカズマもまた便利なスキルに笑みを浮かべる。その反対に、アクアだけは恐怖で真っ青になっているけど……。

「これはいつたいたいということよ!?」なんでアンタがベホマなんて高等呪文を使えるの!? 大体、ドラクエの呪文なんて存在しないはずですけど!?」

へはあ? ナニ寝ぼけたことぬかしてんだよ。「魔物使い」の俺がベホマ覚えんのは当たり前だろーが」

「そういやあ、そんな設定で登場してきやがったけど。まさかお前、ドラクエ5の主人公と同じ呪文を使えんの?」

へベホマやバギクロスは元より、ルーラやパルプンテなども使えますが、それがなにか?」

「そんなのウソでしょ!? ねえ、神様!」

「お前がその神様じゃね?」

予想外の事実を知り、アクアの危機感メーターが急上昇していく。このままでは『回復魔法が使える』という唯一の長所を奪われてしまう!

「うわああああああんつ!? こんなオバQのパチもんなんか、回復キャラの座は渡さないんだからあーつ!!」



「へやんのか駄女神!」 この前は後れをとったが、今日こそ決着つけてやらあ!」  
「こんな時に、醜い仲間割れしてんじやねえーっ!」

しよーもない理由でケンカが始まってしまった。その様子に呆れつつ、カズマは冒険者カードを取り出す。

「あの駄女神、ほんつとバカだぜ。エリザベスだけじゃなくて、俺と長谷川さんもベホマを習得出来るのに……。よし、あつた!」【ベホマ】500万ポイント……。つて、遊び人スキルと同じオチかよっ!!」

思惑が外れたカズマは、冒険者カードを地面に叩きつけた。バカな存在はアクアだけではなかったことを失念していた彼のミスだ。そのせいで、彼の周りにはバカザムライ達からも絡まれてしまうハメになる。

「おいカズマ、なにやってんだ! あまりにもヒマだからつて遊戯王ごっこしてんじやねえーよ! それっばいアクションしても、ブルーアイズホワイトドラゴンは召喚出来やしねえーぞ?!」

「そんな遊びしてねえよ!? つーか、もうこんなの止めない!」 あのゴリラ人間だし……」

「この後に及んで、まだそんな戯言を言うか! 大砲から放たれた弾を蹴り返す人間がどこにいる!? あれほどまでに立派なゴリラが、ゴリラじゃないわけないでしょーがっ

!？」

「確かに、アレを人間と認めたくないのは俺も同じだけれども！ ゴリラだって大砲の弾を蹴り返したりしないよね!？」

銀時と桂による割と理不尽な口撃がカズマを襲う。真面目な話をしただけなのに、どうしてこうなった！

ただ、視点を桂に変えてみると、そちらもまた真面目な思惑があった。

「とにかく、今は出来る限りのデータを集めて、後に王都で結成する『モーレッツ爆裂砲撃隊』の稼働率を少しでも高めねばならんだ。ゆえに、ここは俺に任せて、君は大人しくしているがいい」

「なにそのダサイ部隊名!？ 熱意が微塵も感じられない適当さなんだけど!？」 『モーレッツに頭のおかしい爆裂狂』はコイツですすでに間に合ってるから、そっちはもつとカッコいい名前にしてくれよ!？」

「おい、お前達っ！ 大人しく聞いていれば、偉大なる爆裂の名を私とセットでバカにして! いったいどれだけこの私を怒らせるつもりですか!？ いいえ、もはや限界です!

我慢強いと評判の私もマジでキレてしまいました! こうなれば勝負です! あんな卑猥な大砲よりも、私の爆裂魔法こそが遙かに上だということを、愚かなるあなた達に思い知らせてあげますよ!」

バカ二人の相手をしていたら、めぐみんが乱入してきた。大砲の威力が想像以上に強力だったせいで爆裂魔法の存在意義を脅かされてしまい、アクアと同じような危機感を抱いてしまったからだ。

それゆえに、俄然気合いが入ってしまう。

「大砲などなににするものぞ！　我が誇りし爆裂魔法は、神すら恐れる魔弾にして、決して逃れる術のない無慈悲なる業火なり！　それは、魂までも焼かれる火刑！　それは、死しても安らげぬ火葬！　その血、その肉、その骨の、一片までをも決して漏らさず、一切合切、汝のすべてを怒りの炎で焼き尽くさん！　これが運命！　避け得ぬ宿命！　己が不幸を呪いながら、醒めない悪夢に飲まれて果てろっ!!」

「お前はどんだけあのゴリラに八つ当たりする気満々なんだよ!？」

やたらとおつかない内容の詠唱を唱えるめぐみんは、カズマのつつこみを見無視して必殺の魔法を放つ。

「【エクスプロージョン】 ツ!!」

めぐみんの叫び声が響いた直後に眩しい光が発生し、それからまもなく届いてきた爆音と衝撃波がカズマ達を襲う。

これはヤバイよ。マジヤバだよ。流石のゴリラも今度ばかりは助かる見込みが無いだろう……。

「おい、ノルン。めぐみんのバカがとうとうヤっちゃまったんだけど、この後いつたいうすりやいいの?」

《だいじょぶだよ、カズマ君。ギャグパートをやってる時は、どんなにヤバいことが起きててもギャグで済むのがお約束だから、危ない日でも安心だよ☆》

「(そういう危ない説明されても『そうですね』って言えねえーよ!?)」

残念ながら、ノルンの説明にはまったく説得力がなかった。その証拠だとも言うように、煙が晴れた爆心地にはゴリラの姿が見あたらぬ。

「やっぱり、ヤっちゃまったか?」

「そんなの当然、ヤつたに決まっているじゃありませんか! なにせ私の、怒りと悲しみと愛しさと切なさを込めた渾身の爆裂魔法だったのですから!」

言葉の意味は分からないが、とにかくすごい自信があつた一撃なのは間違いない。魔力が尽きて地面に寝転がっためぐみんは、満足そうに笑みを浮かべる。

しかし、彼女の満足感はずぐに消し飛んでしまう。なんと、爆心地の土中から無傷のゴリラが飛び出してきたのである。

「この程度の攻撃など、お妙さんの想いが詰まった愛のムチには遠く及ばんっ! (日本語)」

「そそそそそ、そんなバカなああああああああーっ!?!」

予想外の展開にめぐみんが悲鳴を上げ、銀時や桂までもがゴリラの活躍に目を見張る。

「まつ、まさか、こんなことが!?! あの野郎、【あなをほる】で爆裂魔法に耐えやがった!」

「そ、そうか! 【あなをほる】で地面に潜ることによつて、地下へ与えるダメージが少ない爆裂魔法を無効化したのか!」

「ちよつと待てえーっ!?! なんで急にポケ○ンみてえな展開になつてんの!?! 生存本能刺激されて、ゴリラからゴリキーに進化でもしたのかよ!?!」

バカなことを言うバカ二人につっこみつつも、殺人事件にならなくてホツとするカズマさん。その真逆に、必殺技を破られためぐみんは大いに取り乱してしまふ。

「おつ、おのれーっ!?! よもや、あのような力技で爆裂魔法が破られるとは!?! いいえ、まだです! 私はまだ、本気を出してなどいけません! さあ、カズマ! ヤツがここへ来る前に魔力を回復してください! 次こそ必ずあのゴリラを、我が魔法で消し炭に……」

「ああ、いやスマン。今日はそういう気分じゃないから、また今度誘つてくれよ」

「飲み会を断るサラリーマンですか!?!」

これ以上面倒な話は御免だと、めぐみんの頼みを男らしく断る。好感度は下がるけ

ど、いつまでもこんな茶番に付き合っついていられるか。

「（魔力を補給しなければ爆裂魔法も使えないし、とりあえず、ゴリラの爆殺だけは防ぐことができるだろ……）」

なんてことを、ちよつと前まで思っていました。それなのに、空気を読まない長谷川がカズマの代わりを申し出て、さらに面倒なことにダクネスまでが加わってきた。

「安心しろ、めぐみんちゃん！ カズマ君がやらねえなら、この俺に任せとけ！ 覚えたばかりの【ドレインタッチ】でバツチリ回復してやるよ！」

「ならば、魔力の提供はこの私に任せてもらおう！ アクアはまだケンカ中だし、むさ苦しい男達より、いやらしい身体をした女騎士から奪う方がハセガワも嬉しいだろう？」

「そりゃあ確かにそうだけど、もうちよいオブラートに包んでくれよ!」

どうやら、ダクネスには別の思惑があったようだが、とにかく今は時間が無いので魔力の回復を急ぐ。めぐみんとダクネスの首元に触れると、長谷川はすぐさまスキルを使った。

「よーし行くぞー! 【ドレインタッチ】ッ!」

「ほう、これがドレインタッチというものか。魔力が吸われていくごとに、なんだか心が清められて、これまでの私が酷く汚れていたような気がしてくる……」

「はあつ、はあつ! これはどういことですか!?! 急にエッチな気分になって、あのゴ

リラに弄ばれたい衝動が止まらにやいれすっ!!」

「なんでだアアアアアッ!? どうして『マジックポイント』じゃなくて『マゾポイント』が移動してんだ!? 確かにどっちもMPだけど、どういう理屈でマジックポイントがマゾポイントに変化してんの!? つーか、マゾポイントってナニ!?」

幸運がバグってるマダオは、ドレインタッチで変な物を吸ってしまった。カズマにとつては幸いなことに、めぐみんの爆裂魔法は間に合わなくなった。

しかし、まだゴリラの方が解決したわけではない。このままでは、やたらと強い変態と白兵戦になってしまう……。

なんてことを、ついさっきまでは思っていました。銀時と桂の二人が突撃して来たゴリラ野郎をフクロにするまでは。

「オラオラ、くたばれクソゴリラッ!!」

「恥を知らぬフルチン野郎が、人間様をなめんじやねえぞ!!」

「ぐぎゃああああああーっ!!」（日本語）

「あんだけ散々やらかshといて、最終的にはボコ殴りかよっ!!」

なんやかんやと騒いでみたけど、結局最後は通常攻撃で事が済んでしまいました。やっぱり、RPGの戦闘は会心の一撃を決めるのが一番気持ち良いよね。

「はあ……なんにせよ、犠牲者が出なかったことだけは喜ぶべきだな」

空しい内容だったものの、敵味方共に被害は軽微で戦闘が終わった。後は戦後の処理だけだと、カズマは一人安堵する。

しかし、まだイベントは終わってなどいかなかった。気絶したゴリラの顔を改めて確認した銀時は、信じられない事実によく気づいたのである。

「あれ、よく見たらこのゴリラ、近藤にソックリじゃね？」

「おお、そう言われると、近藤さんにめっちゃ似てるなあ」

「確かに、この見覚えのあるゴリラ面は近藤と瓜二つだな」

「「「つーかコレ、本人だ……」」」

「ええーっ!? その人、あんたらの知り合いなのお!? どういう仲か知らないけど、ボコる前に気づいてやれよ!」

あまりに酷い再会シーンにカズマの疲労が一気に増した。知り合いの人間をゴリラ型モンスターに見間違えるとか、普通はあり得ないよね。ノルンのおかげで「真実の姿」が見えるカズマだけはそう思ったが、銀時達が近藤に気づけなかった理由には、彼の想像を遙かに超えたトンデモ現象が関わっていた。



## 第24訓 人の縁は思つてる以上に切れにくい

驚くべきことに、銀時達が倒したゴリラ型モンスターの正体は真選組局長の近藤勲だった。

なぜ日本にいるはずの彼が、この異世界で野生的なサバイバル生活を強いられていたのだろうか。これだけ顔馴染みのバカ達が転生しまくっているのだから、どうせコイツもアクアの差し金で送られて来たのかもしれない。そう思つて聞いてみたが、どうやら違ふらしい。

「おいアクア。もしかして、コイツもお前が担当したつてオチなのか？」

「ううん、コイツは知らないわよ？ カグヤ先輩から転生させろつて頼まれた覚えもないし、たぶんこれは『他ゴリラの空似』つてヤツじゃない？」

「いや、そんな慣用句聞いたことねえし、顔見知りのゴリラなんざ近藤しかいねえから」  
銀時達と同じように近藤を認識したアクアであったが、彼がここにいる理由はサツパリ分らないと言う。

こうなると、全裸野郎が目覚めてから事情を聞き出すしかない。その当人はというと、いやらしい表情を浮かべながら気持ち悪い夢を見ているようだが……。

「ぐふふふふふ！ それじゃあ遠慮なく、お妙さんの処○をいただきまあーすつ！（日本語）」

「冒頭から生々しいモンいただいてんじやねエエエツ!!」

アブナイ寝言を言い出した近藤にイラついた銀時は、彼のチ○コに容赦なく蹴りを入れた。哀れなゴリラは、強烈な股間の痛みで強制的に目を覚まし、切ない部分を手で押さえながら地面を転げ回る。

「ぐほおおおおおおーっ!? お妙さんとイク前にチ○コと玉が逝つたあーっ!?（日本語）」

「チ○コと玉が逝く前にテメエの頭がイッてんだよ、変態ゴリラがあーっ!」

間抜けな叫び声を上げる近藤に容赦無くつつこみを入れる。それと同時に銀時と桂は、とある事実気がついた。

「つーかコイツ、しつこいまでに日本語使つて来やがるけど、もしかして俺達みたいに翻訳スキルが付ついてないの?」

「やはり、梅毒や淋病にかかつてそうな梅淋ゴリでは、バイリンガルになれなかつたか……」

「性病と転生特典はまったく関係ないんですけど!」原因はともかくとして、彼にはこつちの世界の言葉が分からないみたいね。もしかすると、転生に失敗して頭がパーに

なったのかしら？」

自分のミスではないと確信しているアクアは、ドヤ顔で近藤の状態を言い当てる。ただし、内心では戸惑っており、転生者に関わる仕事を長い間行っていた彼女でもそれ以上のことは分らない。駄女神のアクアでさえ転生作業に失敗したことがないのだから、近藤のような状況は本来ならあり得ないのだ。

果たして、これはどういうことか。ある程度知識があるアクア達ですら分からないのだから、この世界の住人であるめぐみんとダクネスに至っては、さらに意味不明である。「ちよつといいですか、ギントキ。いまいち状況が分からないのですが、会話から察するに、あなた達とそのゴリラは同郷の知り合いといったところなのですか？ もし、そうだとすれば大変ですよ！ こんなチ○コ丸出しのケダモノがパーティに加わったら、スキンシップという名の陵辱を受けて、清らかな私の身体が汚されてしまいましたゆっ！」

「前回のマゾポイントが継続して効いてるうーっ!？」

紅い瞳をグルグルとさせためぐみんがエロい妄想を言い出した。長谷川のドレインタッチでダクネスのDM成分が移ってしまったせいだ。

その反対に心が綺麗になったダクネスは、真面目な様子でめぐみんを叱る。

「止めないか、めぐみん！ そのように汚れた妄想を年頃の娘がするものではない！

快樂に身を任せて自分自身を傷つけている今のお前の姿を見たら、ご両親が悲しむぞ

！」

「こっちは賢者モードになって、自分自身を傷つけるような説教しちやっってるうーっ!」  
一時的にマゾっ気が抜けたダクネスは、めぐみんを叱りながら自分自身にブーメランを投げつけるといふミラクルな自虐プレイを披露する。ドMな性騎士は問題外だが、心の綺麗なダクネスさんも、これはこれで厄介だ。

ただでさえ面倒なのに、これからゴリラに事情聴取をしなければならないのだから、おかしな状態のコイツらに構ってなどいられない。

「あーもう、お前らゴチャゴチャうるせー! 後でまとめて説明すつから、とりあえずお前らはそっちでUNOでもやってやがれ!」

「なんですかその態度は!? 放置プレイでこの私をいたぶろうという魂胆ですか!? そうか、そういうことですな!? 魔力切れの魔法使いをいやらしいモンスターに襲わせて、激しいNTR異種プレイをみんなで楽しむつもりでしょう!」

「お前はこのSSをR-18にするつもりか!? おいダクネス、このバカがエロいことしねえように向こうに行つて監視してろ!」

「承知したぞ、我が主。こちらのごときは気にせず、そちらの話を進めるがいい」

ドMが抜けて空気まで読めるようになったダクネスは、エロい妄想に耽っているめぐみんをおんぶしてその場を離れていく。

そんなやり取りを行っていている間に股間を蹴られた近藤もダメージから回復し、ようやく正気を取り戻して辺りの状況を把握する。その瞬間、腐れ縁でつながったバカ野郎達との奇跡的な再会が実現した。

「なっ、なっ、なっ……なんじゃこりやあああああーっ!? 万事屋に長谷川さん、桂達までいるなんて!? 死んだはずのお前達がなんでここにいるんだあーっ!? (日本語)」  
あまりに驚いて腰を抜かしそうになるが、それも仕方がないことだ。なにせ、目覚めた直後に死人と遭遇したのだから、これ以上の寝起きドツキリは早々ないだろう。

「そっ、そうか! やたらと酷い目にばかり遭うからもしやとは思っていたが、やはりこの狂った世界は地獄だったのかあーっ!? (日本語)」

パニックった近藤は、エリスが聞いたらプンプンと怒りそうな勘違いをしてしまう。確かに、彼がそう思ってしまうのも無理はない世界なのだが、転生する際の説明を聞いているならそんな間違いをするわけがない。そこに気づいた銀時達は怪訝な表情を浮かべるものの、解説担当の長谷川が彼の疑問に答えてあげた。

「安心してくれ近藤さん、ここはまだ地獄じゃねえ。俺達はみんな、日本を担当する駄女神によって無理矢理この異世界に転生させられちゃったんだよ」

「ちよっ、なにさらっつと私をデイスってくれちゃってんのよ!? 私が転生させなかつたら全員地獄行きだったんだから、そこは謝礼金を出すぐらいの勢いで感謝するところ

しよーっ!」

長谷川の説明にアクアが文句を言ってくる。近藤にとつては初めて会った彼女のことも気になるところだったが、今は先ほどの会話の方が重要問題である。

「なにがなにやらよく分からんが、駄女神とか転生とか、とてもではないが信じられんな。第一、このふざけた世界が地獄じゃないってのが納得出来ん!」(日本語)

「納得出来んと言われても、ラノベによくあるファンタジーな異世界としか言えませんけど、そんなことも知らねえクセに、テメエはいつたいどうやってこの世界に来たんだよ?」

「それは俺にもよく分からん。気がついた時には、もうこの世界にいたからな。ただ、原因があつたとすれば、あの時のアレかもしれない……」(日本語)

思い当たる節があるらしい近藤は、記憶を辿るように語り出した。

「あれは、肌寒い風が吹く夕暮れ時だった。俺は、お妙さん達の周りをうろつく不審者を捕まえるために志村家へとやって来た」(日本語)

「はあ? なに言つてんの? 捕まえるもなにも、お前自身がストーカーという名の不審者じゃね?」

「いや、それは違うから! 俺はストーカー的なヤツじゃなくて、英霊的な近藤がマスター的なお妙さんをサーヴァント的に守つてゐるって感じのヤツだから! その証拠に

サーヴァントの俺は、お妙さんに仇なす敵をいち早く察知した。あろうことか、俺より先に侵入していた不審者と遭遇したのだ！（日本語）

「なんだよオイ、お前の他にもお妙のストーカーなんかする物好きがいたのかよ？」

「なにもおかしくないだろう!? お妙さんほどの貧乳美女に欲情するヤツは五万といいわ！ だがしかし、好きだからと言ってストーカー行為は許されん。こちらに気づいて逃げ出したそいつを、俺はすぐさま追跡した！（日本語）」

「ストーカーがストーカーにストーキングしちゃってますけど!? なにかとストーカーが集まってくる人気者の志村さん家は、どんだけ変態ホイホイなんだよ!？」

話を聞いている内に変なキャラが登場してきた。どうやら、ソイツは志村家でなにかをやっていたらしいが、果たして近藤は捕まえられたのだろうか。

「お妙さんを害する者はなにがなんでも排除する。そう覚悟を決めて必死に追跡したのだが、その途中で予期せぬ事故が起こった……。マイケル・○・フォックスにソックリな少年が運転するデロリアンの暴走に巻き込まれて、気づいた時にはもうすでに見知らぬ森の中へと跳ばされていたんだアアアアアッ！（日本語）」

「違うんですけど!? アンタだけ『バック・トゥ・ザ・フューチャー』的な別件に巻き込まれてんですけどおーっ!？」

いざ真相を聞いてみたら、さっぱり事情が分からないカズマでさえつつこまずにはい

られないほどに予想外なオチが待つていた。なんと近藤は、死んだ後に女神と会つて転生して来たわけではなく、生きたままこの世界にぶつ跳んで来ていたのである。

「なんか色々おかしいだろオイ!? なんでそこで唐突に異世界転移してんだよ!? 普通は未来にタイムスリップして猿だらけの惑星に辿り着き、ボス猿戦争を勝ち抜いて『キング王に俺はなる!』って盛り上がるどころだろうが!?!」

「どんだけクソな映画だよソレ!? なんでバック・トゥ・ザ・フューチャーに巻き込まれた俺が猿の惑星に流れ着いてワンピース的にキングゴング目指さなきゃならねえーの!?! (日本語)」

二人共に混乱してバカな言い合いになつてしまふ。みつともない光景だが、アクアやノルンですらサツパリ分らないのだから仕方がない。

「(なあノルン。あの人はどういう理屈でこの世界に来たんだよ? 転生しないでぶつ跳んでくるとか、この作品の設定が色々台無しなんだけど?)」

《ファツ!? えつとおく……ただ今データを検索中デス、もうしばらくお待ちください》  
「(あつ、こいつ逃げやがった!)」

カズマの質問に答えられなかったノルンは、神器の中に引つ込んでこの現象を調べ始めた。

一方、カズマ達がそんなことをしている内に落ち着いた銀時達は、なにも知らない近



藤にこれまでの経緯を説明した。

「つーわけで俺達は、元の世界に戻るために、カジノで一山当てようと奮闘してるってわけだ」

「なんでいきなりカジノが出んだよ!? ついさつきまで魔王を倒すとか壮大なストーリーを語ってたよね!? しかし、とても信じられんな。この青髪の子が女神様で、魔王を倒すためにお前達を異世界へ転生させただなんて……。これではまるで、頭の悪いバカが作った二次小説みたいじゃないか（日本語）」

「まあ、ぶっちゃけその通りなんですけど、それはもう女神の私ですら変えようがない事実だから、ジャンプの発行部数が減りまくっているという悲しき現実と一緒に受け入れなければならぬわ」

「女神様が現実に完全屈服してんじやねえーっ!? ジャンプはまだ完全に燃え尽きちゃいねえんだよ! きつといつかは、ドラゴンボールが連載してた頃のような輝きを取り戻すよ!（日本語）」

ようやく自分の状況を把握出来た近藤は、知り合いと出会えた安心よりも戸惑いの方を感じてしまう。そしてそれは、自分の死後の話を聞いた銀時と同じだった。気にしてないフリをしつつも、内心では仲間のことが気がかりだったのである。

「ところで、向こうはどうなってんだ? さつきも変なストーリーカーキヤラが勝手に増え

てやがったし、お妙か新八が変なゲストに絡まれたりしてんのか？」

「ふつ、やはり気になるか。まあ、俺の見たところ、危害を加える気は無いようだったがな……。その辺りの説明をするついでに、お前が死んだ後の話もここでしておくか。せつかく本人に会えたことだし、お前の最後を盛大に見送ったバカ達の想いを伝えよう……」（日本語）

小さく笑みを浮かべた近藤は、空を見つめながら語りだした。坂田銀時という名のサムライが消え去ったかぶき町の話を……。



今からおよそ一ヶ月前、今にも雨が降り出しそうな曇り空の下で万事屋の葬式が行われた。今日この日、お前と縁を結んだ者達は、かぶき町の英雄を盛大に見送るために、それぞれの想いを込めた最高の舞台を用意した。

メインの式場は、お妙さん率いるキャバ嬢軍団が手配して、お前の葬式にふさわしい賑やかな飾りで彩られていた。

『これなら銀さんもキャバクラで遊んでる気分を味わいながら安らかに逝けるでしょう……』

「こんな不謹慎な状況で安らかに逝けるかあーっ!? あまりにケバい装飾で、新装開店したばかりのキャバクラみてえになっただろーが!? いやらしいネオンの光で寝てなんかいらねえよ! 眠らない夜の街に安らぎなんざねえんだよ!」

と、いうような万事屋のつつこみが今にも聞こえてきそうなほどに、お妙さんの仕事っぷりは実に見事だった。流石は俺のお妙さん、つつこみメインの万事屋を最後の時まで引き立てる素晴らしい気配りです。

「どこにも誉める要素は無えよ!? どう見ても、もてなす客をバカにしてるクソなキャバ嬢なんだけど!? なにさらつと地の文でアイツの弁護しちゃってんの!」

ええい、うるさい! お妙さんのやることはすべてが正しいことなのだ!

その証拠に、月詠を始めとする吉原の女達が用意した特製の棺桶と見事なコラボを実現していた。

「コラボつつーか、俺の棺桶がエロアイテムにまみれて風俗店っぽくなってるウウウウウツ!」

『気に入ったか銀時よ。吉原からの感謝を込めた最高の棺桶だ。これに入つて見送られれば、悪さばかりしていた主でも天国に行けるだろうさ』

「いやソレ、別の天国にいきそうだけど!? テメエは、なんつー下品なもんであの世に送ろうとしてんのおーっ!? ちよつと待てオイ、俺の棺桶全体にモザイクかけられちゃっ

てんだけど! 清い道具のはずなのに、わいせつ物扱いだよコレ!」

これぞ吉原の美的センス。絵にも描けないほどに艶やかなデザインで、万事屋を想う真心を込めた立派な棺桶に仕上がった。

「絵にも描けないどころじゃなくて、描いちゃいけない状態ですけど!? コイツのどこに仲間を想う真心があるんですかあーっ!」

無論、人によつては不謹慎だと憤るかもしれない。だが、これもこの町の住人らしい優しさの形であり、ここまで豪勢に見送つてもらえるのなら万事屋も寂しくなからう……。

しかもここには、同じ日に亡くなつた長谷川さんも一緒にいる。彼の葬式も関係者の同意を得て合同で行われることになつたのだ。

「えっ、マジで!? 路上生活者の俺なんかのために葬式までやつてくれたの!? なんか、すつげえ嬉しいなあ……」

万事屋のとなりにな置された質素な棺桶には、彼の本体であるグラサンの他に、愛用していたオツサン部分も副葬品として納めてやつた。

「なんで俺のオツサン部分が副葬品扱いなんだアアアアアッ!」

そういう設定なんだから致し方なからう。本人達がどう思おうと、これで準備は整つた。後は出席者が揃うのを待つのみだが、そこへお妙さんの親友である柳生九兵衛が

やって来た。

『遅れてすまない、お妙ちゃん。今からで悪いが手伝おう』

『いらつしやい、九ちゃん。お手伝いの方は大丈夫だから、あそこにいる銀さんに挨拶してあげて?』

『ああ、そうさせてもらおうよ……』

お妙さんの言葉を素直に聞いた九兵衛は、棺桶の元へ歩み寄ると、中にいる万事屋への視線を向けた。するとそこには、まるで王に付き添って殉葬される妃のように万事屋の遺体に抱きつく猿飛あやめがいた。

『おい猿飛、そんなところでなにをしている? 挨拶の邪魔だから、さっさとどいてくれないか』

『イヤよ、絶対離れないわっ! 私はこのまま銀さんと愛の炎で燃え尽きて、一緒に地獄へ逝くのよおーっ! そんなもって、襲ってくる悪魔共を二人で仲良く駆逐して、地獄の帝王となった彼と共にDMのパラダイスを作るのオオオオオツ!!』

「ちよつと、こいつマジでヤベエよ!! 地獄にまでついていつてストーリーカーする気満々だけど?! ダクネスのマゾプレイが可愛い遊びに思えるくらいに闇が深くてドン引きだよ、オイ!!」

愛する者を失った悲しき女ストーリーカーは、見るからに自暴自棄となっていた。一見す

ると「あまり普段と変わらないんじやね？」と思うかもしれないが、彼女の想いは本物であり、このまま放っておくわけにはいかない。そこで、彼女の気持ちを理解出来るストーリーカー仲間のこの俺が、抵抗する猿飛を止めるために立ち向かった。

『止めて、よして、触らないで！ 私は銀さんと一緒に逝くのおーっ！』

『いい加減に目を覚ませ！ 仲間の命を何よりも大切に行っているあの男が、そんな空しいことをして喜ぶとでも思うのか!? 確かに、お前の気持ちも分かる！ 俺だつて、お妙さんという大事な人に先立たれてしまったとしたら、同じことをするかもしれない！

そんなもつて、天国まで追いかけた俺の熱意にお妙さんも惚れちゃつて、その勢いで交際を始めて数カ月後にめでたく結婚、初夜を迎えたお妙さんの○○○や○○○に俺の○○○を○○○しまくつて身も心も天国に逝つてしまかもしれん『お前一人で一足先に天国逝つて来いやアアアアアツ!!』

お妙さんの愛がこもった鉄拳を食らつた俺と、それに巻き込まれた猿飛は、空中をぶつ飛びながら大切なことに気づいた。この苦しくも心地よい痛みこそが、万事屋に救われた世界に生きる命の証し。それは決して無駄になどしてはいけない、かけがえのない輝きなのだ！

「ソレっぽいこと言つてつけど、ストーリーカーと変態DMがぶたれて悦んでるだけじゃねえーか!？」

まったく、痛めつけるだけしか能が無えドS野郎はこれだからイヤだねえ。あの一発は、命の尊さを教えようというお妙さんの優しさなんだよ！

それを証明するように、猿飛の暴走行為はお妙さんの活躍によつて未然に防がれ、問題を取り除いてもらった九兵衛は改めて万事屋に話しかけた。

『やあ、銀時。いよいよ君ともお別れだな。覚悟はしていたはずなのだが、いざこうやつて現実を前にすると、寂しいという感情が心から溢れてしまふ……。だからというわけでもないが、形見として君のチ○コを譲り受けようとも考えた。でも、あの世にチ○コを持って行けなかったら君が寂しいだろうから、移植の件は止めておくよ』

「オイこいつ、なんかさらつとんでもないこと言つてんだけど!? この後に及んで俺のチ○コを狙つてたのかよ!」

彼女の願いは切実なれど、粗末で汚いチ○コとて本人の同意がなくては取ることが出来ない。九兵衛と一緒に来ていた柳生四天王の東城歩は、移植の断念に安堵しながら万事屋に語りだした。

『はあまつたく、あなたには最後まで面倒をかけられますね。だがしかし、もう二度とプリーチーな若の姿を見られなくなつたことには深く同情いたします。そんなわけで、私から素敵な餞別を差しあげましょう。この私が制作した「ちよつとエツチな柳生九兵衛の抱き枕カバー」です。これさえあれば、いつでも若と添い寝が出来る……』

『お前はそんなものを抱きながら寝ているのかアアアアッ!?!』

『ぶげらっ!?!』

いかがわしいアイテムを持ってきた東城にすぐさま天罰が下った。キャバ嬢としての魅力溢れるお妙さんの抱き枕なら、俺も九兵衛も喜んで受け入れたはずなのだが、JKにしか見えないような眼帯ツインテポクっ子では倫理的にアウトだろう。

「いや、なにもかもがアウトですけど。俺の葬式邪魔してるし、本人に断りもなく抱き枕を作るとか、倫理的って話以前に犯罪行為なんですけど」

愛する者がいるヤツは、みんなそろって罪人さ。俺もお前も、大事なものを守るためなら天下の大罪人にだってなれるだろう?!

いや、俺達はすでにやらかしていたな。誇り高きサムライとして歪んだ権力に立ち向かい、絶望をもたらず者達からこの国の未来を守った。

だからこそ真選組は、新たな戦場へと旅立つお前を見送るためにここへ来た。俺達もいずれは逝くことになるだろう修羅道へと向かう者に、トシと総悟はいつものごとくぶつきらばうに話しかけた。

『よう、万事屋。お前が地獄に直行する様をわざわざ拌みに来てやったぜ。俺らもその内そつちへ逝くが、それまでせいぜい地獄の鬼共をシメまくって、ちったあ住みやすくしといてくれや。俺はそこでタバコとマヨネーズの生産工場を作らなきゃならねえか



らよ』

『まあ、そんなわけで、こつちのことは俺らに任せて安心しながら逝つてくだせえ。しばらく旦那とバカ騒ぎ出来ねえのは正直言つて残念ですが、俺が逝つたあかつきには、一緒に地獄を攻め落として【ドエスニイーランド】でも築きましようや』

「ねえちよつと!?! この人達、地獄に逝つてナニする気なのおーつ?! ニコチン野郎の起業話は百歩譲つて許すとしても、沖田君の計画は完全にアウトだろソレ!?! ドエスニイーランドつて、千葉にある夢の王国が地獄にある悪夢の帝国に魔改造されちゃつてるよ!?!」

いや、それは違うぞ万事屋。ふざけているように聞こえるだろうが、ヤツらの言葉は戯れ言ではなく再会の約束だ。サムライとして、ライバルとして、信頼出来る友として。命を懸けて共に戦い、熱い絆で結ばれた男達は、地獄での再会を改めて誓つたのだ。俺達はもう敵ではなく仲間となつたのだから……。

『ほおーら、最後の晚餐に、たらふくマヨネーズを食わせてやるぜ』

『待つてくだせえ土方さん。ここは土方スペシャルじゃなくて、旦那の好物だった宇治銀時丼を食わせてやるところでさあ』

「オイゴリラ、この光景のどこらへんに仲間なんて意識があんだよ!?! なんでコイツら俺の顔にマヨとアンコをぶちまけてんの!?! やつてゐることは地味だけど、これまでの中

で一番腹立つ行為だよコレ!」

そう言つてやるな。不器用なあいつらは、普段通りにツンデレを演じることで心に渦巻く悲しみを必死に押し殺していただけだ。

しかし、お前に近しかつた者達は感情を抑えきれん。万事屋の部屋で遺品整理をしていたお登勢さん、キャサリン、たまの3人は、悲しみを隠すことなく式場にやつて来た。

『おいババア! 涙と鼻水で化粧が溶けまくつて腐つたババアになつてるヨ!』

『なに言つてんだい! お前だつて、腐つて地面に落ちた木〇実ナナみてえになつてるじゃないか!』

『お二人共、落ち着いてください。どちらも腐つた者同士なのですから、ケンカをする意味はありませんよ?』

『誰が腐つた者同士だあーっ!?』

「泣いちゃあいるけど、こいつらも普段通りじゃね?」

非戦闘員とはいへ、彼女達もかぶき町に住む剛毅な者達の一員だからな。涙は見せても心は折れず、気丈にお前を見送る気なのだ。

無論、カラクリであるたまは涙を流していないが、お前の死を悲しむ心は俺達人間と変わらない。

『お待たせしました銀時様、万事屋から遺品を持つて参りました。あなたが大事に保管

していた結野アナのフィギュア及び、アダルトビデオやエロ本などのお宝の数々は、ここにまとめてございます。これである世に逝ったとしても心残りはないでしょう……」

「心残りありまくりだよ!?! なんてこんな目立つ場所で人の恥部を晒してんのお!?! これもう公開処刑じゃねえーかよ!?! ああ、お願いだからマジで止めて!?! 俺の性癖バラさないでえーつ!?!」

掃除中にエロ本を見つけても怒って捨てずに残しておいてあげる。それはまるで、やんちゃな息子を慈しむお母さんのような優しさだった。

すると、今度は親友である坂本辰馬が陸奥を伴ってやって来た。決してここに来ることはない桂と高杉の分まで、今生における友との別れを華々しく行うために。

『アハハ！ アハハ！ よお久しぶりだな、きんときい！ 親友の坂本辰馬が見送りに来てやったぜよオボロロロロロツ!!』

「来て早々、棺桶の中にゲロ吐いたアアアアアツ!?!」

とまあ、このようなハプニングが起こったりしたものの、万事屋と縁のある者達の参列はこの後も続いていった。

『えっ!?! ワシの出番これで終わりいーつ!?!』

『セリフがあっただけでもありがたいと思え』

陸奥の言う通り、進行上の都合により、他の者達の描写は省略することにした。星海

坊主、寺門通、平賀源外、今井信女、幾松、村田鉄子、そよ姫様、ジャツキー、ウイルス・ミス、R4……。その他大勢の関係者が、お前の死を悼んで最後の別れに来てくれた。

「オイ、なんか最後の方に面識無い人混じってますけど!? そんなどーでもいいのより、肝心のあいつらは、どこでナニをしてんだよ!? 新八と神楽のヤツは、どつかで遊んでやがんのかあ!」

心配するな万事屋。無論、あの二人は最初から式場にいた。

ただ、新八君だけはお前の死を受け止めきれず、シヨックを引きずつたままだった……。

『うっ、ううっ……銀さあん……』

『いつまでメソメソ泣いてやがんだ、みつともねえぞ新八イイイイッ!』

『ぶふうーっ!? って、なにすんのさ神楽ちゃん! 葬式中に泣いてる僕をなんでいきなり殴ってくるの!? ここは普通、故人を想って悲しみに暮れるところでしようが!』

『なに甘つちよろいこと抜かしてるネ! 人生の中で泣いていいのは、ダンスの角に足の小指をぶつけた時と、ギャンブルで大負けしてスツカラカンになった時と、余裕ぶつて深夜にジャンプを買いに行ったら予想に反して売り切れてた時だけだつて銀ちゃんが言つてたアル!』

『そっちの方がみつともないわ!? つーかあの人、主人公のクセに、なんてくだらねえ言葉を残してんの!? 主人公のクセに、あっさりと死んじまったヤツが……』

ああ、そうだよ。この物語の主人公は、もうこの世界にいないんだ。改めて現実を思い知った新八君の目から再び涙がこぼれ出る。

それでもチャイナ娘は絶対に泣かない。その目元は痛々しく真つ赤に染まっていたが、泣きに泣いて涙を出し切った彼女は、この時すでに万事屋の意志を受け継ぐ覚悟を心の中で固めていた。

『よく聞け、新八！ いくら心が否定しても銀ちゃんはもういない！ ほじくり出した鼻クソのようにあの世へ飛んで逝ったアル！ でも、ここに！ 私達の魂に！ 銀ちゃんの想いは生きているアル！ だから、しぶとく顔を上げろ！ 無様に抗いて先へと進め！ 私達は万事屋として、銀ちゃんの後継者として、この世の万事を守るアル！』

「……神楽、お前……」

子供だと思っていた少女は、大切な人の死を乗り越えて目覚ましく成長していた。そんな姿を見せられては、お父さんのメガネである新八君も奮い立たずにはいられない。『……ああ、そうだね神楽ちゃん！ これからは僕達二人が、銀さんの代わりに万事屋となるんだ！』

『そして、この銀魂の新たな【主役】に君臨するアル!!』

「それがほんとの狙いかアアアアアッ!?」

遅しく育った子供は、白髪のお父さんが持つていた主役の座を手に入れる野望を抱いていた。万事屋が死んだ今、他のキャラにも主役になれるチャンスが来たのだ。

『つーわけで、BORUTOみたいな新タイトルを早速考えてみたアルが、やっぱり人気マンガの続編と言ったら、ケツにZの文字を付けた「ギンタマボールZ」で決まりアル!』

『単なるドラゴンボールZのパクリじゃねえーか! ボールまで付いてきて、なんか余計に卑猥なもんになってるでしょーが!? そんな企画を出したって絶対に通らないよ!』

『それじゃあZつながりで「機動戦士Zギンタマ」なんてどうアルか?』

『さらに銀魂から離れちゃったよ!? なんでZに着目してZガンダム持って来た!? そのZは銀魂じゃなくてドラゴンボールに付いてたヤツでしょ!』

「ねえ、コイツらなにやってんの? 俺の葬式そつちのけで続編の話を始めちゃったよ? やる気があるのは良いことだけど、やりやあいいってもんでもないよ?」

確かに、お前の言う通りだ。彼らはあまりに気負いすぎて、過剰な挑戦を始めてしまった……。

『もう、ダメだよ神楽ちゃん。機動戦士Zギンタマなんて、絶対にスポンサーからクレ-

ムをつけられちゃうよ?』

『そんなもん気にしなくてもまったく全然問題無いアル! 主役機の交代はサン〇イズの定番だから、逆に大ウケ間違いなしネ! さあ行け、ウツソ! こんなこともあろうかと、カサレリアから持って来たV2ガンダムで、主役の座に返り咲くアル!』

『誰がウツソだコノヤロー!! つーか、お前はなんつー時にブイツーなんて出して来んだ!? 画が無いSSだからって無茶しないでよ神楽ちゃん!』

なんと、万事屋を失って暴走しだしたチャイナ娘は、モノホンのガンダムを持ち出してしまったのだ!

「ええーっ!? ちよつとコレ、どーゆうことなの!? いくら新八の中の人ガンダムの主役やってたからって、主役機まで持って来たら、もうこれタダのVガンダムじゃね!」  
そう、これは銀魂がガンダム化してしまう危機だった。なぜなら、ガンダムを持ち込んで来たのは彼女だけではなかったからだ。

『ちよいと待ちな、お二人さん。主役の交代ならこの俺も立候補させてもらうぜ? このデステイニーガンダムを改造した「ドエステイニーガンダム」でなあ!』

『サン〇イズに怒られそうなブツがもう一機増えたアアアアアッ!』

『ちよつと、総悟なにやってんの!? ドエステイニーガンダムってお前、そんな世界が違う物をいったいどっから持って来た!』

『ああこれは、地球圏で暴れていた座太族を逮捕しに月へ出張した時に、転がっていたコイツをたまたま見つけて、ちよいと拝借したんでさあ』

「えっ、なにソレ!? なんか微妙にガンダムSEED DESTINYっぽい設定が混ざり込んでるんだけど!? いったいいつからこのSSは多重クロスになってたの!?!」

「むっ、あれは! カツラン・ツラと名乗った俺がインフィニットジャステイスのパイロットをしていた頃に、座太族との月面決戦であっさりと撃墜した負け犬シンのガンダムじゃないか!」

「なんで、さらつとテメエまでガンダムに乗ってんだアアアアアッ!? つーか、今までの展開全部、中の人のお話だよね!?! 石田君がアスラン・ザラを演じた時のお話だよね!?!」

「石田君じゃない、桂だ!」

まさか、ガンダム化の浸食がそこまで及んでいようとは。それならば、この後の展開も納得せざるを得ないだろう。彼らはとうとうガンダムで主役の争奪戦を始めたのだ。

『あのドS野郎、種死で無様に主役を盗られた中の人の悲しき無念をここで晴らすつもりアルな!?!』

『ええい、ちくしょう! こうなりやヤケだ! ウツソ・エヴィン! V2ガンダム、行きませーす!!』

もはや誰にも狂気を止めることは出来ず、葬式場の上空でモビルスーツ戦が勃発し



た。

『アンタって人はアアアアアッ!!』

『おかしいですよカテジナさん!!』

「いや、アンタって人達は全員そろっておかしいですよ!?　なんでお前らそんなに上手くガンダム操縦してんのおーっ!!?」

「どうやら、あいつらの身体までガンダム化が浸食して、ニュータイプとコーディネーターになってしまったようだ。」

「ここまで来たら、もう誰にもヤツらの戦いを止められない。この世界はもうガンダムになってしまっただろう。皆がそう思い諦めかけたその時、天から女神が降臨した!」

『ばああああああくねっう、ゴッドフィンガーアアアアアアアッ!!』

「明鏡止水を極めたお妙が、ゴッドガンダムに乗ってキタアアアアアアッ!」

「あつ、あれは!?　私がカグヤ先輩とガンダムファイトした時に、うっかり空き地に置き忘れてきた機体だわ!」

「テメエまでこの茶番に絡んでたのかよ、駄女神エエエエッ!」

「なっ、なんと!?!　俺の女神と本物の女神が奇跡のタッグを組んでいたとは!?!」

「やっぱり、俺が惚れたお妙さんは最高のヒロインだ。それを証明するように、女神のガンダムファイトによってすべてのガンダムは破壊され、銀魂の続編がガンダム声優共

のテコ入力でガンダム化してしまう危機は無事に終わった……。

「いや、そんな話じゃなかったよねコレ!? ガンダムファイトで何もかもが滅茶苦茶になってますけど、主人公の葬式シーンでふぎげ過ぎにも程があんじやね!」

ああ、そうだな。普通に考えれば、不謹慎この上無いと叱られても仕方がない。

だが、なぜか俺達は皆、お前が死んだという気が持てなかった。死体もあるし検死もした。それでも、お前がその内ひよっこり帰って来るのではないかという期待感が心のすみから離れなかった。

その原因の一つには、万事屋の葬式をやる前から関係者に送られ始めた【怪文書】にあつた。

「はあ? なんだよその怪文書ってのは?」

結局詳細は不明のままだが、お前も聞けば納得するほどそれは奇妙な内容だった……。

「く親愛なる銀魂キャラへく 信じられないかもしれないけど、銀ちゃんもマダオはなんと、最近流行りの異世界転生しちゃったアル。魔王の野郎をぶつ倒して、その内そっちに帰るから、みんな楽しみに待ってるアル」

最初にこれを読んだ時は、あまりにイタイ作り話だと皆で同情したものだが、今思い返してみると本当のことだったのだな。

「いやいや、なんかおかしくね!? 絶対書いたの神楽だろコレ!? だって、語尾がアルだもの! 今時、使うのヤツだけだもの! なんてあいつが俺達のことを知ってたのかは謎だけれども、もしかしてアクアのバカが変な電波を送ってたのかあーっ!?」

「さらっと私を電波系のイタイ女にしないでよ!? アクシズ教の御神体は、身も心も清らかな完璧美少女なんですうーっ!」

「はっ、女神がウソをついてんじゃねえーよ! お前は電波を出してんだらう!? アクシズ教という名の毒電波をよおーっ!?」

おい、慌てるなよ二人共。アクアちゃんは無実だし、チャイナ娘のアリバイもすでに立証されている。

しかも代わりに、お妙さん達の周りをうろつく不審者が目撃されて、怪文書の容疑者として急浮上したのだ。

「ああ、なるほど。それが最初に近藤さんが言ってた不審者につながるのか」  
その通りだよ長谷川さん。

万事屋の葬式後、不審者の情報を解析した俺は、日課のストーリーキングがてら志村家の敷地内で待ち伏せすることにした。そいつはなぜか、チャイナ娘と志村姉弟の周りばかり集中して現れるのだ。その行動は、万事屋に関する情報を親身に伝えようとしている感じなので、むしろ3人は会いたがるほどに興味を抱いていたのだが、その人物が怪

しいストーリーカーであるという事実だけは変わらない。

そこで俺の出番となり、地道な張り込みが功を奏して、夕暮れ時に現れたヤツと遭遇することに成功した。

『おい貴様！ 住居侵入罪及び、お妙さんに対するストーリーカー行為で逮捕する！』  
『ええい、ちくしょう!?! ストーカーゴリラに見つかつてしまったアル!?!』

覆面を付けた不審者が聞き覚えのある声でそう叫ぶと、即座に逃走を始めた。

『聞き覚えがあるつーか、今のは神楽の声だよね?! ちよつと大人な感じだけど、完全に釘宮さんとおんなじボイスだったよね!?!』

そう言われると声は似ていたようだったが、ヤツの体型はチャイナ娘とは明らかに違つたぞ。不審者のオツパイはとんでもなくボインだつた！

「あー、だつたら絶対、神楽じゃねえーわ。あいつの胸はめぐみんと大して変わらねえからな」

「そこで判断するのかよ!?! 語尾のアルとか、ゴリラを知つてるとか、気になるところが他にもあんだろ!?!」

もちろん、長谷川さんの言うように、チャイナ娘との関係性については俺も気づいて疑つていた。もしかすると、彼女はあいつの親類かもしれないが、相手がああの夜兎族ならば、ヤツの真意を確かめないと皆の安全は保証出来ん。

ゆえに、俺は不審者を捕まえるために追跡を開始した。ヤツは人間離れした身体能力を持つていてどんどん距離を引き離されたが、途中で会った名探偵コロンっぽい少年からスケボーを借りたおかげで、後もう少しというところまで追い詰めることに成功した。

「なんやて工藤!!? じゃなくて近藤!!? 見た目はゴリラ、中身はストーカーのお前が犯人を逮捕出来たのかあーっ!?!」

いや、結論を先に言えば逮捕は出来なかった。前を走っていた不審者が、わき道から大通りに出た瞬間に眩しい光を発生させて、驚いた時にはもうすでに彼女の姿はそこになかった。どういう仕掛けか、人間一人がいきなり消えてしまったのだ……。

しかも、その直後にさらなるアクシデントが起きてしまった。呆然としていた俺は地面に落ちていた「バナナの皮」を踏んでしまい、スベって転んだ勢いでモロに車道へ飛び出して、運悪く暴走して来たエネルギーバリバリのデロリアンにはねられてしまったのだ。

「最後のオチがツラと丸カブリじゃねえーかアアアアアッ!?!」



やたらと長い回想を聞いたら間拔けな結末が待っていた。実を言うと、近藤が踏んだバナナの皮は、例の不審者が慌てたせいで持っていた食べ残しを落としてしまったもののだが、まさかそれで桂と同じような目に遭うことになるうとは……。

「なっ、なんだとっ!? それじゃあお前も、バナナの皮でスべった拍子に異世界転移したのかあーっ!?! (日本語)」

「んー、まあ、大体そんなところだ(なに言ってるんだコイツ? バナナの皮がきつかけで異世界転移するとか、テンプレだらけで芸の無い『な〇う小説』ですら使われねえよ)」

「括弧の中でデイスってるけど、ブーメランとなつて返ってきてるよ!?!」

長らく出番が無かったカズマが、ここぞとばかりにつっこみを入れる。なんて言うかもうね、こいつら全員バカだよ。

「それにしてもどうなってるんだ? この近藤って人が転生してないのは間違いないみたいだが?」

《それは全部、カグヤのバカが日本に行ったせいだよチクショウ!》

「(うお!?! ビックリさせんなよ、ノルン!?!)」

カズマが頭を捻っているとプンプン怒ったノルンが出て来た。

「(っーか、なんで怒ってるんだよ? そのカグヤってヤツは前にも話に出てきたけど、今度の事件に関わってるの?)」

《関わってるもなにも、あのバカが主犯だよ！ 語尾にアルを付けた釘宮ボイスのボインなんて、あいつしかいないからね！》

真相を知ったノルンは、カズマにも分かるように説明を始めた。

神楽という少女は女神カグヤの血縁者であり、銀時の死で苦しんでいる神楽達を放っておけなかつたカグヤは、彼が異世界で生きていることをコッソリ伝えようとした。そのちよつとした気遣いがアクシデントの原因だという。

《近藤に見つかつたカグヤちゃんは慌てて天界に転移したんだけど、そのタイミングが悪過ぎたんだ。世界を移動する女神スキル「セイクリッド・ワールド・ゲート」の入り口が完全に閉じ切る直前に、デロリアンにはねられた近藤が飛び込んで来ちゃつたんだよ。しかも不運が重なつて、身にまとつた時空転移エネルギーが閉じかけてた入り口をこじ開ける効果を生んで、そのままスポンと吸い込まれてしまったというわけさ》  
「(運の悪さがミラクル過ぎて、逆に感動しちゃうよ!! 天文学的な超常現象を連続で食らってますけど、どんだけツイてないのこの人!?)」

あまりに不憫な展開にカズマは本気で同情するが、そんな彼の反応に対してノルンはやんわりと否定する。

《ううん、それは少しだけ違うよ。もし普通の人間が「セイクリッド・ワールド・ゲート」に迷い込んでしまったら、ランダムで異世界に放り出されちゃうんだよ。でも、幸いな

ことに、この世界には彼の友達がたくさんいる。はつきり言つて滅茶苦茶もいいとこだけど、彼らの間に結ばれた切つても切れない「腐れ縁」が運命を変えたのかもね?」

そう言うところノルンは、誰もが見惚れてしまうほどに綺麗な笑みを浮かべた。その姿は神々しくて、女神と呼ぶにふさわしい美少女に求めていた義妹の理想像を見たカズマさんは、思わずドキツとしてしまう。「俺は決してロリコンではない」と無駄な言い訳をしながら……。

一方、カズマ達が脳内会話をしている間に周りの状況も変化していた。マゾポイントの効果が切れたためぐみんとダクネスが様子を見に戻つて来たのだ。

「どうですか、ギントキ。ゴリラとの話し合いは無事に終わりましたか? なぜゴリラと話せるのかは不思議でならないのですが」

「ん〜まあ、一通りは話したけどよ。それよりすつげえ気になんだけど、お前はマジでこのゴリラがゴリラにしか見えねえの?」

「そんなの当たり前じゃないですか。これほどまでに立派なゴリラはなかなかお目にかかれませんかよ」

「めぐみんの言う通りだ! これほどまでに立派な一物を持っているオスならば、ゴリラに間違いないだろう!」

「お前はどこに注目してんだ!? チココのサイズで人かゴリラを判断してんじや



ねえーっ!？」

ダクネスの意見は参考にならなかったが、めぐみんの証言から大体のことは分かった。理屈はともかく、この世界の出身者は、近藤を人間として認識出来ないようだ。

「(そーいやあ、なんでゴリラにしか見えないんだ? 知り合いの銀さん達もすぐには分からなかったようだし……)」

《ああ、銀時達もバグの影響を受けてたけど、元の姿を知ってたおかげか、ボコった時の衝撃でちゃんと見えるようになったんだよ》

「(昔の家電製品みたいな直し方なんですけど!?) 近藤さんは人間なのに、バグっていったいどういふことだよ?)」

いきなりおかしなことを言い出したノルンに怪訝な表情をしてしまう。果たして、バグとは何なのか。彼女の口から明かされた真相は、彼の想像を遙かに超えるとしてもない内容だった。

《こうなってしまったのは、この世界の概念が「ゲームっぽい」のが原因なんだ。ようするに、近藤という異世界のデータがあまりにイレギュラーな方法でダウンロードされてきたもんだから、読み込む際にエラーが出ちゃって、『なぜかこの人、上手くロード出来ないんだけど、ゴリラっぽい情報だけはピシバシと伝わってくるから、とりあえず「ゴリラの実を食べたゴリラ人間」として表示しとけばいいんじゃないかね?』ってことになっ

て、近藤のキャラ映像がバグっちゃったんだよ」

「オィィィィィッ!?」　なんでそこでワンピース風に妥協されてんだあーっ!?　ゴリラっぽいからゴリラにするって雑過ぎるにも程があるだろ!?　この世界の概念は、どれだけスベック低いんだよ!?!」

あまりに出鱈目な話だが、実際に起きているのだから受け入れるしかない。この世界に存在するものはハードディスクに記録されたデータのような物であり、それに異常が発生すれば銀時達のようにステータスがバグったり、近藤のようにキャラ表示がおかしくなったりするわけだ。

まさにクソゲーそのものだが、真実を聞いてしまったカズマ以外は知ったこっちゃない話である。幸せな銀時は、そんなことなど知る由もなく暢気に話を進めていく。「ところで、アクア。このゴリラの語尾に付いている(日本語)をどうにかしろや。さっきからうっとおしくて、すっげーイライラしてっから」

「いや、そんな無茶を言われても、どうすることも出来ないわよ?　翻訳スキルは転生する時にしかインストール出来ないんだから」

「かあーっ、この駄女神は情けねえーなあ!?!　口を開けば出来ねえばっかで、お前はどこののび太かよ!?!　ドラえもんのポジションだった優秀なアクア様も、今では無能なのび太君まで格下げされちゃいましたかあ!?!」

「誰かのび太よ、ドＳジャイアン!? ドラえもんで例えるなら、優等生で美少女のしずかちゃん的ポジションでしょう!? 入浴シーンが多いから、水の女神にピッタリなのよ!」

またしてもバカ兄妹による不毛なケンカが始まった。周りもすでに慣れたものだが、バカにはつき合つてらんねえと、二人を無視した長谷川が勝手に話を進めていく。

「こうなつたら、普通に勉強するつきやねえな。まあ、言うなれば、アメリカで英会話を覚えるみてえなもんだ」

「え、今さら外国語の勉強なんてするのぉ? 中学生に戻つた気分で、まったくやる気が出ないんだけど……(日本語)」

「あんたの気持ちはよく分かるけど、やる気がなくてもやるしかねえだろ? この俺が安心価格で家庭教師してやるからさ!」

「あ、ああ……収入源が無い俺から容赦なく金を取ろうとしてる点がすつげえ引つかかるけど、とりあえず礼を言うよ……(日本語)」

カジノで金を失つた長谷川は、近藤の弱みにつけ込んできた。そんな悪意に罰が当たつたのか、彼の目論見は桂によって速攻で潰される。

「大丈夫だよ、ゴリ太君。外国語を覚えたい君に、もつてこいな魔道具があるよ!」

「なっ、なに!? それは本当か、ツラえもん!? (日本語)」

「ツラえもんじゃない、カツえもんだ！」

アクアの代わりにドラえもん的ポジションになった桂は、着物の懐から怪しい瓶を取り出した。

「テレレテツテレー！ 【翻訳コニヤック】く！」

「なんかどつかで聞いたような秘密道具出してきたあーっ!？」

例の曲と共に登場した魔道具は明らかに胡散臭かった。止めときや、近藤はん。これ絶対、飲んだらヤバイパターンやで。

「説明するよ、ゴリ太君。この翻訳コニヤックを一気飲みすると、暁な〇めという名の創造神が仕事を楽にするために世界の言語を統一しようと考えて作ったと言われる翻訳魔法が発動して、あつと言う間に【このすば語】がペラペラ話せるようになるんだ！」

「やっぱりヤバイヤツだったアアアアアアッ!? なんかもう世界の垣根を飛び越えまくってんだけど、なんでそんなオーパーツを都合良く持つてんだ!?! (日本語)」

「勘違いをするな、これは別にご都合主義の産物ではない。この魔道具は、エリザベスのスキルでゲットした仲間モンスターと円滑なコミュニケーションを図るために『ひよいざぶろー殿』と協力して完成させたものだからな」

「えっ、私の父とですかあーっ!？」

唐突に親の名が出て、完全に油断していためぐみんは驚いた。そして、彼女の反応は

桂にも伝染する。

「なんと、ひよいざぶろー殿は、めぐみん殿の父君であつたか」

「ええ、そうです！　ひよいざぶろーは我が父にして最高の発明家なり！　それにしても、まさかカツラが私の父と顔見知りだったとは！　いやはやなんとも、世間つてヤツは狭いものですねえ」

「いやいや、待つてよお二人さん！　世間話は後でいいから、早くこつちを進めてくれよ！　（日本語）」

雰囲気で会話の内容を把握した近藤が的確につつこんで来た。このままヤツらのペースにはまつて、得体の知れない怪しい酒を飲まされてたまるか。

「つーか、そのコニヤックは安全確認してあんのかよ？　（日本語）」

「当然だろう。マウスを使った実験では、見事に言葉を発していたぞ」

「それはすごいじゃないですか！　マウスで効果があるのなら、ネコだつて喋れるようになるつてことですよね!？」

「恐らくはいけるだろうが、あまりオススメは出来んな。コニヤックを飲んだマウスはみんな重度のアル中になつてしまつて、交わされる会話がすべて泥酔したオツサンと化すという悲惨な結果に終わったからな」

ようするに、人間以外の生物が飲むと、言葉を話せるようになる代わりにアル中と化

してしまふというクソアイテムだった。

「そんなもんをこの俺に飲ませようとしてんじやねエエエツ!?」（日本語）

「心配は無用だ、近藤。アルコールに強いヤツならアル中にはならないから」

「いや、だから！俺はアル中の心配をしてんじやなくて……」（日本語）

「おのれ貴様!?俺の酒が飲めんと言うのか!?絶対に旨いから、つべこべ言わずにさつさと飲めやアアアアツ!!」

「ちよつ、おまつ、止めてっ?!?おぼがぼおーっ?!?」（日本語）

逃げようとした近藤だったが、背後に回っていたエリザベスに羽交い締めになされてしまい、結局は強制的に翻訳コニヤックを飲まされた。ひよいぎぶろーと桂も飲んで害が無いことは確認済みだが、それを知らない面子にとつてはほぼ拷問にしか見えない。

流石に銀時も気になって、桂に文句をつけに行くが、そこに目を輝かせたダクネスまで加わわつてきた。

「ちよつとお前、なにやってんの？コニヤックを飲まされた近藤さんが昏倒しちやつてるんだけど？」

「確かに恐ろしい手際であつた！あれほど見事な水攻めを受けては、屈強なゴリラでも耐えられまい！だが、私はそうはいかんぞ？なんなら今すぐ試すがいい！

さあ、早く！この口に、堅いモノを突っ込むがいい！」

「テメエは堅い荒縄でエロ口を塞いでやがれ！」【タートルシエル・バインド】「ッ！」  
 「ふおっ!? ふおおおおおおんっ!?（ああ!? この圧倒的な恥辱感が亀甲縛りの威力かあーっ!? こんなにも卑猥な姿を晒されたらクセになりゆ〜）」

ダクネスの暴走は遊び人スキルで止められた。だが、今度は酔っぱらった近藤が暴走を始めた。

「グへへへへッ! ○○○丸出しのお妙さんがお花畑で手を振ってりゆ〜☆」

「記念すべき初会話がピー音から始まったアアアアアッ!」

「むっ、いかん! この症状は急性アルコール中毒だ! アクア殿、急いでヤツに水を飲ませてやってくれ!」

「ええ、いいわ! 水のことなら任せてちょうだい! 【クリエイト・ウォーター】!

【クリエイト・ウォーター】! 【花鳥風月】からの【クリエイト・ウォーター】!」

「あぼがばあーっ!」

調子に乗ったアクアによって、しこたま水を飲まされた近藤は再び昏倒してしまう。だが、水の女神による水攻めを受けたおかげでアル中とならずに済んだのは不幸中の幸いだった。



とりあえず問題を片づけた一行は、正気に戻った近藤を連れて帰ることにした。途中で立ち寄った砦にネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を戻してから、桂達と一緒にアクセルへ帰還する。

街の中へ入っていくと、ゴリラに見える近藤は明らかに浮いてしまい、行き交う人々全員がモンスターと勘違いして、当然ながら騒ぎ出した。

「きやーっ!!? 街の中にゴリラがいるわよ!!?」

「な、本当だ!!? ゴリラ型のモンスターが街に入ってきたあーっ!!?」

「ああっ!!? ギャーギャー騒ぐな街人共!!? こいつはゴリラのフレンズだから、ジャパリまんを食わせときや、なんも悪さはしねえーんだよ!!?」

「誰がゴリラのフレンズだアアアアアッ!!? そんなフレンズ見たことねえし、ジャパリまん以外の物も食わないと暴れますうーっ!!?」

周囲の騒ぎにイラついたバカのフレンズ達がケンカを始めて、恥ずかしくなつたためぐみんとカズマは他人のフリをする。

「それにしても不思議ですね、人間であるコンドウの姿がゴリラに見えてしまうなんて。もしや、彼は悪魔によつて呪いをかけられてしまったのでしょうか?」

「まあ確かに、ゴリゴリの実を食べたゴリラ人間って扱いだから、悪魔に呪われてると言



えばその通りだよな……」

「ほう、それは興味深いですね。カズマ達の故郷にはゴリゴリの実なる危険な果実が存在しているのですか？」

「存在しねえよ、そんなもん！」

変なところに興味を持ったためぐみんにつっこむものの、数奇な運命によつてゴリラ人間にされた男がそこにいるのだから頭が痛い。元の近藤を知っている者達だけは正常に見えるのだが、こちらの世界の住人には悪魔の実の能力でゴリラになつてる獣人にか見えないのである。

しかし、実際の姿は人間なので、当然ながら本人は全裸状態であることを気にしていた。

「なあ、万事屋。すつげえ今更なんだけど、そろそろ服を貸してくんない？ 前回から全裸のまま、心もチ○コも落ち着かないんだけど……」

「んー？ そんなもん気にすんなよ。なんかよく分からねえけど、この世界の人間にはゴリラにしか見えねえようだし、どうせ全裸で歩いて『ゴリラのフレンズが散歩してる』と思われるようになるだろうよ」

「いやだから、ゴリラのフレンズなんかどこにもいねえし、街でゴリラが散歩するとかドラクエですら見たこと無えよ!? 大体、俺は人間だから！ ぱんつは絶対必須だから！

せめて、オルテガぐらゐの装備をこの俺に与えてくれよ!」

「つたく、このゴリラは贅沢なこと抜きしやがって。しょーがねえから、アクアのつけてる羽衣をちよつくら貸してやれよ。見た目もフンドシみたいだし、チ○コ隠しに丁度良いいだろ?」

「ちつとも良くないんですけど!」 神聖な羽衣をフンドシにしようだなんて、あんただにだけDSなのよ!? これは私の大切な一張羅なんだから!」 ゴリラのチ○コ隠しなんかに使わせたりはしないわよおーっ!」

鼻をほじりながら適当なことを言う銀時に、ゴリラと駄女神が文句をつける。すると、彼らの様子を見兼ねたダクネスが説得にやつて来た。

「とりあえず落ち着け、コンドウー! ドMやゴリラが全裸なのはとても自然な状態だし、エリス教徒の私がいるから、街の皆の警戒心もすぐに消えてなくなるだろう!」

「いや、ドMの全裸は自然じゃないし、亀甲縛りされたままはあはあしてる君自身も警戒されてるんだけど!」

亀甲縛りを気に入ってそのまま解かずに歩いている変態ドM騎士からは、エリス教徒の信頼など一切感じられなかった。

いずれにしても、こいつらは服を貸してくれそうにない。この手の展開に慣れている近藤は、すつぱりと諦めて別の話題を振ることにした。

「それはそうと、これからどこに行こうとしてんだ？　俺に服を貸すよりも優先するよ  
うなことなのか？」

「ああ、そうだ。お前にとっては、汚えフンドシをゲットするよりあいつに会う方が大事  
なはずだぜ」

「……？　あいつとはいったい誰だ？　もしかして、お前らの他にも俺の知人が来てる  
のか？」

「おう、近藤さんがあの人に出たら絶対にビックリするぜ？」

銀時の意図を悟って、長谷川までが思わせぶりな言い方をして来た。事情を知らない  
近藤は怪訝な表情を浮かべるが、今はとにかく彼らの後についていくしかない。

人気の無い道を進んで行き、目的地であるウイズ魔道具店に到着する。近藤に会わせ  
たい人物はこの店の中にいて、恐らくは巨乳店主とイチャイチャしていると思われる。  
そう思ったら腹が立ってきたので、全裸の変態を最初に送り込むことにした。

「ほら行けよ。この中にあいつがいるから、先に入って挨拶しろや」

「おい待て、万事屋。今の俺はチ○コ丸出しの最低な格好をしているのだが、このままの  
状態でその人の前に出ても本当に大丈夫なのか？」

「そんな今更なに言ってるんだ。全裸はほら、お前にとっての普段着みてえなもんだらう

が」

「普段着どころか、なんも着てないんだけど!？」

「あーもう、うるせーっ! ゴチャゴチャ言わずにとつと入れや!!」

躊躇する近藤に業を煮やした銀時は、店のドアを乱暴に開けると彼のケツを蹴飛ばした。その頃、店内では茂茂とウイズの二人が仲睦まじく談笑していたのだが、そんな楽しい空間に全裸野郎がヘッドスライディングをかましてきた。

「きやあああああつ?! 変なゴリラが私の店に!？」

「もしや、魔王軍の襲来か!？」

「そんなんじやねえよ將軍。パツと見すつとゴリラだけど、そいつはあんたの知り合いだ」

「む、それは誠か銀時?」

銀時の言葉を聞いて、転がっているゴリラの顔をまじまじと凝視する。始めはゴリラにしか見えなかったが、だんだんと慣れてくると見知った人物の姿に変わった。

「おお、なんと! このゴリラは近藤勲ではないか! そうか、お前もこちらに來たのか……」

近藤の姿を確認した茂茂は、嬉しく思うと同時に残念な気持ちも湧いた。彼ならば、新しく生まれ変わった日本を正しい方向へ導いてくれると期待していたからだ、この

地に来てしまったのなら残念がつても仕方がない。今は頼もしき戦友との再会を素直に喜ぶべき時だ。

「よく来たな、近藤よ。余は、お前と再会出来たことを心から嬉しく思うぞ」

「っ!?」このお声は……まっ、まさか!？」

我に帰った近藤は、慌てながら顔を上げて声の主を確かめた。するとそこには、かつて仕えていた主君の凛々しい姿があつた。

「あ、あ、ああつ……將軍様っ!？」

懐かしき主の顔をその目で確認した瞬間、近藤の目頭に熱い物が湧いてくる。しかし、それは真選組局長として、決して見せてはならぬ物だ。

そう、今は感傷を押し殺してでもやるべきことがある。ゆえに近藤は、茂茂の前で潔く土下座した。

「この近藤、恐れながら申し上げたき儀がございます! 將軍様より真選組局長という大役を仰せつかつておきながら、大恩ある御身の命をお守りする使命も果たせず、あまつさえ、先の戦争による混乱の末に徳川將軍家の終焉を招くことになってしまい、誠につ……誠につ……申し訳ありませんっ!!」

茂茂が亡くなった時から心に溜まっていた物を一気に吐き出した。彼が暗殺されたと知らされた瞬間から、これまでずっと後悔し続けていたのである。

しかし、茂茂本人はそんなことを望んでいない。近藤が謝る必要など、茂茂にとつては微塵も無いのだ。その気持ち伝えるべく、膝をついた茂茂は、近藤の肩に手を置いて穏やかに語りかける。

「面を上げよ、近藤。余は、お前の働きに対して微塵も不満は抱いておらん。いや、それどころか、大いに感謝しているのだ。お前達がいたからこそ、余は本当の徳川茂茂として、あの世界に道を記せた。ゆえに、今こそ言わせてもらおう。ありがとう、近藤。これからも余の友として、よろしく頼むぞ」

「っ!? しつ、承知しました、將軍様っ! この近藤、全身全霊をかけて、あなたの信頼に応えられるような友となりましょう!」

茂茂の想いを知つた途端、近藤は涙を流した。銀時と桂もこの時ばかりは静かに見守り、長谷川とダクネスは霧囲気に流されて貰い泣きする。

そんな中、カズマだけは、全裸のオツサンが土下座で泣いているというシュールな光景に引いており、となりにいるめぐみんも、みんなとは違う感動をしていた。

「何がなにやらサツパリですが、友達と再会出来て本当に良かったですね。彼らの関係を見ていたら、万年ボッチのゆんゆんに、もう少しだけ優しく接してあげようかなと思いました」

「ボッチのゆんゆんってどこの誰!? 同年代みたいだけど、ボッチと認識してんなら

もつと普通に接してやれよ!」

変な場面でボツチだということ暴露されたゆんゆんとやらに、カズマは深く同情する。いつかゆんゆんと出会ったら、俺も優しく接してやろう……。

ただしアクア、テメエはダメだ。茂茂と近藤がイベントを行っている間に、ウイズを脅してお茶を催促するような駄女神には慈悲などない。

「ちよつと、このお茶薄いんですけど? お客にこんなものを出すなんて、サービス悪過ぎなんじゃないの?」

「ごめんなさい! ごめんなさい! すぐに入れ直します!」

「なにやっつてんだ駄女神エエエエツ!? テメエの態度が悪過ぎて、リッチー以上にモンスター化してんじゃねえーか!」

空気を読まずにクレーマーを始めたアクアを銀時が叱り飛ばす。その怒声がかきつかけで、しんみりとした気配も吹き飛び、気を取り直した茂茂は別の話題を始めた。

「いやしかし、奇遇なものだ。ウイズ殿とあの件について語り合っている時に近藤がやって来るとは。これもまた、天の采配やもしれんな……」

「ん? あの件ってなんだよ將軍? まさかウイズと○○○○しちやつて、とうとうオメデタですつてか?」

「な、なんと!? 將軍様とそちらの女性は○○○○をしちやうような、すごい仲なので

すかあーっ!?!」

「きゃーっ!?! ナニ言ってるんですか、ギントキサあーん!? 違う違う!? 違いますから!? 先のことは分かりませんが、今はまだまだそんな仲じゃありませんってばあーっ!?!」

銀時の勘違いにより、近藤とウイズがパニックになって茂茂が鼻血を垂らす。もちろん、茂茂が言っていたあの件とはウイズのオメデタなどではなく、普通に仕事の話だった。

「余は近々、未来を担う冒険者を育成するための【教導隊】をこの地に設立する予定でな。将来的には、世界中から集めた有望な人材を育て上げ、国を支える勇者候補として送りだそうと考えている。その隊名は【真選組】。真なる勇者になるべく選ばれた者達を育成する組織だ」

「真選組……」

話を聞いた近藤は不思議な感覚に襲われる。まさか、地獄かと思っていた異世界で馴染み深いあの組織が作られようとしていたなんて……。いや、それほどおかしな話でもないか。俺達は全員、地獄に逝いたら同じものを作ろうとしていたからな……。

「実に素晴らしいお考えだと思いますよ、將軍様」

「うむ、そう思ってくれるか。ならば、この機会に提案するでしょう。お前には是非とも



初代局長の座についてほしい」

「えっ、この俺にですか!？」

あまりに展開が急過ぎて思考が追いつかない。なにせ、ついさきほどまで野生のゴリラと化していたのに、とんとん拍子で就職まで決まるなんて長谷川に申し訳ない。それに、他にも様々な問題がある。

「將軍様、非常にありがたいお話ですが、正直難しいところですよ。今の自分は、なぜかこの世界の住人からゴリラと認識されているので、ヘタに関われば返って足を引く張る事態になりかねません。それならば、こいつらの方が俺よりも適任かと……」

そう言つて銀時や桂に視線を向けると、二人は揃つて拒否してくる。

「あー、俺はそんなの御免だぜ。こっちはこっちでやることあるし、遊び人のスキルなんざドラクエ以外に需要が無えよ」

「すまんが、こちらも同様だ。俺はあくまで将ちゃんの協力者でしかないからな。正式な役職に就く気などは元よりないさ」

「あつ、なんならこの長谷川泰三が代わりにやつてやるけど……」

「お前には聞いてねえよ、万年無職はすつこんでろ!」

「ちよつとふざけてみただけなのに、そこまで言わなくてもいいんじゃないの!? 俺だつてちよつとくらい夢見たい時もあらあ! お前らの上に立つて碇指令をやりたく

もならあー！」

長谷川のお茶目なギャグで脱線してしまったものの、めぐみんやダクネスがすかさずフオローに入る。

「私達も協力するので、そんなに心配しないでください。ゴリラの呪いを受けた男が隊長をやるだなんて、バックストリーに闇を感じてなかなか素敵じゃありませんか！」

「いやいやいやいや、ゴリラ隊長のバックストリーに闇なんてどこにもないから！確かにバックカーはしていたけれども、闇っぽいのはそこだけから！」

「それだけでも十分に闇を感じると思うのだが、慕うべき主のいる今の私には、あなたの気持ちに分かる気がする。だからこそ、この私もあなたに協力させてもらおう。その際には、是非ともバックカースキルを伝授してほしい！」

「君はいつたいたいなんてもんを教わろうとしちゃつてんの!? 大体、バックカースキルなんて俺も習得してねえーよ!」

新しい仲間の応援はあまりまともではなかった。それでも、会ったばかりのゴリラを信じ、後押ししてくれた心意気には応えたくなってくる。

残念ながら駄女神だけはイラツとすることしか言つてこないが。

「もう、ウダウダウホウホ言つてないで、ちやつちやつとやるつて言つちやいなさいよ。お風呂でゆつくりしたいんだから早くしてよねー?」

「ねえ、この子さつきからすっごい自由なんだけど、こんな腹立つ女の子が本当に女神なの？」

茶菓子を頬張る駄女神に呆れた視線を向けるものの、確かにこれだけ後押しされて答ええないのは男が廃る。

「分かりました將軍様！ 真選組初代局長の任を謹んでお受けします！」

「うむ、引き受けてくれたことに感謝する。では早速、お前に支給品を授けよう。ウイズ殿、例の物で一番大きいサイズを頼む」

「はい、シゲシゲさん」

笑顔で返事をしたウイズは、カウンターの裏に置いてあった何かを持ってきた。彼女の手から茂茂に渡された物は真っ黒な洋服で、近藤にとってはとても見慣れたものだった。

「そつ、それは真選組の隊服!？」

「実を言うと、昨日完成したばかりの試作品だな。ウイズ殿に作ってもらった物を見定めていた最中なのだが、とりあえず裸のお前はこれを着るといいだろう」

「あつ!?! いや、ははは……ありがとうございます！」

改めて指摘されて急に恥ずかしくなった近藤は、恭しく隊服を受け取ると、早速その場で着衣した。すると、全裸のオッサンからいつもの近藤の姿になった。

「うむ、やはりお前にはその格好がよく似合う。これからは、この世界の真選組局長として冒険者の育成に尽力してほしい」

「はっ！ 粉骨碎身の覚悟をもって職務を全ういたします！」

ゴリラ隊長が茂茂に向かって敬礼をした瞬間、この世界にファンタジーな真選組が誕生した。果たして、ここではどのようなメンバーが揃うことになるのだろうか。チンピラの槍使いやボツチな魔法使いといったクセの強い連中が集まって来るかもしれない……？

## 第25訓 水の浄化はなんとかなるけど心の浄化は超ム

ズい

紆余曲折の末に、茂茂との再会を果たした近藤は、結成間近だった真選組の初代局長に任命された。チ○コ丸出しの変態ゴリラから、勇者を育てるマスターゴリラへと進化して、新たな異世界生活を始めることになったのである。

翌日の朝、桂達に連れられてギルドへとやって来た近藤は、仕事を始めるために必要な冒険者登録を行おうとしていた。もちろん、カズマを始めとするお馴染みの面々も揃っており、まったく興味が無かった銀時も、めぐみん達に連行されてその場にいた。「まったく、なんで俺がこんな茶番に付き合わされなきゃならねえんだよ。どうせ、コイツの職業なんざ、ゴリラかストーカーの二択じゃねえーか」

「ふざけんなよ遊び人!! 就職率100%を誇りしルイーダの酒場ですら見捨てられるバカなんざ、テメエだけで十分だ!」

「何だとゴリラ!! 遊び人にすらなれず、異世界でも絶賛無職な長谷川さんの悪口を言うのはそこまでだ!」

「なんで俺が最終的にデイスられる形になってんの!？」

朝っぱらからマダオ達の不毛なケンカが勃発する。ギルドの受付で応対中のルナは、彼らの様子に呆れつつも、桂との話し合いを冷静に進めていく。

「とまあ、ゴリラにしか見えないこのゴリラは、ゴリラであってゴリラではなく、俺達と同じように働ける人間的なゴリラなのだ」

「は、はあ……。なにがなにやらサツパリですが、シゲシゲさんやカツラさんが保証すると言うのでしたら、そちらにいるコンドウさんを普通の冒険者と同様に見なすことにします。ゴリラにしか見えませんけど」

どこか納得し難い表情を浮かべるものの、結局は桂の説明を受け入れる。どうやら近藤という人は、『悪魔に呪いをかけられたせいでゴリラに見えるようになった、ゴリラっぽい人間』らしく、その話が事実なら、外見に囚われることなく人として接するべきだろう。ぶつちやけ、非常識なこの人達と揉めてもストレスがたまるだけだし……。

「それでは、これから冒険者の登録をさせていただきますので、コンドウさんはこちらにお越しください」

「はい、よろしくお願います!」

面倒事からスツパリと逃げたルナは、登録の手続きを普段通りに進めていく。以前、銀時達が行ったように近藤用の冒険者カードを作り、出来上がったそれを手にとつて内

容を確認する。

果たして、どのような結果になっているのだろうか。当事者である近藤は言うに及ばず、興味を持っていためぐみん達も期待の眼差しをルナに送る。

「なんだか、とつてもワクワクしますね。もしかすると、満月を見ると、満月を見たら大猿に変身するという伝説のレアスキルを習得出来るかもしれませんよ!」

「なんで急にサイヤ人!? 当たり前のように言ってるけど、君は元ネタ知らないよね!」

「ならば、ここは間を取って、満月を見たら狼という名のストーカーに変身するスキルなんてどうだろうか? 執拗に女性を狙うケダモノとか、私にとつてはご褒美だぞ!」

「いや、全然間を取ってねえし、ソレって只の犯罪者じゃね!」

めぐみんとダクネスが抱いていた期待は、色々とおかしかった。そして、アクアに至っては、根本からしておかしかった。

「そんなことはどうでもいいから、ちやつちやと話を進めなさいよ! 私は今すぐクエストを請けて大金を稼ぎたいの! ええ、そうよ! もうバイトはイヤなのよ! いくら【私の聖水】が超絶オイシイからと言って、飲食店の調理場で小便小僧のようにお水を垂れ流すだけのバイトなんて、もうやりたくないのよオオオオオ!!」

「女神のクセに水道水扱いとか、悲しいってレベルじゃねーぞ!? ってか、私の聖水って何なんだよ!? どう聞いてもエロい聖水なんですけど、お前は一体どんな店でバイトを

していた!？」

哀れなバックストーリーに、流石のカズマも涙する。時給の良さに釣られたんだろうけど、仮にも女神なんだからもっと普通にバイトしろ。

そんな感じで、いつものように駄女神をデイスっていると、カードの確認作業をしていたルナの表情がだんだんと曇っていく。

「はあ、やつぱり……この人のステータスもおかしなことになってるわ」

「えっ、待つて!? 公開する前から希望の無いこと言い出したけど、この俺のステータスに一体なにが起きたんだ!？」

不穏なルナの発言に近藤がビビる中、ついにその真相が明かされる。

「コンドウ・イサオさん。あなたのステータスは……少しばかり個性的で、体力はバナナ10本、その他の値は全て、560ゴリラとなっております」

「オイイイイツ!? どう考えても、数値の単位がおかしいだろコレ!? 個性的っていうよりも野性的なんだけど、なんで俺の体力がバナナで表示されてんだ!? つーか、1ゴリラってどういう値!？」

いざ答えを聞いてみたら納得のいく内容だった。もちろん、彼の冒険者カードもバグりまくっているのだが、実に近藤らしいステータスであり、銀時達も大満足だ。

「大満足だ、じゃねーだろオイ!? なんでステータスまでゴリラまみれになってんの!？」



「ここまで来ると、人為的な悪意を感じざるをえないんだけど!」

「はあ? なに言つてんだよ近藤さん。パイオツカイデーなチャンネーに悪意なんてあるわきやねえ! そんなことより、ポジティブに職業の方を期待しろよ。公務員だったお前なら、まともな職に就けるだろうさ」

「そ、そうだな! 職業の方には選択肢もあるだろうし、しつこいゴリラの呪縛からも抜け出すことができるだろう」

純粹なのかバカなのか、胡散臭い銀時の言葉を鵜呑みにした近藤は、職業選択の自由に一縷の望みをかける。果たして、彼の願いは運命の女神に届くだろうか……。

「で、俺が選べる職業は?」

「ゴリラ、ドンキーコング、バブルス君の3択です」

「結局、全部ゴリラじゃねえーか!」

残念、届きませんでした!

《ゴメンよ近藤。ゴリラの呪縛を解くことは、このボクでも出来ないんだ……。まあぶつちやけ、やろうと思えば出来るんだけど、こんなに面白いキャラを改変しちゃうなんて、ボクの的にあり得ないでしょ☆》

「(運命つてヤツは、見た目に反して残酷だ……)」

しよっぱい真実を知ってしまったカズマは、過酷な運命を強いられている近藤に同情

する。とはいえ、当事者であるゴリラにとっては、こんな展開など慣れっこなので、さっさと諦めて話を進める。

「じゃあもう、最初のゴリラでいいよ。他のはなんか、著作権的に面倒そうだし」

「わ、分かりました、ゴリラですね……。こう言つては何ですが、強く生きてください  
(憐)」

「そんな目をして言われても、慰めにならねえよ! (怒)」

若干気分を害しながらも、近藤の許可を取ったルナは、ゴリラの職を選択する。こうして、世にも珍しいゴリラの冒険者が誕生した。

☆☆☆☆☆☆

必要な手続きを終えた後、バカパーティーは、クエストを請けるために掲示板の前へとやって来た。早くお金を稼ぎたいアクアは当然張り切っているとして、今日が初仕事となる近藤も気合いが入っていた。

「よっしやーっ! やるからには全力で行くぞ!」

「あらあらまあまあ、どうしたの? ゴリラがウホウホ鳴いてますけど、女神であるこの私と張り合うつもりなのかしら?」

「フン、それはこちらのセリフだよ！ 仕事とゲームとストーリーキングで鍛えまくった俺の力を、舐めないでもらおうか！」

クエストをやる前から、別の意味でやる気満々である。

とはいえ、ここで近藤にケンカをさせる訳にはいかない。真選組の仕事を始める前に、ゴリラだと見なされている彼が無害であることを街の人々にアピールしなければならぬからだ。そのために桂が考えた計画が、クエストを行って活躍する事だった。

「たとえ見た目がゴリラでも素晴らしい成果を出せば、街の人々はこう思うだろう。『あのゴリラは、スツゲー調教を受けた末に新たなステージへと覚醒したスーパーゴリラなんじゃね?』ってね！」

「改善する気ねえだろお前!」 それだと結局ゴリラのままじゃん!」

ちよつぴり期待をしていたけれど、やっぱりコイツは只のバカだ。いつものような展開に持つていく桂に対し、怒った近藤が突っかかる。

その間にクエスト掲示板を見回していたアクアが、とある依頼を見てニヤリとする。水を司る女神である彼女が選んだクエストは、『水質の悪化した湖を浄化する』というものだった。

「ちよつと、これこれ！ いいじゃない！ こういうクエストを待っていたのよ！」

「ほう、どれどれ。それほどアクアが興奮するとは、一体どんなクエストですか？」

興味を抱いたためぐみんなが改めて確認すると、確かにこれは浄化魔法が使えるアークプ  
リーストにピツタリの仕事である。

だがしかし、ポンコツ女神のアクアなんかにそんな芸当が可能だろうか。いや、出来  
まい。みんなが揃って思ったことを銀時が代表して言葉にする。

「水を浄化する前にお前の心を浄化しろよ」

「私の方がヨゴレてんの!？」

情け容赦ないドSの指摘に、アクアは衝撃を受ける。

「なによなによ! いつも私をバカにして! 水の女神であるこの私は、どんなに  
ばつちいお水だって、体が触れているだけであつという間に浄化できちゃう素敵仕様な  
んだから! 水だけに限定すれば、斉木楠雄だって目じやないわ!」

「女神様がサイキツカーと張り合つてんじやねえーっ! つーか、ほぼ負けてんじやん  
! 自分で認めちゃつてるじゃん!」

いろいろな意味で神をも超える超能力者にケンカ売つてんじやねえと、カズマのツツコ  
ミが決まる。

しかし、コイツの能力は使えるかもしれない。

「なあ、銀さん。水に触れてるだけでいいんなら、このクエストは簡単にクリアできん  
じやねえかな? コイツ一人でできることだし」

「ああ、そうだな。駄女神を湖に放り込んで泳がせるだけの簡単なお仕事だ」

「あんたたちは揃って鬼なの!? とつてもか弱いこの私が、モンスターのいる湖で泳げるわけがないでしょーっ!? お願いだから守ってよ!? プリティーなお尻が噛まれないうように、この私を守ってよっ!?」

「あーもう、ウツゼエーッ! だったら、長谷川さんを貸してやつから。いざつて時は、コイツを囷に使って逃げろや」

「俺が代わりに死ぬだろソレ!?」

「案ずるな、ハセガワ! 私も一緒に囷をやるからっ!」

「そんな申し出いらねえーよ!? どっちにしろ俺も死ぬじゃん!? モンスターのウンコになるだけじゃん!」

命の危険を感じたマダオが必死こいて主張する。ヘタレな彼の言う通り、確かにこれには問題がある。水の浄化をしている間、無防備になるアクアをモンスターから守らなければならぬのだ。しかも、それには半日ほどかかるらしく、体力的にも精神的にも付き合っちゃられない。

ならば、他に良い手はないか。こういう時に頭が回る賢いカズマさんは、悪魔的なアイデアを瞬間的に捻り出す。だがそれも、KYな桂によって邪魔される。彼もまた、カズマに劣らぬ変態的な策士だった。

「ならば、俺達が協力しよう」

「なんだよ、ツラ。唐突に変なフラグを立てやがって、一体ナニをするつもりだ？」

「ふん、別に警戒するような話ではないさ。俺達の請けるクエストが、お前達のものと同係しているだけのことだ」

そう言つて桂が見せてきた依頼書には、こう書かれていた。

——希少モンスター捕獲——

おい、その愚民ども。余が直々に頼んでやるゆえ、心して聞くがよい。今回は、近隣の湖で目撃されたブルータルアリゲーターの突然変異種「ブルータルアリゲーターG」の捕獲を依頼するぞよ。恐らくコイツはめつちゃんこ強くて、ビビりなヘタレは脱糞してしまうかもしれんけど、無様に死んでしまわぬようにせいぜい頑張るがよいわ。運良く成功した暁には、報酬として100万エリスを進呈するぞよ。

by ムツロー中央国からやって来たラブ&ピースなイケメン皇子☆

「ム〇ゴロー中央国って何だアアアア!?」

やたらと聞き覚えのある単語に、銀時と長谷川が思いつきり食いつく。

「これは一体どういうことだ!?! スツゲー馴染みがあるっつーか、これって絶対アイツのことだろ!?! 銀魂初期から登場してる、あのバカのことだろおーっ!?!」

「そんなまさか!?! あの忌まわしきバカ皇子までこの世界に来てるのかアアアアアッ

!？」

予想外の展開に銀時達が騒ぎだす。それに対して、訳がわからないカズマ達はポカんとするしかなかったが、親切なノルンが相棒だけに説明する。

《だいじょぶだよ、カズマ君。バカ皇子までこつちに來たら収集つかなくなっちゃうから、他のキャラと同様に銀魂世界で留守番してるよ》

「いや、そもそも俺は氣にしてねえし、バカ皇子つてどこの誰?!)」

ある意味貴重なメタ情報も、カズマにとつてはクソの役にも立たなかった。

それでも、彼女の言っていることは本当であり、幸いながらバカ皇子はこの世界に來ていない。

ムツ〇ロー央国とは、ベルゼルグより遙か遠くにある大国で、あのバカとキャラが被っている第一皇子が、珍しいモンスターをゲットするため、魔王が出現しているこの国に滞在中なのだ。

そんなバカ皇子の依頼を請けた桂は、利害が一致するアクアに協力を申し出たわけだ。結局は、余計に難易度が上がったただけだが……。

「ちよつと待つて!?! バカ皇子は良いとして、ブルータルアリゲーターGつてのは何なのよ!?! もしかして、Gウイルスに感染したバイオ兵器じゃないでしょうね!?! そんなヤツがいるなんて聞いてないんですけどおーっ!?!)」

「私も初めて聞きした。ブルータルアリゲーターに突然変異種がいるなんて、大変興味深いです。ところで、Gってなんですかね？ ジャイアントかグレートか……もしくはゴツドかもしれません！」

「ああ、ドラゴンボールなら有り得るな」

「つて、Gの部分はどうでもいいでしょ!?! ガンダムだかゴジラだか知らないけど、ソイツのせいでクエストが請けられないじゃないのよおー!?!」

打たれ弱いアクアは、始める前から失敗しそうな展開に焦る。他に良いクエストが無いので、今日の所はこの一点にかけるしかないのだ。

そんなへボい駄女神を助けるべく、桂が前に進み出る。

「安心するがいいアクア殿。こんなこともあるうかと用意していた物がある」

「えっ、本当!?! ツラのクセにやるじゃない!」

「ツラじゃない、ジャイアントグレートカツラGだ!」

「勇者王が別のメカになってますけど!?!」

先程の話を気に入ったのか、Gのくだりを蒸し返してきた桂にイラツとする。

それでも、今は彼だけしか頼れる存在はいない。覚悟を決めたアクアは、桂と一緒にクエストを申し込み、ブルータルアリゲーターGに立ち向かうこととなる。





ギルドを出た一行は、茂茂の砦へとやって来た。桂が言うには、ブルータルアリゲーターGの攻撃を防ぐ手段がここにあるらしいのだが、それは一体どのような代物だろうか。

「心して見るがいい！　これが勝利の鍵だアアアアッ！」

「つて、普通のオリなんですけど!?!」

絶叫するアクアの前には、確かに鋼鉄製のオリがあった。移動用の車輪が付いていること以外は普通のオリにしか見えず、期待していた者達のテンションを下げまくる。ただ一人、カズマだけは予想がついていたのだが。

「まあ、こうなるとは思ってたよ。俺のアイデアと同じだしな」

《流石はカズマ！　女の子をオリに閉じ込めて、ワニのいる湖に放り込むとか、クズ野郎かバカでないと思いつかない発想だよ!》

「（誉めるようにデイスってくんの止めてくんない、頼むから!）」  
ノルンの評価はかなり冷たいものだった。

それでも、この方法が最適な手段であると言わざるを得ない。その事実を伝えるために、桂が説明を始める。

「この無駄に頑丈なアダマンタイト製のオリに入っていれば、もう何も怖くない！ 浄化作業をするアクア殿を完璧に守ることができれば、ブルータルアリゲーターGをおびき寄せるエサ役までこなせるという、一石二鳥な作戦だ！」

「なんかさらつとんでもないこと言ってた気がするんですけど!? 女神であるこの私をエサにする気だったのぉーっ!?!」

「勘違いをしてもらっては困るな。アクア殿の参加は、あくまでもイレギュラーであつて、当初の予定では、近藤をエサ役にするつもりだったのだ。と言うわけで、お前も入れやクソゴリラ！」

「何で俺まで入るのぉーっ!?! オイ、コラ止める!? どうして服を脱がそうとする!?!」

「そりやお前、下ろし立ての隊服を汚すわけにはいかんからな。ついでにパンツも脱いでおけ」

「ちよつと待つてえ!! 服の方はちゃんと脱ぐから、せめてパンツは残してくれよ!?!」

「問答無用だ、さっさと脱げエエエエツ!」

「アアアアアツ!?!」

こうして、憐れな近藤は素っ裸にひん剥かれ、アクアや長谷川と一緒にオリの中へとブチこまれた。

「何でさらつと長谷川さんまでオリに入れられてんだアアアアアツ!?!」

「なんでもなナニも、オリの中はアンタの家みてえなもんだろう?」

「こんな家があつてたまるか!? 大体、俺は関係ねえだろ!? 俺は無実だ、ここから出せエエエエツ!!」

「そーよ、私も出しなさいよ! ゴリラやマダオと一緒にだなんて、イヤだイヤだイヤだアアアアツ!!」

「へっ、犬どもが吠えてやがるぜ!」

オリの格子を揺さぶりながら犠牲者達が泣き叫ぶ。一応、アクアを氣遣つて近藤達を同行させたのだが、はつきりいつて犯罪現場にしか見えない。あまりに悲惨な光景に、カズマやめぐみんでさえ顔をしかめてしまう。残念ながら、ダクネスだけは悦んでしまつていたが……。

「ひ、酷え……。俺が言うのもなんだけど、クズマさんでもこれは引くわ……」

「は、はい……。確かに、これはドン引きもいいところですね……」

「なにを言うか二人とも。私としては引くどころか、アソコに押し込んでほしいくらいだ! さあ、今からでも遅くはない! 強引に襲うように、アソコへ押し込んでくれエエエエツ!!」

「その言い方は止めるオオオオツ!!」

相性が良いのは分かるけど、これ以上銀魂サイドに堕ちないでください。興奮するダ

クネスを見て悲しくなったカズマは、わりと本気でエリスに祈った。

だがしかし、優秀なエリス様にも出来ないことはある。それを証明するように新たなネタがやって来た。この場にいなかったエリザベスが、オリを運ぶために必要な馬を連れて来たのだが、その馬には一目で分かる問題があつた。

〈お待たせみんな。頼れる仲間を連れて来たぜ〉

「ご苦労だつたなエリザベス。足となる馬も来たことだし、出発の準備に取りかかろう」  
「え……ちよつと待つて？ それつて馬？ 馬なの？ なんか頭が無いんだけど？  
馬つていうか生物なの？」

目の前にいる黒毛の巨体を見て、銀時は狼狽える。なんと、その馬には頭が無いのだ。しかも、普通のサイズより2倍以上は大きくて、ラオウがライドオンするレベルだ。

もちろん、普通の馬などではなく、正体を知っているアクアが叫ぶ。

「あああああああアツ!! コイツはデュラハンの馬じゃない!! なんでノゾキ魔の片割れがこんな所にいるのよ!!」

「デュラハンの馬？ もしかして、ベルディアが連れて来た愛馬つてことか!」

事情を察したカズマが驚きながら声を上げ、それを肯定するように桂が頷く。

「その通りだよカズマ君。お前達がベルディアを撃退した後日、将ちゃんの依頼を受けた俺達は、ヤツの動向を探るために廃城跡を調べていた。その際に、付近の森をさま

よっているコイツの姿を見つけてな。ベルディアに置いていかれて泣いていたようなのだが、なんかうるさかったからエリザベスと一緒にぶっ殺した」

「オイオイオイツ!!? 思考パターンがクス過ぎるだろ勇者王!!? つーか、この馬泣いてたの!?! 飼い主に捨てられたペットかよ!?!」

「ああ、そうだ。コイツはただ寂しくて、仲間を求めていただけなのだ。だからだろう、倒したコイツが起き上がり、仲間になりたそうにこちらを見たのは!」

「魔物使いの能力が運良く効いただけじゃね?!」

なにが起きたのかと思えば、結局はドラクエ的なオチだった。ようするに、エリザベスの専用スキルによってベルディアの馬を仲間モンスターにしたわけだ。

「ちなみに、コイツの名前は【風雲再起】だ」

「なんでそこでGガン風!?! ドラクエで統一しとけや!」

そこはかとなく納得がいけない銀時がツツコミを入れるものの、クエスト攻略の仕掛けはこれですべて揃った。湖へ向かう道中、アンデッドの存在を許せないアクアが度々文句を言ってきたが、風雲再起にスピードを出させて強引に黙らせるのであった。

☆☆☆☆☆☆

目的地である湖には思った以上に早く着いた。ざっと辺りを見回すと、確かに水が汚れている。

なので早速、アクアという名の浄化装置を浅瀬に設置する。後は、ブルータルアリゲーターGが出るまでひとまず待機である。

湖から少し離れた場所に陣取った銀時達は、その時が来るのを静かに待った。しかし、2時間経つても動きが無く、モンスターの一匹も出やしないので、用意してきた食料を摘まみながら休息を取ることにした。

「おいめぐみん、弁当の主役である唐揚げばつか食うんじゃねえよ。そんなにモリモリ食つてるとウンコに行きたくなっちまうぞ?」

「食事中になんてことを言うのですか!? そもそも、紅魔族はトイレになんて行きませんから、心配は無用です!」

「わ、私もクルセイダーだから、トイレは……(恥)」

「あーそうかい? だったら、絶対エお前らにはトイレタイムをやらねえからな? たとえ、アニメで出せないようなモザイク状態になったとしても、俺あ容赦しねえよ?」

「あーつ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ!?! 誠心誠意謝りますから、それは勘弁してください!」

「くつ、この私にスカ○ロプレイを強要するとは!! 興味はある……興味はあるが、やつ

ぱりらめえーっ!」

定番のトイレネタで盛り上がる仲間達。実のどかな光景である。

案外、この世界は俺達に優しいのかもしれない……。バカな会話を聞きながら、カズマは思った。

「このどろろが優しいのよ!」 ぼつちい水に浸かっている私達を放置してピクニックを楽しむとか、鬼畜の所業なんですけど!? もっと私に優しくしてよ! もっと私を敬つて、その唐揚げをよこしさいよ!」

「そーだそーだ、食いもんよこせえーっ! 俺達弱者に愛の手をーっ!」  
「我々は、横暴なりーダーに対して待遇の改善を要求するっ!」

優しさとは無縁な連中が遠くから怒鳴ってきた。

その際に発せられたアクアの神気に反応したのか、とうとう奴等が動き出した。オリの周囲に小波が走り、数十匹ものブルータルアリゲーターが出現したのである。

「ぎゃああああああっ!」 なんかいっぱいワニがキターッ!」

最初に気づいた長谷川が情けない声で叫んだ直後に奴等の攻撃が始まった。

「うおオオオオオオッ!」 コイツらめっちゃ回ってるーっ! サイコクラッシュャーばりにデスローリングキメてるよおーっ!」

「助けてください、お妙さあーん!」 キャバクラで全財産ぼられてもいいですから!

「ダークマターで死にかけても笑顔で旨いと言いますからあーっ!!」

「あーん、こんなのもうイヤアアアアアッ!! これからはちやんと働くから! お酒もちよっぴり控えるから! だから私を助けてください、神さまカグヤさまアアアアッ!?!」

「なんだよオイ。なんやかんやと言ってたけど、結構楽しそうじゃねえか」

「いや、生き地獄にしか見えないんだだけ?!? こんなんで本命が来るまで耐えられんのか、精神的に!」

ワニごときにアダマンタイト製のオリを壊される心配は無いとはいえ、中の人の恐怖まで防ぐことはできない。今回ばかりはカズマでさえもアクアのことを心配する。

ただ、残念なことに、肝心のリーダー達はまったく気にすらしていなかった。

「そんなことよりお前たちい! 腹ごなしに俺達とキャッチボールでもやらないか?」

「つたく、しゃーねえなあ。大谷君も真っ青な二刀流を見せてやらあ!」

「テメエらの血は何色だアアアアアッ!?!」

こんな状況でもマイペースなサムライ達に怒りと恐怖を感じてしまう。ギャグマンガとラノベを隔てる常識の壁はこうまで高かったのか……。もう訳がわからないよ。

《おい、どうしたカズマ君? キュウベえみたいない顔してないで、キャッチボールをやるろウヨ!》



「お前もヤツらと同じかYO！」

残念ながら、可愛いノルンも銀魂寄りのキャラだった。

ああ、やつぱりこの世界は、ちつとも俺に優しくもないや。なんとも言えない空しさを覚えてアンニユイな状態になったカズマであったが、めぐみやダクネスが普通にキャッチボールを始めたのを見て、悩むことを止めた。

「わーい、俺も混ぜてよー！」

そうして現実逃避しながら遊んでいる内に4時間が経過し、ようやく飽きた銀時達は、オリの方へと意識を向ける。

どうやら、アクアが必死こいて浄化魔法を連発しているようだが、状況はあまり変わっていないように見える。

「使ってるエサが悪いせいか、なかなか食いついてこねえな。やつぱここは、池の水ぜんぶ抜くことやらなきやダメか？」

「できるわけねえだろそんなもん!?! でも、そうだな。早くしないと、アクアの浄化が先に終わっちゃうよな」

ブルータルアリゲーターは綺麗な水が苦手なため、ある程度浄化が進むと逃げてしまいうらしい。もしそうなると、桂の請けた捕獲クエストは失敗となってしまう。

「ここまでやって報酬ゼロは流石にアレだし、アクアを一旦陸上げするか？」



そんな中、近藤だけは動揺せずにじっとしている。全裸の変態とはいえ、これでも数々の修羅場を潜り抜けて来た真選組局長だ。こんな状況だからこそ、逆に冷静になれるのかもしれない。

そう思つて見直した瞬間、アクアは気づいた。近藤のケツ付近に、茶色くて細長いものがぶら下がっていることに。

「ねえちよつと、アンタのお尻でブラブラしてるそれつてまさか……」

「ちつ違うつ！ これは断じてアレじゃないつ！ これはその……そうアレだつ！ サイヤ人のケツに生えてる尻尾的なアレなんだつ！」

「ウソつけエエエエツ!? ゴリラ人のケツに尻尾なんか生えてねえし、テメエのケツに生えてるのは、どう見てもウンコだろ!? 恐怖のあまりに漏らしちまった一本糞じゃねえーかソレ!?」

「キヤーツ!? こつちに来ないで、お漏らしゴリラツ!? エンガチヨよエンガチョーツ!?」

「ぐはっ!? 止めて!? 蹴らないで!? 尻尾がさらに伸びちやうからっ!?」

恐ろしい敵を前にして、オリの中でも恐ろしい状況になっていく。流石にこれは洒落にならんと、焦ったカズマが主張する。

「ヤバいぜ銀さん!? 早くアイツらを助けないと大変なことになつちまうー!」

「ああ、もちろん分かっている。もし、ノーパンのアクアがゴリラみてえにウンコを漏らしやがったら、このSSがR-18になっちまうってことはな！」

「全然分かってねえーじゃねえーか?! いいから、早く助けるよ!」

この期に及んでふざけまくるリーダーにイラツとするものの、当然このまま見殺しにするなんてことはない。

特に桂は、このクエストのために入念な作戦を練って来ており、気合いを入れて動き出す。

「よし、今だ! オペレーション・メテオを実行するぞ!」

「いや、オペレーション・メテオって何なんだよ!? 俺たちやガンダム持ってねえし、そんな話聞いてねえぞ!」

当然ながら、銀時のツツコミが入るものの、それを無視して捕獲作戦が開始される。

「まずは、アイツを陸地に上げるぞ。メテオのような勢いで風雲再起を走らせて、オリを噛んだ状態の目標ごと引っ張り上げる。その役目は、めぐみん殿にお願いするとしよう」

「了解です! さあ、行きますよマキバオー!」

「なんでお前が乗ってんのおーっ!? さりげなく改名してるし、マキバオーはどっから出した!?! アッチもコッチもうんこたれ蔵ばかりですかコノヤロー!?!」

いつの間にかライダースキルを身に付けていた（？）めぐみんが、ドヤ顔で風雲再起に騎乗する。すると、間もなくガララワニがエサの入ったオりに噛み付き、攻撃のチャンスがやって来た。

「さあ、今ですマキバオー！ 勝利の栄光を掴むため、辛苦の覇道を駆け抜けるオオオオオオッ!!」

めぐみんの号令を受けて、風雲再起（マキバオー）が走り出す。なんで会ったばかりの中二病に使役されてんだよとつつこむべき所だが、今注目すべきは、ガララワニの巨体を引き出すことができる、強大なそのパワーだ。魔王の幹部が乗っていた馬だけに、馬力も半端なかつたのである。

「どうだ銀時！ 流派東方不敗を極めし風雲再起の力は？ アイツにかかれば、ガララワニなど恐るるに足らんわ!」

「いや、そんなもん極めてねえし、あの馬は、ついさっきうんこたれ蔵になったから」  
面倒になった銀時は、付き合ってらんねえとばかりに雑なツツコミを入れる。その間に、ガララワニが湖から引き揚げられて、いかつい巨体を陸地に晒す。

「す、すげえ!? 元の主はアレだったけど、マキバオーの方は、マジばねえ!」

引つ張られた衝撃で地面に這いつくばっている巨大ワニを見て、カズマが興奮する。風雲再起にこれだけのパワーがあつたからこそ、桂はこのクエストを請けたのだ。

しかし、まだ湖の王者は戦意を喪失していない。それどころか怒り狂って、カズマ達のいる方に突進して来た。

「なんかこつちキターッ!？」

「ふん、来るがいい化け物め! クルセイダーの誇りにかけて、仲間の命は守ってみせりゅ!」

泣き叫ぶカズマを守るように、嬉しそうな顔をしたダクネスが前に出る。DM的には絶好の快樂イベントだったからだが、そんな彼女の更に前に桂とエリザベスが飛び出していく。

「心配無用だ二人とも! 天才である俺達にかかれば、こうなることも予想済みだ!」  
へなんせ、俺らはネバランの子供達より優秀だからな!」

「ジャンプを代表するバカ二人が、さらっとウソをついてんじゃねえーっ!」

ムカつくセリフを後に残してバカ二人が突進していく。それに対するガララワニは、真正面から向かってくる人間どもを噛み砕こうと、巨大なアゴを開きながら重機のように突っ込んでくる。このまま普通に衝突すれば、桂達に勝ち目はないが、もちろんそのようなマネはしない。ガララワニの攻撃を受ける直前に素早く左右へ飛び退いて、すれ違いざまに前足めがけて強烈な一撃を食らわせる。その結果、バランスを崩したガララワニは、前方へつんのめるように転んでしまう。

「さあ、出番だぞ銀時！ 一番の見せ場はくれてやるから、会心の一撃をお見舞いしてやれ!!」

「へっ、こうまでお膳立てされちゃあ、ジャンプの主人公としては、やらねえ訳にはいかねえな！」

悪友の粋な計らいに応えるべく、いよいよドSが立ち上がる。

「行くぞダクネス！ せっかくだから、お前にも活躍の場をくれてやらあ！」

「はっ、はいいつ!? 感謝するぞ、我が主っ!!」

「あれ、なんだろう。この展開にもものすごくデジャブを感じるのだが？」

イヤな予感があったカズマが見つめる中、SMコンビが動き始める。果たして、彼らはナニをやるうとしているのか。

「約束された勝利の剣よ、再び我に力を与えよ！ ダークネスエクスカリバー・モルガン!!」

「承ったぞマイマスター！ 我が苦痛を代償に、勝利を汝に贈りましょう！」

「ダークネスエクスカリバー・モルガンって何だアアアアアアアアアアアッ!? モルガンとか付いてっけど、ダークネスエクスカリバーとほぼ同じ駄剣じゃねえーかつ!」

やつぱり、またやらかしました。ダクネスを装備した銀時は、カズマのツツコミをスルーして猛然と駆け出した。狙うは、起き上がりつつあるガララワニの頭頂部。

「これでも食らえい、ワニヤロオオオオオオオツ!!!!」

「グオオオオオオオオオオオオオツ!?」

無防備となっていた頭頂部に強烈な一撃が決まり、脳に衝撃を受けたガララワニは、堪らずに気絶する。一時的に無力化しているだけとはいえ、ボスクラスのモンスターを生け捕りすることに成功した。

《やったあー! カズマは何もしてないけど、ボスキャラを倒したよ! カズマは何もしてないけど!》

「(いいえ、俺もしてましたあー! ツツコミとキャッチボールを、全力でこなしてましたあー!)」

《いや、それ何もしてないよね? ただ、遊んでただけだよね?》

ラッキーボーイなカズマだけ苦労せずに危機を脱した。流星は、幸運だけが取り柄のクズ野郎である。

その反対に、苦労した桂達は、最後の仕上げに取りかかる。

「後はコイツをどう運ぶかだが、ひよいぎぶろー殿に作ってもらった秘密道具に丁度良いものがある」

「えっ、そんなものまであるのですか!? 流星は我が父ひよいぎぶろー、良い仕事してますね!」



いつの間にか戻ってきていたためぐみんなが食いついてくる。彼女の父親であるひよいざぶろーは、クソアイテムを作る変人なのだが、今回も危険な匂いがプンプンしまくっている。当然、カズマ達は警戒し、桂が懐から取り出した丸い道具に注目する。

「テレレテツテレー!」【モン○ターボールGT〜!】

「モロにアウトなのキターツ!!」 モンス○ーボールGTつてお前、モ○スターボールのパチもんだろソレっ!? 大体、GTつて何なんだよ!? まさかとは思うけど、ドラゴンボールから持つて来たの!? あの作品は、超のせいで公式に黒歴史となった悲しき存在なんだから、今更いじつてやるんじゃないやねえよ! ブルマにフラれたヤムチャのように、今はそつとしいてやれよ!」

予想以上にヤバいアイテムが登場して戦慄する。マンガやアニメで使っていたらそんな人から怒られてたぜ。

だが、幸いなことに、ここは自由なSSだ。面倒なしがらみから解放された桂は、まるで無邪気な少年のようにソレを使った。

「行け、モン○ターボールGT!」

聞き覚えのある言葉と共に投げられたボールは、ガララワニに直撃すると、本家のソレと同じようにその巨体を閉じ込めた。何故か、モン○ターボールの方がモンスターと同じサイズに巨大化していたが。

「ガララワニ、ゲットだぜ！」

「いや、ゲットできてねえーじゃねーか!? こんなにでつけえモ○スターボール、どうやって持ち歩くんだよ!? スーパーマサラ人だって、こんな運べやしねえーぞ!」

「確かに、大猿に変身したベジータの戦闘服が巨大化した時のように無理があんじやね?と思うだろうが、心配は無用だ。この状態なら道具扱いになるので、エリザベスのルーラで持つていくができるのだ。ただ一つ問題なのは、中のモンスターが暴れたら簡単に壊されてしまうという点だ」

桂が説明するように、耐久力の無いモン○ターボールGTは、相手が弱った状態でないで使用できない弱点がある。もちろん、ボールに閉じ込めてから爆裂魔法でぶっ飛ばすという凶悪なハメ技も不可能である。後は、転がして移動させるくらいの効果しかなく、結局はこのボールも出来損ないのクソアイテムだった。

「そんなわけで、俺達は、今すぐコイツを依頼者に届けなくてはならん。アクア殿のクエストを手伝えないのは残念だが、後のことはよろしく頼む」

そう言うと、桂とエリザベスはルーラでどこかに跳んでいった。何かと問題はあったものの、超危険な捕獲クエストは滞りなく終わった。

この後は、中断している浄化クエストを再開すればいい。そう思ったのだが……。不気味に静まるオリを見て、カズマ達は言葉を失う。

「こわいヨ。こわいヨ。全てがこわいヨ。ワニとマダオとゴリラとウンコが私におそいかかってくるヨ……」

「流石はスピル〇ーグだぜ。VRとは思えないジュラ〇ックパークを堪能させてもらったよ……」

「女神の前で脱糞してしまうだなんて、俺はどこまで罪深いストーカーゴリラなんだ……」

アレ、どうしたんだろう。みんなの様子がおかしいぞ。瞳のハイライトが消えてるし、目から涙も出まくってるよ。それでも、やっぱりダメだよ。途中で仕事を止めるだなんて、やっちゃいけないことだよ。

「よおーし、お前ら覚悟はいいかあ？ オリを戻してやり直したあーっ！」

「お前一人でやって来いやアアアアアアアッ!?!?!」

真のドSに容赦という概念は無く、アクア達の受難はもうしばらく続くのだった。

☆☆☆☆☆☆

水の女神が再びワニ地獄へ立ち向かってから数時間後、王都からアクセルの街へ行くとして一組のパーティがいた。ソードマスターの少年をリーダーに、クレメアと

いう名の戦士の少女と、フィオという名の盗賊の少女を加えた3人である。

「はあー……。魔王の幹部が逃げたおかげで少しはのんびりできそうだけど、キョウヤだつたら倒せたのになあ……」

「もう、それはいいじゃない。キョウヤの手柄を取られたのは確かに腹が立つけど、チャンスは必ずやって来るわ」

「もちろん、分かっているわよ。キョウヤなら、焦らなくても立派な勇者になれるってね」  
リーダーの少年に淡い想いを抱いている少女達は、お互いに牽制しつつ献身的なアピールをする。

そんな乙女心を知ってか知らずか、リーダーの少年……ミツルギキョウヤが、少女達を優しくねぎらう。

「そんなに買い被らないでくれよ。君達がいるからこそ、僕も力が出せるんだ。そのお礼に、空いた時間を利用して、君達に恩返しをさせて貰おうかな。僕が二人をエスコートして楽しい時間を提供するよ」

「いやーんもうもうっ、キョウヤってば優しいいういっっ！」  
「恥ずかしいけど、そこにシビれる憧れるうーっ！」

銀時やカズマがいたら、無言でグープンが飛んでくるだろう光景である。イケメンで性格も良い上に、剣士としても超一流なミツルギは女の子にモテるのだ。

そんなクソ野郎が、今からテレポートサービスを利用してアクセルに向かおうとしているのだが、それには込み入った事情がある。

当初彼らは、ギルドからの要請でベルディアの討伐を行う予定だった。しかし、準備を整えている間に茂茂のパーティーがベルディアを撃退したという知らせが入り、アクセルへ行く理由が変わった。

「建設していた例の砦も完成間近だと聞いているし、今回の件も含めて將軍様にお祝いの挨拶をしなければ……」

これまで順風満帆な転生生活を満喫していたミツルギは、これからナニが起こるかも知らずに爽やかな笑みを浮かべるのだった。

## 第26訓 イケメンは性格が良いヤツほど腹が立つ

湖の浄化を再開してから3時間後。濁りまくっていた湖水は見違えるように透き通り、浄化が無事に終わったことは誰の目にも分かった。オリの周りに群がっていたブルータルアリゲーターも、山の方へと逃げて行き、辺りの安全も確保できた。後は、オリを回収してアクセルに帰るだけである。

でも、簡単には終わらないのが銀時パーティーのお約束。今クエストの立役者であるアクアの様子が何やらおかしい。

「おいアクア、もうガララワニもアリゲーターもないから、いい加減オリから出るよ」「イヤよ私はここにいるわ！ モンスターやドSだらけの外に出るくらいなら、ゴリラやマダオと引きこもっていた方が遥かにマシよ！ この中は、私にとってサンクチュアリなのよおーっ！」

「ただ最低なサンクチュアリだよ!!」 星矢とのクオリティー差が半端なくて切なくなるわ!」

ご覧のように、新たなトラウマを植え付けられたアクアは、頑なにオリから出てこようとしない。こうなっては仕方がないので、彼女が落ち着くまでの間は、近藤達と一緒

にオリの中へぶちこんだままにするしかない。

「いや、なんで俺らまでぶちこまれたままなんだよ!？」

「そうだけ銀さん！俺らはちゃんとお務めを果たしたんだから、ムシヨから早く出してくれよ!？」

「はあ？ サンクチュアリを守る聖闘士（セイント）が、女神を放つて外に出るとか許されると思ってるの？」

「俺らのどこが聖闘士なんだよ!? カッチョイイ聖衣（クロス）どころか、まともに服も着てないじゃん!？」

とまあ、こんな感じで少しばかりトラブルが起こったりしたものの、うるさい雑音はすっぱり無視して、帰路に着くことにする。

しかし、アクセルの外壁が見えて来たところで新たな問題が発生した。中二病を拗らせためぐみんが、風雲再起に騎乗した姿を街のみんなに見せびらかせたいと望んでしまい、まっすぐ砦へ向かわずに街へ入ろうとしているのだ。確かに、街を突っ切った方が砦に早く着けるのだが、少女に見える駄女神をオリに閉じ込めた状態で通り抜けるのは何かと不味い。

「さあ、行きますよマキバオー！ 我らが勇姿を街のみんなに見せつけてあげましょう!？」

「おい待てめぐみん！ このまま街に入っちゃダメだ！ アクアのバカを何とかしねえと、サツの奴らが勘違いして、言い出しつぺのカズマさんがマジでムシヨにぶちこまれるぞ?！」

「なんで俺だけぶちこまれんだよ!? こうなったのは、全部お前らの仕業だろーが!」  
責任を擦り付けてきた無責任なリーダーに怒りのツツコミを決める。

とはいえ、彼が言うことにも一理はある。それを証明するように、未来を見たノルンが忠告してきた。

《カズマカズマ！ このまま街に行っちゃうと厄介事に巻き込まれるって、今日の運勢に出ているよ!》

「(お前はテレビの占いか!? ってか、厄介事に巻き込まれるだど?)」

運命を司るノルンが言うのだから、恐らく何かが起こるのだろう。だからと言って、暴走しているめぐみんを止めるのも面倒くさい。厄介なことに、この面子の中では、彼女しか風雲再起を操れないのだ。

ならば、アクシデントの原因と思われるアクアをオリから出すしかない。

「おい銀さん！ どんな手を使ってもいいから、アクアをオリから出してくれ!」

「言われなくても分かっている! こうなったらもう荒療治をするつきやねえ!」

「我が主! 荒療治とは一体なんだ!? 出来れば私も治療してほしいのだが!」



「DMを治してえんなら精神科にでも行って来いや!」

変な所に食いついてきたダクネスに適切な助言を与えつつ行動を開始する。カズマが馬の前に出てめぐみんを止めている間に、オリを開けた銀時が無理やりアクアを引きずり出す。

「オラオラ、とつとと出て来やがれえーっ!」【タートルシエル・バインド】「ッ!」

「きゃーっ、イヤだイヤだイヤだアアアアアッ!」サンクチュアリの外に出たら、再び地獄に戻っちゃやう!?! モンスターとか取り立て屋に怯え続ける日々なんて、もうイヤなのよおおおおおっ!?!」

「取り立て屋に関しては自業自得じゃね?!」

往生際の悪い駄女神を問答無用でお縄にすると、肩にかついで連れ出していく。そして、近藤と長谷川はそのままに、オリの入り口を施錠する。

「ちよつと待てえーっ!?! どうして俺達は、こつから出してくれねえんだよ!?!」

「はっ、聖闘士のクセに女神の心を守れなかつた負け犬共が、すんなり許されるとでも思ったのかあ? 邪武より使えねえゴミ共は、オリの中で反省しながら小宇宙(コスモ)でも鍛えてな!」

「お前はどっこまで俺達を聖闘士にしてえんだあーっ!?!」

適当な事を言つて近藤達を黙らせると、泣きわめいているアクアに対して心のケアを

試みる。

「うわぁーん！ 外はイヤだぁーっ!? 早く私を楽園に、サンクチュアリーに戻してよぉーっ!」

「アレのどこが楽園なんだよ!? 動物園にしか見えねぇよ!? そもそも、お前は本当の楽園つてヤツを忘れてるぜ?」

「ほえ……? 本当の楽園?」

「ああそうだ。本当の楽園は、恐ろしい外にこそある。今からそれを強制的に思い出させてやろう!」

そう言つてニヤリと笑つた銀時は、懐に入れていたSM用のムチを取り出す。まさかこれは……。

「さあ、存分に思い出せい! 快楽という名の楽園をなぁーっ!」

「あん、あん、あひいいいいいんっ!」

イイ笑顔を浮かべた銀時は、亀甲縛りをされたアクアに「ラブウィップ」を叩き込む。スパルタな彼は、遊び人スキルを用いて、あらゆる痛みに耐えられるように駄女神の心を鍛えようと考えたのだ。まあ、強くなるとは言つてもDMとして痛みが強くなるだけだ。

「おお、なんと素晴らしい! この私にも是非、荒療治を頼みたい!」

「お前がやつても悪化するだけじゃねえーか!？」

ダクネスだけは大絶賛するものの、他のみんなはドン引きである。とりあえず、アクアを外には出せたけど、本当の意味で立ち直れるかは甚だ疑問であった。

☆☆☆☆☆☆

銀時がアクアのケア(?)を終えた頃、夕暮れに染まり始めたアクセルの街に一組のパーティがやって来た。王都からレポートサービスを使って到着したばかりのミツルギキョウヤ一行である。

転生者である彼にとっては、久しぶりの帰郷みたいなものであり、初めて来た頃を思い浮かべながら懐かしそうに辺りを見回す。魔王軍の幹部に脅かされていた影響も特に見られず、アクセルの街は相変わらず牧歌的な雰囲気にも包まれたままだ。

「少し心配してただけど、どうやら杞憂だったようだね。将軍様がいるのだから、この街は安泰だ」

茂茂に対して大きな信頼を置いているミツルギは、誇らしげに胸を張る。転生前はその逆で、傍若無人な天人に対して弱腰な対応しかできない茂茂に憤りを感じていたのだが、この世界で活躍する本人と出会ったことで評価が逆転した。戦いだけに特化した冒

険者としてだけでなく、経済や社会基盤を強化することでこの国を救おうと尽力しているあのお方は、まごうことなき將軍なのだ、今になって実感したのだ。

ただ、彼の仲間であるクレメアとフィオは微妙な感想を抱いていたが……。

「將軍様ねえ……。確かに、キョウヤがベタ褒めするほどにすごい立派な人なんだけど、ブリーフマスターって職業がねえー」

「ブリーフ派っていうだけでも女子的にはアレなのに、職業までブリーフに毒されてい  
るだなんて、もはや呪いのレベルよねえー？」

「おいコラ君達!? 將軍様とブリーフを侮辱するのは止めてくれ! ちなみに、僕はト  
ランクス派だが!」

「この状況でトランクス派とか言ってるキョウヤも、なにげに侮辱してるよね?」

結局、みんなで茂茂をさりげなくディスってしまう。残念ながら、思春期の男女が抱  
くブリーフの評価は低かった。男性用パンツの中では、一番チンポジを整えやすいとい  
うメリットがあるのだが、どうしても拭えないモツサリ感がマイナス要因なのだろうか  
……。

何にしても、街中でする会話としては不適切なので、気まづくなつたキョウヤは話題  
を変えようとする。

するとその時、彼らの後方から人々の驚く声が聞こえてきた。

「きゃーっ、なんなのアレーッ!」

「見たこともないゴリラと変なオッサンがオリの中にいるわよーっ!」

「それよか、あの馬は何なんだ!?! どう見ても頭が無いんだけど!?!」

「まさか、モンスターへの襲撃?! じゃねえーなあ、ありや……。上に乗ってるロリっ子にすっげー見覚えがあるし」

「あーアレは、頭のおかしい爆裂娘と愉快な仲間達だな」

「つたく、またあいつらかよ。あんなモンスターまでペットにしちまうなんて、頭のぶっ飛んだ連中だぜ」

唐突に現れた奇妙な一団を目にして、アクセルの住人達が騒いでいる。最初こそ驚いたものの、赤い服を着た魔女っ子を見て、すぐさまシラけた空気になった。

その元凶であるめぐみんは、周囲の会話を気にすることなくドヤ顔でふんぞり返る。

「ふっふっふ! どうですか、カズマ! 紅魔族を愚弄する憐れな街の住人が、魔物を従えるこの私に畏怖の念を抱いてますよ!」

「いや、あれはどう見てもバカにしてる顔だろう。頭のおかしい爆裂娘とか思いつきりデイスられてんじゃん」

風雲再起の隣を歩くカズマが冷静につっこみを入れるものの、浮かれた状態のめぐみんには残念ながら届かない。目立ちたくない彼にとっては居心地の悪い空間も、中二病

全開なめぐみんにとっては特別な自分に変身できる傍迷惑なステージなのだ。

ただ、意外なことに、トラブル体質の銀時がこの苦行に巻き込まれていない。執拗に駄々を捏ねまくるアクアのケア（調教）に時間がかかり、待ちくたびれたカズマ達は彼らを置いていったのだ。

「かなりハードなプレイを受けてて正直興奮しちゃったけど、アクアのヤツは大丈夫かな？」

「ざらつと漏れてるあなたの本音が正直かなりキモいですが、まあ大丈夫なんじゃないでしょうか。一応、ダクネスも付いていますから」

「返って不安要素ではないんだけど、ソレ……」

適当すぎるめぐみんにカズマも呆れた返事をするが、アクア達を置いてきた張本人は彼自身だったりする。近藤達もオリの中に入れっぱなしのままだし、なにげにコイツもDSである。まあ、そこにつっこまないめぐみんも同類なのだが。

「なあ、そこのご両人。万事屋もいねえことだし、そろそろここから出してくれよ」

「うん、確かにそうしてあげたいところだけど、あなたを出すわけにはいかないな。今はまだ街の人もあなたの姿に慣れてないから、オリの中にいる方が色々としつくり来るし、いくら見た目がゴリラでもチ○コ丸出しのオッサンを外に出すわけにはいかないだろっ？？」

「そういうわけで、あなた達は、外界から守られたサンクチュアリの中で寛いでいてください」

「外界から丸見えなサンクチュアリで寛いでなんかいられるかあーっ!」

「大体、俺は近藤さんと違って服を着た人間だから、外に出ても問題ねえだろ!」

「いいや、違うぜ長谷川さん。本体がグラサンのはんたは、カテゴリー的には【おどる寶石】と変わんねえから、基本的に近藤さんと同じ扱いでいこうと思う」

「俺は物質系モンスターかよ!」

残念ながら、二人のオツサンはモンスター扱いだった。まあ、それほど間違っちゃいないので、あまり気にすることでもない。

今はそんなマダオ達より、銀時とアクアを注意すべきだ。

「一番危険なああの二人がいなければ、ノルンが言っていたアクシデントもたぶん起こらないはずだ……」

警戒していたカズマとしては、原因を事前に排除できてホッと一息つくところであった。

しかし、この程度の対策で回避できるほどコイツらのトラブル体質は甘くない。カズマが安心したその時に、アクシデントの発端となる人物が現れる。それこそが、ミツルギキョウヤその人であった。

騒ぎが気になったミツルギパーティが様子を見に来たことで、予期せぬイベントが発生してしまふなど、神ならぬカズマには予想もつかなかった。

「あーっ、見て見てキョウヤ！ 本当にゴリラがいるわ！」

「へえ、初めて見るタイプของゴリラ型モンスターだな……」

カズマが思案に耽っていると、前方からそんな会話が聞こえて来た。見るとそこには、あからさまにモテそうなイケメン剣士と二人の美少女冒険者がいた。

「なんだあの、少年マンガの主人公みたいなオーラを出してるイケメンは？ このクソみたいなSSに、あーいうヤツはいらねえだろ！」

いきなり現れたイケメンを見て気分を害したカズマは、無視して通り過ぎようとす。単なる嫉妬心だけでなくイヤな予感がしたからだが、残念なことにその感覚は当たっていた。

そのイケメン——ミツルギキョウヤは、オリの中にいるゴリラを見た瞬間に、ふと疑問を感じた。なんだろう、コイツの顔には見覚えがあるような……。その違和感を探るためにゴリラをガン見していると、だんだんソイツはゴリラから全裸のオッサンに見えるてきた。

「ねえカズマ。先程からついて来る不気味なストーカー剣士がこちらを睨んでくるのですが、私にケンカを売っていると判断すべきでしょうか？」



「そんな判断しなくていい！　つーか、コイツはオリにいる近藤さんを見てるだけだろ」  
「な、なに？　今、君はコンドウと言ったよな？　コンドウ、こんどう……あつそうか!？」

このゴリラは、真選組局長の近藤勲じやないかアアアア!？」

カズマのセリフからヒントを得た瞬間に、ミツルギに起こっていた認識障害が解消された。彼もまた、銀時達と同じように近藤との接点が多少なりともあつたからだ。

ただ、近藤の方には彼との知識が無かつたが。

「ま、まさか!?　君は俺のことを知っているのか!？」

「ええ、よおーく知っていますよ。あなた達、真選組のことはね……」

なにがなにやらサツパリだが、唐突に世界をまたいだイベントが発生した。どうやら、あのイケメン野郎は近藤のことを知っている転生者らしく、面倒な展開になりそうだと直感したカズマはノルンに文句を言う。

「（これは一体どういうことだ!?　銀さんとアクアを排除したのにアクセシントが発生したぞ!?!）」

《くつくつく。一体いつから、アクセシントの原因がアイツらだけだと錯覚していた?》

「（お前絶対、藍染のモノマネやりたかっただけだろう!?!　こうなることが分かつてたんなら、最初から教えてくれよ!?!）」

女神なのに小悪魔系な相棒にしてやられた。こういう面白いイベントが起きる場合、

ノルンは止めようとするどころか逆に盛り上げようとする困ったちゃんなのだ。

そして、彼女の期待通りに近藤達は動き出す。

「教えてくれ、君は一体何者なんだ？」

「そうですね。直接話すのは初めてなので、自己紹介をしておきましょう」

思わせ振りに笑みを浮かべたミツルギは、困惑気味な近藤に向けて口を開いた。

「僕の名前は御剣響夜。見廻組に所属していた御剣拓哉の長男です」

「はあ……ミツルギタクヤ……ミツルギタクヤ……。いやあ、どうにも記憶に無いなあ。そんな名前のサブキャラなんて銀魂に出てたっけ？」

「そ、そんな!? 局長ともあろう人が僕の父を知らないなんて!? 見廻組の中でも優秀な人材ばかりを集めて作られた特務機関「スペシャル・セレブリティ・オフィシャル・ピープル」略して「SCOP」に所属していたエリート幹部ですよ!」

「んー? スコップう? あーあー、あれかあー。SMOPの人気にあやかろうとして見廻組が作ったけど、語感がすっげーダサイ上に、当のSOAPが解散しちゃって、俺達真選組の間ではメンバー扱いされてたあいつらの事かあー」

「メンバーって言うのは止めるおーっ!? なんだか不祥事を起こした芸能人みたいに なっちゃうだろう!」

いぎ、答えを聞いてみたら微妙な結果に終わってしまった。

「と、とにかく僕は、あなたと同じ転生者だが……僕はあなたが女神様に選ばれた勇者だなんて、絶対に認めない！」

初対面にもかかわらず近藤を罵倒する。転生する前から正義感の強かったミツルギは、真選組の乱れまくった風紀に対して不快感を抱いていたのだ。

だからこそ、異世界でも全裸を晒す近藤に怒りを覚え、同じ転生者である自分の手で厳しく罰するべきであると勝手に思い込んでしまう。

「(異世界に転生してまでハレンチ行為をやらかすなど、女神に選ばれし勇者として許すわけにはいかないんだ!)」

変態ゴリラを更正させる決意を固めたミツルギは、堂々と腕を広げて馬車の前に立ちほだかり、操作しているめぐみんに向けて止まるようにと呼びかける。

「御者をしている少女よ! その馬車を一旦止めて、僕の話聞いてグヘエーツ!」

「キヤーツ、キョウヤアアアアアツ!」

「何なんですか、あなたは? いきなり前に飛び出てきたら危ないじゃないですか?」

「いや、危ないっていう前にはね飛ばしてますけど!」

行く手を遮られてムカツと来ためぐみんは、止まれなかったフリをしながらミツルギをぶっ飛ばした。『これももう普通に人身事故じゃね?』と思うところではあるが、客観的には強引に進路を妨害したイケメン野郎に過失があり、めぐみんは無罪だと街の人達は

認識していた。

それでも、彼の仲間である少女達が黙っていられるわけもなく、カエルのようにひっくり返ったミツルギに駆け寄ると、めぐみんに向けて理不尽な文句を言い始めた。

「ちよつとアンタ何してんの!? イケメンのキョウヤがカツコよく話しかけて来たんだから、ここは普通に空気を読んで馬車を止めなさいよ!」

「そ、そうよ! あの状況で止まらないなんて、どう考えてもあり得ないわ! 頭の無い変な馬に乗つてるようなあなた自身も、頭がおかしいんじゃないの!」

「ねえカズマ。超迷惑な飛び出し野郎に惚れてる感じの女共がギャーギャーわめいてきているのですが、今度こそは、この私にケンカを売っていると見なしでもいいですよねえーっ! (怒)」

「見なす前からヤル気満々なんだけど!? 確かにケンカを売っちゃあいるが、んまい棒を買うみたいに簡単に買うんじゃないやねえーよ!」

ミツルギがカツコつけたせいで、余計に話がややこしくなってしまった。

望まぬケンカに巻き込まれそうになったカズマは一人で頭を抱えるが、意外なことに、やられたミツルギ本人が話題を変えてくれた。

「ま、待つてくれ二人共。今のは急に飛び出した僕の方が悪いんだ。それよりも、そこにいる剣士風の君に聞きたいことがあるのだが、ぜひ教えてくれないか。なんで君達は、

全裸の近藤をオリの中に閉じ込めているんだ？ 一緒にいるグラサンをかけたオツサンも痴漢をやりそうな風体だし。もしやこれは、進撃の変人を駆逐するイエーガー的なクエストなのか？」

「そんなクエストあるわけねえーだろ!? 大体、俺は変人じゃねえーっ！ 全裸にされる機会が多くて、快感になるくらいに慣れちまったただけだあーっ！」

「それなら、俺も痴漢なんて一回もやってねえーぞ!? 俺あただ、その手の内容のアダルトビデオやエロ本が大好きなだけだあーっ！」

「否定しておきながら、疑わしい性癖を暴露しちゃってますけど!？」

話を振られたカズマを他所に、オリの中の懲りない面々が無罪を主張する。どう聞いても説得力皆無だが、今回に限ってはウソではないので、カズマが弁護をすることにした。誤解されそうなアクアのことは誤魔化して、捕獲クエストのくだりだけを説明する。

「なるほどね……。呪いによってゴリラに見えるようになった近藤を利用して、モンスタ―を捕獲するためのエサとして使ったわけか。君はなかなか頭がいいな。まさに適材適所だよ」

「人をエサにするなんて適材適所があつてたまるか!? 大体君は、なんでそこまで俺のことを目の敵にするんだ？ 見廻組の連中とは既に和解したはずだが？」

「ああ、そうだ。アンタの言う通り、見廻組と真選組は過去の遺恨を水に流して、アルタナを巡る戦いでも天人相手に共闘した。その激戦を生き抜いた僕の父は、見廻組の解散後に警察庁の幹部となって、再結成した真選組と共に今この時も江戸の治安を守っていることだろう。しかし、僕はアンタ達のすべてを受け入れたわけではない。個人的に許せないことが、真選組に対してあるんだよ！」

近藤の疑問に対して答えを返したミツルギは、怒りと屈辱に満ちた表情を浮かべる。その原因を伝えるために、銀魂世界で起きた回想を始めた。

あれはミツルギが中学生の頃だった。

エリート一家に生まれた彼は、優秀な父と同じように見廻組の幹部となるべく、日々研鑽を積んでいた。その一環として、知識と見聞を広げるために多くの攘夷浪士が潜伏しているかぶき町へと足を運んだのだが、そこでアイツに出会ってしまった。少女に首輪を付けた挙げ句、鎖のリードで拘束し、ペットのようになげている沖田総悟に……。

『よう、うららちゃん。俺とのデートは楽しいかい？』

『はい、もちろんですご主人様。あなたのメス猫になれて、私はとても幸せです』

「これのどこがデートなんだアアアアアッ!？」

回想を聞いていたカズマが、すかさずつつこみを入れる。デート中の少女をメス猫の

ように扱う様を見せられたら、Sっ気のあるクズマさんでも流石にドン引きである。

「あー、うららちゃんがいるってことは、新八君がメインを張った【文通篇】の話かあー。結構前のヤツだから、なんか懐かしいなあー」

「懐かしいで済まないだろう!?! 仮にも警察官となった者が、あそこまで倫理に反する野蛮な行為を人前でするか普通!?! 常識を持った人間としても、見廻組幹部の息子としても、彼の蛮行を見過ごすわけにはいかなかったんだ!」

正義の怒りに燃えたミツルギ少年は、無謀にも最凶のドSに突つかかってしまった。それが、彼と真選組を結ぶ因縁の始まりとなった。

『真選組の沖田総悟! いたいけな少女に対して、なんて酷い仕打ちを……!』

『ご主人様に向かつて、なに失礼な口きいとんのじゃワレエエエツ!』

『ぐぼはあああああつ!』

「総悟じゃなくて、うららちゃんが攻撃して来たーっ!」

この時すでに調教済みだった少女は、敵意を向けてきたミツルギ少年を反射的に迎撃した。救いを求めていると思っていた当人から攻撃されて、憐れなミツルギ少年は涙目で混乱する。

『えっ? えっ? なんで?! どうして君が僕を殴るの?! 僕は君をドSから助けようとしていたのに!』

『そんなことも分からねえで突つかかってきたのかイ？ これだから童貞君は女に嫌われるんできア』

『ご主人様の言う通りよ。心の底から喜んでメス猫になったというのに、私の気持ちも理解しないで助けようとしていたなんて、どうしようもないくらいに滑稽な坊やねえ(笑)』

『つまりは、そういうことなんで。女を知らねえ童貞君は、T o L O V E する読んで勉強して来な(笑)』

『うっ、うっ、うわあーんっ！ 覚えてろよオオオオオオッ！』

『これでもかかって言わんばかりに言い負かされてるウウウウウッ!? こんなのをしたら俺でも恨むわ!』

勝ち組かと思われたミツルギに、そのような黒歴史があつたとは。いくらイケメンがキライでも、同じ童貞であるカズマとしては同情を禁じ得ない。

しかも、ミツルギのバッドストーリーはまだ終わっていなかった。

「沖田総悟だけじゃない！ 僕の心に傷を残した真選組のクズヤローはもう一人いるんだ！」

そう言つてハンサムな顔に悔しさを滲ませたミツルギは、再び回想を始めた。



あれはミツルギが中学生の頃だった。

沖田によつて恥ずかしい目にあわされたミツルギ少年は、反撃をするための情報集めを始めた。普段から素行の悪い真選組を調べれば、絶対ボロを出すに違いない。そう思つて、彼らがよくブラつているかぶき町を探っていたら、副長の土方がコンビ二でエロ本を買つている現場に遭遇することができた。

『どうとう馬脚を表したな、土方十四郎！ 勤務中にエロ本を買うなんて士道不覚悟だぞー！』

『ああ？ なんだこのクソガキは？ 俺は今、エロ本を読みながら猫を探してる最中だから、土方さんに用事があんなら、只今絶賛連載中の「魂入れ替わり篇」が終わった後にしといてくれや』

「オイオイオイツ!? これつてトシじゃないんじゃね!? 万事屋の魂が入つてるドSモードの偽トシじゃね!」

土方の口から吐かれたメタなセリフで近藤はティンと来た。これはアレだよ、源外の作つたカラクリのせいで銀時と土方の魂が入れ替わつてしまった時のヤツだ。それに巻き込まれた長谷川も、すぐに気づいてため息をつく。

「あーアレかあー。後半部分はモザイクだらけで手抜きにしか見えなかった、あの問題作かあー。あん時はこの俺も、定春のウンコにされるわグラサンになった山崎とフェー

ジョンするわけで、随分と酷い目にあわされたっけなあー」

「酷い目にあわされたのは僕の方なだけどろ!」

今も昔も裏事情を知らないミツルギは、土方の魂が別人に入れ替わっているなどとは知らずに回想を続ける。

『訳の分からないことを言つて煙に巻くつもりか!?! お前がエロ本を買つてる姿は、この携帯で撮影してるぞ!』

『おいおい少年、それはマズイぜ。お仕事中的お巡りさんを無断でつけ回した上に、盗撮した画像を使つて恐喝行為に及ぶなんて、ストーカーと変わらねえじゃん。テメエぐらいのクソガキからそんな汚えマネしてつと、ウチで飼つてる近藤みてえなゴミクズ変態クソゴリラになつちやいますよコノヤロー』

『やつ、ヤメロオオオオオオツ!! あんな変態クソゴリラと同列に見られるくらいなら、不正行為を笑いながら見逃す方がまだマシダアアアアアアツ!!』

「そこまで俺は嫌われてんのおーつ!! 確かに変態ゴリラだけど、これでも局長なんだけど!?! つーか、万事屋なやつてんだよ!?! トシに恥をかかせた挙げ句に、さらつと俺をデイスんじやねえーつ!?!」

痛いところを突かれてダメージを受けるミツルギ少年と変態クソゴリラ。エロ本を買つていた時点でアウトなのにもかかわらず、相手に罪悪感を与える言葉を重ねること

で立場を逆転させてみせる。中坊レベルの優等生ではDSの口撃には敵わなかった。

『それよか、ソツチはどうなんだよ？ 俺は大の大人だからエロ本買つても問題ねえけど、ようやくチ○コに毛が生えてオナ○ーを覚えたばかりのテメエが買つたら、ご両親に報告もんの大問題だぜえ〜？』

『なつ、なにを言っているっ!?! この僕がそんなものを買つたりなんてするわけないだろ!?!』

『まあ、テメエみてえなムツツリスケベは、そんなところだろうなあ。エロ本も買えねえ童貞君は、T○ L○V○E○る読んでハッスルしてな（笑）』

『そんなに僕はT○ L○V○E○る好きな童貞に見えるのかアアアアア!?!』

「つーか、お前ら揃いも揃ってT○ L○V○E○るを何だと思つてやがんだ!?! 俺達のリビドーを満たしてくれる名作を敬えエエエエツ!」

T○ L○V○E○るを褒め称えるカズマの主張はともかくとして、偶然トラウマを刺激されたミツルギ少年は、土方（in 銀時）の前から逃げ出した。

こうして彼は、至極個人的な理由により真選組に対して悪感情を抱くようになり、あいつらのようにはなるまいと自意識過剰な正義感を増長させるのだった……。

後味の悪い回想を聞かされて、カズマを始めとする転生組はやるせない気持ちにな

る。また、部分的に理解できためぐみんも、DSに溢れた真選組という組織に恐れおののく。

「ま、まさか、ギントキクラスのDS野郎がまだ二人もいるなんて……。ええい、真選組の隊員は化け物か!？」

「ガンダムにビビってるシヤアみてえなこと言ってるけど、半分は誤解だから!？」 本物のトシの方は、ただのマヨラーだからね!？」

沖田の行為は弁護不可能だが、土方の汚名だけはそそいでやる優しいゴリラであった。

それでも、頑なに真選組を嫌うミツルギの心を変えることはできず、近藤と行動しているカズマとめぐみんを引き抜きにかかってきた。

「なあ君達。こんな野蠻で変態なクソゴリラは放置して僕のパーティに入らないか？」

見れば君は僕と同じ転生者のようだし、そちらの少女はアークウイザードだから、こちらとしても申し分ない。いや、この僕と君達が力を合わせて戦えば、必ずや最強の勇者パーティとして名を馳せることだろう!？」

「ねえちよつと!？」 グラサンをかけたオツサンがそこに入っていないんだけど!？」 マダオの俺は勇者の仲間に入れてくれねえの!？」

残念ながら、長谷川だけは最初からアウトオブ眼中だった。その点はお約束なので、

なんら不思議なことでもないが、カズマの扱いがやたらと普通なところは意外な展開である。

「アレ、なにこれおかしいな。イケメン君に誘われるとか違和感しかないんだけど。アクアのバカがないお陰で俺の待遇が良くなった気がするの、なぜ？」

《ふーヤレヤレ。何を言い出したかと思えば、キミの待遇が良くなっただつて？ そんなことあるわけないじゃん。アクアの他にもヤバい奴がいるつてのに、童貞君は可愛いいこと（笑）》

「（今の話に童貞関係無えーだろオイ!? つーか、今なんて言った!? アクアの他にもヤバい奴つて、まさか……）」

ノルンのセリフからイヤな予感がしたカズマであったが、それを察しているかのようにくぐみんがフラグを立てる。奇妙とも言えるカズマの厚待遇は、更なるアクシデントが発生する前フリだったのだ。

「ふつ、最強のアークウィザードたるこの私の才能に目を付けたことは誉めてあげましょう。だがしかし、私はあなたのパーティーに入ることはできません。なぜならば、もうすでに最凶の遊び人とパーティーを組んでいるからです！」

「……へ? さいきよようの遊び人?」

唐突に放たれた奇妙な単語に首をかしげるミツルギ君。果たして、遊び人とはなんな

のか。答えを求めてめぐみんに質問しようとしたその時、彼らの後方辺りから異様な騒ぎが巻き起こる。

「な、なんだありや!?! あの子達はナニやってんだ!?!」

「ちよつと、なにアレ? 犯罪かしら?」

「それはどうかな……。すつごい嬉しそうな顔してるし」

「もしかすると、そういうプレイなのかもしれない」

「ま、マジかよ……。実際にあんなプレイをする勇者がいるとは思わなかったぜ……」

聞いてみると、おかしな情報ばかりが入ってくる。どうやら、いかがわしいプレイをしている連中がこちらに向かつて来ているようだが、その予想は当たっていた。

クズを見るような目をした観衆を左右に分けながらこちらに近づいてきたのは、顔を引きつらせた銀時だった。彼の様子がおかしいのは、一緒にいるアクアとダクネスに理由があった。なぜか二人は、銀時の隣を盛りのついたメス犬のように四つん這いになって歩いているのだ。

「「オリに入れてた時よりも悪化してんじやねえーかアアアアアアアッ!?!」」

「ちなみに、ノーパンのアクアが四つん這いになったら『R—18的なヤツがモロに見えちやうんじやね?』と思うだろうが、そこは心配しないでくれ。ダクネスをパシらせてゲットした水玉パンツを履かせてあるから、いつも大変お世話になってるモザイクもい

らないぜ?」

「あーそれなら大丈夫、なんてならねえーよ!」 R-18は回避したけど、別の意味でアウトだろコレ!?! せつかくのお色気なのにキャラ設定がクソ過ぎて、まったくムラムラしてこねえよ!?!」

いち早く衝撃から立ち直ったカズマが突っ込む。その反対に、耐性が無いめぐみんやクレメア達は呆気に取られて押し黙り、沖田の時のトラウマを刺激されたミツルギはフリーズしてしまっている。

それほどまでに、アクアとダクネスはメス犬と化していた。

「くうーん、くうーん!」

「はっ、はっ、はっ、はっ!」

「すっかり調教されてるウウウウウツ!? オリから出せれば良かっただけなのに、どうしてこうなった!?!」

「あーいやね。あれから俺は、傷ついたアクアを立ち直らせるために懸命なケアを続けていたんだけどさあー。愛のこもったラブウィップにハマったコイツが、ムチを入れるたびにやたらとイイ反応をするもんだから、ついこっちも熱が入っちゃってねえー……。気がついたら、こんなんだった」

「こんなんだった、じゃねえーだろうが!?! ただでさえ、面倒なヤツと揉めてる最中

だつてのに、更に燃料ぶつ込むようなマネしてんじやねえーっ!!」

可愛らしい仕草で甘えるアクア達にイラツと来たカズマは、多少の嫉妬を込めながら銀時に怒鳴り散らす。その声で我に帰つたためぐみんは、気になったことを聞いてみた。

「ところでギントキ、どうしてダクネスまで調教したのですか?」

「いいや、コイツにやしてねえよ? このドMは、アクアに対抗してるだけのナチュラルなメス犬だ」

「はあつ、はあつ! まさか、アクアにこれほどまでの才能があつたとは! いいだろう

! 今からお前を私のライバルと認めてやる!」

「そんなスポーツマンガ的な爽やかな展開じゃないんだけど!」

ダクネスの事情を聞いたら、気持ちの悪いスポ根のような話になってイラついた。

だが、面倒なことにミツルギにとつてはそれだけでは済まなかつた。不意に聞こえてきた「アクア」という個人名によってトラウマから覚醒した彼は、とうとう気づいてしまった。目の前でメス犬と化している女神様の存在に……。

「めっ、めっ、めっ、めっ、女神様アアアアアアアツ!! 天界にいるはずのあなたが、なぜこんな辺境の街に!?! っていうか、これはどういう状況ですか!?! そんな犬みたいなマネをして、あなたは一体ナニをやっているのですかああああああつ!!」

「ウウーッ! ワンッワンッ! ガルルルルッ!」



「まともな質問してるのに、めっちゃ威嚇されてるうーっ!?　っーか、言語の方まで犬化しちやってるんですけど、メス犬の意味間違えてんだろ!？」

変な方向にドM化したアクアにはミツルギの言葉が届かなかった。そもそも、彼女は転生者に対して道端の石ころほどの興味も無いのだが、それを知らないミツルギ君は、銀時の存在に疑いを向ける。もしかすると、女神様は、あの男によって洗脳されてしまったのではないか。そんな勝手な想像を自己中心的に思い描いた瞬間、正義の怒りを爆発させて鬼畜なドSに襲いかかった。

「この腐れ外道がアアアアアアアアアアッ!?　純真無垢な女神様に一体ナニをし「ゴツドブロー・マキシマムツ!!」ぐぼはああああああつ!？」

「女神様のフィニッシュブローがカウンターで決まったーっ!?!　っーかコレ、うららちちゃんの時と同じオチじゃね!？」

憐れなミツルギは、再び助けようとした女性にぶっ飛ばされてしまった。無謀にもドSの女(笑)に手を出そうとした報いである。

「残念だったな、通り魔野郎!　俺のスタンドを前にして、お前は近づくことすらできねえ!　従順なメス犬が縄張りを構築し、そこに侵入してくるすべての敵を見境なく攻撃する。俺のスタンド「ザ・ビッチ」の能力は世界一イイイイイッ!」

「そんなスタンドあるわけねえーだろ!?　ドMが勝手にご主人様を守ってるだけじゃ

ねえーか!」

被害者ぶつた銀時は、駄女神の暴力行為を適当な言い訳で正当化しようとする。実際に、半分くらいは正当防衛なのだが、クレメアとフィオから見れば銀時側の方が悪にしか見えないので、当然ながら抗議してくる。

「なに考えてるのよアンタ達!?! 正しいことをしようとしたキョウヤを殴るなんて酷いじゃない!」

「クレメアの言う通りよ! 公共の場でいかがわしいことをしてるアンタ達なんか、キョウヤにお仕置きされるべきだわ!」

「はあ? そつちこそなに言ってるの? こつちの事情も確かめずに、いきなり殴りかかって来るとか、キョウヤ君とやらの方が常識的におかしいだろう? それともナニか? 君達は、ここにいるカズマ君が突然襲ってきたとしても、抵抗せずにおっぱいをモミモミさせてやんのかあ?」

「キヤーツ!? 近寄らないで変態スケベ!」

「マジでやるわけねえーだろうが!?! つーか、そんなにおっぱいをモミたそうに見えるのか!?!」

カズマを生け贄に使いながら、うるさい取り巻きを言い負かす。最低な内容でも一応筋は通っており、アクアに殴られた衝撃で怒りから覚めたミツルギも、歯ぎしりしてい

る少女達を見て冷静になる。

「た、確かに、こちらにも非はあった。まずは始めに、そちらの事情を聞くべきだったな。では、改めて女神様にお尋ねします。なぜ、女神であるあなたが、こんなところでこんなドSとおかしなマネをしているのですか？」

「ワン、ワワン？ ああ、そうだワン！ 私は女神だったワン！」

「そんなことも忘れてたのかよ!? つーか、語尾が戻ってねえぞ?！」

「あらあら、私としたことが……。で？ そこにいる通り魔君は、女神の私がここにいる事情を聞きたいってわけね？」

「僕は通り魔じゃありませんよ!? あなたから魔剣グラムを頂いた、御剣響夜です!!」

散々酷い目にあつた後で、ようやくミツルギは自己紹介ができた。

だが、肝心のアクアの方は、転生者の名前などいちいち覚えちゃいけないので、適当に受け流す。

「あー、はいはいミツルギ君ねー。魔王退治のお仕事オツツ。そんなことより、さっきの話よ！ アンタはなんか勘違いしているようだけど、私は今、喜んで銀時のドSプレイを受け入れているの！ そりゃあ、初めはイヤだったわ！ 転生特典として無理矢理地上に連れてこられて、何度もカエルに食われされたり、借金の取り立て屋に追いかけられたり、オリに閉じ込められてワニのいる湖に放り込まれたり、今思い返しても悲惨

な思い出しかないわ!」

「なっ、なっ、なっ?!」なんて酷い男なんだあーっ?!」

「いや、借金のとこだけは冤罪なんですけど!」

「そんな違いは些末なことよ! 冤罪だろうとなんだらうと、この男がドSのクズであるという事実は決して変わらないわ! でも、それは私にとつて必然だったの。彼と共に生きていくその辛さこそが私の幸せなんだって、ようやく気がついたのよ。私は尊い女神だけど、女としての幸せを捨てることもできない罪深きメス犬……。だから消えて!?! 今すぐ消えて!?! 私の主を奪うヤツは、みーんなみんな消えてちようだい!?!」

「急にヤンデレ化しやがったアアアアアアッ!?!」

ようやく会話ができるようになったものの、内容的にはお話にならない状態だった。銀時との生活を楽しんでいるのは本当なのだが、言い方がアレ過ぎて正しく伝わらなかった。

だから、ミツルギはこう思った。やはり、このドSこそがすべての元凶であり、自分の手でコイツを倒して、騙されている女神様を救わなければならないと。

「女神に仇なす不埒者め! 魔剣の勇者・御剣響夜が、貴様に決闘を申し込む!」

「はあく決闘? めんどくせえ……」

「もしや、おじけついたのでか? この僕は、国中で有名なソードマスターだから無理もな

いが、女神様の命運がかかったこの決闘だけは絶対に受けてもらおうぞ！」

魔剣グラムを鞘から抜くと、鼻をほじっている銀時に向ける。緊張感は微妙だけど、バトルは回避できそうもない。

《だいじょーぶだよカズマ君。主人公から転げ落ちた君の出番は微塵も無いから！》

「（それはそれで悲しいんですけど!?!）」

一人静かに落ち込むカズマ。

そんな彼を他所にめぐみんとダクネスは興奮するが、この手のイベントに懲りている近藤達は反対してきた。

「あんなスカしたエリート野郎、パパッとやっってくださいよ！ なんなら私が、爆裂魔法でトドメをさしてあげましょう！」

「我が主よ、私からもお願いする！ アクアを狙う通り魔のクセに、女騎士を狙わないよ。うな非常識な者にはお仕置きが必要だ！」

「お前らの方こそ非常識じゃねーか!? 爆裂狂のロリっ子と四つん這いのドMなんか無視してくれよ、銀さん!?!」

「そうだ、キョウヤ君も止めなさい！ ドSなんかと関わっても、ドM以外にメリットは無いぞおーっ！」

「ええい、外野は黙っててくれないか!? これはサムライとしての真剣勝負なんだ!!」

ギャーギャー騒ぐ観客にミツルギがキレる。その時に発したサムライという単語を聞いて、気まぐれな銀時にもやる気が出て来る。

「そこまで言われちゃあ、サムライマンガの主人公としては黙ってるわけにもいかねえか。だが、やる前に一つだけ聞かせろ。お前にはあるのか？ 相手のすべてを奪う覚悟と自分のすべてを奪われる覚悟が」

「っ!?! 奪う覚悟と奪われる覚悟……」

「決闘つてのは、戦う相手の大切なものを奪い合う行為であり、そこに慈悲など入り込む余地は無い。それでもお前は、己のすべてをかけて俺とやりあうのか？」

「……ああ、やるさ！ 僕だって、サムライの家に生まれた男だ！ 女神様を救うためなら、命だって惜しくはない！ 無論、貴様なんかには負けるつもりは無いがな！」

「あーそうかい。だったら、いっちょよやりますか」

珍しく真面目な会話をする遊び人を見て、仲間達はちよつぱり見直した。この子もやればできるじゃない。

だが、それはヤツの罠であった。『すべてを奪ってもいい』という言葉を取ることでSの目的だったのだ。傍迷惑な決闘をこの俺に願うというなら、相応の謝礼をいただくまでだ。

「(だってほら、願いを叶えてやるからには代償が必要だろ？ 魔法少女がキュウベえに

払っているようになあ!」

あの白い悪魔を口実に使うとは、まさに外道である。いやらしい笑みを浮かべながら洞爺湖を構える銀時に対して、なにも知らないミツルギが自ら深みにはまってしまう。

「なんだその木刀は!? 貴様はそんなもので魔剣グラムと戦う気か!」

「はっ、俺がナニを使おうとこつちの勝手だろうが? グラムだかグラハム・エーカーだか知らねえが、さっさと自慢の魔剣とやらを構えろやミツツイー」

「言われるまでもない! っていうか、ミツツイーって呼ぶな!」

煽られたミツルギが怒りながら剣を構える。その動作が終わった直後に、銀時はこうつぶやいた。

「【トライアングルホース】(小声)」

「ん、なんだ? 今、なにか言ったぎやああああああああああつ!」

銀時の怪しい行動に気づいたが、時すでに遅し。地面から飛び出してきた三角木馬が、無防備なミツルギの股間にクリティカルヒットする。

「【き、汚エエエエエエツ!】」

観戦していた者達全員が同じ感想を抱く。

だが、これこそ遊び人の戦い方だ。初見殺しのような卑怯技ではあるが、スキルを使っただけである以上、たとえ汚く見えたとしてもルールには反していない。結局は、

ミツルギ自身の油断が招いた失敗であり、悶絶して動けなくなった彼は、洞爺湖で頭をぶん殴られて気絶した。

「こーんの未熟者があーっ！ 相手が剣士だと思い込むから、股間に隙が生まれるのだあーっ！」

「いや、剣士じゃなくても股間を狙ったりしないんだけど!? どんだけ最低な決闘イベントなんだよコレ!?!」

激戦が予想されてたけど一瞬で終わりました！

後は、敗者のミツルギから、約束通り奪い取るだけである。三角木馬から落ちて地面に寝転がったカモに向かって、飢えたケダモノと化した銀時とアクアが襲いかかる。

「それじゃあ俺は、敗者から魔剣と財布を奪っていくぜえーっ!」

「だつたら私は、高値で売れそうな鎧と服を奪っていくわあーっ!」

「持ち物一式奪っていくとか、マジで容赦ねえーっ!?!」

「言わんこつちやない。だから、あんだだけ止めたのに……」

嬉々として戦利品を貪るDSと駄女神の蛮行に、周囲の人々は啞然とする。

そんな中、いち早く再起動したクレミアとフィオが止めに入った。

「まつ、待ちなさいよ卑怯者!?! 冒険者のプライドをかけた真剣な決闘なのに、キョウヤの一番大事なトコロを真っ先に攻撃するなんて、どう考えても反則よっ!!」



「あんな決闘、無効だわ！　ちゃんとした勝負ができれば、卑怯者のアンタなんかキョウヤの敵じゃないんだからっ！　彼から奪い散った物を今すぐ返しなさいっ！」

「はっ！　何を言うかと思えば……。そちらの方こそ、卑怯な言いがかりはよしてくれたまえ。俺は事前にミッツィー君が承諾した条件通りに戦って、その結果、勝者の権利として相手の物を奪い取っただけ……。ああ、そうだよ！　奪ってやったよ！　女神様から貰った魔剣とやらで、すっぴん装備の遊び人をぶった切ろうとした勇者様の、クソつたれなプライドをなあーっ!？」

「プークスクスー！　魔剣の力に頼りきったヘツポコ勇者には良い葉じゃないかしら？　ギントキ以外に負けていたら、死んでいたかもしれないんですもの。今回は、命とトランクスを奪われなかっただけありがたいと思いなさい？」

「キツ、キイイイイイツ！」

「なんてムカつく奴らなのおっ!？」

言い負かされたクレメアとフィオは、悔しさのあまりに地団駄を踏む。一部始終を見ていた観衆は、ドSにイビられていている少女達に同情したが、ミツルギ本人が承諾していたことなので異論を挟むこともできない。今、この空間はドSゾーンの支配下にあつた。

「よーし！　奪うもんも奪ったし、イベントも終わったから、撤収すっぞお前ら〜！」

「ちよつと待ってよ銀時〜！ 奪い取った装備品をさつさと売つぱらいたいから、先にお店へいきましよう？」

周囲の空気を気にせずにバカ兄妹が帰ろうとする。そんな彼らの様子を見て、めぐみんは肩をすくめ、ダクネスは興奮し、カズマは疲れた顔をする。

「マジにクズ過ぎて正直同類だと思われたくはありませんが、あのスカした野郎をぶっ飛ばしてくれたから、ちよつとだけスカツとしました」

「ああ、そうだな。人前でアソコを攻撃されるなんて、見事なやられっぷりであった。もし同じことを私もされたら、スカツとするだろうな！」

「スカツとしないでムラツとするわ!? つーか、もうツツコミし過ぎて疲れたから、さつさと帰ろうぜ……」

変な原因で疲労したので、早く帰りたいとめぐみん達を急かす。

そこへ、まだ諦めていないクレメア達が立ち塞がる。

「ちよつと、どこへ行くつもりよ!? キョウヤから奪い散った物を返してから行きなさいよー！」

「そうよ、置いていきなさい！ アンタみたいなドS野郎がその魔剣を持っていてもまったく意味は無いんだから！ その魔剣は、持ち主に選んだキョウヤにしか使いこなせないのよ!?!」

「えっ、そーなの？ 参ったなー。でも、剣には違いないから【なげる】のコマンドでモンスターに投げつけなければいいんじゃないやね？」

「魔剣を投げるなアアアアアアッ!?!」

とんでもないことを言い出した遊び人にクレメア達が慌て出し、思わず武器を手にとり取ってしまう。

「こ、こーうなったら、私達が戦ってでも!」

「おお、なんだやる気か嬢ちゃん？ カズマさんを相手にするたあ、なかなか度胸があるじゃねえか？ コイツのステイールに狙われたら、衆人環視のド真ん中でパンツを奪われちまうぜえ〜?」

「キヤーツ!?! 近寄らないでパンツ泥棒!?!」

「だから、なんで決めつけんだよ!?! ドSの言葉を信じ過ぎだろ!?! ケンカしてるフリしといて、実はお前ら仲良しなんじゃね!?!」

締めのおチに使われたカズマは、結局、原作と同じようにパンツ泥棒のレッテル(?)を張られるのであった。

《君の尊い犠牲(笑)によってバトルを回避できたんだから、めでたしめでたしだね☆》  
「(これっぽっちもめでたくねえよ!?! 俺が変態って認識は回避できてねえーじゃねえか!?!)」

ノルンに抗議するカズマであったが、大体は当たっているので意味は無かった。



風雲再起とオリを砦に返してきたカズマ達は、風呂で汗を流してからギルドに集まった。鎧と服を売って来たアクアも後から合流して、調子に乗った勢いで祝勝会を始めた。

「今夜は私の奢りよ、みんな！ クエストクリアの報酬に加えて、ドロップアイテムを換金して得た200万エリスもあるんだから、ジャンジャンバリバリ行くわよーっ！」

「「「ゴチになります女神様！」」」

無計画な駄女神は、早速散財をやり始めた。恐らく、今回の収入も数日で消えるだろう。

仲良くなった近藤と一緒に宴会芸で盛り上がるアクアの様子を蔑んだ目で見ていたカズマは、さっさと気持ちを切り替えて銀時に話しかけた。彼には気になることがあったからだ。

「なあ銀さん。なんでその魔剣を売らなかつたんだ？ ミツルギってヤツ以外には使いきなせないって話だけど」

「だから売らなかつたのさ。それほどまでに貴重なもんなら、あのクソガキが取り戻しに来るだろうからな。その時にぼるだけぼって、そこらの店で売つばらうより高値で買わせてやるんだよ」

「あーなるほど、そーいうことか。普通にお店で売ろうとしてた俺よりもクスですね」

ドSな企みを聞いて即座に納得する。一応、ミツルギに魔剣を返してあげようという気持ちも含まれているのだが、当然ながらタダで返す訳もない。傍で聞いていためぐみん達も、銀時らしいと同意する。

「リーダーとしてはアレですが、相手の弱点を容赦無く突いていく悪魔的なスタイルは、そんなに嫌いではありませんよ。人間とは、光と闇を合わせ持った歪んだ存在なのですから……」

「ああ、そうだな！ やはり、我が主は最高に歪んだサディストだ！ 卑怯な手で奪い取った物を奪われた本人に高額で買わせようだななんて、真のドSでしか思いつかない発想だぞー！」

「おいおい、止めろよ二人とも。そんなに俺を誉めたつてオナラしか出てこねえぞ？」  
「誉めてる要素が無えつつーか、マジでオナラすんじゃないやねえーっ!」

悪びれもしないドSに毒ガスを食らわされて、カズマ達は悶絶する。

そんな周囲の騒ぎには参加せず、ひたすら食事を貪り食っていた長谷川は、こちらに

近づいてくる人物に気がついた。

「随分と景気がいいな」

「ん〜？ 一体誰だ……つて、將軍様!? それと君は、トランクス一丁にされてたミツル

ギ君じゃねえーか!？」

「今はちゃんと着替えてるよ!？」

声をかけられたのでそちらに向くと、そこには茂茂とミツルギパーティーがいた。ウイズの店から帰る途中だった茂茂は、銀時を探していた彼らと偶然再会したのである。

「おいおいまさか、ドラえもんに泣きつくのび太のように、DSなジャイアンにやられたーつて告げ口したんですかあ？」

「ちつ、違います! 將軍様とは偶然会って、事情を説明している内にあなたのことを聞かせてもらったんです!」

勘違いされたミツルギが慌てて弁解する。やられる前とは違って敬語を使っているのには、もちろん理由がある。

「坂田銀時さん……あなたの素性は將軍様から聞かせていただきました。江戸を救った英雄にあのような無礼を働き、誠に申し訳ありませんでした!!」

そう言つて潔く頭を下げる。その意外な光景に、宴会芸をしていたバカ達も手を休めて経緯を見守る。

「よせよミツツイー。俺あ別に英雄なんて呼ばれるようなご大層なもんじゃあねえよ。ただ、自分らしくいられる場所を守りたくて足掻いてただけさ」

「ははっ、信女さんの言っていた通りのお方だ」

「なんだお前。あのドーナツ狂の知り合いなのか？」

「はい、父の仕事の関係で話す機会がありました。その時に、アルタナを巡る戦争のあらましを聞かせてもらいました。あの戦いの本質は、国を救うとかいう大層な話じゃない。天パのドSと愉快な仲間が、キャバクラ、パチンコ、〇〇〇といった自分らしくいられる場所を守るために暴れただけの単純な話だっつて」

「どう聞いても英雄要素が無いんだけど!? あの女、マンガに描かれてないところで、こっさり俺をデイスつてたのかよ!? 今度会ったら、目の前でドーナツ食いまくつてやんぞクソが!」

あまりに的確な説明のせいでデイスつてるようにしか聞こえなかった。

それでも、ミツルギは確信した。茂茂や今井信女が信頼するこの男は、本当に英雄と呼ぶべきサムライなのだということ。

「動機はともかく、あなたはその木刀だけで国を救って見せた。だから僕も、魔剣の力に頼ることを止めようと思います」

「ええっ!? この魔剣いらないの!？」

「はい、僕は決めました。魔剣に頼ってばかりいては本当の強さは身に付かない。ならばいっそ、地道にレベルを上げまくって、ひのきのぼうでも魔王を殴り殺せる勇者になつてみせよう！」

「いや、そんな武器で殺されたら流石に魔王が可哀想だろ!」

魔剣を高値で売り付ける汚い目論見がハズレてしまい、遊び人が慌て始める。まさか、あのミツルギ君が、きれいなジャイアンのようになって戻つて来るとは。

しかも、きれいなミツルギは意外な願いを申し出てきた。

「僕は今すぐ王都に戻つて、魔王軍と戦っている最前線でレベル上げをするつもりです。でも、その前に、あなたと剣で真剣勝負をさせていただきたいのです! 江戸を救つたサムライの実力を知るために!」

そう言つて、まっすぐに見つめてくるミツルギの視線には邪念が感じられなかった。余計なプライドを奪われて一皮剥けたのかもしれない。

そんな彼に銀時は、新八の姿を被らせる。

「顔面偏差値は月とスッポンだが、童貞臭え純粹さはアイツを思い出させやがる」

不意に懐かしい顔が浮かび、DSの邪念も薄らいでいく。まあ、戦場へ行くと言ふのなら、餞別代わりに剣術の練習くらい付き合つてやつてもいいだろう。

「つたく、仕方ねえ。希望通りに相手をしてやつからコイツを使え」



「えっ、魔剣グラムをですか!?」でも、これはもう……」

「ええい、ウダウダ言うんじやねえーっ! ひのきのぼうで殺せるほど魔王様は甘くねえぞ! 大体、勇者が最強の武器を捨てるとか、システムのできねえだろう!! いかからコイツを持つてけ泥棒! お前らは女神が認めたお似合いカップルなんだから、もう二度と別れたりするんじやねえーぞおーっ!! 分かったかっ!!」

「は、はいいーっ!? さつきは、いらなんて酷いことを言つて本当にごめんよ、グラム! 今度はもう絶対に君を放さないからっ!」

「えっ、ナニコレ!? なんで急に、恋人の仲を取り持つみたいなの展開になつてんの!? ってか、グラムさんを寝取つたのは万事屋自身なんだけど!? ミツルギ君はそれでいいの!?!」

ドラクエ的なノリで魔剣を返してしまつた銀時に、近藤が突つ込む。流石に、魔剣を手放したせいで死なれたとあっちゃあ、銀時としても寝覚めが悪かつたのだ。それを回避しようとした結果が今の茶番なのだが、めぐみやアクア達はなぜか感動していた。「ちよつと恐怖を感じるようなヤバイ話でしたが、なぜだか心にグツと来るものがありますね。ポツチのゆんゆんも、彼のように無機物と仲良くしていましたから、いろんな意味で泣けてきます」

「その気持ちよく分かるわ。私の後輩のエリスつて子も、胸に入れてる底上げパッド

に「アンデイ」と「フランク」って名前を付けてるらしいんだけど、その噂をカグヤ先輩から聞いた時は、思わず笑い泣きしたものよ!」

「な、なんと!? エリス様と同じ名を戴いておきながら、なんて罪深い後輩なんだ!?」だが、同時に羨ましいぞ! そんなにも恥ずかしい秘密を他者に知られてしまうだなんて、最高に痛々しい羞恥プレイではないか!」

「お前らはどこに感動してんだ!?! 俺としては、ゆんゆんとエリス様が可哀想で仕方がないわ!」

《ちなみに、エリスちゃんの名前ネタは完全なる誤解だから!》 パッドの存在を知ったカグヤが勝手に名付けたよって話を、アクアのバカが勘違いして覚えてたってオチだから!?! エリスちゃんの貧乳を侮辱する巨乳共は、このボクが駆逐してやらあーっ(怒)!!》

本人達の知らないところでおかしな悪評が広まっていく現実に恐怖するカズマとノルン。

だが、テンションを下げていく彼らとは反対に、話を聞き付けた周囲の冒険者達は盛り上がり上がっていく。

「なんだなんだ? ケンカでもすんのか?」

「おいおい、またあの天パ野郎じゃねえーか」

「よっしやあ、やったれ！ 酒の肴にはもってこいだぜ！」

「ふつ、魔王の幹部を追い払った白夜叉の相手は、あの有名な魔剣の勇者つてわけか。こいつあ、歴史に残るほどの名勝負になるかもしれないねえな」

モヒカン親父を筆頭に観衆が集まってくる。騒ぎを聞き付けたルナが慌ててこちらにやって来るが、当の二人がやる気な以上は流れに乗っていくしかない。そう判断した近藤は、仕方がないといった様子でみんなの前に進み出た。

「それじゃあ、俺が立会人をしてやろう」

「ちよ、ちよつと待ってください！? まさか、またここで戦うつもりですか!?!」

勝手に話を進め始めた迷惑ゴリラに、ルナが抗議をする。そんな彼女に対して茂茂が声をかける。

「すまないが、あの者達の我が儘を許してやってくれないか。もし、ギルドに損害が出た場合は、余がすべての責任を取って全額弁償させてもらう」

「は、はい……。シゲシゲさんが、そこまでおっしゃるのでしたら……」

信頼できる茂茂に説得されて渋々話を受け入れる。どうせ、自分ではコイツらを止めることなどできないのだ。それならいつそ、このイベントを楽しんでやろう。

「もう、やりたきややってもいいですから、死なない程度にしてくださいねっ!!」

「無論、そこまでやる気はないさ。この試合は、寸止めで一本取った方を勝ちとする。そ

れでいいな?」

ルナの許可を得て近藤がルールを決める。こうして、準備はあつさり整い、すぐさま試合が始まった。

「文字数が伸びすぎて作者のやる気もピンチだから、こつからは一気にいくぜえっ!」  
「こちらこそ、望むところです!」

互いに声を掛け合つた直後に激しい剣舞が巻き起こる。その攻防はあまりに見事で、美しさすら感じさせた。

特に、クレメアとフィオにとつては信じられない光景であり、ミツルギと互角以上の戦いをしている遊び人に驚愕する。

「なっ、なんなのよアイツは!? 本気になったキョウヤと、ここまで戦えるなんて……」  
「卑怯な手しか使えないチンピラだと思つていたのに!」

「ふっふっふっ! ようやく思い知りましたか? あの程度のエリート勇者ごときでは、女神ですらメス犬にするDＳの大魔王には勝てないということを!」

「勇者なんて、所詮はゲームの中だけでしか存在できない空想上の理想像。現実という名の生き地獄では、救いようなないクズの方が勝ち組になるモンなのよ!」

「オイオイオイツ!! 自慢してるようで貶してますけど!! 主人公のパーティが一番クズとかイヤ過ぎるわ!」

観戦しているめぐみん達にもおかしな熱が入って来る。

無論、それは当事者である銀時達も同じだ。

「へっ！ 魔剣の勇者と言うだけあって、なかなかの腕前だ！ こんだけやれりやあ、ベルディアとかいうノゾキ魔にも勝てるかもしれねえな！」

「くっ！ そう言ってもらえるのは嬉しいですが、ノゾキ魔ってなんですか!？」

さりげなくベルディアの評判を下げながら、紙一重の勝負を続ける。

銀時の見たところ、ミツルギの実力はかなりのものだ。アイリス王女の護衛をしていたクレアよりも強いのは間違いなく、剣だけの戦いならベルディアにも対抗できると思われる。

それでもまだ、目に前にいるサムライの敵ではない。

「お前の実力も分かってきたし、そろそろこっちから攻めてくぜ！」

「なっ、ぐはあ!？ そんなまさか!？ こうまで僕が押されるなんて!？」

グラムの装備効果によって力も速さも上がっているのに、鋭さを増していく銀時の攻撃に対応しきれない。単純なステータスの違いよりも、その使い方にこそ熟練者との差があるのだ。こちらの世界のスキルシステムでは埋められない実力差が、二人の間に存在していた。

「確かに、お前は強かった。でも、まだまだだね！」

勝機を得た銀時は、一気に勝負を決めようとする。攻撃の最中で隙を見出だし、降り下ろした直後のグラムを弾き飛ばそうとした。その動作を切っ掛けにして、思いもしない悲劇が起きる。

パツキーンツ!!

「あ」

銀時の攻撃が当たると同時に甲高い音が鳴り響き、グラムの刃が中程で折れてしまった。洞爺湖が折れたらイヤだなーと思つて妖刀・星砕を使つたらグラムの方が折れちゃつたのだ。

しかも、悲劇はまだ続く。折れてしまった剣先がクルクルと回転しながら飛んでいき、観戦していた茂茂の頭に突き刺さつたのである。

「將軍んんんんんんつ!!」

血を噴き出しながらぶつ倒れる茂茂を見て、当然ながら大騒ぎとなる。

「將軍様の頭に剣が刺さつたアアアアアツ!!」

「キヤーツ、これマジでどうしよう!! もしウイズにバレちゃつたら全員殺されちゃうわよおーっ!!」

「そんなことよりベホマを使えや!! いいや、ここはザオリクか!」

肝心の駄女神が一番パニックつてしまい、現場はさらに混乱していく。

だが、今はギャグパート。我に帰ったアクアの魔法で茂茂は復活を果たし、なんとかギリで事なきを得た。

「いや、事なきを得てねえーだろうが!? 將軍ちよつと死にかけてたぞーっ!」

「し、心配は無用であるぞ。なんとなく、エリスと名乗る銀髪の女性と会っていたような気がするのだが、恐らくは夢だろう」

「それ多分、夢じゃないよ!? がつつりあの世に逝きかけてたよ!」

カズマが言っているように、天界へ行っていたような感じである。それでも、茂茂は生きているので、ウイズによるジエノサイドはなんとか回避できそうだ。

ただし、折れてしまったグラムの方は流石に元には戻せない。壊れた愛剣を胸に抱きながらミツルギは泣いてしまう。

「うっうう……。ごめんよグラム。大切な君を守ることができなかつたなんて……。僕はどこまで最低な男なんだあーっ!」

「あーん、泣かないでキョウヤーツ!」

唐突に気まずい空気になり、周囲にいた観客も静かに離れていく。

無論、銀時達も居たたまれなくなり、みんなを代表してめぐみんが文句を言う。

「一体どうしてくれるんですか!? あなたが魔剣を折ったから、んまい棒のようにスツカスカナあの子の心まで折れてしまったではありませんか!」

「おつ、俺は全然悪かねえぞ?! アレはアレだよ!! アクアのバカがアイツに不良品を掴ませたせいだろーが!! コイツは天界の責任だから、アフターサービスってことで、お前がアレを修理しやがれ!」

「私に全部投げてキターツ!! まっ、まあ、銀時がどうしてもって言うのなら挑戦してもいいけどさあー? 私ってば、凶工の成績1だったんですけど?」

「やっぱ止めとけ。余計に壊れる」

残念ながら、どうでもいいことばかり器用なアクアなんかには神器を直せるスキルなんて無かった。あの魔剣は、天界にいる神器職人が特殊な技術を用いて作った貴重な一品なので、地上では修理をすることすら難しい。

ただ、まったく手立てが無いわけでもない。都合良くその方法を知っていた茂茂が、救いの手を差しのべる。

「諦めるにはまだ早いぞ。ウイズ殿の紹介で知り合った「ロン・ベルク」という武器職人なら、あるいは神器を修理できるやもしれん」

「えっ、本当ですか将軍様!?!」

「待って待って待ってえーいつ?! ロン・ベルクなんてほんとにいるのおーっ?! ソイツに修理を頼んだら、魔剣グラムが鎧の魔剣に魔改造されちゃうぞおーっ?!」

確かに、不安は大きいと言わざるを得ない話である。あのウイズの紹介で知り合った



という点も嫌な予感しかない。それでも、今は茂茂の情報に賭けるしかなかった。

こうして、魔剣グラムを失ったミツルギは、新たな力を手に入れるために、伝説の武器職人を求めて旅立っていくのであった。



バカ達がギルドで騒いでいる頃、アクセルに続く草原を進軍するモンスターの集団がいた。それを率いている者は、復讐の炎に燃えるベルディアであった。

「フッフッフッ！ もうすぐだ！ この俺のプライドをズタズタに引き裂いたシゲシゲと銀髪の剣士にリベンジを果たす時が！」

魔王より新たな力を授かって、自信に満ちた魔物は笑う。

「今度こそ、貴様らに見せてやるぞ人間共！ 本気を出した魔王軍の本当の恐ろしさをなあーっ！ ……ところで、俺のパトリシアはなんで戻ってこないんだ？ アイツがないと、行軍すんのがめっちゃ大変なんだけど……」

自分が置いていった愛馬の行方を気にしつつ、ベルディアは徒歩でアクセルを目指すのだった。

## 第27訓 魔王の幹部じゃ大魔王の城は落とせない

ミツルギキョウヤとのイベントがあつた翌日。辺境の街アクセルに最大級の危機が訪れようとしていた。

茂茂の呼び掛けによつてギルドに召集された冒険者達は、司会役を任された近藤から説明を受ける。

「集まってくれた冒険者の諸君。これから皆に恐ろしい事実を伝えなければならぬが、心して聞いてくれ。俺達が調べた結果、今日中にベルディアが攻めて来ることが判明した」

「よつしや、ラッキー！ 億万長者になるチャンスが向こうからやつて来るぜえーっ！」  
「やったわね銀時！ これでようやく私達も勝ち組の仲間入りよ！」

「つて、喜ぶとこじゃねえーだろうが!？」

最悪の状況に冒険者達が青ざめる中、銀時とアクアのバカ兄妹が空気を読まずに大はしゃぎする。彼らにとつてはお宝情報でも、普通に考えれば凶報である。

そもそも、この情報は本当なのだろうか。冒険者を代表してめぐみんが聞いてみると、近藤の隣にいる桂が代わりに答えてきた。

「ベルディアが来るというのは間違いないのですか？ この間の戦闘で、身体的だけでなく精神的にも大ダメージを与えていたので、この短期間の内にリベンジしてくるとは思わなかったのですが……」

「残念ながら間違いない。この俺が自分の目で確認したからな」

そう言う桂は、ベルディアと遭遇した際の回想を始めた。

「あれは昨夜の出来事だった。捕獲したモンスターをバカ皇子に届けた後、貴族達の住む地域からアクセルに戻ろうとした俺達は、久しぶりに深夜のドライブを楽しもうと思いついて、守護霊の「カローラ」に乗って帰ることにした」

「守護霊のカローラって一体なんだアアアアアツ!? 車が守護霊ってどーいうことなの!? しかも、なんで運転できんの!?」

「まあ、その辺の詳しい話は【ポロリ篇】の最終話を参照してもらおうとして、とにかく俺とエリザベスは、華麗にドリフトをキメながら爽快に草原地帯を爆走しまくっていた。そうしてしばらく進んでいると、不幸中の幸いと言うべきか、偶然にもアクセルへと向かっている魔王の軍勢を発見することができたのだ。これもきつと、幸運の女神による加護のおかげだろう。まったくもって、浄水器にしか使えないウンコの女神とは偉い違いだ」

「ウンコの女神って私のことなの!? 確かに、昨日はゴリラのウンコがちよつとばかり

付いちやったけど、私自身をウンコ呼ばわりするなんて絶対に許せないわ!? 訂正して！ 私にはウンコの女神じゃないって、今すぐに訂正して！」

「あーもう話が進まねえーっ!? ウンコが付いたエンガチヨ女神はウンコのように黙ってろ！」

案の定、桂の説明は色々とおかしかった。それでも、魔王の軍勢がアクセルに向かって来ていることは間違いないさそうである。

「なるほど……。カローラとかいう謎多き乗り物がものすごく気になりますが、とにかくカツラは、ベルディアの姿を見たのですね？」

「その通りだ、めぐみん殿。軍勢の先頭に、首が取れるアラレちゃん的なキャラを目撃した俺は、あれこそまさに将ちゃんと言っていたベルディアであると確信した。同時に、銀時や将ちゃんを罵倒する様子から、奴らの目的が復讐であることも容易に分かった。それゆえに、自慢のカローラをかつ飛ばして、進路上にいたベルディアを撥ね飛ばしていきながら、急いでここに戻って来たというわけだ」

「オイオイイツ!? ここへやって来る前にベルディア殺ってるんだだけ!? ゾンビランドサガみたいに冒頭から殺ってんだだけ!? ボスを殺られた魔王軍は、もうここに来ないんじゃない?！」

回想を聞いたカズマは、ボス戦を台無しにした桂にツツコミを入れながら、登

場する前に殺られたベルディアに同情した。

だがしかし、カローラに跳ねられても魔王の幹部は生きていた。桂の知らせを受けた茂茂が再度偵察したところ、怒鳴り声をあげながら元気に進軍を続けているベルディアの姿が確認されたのである。

「残念ながら、ベルディアは健在だ。カローラで受けたダメージはほとんど見られず、侵攻速度も落ちてはいない。ウイズ殿の見立てによると、以前戦った時よりも力を増しているようだ」

「ま、マジかよ!? R P G 的にはありがちな展開だけど、やられた後に強くなるとか、設定がサイヤ人じゃねえ!」

茂茂の追加報告に冒険者達はざわめきたつ。無論、その中には長谷川も入っていたが、不安そうな表情を浮かべながらも強がりと言う。彼にはまだ希望があるのだ。

「ま、まあ、こつちには銀さんがいるんだから、中ボスがパワーアップしたところで問題は無えだろ! たとえ、コイツが、完結できないままジャンプから追い出されたハミ出し野郎だとしても、一応主人公だからなあーっ!」

「ああ!? バカ言ってるじゃねえぞハミチン野郎! 俺は決してジャンプから追い出されたハミ出し野郎なんかじゃねえ! 二日酔いで気分が悪いゲロ出し野郎だオポロロロロロ!」

「なんでいきなり吐いてんだアアアアアアッ!?」

「つたく、こちとら頭が痛えつてのに大声出してんじやねえーよ。アクアの奢りで明け方まで飲んだくれた状態で、無理矢理起こされて来てんだから仕方ねえだろーが……。つっわけで、今日の俺のステータスは二日酔いという名の毒をもらった状態なんで、バトルの方で過度の期待はしないようにお願いしまーす」

「お願いしまーすじゃねえーだろうが!? 冒頭で見せてたハイテンションは、いったいどこに行つたんだよ!?」

殺る気満々だった冒頭とはうって変わって、二日酔いの症状が悪化した今の銀時はゾンビのような顔色をしていた。しかも、それは相棒であるアクアも同じだった。

「ちよつと、しつかりしなさいよ! 目の前で吐かれたら、私も我慢がオボロロロロロロ!」

「アクアの方まで吐き出したアアアアアアッ!?」

彼女もまた銀時と同様に重度の二日酔いだった。作戦を練り始めたばかりだということに、戦う前から主力となるべき二人の勇者（笑）が脱落してしまった。

ベルディアの討伐をするはずだったミツルギが不在となった今、彼に勝った銀時が戦わなければならぬのに、結果はこのザマである。情けない理由で希望を失った冒険者達は、あからさまに落胆し、それを見たダクネスは、使えない仲間達を庇うために奮起

する。

「どうしたみんな、しつかりしろ！ 我が主が全力で戦えない状態とはいえ、完全に勝機を失ったわけではないぞ！ ここは私が囷となつて、我が主が復活するまで時間稼ぎをしてやろう！」

「ば、バカな!? そんなことをしたらアンタが死ぬぞ?！」

「ふん、私とてクルセイダーの端くれ、そう簡単に死にはしない！ いやむしろ、奴等はたつぷり時間をかけて女騎士の熟した肢体をいたぶつて来るはずだ！ 心に誓つた人のため、私はこの汚れなき肉体を卑劣なるモンスターに捧げることになるのだつ！ ああ、なんとという至高の恥辱！ 悔しがる仲間達に見られながら無惨にも寝取られてしまうなんてつ！ そんなの！ そんなの！ 興奮してしまುದろオオオオツ!！」

「なんでお前が興奮すんだよ!? 囷にそんな要素は無えーぞ?！」

妄想を拗らせたダクネスの作戦は当然ながら脚下された。

そもそも、銀時一人に頼らなくても対抗できる術はある。それを準備してきた茂茂がみんなに伝える。

「安心するがいい皆の衆。時間稼ぎなどせずとも、ベルディアを倒す方法はある」

「なっ?! その話は本当かよ、ブリーフマスター!？」

「ああ、本当だ。余が作り上げたあの砦は、このような時のために用意したものだ。たと

え魔王の幹部とて、大魔王の城を攻め落とすことはできん」

「「「「おとおおおつ!! 流石だぜ、ブリーフマスター!!」」」」

自信満々な茂茂を見て、冒険者達が歓声を上げる。大魔王の城とか不穏なことを言っていた気もするけど、この人の仕事なら問題無いだろう。実際は、桂が考案した仕掛け満載の鬼畜なクツパ城なのだが、それを味わうことになるベルディアと仕掛けを操作することになるカズマ以外にとっては知らなくてもいい話である。

「待て待て待てえーい!! なんかさらつと俺が操作することになってんだけど、どこでそんな流れになった!？」

「なにも不思議じゃないだろう。適任だった銀時が役に立たなくなつた今、あれほどのドS装置を使いこなせるのは、女の子であつてもドロップキックを食らわすことができるカズマさんの他にはおるまい」

「そんな理由で選ばれたのかよ!! 確かに俺なら言いそうだけど、このSSでは言つてねえーだろ!？」

桂の無茶振りによつて変な役目を押し付けられたカズマは文句を言う。

だが、冷静に考えると間違つた判断でもない。戦闘力の低いカズマを後方支援に回すのは定石であるし、ゲームに精通した彼は、いくつかの仕掛けを作るのに協力しているため、操作にも慣れているのだ。



それに、これは女の子達にアピールするチャンスでもある。

《ここでズバツと活躍してアクセルの街を守りきれば、キミに対する好感度も急上昇間違いなしだよ☆（サキュバスの店を利用して常連達の好感度が）》

「ふっ、こうなりや俺もやるつきやねえな！ アクセルにいる女の子は絶対に守ってみせる！」

「いや、女の子だけじゃなくてオッサンとかも守ってくれよ！」

ノルンの言葉を信じたカズマは、女の子にモテるために戦う決意をする。

こうして、銀時と戦う気満々なベルディアに予想外な強敵が出現することになった。



冒険者達の作戦会議が終了してから3時間後、とうとうアクセルの街にベルディアの軍勢が到着した。カローラに跳ねられて更に怒った魔王の幹部は、異様なオーラを放ちながら正門へと向かっていく。

だが、そこに待ち構えていると思っていた人間達の姿はなかった。

「……これは一体どういうことだ？ 魔王の幹部が正面から攻めて来たというのに、迎え撃つべき冒険者どころか門番すらいはないとは！ この俺をバカにする気か!？」

あまりにも無警戒な様子に、侮辱されたと感じたベルディアは憤る。

すると、彼の怒りが伝わったのか、巨大な門が徐々に開いて中から人が出てきた。その人物は、巨大な黒馬に乗った冴えない顔の少年で、彼の後ろには髪の長い綺麗な女性が相乗りしているようだ。少年には見覚えがあり、銀髪の剣士と一緒にいた仲間だったことが分かったが、後ろにいる女性は……

「まつ、まさか!?! あの女はウイズじゃないか!?! こんなところまで出てきやがって、またしてもその巨乳で俺の心を惑わすつもりか!?!」

ウイズのストーカーであるベルディアは、おっぱいを見ただけで彼女を識別できた。その気持ち悪いスキルのせいで、愛馬の存在に気づくのが巨乳店主の後になってしま

う。  
「つていうか、アイツらが乗ってる馬にすっげー見覚えがあるんだけど……。あの馬っでもしかすると、行方不明中だったパトリシアじゃね!?!」

あまりに予想外な再会に度肝を抜かれる。

うん、どう見ても頭が無いし、パトリシアに違いない。

「いつまで経っても帰ってこないなーと思ってたら、こんなとこにいたのかよ!?!」

次々と襲い来るサプライズに混乱したベルディアは、数十メートル先で止まった馬を食い入るようにガン見する。魔に属するパトリシアが、なぜ人間なんかを乗せているの

か。愛馬を奪われた飼い主は新たな疑問にぶち当たり、騎乗している少年——カズマに向かつて問い質す。

「おい、小僧！ 俺の愛しいパトリシアに一体なにをしやがった!? 貴様ごとき人間風情に気位の高いパトリシアが騎乗を許すなんて、絶対に有り得ん!!」

「はあ〜? 有り得んって言われましてもご覧の通りなんですが? お宅の可愛いパトリシアちゃんは、キモいストーカーのお前より、ナイスなお尻のウイズの方を選んだようだぜえ〜?」

「なっ、なににーっ!? そんな理由でこの俺を裏切っていただとおーっ!? 世界でもっとも心を許せる相棒だと思っていたのに! こんな……こんな……ウイズの尻に敷かれるという俺の夢を叶えやがって、羨まし過ぎるぞパトリシアアアアアアッ!」

「なんでそこで羨ましがっているんですかー!」

カズマの挑発に引つ掛かったベルディアは、おかしな方向に怒りを燃やす。風雲再起よりもウイズのお尻に食いついてきたのは想定外だったものの、一応は作戦通りに行っている。

「あ、あの〜カズマさん。なんだかベルディアさんの様子がつつても気持ち悪いのですが、大丈夫でしょうか?」

「うん、ソレは元からなんでウイズはなんも気にするな。とにかく今は、アイツを砦の中

に誘導することだけに集中してくれ」

心配そうに話しかけて来るウイズを説得するように返事する。

今回、彼女に協力してもらった理由は、確実にベルディアを皆へと誘い込むためである。だからこそ、他の冒険者達を一般人と一緒に避難させて、こちらだけに注意を向けさせるようにした。

「アイツの目的が銀さんと將軍だつてことは分かっているが、念には念をいれないとな……」

気まぐれにアクセルを滅ぼせる存在に対して気を抜くわけにはいかない。

そのために、口の上手いカズマ自身が失敗の許されない交渉役を買って出たのだが、もちろん十分に勝機があつての判断だ。ウイズと一緒にいれば、彼女に片思いしているベルディアも容易に襲いかかれぬし、いざという時はレポートで逃げることもできる。

さらに重要なポイントは、彼女になつている風雲再起も自由に操ることができることだ。

「ウイズが言うには、闇属性との相性が良いウイザードに惹かれてるんじゃないかって話だけど、元の変態飼いまみみたいに可愛い女が好きなだけじゃね？」

めぐみんやウイズになつている風雲再起に疑いを抱くものの、今はその性質を利用

してやればいい。

桂に冒険者の基礎を叩き込まれて馬にも乗れるようになっていたカズマは、ベルディアを誘い込むのに風雲再起が利用できるのではないかと思いつき、エリザベスから乗りこなす方法を教えてもらっている内に、ウイズという最高の協力者まで得ることができたのだ。

その成果こそが今の状況である。

「取り返したい風雲再起とエロいことをしたいウイズをエサとしてぶら下げて、首無しの変態野郎を砦の中へと誘い込む……。名付けて「飛んで火に入るストーカー」作戦だ！」

「私ってエサだったんですかーっ!?!」

「本当の役目を知って驚くウイズであったが、想い人である茂茂のためにも、ここは一つ我慢してもらおうしかない。」

「(この間の件もあるし、銀さんの同類である桂さんや近藤さんに頼りきるのもアレだからな。あの砦を利用して俺が何とかするしかないだろ……)」

《だいじょぶだよ、カズマ君。クツパ城とクズマという鬼畜なコラボが実現すれば、悪い魔王の幹部ですら無抵抗のマリオみたいなものだから!》

「(うん、それバカにしてるよね? 俺を持ち上げてくれるように、どん底まで落とすとしてる

よね?)」

カズマは否定するものの、ノルンが認めるくらいに凶悪なことをやろうとしているのは間違いない。

それでも、人類の天敵である魔王の幹部に遠慮はいらない。アクセルを守るためにも、女の子にモテるためにも、ベルディアを地獄へと誘導しなければならぬのである。「おい、お前ら!! さつきからここそこそと何を話し合っている!! まさか二人で悪口を言つて『あのデュラハン、こんなところまでストーキングしてくるなんて、マジキモいんですけど』とか、罵倒しているのではあるまいな!!」

「いや、ソレほとんど事実じゃねえーか!? そもそも、こっちはお前をバカにしに来たわけじゃないぞ」

「はい、そうです。私達は、シゲシゲさんの挑戦状を届けに来たのですよ」

「なっ、なに!? シゲシゲの挑戦状だど!?!」

意外な展開にベルディアが驚く。姿が見えないと思っていたら、そういう理由だったのか。

「つーか、これっておかしくね!? 攻めて来た相手に挑戦状って、一体どういうことなんだよ!? 普通は逆だと思っただけだ!?!」

「まあ、細かいことは気にすんなよ。とにかく、俺達はベルディアに対して挑戦状を叩き

つける。果たしてお前は、難攻不落の我らが砦を攻略できるかな〜?」

そう言つてカズマが指差した方向に視線を向けると、場違いに立派な砦が建つていた。

「あれつてシゲシゲの砦だったのおーっ!? こんな辺境にあんな物を建てるなんてバカだなーと思つていたが、やはりお前らだったのか!」

「なにを言うんですかベルディアさん! あれは全然バカな物じゃありませんよ! ああ砦のおかげで、私はシゲシゲさんという素敵な男性と出会えたのですから……(ポツ)」

「コンチクシヨオオオオオオツ!? 挑戦状など無くたつて、今すぐアレをぶち壊しに行つてやらあーっ!」

ウイズのお惚気は効果抜群だった。この様子なら、ベルディアは喜んで砦に突っ込んでいくだろう。

とはいえ、相手も並ではない。戦いの準備を整えているのは彼の方も同じなのだ。

「ふっふっふっ! どうやら、あの砦にはかなりの戦力を用意してあるようだが、それはこちらと同じこと! さあ、刮目して見るがいい! 魔王様より頂いた新たな鎧と我が力を!!」

「いや、刮目して見ろつて言われても、前と同じデザインの鎧が金ピカぴーになっただけ

じゃん。それってゲームで良く見かける、モンスターの色だけ変えて使い回すセコい手と同じだろ?」

「セコいとか言うんじゃねえよ!! 変わったのは色だけじゃなくて、ちゃんと中身も変わってますうーっ!」

ドラクエ的な見方をするると若干間抜けになってしまいが、これでもちゃんとパワーアップはしている。今の状況では、グラムを持ったミツルギでも勝つことは難しい。

「しかも、変わったのはそれだけではないぞ! 我が不死の軍団も精鋭を連れて来た! アンデッドナイトよりも強力なアンデッドジョエネラル! 死してもなお最強のプレデターとして君臨するドラゴンゾンビ! そして最後に、過去の時代で猛威を振るった魔王であると伝えられるバラ○スゾンビだああああっ!」

「ちよつと待てえええええいつ!! 明らかにおかしいのが最後に混じってるんだけど!! それって下手すりゃ幹部のお前より強いんじゃねえ!」

いきなりぶっこまれて来たドラクエ要素に困惑する。魔王軍の方は銀時達よりまともだろうと思っていたら、とんでもない色変えモンスターが出てきてしまった。他にも、ドラゴンゾンビなんて大物までいるし、はつきり言って、正面から立ち向かうのは無理ですと言わざるを得ない。

ただ、幸いなことに、こつちにも切り札はある。彼女の力をもつてすれば、攻撃呪文



に耐性が無いファミコン版のバ○モスゾンビなど恐れることはない。

「なんでこの世界にいるんだよって突っ込みたくなるモンスターが出て来たのはビビったが、そんなことあってもいい。どっちにしろ、ソイツらはここで全員リタイアだ」「ふん、全員リタイアだと？ 雑魚の分際で、随分とデカイ口を叩きおつて……」

挑発を受けたベルディアが素直に言い返してくるが、その際に生じる隙がカズマの狙いだった。ベルディアが余計なことに意識を向けている間に風雲再起を反転させて、そのまま猛然と正門の方へ駆けて行く。それと同時に、離れた場所にいる仲間へ向けてこう叫んだ。

「やれ、めぐみん！ 開戦の合図を盛大にブチかませええええええっ！」

「その大役、見事に果たして見せましょう！ ドラゴンゾンビだけでなく魔王のゾンビまでいるなんて、何という絶好の爆裂シチュエーション！ 雑魚掃除に回されて不貞腐れていましたが、今はメチャクチャ感謝していますよ、カズマ！」

呼び掛けに応じて正門の頂上に姿を現したのは、魔法の詠唱を終えて待機していためぐみんだった。

事前の偵察によってアンデッド軍団を引き連れて来ているのは分かっていたので、一ヶ所に集まっている間に爆裂魔法で一掃してしまおうと最初から決めていたのだ。

ベルディア自身は、魔法耐性の強い鎧を着ているおかげで爆裂魔法にも耐えられる

が、ボロい装備しか身に付けていない他の奴らはそうもいかない。怒りのせいで爆裂魔法に対する警戒を忘れていたベルディアが、ニヤリと笑うめぐみんを目撃した時点で何もかもが遅かった。

「えっ!? ちょまつ!?」

「問答無用の「エクスプロージョン」 ツツツ!!」

制止の言葉も空しくアンデッド軍団は爆裂された。恐怖を振り撒くはずだった死者達の群れは塵に還り、バラ○スゾンビも呆気なく消滅してしまった。

後に残されたベルディアは、薄れていく爆煙の中で呆然と立ち尽くす。自慢していた軍団を速攻で消されたのだから少しだけ同情するが、メンタルダメージが回復する前にこちらの作戦を進める。

容赦ないカズマさんは、視界が戻り始めた直後に風雲再起を突進させて、棒立ちになつていたベルディアを容赦無くぶっ飛ばした。

「ぐはぁーっ!」

「オラオラ、どうしたベルディアさんよおーっ? ぼーっとしてるとケガするぜえ?」

「くっ、クソオオオオオオオツ!! こちらが親切にアンデッド軍団の説明をしてやってい  
る隙に爆裂魔法を撃つなんて、汚いマネをしやがって! お前ら、それでも人間か!」

「デュラハンのお前が言うんじゃねえよ!! 大体、最初に攻めて来たのは、そっちの方が

らじゃねえーか！俺達との戦いはもうすでに始まってんだ！お前が惚れてるウイズ姫を將軍様から寝取りたければ、あの砦をたつた一人で攻め落として見せるんだな！」

「な、なにいつ!? あの砦を攻め落とせば、ウイズ姫を寝取れるのかっ!」

「ちよっ!?! なんていきなり寝取るとか、そんな話になるんですか!?! そもそも、私は姫じゃなくて魔道具店の店主ですから!」

ウイズを犠牲にしつつもベルディアの気を引くことに成功する。これで、めぐみんに向けられていたヘイトも解除できただろう。カズマの策略に引掛かり欲望を刺激されたベルディアは、砦の方へと駆け出した風雲再起の後を追ってアクセルから離れていく。

「やりましたね、カズマ。ここまでは、すべて計算通りです」

魔力を使い果たしてぐったりとしていためぐみんは、徐々に小さくなっていく仲間の姿を見送りながら武運を祈る。

「後のことは頼みましたよ。あなたなら、私の期待に応えてくれると信じてますから……」

ヒロインを自称するめぐみんは、ちよっぴり気になる少年に声援を送る。

とはいえ、ここはギャグ寄りのふざけた世界。爆裂娘がまともなことをしても、失敗

フラグを立てているようにしか思えなかった。



ベルディアの誘導に成功したカズマ達は、風雲再起をかつ飛ばして砦の前までやって来た。遙か後方に置いてきたベルディアもじきにここへやって来るので、すぐさま制御室に行つて迎え撃つ準備を整えなければならない。

とはいえ、時間には余裕がある。門の前には、桂とエリザベスのツーマンセルが待ち構えており、たとえ魔王の幹部であつても簡単には通れないだろう。

それどころか、この二人が本気で戦えば、ここで決着が着くかもしれない……。

「よくやったぞ、カズマ君！ 後は俺達に任せておけ！」

〈奴はここでゲームオーバーだぜ！〉

「あーはい、せいぜいがんばって」

すれ違い様に桂達から頼もしい言葉をかけられる。普通なら彼らの活躍に期待するところだが、それに対するカズマの態度は何故か非常に冷めていた。

「あ、あのー、カズマさん。さっきのアレを注意しなくて良かったんでしようか？」

「んー？ なにを言っているんだ、ウイズさん？ あそこにいるのはバカの他人だ、俺達

には関係ねえ！」

桂達の様子を見て、ウイズはおかしな不安を抱き、カズマは無視することにした。

銀時に次ぐ戦力であるはずの彼らが、なぜそのようなしよっぱい扱いになっているのか。砦の前までやって来たベルディアが、すぐに答えを知ることになる。

「ふん、砦というより城だなこれは。冒険者の作ったものだど先ほどまでは舐めていたが、こいつは想像以上に落とし甲斐がある……ん、なんだ？ あの変な奴らは？」

砦に気を取られていたベルディアは、道を塞ぐように立つ奇妙な存在に気づいて注目する。

近づくにつれて、ソイツらがおかしな姿をしていることが分かってきた。自分を待ち構えていた人間かと思ったら、どうも人の形をしていない。いや、片方は人の顔が出ているから人間だとは思うけど、外見は茶色いキノコの形をしたモンスターと言わざるを得ない……。

「つーか、なんだよその格好!? これから戦おうって時に、なんでキノコになってんの!?!」

「貴様こそ何を言っているのだ。スーパーマリオの最初に出て来る敵といったら、定番のクリボーに決まっているではないか」

「そんなもん知らねえよ!? スーパーマリオとかクリボーなんて激しくどうでもいいっ

「つーか、間抜けな姿の二人だけでこの俺に向かって来るとか、どう考えてもふざけてんだろ!？」

「ふざけてなどいるものか! 自分を倒すための仕掛けをわざわざ用意するほどに優しい大魔王クツパが、ヒゲのオッサン一人を相手に、各ステージのボスを集めて襲いかかるなんて卑怯なマネをやるわけなどないだろがあーっ!？」

「いや、大魔王なら卑怯なマネをやったっていいんじゃない? 大体、俺はヒゲのオッサンなんかじゃねえーし、大魔王クツパって誰!？」

突っ込みどころしかない桂との遭遇に、ベルディアのツツコミ芸が冴え渡る。クツパ城に初めて挑戦者が来たことで浮かれた桂は、こんなこともあろうかと密かに用意していたクリボーの着ぐるみを持ち出して来ちゃったのである。そこまでふざけていられるほどクツパ城の仕掛けに自信があるということなのだが、どう考えてもバカとしか言いようがない。

「何はともあれ、いよいよここからクツパステージが始まる。かなりの難易度に仕上がっているから、心して挑むがいいぞ、首無しマリオよ!」

「誰がマリオだコノヤロー!?! 俺の名はベルディアだ!」

「ええい、魔界村の主人公みたいな格好をしているからってマリオを愚弄しやがって! マリオ的な役なんだからマリオを素直に受け入れるや! そんなもって、無警戒にB

ダッシュしてクリボーに悪質タツクルをかましてしまい、いきなり残機を減らすというお約束を無様に再現するが、いいわ！」

頭のおかしいキノコ野郎が、マリオあるあるで絡んで来た。意味はよく分からないけど、ムカつく上にウザったい。

「いいだろう！ 貴様らの望み通り、俺の悪質タツクルでぶっ飛ばしてやらああああああつ！」

「ぞーふうーつ!!」

へぶるあーつ!!」

ベルディアのタツクルによって桂とエリザベスがぶっ飛んでいく。クリボーの着ぐるみを着ているため、まさに手も足も出ない状態で地面に叩きつけられる。

「はっ、バカめ！ 我が剣で切るまでもないわ！」

「ぐ、ぐはあつ！ やはり、当たっただけで死んでしまう繊細なマリオのように、魔王の幹部を倒すことはできなかつたか！」

「魔王の幹部をバカにすんなよ!! 当たっただけで死ぬわけねえーだろ!! つーか、そのマリオって奴、どんだけ体力無えんだよ!!」

どこまでもスーパーマリオ的なノリを続ける桂にウンザリする。パトリシアに乗っていたクソガキといい、頭のおかしい爆裂娘といい、コイツらの相手をしていると精神

的に疲労する。

「こんな茶番にいつまでも付き合っていていられるか！ 貴様ら雑魚など放っておいて、さっさと砦を落としてやる！」

我慢の限界に達したベルディアは、バカを放置して先を急ぐ。結局、戦闘をすることなく素通りさせることになったが、この結果は桂の予定した通りでもあった。

〈無傷で行かせてしまったけど、本当にこれで良かったんですか？〉

「ああ、これでいいんだよ。ベルディアを倒す役目は、この地で生きていく覚悟を決めた将ちゃんど、未来を担うことになるカズマ君達であるべきなのだ。戦い終えた老兵は、新たな勇者を育てるために、頼りない道化役を演じていればいいのさ」

〈桂さん、あんた最初からそのつもりで……〉

ナチュラルで道化のクセに、なにを言っているのやら。バカはバカなりに考えて行動していたらしいが、返って状況を悪化させているだけのようないやな気がしないでもない。

「恐らくは、銀時やアクア殿も同じことを考えながらゲロを吐いていたはずだ」

〈アイツらはナチュラルに二日酔いで吐いてただけじゃね？〉

ほら、やつぱりバカ達が勝手に自滅しているようにしか思えない。こんなんで、ベルディアを倒すことができるのだろうか。

「近藤は甘いから普通に手助けするだろうが、それはそれで構わない。後は、結果がどう



なるか。首無しマリオがクッパ城を攻略できるか見ものだな」

絶対にクリアできないことを確信しつつ、遠ざかっていくベルディアの後ろ姿を見送る。クリボーの格好でなにカッコつけてんだよと文句を言いたいところだが、もうコイツに突っ込んでいる時間はない。ベルディアは砦の目前まで迫っており、彼の力で攻撃すれば、頑丈に作られた門ですら容易に破壊できてしまう。

「こんなもので魔王の幹部を止められるものかあああああつ！」

いよいよ門まで500メートルを切り、ベルディアの気合いも高まっっていく。

しかし、彼が攻撃する前に門の方が先に開いた。もちろん、この行動も作戦の内であり、門の内側で待機していたネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲を使用するためにあえて開いたのである。

その決戦兵器を操作しているのは、弱い自分でも戦えるからという理由で志願した長谷川と、個人的な目的のために参加したクリスだった。

「頼んだぜ、クリスちゃん！ 一発限りのアタックチャンスを活かせるかは、君の幸運次第だ！」

「そいつは責任重大だね！ でも、当ててみせる！」

大まかな準備を整えた長谷川に代わって、クリスが砲手を任される。狙撃スキルが無いとはいえず、彼女の高い幸運があれば、かなりの高確率で命中が期待できる。

この日のために開発した新型の砲弾を当てることができれば、たとえ爆裂魔法に耐えられる強敵であっても多少のダメージは与えられるはずだ。

「(本当はこんなことやったらいけないんだけど、アクアさんやお姉様も自由にやつてるんだから、今更あたしが混じったって文句は言わせないんだからね!)」

やんちゃした子供のように、心の中で言い訳する。絶大な力を有する神は、天界規約によつて地上における活動を制限されており、人間社会に大きく影響を与えるような干渉は基本的に禁止されているのだ。

遙か昔、悪魔達との抗争を繰り返していた神々は、信仰心によつてパワーアップするために人間の信者を増やす計画を行った。しかし、その計画が世界を危機に陥れる事態を招くことになった。神の威光を広めようとして奇跡を大盤振る舞いした結果、楽園と化した環境に慣れてしまった人間達がどんどん墮落してしまい、全人類がニート化するという最悪な状況に陥ってしまったのだ。

これに懲りた神々は、今回の失敗を教訓にして『アイツらは甘やかすとすぐ調子に乗りやがるから、適度な感じの放置プレイで締めて行こうぜ』というルールを作ったのである。それが足枷となつて、エリス自身の力で魔王を排除できなくなり「神器を与えた転生者を代わりに送る」という回りくどい救済をやる羽目になつているのだ。

ちなみに、アクアは「銀時の所有する神器扱い」なので、女神の力を使つてもルール

に反していない。ただし、彼女自身がポンコツなせいで一切ありがたみを感じられず、天界規定に縛られているエリスとしてはもどかしい限りである。生真面目な彼女はルールを破ることができず、これまでは神器を回収する程度の小さな干渉にとどめていたのだ。

「(だけど、もう関係ないよね!? あのカグヤ先輩まで、こんな物を持ち込でるし! つついうか、みんなあたしの管轄世界で好き勝手にやり過ぎじゃない!?)」

「やんちゃ過ぎる先輩達に振り回されて、クリスはちよっぴりやさぐれていた。」

とはいえ、これは願ってもないチャンスでもある。この大砲さえあれば、女神の力が使えなくても魔王軍に対抗できる。

「(デザインが卑猥だとか色々問題だらけだけど、今は人類を救うための剣として使う!)」

銀時に感化されているエリスは、たとえ規約を破っても愛する人間達のために戦う決意をする。

それに対するベルディアは、初めて見る大砲に驚きつつも前進していく。

「なんだあのチ○コみたいな物体は!?! あんな物でナニをする気か分らんが、一気に突破してくれるわ!」

若干警戒したものの、あれが何をするものなのか理解出来ず、結局はそのまま突っ込



衝撃に耐えられなかったベルディアは……シヨック死してしまった。

「クツパ城に入る前にベルディアが死んだあああああつ!」

予想外の結末に驚いた桂の絶叫が響き渡る。まさか、丹精込めて作り上げたクツパ城をお披露目する前に決着がついてしまうとは。長谷川やクリスにとっては嬉しい大金星なのだが、桂にとっては計算外の状況である。

「やつ、やったあーっ! ベルディアのチ○コを狙い撃つなんて、やるじゃねえか、クリスちゃん!」

「えっ、いや、別に、狙い撃ったわけじゃないんだけど!? たまたま玉に当たった弾がクリティカルヒットになるなんて、あたしにとつても予想外だよ!? でも、魔王の幹部を倒せたんだから、方法がアレでもまあいいか」

「まったく全然良かないわあああああつ!」

勝利を喜ぶクリス達に対して怒りを抱いた桂が叫ぶと、昇天しかかっているベルディアの元へエリザベスと共に走っていく。傍迷惑な目論見が外れて焦りまくったマリオバカは、クリス達が予想もしていなかった迷惑行為に走ってしまう。

「急ぐんだ、エリザベス! チ○コを失ったマリオが消えてしまう前にザオラルで生き返らせろ!」

へ下手くそなプレイヤーにコンティニューさせてやるなんて、桂さんは優しいな

「そんな優しさいらないんだけど!?　なんで敵のクリボーがマリオを助けてやってんの!?」

「そ、そうだよ!?　せつかく倒した魔王の幹部を生き返らせるなんて、どういふことさ!?」

「それを言うのはこつちの方だ!　主役が活躍する前にボスキャラを倒すなんて空気を読まないマネをしおって、一体何を考えている!?!　ただでさえ、『銀魂の奴らがでしゃばり過ぎ』とか『出番を取られたカズマさん達が可哀想』とか思われてんに、メンタルの弱いバカ作者を助けてやろうとは思わんのか!?　ここはわざと弾を外して、舞い上がる土煙の前に『やったか!?!』とつぶやいて失敗フラグを構築し、不適な笑みを浮かべながら現れる敵を見て『あ……あ……あ……』と言葉に詰まり、ドラゴンボール的に絶望感を演出するところでしょーがっ!?!」

「なんでアニメの引き延ばしみてえなことを俺らがやらなきゃならねえーんだよ!?　バカ作者のメンタルなんか配慮してる場合じゃねえーだろ!?!」

あり得ない暴挙に対してクリス達から文句が出る。その間にエリザベスが3回目のザオラルを唱えて、死にかけていたベルディアが復活してしまう。意識はまだ戻っていないので、今なら弱い長谷川達でも攻撃し放題だが、クツパ城を使わせたい桂達が邪魔をする。

「ちよつとちよつと、困るよ君達。二人の戦闘シーンはこれで全部お仕舞いなんで、さつさと退場するー。気絶しているマリオの方は、この後こつちで砦の中に放り込んでおくから、君達は使った道具を片付けといてー」

「えつ、ええええええつ?!? せつかく、あたしが勇気を出して魔王の幹部を倒したのに、この扱いは何なのおーつ?!?」

「まあ、ツラつちが絡んでくると大体いつもこんな感じだからなあ……。こうなりやもう諦めるしかねえよ、クリスちゃん」

「あーん! ツラつちのバカーツ!」  
「ツラつちじゃない、ツラボーだ!」

銀魂世界の理不尽な洗礼を受けたクリスは、涙を浮かべて悔しがった。一応これでも、勇者を育てるためにやっていることなのだが、女神であるエリスでさえバカ達の見論見を見通すことはできなかつた。



気絶していたベルディアが目を覚ますと、そこは先程までいた場所ではなかつた。辺りを見渡してみると、どうやら建物の中らしく、石造りの通路に仕掛けられた拷問器具

のようなトラップがあちらこちらで動き回っていた。

「なんだこのドSな悪魔が作ったような悪趣味な迷宮は!? 確か、俺は外でやられたはずだが……まさか、ここは地獄というわけではあるまいな!」

つい先程まで昇天しかけていた上に、目覚めたら景色が一変していたのだから、混乱するのも当然である。

制御室にいるカズマは、ファンタジーな映像システムを見て慌てふためく彼に気がき、状況を説明するためにファンタジーな音響システムを使って話しかけた。

「はあーっはっはっはっ! 魔王の幹部ベルディアよ! クツパ城改め、風雲カズマ城へよくぞ来た!」

「むっ、その声はさっきの小僧!? 貴様がいるということは、ここはあの砦の中か!? つーか、風雲カズマ城って何!? 風雲の意味が分かんねえし、カズマなんてダッセエ名前、紅魔族みたいで恥ずかしくね?」

「ええい、黙れや変態野郎! お茶目な俺の冗談を完膚なきまでにディスリやがって、もう容赦しねえぞゴルア!」

桂達がやらかしたせいでキレ気味だったカズマさんは、空気を読まないベルディアの言葉でさらにキレて殺気立つ。

「(これまでは援護に回って、将軍様と近藤さんにとどめを任せようと思っていたが、も



う止めだ！ こつからは、俺の手で殺っちまうつもりで行かせてもらうぜ！」

《うん、いいね！ 桂のおかげで活躍できて良かったじゃん、カズマ君！》

「（確かに、活躍できるけれども、良かったなんて思ってたねえよ!? ツラのせいで、リアルなマリオをやらされてるだけだからな!）」

おかしな方向にスパルタな勇者育成の被害者となったカズマは、ちよつぴりやさぐれていた。

それでも、これはチャンスである。こうなりやもう、女の子にモテモテな未来のために全力を尽くすしかない。

「つーわけで、俺の名前をバカにしたストーカー野郎には地獄を見せてくれるわ！」

「ほう？ 地獄とは大きく出たな。人間ごときが作った畏など、この俺に通用するか。それよりも我が力に恐れをなして、貴様ら自身が地獄を見ることに……ん？ うわ、いきなりなんだ!? 床が勝手に動いてるうーっ!」

余裕を見せて話している途中で、床に仕掛けた「ベルトコンベア」が始動する。強制的にスタートされて慌てたベルディアが向かう先には、途中で床が無くなっており、その下には熱したタバスコで作られたニセマグマが待ち構えていた。

「オイオイオイオイ、これはヤバイぞ!」

パワーアップしたベルディアと言えども、あの中に飛び込んでしまったらタダでは済

まない。重い鎧を着ているせいで、ろくに泳ぐことができないのだ。

そんな状態を狙われてやられるなんて御免だし、タバスコまみれになること自体がそもそも嫌だ。

「ちつきしよーっ!?!、こんな間抜けなトラップに引つ掛かってたまるかあああああつ!?!」

「ならば、全力でBダツシュして、あの【リフト】までジャンプしろー!」

「なっ、あの板に飛び移るだど!?! ギリギリだが、やるしかない!」

危機一髪のタイミングで隣を走る女騎士からの確なアドバイスを受け、ぶつつけ本番のギリジャンを試すことにする。Bダツシュとやらがよく分からないが、ベルトコンベアによる加速を活かして勢い良く飛び上がる。

「よ、よっしやあーっ! なんとか飛び乗れた……って、今度は落下してるんだけど!?!」

「次の【リフト】へ早く飛べ! この仕掛けは、乗った瞬間に落下するから気をつけろ!」

「な、なるほど! 落ちる前に飛び移るのか!」

またもや女騎士からアドバイスを受け、間一髪で難を逃れる。

しかし、奇妙な幸運は流石に続かなかった。リフトゾーンを飛び越えて着地した地面から【トゲ棍棒】が飛び出してベルディアのチ○コに直撃した。

「ぐぎやああああああああつ!?!」

憐れなマリオの叫び声がクツパステージにこだまする。

「おい、カズマ！ どうして、私の股間には棍棒を出さないのだ?!」

「そんなトコに棍棒出したら、俺の股間の棍棒も一緒に出て来ちまうだろう?! つーか、なんでお前がいんだよ!? 近藤さんと協力して、將軍様のサポートをするって作戦だったよね?!」

「確かに、お前の言う通りだが、攻撃の当たらない私がいても二人にとつては足手まといにしかならない。だからこそ、私は私にできる戦いをすることにしたのだ」

「はあ、それはなんですか?」

「ベルディアのライバルとして砦の攻略を競い合い、奴の体力を可能な限り削り取ると同時に、地獄の拷問を味わいたい私の欲求も満たすという、一石二鳥の作戦だ!」

「さらつと本音が漏れてますけど?! 結局お前もクツパステージやりたかっただけじゃねえーか?!」

さりげなく参加していた変態騎士に理由を聞いたら、案の定、DM的な内容だった。一応、筋は通っているが、最後に言っていた本音こそが本命としか思えない。

「うくつ……蔑むようなカズマの視線が手に取るようにわかるぞ! だが、それでも、ここは退かぬ! 私自身のためだけでなく、ベルディアとの一騎討ちを望んでおられたシゲシゲ殿のためにもな」

「なっ、なにっ!? アイツが一騎討ちを望んでいるだど!?」

股間を押さえながら駆け回っていたベルディアが、いきなり割り込んでくる。憎き恋敵とはいえ、一騎討ちを望んでいると聞いてしまつては、騎士として恥ずかしい対応はできない。

「シゲシゲ殿は悩んでおられた。同じ女性を愛する者として、お前とは真剣勝負をすべきなのではないのかと。その清廉潔白な精神は、貴族が見せなければならぬような尊き誇りそのものであり、心にそう感じたからこそ、私はここにやって来た。決して、鬼畜なトラップを堪能してみたいとか、お前だけが楽しめるのは我慢ならぬとか、思つたからではない!」

「分かりやすいウソついてんじやねえーっ!?」

前半の良い話が台無しである。

それでも、茂茂とダクネスの思いはベルディアに伝わった。魔王の幹部に対して堂々と勝負を挑んで来るとは、随分と生意気な奴らだが、そういうバカは嫌いではない。

「フンッ、それほど俺に切られたいなら、望み通りにしてやろう。無論、お前の挑戦も受けて立つてやる。認めるのは癪に障るが、さつきは助けられたからな……」

「うむ、その決断に感謝しよう。だが、勝負を始める前に、もう一つだけ言っておくことがある」

「ん、なんだ？」

「お前の股間が剥き出しのままでは、こちらの気が散ってしまう。だから、ひとまずこの布で隠してくれないか？」

顔を赤らめたダクネスがそう言うと、持っていた布を差し出した。実を言うと、ベルディアの股間部分は、クリスの当てた砲撃のせいでチ○コ丸出しの状態になっていたのだ。

「えっ？ ああああああああつ?! なんかやたらとブラブラするなーって思ったら、股間のマイサンが丸見えになってるうーっ?!」

慌てて隠すも後の祭り。ストーカーがストリーキングになったところで変態である点は変わらなかった。

とはいえ、チ○コ丸出しのままでは流石に動きにくいので、ダクネスから貰った白い布をフンドシのように身につける。

「よ、よし! これでいいだろう!」

「う、うむ! それなら問題ない!」

「つて、なにお互いに照れてんだよ!? そういう茶番はもういいから、とつとと先に進んでくれよ!」

気持ち悪いやり取りを見せられて、カズマがキレる。



「付けるお!」ゾーンである。

「うぎやあああああああつ!? チ○コが挟まって超痛えーっ!? つーか、コイツもど  
ういう仕組みで浮いてんの!?!」

「だから、突っ込むなって言っただらろーが!?! ファンタジーな世界では浮くなんて常  
識と思え!」

「くはあんっ!? 今度はこれで私の鎧を砕いてしまうつもりだな!? 隙間からチラリと  
見える女騎士の柔肌を、淫らな視線で堪能しようと考えているのだらう!?!」

「いやだから、そんな気は端から無えつてさっきも言っただろーが!?! そもそも、お前  
は、避ける気無いだろ!?! ドッスンで挟まれてなのに、めっちゃ良い顔してるもの!?!」  
クツパを一撃で殺せる仕掛けも変態達には効かなかった。それどころか、返って楽し  
ませているだけな気がする。

それでも、攻撃し続けるしかない。

今度の仕掛けは、「弾丸砲台」100基が放つ砲撃の嵐を駆け抜ける『上以外からも来  
るぞ! 気を付けろお!』ゾーンである。

「ぐほおーっ!?! なんで俺のチ○コばかり狙い当てて来やがんだあーっ!?! つーか、ア  
レもどうなってんだよ!?! あんな短い筒の中からどんだけ鉄球出てくんの!?!」

「もう俺は突っ込まないぞ! 俺だって本当はすっごい気になってるんだからな!?!」

「くほおんっ!!」 打ち付ける弾丸によって鎧はほとんど砕けてしまった! もはや、私を守っているのは、大事な部分を隠せるだけしか残っていない衣服のみ! おい、カズマ! 仲間の恥ずかしい姿を見るのがそんなに楽しいかあーっ!!」

「全然楽しかねえよバカ!!」 つーか、マジで見えそうだから、モザイク先輩が出る前にしっかりと隠してくれよ!」

本当はちよつとだけ楽しんでいたけど、これ以上はR—18になつてしまうので自重する。

それにしても、ベルディアは想像よりもタフなようだ。そこそのダメージは与えているのに、手応えを感じない。

「なんと言うか、ダクネスと同じような気配を感じるんですけど、それはなぜ?」

《ふっふっふっ、ようやくソコに気づいたようだね、カズマ君》

「な、なにぃーっ!!? そいつぁ一体どういふことだ!?!」

奇妙な状況を分析していると、すべてを知っているノルンが説明に入ってきた。

《前の戦いで銀時のスキルを食らったアイツは、Mの快感を知ってしまった。そんな時に、クリスちゃんかチ○コを爆裂させちゃったから、さあ大変。かくして、究極の痛みを味わった変態は、カズマの鬼畜攻撃によって完全なるドMへと覚醒したのであつた!》



「(やっぱ、そーいうことかアアアアアッ!? つーか、俺が止めを刺したの!?)」  
いろいろな意味で恐れていた事態になってしまった。まさか、魔王の幹部までDM化してしまうとは。

信じ難い話だけと、目の前の現実を受け止めなければならぬ。現に今も、ベルディアとダクネスは、嬉しそうにトラップを食らいまくっている。

「ファイトーツ!」

「いっばあーっ!」

「オイイイイツ!? なんかもう、相棒みたいな関係築いてるんだけど!? 変態同士で惹かれ合っているとしてもいいのかあーっ!?!」

意気投合し過ぎて、もはや、競争すらしていない始末である。

このままアイツらを放置しては色々とマズイ気がする。少なくとも、ダクネスとベルディアをこれ以上仲良くさせる訳にはいかないだろう。いろいろな意味で。

「こうなったら仕方がない! 悪いがウイズ、ちよつとの間、ここの操作を代わってくれ!」

「えっ!?! ちよつと!?! 代わつてと言われましても、私は操作できませんよおーっ!?!」

後ろで控えていたウイズに声をかけ、ダクネスを止めるためにカズマ自ら出陣する。

慌てるウイズを放置したまま関係者用の通路を通り、ダクネス達がやって来るフロア

へと先回りする。そして、二人に気づかれないように後ろから【バインド】を使い、拘束したダクネスを速攻で連れ出した。

「きやつ!? カズマ!? 私を縛ってナニをすr……」

「むっ!? どうした!? って、あれ? あの女はどこいった?」

何とかギリで、ベルディアに気づかれることなくダクネスを引きずり込めた。

後は、コイツを引っ張って制御室に戻るだけだ。

「はあつ、はあつ! いきなりこんなことをするなんて、お前も中々大胆だな! 私のないやらしい姿を見て、とうとう我慢できなくなっただか!」

「DMなお前のバカさ加減に我慢できなくなっただよ! ああもう、息を荒げてないで、とつとと歩けやエロクルセイダー!」

エッチな格好をした恥女をお縄にしたカズマは、今度こそベルディアを仕留めるべく制御室へと戻っていく。仕掛けの操作法が分からないウィズが涙目を浮かべている間に、かなり先へと進まれてしまったなどとは思わずに……。



カズマが制御室に戻ると、事態はかなり進行していた。泣いているウィズを宥めつ

つ、ベルディアの位置を確かめてみたら、もうほとんどゴールに近い場所にいるようだ。「ごめんなさいっ、ごめんなさいっ！ 私が操作できなくて、本当にごめんなさいっ！」

「い、いや、いいよ。確かめないで頼んでいった俺の方が悪いんだから」

「まったく、カズマは抜けているな。勝手に持ち場を離れるから、こういうことになるのだ」

「勝手にクツパ城を堪能してたお前が文句を言うんじゃないよ!」

メソメソ店主と半裸騎士は、もはや当てにはできそうにない。

こうなれば、もう茂茂と近藤に任せるしかないだろう。なんて思っていたら、またしてもアクシデントが発生した。

「おい、カズマ。あそこに立っているのはコンドウではないか?」

「おいおい、まさかゴリラまで持ち場を離れてやがんのかあ!」

巨大水晶に写し出された映像を確認すると、確かに、黒い隊服を着た近藤が立っている。どうやら、コイツもダクネスと同じように勝手な行動をしているらしく、一対一でベルディアと戦うつもりようだ。

闘気をみなぎらせる近藤の真意に、当然ながらベルディアも気づき、警戒しながら話しかける。

「ほう。急にトラップが動かなくなつて不審に思っていたのだが、今度はゴリラが相手

になるのか」

「俺はゴリラなんかじゃねえーよ!? 変な呪いをかけられてゴリラに見えるようになってしまったゴリラっぽい人間だ!」

「おっと、そいつは済まなかった。バニルのようなクソ野郎が他にもいるとは思わなかったが、お前も苦勞しているようだな……」

「えっ、まさか!? 魔王の幹部がこの俺に同情してくれてんの!? なんだろう、仲間よりも優しくされて、すっごい複雑な気分だよ!」

変なところで共感されて、お互いに力が抜ける。

「なんかお前とはやりづらいな……。この場だけは見逃してやるから、大人しくそこをどけ」

「バカを言うな。將軍様に仇なす敵を通すわけがないだろう」

「將軍とはシゲシゲのことか? あの変な女から俺との一騎討ちを望んでいると聞いていたが、それは真つ赤なウソだったのか?」

「いいや、ウソなどついていない。確かに、將軍様は、お前との一騎討ちを望んでおられる。だが、それでも、ここは通さぬ。たとえ、それが將軍様の意思に反する行為だとしても、俺自身の手でお前を倒さなければならぬ理由があるのだ。かつて、果たすことができなかった責務を全うするために!」

近藤は、元の世界で茂茂を死なせてしまった後悔を未だに消せないでいた。本人から許しを得たとしても、自身の心が許さないのだ。

故に、彼はここに来た。真選組局長として。茂茂の友として。仲間の命を脅かす魔王の幹部を討ち取るために。

「フン、覚悟はできているというわけか。だったら、こちらも遠慮なくやらせてもらうまでだっ！」

近藤の本気を理解したベルディアは、剣を抜いて向かってきた。ここまで進んで、ようやくやくまともに剣を使った戦いが始まった。

今までやられればなしかったベルディアにとっては汚名返上の好機であり、水を得た魚のように近藤を圧倒する。

「はあーっはっはっはっ！ 人間にしては中々やるが、銀髪の剣士ほどの手応えは感じないなあーっ！」

「はっ、そりゃあそうだろうよ。生き地獄のど真ん中で天人共と戦い続けた白夜叉と比べたら、俺なんざ、ジャパリパークのど真ん中でサーバルとケンカしてるゴリラのフレズみてえなもんさ。それでもなあ、こんな俺にだって誰にも負けねえものはある！ お妙さんを愛する心と、サムライとしての心意気は、決して誰にも負けてねえっ！」

全身傷だらけになりながらも、近藤は決して退かずに戦い続ける。鬼気迫るその姿に

カズマ達も言葉無くすが、このままの状況では恐らく負けてしまうだろう。アクアとエリザベスの蘇生魔法を当てにするのもなんか怖いし、手遅れになる前に手を打つ必要がある。

「カズマさん！ 早く援護をしてあげないと、コンドウさんが死んじゃいます！」

「ここは私が盾となつて助けに入るべきではないか?！」

「今は行ったらダメっていうか、お前が行くと返つて困るわ!? 下手に相手を増やしても、奴に本気を出させるだけだ! それなら、このまま油断してる状態を狙った方がいい!」

今は動きが速すぎて手を出すことが出来ないが、余裕ぶってるベルディアならば、どこかで隙を見せるはず。格下の相手に舐めプをしたがる彼の性格を見抜いていたカズマは、獲物を狙うようにタイミングを待つ。

すると間もなく、そのチャンスがやって来た。

とうとう、膝をついてしまった近藤を見て、止めを刺そうとしたベルディアがゆっくりと歩いていく。その先に「トゲ棍棒」が待ち構えていることには気づかず……。

「くつくつくつ、パワーアップした俺を相手に良くここまで健闘したが、これで終わりだあーっ!」

「ああ、お前のチ○コがなっ!」

「えっ、チ○コ？　って、ぐほおおおおお！　コレがあつたの忘れてたあーっ!？」

またしても、股間に棍棒を食らつて悶絶する。優勢だったベルディアの動きが止まり、こちらに勝機が見えてきた。

「近藤さん！　今のうちに攻撃してソイツを倒しちゃつてくれ!？」

「おっ、おうよ！　ナイスな助太刀に感謝するぞ、カズマ君!？」

危機一髪のところまで逆転した近藤は、これまで温存していた切り札を使う。制限時間が短いため、使いどころが難しかったが、今こそがその時である。

「よし、行くぞ！　スキル発動「ゴリ押しゴリキ」　ツツツ!!」

「なにそのイヤなスキル名!?　なんかどつかで聞いたようなフレーズなんですけど!？」  
「解説しよう!　このゴリラスキルは、すべてのGP（ゴリラポイント）を消費することで発動し、56秒の間だけ格上の相手であってもゴリ押しで圧倒できる剛力を出せるのだ!？」

「もう内容すべてがゴリ押し過ぎて悪意しか感じねえよ!？」

シリアスな展開が、変なスキルのせいで一気に台無しとなつてしまう。

ただ、幸いなことに、名前はアレでも効果は普通に強力だった。近藤の放った一撃に耐えられず、ベルディアは持っていた剣を手から弾き飛ばされてしまう。

「なっ、なんとおーっ!？」

「うおおおおおっ! お妙さんと再会するため、ここで死ぬやジオング野郎!」

絶好のチャンスを活かすべく、連続攻撃を与え続ける。これまでのダメージが蓄積してベルディアの鎧には見えない亀裂が走っており、そこへ更に近藤の攻撃が加わった結果、最後の崩壊が始まった。

「そんなバカなっ!?! 魔王様から戴いた黄金の鎧がああああああああっ!?!」

ボロボロと崩れていく自慢の鎧を見て、信じられないといった様子で叫ぶ。ダクネスのドムプレイに釣られて仕掛けを食らいまくった代償が、ここで一気に現れたのだ。

こうなればもう、ベルディアに対抗できる手段は無い。

「これでも食らえい! ゴリラ・ストラアアアアアッシュツ!!」

「うぎゃああああああああっ!?!」

適当にパクった必殺技を放って、無防備となったベルディアを斬り倒す。ザオラルで甦って体力が半分になっていた上に、トラップでダメージを受けて弱っていた今の彼では、ゴリ押し状態の攻撃に耐えることはできなかつた。

「やつ、やった……。やりましたよ、お妙さん! あなたの元へ帰る日が、これで一歩近づきましたあーっ!」

「やったじゃないわボケエーツ!?!」



「ぶるあっ!？」

見事な逆転勝利を喜んでいたら、いきなり出てきた桂に蹴られた。前にも見たことあるような展開に嫌な予感がしたカズマであったが、思った通りにバカ達がバカなことをおっ始めた。

「急ぐんだ、エリザベス! ほぼパンツ一丁になったマリオが消えてしまう前に、ザオラルで生き返らせろ!」

へドンキーコングごときにやられるクソツタレなプレイヤーを二度も助けてやるだなんて、桂さんは優しいな

「誰がドンキーコングだ、バカヤロー!? つーか、お前ら何やってんの!? せっかく、俺が苦労してボスを攻略したっていうのに!？」

「貴様が苦労をしたかどうか!? それはこちらのセリフだと、これよりちよつと前のパートでマダオ達にも言ったたでしょーが!? スーマリの見所であるクツパ戦の目前でゲームオーバーにさせおつて! お前はそれでも、マリオで楽しい子供時代をエンジョイさせてもらいまくつたファミコン世代かアアアアアッ!？」

「そんな理由で生き返らせたの!?! お前はどこまで俺達にリアルマリオをやらせたいんだ!?! この戦いはゲームじゃなくて、命が懸かった戦争なんだぞ!?!」

マリオバカによる妨害行為に対して当然ながら抗議する。

しかし、桂も、リアルマリオをやりたいという気持ちだけでこんなことをしている訳ではない。

「だからこそ、これから続く戦いを勝ち抜いていくために、乗り越えるべき大きな試練が俺達には必要なのだ。リアルな戦争を生き残るには、ゲーム的な経験値だけでなく、本当の意味での戦闘経験が必要だからな」

これまでの経緯を考えるとムカツと来るが、桂の言い分にもそれなりに説得力があった。長期に渡って血風舞う戦場に我が身を投じてきた攘夷志士が導き出した答えが、『経験に勝るもの無し』という単純明快な事実だった。

ベルディアには申し訳ないが、ひよつ子勇者を育てるためのスライム役になってもらう。

「それともう一つ。この戦いは、勘違いしたゴリラ野郎の教育にも役に立つ」

「俺が勘違いをしているだろ？」

「ああ、そうだ。お前は未だに将ちゃんを護衛の対象として見ているようだが、それは大きな勘違いだ。俺達が養殖して育てまくった将ちゃんは、お前が思っている以上の成長を遂げている。もはや、彼は、昔のように守られるべき存在ではない。弱き者を守る側に進化しているのだ。それが事実であることを、最後のクツパ戦で確かめるがいい」

「……敵だったお前にそんなことを言われるなんて、正直言つて悔しいな。だが、ここ

は、お前の口車に乗ってリアルマリオを続けるしかあるまい」

桂の説得（？）によって近藤までもがこの茶番に乗ってしまう。

果たして、バカ達が演出したリアルマリオがどのような結末を迎えるのか。突っ込み役のカズマには、盛大な失敗フラグとしか思えなかった。



気絶していたベルディアが目を覚ますと、またしても場所が変わっていた。その大きな部屋は、これまで通って来たフロアとは違って何も無い空間が広がっており、奥には別の部屋に通じる入り口が見える。そして、その前方に、見覚えのある男が待っていた。「魔王の幹部ベルディアよ。我が砦を攻略し、よくぞここまで辿り着いた」

「フンッ、分かりやすい皮肉はよせ。俺自身の力だけで来れたわけじゃない」

茂茂に返事をしながら、先程の戦いで落とした剣が手元に戻っているのを確認する。「ここに来るまで、俺は二度もやられていたのだから……」

ベルディアは、何かを考え込むような様子で呟く。

キノコみたいな格好をしていたバカ達を除いて、これまで戦ってきた連中は本気だったと思うのだが、二度も倒されたはずの自分が何故か消えずに済んでいる。悪意をもつ

て弄んでいるようでもないし、どうにも意図が分からない。

それでも、ここまで来れたのだから、わざわざ敵を蘇生するようなバカであっても感謝してやるべきか。

「フツフツフツ。どうやら俺は、非常識な存在にケンカを売ってしまったようだ」

「……今のそなたは、以前会った時とは雰囲気が違うな。あの時は、魔王の幹部に相応しい殺気を放っていたものだが、今はそれを微塵も感じぬ」

「フンッ、何も不思議な話じゃないさ。魔王の幹部であつた俺は、この砦に入る前にチ○コを爆破されて死んだ。今ここにいる亡霊は、消え損なつた敗者でしかない」

騎士としてのプライドを持った彼は、一度倒された時点で潔く敗けを認め、銀時達によつて滅ぼされる覚悟も固めていた。これまでの戦いで、即死効果のある「死の宣告」を使わなかったのは、敗者としてのけじめをつけたからだ。

ようするに、女神エリスは、自分の手でしっかりと魔王の幹部を倒していたのである。「ならば、何故戦い続ける？ この戦は、そなたにとつて何なのだ？」

「戦い続ける理由か……」

ベルディアは、そこまで言つて言葉に詰まる。

敗北を受け入れた今の彼を動かしている理由。それは多分、個人的な未練を果たしたいという小さな望みのだろう。恋敵である茂茂と敗けを喫した銀髪の剣士に対して、

一矢ぐらいは報いたい……

「いいや、それも違うな。俺はただ純粹に、宿敵となったお前達と戦いたかっただけだ。魔王の幹部としてではなく、ベルディアという男としてな！」

「……左様であるか。ならば余も、茂茂という男として、そなたの挑戦を受けるまで！」  
無力な傀儡から一端の冒険者へと成長した男は、魔王の幹部から一介の騎士へと戻った男と戦う決意を表明する。

ここからはもう立場など関係ない。正々堂々と戦って決着をつけるのみ。

故に、茂茂は服を脱ぐ。

「クロスアウツ（脱衣）！」

「いや、なんで服を脱いでんだよ!? 今の流れの一体どこに、ブリーフ一丁になる理由があった!?!」

「もちろん、これは変態プレイなどではなく、れつきとした訳がある。余が会得した最強スキル『ブリーフバースト』を発動するために必要な儀式なのだ」

そう言うのと茂茂は、ブリーフの端を引っ張りあげて、クロスするような形で両肩に引っ掛けた。分かりやすく言うと、パンティーを被っていない変態仮面みたいな状態である。

「このスキルは、ブリーフの寿命を対価にして発動し、肩にかけたゴムが切れるまでの間

だけステータスを通常の3倍以上に跳ね上げる効果を出す、ブリーフ的にもビジュアル的にも捨て身の必殺技だ」

「恥ずかしいって自覚してんの、さらっと自白してんじゃねえーよ!? だが、その話が本当なら実に面白い。俺の【限界突破】と同じようなスキルを使えるというのなら、こちらとしても戦い甲斐があるというものだ!」

いろいろな意味で変態した茂茂を前にして、ベルディアの戦意も高まっていく。

「いいだろう! 銀髪の剣士とやり合う前の肩慣らしには丁度良い! この俺に【限界突破】を使わせたことを誇りに思っただけでいいわ!」

「ふっ。大層な物言いだが、このスキルを使った余はそう簡単に倒せんぞ? こちらのブリーフのゴムが切れるのが先か、そなたの魔力が切れるのが先か、いざ尋常に……勝負!」

スキルによって身体を紅く輝かせた茂茂と、筋肉を肥大させたベルディアは、剣を構えて突進していく。

紆余曲折の末に、ようやくリーダー同士の激闘が始まる……。

なんて期待させといて、素直にやらせないのがこのSSのお約束。よりにもよってこのタイミングで、空気を読まないアイツらが復活してしまう。真のリーダーであるドS野郎と自称ヒロインの駄女神が。

「ハアーツハツハツハツ！」

「なっ!?」この腹が立つ笑い声は、やっぱお前らかあーっ!?」

遅れて来た主人公（笑）に視線を向けると、奴等は隣の部屋に繋がる入り口にいた。スーマリで例えるなら、画面の端に用意されたゴール地点である。

「お久しぶりねえ、ベルディアさん！」

「そして、すぐにサヨナラだあーっ！」

いやらしい笑みを浮かべたクズ共は、急におかしなことを言い出した。一体何をする気なのかとベルディア達が見つめていると、二人のバカは、側に立て掛けてあった「大きい斧」を手前に倒した。それは、クツパを倒すために都合良く用意された仕掛けであり、斧で鎖を断ち切られて支えを失った床が落ちる。上に乗っている茂茂とベルディアを道連れにして。

「……え？」

一瞬だけ浮遊したかと思ったら、直後に自由落下を始める。何もできない憐れな二人が落ちていくその先には、アクアが丹精込めて作った聖水プールがあった。ノルンからベルディアの弱点を聞いたカズマが、茂茂に進言して用意した仕掛けである。

「まったく、銀時のイタズラ好きにも困ったものだ」

「そんなほのぼのした話じゃねエエエエエエツ!?」

戦うはずだった宿敵達が、二人仲良く聖水プールにダイブする。

ぶっちゃけると、この部屋にベルディアを誘い込んだ時点で勝敗は決していた。当初の予定では、この仕掛けを使って安全に彼を倒すつもりだったのだ。

その作戦を今回のようなバカ騒ぎにした張本人は、『リアルマリオを見たい』という欲望に負けてしまった桂だということは言うまでもない。

ただ、ツラばかりを責められない間抜けな理由もあった。彼の用意した茶番劇に、他の奴らまで便乗した結果がコレなのだ。『一番活躍してモテたい』カズマや『DMの欲求を満たしたい』ダクネスなどの代表例を上げてみれば、お分かりいただけるだろう。

むしろ、鬼畜にしか思えない銀時達の方が本来の使い方をしているのだから、現実つて奴は残酷だ。

「うぎゃああああああああつ!? 純度の高い聖水がチ○コの傷に沁みるウウウウウツツ!」

「プークスクス! あれを見てご覧なさい! 私の作った聖水のおかげで魔王の幹部を倒せるわ!」

「ナニを言ってるやがんだアクア。この俺が將軍を囚にするという苦渋の決断をしたおかげで魔王の幹部を倒せんじゃねーか!」

互いに手柄を主張してケンカを始めるバカ兄妹。いきなり起こったハプニングを見



て驚いたカズマ達は、事態を收拾するために急いで制御室から飛んで来た。

「お前ら何をやってんだあーっ!?」 数少ないシリラスシーンを台無しにしやがって、唐突に盛り下がった空気感をどうしてくれる!?

「そんなことより、あれを見るよ!」 実に羨ましいことに、卑劣な罠にはめられたシゲシゲ殿が溺れているぞ!」

何故か嬉しそうなダクネスに言われて見たら、確かに溺れているようだ。

「きやあああああああつ!?」 シゲシゲさあーんっ!?

「あれなんでえ!?」 確か將軍って、泳げたはずなんだけど!?

「それはたぶん、「ブリーフソウル」の効果でカナヅチのステータスまでコピーしちゃったからじゃね?」

「弱点までコピーするとか、使えねえスキルだなあオイ!?」 写輪眼のチート具合を見習って欲しいもんだぜ!」

「お前の方こそ、闇堕ちから復活したサスケの姿勢を見習えよ!」

ムカつく言い訳をする銀時にカズマが突っ込みを入れる中、茂茂を助けるために聖水プールへ飛び込もうとするウイズをダクネスが必死に止める。

「待っててください、シゲシゲさん!」 今助けに行きますからあーっ!」

「止めるウイズ!?」 お前があそこに入ったら、シゲシゲ殿よりも先に天へ召されてしま

うぞおーっ!! とりあえず落ち着いて、ここは私に任せておけっ!」

ウイズを宥めたダクネスは、カツコ良くプールの中へ飛び込んでいく。あの様子なら茂茂は無事に生還するだろう。

その反対に、助けの来ないベルディアは絶望的だが……。

「ぐおおおおおっ!! 聖なる力に蝕まれて俺の身体が消えていくうーっ!! あれ? でも、なんだろ? 身体に感じるこの痛みが、そこはかたなく気持ち良くなつて来た気がすりゅっ!」

「ちよつと待てエエエツ!! それはたぶん錯覚だから!! 意識をしつかり保つんだあーっ!」

敵ながらベルディアのことが可哀想になったカズマさんは、言葉だけでも味方してやる。

しかし、相手は魔王の幹部。たとえば、鬼畜と思われようとも、この機会に倒さなければならぬ。

「おいカズマ。水から出てるアイツの首を「スティール」でゲットしろや」

「さあ早くやりなさいよ! 聖なる私の女神パワーで止めを刺してやるんだから!」

「お前らマジで鬼畜だな。正直言つて同類と思われたくはないのだが、今回だけはやってやるさ。女の子にモテるためにな!」

《キミも十分鬼畜だよな?》

欲望に忠実なクス共の利害が一致した。

本来、カズマとベルディアには大きなレベル差があつて、通常の状態だつたらステイルが効かないはずなのだが、今は聖水によつて弱りまくつていたので、思った通りに狙つた頭を引き当てることができた。

「ベルディアの頭、ゲットだぜ!」

「はあつ、はあつ! 何故、俺を助けるんだ!? もっと苦痛を楽しみたいから、早く元の場所に戻せつ!」

「いや、助けたわけじゃねえつーか、苦痛を楽しむんじゃねえーつ!」

何やらベルディアの様子がおかしいけど、そんなこたあどうでもいい。

彼をDM化した張本人である銀時は、一切悪びれることもなく話を進める。

「それじゃあコイツの希望に応えて、今から苦痛を与えまくつてやるわけですが。止めを刺した功労者が報酬の半分を貰えるつてことで、よろしくメカドック」

「……へ?」

唐突におかしなルールを押し付けられてアクアとカズマがフリーズする中、ベルディアの頭を奪い取つた銀時がニヤリと笑つて逃げ出した。

「よっしゃーっ! 1億5000万は俺のもんじゃあああああつ!」

「ちよっ!! そんなルール無いんですけど!! なに勝手に捏造してんの!!」

「ついさつき俺が一人で決めましたが、それが何か?」

「なにもかもがおかしいでしょっ!!? 1億5000万をゲットするのは、この私なんだから!」

「なにさらっとお前まで便乗してやがるんだ!!? ゲロを吐いてただけのお前らなんか、オイシイところを渡してたまるか!」

ドSの暴走を止めるため、駄女神とクズマまで参戦して、ベルディアの頭を巡る争奪戦が勃発する。

最初は普通にケンカをしてベルディアの頭を奪い合っていたのだが、いつの間にか、サッカーのように足でボールを取り合うプレイスタイルになっていた。

「出たあーっ、銀時君の強引なドリブルウーッ!」

「がはあーっ!!」

「だったらこっちも! アクア君の強引なスライディングタックル!」

「ごほおーっ!!? って、なんで俺だけ狙われてんの!?!」

サッカーという名を借りた暴力で友達(笑)と競い合う。

銀時の独壇場だと思われたサッカーバトルは、金が絡んだことでパワーアップしたアクアとのガチンコバトルへともつれ込んでいく。

「これでも食らいなさい！　ゴッド・ドライブシュート！」

「ぎよへえーっ!？」

「ならばこつちも食らいやがれ！　ドＳ・タイガーショット！」

「ぐぼはあーっ!？」　って、だからなんできつきから、俺ぼっかりやられてんの!？」

始まってからずっと被害担当になっているカズマが非難の声を上げる。

その反対に、始まってからずっとボール担当になっているベルディアが歓喜の声を上げる。

「おっふ!？　これイイ!？　なんかイイよ!？　新たな存在意義を見出だせそうだ!？」

「どんな存在意義だよソレ!？　お前はマジで、友達という名のサツカーボールになるつもりか!？」

なんかもう、キャプ○ン翼をデイスってるようにしか思えなくなってきた。

しかも、そこに桂とエリザベスまで加わって、更にカオスと化していく。

「銀時、貴様あ!？　俺のプロデュースしたりリアルマリオを台無しにしゃがって、もうマジで許さんぞおーっ!？」

「はっ！　許さねえってどーすんだよ?？」

「無論、サツカーで勝負するまで!？」

ノリのいい桂達は、怒りながらキャプ翼ごっこに乱入して来た。もはや、昭和の小学

生でしかないが、この時、調子に乗りすぎたせいで悲劇が起こってしまう。

アクアからボール（ベルディアの頭）を奪った桂が、エリザベスと協力して必殺シュートを放ったことで事態は急変する。

「さあ、行くぞエリザベス！ スカイラブハリケーン！」

〈これが俺達のサツカーだっ！〉

「あぶろばっ!？」

立花兄弟のようなコンビプレーによって蹴られたシュートは、見事に銀時をぶっ飛ばした。

それと同時に、ベルディアの止めも刺してしまったが……。

「……あ」

「「ベルディアが死んだアアアアアッ!？」」

エリザベスの必殺シュートが会心の一撃となり、ベルディアは昇天した。聖水に浸かっていた身体の方も消えてしまったので、もうザオラルでも蘇生できない。

「ベルディアか……。今思えば、そんなに悪い奴じゃなかったな」

「ええ、そうね……。惜しいデュラハンを亡くしたわ」

「オイオイッ!? 気まずいからって、これまでの展開を無かったことにしてんじやねえーよ!？」

友達（ボール）が消えて、バカ達の熱が冷めた。

ものすごく酷いオチだが、一応これで良かったのかもしれない。蹴られまくっていたベルディアの奴も、いろんな苦しみから解放されたのだから……。

感傷的になったカズマは、ベルディアが消えた場所に視線向ける。すると、そこには……仲間になりたそうにこちらを見ているベルディアの頭があった。

「「「なんでだアアアアアッ!」」」

「え? いやあー! それは俺にも良く分からんが、何故か戻って来ちゃいました!」

「来ちゃいましたじゃねえーよゴルア!」 死に損ないは、今すぐ地獄へ送り返してやる……」

「あーっ!? ちょっと待ってよ、お兄さん!? ボクは悪いベルディアじゃないよ!」

「生首の分際で、ドラクエのスライムみてえなセリフを言ってるじゃねえーっ!?」 心が悪くなくっても、見た目が気持ち悪いんだよ!」

銀時の言葉にアクア達も同意する。どうやら、エリザベスのスキルが働いて仲間モンスターの扱いになったようだが、女子のぱんつを覗くような変態生首など、いろんな意味で気持ち悪い。大体、身体が無いというなら使い道も無いだろう。

「っわけで、やっぱり消えてもらおうか」

「お前はどこまでDSなんだ!?」 少しは悩んでみてくれよ!」

『いいえ』しか選択肢の無いドS野郎に恐れおののく。

そんなベルディアに救いの手を差しのべたのは、ダクネスに救助されて生還した茂茂だった。

「銀時よ。その木刀を納めてくれぬか」

「ああ？　なんでだよ將軍。コイツはそのゴリラと同じで、ウイズにストーカーしてするような変態野郎だぞ？」

「なんだと貴様!!　俺とソイツのストーカー行為は同じなんかじゃねえーっ!?　こっちはもつと純粹で、愛の重さが違うんだよ!」

「どつちも愛が重過ぎて犯罪行為になっただろおーがつ!?!」

「二人とも落ち着いてくれ。ウイズ殿のストーカーという点に関しては余としても我慢ならぬが、騎士としての振る舞いを見れば、信頼するに値する男だと思う。それに、こやつは詳細な魔王軍の情報を持っているはずだ」

茂茂の話を聞いてカズマは納得した。確かに、情報源としては使えるかもしれない。

後は、素直に話してくれるかどうかだが、そこは愛しいウイズがいれば問題無いだろう。

「確か、人間サイズのゴーレムがどこかにあるって噂話を聞いたことがありますから、もしかすると、ベルディアさんの身体も新調できるかもしれませんよ?」



「おお、ウイズ!? こんなになつた俺のことを心配してくれるなんて! やっぱ、お前は良い女だなあーっ!!」

なんかもうなついているし、何故かダクネスまで乗り気なので『いいえ』を選ぶような空気ではなくなつた。

「やつたなカズマ! また一人、ドMの仲間が加わることになつたぞー!」

「うん、それはよかつたね。おれはぜんぜんよくないけど」

ドMの変態ストーカーなんて増えてもダクネスしか得しねえ。

カズマとしては不本意な結末になつたものの、魔王の幹部だつたベルディアが何故か仲間に加わつた。



ベルディアを倒すことに成功した銀時達は、ベルディアの頭を持って砦の外に出た。敵将の死体から首級を取ってきた訳ではなく、デュラハンの頭だけを仲間にした結果である。

外で待っていた長谷川とクリスは話を聞いたばかりで戸惑つており、ダクネスの手の上で愛想笑いしているベルディアを見てドン引きする。

「ヘツヘツヘツ、今後ともヨロシク〜!」

「いやいやいやいや、全然ヨロシクできないから!? オッサンの生首がフレンドリーに接してくるとか、いろんな意味でキモいんだけど!? なんてジオングの頭だけを鹵獲して来たんだよ!」

「ああこれは、ニュータイプのように変態同士で惹かれあつたというか、なんとというか……」

「言い訳なんて聞きたくないね! 首の無い馬はともかく、魔王の幹部だった奴まで仲間にしちゃうなんて、常識的にありえないでしょ!」

「まあ、そう言うなよクリス。お前の親友のダクネスが、こつちの迷惑も考えずに一番プッシュしてたんだから」

「うぐつ! なんとというか、その……とりあえず、ゴメンなさい」

「おい、クリス! なんでそこで謝るんだ!」

ドMな親友のせいでカズマに言い負かされてしまった。

それにしても、頭が痛い状況である。仮にも勇者を目指すパーティに魔王の幹部が加わってしまうなど、エリスとしては大問題だ。いくら改心したといつても、彼女の立場としては許しておけない存在なのだが……。こうなればもう、銀時とダクネスの判断を信じるしかないだろう。

「もし問題が起こったら、面白がって放置していたノロンお姉様が責任を取ってくれますよねえ〜?」

《やさぐれたエリスちゃんが暗黒面に堕ちかけてる!?!》

お茶目なイタズラがバレたノロンは、怒ったエリスから仕返しを受けた。

そのように女神同士の揉め事が起きているなど露知らず、茂茂に案内された銀時達  
は、砦の右側に作られた庭園へとやって来た。

その中央には精巧に作られた女神像が立っており、茂茂とウイズは、彼女に勝利を報告するため祈りを捧げた。もちろん、その女神像はアクアという名の駄女神ではなく、ウイズに合わせて茂茂も信仰するようになったエリスを模した物だった。

「幸運の女神エリスよ。魔王に抗う冒険者に武運を与えたもうたことを、心より感謝します」

「ああ、エリス様。大切なシゲシゲさんとお友達を守ってくださり、ありがとうございます」

「ちよつ?! なにやってんのよアンタ達?! 汗水流して働いたこの私を差し置いて、戦つてないエリスばかりチャホヤすんのはおかしいでしょう!?! 運だけしか取り柄の無いパッド入りのあの子より、運は無いけどパッド要らずなアクア様を崇めてよつ!」

「崇める要素が無いってどうか、パッド入りは関係無いでしょ!」

後輩よりも雑に扱われたアクアは、何の罪も無いエリス教徒達に八つ当たりをしてきた。それに対して、怒ったクリスが抗議する中、エリスに同情したカズマも続いて口撃を加える。

「二日酔いでゲロを吐いたり、ドSとサッカーしてただけの駄女神なんか、誰も崇めやしねえよ」

「うわああああああん! カジユマが私をイジめるウウウウウツ!」

ジャイアンにイジめられたのび太のように泣いたとしても、ここにはのび太を助けてくれるドラえもんはいない。彼女の作った聖水がベルディアを討伐する役に立ったのは事実だが、普段の行いが悪いせいで誰も評価してくれなかった。

「こんなことになったのも、あざといぶりっ子アピールで人間達を騙くらかしてるエリスのせいなんだから!」

悪質な逆恨みによって怒りを燃やした駄女神は、あろうことかエリス像に八つ当たり始めた。

「お嫁さんにしたいたい女神ナンバー2になれたからって、調子に乗ってんじやないわよ、エリス! 大体、この石像はおっぱいのサイズがデカ過ぎるわ! パッドを入れてる貧乳女神がこんなに大きい訳がないでしょ!? アンタの胸はもつとこう、ペツタンコな感じ

でしょーっ!？」

荒ぶったアクアは、エリス像の胸を押すという大人気ない行動に出た。すると、なんだかゲームコントローラーのボタンを押したような感触が返ってきた。良く見ると、胸の辺りが別パーツになっていて、理由はよく分からないが動かせる仕組みになっているようだ。

「なによこれ？ 私のゴッドフィンガーを跳ね返して来るなんて、エリスのクセに生意気ね！ こうなったら、ファミコンで鍛えた連射スキルで、中のゴムをユルユルにしてやるわっ！」

「ちよっ、止めろ!？」 ソコを連射したらダメだあああああああつ!？」

何故か桂が血相を変えて止めに入ったが、それよりも先にアクアの連射が打ち込まれる。

その直後に、予期せぬ事態が発生する。信じられないことに、クツパ城が大きく揺れ始めたのだ。

なにも知らない銀時達は天災かと思ったが、その予想は桂によって否定される。

「おいおい、まさか地震かあ!？」

「いいや違う。アクア殿がやらかしたせいで、砦に仕掛けた【自爆装置】が起動してしまっただのだ」

「自爆装置ってなんだアアアアアアッ!?」

唐突にとんでもない事実が判明した。なんと、この砦には自爆装置が組み込まれていたのである。

「実を言うと、このエリス像には重大な秘密があつてな。おっぱいの形をしたAとBのボタンを両方驚掴みにしながら高橋名人ばりのテクニクで1秒間に16連射すると、コマンドが認証されて自爆装置が起動する仕組みになつているのだ」

「オイイイイイツ! 自爆装置をゲームみたいに作つてんじゃねえーっ!? そもそも、自爆する意味が無えーし、それをなんでエリス様のおっぱいに仕込みやがった!」

「そりゃあお前、マリオに攻略された砦が崩壊するのはお約束だし、女神像のおっぱいを驚掴みにして16連射するようなバカがいるなんて、普通は誰も思わんだろう?」

「まあ、言われてみればそうかもなつて、納得するわけねえーだろがっ!? このバカが、女神像のおっぱいを驚掴みしにて16連射するようなバカだつてことは、テメエだつて知つてたろ!」

「なによ、みんなでバカにして!? 私は決してバカじゃないわ! ちよつぴりドジでおつちよこちよいな可愛い美少女なんだからあーっ!!」

桂の説明も、アクアの頭も、バカとしか言えなかつた。

ただ、自爆装置を仕掛けた理由は、一応ちゃんとしたものがある。ウィズが持つてい

た情報から、魔王の幹部には物理攻撃が効かないタイプのモンスターがいると分かり、いざという時のための対抗策として自爆装置が採用されたというわけだ。

みんなに伝えなかったのは、余計なフラグを立てないための安全策だったのだが、神レベルでトラブル体質なアクアには逆効果となってしまうた。

「おいアクア！ お前って奴あ、とんでもねえことしてくれたなあ!？」

「わわわ、私はそんなの知らないわよ!? 元はと言えば、あの石像のおっぱいがデカ過ぎたせいでしょーっ!? そうよ、そうだわ！ これも全部エリスせいよ！ エリスがパッドを入れてるから、こんなことになったのよおおおおおっ!!」

「だから、パッドはこれっぽっちも関係無いでしょーっ!？」

しつこいアクアに怒ったクリスが再び抗議の声を上げる。しかし、今はそんなことをしている場合ではない。

急いでここを離れなければ大爆発に巻き込まれてしまう。その破壊力を知っている桂は、大声で危機を知らせる。

「とにかく、ここから逃げるんだ！ もう間もなく、『コロナタイト』が暴走して大爆発が起ころぞー!」

「なっ!! コロナタイトだっ!!」

「なんだクリス。そのコロナタイトって奴が何なのか知ってるのか?」

「う、うん……。コロナタイトってのは、存在自体が幻って言われるほどに希少な宝珠なんだけど……そんなすごいお宝を一体どこで手に入れたんだい？」

「ああ、アレを手に入れたのは、銀時達と再会する前の話だ。王都のギルドから依頼を請けた俺達は、凶悪なエンシエントドラゴンを求めて過酷な旅をしていた。そんな時に道端で拾った」

「全然幻じゃねえじゃねえーか!? そこはせめて、『エンシエントドラゴンを倒したらケツの穴から出てきた』くらいのオチにしとけや!」

まさか、オリハルコン並に希少な物を道端で拾うとは。バグった桂の強運が、とんでもないものを引き寄せたらしい。今の状況を考えると、それが幸運だったのかは微妙なところだが。

「将ちゃん調べた結果、アレがすごいエネルギーの塊であると分かってな。永久機関として使えたおかげで、クツパ城を運用する目処が立ったのだ。それを失ってしまうのは正直言っただけでかなり惜しいが、こうなってはもう放棄するしかあるまい」

文字通りの拾い物とはいえ、失いたくないお宝なのは間違いない。

しかも、彼らが失う物はそれだけではない。そこに気づいたダクネスが、突然声を上げる。

「そ、そうだ! 倉庫にあるネオアームストロングサイクロンジェットアームストロン



グ砲はどうするのだ!」

「残念ながら、回収している時間は無い。アレも一緒に放棄するしかなかろう」

「くっ、そんなっ!?! せっかく、理想の拷問器具と出会えたというのにつ!?!」

「いや、アレは拷問器具じゃないんだけど!?!」

ダクネスの希望は気持ち悪かったので、あつさりと見捨てられた。

それよりも、今は人命を優先する時である。

逃げ出した銀時達は、崩壊が始まった砦から離れて行き、しんがりのエリザベスが風雲再起に乗って門から出て来た頃には、暴走したコロナタイトが限界に達していた。

「みんな伏せろオオオオオツ!!」

野生の感で危険を察した近藤が叫んだ直後に砦が大爆発を起こした。規模は非常に大きなもので、ウイズが撃てる最大出力の爆裂魔法よりも強力だった。

無論、その光景は離れたアクセルでも確認できて、外壁の上に放置されていたためぐみんもインパクトの瞬間を目撃した。

「えええええええつ!?! アレは一体何事ですか!?! 動けない私が長いこと放置プレイされてる間にナニが起きたのですかあああああああつ!?!」

遠くに見える爆炎にビビった声を上げてしまふ。

「あああ、あんなの私は信じませんよ!?! 私の爆裂魔法よりも強力な爆発なんて、この世

にあつてはいけな……じゃなくて、みんなは大丈夫なんでしょうか!？」

自慢だった爆裂魔法を越えられて憤っていためぐみんだったが、もちろん仲間達の心配も忘れてはいない。あの爆発がベルディアの仕業ではないとしても、アレを使った仲間達は、果たして無事に脱出できたかどうか……。

しかし、爆心地にいなかった彼女自身も心配してられる状況ではなかった。

運悪く、砦の爆発によって遙か上空に舞い上げられたネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲の予備弾が、あるうことかアクセルの街目掛けて降り注いで来たのである。

「……はて? さっきから聞こえてくる『ヒューン』という変な音は何でしょうか?」

これまで聞いたことがない風切り音に怪訝な表情を浮かべる。どうも上から聞こえてくる感じがするけど、一体なにが……

「つて、なんかこっちに飛んで来てるんですけどおおおおおつ!!」

驚きの声を上げるめぐみんの目には、砦の残骸と一緒に落ちてくる十数個の砲弾が写っていた。このままの軌道で落ちて来たら、彼女の周辺に降り注いで来ると思われる。

あんなものに当たったらマジでヤバイ。咄嗟に判断しためぐみんは、条件反射で逃げ出そうとしたが、魔力の尽きた身体では動くことすらできない。

「えっ、ウソッ、ちょま!」

慌てたところでどうにもならず、無慈悲に襲いかかってきた恐るべき砲弾が、次々と彼女の回りに落っこちた。

頑丈に作られた外壁も新型兵器の爆発には耐えられず、無惨な姿と変わり果ててボロボロと崩壊していく。さらに、飛び散った残骸によって周辺の家々にまで被害が及び、辺りは進撃の巨人を見ているような光景となってしまった。

「はあっ、はあっ……あまりに怖くて、ちょっぴりチビってしまいました……」  
何とか無事だったためぐみんが、涙目になりながらカミングアウトする。

もちろん、避難が完了していた街の方にも人的被害は出ていない。

その点はまあ良かったと言えるのだが……ちょっぴり濡れたためぐみんのぱんつと、思いつきり破壊されたアクセルの建物は、全然良くない状態だった。



ベルディアを討伐した翌日。戦闘に参加したメンバー全員がギルドに呼び出され、カズマと長谷川の二人は重い足取りで向かっていた。

昨日はベルディアとの戦闘に加えて、戦後の後始末と事情聴取でメチャクチャ大変

だったのだが、今日は何が起こるのやら。

「な、なあに！ どうせ後は報奨金を渡されるだけだって！ なんとって俺達は、魔王の幹部を討伐した勇者なんだからな！」

「そ、そう言えばそうだよな！ 俺達はこの街を悪から救った英雄なんだ！ ギルドに行ったら、俺に惚れた女の子達が待っているに違いない！」

コイツらも基本的にバカの部類に入るので、本人が思っている以上に思考パターンが雑だった。

「まあ、流石にアイドルみたいな人気者になれるとは思ってないけど、何人かの女の子にモテる可能性はあるだろう。この異世界は、夢と希望がいつぱいつまったファンタジーなのだから！」

「欲と野望しかつまってないダークファンタジーになってんだけど!?!」

軽く妄想に耽りながらギルドに到着して中に入る。

すると早速、カズマの期待に応えるように誰かが話かけてきた。もちろん、それはカズマに惚れた女の子などではなく、酔っぱらったモヒカンヘッドのオッサンだった。が。「フツ、ようやく英雄のお出ましか。一足先に、新たな伝説の始まりを祝福させてもらっているぜ」

《まあ、ファンタジー世界でもこうなるよね》（笑）

「そんなことあ分かってたけど、ヒヤッハーなオツサンしか来ないってどうなのよ!」  
予想通りのしよっぱい展開にカズマが嘆く。

ギルドの酒場では、多くの冒険者達が集まって祝杯を上げているけど、カズマに近寄るような奇特な女の子なんて一人もいなかった。

ちなみに、ベルディア討伐に参加していないモブ達には報酬など出ていない。祝杯とは言っても、自腹で飲んでいるだけの負け組でしかなかった。

でも、自分達は違う。こっちはマジでベルディアを討伐した勇者パーティーなのだから、この国からすごい報奨金が出るはずだ。

「こうなったら、ゲットした大金をコイツら見せびらかしてくれるわ!」  
「ああそうだな。貰った金をコイツらの前でゆつくり数えてやろうぜ!」

同じことを考えていた長谷川と一緒に、悪どい表情を浮かべて笑う。

そうとなれば、善は急げだ。女の子にモテモテ計画はとりあえず保留にして、大金を手に入れるべくギルドの受付へと向かう。

見ると、そこには他のメンバーが揃っており、カズマと同様に浮かれていた。特に、ドヤ顔した銀時とアクアがムカつく様子ではしゃいでいる。

「ねえ、億万長者の銀時さん。後で早速、お家を買に行きましょう。お金持ちの私達に相応しいお家をね!」

「ああ、億万長者のアクアさん。それは良い提案だね。セレブらしい豪華な屋敷を現金払いで買うとしよう！」

「あ、ヤバイ。なんか今、盛大な失敗フラグが立った気がする」

あからさまに勝ち組気分なバカ兄妹を見て、勘の鋭いカズマの身体に不吉な悪寒が走り抜ける。

こんな風に上手くいってる感じの時は、最後の最後でクソツタレなオチになる……。コイツらの危険性を身をもって学習したカズマはもとより、コイツらの裏事情を色々知っているクリスもまた、同じ結論に辿り着く。

「うーん……変なイベントに巻き込まれる前に逃げた方がいいかなあ？」

「何を言っているのだ、クリス。これから報酬が支払われるというのに、何故逃げる必要がある。お前だってベルディアと勇敢に戦った。パーティの一員なのだから、胸を張っていればいい」

「ああ、ダクネスの言う通りだぞ。本当の意味でこのベルディアを倒した者は、無慈悲にチ○コを爆破したお前なのだからな。その貧しい胸を堂々と張って、勝利の栄誉を受けるがいい！」

「貧しい胸って表現は必要ないでしょーっ?! っていうか、倒された本人が、なんであたしを誉めてんだよ!?! 何か気持ち悪いから、キラキラした目でこっち見ないで!?!」

ダクネスの手に乗ってセクハラしてくるベルディアに、腹が立ったクリスが突っ込む。

彼が仲間になった事情は昨日の内に報告しており、冒険者カードに記された証拠と茂の説得によって討伐リストからも削除されたため、ここにおいても騒がれないのだ。

現在の待遇は、ギルドの寛大な配慮によって冒険者扱いとなつている。桂が新たに考えている計画が成功したら、真選組の一員として正式に冒険者登録をさせるつもりだ。

「それにしても、昨日まで魔王の幹部だったクセに、あつさりとならな

「ええ、そうですね……」

順応性がめつき高いベルディアの様子を見て、カズマだけでなくめぐみんも感心する。

「何と言いますか……魔王城に引きこもっている割にはコミュニケーション能力がやたらと高いですね。コミュニケーションのゆんゆんも、少しは見習ってほしいものです」

「あんな劣化ダクネスなんて見習わなくていい」

これ以上変態を増加されては堪らないと、カズマがすかさず止めに入る。

「お願いします、エリス様。もうこれ以上何も起こさないでください……」

イヤな予感が止まらないカズマがエリスに向けて祈る中、その答えを言うためにギルドの職員がやって来る。彼らの先頭には顔馴染みのルナがいて、彼女が職員を代表して

話を進め始めた。

「えつとその……本日はお忙しいところ、お集まりいただき、誠にありがとうございます。ベルディア討伐に参加した皆様には報酬が出ていますので、まずはそちらからお渡しします」

「よくやったな、お前達！ この俺を倒せたことを俺自身も祝福しよう！」  
「だから、倒された本人があたし達を誉めないでよ?」

ルナの話にベルディアが乱入して一悶着起きたものの、銀時達には報酬として小さな袋が手渡された。これは、ボス戦に参加した者に与えられる報酬で、そこその金額が入っている。それでも、万年金欠状態の長谷川にとつては十分過ぎる収入である。

「うお、やったあーっ！ ファイアーって叫んだだけでお金持ちになったぜえーっ！」  
「どっかのアナウンサーみたいだな」

普通の報酬を貰っただけでマダオは有頂天になっているが、この後にもつとすごいサプライズが待っていた。

魔王の幹部であるベルディアを討伐した功績により、3億エリスという法外な額の報酬金が与えられたのだ。

「さ、さ、さ、さんおくウウウウツッ!」

「よっしやるおーっ！ 今日から俺は億万長者だ！ 仕事もしなくて済むんだああ



あああああつ！」

「これからはカズマのように自堕落な生活ができるわね！」

「酒飲むために借金してるお前に言う資格はねえよ!？」 とはいえ、コイツらの言い分にも一理はあるな。俺も今後は、冒険の数を減らしていこうと思っている。金があんのに命を懸けて冒険なんかするもんか！ 俺はこのままのんびりと安全に暮らすんだ！」

銀時を始めとするマダオな主人公達は、速攻で金の魔力に敗北してしまう。長谷川に至っては、嬉しさのあまりに立ったまま気絶している始末である。

それに対して、安定した生活よりも危険な冒険を求めているめぐみんとダクネスが反論してくる。

「我が主よ、待ってくれ!？」 仕事をしないマダオな主にお金を貢ぐ女というシチュエーションも捨て難いが、強敵と戦えないのはもっと困るぞおーっ!？」

「ダクネスの言う通りです！ 魔王を倒して最強の魔法使いになるという私の野望を、こんなにもしょっぱい形で終わらせてなるものかっ!？」

「おやおや、これは困ったね。血の気の多い冒険者が野蛮なことを喚いてますよ?！」

「あらあら、本当に困ったこと。私達のようなセレブにとっては無縁な話なのにねえ?！」

「コイツらマジでムカつきますね……（怒）」

「くっ、確かにムカつく態度だが、何故かそれが心地イイ!！」

「俺もお前に同意する！　まるで、ゴミ見るようなあの視線が実に堪らん！」

こういう時だけ息が合うクスコンビに、短気なめぐみんが怒りに燃える。その反対に、ドMなダクネスとベルディアは卑猥な欲で見悶える。

なんにしても、大金を手に入れたせいで全員がおかしな心理状態になっており、周囲の冒険者達も巻き込んでどんどん盛り上がっていく。

しかし、その騒ぎに茂茂や桂達は加わっていない。その理由は、ルナが銀時に渡してきた紙の中に記されている。

「あ、あの～。皆さんで盛り上がっているところ、大変恐縮なのですが……これを受け取ってください」

「おっ、なんだ!?　そいつあまさか3億エリスの小切手か?!」

「なんですつってえーっ!?　ちよつと、私にも見せなさいよ!」

ルナの手から引ったくるように紙を受け取ると、密着してきたアクアや側に寄つてきためぐみん達と一緒に内容を確認する。すると、そこにはゼロがたくさん並んだ数字がドオーンと書かれていた。

ただし、それは彼らに支払われる報奨金ではなく、彼らが支払う弁償金だった……。

「えつと、その、なんスカコレ?　何かここに弁償代とか書いてある気がするんだけど。」

「これは一体どういうこと?」

「は、はい……。残念ながら、そこに書いてある通りです。今回、ギントキさん一行の……アクアさんが起動させた自爆装置による影響で、アクセルの外壁が広範囲に渡って崩壊し、付近の家々にも多大な被害が出ておりました……」

そこまで聞いた瞬間に、銀時は請求書を放り捨てて逃げだそうとした。

もちろん、無謀な逃走であり、必死なアクアやめぐみん達によつて阻止されてしまう。「おいコラ離せやバカヤロー!? この件に関しては、一切俺は関係ねえから!」 後始末はテメエら自身で責任持つてやりやがれ!」

「うわああああああんっ!? わだじのこを見捨てないでよギンドギざああああああんっ!」

「フツフツフツ! こうなれば、死なば諸とも! 借金を返済するまで、死んだつて離れませんよおーっ!」

「私としては、借金地獄も天国みたいなものだがな!」

「ああ、やつぱこんなオチかよコンチクシヨオオオオオツ!」

幸せの最高潮だった銀時パーティは、阿鼻叫喚の地獄へと一気に叩き落とされた。タミング悪く意識を取り戻した長谷川も、最悪のオチに衝撃を受けて再び気絶してしまい、セリフすら失う始末である。

それでも、往生際が悪い銀時は、八つ当たりするようにルナを問い詰める。

「これは一体どういうことだあ!! 魔王の幹部をブツ倒して街を救った俺達が、なんでこんな弁償金を取られなきゃならねえんだよ、おっぱい姉ちゃん!!」

「おっぱい姉ちゃんってなんですか!! 確かに、あなた方は私達にとつて命の恩人になりますけど、それとこれとは話が別です!」

「その通りだぞ、銀時よ。ここは素直に罪を認め、罰を受けるべきなのだ」

「邪魔すんじゃねえーよ、ツラ! 元はと言えば、自爆装置なんてふざけたもんを作りやがったテメエらのせいじゃねえーか!」

「そんなことは承知済みだ。俺と将ちゃんのパーティは、今回の失態を心の底から反省している。その証拠に、すぐさま現金を用意して近日中には全額返済する予定だ。その上、お金持ちの将ちゃんに至っては、さらに多額の寄付までも納めるつもりなのだぞ?」

それに引き換え、お前と来たら……カジノで大負けした挙げ句、真面目に働くミネアからお金を恵んでもらおうとするマーニヤのように憐れなだなあ? (笑)」

「こんの成金がああああああつ!! 俺だけでなくマーニヤまでデイスリやがって、一発当たりやあ金持ちなギャンブラーを舐めんじゃねえぞ!」

「お前の方こそ成金思考じゃねえーか!」

言い負かされた銀時は、バカにしてくる桂に当たる。お金を持っている茂茂達は、最初から弁償する気で昨日の内にギルドと交渉していたのだ。

ちなみに、飛び入り参加したクリスは、茂茂のパーティに入っている扱いなので、個人的な弁償は免れている。

「あたしだけ助かって何か悪いね〜!」

「ほんとに悪いと思ってるなら、テメエがこれを支払いやがれっ!」

「そんな横暴聞く分けない……って、なにこの金額?! こんなの初めて見たっていうか、10億って書いてあるけど?!」

「「「「じゅっ、10おくウウウウウツ?!」」」」

「ここですよやく請求額が判明して、あまりに法外な金額にビビった他の冒険者達が、そそくさと離れていく。」

常識的に考えて、一介の冒険者が支払える金額ではない。それを請求しているルナとしても大変心苦しいのだが、冒険者登録をしている以上はルールを守ってもらわなければならぬ。

「納得出来ないかもしれませんが、これでも全額の一割以下なんですよ? 弁償金の大部分は、貴族の方々に負担していただいたのですから、ここは我慢してください……」

銀時に言い聞かせるように裏の情報を打ち明ける。寄付した者の詳細は、高額のお金が絡んでいるため、基本的には公開しないことになっているのだ。

その点にちよつとだけ興味を持ったノルンは、因果をたどってみることにした。

《今時寄付をするなんて、どんな貴族様かねえ〜?》

裏に何かがあるんじゃないかと疑ったノルンは、女神の力で過去を見た。すると、多額の弁償金を負担したという貴族は、ダステイネスとアレクセイという二つの家だと思っ

た。王国の懐刀と呼ばれるほどの大貴族であるダステイネス家は、とある事情によつてアレクセイ家の領地であるアクセルの街に住んでいる。表側の理由としては、『有望な冒険者を多数排出しているアクセルの守護と管理を強化するため、国王直々に命じられて出張して来た』ということになっている。だが、本来の役目は、何かと黒い噂が絶えないアルダープの行動を牽制するための抑止力にあつた。

この地を治めるアレクセイ家の当主こそが悪名高きアルダープであり、今回何故か多額の弁償金を自ら進んで出している。

《茂茂やウイズの話だと、コイツはかなりの悪人らしいけど……》

噂とは正反対の善行に疑問を覚え、さらに詳しく見ることにした。

彼女の視点は昨日の夜へと跳んでいき、アルダープの屋敷のトイレを見ている。

そこには、便器に座って用を足しているアルダープと、彼の前に立っている猿顔の男がいた。

『やあやあ、お久しぶりである！ 悪いことができないストレスを発散するためにやけ

酒を飲み過ぎて、腹黒い腹の中まで荒れに荒れまくってしまい、何か月もの長い間、酷い下痢ピーに苦しんでいる、愚かなビチグソ領主よ!』

『なっ、なっ、なっ!? 貴様はルパルゴ13世!? こんなところにまで押し掛けよって、一体何しに来おった!? わしはお前に言われた通り、悪いことなどしとらんぞ!』

『確かに、そのようであるな。ビチグソと一緒に血の涙まで流しそうな貴様の顔を見ただけで、心の中がまるっと読めるぞ。金儲けも女遊びも禁じられて苦しんでいるその様は、愉快痛快この上ない。しかし、それではまだまだ足りぬわ』

『なっ、これでもまだ足りないだど!』

『ああ、そうだ。我輩は貴様にこう言つたはずだぞ。「きれいなアルダープ」になれとな。つまりは、悪いことをしないでだけでなく「良いこと」もしなければ、契約通りとはいかんのだ』

ルパルゴ13世と呼ばれた男は、ニヤリとしながらそう言うと、ジャケツトのポケツトから一枚の紙を取り出した。

『という訳で、良いことをしたいなあゝって思つたそのあなたに、絶好のチャンスを与えよう!』

『くっ、何が絶好のチャンスだつ!? どこまでもふぎけおって、こんな紙切れが何になる……こっつ、これは!? アクセルに発生した被害額の見積り書じゃないか!』

『説明臭いセリフをわざわざありがとう！ それは、先ほど届けられて貴様がガン無視を決め込んだ、復興援助の嘆願書である。きれいなアルダープを見てみたい我輩としては、被害総額の6割を可愛い孫にお小遣いを上げる感じで気前良く支払って、身も心も太っ腹であるところを示してほしいと思っている』

正しいことを言うように悪魔的な脅迫をする。どう考えても理不尽な要求なのだが、それでもアルダープに拒否権は無い。

『被害総額の6割だとおおおおおつ?! そんなことをしたら120億もの大金を失ってしまうではないか?!』

『なあに、そのくらい問題なからう。王都にある別荘に300億ほどの隠し財産を持っている守銭奴領主よ』

『ぐっ?! そんなことまで知っていたのか?! しかし、120億を失うなど……』

『ふむ。何やらお困りのようであるが、貴様には最初から選択肢など存在しない。何故ならば、ここへ来る途中で見かけた、ララティーナとかいう筋肉ムキムキな貴族の娘と、すでに約束しているからだ。その女は、アクセルに払う寄付金を貴様から借りようとしていたのでな。親切な我輩が貴様に化けて接触し、全額の6割を払ってやるから心配するなど言いきって、サインまでスラスラと書いてやったのだ。いやはやなんとも、我ながら機転の利いた行動だった。良いことをできるばかりか、片想いの相手にも良い人ア



ピールできるといふ、一石二鳥な好プレーだったのだからなあ。さぞかし貴様も我輩に感謝していることだろう。腹筋が割れている変態女を求め続ける物好き領主よ!」

『くっ……クソオオオオオオオオオオオオッ!!!!』

『フハハハハハ! ビチグソを垂れながら! クソオオオオオオオオオオオオオオと叫んでいるクソ領主の悪感情、味噌風味で美味である!』

こうして、悪い領主様は、正義の悪魔に脅されて、アクセルの街に120億エリスの寄付をしましたとき。

《つて、『とき』とか言ってる場合か!? どう見ても、このル〇ンはバニルのバカなんですけど?》

出来心で過去を見たら、とんでもない事実を知ってしまった。

《あの野郎、こんなところでウロチョロして目障りったりやありやしない! つーか、6割って何なんだよ! わざと全部払わせないで嫌がらせしやがって! これだから悪魔って奴はぶっ飛ばしたくなるんだよ!》

ウイズの話でバニルが絡んでいることは知っていたけど、こうやって関わってしまうと腹が立つて仕方がない。

冷静に見ると、ピンチを救ってくれた大恩人(?)でもあるのだが、ただでさえ能力が被っているノルンとしては、あんな奴など見たくもなかった。

《あーもうムカつく！ アイツのバカ面を見たせいで、イライラが止まらない！》

「(はあ、借金のせいでノルンまでおかしくなっちゃったのか？ なんか、バニルがどうか言ってた気がするのだが?)」

《ふんっ、あんな奴どうだっていいよ。地獄でサッカーやった時に、カグヤちゃんが放ったドライブシュートで住んでたお城をぶっ飛ばされたから、腹いせにアイツの黒歴史をネットで広めて悪感情を味わったけど、あまりに攻撃的なテイストなもんで10年も下痢ピーになったビチグソ野郎なんかのことは》

「(オイオイイツ!? そのカグヤって女神様、悪魔よりもヤバいんですけど!? 10年も腹を壊すって、どんだけDSな悪感情になってんだよ!? つーか、地獄でサッカーって、お前らほんとは仲良いだろ!?)」

またしても神と悪魔の間抜けなエピソードが発覚し、カズマの脳裏にどうでもいい知識が書き加えられた。

その一方で、これまでセリフが無かった近藤が、茂茂を相手にどうでもいい会話をしていた。

「ところで、将軍様。俺達が住んでいた家も吹っ飛んでしまいました。これからはどうしますか?」

「そうだな……。こうなっては、アクセルの街で家を買って、当座の拠点とするよりあるま

い」

「あつ、あの……。それでしたら、私のお店に来ませんか？」

いやらしいリッチーは、想い人の苦境を逆手に取ってちやつかり同棲しようとする。そんなラブラブ空間にKYなゴリラが割り込もうとするが、恋バナに反応したアクアが乱入してくる。

「助かりますよ、ウイズさん！ これなら、ウイザードリイみたいに馬小屋で寝泊まりせずに済みます！」

「はあ!? なに言ってるのよ、このゴリラ!? せつかくウイズが色気を出して将ちゃんを家に連れ込もうとしているのに、それを無駄にする気なの!? ここはしっかり空気を読んで、子作りできる環境を提供してやりなさいよ!」

「むっ、そうか!? お二人の気持ちも知らずに凶々しいことを言っただけありません！ 俺は馬小屋に行きますんで、將軍様はウイズさんと一緒に子作りをがんばって……」

「子作りの前に金を作れやアアアアアッ!」

「ぐはあーっ!」

多額の借金ができたというのに空気を讀まないバカ共を修正する。

「ははははは……これはきつと夢なんだ。こち亀みたいに次回になったら、借金なんて

無かったことになるに決まってるんだ……」

「そんなことあるわけねえだろ!! 頼むから、両さんみたいに天文学的な負債を作らないで!」

これ以上、恐ろしい状況になっては堪らないと思いつながら、カズマはこのろくでもない世界から脱出することを誓った。

中二病でも魔女がしたいつつーんなら、他の魔法も覚えやがれ

## 第28訓 氷属性のキャラクターは性格もクールガイ

時は巡って秋が終わり、冬が始まろうとしていた。

この季節になると、弱いモンスターは冬眠して手強いモンスターしか活動しなくなってしまうため、クエストの難易度も必然的に高くなる。無論、それだけ命の危険も増してしまうため、ベテランの冒険者ですら街の外に出ようとしないうるシーズンなのである。

飢えたモンスターだけでなく、大自然の脅威まで容赦無く襲い来る天然の地獄。そんな危険地帯にあえて出向くバカ野郎は、チート能力を持った転生者か、借金まみれで金が欲しい銀時達のような連中だけだ。

ギルドの掲示板を見て仕事を探す借金王は、碌なクエストしか無いことを確認してため息をつく。

「白狼の群れに一撃熊の討伐か……。どれもめんど臭えから、冬の間は、アクアをキャバ

クラで働かせて食いつなぐとするか」

「ちよっ!!」　なんで私がキャバ嬢なんてやらなくちゃいけないのよ!?　尊くも麗しい水の女神たるこの私を一体なんだと思ってるの!?!」

「なんでもナニも、お前は水商売の女神なんだから、キャバ嬢なんて天職だろ?」

「はい、そー来ると思っていました!　もうソレ私のあるあるネタになってますけど、水の女神とキャバ嬢を同列扱いしないでよ!?　そもそも、話が理不尽過ぎでしょ!?　なんで私がアンタに代わって稼いでこなくちゃ行けないのよ!?　甲斐性無しのマダオのためにキャバクラで働く女神とか、古今東西、どの話でも聞いたことがないんですけど!?!」

「黙れや駄女神!?!　テメエが自爆装置を使わなきゃこんなことにはならなかつたんだから、神らしく責任とってキャバ嬢でもなんでもしろや!?!」

意見の相違でケンカを始めた銀時とアクアが恒例の茶番を繰り広げる。周りの冒険者達も慣れたのか、興味を示そうとすらしらない。

その気持ちは仲間であるめぐみん達も同様で、バカな二人を放っておいて話を進める。

「それにしても困りましたね。狼や熊などといった雑魚ばかりしかなくて、1000万以上の報酬がある高難易度クエストが一つもありませんよ」

「困り方が俺達と違うお前の方が困るわ!?!　ベルディアなんて大物とやりあつたばかり

なのに、そんなクエストやりたかねえよ!」

「だけどよお、カズマ君。そんなくらい稼がなきゃ10億なんて払えないぜ?」

「ハセガワの言う通りだ。現状を打破するためには、たとえ危険なことをしてでも高額な報酬を稼がなければならぬだろう。もちろん、私はなんでもするぞ。どんなに危険な仕事だって喜んで受けてやる!」

「それはお前がやりたいだけだろ!? このパーティーの女性陣はたくまし過ぎてヘドが出るぜ!」

こんな時でもマイペースなめぐみん達にカズマも呆れてしまう。

それでも、お金が欲しいという点だけは残念ながら同意せざるを得ない。

10億という金額は銀時パーティーに課せられた罰でもあるので、自力で稼いだ報酬でしか返済することができない。ようするに、茂茂などから無利子で借りたお金で返すといったインチキができないのである。

すべてを返済し終えるまでは報酬からゴツソリと天引きされ続けることになり、貯金なんて夢のまた夢。まさしく悪夢のようなその状況は、馬小屋で暮らしているカズマと長谷川にとって死活問題であった。

「つたく、冗談じゃないぞ! これから本格的な冬が始まるつてのに、いつまでも馬小屋で生活なんかしてられるか! 今朝なんか、起きたらまつ毛が凍つてたんだからな!」

「まあ、俺は真冬でも裸で暮らせるほど耐性ができてるけど、実家に引きこもってたカズマ君には厳しいかもなあ」

「アンタも結構人間離れしてんな……」

同じ境遇のマダオは耐えられそうだが、か弱いカズマはマジでヤバイ。

これは本気でなんとかしなければ、フランダ〇スの犬みたいな悲劇が起きてしまう……。凍死して天に召される想像をってしまったカズマが最悪の結末を危惧している。と、馬小屋仲間の新入りである近藤が陽気な様子でやって来た。

「おう、朝っぱらから元気が無いなあ、カズマ君。サムライだったら、こういう時こそ気合を入れて、緩んじまったケツの穴を引き締め直すもんだぞ」

「いや、サムライとケツの穴は関係ないと思うけど。借金の無い近藤さんには、俺の惨めな気持ちなんか理解できやしねえんだ！」

「まあまあ、そういじけんよ。お金が欲しいお前達にちよつとした朗報を持ってきてやったんだから」

そう言うのと近藤は、手に持っていた紙を掲げた。

「……なんすかソレ？ 雪まつり？ 何か雪ダルマ的な絵が描いてあるけど、もしかして雪像を作る気ですか？」

「ああ、そうだ。これは以前、かぶき町で行われたことがあるマイナーな行事なのだが、



それを知っていた將軍様がこの地でもやってみたいと仰せになつてな。つつーわけで、【第一回キキキアクセル雪まつり】を開催することになった」

「はあああああああ!?!」

意外なイベントを持ってきたゴリラに、気分を害した銀時がつつかかす。

「おいこらテメエ、借金を將軍に払ってもらつた分際で調子に乗んなよクソゴリラ。不当に背負わされた借金でヒイヒイ言つてる俺達に、雪と戯れているような余裕があると思つてんのかあー?! つーか、その雪まつりは、銀魂の初期にやつた奴だろ!?!」

俺が作つたネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲で盛り上がった神回だろ!?! そんな時の成功を再現する気なんだろうが、そうは問屋が卸さねえ!

借金王の俺達には、金にもならない雪遊びをやつてるヒマは無えんだよ!」

「フン、金にもならないお遊びだと? 早とちりをする前に、この部分をよく見ろ。グランプリを取れば、賞金として1000万エリスが進呈されると書いてあるだろうが」

言われて見ると、確かに1000万エリスが進呈されると書いてある。

「このイベントは、慈悲深い將軍様がお前達のためにわざわざ用意してくださつた、貴重なチャンスなんだぞ? ウイズさんとイチャコラしながら楽しそうに準備していたのは正直言つて腹が立つたが、お前らは感謝して参加するべきだろう」

微妙な裏話にイラツとしつつ、雪まつりの開催理由を聞き入れる。グランプリを取る

必要があるとはいえ、確かにこれはオイシイ話だ。

この手の作業に自信があるアクアは元より、日本の文化を受け継いでいる紅魔族のめぐみんも話に乗ってくる。

「ねえねえ、銀時！ 私達もこのお祭りに参加しましょうよ！ 芸術でお金を稼ぐなんて私の主義に反するから、グランプリ級の一品を無料で提供してあげるわ！」

「何で無料にしてんだよ!! お前はすでに目的自体が間違つてんじゃないか?!」

「フッフッフッ！ 雪像とは、まさに行幸！ 空腹を誤魔化すために雪でご馳走を作り続けて身に付いた造形技術を、今こそ活かす時が来た！」

「お前に至つては、内容すべてがお祭りっぽくねえんだよ!? 黒歴史があまりに悲惨で流石の俺でもドン引きするわ！」

二人の思惑はちよつとばかりおかしかった。とりあえず、何時ものようにツツコミを入れる銀時だったが、こんなバカな奴らでも今回だけは頼りにしなければならぬ。コイツらが本気を出せば、マジでグランプリを取れるかもしれないのだ。

こうして、第一回キキキアクセル雪まつりに参加することにした一行は、気乗りしないカズマを除いて盛り上がっていくのであった。



時間は過ぎてお祭り当日。アクセルの正門前に作られた会場で雪まつりが行われていた。

アクセルの周辺にはまだ雪が積もっていなかったものの、街から離れた雪原地帯からウイズのテレポトで運んできた雪が辺り一面に敷き詰められて、アクセルの正門前だけ雪景色となっていた。

これだけ近ければ一般人も参加できるため、祭りの会場は1000万を求める挑戦者で溢れかえっていた。

そんな中、やる気が出ないカズマさんは参加を拒否してブラついていた。

「はあく……。俺は参加してないのに、なんでわざわざ寒い外に出て来なけりやならねえんだ？」

《もう。なに言ってるんだよ、カズマ君。もっとポジティブに行動しなきゃ、あそこにいるバカツプルのような明るい未来は掴めないぞ!》

「バカツプルのようになってたかねえよ! つーか、あの二人は將軍様とウイズじゃないか。この祭りの主催者なのに、参加しちゃってんのかよ!」

文化祭の準備で盛り上がる高校生のようなテンションになった彼らは、審査の対象外という形で雪像作りに加わっていた。

ちなみに、主催者側の一人である近藤は、ゴリラ警備員として真面目に働いており、現在では会場でナンパ行為を繰り返しているダストと揉めている最中だ。そんな彼がいるからこそ、このバカップルも安心してイチヤイチヤしていただけるのだ。

「あら、カズマさんじゃないですか。もしかして、私達の作品を見に来てくれたのですか？」

「えっ、あーうん、大体そんなとこだけ……二人はお互いの雪像を作りあっているのか」

「ああ、そうだ。こういう作品は、作りたいと思った物を素直に作るべきだからな」

「は、はい……私も素直に作りたいと思ったからシゲシゲさんを作りました」

「あーもう、お前ら爆裂しろ」

同棲を始めたばかりの初々しいバカップルは、ムカつくほどにイチヤついていた。一人もんのカズマとしては居心地が悪いつてもんじゃない。

「あ、あのー、シゲシゲさん。私の雪像の胸なんですけど、大きくし過ぎじゃありませんか？」

「そういうウイズ殿だって、余の雪像の股間部分をモッコリさせ過ぎではないか？」

「えっ、あつ、きゃーっ!!? これはそんなつもりじゃなくて!!? 立派な仕事をしてらっしゃるシゲシゲさんならアソコも立派じゃないかなあーとか、ちよっぴり想像してたと

「……バカツプルの作品はもう十分堪能したな」

「……バカツプルの作品はもう十分堪能したな」

《うんそうだね、カズマ君。バカツプルは放置して、次行ってみよー》

これ以上見ちゃいられないので、他の場所へ行くことにする。

ちよつぴりやさぐれたノルンと一緒にオラつきながら歩いていると、今度はめぐみんと遭遇した。彼女は自分をモデルにした雪像を作っているらしく、中二病のようなポーズを取った女性像が出来上がりつつある。

「あつ、カズマ。結局、ここに来たのですか。今日はギルドでダラダラしているとか言っていました、やはり私の作品が気になったようですね」

「えつ、あーうん、大体そんなとこだけ……その雪像って、お前なのか?」

「はい、そうです。魔王を討伐した最強の私をイメージして作りました。その名も勇者に相応しく【そして伝説へ】と名付けました!」

「うむ、どつかで聞いたことがある題名に突っ込みたいところだが、それよりも雪像自体に大きな問題があるな」

「ほう。素人の分際で我が傑作に文句を言うとは片腹痛い。まあ、私の仕事にミスがあるなんてことは万が一にもあり得ませんが、あなたの言う問題とやらを聞かせてもらおうではないか?」

上から目線で突っかかってくるめぐみんにイラツとしつつ、カズマは雪像の胸を指差す。

「ならば、あえて言わせてもらおう！ リアルなお前のおっぱいはあんなにポインじゃねエエエエツ!!」

「コンチクシヨオオオオオツ!!」 せつかく、私がバレないようにこつそり盛っていたというのに、思いつきりバラすなんて、あなたは悪魔ですかあーっ!!」

「まったくこつそりできてねえーよ!!」 おんぶしても無感触で『あなたの胸は一体どこあるんですか?』と問いかけてしまいそうになるくらいに貧乳をウイズみたいな巨乳に盛るとか、エリス様のパッドよりも悪質じゃねえーか!?!」

雪像の造形に理想を盛りまくっていたのを知って、いたたまれない気持ちになる。バカにされたためぐみんは『ぐぬぬ』と言って悔しがるが、これ以上突っかかれてもメンドイので移動する。

今度は、彼女の向かい側で作業している銀時の作品を見るとしようか。

彼が作っているのは、二つの玉の真ん中に先が膨らんだ棒を立てた……

「つーかソレ、チ○コじゃねえーか!?!」 子供も参加してるのに、アンタはなんつー下品なもんを迷いもせずに作ってんだ!?!」

「まったく、お前も新八と同じかよ。思春期のクソガキは、いつつもいやらしいことばっか

考えてやがっから、棒とか玉を見ると下品な想像しかしやがらねえ」

「じゃあ、そのチ○コにしか見えないブツは何だっというんだよ!」

「えっ、マジでコレが分からないの? コレはアレだよ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲と見せかけて、Vガンダムに登場したビッグキャノンだよ」

「結局、どっちもチ○コ型の卑猥な大砲じゃねえーか!? つーか、これを読んでる人にビッグキャノンって伝わるの!」

予想外の変化球にカズマも対応仕切れない。これまでのやり取りを見て『ビッグキャノン? なにソレおいしいの?』って思った人は「カイラスギリ」でググってみてね。『ググってみてね』じゃねえーだろオイ!?! なんかこつちが恥ずかしいから、こんなチ○コは壊してくれるわ!」

「ちよっ、コラ止めろ!?! その玉を作るのに何時間かかったと思ってるんだコノヤロー!?!」

暴走したカズマが片玉を蹴り飛ばして、卑猥なビッグキャノンが破壊される。

そんな騒ぎが起こる中、数件となりで作業をしていた長谷川がやって来る。

「なんだよオイ。ネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲と見せかけて、Vガンダムに登場したビッグキャノンじゃねえーか。完成度高えなオイ」

「こんなもんでどうして分かんんだ!? お前はマジでニュータイプか!」

もはや定番となった一連のネタを何の捻りもなくやってくるマダオに突っ込む。

「それより、そっちは終わったの? 何か余裕ぶってるけど」

「ああ、一通り完成したから、カズマ君達も見てみるか? こっちも結構、完成度高えぞオイ?」

やたらと自信ありげな態度で、銀時とカズマはイラツとしたが、それならばと見に行つてやる。

案内されて目的地に着くと、そこには長谷川をモデルにした3メートルくらいの雪像が立っていた。デザインを説明すると、背中に翼が生えたマダオが何故か全裸で片足を上げて飛び上がろうとしているようなポーズを取っている。

「つーか、アンタも自分の像かよ。どいつもこいつも自己主張が激しいなあ」

「へへへ……：我ながら恥ずかしいけど、以前失敗した【飛翔】って作品をリメイクしたくなつてな。タイトルも【飛躍】に変えて再挑戦してみたんだよ」

照れ笑いを浮かべる長谷川は、自信ありげに説明する。確かに、完成度高えなオイと言つても過言ではない出来映えである。

だが、彼は昔と同じ過ちを繰り返してしまっていた。どうしても彼の中の美意識に逆らうことができず、前に銀時の怒りを買ったチ○コまで再現してしまつたのだ。



「なんだあの粗末なチ○コは!! またテメエは性懲りもなく変なもんをぶら下げやがって! こんな汚え棒と玉を人様の前で見せんじゃねえって銀魂でも言ったでしょ!」

「確かに言っていたけどさあーっ!? 芸術にはこのくらいの自由な表現が……って、俺が弁解してる間に雪玉をチ○コに当てんじゃねえーっ!?」

銀時に投げられた雪玉が連続してマダオ像の股間に当たり、衝撃に耐えられなくなつたチ○コがもげてしまった挙げ句に、うつすら曇つた空に向けて勢いよく飛んでいく。「ああああああつ!? 俺の『マジでダンディーなおいなりさん』略してマダオがアアアアアアツ!」

長谷川の悲鳴が響き渡る中、マダオ像からもげたチ○コは放物線を描いて飛んでいき、隣でアクアが作っていた女神像の頭に刺さつた。

「きやああああああつ!? 私のチャームポイントにマダオのチ○コが刺さつたアアアアアアツ!」

女神像の髪の毛がクリンと結ばれている場所に下品な髪飾りが加わつてしまい、アクアの悲鳴が響き渡る。もうお分かりだとは思うが、アクアもまた自分をモデルにした雪像を作っており、そこにチ○コを刺されたら当然ながら激怒する。

「あんたって人はアアアアアアツ! 神聖なる女神の頭に何てことしてくれてんのよっ

!？」

「はあ？ ナニをしたって見りや分かんदार。頭がスツカスカな女神像をせめてゴージャスにしてやろうと思って、スタイリッシュに飛ばしたチ○コをオサレに飾ってやつただけだ」

「チ○コをオサレに飾っちゃうアンタの頭がスツカスカなんですけど!？」

どこまでもしらを切る銀時にムカついて、プンプンと怒ったアクアが突つかかっている。

客観的に見れば当然の流れだが、実を言うと、彼女の作った女神像にも大きな問題が存在していた。

ちよつとした出来心でスカートの中の作り込みを確かめてみたカズマが、その問題に気づいてしまう。まるで動き出しそうなほどに作り込まれた傑作だけど、ソコの部分まで本物ソックリだと、いろんな意味でヤバ過ぎる。

「なあ、アクア。お前の雪像も、本物と一緒にぱんつをはいていないのだから?」

「そんなの当たり前じゃない。私は完璧主義者だから、もちろんノーパン状態も完全再現しているわ! ドヤアーツ!」

「ドヤアーツ! じゃないわ、この痴女がアアアアアアツ!! 何かモザイクかかっているから、ひよつとしてーと思っていたけど、マジでやらかしやがったあーっ!!」

倫理に反する超危険な雪像を作っていたアクアに対して、男達が血相を変えて立ち向かっていく。

「そつ、そつだ！ となりにあるマダオ像をぶつ倒して、駄女神像の股間部分を隠すんだ！」

「ええい！ 長谷川さんには悪いけど、非常事態だからやむを得まい！」

「えっ!? ちょっと!? 止めてっ!? 俺の最高傑作をそんな理由で壊さないでエエエエツツ!」

長谷川の制止も聞かず、銀時とカズマによって足を破壊されたマダオ像は、となりにある駄女神像に向けてゆっくりと倒れかかる。その結果、負荷に負けた駄女神像も一緒に倒れてしまい、最終的には、仰向けに倒れた駄女神像の股間にマダオ像の顔面が覆い被さるような形になってしまった。

「ふいーつ、危ないところだった。これなら駄女神像の〇〇〇も見えねえし、このSSもR—18化しなくて済むな！」

「ああ、これにて一件落着だな！」

「「これのどこが一件落着なんだアアアアアアツ!」」

「つーかコレ、ヤバいよね!? お前達が暴れたせいで、余計に卑猥な状態になっちゃってる感じだよね!」

「うっせー黙れやチ○コ野郎！ このくらいのエッチい構図はT○ L O V E なんだっただよくあることだ」

「あつ、そーいえばあるわねって、納得できるかあーっ!？」

自慢の像を破壊されて、アクアと長谷川が怒り出す。自信作を台無しにされた点は同情するが、だったら最初から股間を隠しとけと言いたい。

そもそも、あんなR―18指定の作品では審査すらしてもらえない。

「何なんだよこの展開。審査する前から脱落者が続出しまくってるじゃねえーか……」

《今のところ、まともに見てもらえるのはめぐみんの作品だけだね。後はダクネスが残ってるけど……》

どう考えても不安要素しかない。何となくオチが読めてしまった二人は、互いに顔をしかめてしまう。

すると、噂をしていたダクネス当人がベルディアの頭を持ってやって来た。

「おお、これは！ アクアに襲いかかるハセガワを見事に再現しているな！」

「ほう、痴女と痴漢のコラボでくるとは。興奮度高えなオイ」

「いや、そんなもん作ってねえから!？ 二人そろって気持ち悪い勘違いしてんじゃねえーよ!？」

もはや、お友達状態になっているドMコンビに精神攻撃を受ける。

「ダクネスはともかく、ベルディアのオッサンまで参加してたのかよ」

「フン。俺だって、こんな幼稚なイベントに参加する気は無かった。しかし、ダクネスがどうしても協力して欲しいとお願ひするから、仕方なく手伝っただけなんだからなっ  
！」

「生首のオッサンがツンデレしてんじゃねえーっ!？」

ダクネスの手の上でモジモジしているベルディアを蔑むように突っ込む。頭だけでどう手伝うんだよという疑問が沸き上がったが、聞いても気持ち悪い答えが返ってきそうなので無視する。

「で、お前らの作った作品はどんな感じなんだよ？」

「フッフッフ、私達の合作もかなりのものに仕上がっているぞ」

「我らが技術を刮目し、驚き叫べ人間共よ！」

「ほう、そこまで言うなら、見せてもらおうじゃねえか。DM共の技術とやらを！」

ドヤ顔で語ってくるベルディアにイラついて、銀時達までついてくる。

果たして、人間とデュラハンによるコラボ作品はどんな風に仕上がっているのか。僅かな期待と大きな不安を抱きながら見てみると、そこにはとんでもない光景が広がっていた。

「さあ、見るがいい！ 敗北した女騎士に襲いかかる魔王の幹部を表現した私達の合作。

その名も【くっ殺】だ！」

「はいアウトオオオオツ!?」

やっぱりこんなになりました!

半裸状態になったダクネスに襲いかかるベルディアなんて、どう考えてもアウトである。

「これのどこがアウトなんだ!? 淫らな格好をした女騎士が目の前にいたら普通は襲いかかるだろう!」

「そう思うお前自体が普通じゃねえって理解しろや!」

「やはり、お前らもそう思うよな!? 普通は逆に魔王の幹部が勇者パーティにボコられて、気持ち良くなるパターンだもんなあ!」

「テメエの普通も普通じゃなくて、アブノーマルでしかねえーじゃねえーかあーっ!」  
「ぶるあああああっ!」

変なところに食いついてきたベルディアに堪忍袋の緒が切れた銀時は、彼を掴んで放り投げた。まさに手も足も出ない状態で自分の雪像に命中し、頭だけで必死に作った自信作も粉々に壊れてしまう。

「ふいーっ、危ないところだった。これなら、半裸の痴女が寝そべっているだけになるから、『ストーリーキングしてますけど、それが何か?』的に誤魔化すことができるな!」

「全然誤魔化せてねえっつーか、別方向でヤバいだろソレ!」

「そこが素晴らしいのではないか! 破壊から新たな可能性を生み出すとは、流石だな我が主!」

「カツコいい言い方しても、誤魔化せてねえーからな?」

「やっぱり、変態達からは変態的なものしか生まれなかつた。

結局、めぐみん以外は戦力外状態となり、1000万を手に入れる可能性はほぼ無くなった。何故なら、必勝のデザインを仕入れた桂が参加しているからだ。

「まったくもって、相も変わらず騒がしい連中だな。その程度の覚悟でグランプリを狙うなど、甘過ぎるにもほどがある。芸術とは自身の心を写し出す鏡のようなものであり、心が定まらぬ未熟者には名作など作れぬと、ゴリラ原作者も言っていただろう?」

「くだらねえウソついてんじゃねえーよ!? アニメの最終回で『チーズ蒸しパンになりたい』とかほざいてたゴリラ野郎にそんな名言は無え! つーか、なにしに来たんだ、ツラー!」

「ツラじゃない、カツランジエロだ!」

某有名な彫刻家を気取った桂が唐突に挑発してきた。

「カツランジエロでもアスラン・ツラでもどうだっていいが、お前もこの雪まつりに参加してんのか?」

「当然だろう。祭りと聞いて参加せぬ攘夷志士がどこにいる。そんなわけで、俺達も素晴らしい作品を用意した」

あからさまなドヤ顔が銀時達の怒りを誘う。

とにかくすごい自信だが、どうせコイツが作ったものなど、たかが知れているだろう。いつものようにバカにしながら確かめに行ってみると、そこには期待を裏切るような傑作が待っていた。まるで、時代劇に出てくるサムライのような姿をしたその雪像のモデルは……

「紳士的な振る舞いと端正な顔立ちで、この世界の奥様方にも絶大な人気を誇る【冬將軍】だー!」

「『冬將軍って何だアアアアアアアツ?!』」

いきなり出てきたオチキャラに銀時達がビックリする。

「何でテメエは冬將軍を勝手にデザインしてんだよ!! つーかコレ、どう見ても松○健ただけだ?! 冬將軍つーよりも、暴れ○坊將軍的な感じになってんじやねえーか?!」

冬將軍の雪像を見た銀時は、桂のボケだと思い込んで突っ込みを入れる。しかし、それは間違いであり、真相を知っているアクアがドヤ顔で説明する。

「待ちなさいよ銀時。あのマツ○ンそつくりの冬將軍は、桂の妄想なんかじゃないわ。



この世界に実在する冬の精霊よ」

「はあーっ!? 冬將軍が精霊って、どこまでふぎけた世界なんだよ!」

アクアの話の話を聞いても納得できなかったが、真実なのだから仕方がない。この異世界の精霊には、冬將軍なんてふぎけたモンスターを生み出してしまいう厄介な能力があるのだ。

本来の精霊とは、実体を持たないデジタルデータのような存在なのだが、接触した人間達が想像した「自分の姿」を読み取ることで不確定だったデータが固まり、その姿へと実体化することが可能となる。

ようするに、この世界にいる冬將軍は、冬の精霊と出会ったどこかのバカが『冬と言えば冬將軍。將軍といえば松○健。それを合わせて暴れん坊冬將軍って感じになったらマジウケる』と連想して生まれた存在だった。

話を聞いて状況を理解したカズマが、元凶と思われる人物を指摘する。

「つーか、コイツを生み出したのは、アクアが送った転生者だろ?」

「ええ、そうよ? 真冬にクエストをやるようなバカなんて、チート能力を持った転生者ぐらいいしくないもん」

「結局、お前の仕事じゃねえーか!」

オチまで聞いたら最終的にアクアへと行き着いた。冬將軍とやらがどれだけ強いのか

か分からないが、コイツは魔王軍より厄介な敵を作りまくっているんじゃないかと思わずにはいられない……。

バカらしい真実を知ってしまった銀時達が呆れる中、騒ぎを聞き付けた茂茂達とめぐみんまでやって来た。

「おお、これは！ 昨日出会った冬將軍の像ではないか。完成度高えなおい」

「なにそのキャラを無視した反応!? 將軍は冬將軍と会ったことがあんのか!」

「ああ、そうだ。よもや、この異世界で尊敬すべきご先祖様と出会えるとは思わなかったぞ」

「いやいや、それは違うから！ コイツはマツ○ンのパチモンであって、アンタのご先祖じゃないからね!」

暢気なことを言う茂茂に銀時も呆れてしまう。

とはいえ、本物の冬將軍とエンカウトしたという話は、あまり穏やかではない。そこが気になったためぐみんは、茂茂に質問した。

「ちよつといいですか？ どうやら昨日、冬將軍と遭遇したようですが、もしかしてその時に討伐したのですか？」

「いや、討伐はしておらぬ。というより、できなかったという方が正しいな」

「ほう、冬將軍ってのはそんなに強いのか？」

「ああ……情けないことに、余は一瞬でやられてしまつてな。詳しいことは、共に戦つた桂の方が知つている」

「無様に逃げ帰つた話など聞かせるものではないのだが、反省の意味も兼ねて語つておこうか……」

目を閉じた桂は、思い出すように回想を始めた。

あれは昨日の出来事だつた。

将ちゃん、ウイズ殿、近藤の三人は、雪まつりに使う雪を集めるために、街から離れた雪原地帯へと足を運んでいた。俺とエリザベスは、彼らの手伝い兼護衛として同行し、男共が必死こいてかき集めた雪山をウイズ殿のレポートで転送するという地道な作業をひたすらこなしまくつた。

そうして、必要な雪を確保し終えた頃。ようやく一息ついた俺は、周囲を漂っている白い毛玉に気を取られていた。ウイズ殿の話によると、雪深い雪原にしか現れない雪精という名の弱いモンスターらしいのだが、何故か無性に気になったのだ。

『何ていうか、あざといまでに狙いまくつた可愛い系のデザインが返つてムカつくな(怒)』

「つて、気になるところがおかしくね!？」

確かに、お前の言う通りだ。たとえば、あざといキャラだとしても寛容な心でもって見逃してやるべきだった。だが、その時の俺達は、長時間に渡る過酷な労働によつてワーカースハイな状態になっていた。

その結果、高揚した気分流されるままに、雪精共を一匹残らず皆殺しにしてしまったのだ。

「オイイイイツ!? どう見ても、生態系を壊してるクソ野郎なんだけど!? 少しぐらいは自分のキャラを守るようにしてくれよ!」

確かに、お前の言う通りだ。たとえば、面倒臭くても勇者王という己のキャラを守り通すべきだった。だが、調子に乗った俺達は、ドラクエの勇者みたいに好き勝手に暴れてまくつて眠れる獅子を怒らせた。

その災厄は、雪精が全滅した後に音も無く出現した。疲れていたせいで俺達の凶行を止められなかったウイズ殿は、最悪の事態になったことを悟つて必死に知らせてきた。

『皆さん早く逃げてください! あれは冬將軍という名の恐ろしいモンスターです!』

『なに!? あれが冬將軍だと!』

『はい、そうです! 通常なら謝れば見逃してもらえますが、守護している雪精をあれだけ倒してしまつたら、恐らく許してもらえません! だから、早くここから逃げて!』

サムライのような姿をしたソイツは、ウイズ殿の言葉を肯定するように、凄まじい殺

気を放ちながら歩み寄ってくる。リッチーが恐れるほどの力を持ったモンスター。それがこの、松〇健にそっくりな冬將軍だった。

『まっ、まさか!?! かの有名な冬將軍の正体が松〇健だったとは!?!』

「デメエはどこに食い付いてんだよ!?! 今はそういう場合じゃねえーだろう!?!」

確かに、お前の言う通りだ。たとえ、松〇健にそっくりでも敵であることを忘れてはいけなかった。だが、不意を突かれた俺達は、松〇健みたいな容姿に惑わされて戦闘体勢に移るのが遅れた。

その迷いが、致命的な隙となつて、近くにいた将ちゃんとな近藤は、なすすべもなくやられてしまう。

『ぐはあーっ!?! なんて異世界で暴れ〇坊將軍にやられるんだアアアアアッ!?!』

『がはあーっ!?! 流石は余のご先祖様、見事なまでの暴れっぷりに感服しました!』

「つて、將軍とゴリラがマツ〇ンにやられたアアアアアッ!?! つーか、なんで切られたのにパンイチで済んでんだよ!?! もしかして冬將軍は、つまらないものを切りたくない五エ門的なキャラなのか!?!」

いや、この世界はそこはかとなくゲームっぽい感じだから、ルパンネタというよりは、魔界村のようなシステムでも働いたのだろう。

だからと言って、二度目以降もギャグが効くとは限らない。気絶した将ちゃん達に止

めを刺そうとしている冬將軍を止めるべく、俺とエリザベスは立ち向かった。

『相手はあの松○健だ！ 油断するなよ、エリザベス！』

「大丈夫ですよ、桂さん！ あんなパチもん、マツ○ンサンバを踊りながら成敗してくれるわ！」

俺達は、威風堂々としたマツ○ンの存在感に圧倒的されながらも奮戦した。

しかし、奴は、想像以上に強かった。こちらも全力で戦ったが、浅い傷をつけるのがやつとで、ほとんど防戦一方だった。

『くっ！ なんと!? これではこちらがマツ○ンサンバを踊らされているようではないか!』

「何か返って余裕を感じるんだけど!」

お前の目は節穴か。どう見ても勇者王がピンチに陥っている感じじゃないか。

頼みの綱であるウイズ殿のテレポートも、冬將軍を足止めできなければ使うことができず、八方塞がりの状態に陥りかけていた。

そんな時だった。藁にもすがる思いだった俺は、雪原に横たわる将ちゃんと近藤を見て起死回生のアイデアを唐突に思い付いた。銀魂・第344訓「拙者をスキーに連れてって」のアレを使えば、絶体絶命なこの状況も打開できるんじゃないやね? ってな。

「えっ、344訓って、まさかお前……」

ああ、そうだ。貴様が想像した通り、俺達は動いた。

んまい棒・混捕駄呪（コーンポタージュ）の煙幕で冬將軍の視界を奪うと、慌てるウィズ殿を小脇に抱えて、うつ伏せに倒れている将ちゃんの背中に乗った。こうして「人間ボード」をゲットした俺は、軽やかに雪原地帯を滑走して、その場から脱出したのだ。

「やっぱ、ソレかよオオオオオツ!! コイツ、マジで人間ボードを再現しやがったあーっ!?」

しかも、一人だけじゃないぞ。エリザベスも後に続いて、ゴリラ型の人間ボードをぶつつけ本番で乗りこなし、俺達は危ういところで難を逃れたのだ。

「約二名は別の意味で難を逃れてねえじゃねえーか!？」

桂の長い回想は、やっぱりおかしな内容だった。

ただ、命からがら逃げのびて来たという話は本当らしく、めぐみんの証言もその事実を裏付けていた。

「まさか、カツラほどの達人でも敵わないほどの手練れだとは。国から高額の賞金をかけられるだけありますね」

「ほう、高額 of 賞金ってどれくらいだ?」

「えつとですね……確か今は、2億くらいだったと思いますけど」

「よし、分かった！ 今からソイツを倒しに行こうぜ！」

「さっきの話を忘れたのかよ!? ツラっちでも逃げ出すような化けモンとやり合うんざ、俺あゴメンだぜ!」

桂の回想を聞いてビビったマダオは、賞金に釣られたリーダーに文句を言いながら冬將軍の雪像を見る。

松○健に似てるっただけでも厄介なのに、マジで暴れ○坊將軍のように強いなんて、これ以上は関わり合いになりたくない。

「……って、あれ? なんか冬將軍の雪像がもう一個増えてんだけど? こんなに完成度高えもんをもう一個作ってたのかよ、ツラっち?」

「ツラっちじゃない、桂だ! というか、雪像は一個しか作ってない……ぞ……ぞ……」

おかしなことを言う長谷川に言い返そうとした桂は、雪像の方を向いて言葉を失う。なんと、そこには、もう一体の冬將軍が立っていたのだ。

もちろん、それは桂達が作った雪像などではない。冷たい殺気を静かに放つあの白いサムライは……本物の冬將軍だった。

「くっ、ヤベエツ!!」

「へっ?」

いち早く異変に気づいた銀時が、長谷川の襟首を掴んで後ろに引つ張る。その勢いで





「なっ、なんでですかアレは!? 冬將軍の全身が氷で覆われて……見たこともない甲冑姿に変化しましたよおっ!?」

めぐみんが言うように、冬將軍の身体が一瞬で変化して、松○健の姿から日本風の甲冑を着た鎧武者の姿になった。

それと同時に、放たれる殺気も禍々しくなり、慣れていないカズマは身体が固まってしまう。

「なん……だと……。マツ○ンからさらにパワーアップするなんて……」

《どうやら、銀時達の強い闘気に刺激を受けたみたいだね。普段は貧乏旗本の三男坊として雪精をいじめる悪人共を懲らしめているけど、本気で戦うべき好敵手と出会った時は、征夷大將軍として合戦の支度を整えるんだ》

ノルンは冬將軍の状態を簡潔に説明した。

サムライに擬態している冬將軍は、本物のサムライである桂達と出会ったことで本能が刺激され、今は頭に血が上った興奮状態にあった。普段は来ない街の前までわざわざ追ってきたのも、武器を持たない長谷川を躊躇せずに切ったのもそのためだ。

無論、桂にとっても想定外な事態であり、楽しい祭りを台無しにした冬將軍を罵る。

「ええい、なんたることだ! よもや、ここまで陰湿なストーリーカーであったとは! まるで、近藤のように気持ち悪いヤツめ!」

「そこで俺をデイスんじゃねえーと抗議したいところだが、そんなことより、將軍様！

この場は俺達が引き受けるので、ウイズさんと一緒に一般人を避難させてください！」

「相分かった。余が戻るまで死ぬでないぞ」

「了解しました！ もう誰一人として死なせはしません！」

騒ぎを聞きつけて来た近藤と入れ替わるように、茂茂とウイズが離れていく。

すると間もなく、状況を知った者達が次々と騒ぎ出して、この場から逃げ出した。

「ほほほほ、本物の冬將軍だアアアアアッ！」

「きゃーっ!? 殺されるウウウウウッ!?」

「わわわわ、私もみんなと逃げなきゃ……」

「駄女神はここに残ってホイミを使いまくってくれや」

「ええっ!? しよんなくっ!?」

DOG EZAしても見逃してくれないと悟ったアクアが騒ぎに紛れて逃げ出そうとするが、すぐに気づいたカズマによつて未然に阻止される。蘇生魔法が使える彼女を後方に逃がすのも強ち間違いではないのだが、コイツだけを安全な場所に行かせるなんて我慢ならねえ。

第一、もう冬將軍の攻撃が始まってしまったので、迂闊に逃げ出す方が危ない。

「どうやら、コイツあ殺る気満々のようだぜ！」

「ならば、こちらも全力で立ち向かうまでだ！」

銀時と桂が真っ先に飛び出して、襲ってきた冬將軍と激しい戦闘を繰り広げる。そこに近藤とエリザベスも加わって、サムライ同士の激しい死闘が異世界で幕を開けた。

無論、そこにダクネスも加わるうとするが、それはあまりにも無謀だった。

「我が主！ 私と共に戦うぞ！」

「お前は来るんじゃないやねえっ！ ドMなら言うこと聞いて、お預けプレイをしてやがれっ！」

「くっ……我が主がそう言うなら、悔しいがお預けすりゆしかあるまい！」

止められたダクネスは、ちよっぴり喜びに震えながらも銀時の本意を察する。只でさえ実力不足な上に、ベルディア戦で失った鎧も新調していない状態では、自分から殺さるに行くようなものだからだ。

それほどまでに本気を出した冬將軍の戦闘力は凄まじく、実際に戦っている銀時達も苦戦している。今はまだアクアの援護で持ちこたえているが、薄氷を踏むようなバランスがいつ壊れてもおかしくない。

このままではマジでヤバいぞ。焦ったカズマは、何とか現状を打開するべくアイデアを振り絞る。

「なあ、めぐみん。お前の爆裂魔法で冬將軍を倒せないか？」

「残念ながら、それは無理です。見た目こそ人型ですが、あれの正体は精霊ですから。元々が魔力の塊みたいな存在ですし、魔法防御も半端無いので、恐らくは一撃で倒しきることができないはずですよ」

一番有効だと思われた方法は、速攻で否定された。

こうなつたらもう、ノルンに頼るしかない。彼女はそこそこスパルタであり、余裕がない時以外はほとんど手助けしないのだが、助けを乞えばドラえものの如く出てきてくれる。

「（おい、ノルン！ アイツを倒す方法を教えてくれっ！）」

《よろしい、ならば教えよう！ アイツを倒す方法は……》

早速ノルンから攻略法を聞き出すと、急いで銀時達に知らせる。

「銀さあああああんっ！ 何とかして冬將軍の首を刎ねてくれ！ 実体化した精霊は弱点もコピーしてるから、サムライがもつとも【死】を意識する首を刎ねた状態にすれば、矛盾を感じた肉体が不安定になる！ その時にめぐみんの爆裂魔法を叩き込めば、冬將軍を倒すことができるはずなんだ！」

「よっしゃ、分かつた任せとけエエエエエッ！」

勝機を得たサムライ達は、さらに力を増していく。

それでも、冬將軍の首を取るのは至難の技であると、ダクネスの手に乗つたベルデイ

アは懸念する。

「まさか、冬将軍がこれほどまでの手練れだったとはな……。俺を倒したギントキと言えども、ヤツの首を刎ねるのは容易ではないぞ。後もう一手、冬将軍を攻める手段があれば……」

戦況を分析したベルディアは悔しそうに呟いた。彼の言う通り、もう少しで冬将軍の隙を作れそうなのだが……。茂茂が戻ってくるまで、みんなは耐えられるだろうか。

この時カズマは、自分の非力さを痛感してうなだれた。

《そこでボクの出番だね！ 運命を見通す力で明るい未来を切り開こう！》

「（なんだその胡散臭い勧誘みたいなアピールは？ 普段は俺が頼んでも『この力はくだらん願いに使うものではない』とか中二病みたいなことを言っつて、全然使わせてくれないくせに）」

《そりゃあ仕方ないでしょう。どんなに万能な力にも弱点はあるからね。個人的な欲望を満たすために力を使って未来を変えたら、その分どこかに歪みが生じて、思いもよらない悪影響が返ってくることもあるんだ。只でさえ銀時やアクアといったトラブルメーカーがいるんだから、余計な不安要素は極力減らすべきでしょ？》

『今頃それを説明するの？』とカズマは呆れてしまったが、一応筋は通っている。

銀時やアクアがいるせい、運命を見通す力にもおかしな影響が出てしまい、不確定

なアクシデントを警戒したノルンは、あまり力を使わないように心掛けていたのだ。今回の騒動を事前にキヤツチでできなかった理由がそこにあるのだが、そうせざるを得ない事情もあつたというわけだ。

《たとえば、前回起こつたアクアの自爆をボクの力で止めていたらどうなつていたと思う？ 金持ちになつた銀時がさらにカジノで一山当てる、調子に乗つた両さんみたいに働かなくなつちゃうんだ。その結果、彼が本来倒すはずの強敵達が生存しまくり、最悪の場合は、この国が魔王軍に負けていたかもしれないんだよ。だからボクは、安易な気持ちで未来を変えられないんだ。たとえ、君達の未来にボンビーという運命が待ち構えているでもね》

「なんかそれっぽく言ってるけど、俺達にボンビーを強いているだけじゃね!？」

今の説明は、イマイチ納得できなかつた。

それでも、ここは彼女の力を頼るしかない。この戦いを生き残るには、多少のリスクも覚悟する必要がある。

《とりあえず、冬將軍を倒さなくちゃならないからね。ノルンの言うこと聞いて欲しいな、お兄ちゃん?》

「(よし分かつた、カズマお兄ちゃんに任せとけ!)」

不審がるカズマだったが、最後はあざとい妹アピールで陥落した。

どちらにしても、ノルンと共闘するしかないのだ。前に彼女の力を頼って髪の毛をしり取られた経験があるものの、今はただ、これ以上の不幸が起きないことを祈るしかない。

《それじゃあ、作戦を説明するよ。まずは、アクアをどこによこによこによ……》  
「ふむふむなるほど……」

銀時達と冬將軍が激しい戦闘を繰り返している中、こつそりと打ち合わせをしたカズマは早速行動を開始する。

ノルンから言われた通りにアクアの背後から近づいて、彼女の肩をガシツと掴む。

「うきやあああああつ!? つて、なにすんのおエロニート!? こんな時にセクハラなんて、アンタはどこまでエツチなの!? カズマさんからエロマさんに変態でもする気なの!?!」

「誰がエロマだコノヤロー!?! つーか、これはセクハラじゃねえ! お前に頼みがあった来たんだ!」

「はあ? 頼みって何なのよ? お金だったら絶対に貸してあげないわよ?」

「お前から借りようなんざこれっぽっちも思ってたねえよ!?! そんなことより、俺の話聞きやがれ!」

ムカつく反応ばかりする駄女神に怒りながらも、伝えるべきことを急いで話す。



「いいか、アクア。俺がいいと言うまでは、ここで動かずじっとしてろ。これは決してフリじゃねえぞ。笑いのフリと勘違いしてダチヨ○倶楽部のように笑いを取りにいきやがったら、お笑いレベルなお前の頭が笑えない感じになっちまうから、マジで頼むぜ！」  
「えっ!? えっ!? なにそれ、どういうこと!? 私の頭をデイスリながら不吉なことを言ってますけど!? 一体、私にナニする気なおーっ!?」

「お前には何もしねえよ! とにかく、ここでビシツと立ってろ! 上手くいっいたら今日の晩飯奢ってやるから!」

「えっ、ほんと!? お酒の飲み放題も追加してくれたら、やってあげないこともないわ!」

「ああもう、分かった! 酒でも何でも追加していいから! 絶対にそこから動くなよっ!」

ノルンの指示に従ってアクアのポジションを固定する。

こんな時に意味不明なことをして、一体何を始めるのか。めぐみんとダクネスは、怪訝な顔でカズマの奇行を見ていたが、今度はその彼女達にも声がかかる。

「おーい、めぐみん。お前はすぐに爆裂魔法の安全圏まで後退して、詠唱をしてくれ」

「えっ!? あっ、はい! 了解しました!」

「そんでもってダクネスは、長谷川さんのオッサン部分と本体のグラサンを持って、めぐみんと一緒に下がってくれ」

「う、うむ、分かった！ こちらは任せる！」

唐突にリーダーっぽくなったカズマに対して感心しながら動き始める。無意識の内に女子の好感度を上げる辺りは、コイツも十分ラノベの主人公である。

「よし、準備はこれで終了。後は、俺の幸運次第だな」

そう言いながら、アクアの少し後方にゆっくりと移動して、背負っていた弓矢を装備する。一応、街の外に出るので、いつものように武器を持ってきたのだが、これぞまさしく、備えあれば憂いなしだ。

《それじゃあ行くよ、カズマ君。チャンスは一度きりだけど、君なら絶対成功するよ！》  
「ありがとよ、相棒！ ロックオン・カズマトス、目標を狙い撃つぜ！」

調子に乗ってガンダムマイスターを気取りつつ、装備した弓を構える。

狙うは、アクアの向こうにいる冬將軍の目。

《……今だっ!!》

「【狙撃】 ツ!!」

タイミングを計っていたノルンの合図で必殺の矢を放つ。

カズマの幸運によって命中率が上がった矢は、アクアの頭上にある髪の毛の輪っかを

通過して、その先にいる冬將軍へと真つ直ぐに向かつていく。

標的である冬將軍は、銀時の猛攻を回避した直後であり、タイミング良く顔を上げた瞬間に矢が飛び込んできた。完全に虚を突いた攻撃であったため、流石の冬將軍でも避けられず、飛んできた矢が無防備な右目に突き刺さる。

ぶつちやけると、アクアは照準であると同時に目隠しでもあったのだ。

「きやーっ!? 私のチャームポイントを何かがかすめていったあーっ!?」

暢気なアクアが騒いでいるけど、彼女の尊い犠牲（笑）は無駄ではなかった。

予期せぬ攻撃が決まったことで冬將軍の動きが鈍り、その一瞬が致命的な隙となった。

これぞまさしく、千載一遇の好機。ギリギリのところまで勝機を得た桂は、迷いもせず踏み込んで、刀を持った右腕をすれ違い様に切り落としていく。

「今だ行け! 一気に畳み掛けるオオオオオッ!」

冬將軍の前方を駆け抜けながら桂が叫び、入れ違うように突撃して来た近藤とエリザベスが、冬將軍の足と胴を切り裂いていく。

「これでしばらく動けまい!」

「この間に殺つちまえ!」

全身傷だらけの戦友達が、銀時に見せ場を譲る。そんな彼も血まみれだったが、眼光

は鈍るところか鋭さを増していた。

「2億エリスをゲットするため、お前の首を取らせてもらうぜっ!!」

いろんな意味で目の色を変えていた銀時は、妖刀・星砕を振り抜いて、動けなくなつた冬將軍の首を刎ねた。

すると間もなく、冬將軍の身体が崩れていき、人の形を保っていられなくなっていく。「よっしゃ、予定通りだ! 今の内にここから離れて、アイツを爆裂しようぜ!」

カズマの声に合わせるように銀時達は駆け出した。いつ復活するかも知れないので、早く止めを刺すべきだろう。

準備をしていためぐみんは、みんなの期待に応えるべく最後の仕上げに取りかかる。

「まさか、冬の精霊まで爆裂する機会が巡ってくるとは思っていませんでしたが、最強を目指す私にとっては望むべき好機です! 乗るしかない、このビッグウェーブに!」

「いいから、さっさとやれえーっ!」

何やら恍惚の表情を浮かべてクネクネしているめぐみんを急かす。お願いだから、余計なフラグを立てないで、この一発で決めてくれ。

「【エクスプロージョン】 ツツツ!!」

カズマ達の祈り込めて最強魔法が爆裂する。通常の状態なら二、三発食らつても耐えられるが、実体化した身体が「死んでいる」と認識している今の状態ではひとたまりも

ない。

業火に焼かれ肉体を失った精霊は、実体の無い元の姿に戻って冬の空へと消えていった。精霊自体は不死だから、その内どこかで復活するのだろうか、もう二度と関わることはないと願うばかりである。

「ふいーっ！ やっぱ、暴れ○坊將軍は伊達じやねえな……」

やつとのことで死闘を終えて安堵した銀時は、長谷川の様子を見ているアクアの元へ歩いていく。

「何にせよ、ボスキャラは倒したから、後は死んじまった長谷川さんを生き返らせるだけだな。つーか、お前のザオリクって壊れたグラサンにも効果あんの？」

「そんなの私にだって分からないわよ。とにかく、やつてはみるけど……」

銀時に返事をしようとしたアクアは、彼の方を振り向いた。

その直後にとんでもないアクセントが起きてしまう。空から降ってきた冬將軍の刀が銀時の頭に突き刺さったのだ。それは、冬の精霊が勝利者を称えて残していたドロップアイテムなのだが、ドロップの仕方が鬼畜だった。

派手に血を吹き出しながらぶっ倒れた銀時を見てみんなが呆然とする中、いち早く正気に戻ったカズマが叫ぶ。

「銀さんが死んだあああああああつ?!」

「「「ええええええええええつ!」「」」」

あまりにあり得ない主人公の死に様に全員が驚く。ボスを倒した後のイベントで仲間が死ぬとか、普通は感動的な演出で盛り上がるところなのに、なにこのしょっぱい空気感。

悲しいのに悲しめない複雑な心境の仲間達は、みんなで顔をしかめながら銀時の死体を見つめた。



死んでしまった銀時が意識を取り戻してみると、辺りの景色が一変していた。

彼が立っている場所は、先ほどまでいた雪まつりの会場ではなく、アクアと最初に出会ったような不思議な空間だった。そう思うのは当然で、ここは異世界を管轄している天界の施設だからだ。

もちろん、彼の眼前にはあの時と同じように女神が椅子に座っている。銀色の長い髪が特徴的な、見目麗しい女神様が。

「坂田銀時さん……。ようこそ死後の世界へ」

「はあ? いきなり出てきてなに言ってるの? 困碁の世界にや興味ないって、前にも

言ったと思うんだけど？」

「いや、あなたの方こそ、初対面の私になにを言っているんですか!? そもそも、囲碁じゃありませんし、前に言った相手ってアクア先輩ですよね!」

アクアと同じく初登場を台無しにされた女神様がプリプリと抗議する。

カズマなら可愛らしく怒っている美少女を見てホッコリしているとところだが、性格が歪んだドS野郎は、相手が完璧美少女であつてもキャバ嬢と接するような反応しかしなかった。

「つーか、ココはどこなんだよ？ 随分とまあ悪趣味な場所に瞬間移動させやがって、おもてなしの精神が無いんですかコノヤロー」

「なっ、悪趣味とはなんですか!? ここの作りは上層部の意向であつて、私の趣味ではありません！ 私だつたらもつとこう、誰もがホツとできるような素敵なお部屋に……」  
「ちよつと待てや、銀髪ネーチャン。お前の趣味を聞いた覚えはこれっぽっちもないんだけど。そこまでガツツリ食いつくとか、お前も不満があつたんじゃね？」

正体不明な美少女の意外過ぎる反撃に銀時の方が押されてしまう。

しかし、不思議と違和感がない。理由はよく分からないが、この奇妙な少女とは初対面な感じがしないのだ。

「なあ、お前。どっかで俺と会ったことがあるんじゃないか？」

「ギ、ギクツ!? そそそそそ、そんなことはありませんよおー!? 私とあなたは、ここで初めてお会いした初々しい関係ですっ!」

「えー、そっかなー? お前の顔にも見覚えあるし、声もすんごい聞き覚えがあるんだが……」

「あ、あははははっ! 興味深いお話ですけど、それは私じゃないですからねっ!? 世の中には、同じ顔をした人物が三人いると言いますからっ!? たぶん、私のソツクリさんと勘違いしてるだけですよおーっ!」

変なところで鋭いドSに女神は冷や汗を流す。

この人にバレると色々面倒になる気がするので、なんとか誤魔化さなくては……。

「とっ、とにかく! その話は置いて、本題に入らせていただきますー!」

これ以上突っ込まれてはたまらないと、無理やり話題を変えて疑いをそらす。

「……では、改めていきましよう。私の名はエリス。英霊となったあなたに新たな道を案内する、幸運の女神です」

「はあはあ、なるほどそうですね。あなたがあの、胸にパッドを入れてるといふ噂のクリスさんですか」

「パッドはもう入れてませんよおーっ!? 今はブラで寄せて上げ……って、胸の話はどうでもいいでしょ!? そんなことより、名前ですよ!? 私の名はエリスであって、クリ



スではありませんからっ!? 変な誤解はしないでくださいっ!」

なんだかもう、思いつきりバレてる気がしないでもない。

それでも、自分からぶっちゃけるのは負けてしまった気がするので、向こうがしらを切っている間は、こちららんぷりしておこう。

「ところで話は変わるけど、ちよいとばかりエツちゃんに聞きてえことがあるんだが……」

「ちよ、エツちゃんってなんですか!? いきなり愛称で呼ばれるなんて、恥ずかしいというか照れるというか……」

「なんでそこでモジモジすんだよ? こつちが真面目に聞いてんだから、女神だったらちゃんとしろよな」

「あなたも少しは私のことを敬ってくださいよ!? ……で、聞きたいこととはなんですか?」

「ああ、いやね。さつきお前は俺のことを英霊とか言ってたけど、もしかして俺ってFateに出てくる英霊的な存在になっちゃったの?」

「いや、Fateというのは関係なくて、戦死したあなたを敬ってそうお呼びしているだけですよ」

とぼけた質問をしてくる銀時に呆れつつ、これまでの経緯を説明した。

「はあ、俺が死んだあーっ!? それじゃあなにか!? 主人公であるこの俺が、ドロップアイテムを食らった結果、人生からもドロップアウトしちまってことですかあ!?!」

「は、はい……残念ながらそうなります」

ようやく自分の状況を知って大人げなく取り乱す。

そんな彼を嘲笑って、先に来ていたあの男がこれ幸いと茶化してくる。

「ププ、ダッセエーッ! 少年マンガの主人公のクセに、鳥のウンコが当たって死んじやうファミコンのキャラみてえに呆気なく死んでやんの!」

「うっせえーマダオ!? グラサン切られて死んだバカに俺を貶す権利は無エエエ……ってアレ? 長谷川さんが見当たらねえけど、一体どこにいやがんだ?」

「何言ってるんだよ、ここだよここ! お前の足元にいるだろおーが!」

「いや、ここだよって言われても、足元にはグラサンしか落ちてないんだけど……。まさか、コレが長谷川さんってわけじゃねえよな?」

「残念ながら、そのまさかだよ」

「う、うん、そうか……。なんていうか、その……強く生きろよ長谷川さん」

「いや、強く生きろと言われても、死んでこんななんたってんだけど!?!」

天界で再会した仲間は、随分と変わり果てた姿になっていた。

「つーか、なんで魂までグラサンになってんの!?! 俺は一体何者なのか、教えてくれよエ

リス様!？」

「そんなことを聞かれても私にだって分かりませんよ!? 恐らくは、元の世界に帰れば直ると思いますけど……」

喋るグラサンと話している内に、エリスは徐々に落ち込んでいく。このままでは、銀時とお別れしなければならぬからだ。

通常の場合、死んでしまった転生者は、魂のまま天国で暮らすか、生まれ変わって赤ちゃんからやり直すかの二択を選ぶことになるのだが、それを実行してしまうと銀時という人間は完全に消えてしまう。

「でも、本当にそれでいいの? 魔王を討伐するためには、彼らの助けが必要……ううん、そういうことじゃない。あたしは、お兄様と会えなくなってしまったことが悲しいんだ……」

一瞬だけクリスの気持ちになったエリスは、本心に気づいてしまった。もしかばらくの間だけでも、銀時達と一緒にバカ騒ぎがしたいのだと自覚してしまったのだ。

たとえば、それが神の倫理に反するような罪であったとしても。幸運を司る自分が望んだ最善の選択だから……。

「何も迷うことなどありませんね」

「ん、なにか言ったか?」

「いいえ、何でもありません。あなた達にはこれから、魔王討伐のために必死こいて働いてもらおうと思っただけです」

「必死こいて働けて、顔に似合わずブラック思考だなあオイ」

「こう見えても、裏では結構やんちゃなこともしてますから」

そう言つて微笑んだエリスの表情はとても美しかった。

ぶつちやけ、彼女は色々吹っ切れた状態なのだ。どうせ、もうすぐあの先輩が、銀時達を生き返らせようとするに違いない。そうなれば、立場の弱い自分は言うことを聞くしかないのである。

「ええ、そうです。私がやんちゃをしちゃうのも、すべてはアクア先輩がいけないのですよ……。ふふふふ……」

「なあ、銀さん。何だか、エリス様から黒いオーラが出てるんだけど？」

「黙れやマダオ！俺達のエリス様が仰つているのだから、アクアがすべて悪いのだ！何のことは知らんけど！」

異様な気配を放つエリスに銀時達はビビった。こうなったのも、全部アイツのせいなのか。なんて言うか、アレはもう疫病神そのものだな。

居心地の悪い空気に男達が参っている、タイミングが良いのかどうか、諸悪の根源であるアクアの声が聞こえてきた。

『さあ、帰って来なさい銀時！ 高額の借金が残ってるのに、一人だけ逃げようだなんて死んでも許してあげないんだから！ フェニックスの一輝みたいに何回でも甦って必死こいて働くのよ！』

「向こうの駄女神はもつとブラックだったああああああああつ！」

大音量で響き渡る迷惑なセリフにウンザリする。

もちろん、彼女の声はエリスにも聞こえており、望み通りの展開になったことを心の中で喜びつつも、悪びれる様子もなく天界規約を破った先輩に呆れてしまう。蘇生魔法が使えるのは一人につき一回までなので、本来なら一度生き返っている転生者は復活できないのだ。

「はあーっ……。そんなことをしたら、私が後始末をしなきゃいけないというのに。問題ばかり持ってくる先輩には困ったものです」

アクアみたいに規約を破ってしまったら、上司からの説教をたっぷり受けるだけでなく、大量の始末書を作る羽目になったり関係各所に謝罪行脚を行ったりと、様々なペナルティーを受けなければならない。神の社会も世知辛いのだ。

「でも、これでお兄様も生き返ることができます……」

彼を救うためならば、その程度の代償など受けたって構わない。

無難な生き方をしている女神だったら割に合わないと思うだろうが、エリスにとって

は十分以上にやる価値があるやんちゃなのだ。慈悲深い彼女はそれほどまでに人を愛し、銀時という存在を心の中に受け入れていた。

「どうやら、予想外のお迎えが来たようですね。本来なら、あなた達は生き返ることができないのですが、これまでに見せてもらった功績を考慮して、今回は特例として蘇生を許すとしましょう」

「えっ、マジで!?! ありがとうございます、エリス様!」

グラサン状態から脱出したい長谷川としては喜ぶべき展開だ。

一方、銀時はどうと……いつの間にか見つけ出したエリスのオヤツを食べながら、女神達の願いを無慈悲に拒絶する。

「ったく、冗談じゃねえぞ駄女神共。この俺に断りもなく何度も蘇生しやがって。そういう設定を作っちゃまうと『戦闘シーンに緊張感がなくなるから止めろやボケ』とか思われるって、ドラゴンボールの時に論争になったことを忘れたのかあーっ? つっーわけで、俺はこのままりタイアして、エリス様に寄生するヒモのように暮らしていくんで、そこんとこ夜露死苦!」

『んなもん夜露死苦できるかあああああああつ!?!』

アクアとエリスが仲良くハモって、アクエリアスのように水とミネラルが合わさった。

「つていうか、私が後で食べようと思って用意したチーズケーキを勝手に食べるなんてあんまりです!? そのようにドSな人は、反省の意味も兼ねて向こうに戻ってくださいっ!!」

「なっ!? ちょっと!? 止めろ!? 俺のケーキを返せエエエエツツ!」

怒ったエリスは、神通力を使って銀時の手からチーズケーキを奪い返す。その行為にバカなドSが気を取られている間に、地上へと繋がる門を開いて、愚かな男達を容赦なく吸い込んでしまう。

「チツ、チクシヨオオオオオツツ! せめてそのチーズケーキを最後まで食わせてくれエエエエツツ!」

「お前はどんだけスイーツに気を取られまくってんだよ!? 甘党の座を奪っていった斉木楠雄と張り合うつもりか!」

死んでいるのに往生際の悪いバカ共が地上へと戻っていく。

その姿を見届けながらエリスはつぶやいた。

「本当に変な人達ですね……。この先が思いやられます」

楽しそうに文句を言って苦笑いを浮かべる。そう言う自分も、変な人達の仲間に入ってしまったと自覚しているからだ。

それでも後悔はしていないと、スッキリとした気分になって、食べかけのチーズケー

キを口に運ぶエリスであった。



銀時が瞼を開けると、笑みを浮かべたアクアの顔が真つ先に見えた。彼女はずっと膝枕をしており、後頭部から人肌の暖かい温もりが伝わってくる。客観的に見ればヒロインらしい行動だが、本性を知っている銀時にとっては違和感しか存在しない。

やはり、膝枕をしてもらうなら、もっと清楚で気品のある、あの人がいい……。

「結野アナとチェンジしてくれ」

「エリスじゃなくて結野アナ!?!」

「ケツの穴とチェンジって、どーいうことだ、我が主!?!」

紛らわしい人物名にアクアとダクネスが食いついてくる。

感動的なシーンがいきなり台無しになったものの、何とか無事に復活できたようだ。

涙を浮かべたためぐみんが無言で身体を抱き締めて、ケツの穴発言に興奮していたダクネスも彼女の横から慌てて抱きつく。その際に、放り出されたベルディアも、いろんな意味でウルツとしている。

「チ、チキシヨウツ! 臨死体験ができるなんて羨ましいぞ、ギントキよっ!」



「お前だけ感動の仕方が気持ち悪いんだよ!」

受け方こそ色々あれ、全員がリーダーの帰還を喜んでいるのは間違いない。

ちなみに、長谷川も生き返っており、真つ二つに切られたグラサンも何故か元通りになっていたが、ハーレム状態の銀時と違って誰も祝ってくれないので、仲間達との絆が切れてしまった感じがした。

「へっ! どうせマダオの俺なんか、壊れたグラサン程度の存在でしかないんだ!」

「まあまあ。そう拗ねるなよ長谷川さん。俺らはちゃんとアンタの帰還を祝ってやるからさあ」

「近藤の言う通りだ。戦友との再会を喜ばぬはずがないだろう」

へなにはともあれ、お帰りなさい長谷川さん」

「みつ、みんな……。そう言ってくれるのは嬉しいけど、俺から奪ったグラサンに話しかけてんじやねえっ!」

もはや、完全に本体扱いとなったグラサンに対して奇妙な嫉妬を覚えてしまう長谷川であった。

それにしてもカズマは思う。今回の戦いは本気でヤバかった。間違はなく、冬将軍はベルディアよりも強かったのだ。戦利品である白い刀を手にとって見つめながら、改めてこの異世界のデタラメさを思い知った。

「もしかして、魔王よりも強い野良モンスターがいるんじゃないだろうな？」

《もしかするといえるかもね。ボクの力でも見通せない、カグヤちゃんの影響がどれだけ出るか分からないから。本当に、マジでヤバイよ……》

「（オイオイ、冗談はよしてくれよ。いつもみたいに俺をからかっているんだろ？  
ねえ、ちよつと聞いてんのかよ。そこでいきなり黙られたら、すんごい不安になるで  
しょーがっ!?!）」

いつになく真剣なノルンの様子に恐れおののく。冬将軍がやたらと強くなっていたのは、彼女にとっても予想外だったのだ。

その原因が、あのカグヤだとすれば……今後出てくる強敵にも超迷惑な強化フラグが立っているかもしれない。

「よし、分かった。考えても仕方がないから、考えるのはよそう。そんなことより、銀  
さん！ エリス様ってどんな子だった？」

《ふーやれやれ。結局、こんなオチですか》

イヤなことから逃げたカズマは、まだ見ぬ女神に救いを求めるのであった。

ちなみに、雪まつりの方は、めぐみんの爆裂魔法で会場がぶつ飛んだため中止になり  
ましたとき。

## 第29訓 ゴミの中にも宝はある

冬將軍を討伐してから数日後。銀時のパーティは相も変わらず貧乏な暮らしをしていた。この間の功績によって2億エリスという高額の賞金をゲットしたのだが、そのほとんどが借金返済のために天引きされて、懐に入った金額は生活費で消える程度の端金だったからだ。

そんなこんなで、今日もまた不景気な顔をしながらギルドに集結しているのだが、カズマは何故かご機嫌だった。

「フツフツフツ！ いよいよ、この刀を使う機会が来たな！」

白い鞆に入った刀を掲げて、カズマはニヤリと笑う。

それは冬の精霊がドロップしたお宝で、当初は銀時とアクアによって売っぱられるところだったのだが、あまりに貴重なレアアイテムなのでカズマやめぐみんが反対した。そこで不毛なケンカが起こり、見兼ねた茂茂が仲裁に入った結果、公正なジャンケンによって所有者を決めることになり、最終的に幸運の高いカズマがゲットすることになった。

鞆が付いていなかったの、手に入れたその日の内に鍛冶屋で注文を済ませてしま

い、今日ここへ来る前に受け取って今に至るといふ訳だ。

「きいー悔しい！ カズマが持つてるチートスキル【約束された勝利のジャン拳】さえなければ、私の物になっていたのにいーっ！」

「そんなスキルは持つてねえよ!? ジャンケンの勝利を約束されても、あんま嬉しくないわー！」

仕事探しをする前に、カズマの新しい武器になった刀の話題で盛り上がる。

換金する気満々だったアクアは言うに及ばずだが、意外なことにめぐみんも食い付きが良かった。

「おお、これは素晴らしい。鞘の色も刀身と合わせて真っ白にしたのですか。クズなキャラとは正反対にオサレなデザインですね」

「余計なお世話だ、コンチクショウ!?」

さりげなくディスプレイされてカズマは憤慨する。色に関して他意などは無く、ただ単に白い刀身に合わせて白一色にデザインしたら、この反応である。

「はんっ！ ロリっ子のクセに黒いぱんつをはいてやがる中二病にナニが分かる!? お前になんと思われようと、俺は白が好きなんだ！ 純白のパンティーこそ男のロマンなんだあーっ！」

「なんでいきなり、ぱんつの話になってんですか!？」

「おっと、いけねえ。アダルト気取りなロリっ子につい釣られてしまったが、今はぼんつ  
の話よりも、コイツの名前を決めないとな」

浮かれた様子のカズマさんは、一枚の札を取り出す。それは鍛冶屋で貰ったもので、  
魔法が掛かったこの札に名前を書いて柄に張れば、簡単に銘を刻める仕組みになっ  
てい  
る。

後はどのような名前にするかだが、ゲーマーであるカズマとしては大いに悩むところ  
である。もしかすれば伝説の武器になるかもしれない刀の名前なのだから、変なもの  
付けられない。

「やっぱり氷雪系だから、袖白雪か氷輪丸ってところかな……」

「どっちもブリーチのパクリじゃねえーか!? ジャンプを代表する名作を勝手に悪用し  
やがって、著作権を守ろうって意識がテメエには無えのかあーっ!」

「散々パクリまくってるお前にだけは言われたかねえーっ!」

銀時のブーメラン発言にカズマは怒りをぶつける。

とは言っても、パクリであるという指摘は否定できない。

やはり、ここはオリジナルの名前を考えるべきだろうか。頭を悩ませるカズマに、銀  
時と長谷川がアドバイスしてくる。

「ゲームでもよくあるけど、名前を決めなきゃいけない時って良いアイデアが出ないん

だよなあー」

「そういう時は既存の名前をちよいと弄ればいいんだよ。たとえば、氷輪丸の一文字を変えて【乳輪丸】って感じにすれば気兼ねなく使えんじやね？」

「そんなもん使えるかあーっ!? 乳輪丸って、もはや単なる下ネタじやねえーか!？」

「だったら、【絶倫丸】ってのはどうだ？」

「それも結局下ネタですけど!? 振り返った棒状のモノに絶倫なんて文字を付けたら、アレしか思い浮かばねえよ!？」

「だからこそ、私としては良いアイデアだと思っただが!？」

「DMが良いと思うからこそ、ダメなんだって理解しろや!？」

仲間の意見は、まるで参考にならなかった。

こうなりややつぱり、自分自身で真つ当な名前を考えるしかない。そう思って再び作業に戻ろうとしたら、テーブルに置いてあった刀と札が見当たらない。

一体どこにやったのか。探そうとした途端に、何故か刀を抱いているめぐみんが声を発した。

「ツンツン丸」

「……は? いきなり何を言っただ？」

「何をつて、この刀の名前ですよ。あなたがあまりに優柔不断で、もどかしいったらあ

りやしないので、この私が誠意を込めてツンツン丸と名付けました」

聞き直してみたら、クソダサイ名前を堂々と宣言された。センスがおかしいことで定評のある紅魔族ならではのネーミングであり、当然カズマは却下しようとする。

だが、その判断はすでに遅く、アクアのセリフで失敗を悟る。

「ちよつと、カズマ。刀の柄を見てみなさいよ。何かもう、ツンツン丸って文字が刻まれているんですけど」

「えっ、まさかあー？ 頭の良いカズマさんが頭を悩ませてる間に、頭のおかしいめぐみんが頭の悪いネーミングを勝手に付けちやつてたとか、そんなギャグマンガみたいな展開、あるわけあったああああああああっ!？」

一般的な常識など紅魔族の少女には通用しなかった。銀時達と揉めている間に、彼女は自分の好きな名前を付けてしまっていたのである。

変な感性を持ったダクネスなどは良いじゃないかと評価するが、被害者であるカズマにとつては冗談ではないと言いたいところだ。

「おお、なるほどそういうことか。氷属性の武器だから、ツンツンという冷たい態度を示す言葉を使ったという訳だな。中々、ウィットなジョークが効いているではないか」

「つて、感心してる場合じゃねえーだろ!?! ツンツン丸なんてダセエ名前を伝説の武器に付けやがって!? 遠い未来の人達が博物館でこれを見たら、『魔王のウンコでもツン

ツンしてこんな名前になったんですか?』って勘違いするでしょーがっ!!」

「そんな間抜けな勘違いなどするわけないじゃありませんか。それよりも、爆裂魔法が撃てるような討伐クエストを探しましょう。最近は大物ばかり爆裂しまくっているの  
で、私のテンションも爆上げですよ!」

一人だけレベルアップしまくりに調子に乗ってるめぐみんは、怒るカズマを気にすることなく話を進めようとする。

ゲーマーである長谷川だけは不憫に感じて同情するが、銀時やアクアにとつてはツンツン丸でも構いやしない。ドヤ顔のめぐみんにサムズアップを送りながら、さっさと掲示板へ行ってしまう。

「なあ、ノルン。俺は泣いてもいいよな?」

《おーよしよし。バブみに溢れたこのボクが慰めてあげるから。この悔しさをバネにして、魔王のウンコをツンツンしたエンガチョ勇者になってね! (笑)》

「(お前もバカにしてんじやねえーか!?)」

憐れな少年は、無慈悲な運命を嘆いた。

それでもまあ、やり直しの効かないものにギャーギャー言っても仕方がない。ため息をついたカズマは、ツンツン丸という名を与えられた刀を腰にさして仲間の後を追うのであった。



場所はギルドの掲示板が変わり、浮かない顔を浮かべたカズマが遅れてそこに到着すると、何やら長谷川が熱弁していた。

「やつぱここは、俺でも何とか参加できるゴブリン討伐をやるべきだぜ。だってほら、この世界の経験値って止めを刺したヤツにしか入ってこないからさあ。ボスを倒しまくったのに、めぐみんちゃんしかレベルアップしてないから、そろそろ俺達もレベル上げした方がいいんじゃないかと思うんだ」

長谷川の言い分は意外にまともだった。めぐみん以外は雑魚しか倒していないので、あまりレベルアップしていかないのだ。攻撃手段の乏しいアクアは特に上がっていないのだが、何故か彼女が上から目線で賛同してくる。

「確かにそれは一理あるわね。魔王の討伐を進めるためにも、カズマと長谷川には強くなってもらわなきゃならないし、ゴブリン程度の雑魚モンスターなら丁度良い相手になるわ」

「おいおいアクア、何言ってるんだ。お前はゴブリンの恐ろしさ何も分かつちやいねえな。年中盛ったアイツらは、人間の女を捕まえては地上波でお見せできないようなハードプレイをやりまくる鬼畜のような存在だって、ゴブリン○スレイヤーでもしつかりと描写されてただろうが！」

「ちよっ!! こつちにアレの設定を持ち込まないでよ、お願いだからっ!!」  
ダクネスなんて速攻でくつ殺状態になっちゃうわよおーっ!!」

「なっ、なんとっ!! アクア達の出身地では、人間の女を性的に襲うような変態的なゴブリンが生息しているのかっ!!」

「そんな生物、二次元の中でしか生息してねえよ!!」

ガセネタを吹聴する銀時とそれにあっさり騙されるダクネスに呆れつつ、カズマさんが訂正する。

あの世界観を持ち込まれたらマジで洒落にならないが、もちろんそんなことはない。この世界のゴブリンは、普通のファンタジーと大差ない雑魚モンスターである。

ただ、ごくまれに例外が存在したりするのだが、滅多に遭遇することはないので、めぐみん達も知識は無かった。

何にしても、この時期にしては美味しい仕事なので、銀時としても受けない手はない。「まあ、俺も、前の戦いで出まくった血がまだ完全に戻りきってねえし、病み上がりの身体には丁度良い仕事かもな」

「よっしや、話は決まったな。それじゃあ、この依頼書を受付に持って行く……」

銀時が乗り気になったので、長谷川が掲示板の紙を取ろうとする。

しかし、それを遮るように別の手が延びてきた。

一体、コイツは何者なのか。顔を向けて確認すると、くすんだ金髪のチンピラみたいな冒険者がいやらしい笑みを浮かべて立っている。

「おっと、コイツは俺のモンだぜ、貧乏臭え無職のオッサン」

「誰が無職だコノヤロー!? つていうか、お前は一体何モンだ!？」

「はっ! テメエらみたいなオッサンに名乗る意味があんのかよ。そんなことより、邪魔だからそこをどき……」

「おっと、ゴミが邪魔だなあーっ!」

「(ぶ)ふ(あ)っ!？」

憐れなチンピラは、カッコつけてる途中でイラついた銀時にぶっ飛ばされた。この天パ野郎が、自分よりも最低なチンピラだということを理解しきつていなかったのだ。

「ちよっ!？」 人が話してる途中なのに、いきなり何をするんだよっ!？」

「ああ? 何をするって、ゴミ掃除をしただけです?」

「この俺を速攻でゴミ扱いしてんじやねえーよっ!？」 こう見えても、アクセルでは有名な『ちよい悪系のナイスガイ』だぞ!？」 ここに住んでいるんなら、ダストって名ぐらいは聞いたことがあんだろう!？」

「いや、テメエの名を聞くも何も、ダストの和訳はゴミなんだから間違っちゃいねえじゃねえーか?」

「確かにそうなんだけれども!」 それは、このすば原作者が勝手につけたあだ名だから!?! マジでゴミを見るような目で見ないでくれよ、頼むからっ!?!」

正式に初登場を果たしたダストだったが、いきなりDSな洗礼を受ける羽目になった。

「ええい、チクシヨウ! まさかここまでDSだとは思っても見なかったが、今日こそは、これまでの恨みを絶対に返してやる!」

「はあ? 恨みって何のことだよ? こっちには、お前に恨まれるような覚えなんてこれっぽっちも無えぞ?」

「ああっ!?! 何すつとぼけてやがんだゴルアツ!?! クソなお前が暴れたせいで俺が何度ぶっ飛ばされたか、忘れたとは言わせねえぞっ!?!」

突然、怒りを爆発させたダストに怪訝な表情を浮かべる銀時だったが、記憶力の良いめぐみんが一連の事情を覚えていた。

「そう言えば、桂とケンカした時やキャベツの収穫イベントなどで、背景に紛れてぶっ飛ばされてましたね」

「背景って言うんじやねえーよ!?! 俺達みたいなチンピラだって、自分の人生の中では主役なんだからなっ!?!」

残念な覚え方にダストが抗議する。

それでも、証人が出てきたことにより勢いを取り戻した。

「とっ、とにかく、そういうことだから！俺のプライドをかけてでも、このクエストは譲らないぜ！」

「はあ？何言ってるんだゴミ野郎！テメエのモンは俺のモンだ！さっさとソイツをよこせやクソがつ！」

これぞまさしく売り言葉に買い言葉。しょーもないきっかけによってチンピラ同士の不毛なケンカが始まった。

呆れ顔のカズマ達は元より、周囲にいる冒険者達も当然ながら騒ぎに気付いて、ギルド内がざわつき始める。そんな中、ダストのパーティとおぼしき奴らがこちらに近づいて来た。

青年二人に少女一人という構成で、紅一点となっているポニーテールの少女がダストに向かつて話しかける。

「もう、こんなところで何やってんのよ。これから仕事をするっていうのに、またその人になぶつ飛ばされるつもりなの？」

「なんで俺がなぶつ飛ばされる前提になってるんだよ!?今度はこっちがこのドSぶつ飛ばす番だぐるふおっ!?!」

「おっといけね。頭をかこうと思ったら、腕にゴミが当たっちゃった」

「言ってるそばからアゴパン食らってぶっ飛ばされたアアアアッ!」

「くっ、チクシヨウ! そう来るなら俺だつてゴミ掃除をしてやらアアアアアッ!」

「フルーツバスケットツ!」

「つて、今度はこつちのゴミ野郎が腹パン食らってぶっ飛ばされたアアアアアッ!」

少女が仲裁しようとしたらあつという間に悪化した。同族嫌悪というよりは、仲が良  
いほどケンカすると言つた感じだが、被害を受ける周りにとっては迷惑以外の何者でも  
ない。

そんなわけで、困つた様子の少女に代わり、カズマが仲裁を始める。

「ちよつと待てよお二人さん。こんなところでケンカしても金になつたりしないんだか  
ら、ここは相手をゴブリンに変えて競いあつてみないか?」

「はあ? 相手をゴブリンに変えるだあ?」

「一体どういうことだよそりや?」

「ようするに、ゴブリンを一番倒したパーティがこのクエストの報酬をゲットするつて  
話だよ。そうすりゃあ、このケンカの勝敗も付くだろうし、どっちにもゴブリンを倒し  
ただけの収入が入るだろ?」

「おお、なるほど、そういうことか! お前、頭良いな!」

口の上手いカズマの提案にバカなチンピラが乗つてきた。

とはいうものの、この話には問題がある。ダストの仲間のクルセイダーが、そこに気づいて反論してきた。

「ちよつと待つてくれないか。勝負するのはともかくとして、人数が多いそつちの方がどう考えても有利だろ？」

「あー、それならまったく問題ないぞ。アツチの赤いのは乱戦で役に立たない爆裂魔法しか使えねえし、ソツチの黄色いのはひたすら硬いだけで攻撃が当たらねえし、コツチの青いのに至つては全てにおいて使えねえから、実質俺らは三人で戦うようなもんだぜ」

「なっ!? 女神であるこの私が全てにおいて使えないつて、一体どーいうことよっ!?!」

「私だつて、乱戦だろうと何だろうと爆裂魔法を使えますよ!?! みんなも一緒にぶっ飛びますけど!」

「はあつ、はあつ! こんなに大勢の前で攻撃が当たらないことを貶されてしまうだなんて! 使えない女騎士を思う存分蔑むがいいっ!」

「……あーうん、分かった。人数的には問題ないな」

アクア達の反応を見て、逆に向こうは大いなるハンデを背負っていると悟った。

どちらにしろ、ダストが引き下がろうとしないので、彼らも話に乗るしかない。

状況を理解したポニーテールの少女は、ヤレヤレといった様子でカズマに返答する。

「ああもう、分かったわよ。こうなったら、あなたの提案に乗るしかないわね。このバカは、軽薄そうなチンピラに見えても意地だけはあるんだから」

「こつちもそんな感じだけど、お互い苦労するな」

「ふふ、そうね」

奇妙なところでお互いにシンパシーを感じた二人は、友好的な握手を交わした。

こうして、急遽勃発したチンピラ同士の抗争は、ゴブリン討伐競争に変わって第二ラウンドが開始される。



アクセルから出発した二組のパーティは、ゴブリンが出るといいう山へと向かっていった。

目的地へ続く草原地帯を進みながら、カズマはクエストの内容を思い返した。何でも、普段は森にいるゴブリンの群れが、隣街に繋がる山道に住み着いてしまい、通りかかる人々を襲っているという。

相手となるゴブリンは弱めのモンスターのだが、今回のイベントを提案したカズマとしては、何事もなく終わるかどうか不安が募るばかりである。先頭で言い争っている



銀時とダストを見ると、その思いは強くなる一方だ。

「おいこらテメエ!! ここは主人公であるこの俺が先頭を歩くべきところだろうが!」

「はっ! 主人公なんざ関係ねえよ! 強くてイケメンな奴が先頭を歩くっつーのがパーティの基本だろうが!」

「だから、俺が先頭だアアアアアアアッ!!」

「いいや、俺が先頭だアアアアアアアッ!!」

仲良くケンカしているアイツらが非常に恨めしい。

「はあく、ダスト以外の三人が比較的まともなのが唯一の救いだな……」

出発する前にギルドで行った自己紹介を思い出しながら、知り合ったばかりの対戦相手を見る。

パーティのリーダーであるクルセイダーのテイラー。紅一点でマスコットのなウィザードのリーン。狙撃には自信があるアーチャーのキース。そして最後に、どこから見たってチンピラ以外の何者でもない戦士のダスト。回復役がない点を除けば、比較的バランスの取れたパーティ編成であり、常識レベルが普通な点が何よりも最高だ。

平穩を求めるカズマにとっては羨ましい環境であり、何となく物欲しそうに彼らのことを眺めてしまう。

すると、リーンがこちらの方に近づいてきて、カズマの隣を歩くめぐみに話しかけ

てきた。

「ねえねえ、あなた。確か、めぐみんって言ったっけ」

「はいそうですが、私の名前に文句でもあるのですか?」

「いや、そんなつもりは一切ないから、いきなり杖を向けないでよ!」

リーンは普通に話しかけても、めぐみんは普通じゃない対応をしやがる。これだから、コイツらは……。

「名前に文句がないのなら、私に何の用ですか?」

「あー、用と言う程でもないんだけど……実はあだし、爆裂魔法を見たことがなくってさ。あなたと同じウィザードとして少しだけ興味があったから、ちよつと話を聞こうかなって……」

「おお、なんと!? そういうことはもつと早く言ってください! 爆裂魔法に興味があるなら、今すぐここで実際に体験させてあげましょう!」

「つて、体験させてあげるんじやねエエエエツ!」

やはりと言うか、頭のおかしい爆裂娘がいつものようなアクシデントを起こそうとしてやがった。

しかも、お約束のようにダクネスやアクアまで加わってくる。

「おいカズマ。知り合ったばかりの友人が見たいと言っているのだから、ここは友好を

深めるためにも期待に込めてやるべきだろう？　何なら、私が標的になってイベントを盛り上げてみせるぞ！」

「そんなイベントやるんじゃないやねえーよ!!　戦う前に死にかけるとか、仙豆を持ったサイヤ人しか、やってる奴を見たことねえから!!」

「だったら私が、仙豆の代わりに回復魔法をかけてあげるわ!　もしかすると、サイヤ人みたいにパワーアップするかもしれないから、試してみる価値はあると思うの!」

「そんな価値は微塵も無えよ!!　ドMがスーパードM人に変態しちまうだけじゃねえーかっ!!」

こっちの二人も、普段通りにトラブルメーカーの役割を遺憾なく発揮させる。

テイラーやキースは、彼女達のことを上級職のエリート冒険者だと思い込んでいたため、残念過ぎる現実とのギャップに強い衝撃を受けてしまう。

「なあカズマ。何て言うかその……今までずっと誤解してて済まなかったな」

「これからはお前のことを、強い奴等に尻尾を振ってる【荷物持ち】だなんて思わねえよ。だって、逆にお荷物の面倒を見てるんだもん……（涙）」

「同情するくらいなら、コイツらまとめて引き取ってくれ!!」

変な誤解が解けたのは良いけど、それはそれでやるせない気持ちになる。

「始まる前からこんな調子で、この先、大丈夫なんでしょうか?」

《だいじょーぶだよ、カズマ君。ボクの予想によると、今回のお話で酷い目に遭うのはダストって奴だと思っから》

「(結局、大丈夫じゃねえーだろソレ!? これからナニが起こるんだ!?)」

《それが、ぶっちゃけサツパリでさあー。アクアやカグヤちゃんの影響だと思っけど、見通す力にかかるノイズがさつきから結構酷くて、今回も行き当たりばったりでやっていくしかないねー》

「(ええいチクシヨウ! ソイツらはミノフスキー粒子かGN粒子でも撒き散らしてんのかあー?!)」

ノルンの説明を聞いたカズマは、厄介な運命に巻き込まれてしまったことを嘆いてしまう。

冬將軍戦までの情報を詳しく分析して分かったのだが、銀時という特異点に、アクアやカグヤというカオス要素が密接に関わったことで、ノルンですら見通しきれないほどおかしい現象が起きているのだ。

こうなると、力が弱まっている分霊の状態では思うように対応仕切れず、見通す力の信頼性も分単位の近い未来しか当てにできない状況だった。

《まあ、カズマの高い幸運が良い感じに効いてるし、駄女神や破壊神の干渉を受けても負けないと思っよ!》

「俺の幸運は、理不尽な神様に対抗できる程の効果があんのおーっ!？」

とんでもない事実がさらつと判明してビックリする。カズマがいるからこそ、銀時達から漏れまくってるマイナス要素が相殺されているのだが、運命の女神に導かれた彼もまた、銀時と対をなす特異点なのだ。

「と、とりあえず、俺の幸運で何とかなるとしても、油断は禁物だよな……」

《うん、そうだね。ボクが見通せる未来なんて、所詮は可能性の話だから。結局は、君達人間自身の力で未来を切り開いていくしかないんだ》

たとえノルンが未来を変えるチャンスを与えたとしても、カズマの意志が強くなければ失敗してしまうこともある。

だからこそ、油断せずに警戒心を増していく。ここは「敵感知」スキルを使って、不安要素を出来る限り潰していくしかないだろう。どうせ何かが起こるとしても、襲われる前に感知できれば対応策も少しは練れる。

「長谷川さん。アンタも敵感知を使ってくれよ」

「おう！ 分かったぜ、カズマ君……って、アレ何かおかしいな？ 何故か俺の敵感知に、銀さんとアクアちゃんまで反応しちゃってるんだけど。いつも俺のことをバカにするから、無意識の内に敵として認識していたのかなあー（笑）！」

「（笑）してる場合か!? 敵と味方の識別が、まともでできてねえーじゃねえーかつ!？」

何となく分かっていたけど、このマダオも当てにはできない。やはり、自分が頑張らねば……。

半ば強迫観念に駆られながら警戒するカズマであったが、山道の入り口まで到着しても特に問題は起こらなかった。

何故かと言えば、ムキになった銀時とダストが競って先を急いだせいで、いつもトラブルを起こしているアクア達もやらかしている時間が無かったからだ。

「意外に呆気なく到着したわね。いつもだったら、何回かトラブルが起きて退屈しないんだけどな」

「ええ、そう言えばそうですね。こんなことなら、あそこで爆裂魔法を撃っておけば良かったですよ」

「まったくもってその通りだな」

「マジで何も分かつちやいねえ!? お前らの存在自体がトラブルの原因だって、いい加減に理解しろやあーっ!」

緊張感の欠片もない仲間達にストレスが溜まっていく。

ここから先は確実に敵が待ち構えているのに、暢気に騒いでいる場合ではない。まともなリーダーとして気を配っていたテイラーが、憐れなツツコミ役に代わって注意を促す。

「おい、みんな。はしゃぐのはここまでにしておけ。ゴブリンが相手と言っても、油断すれば死ぬこともあるんだから、ここから先は気を引き締めてくれないか」

「はあ？ テメエなんか言われなくても、こっちは油断するどころか、めっちゃ殺る気満々ですけど!?! 早くアイツら殺してえから、つべこべ言わずについて来いやあーっ!?!」

「ああ？ なんでテメエがウチの奴らに命令出してくれてんだよ!? こんなドSは放つておいて、この俺について来いやあーっ!?!」

「いいいや、俺について来いやアアアアアッ!?!」

「いやいや、俺について来いやアアアアアッ!?!」

「つて、ちよつと待てよ二人共!?! 色々準備があるんだから、勝手に突っ込まないでくれよっ!?!」

止めるキースの言葉も聞かず、頭に血が上ったチンピラ共は早歩きで進んでいく。

面倒な奴らだが、このまま放置するわけにもいかないので、結局、彼らのペースに合わせて後を追うしかない。

オッサンの長谷川には辛いペースで、過酷な周囲の環境も彼の気力を奪っていく。

「はあつ、はあつ! マダオの俺に山ダツシユはキツすぎるっ! 景色を見てもおつかねえし、癒しなんざ微塵も無えよ!?!」

長谷川が言うように、この山道には癒しなど無い。道幅は5く6人で横歩きできるほどしかなく、右側は登れそうもないほどの絶壁となっており、左側には落ちたら助からないような崖が広がる危険な場所だ。

草木も無い殺風景な景色を見てカズマや長谷川が不安を募らせる中、彼らよりも場馴れしているテイラー達は落ち着いて話を進める。

「ねえテイラー、目的地はもうすぐかな？」

「ああ。ゴブリンが目撃されているのは、ここから少し下った所らしい。恐らくは、その辺りにゴブリンが住みやすそうな洞窟でもあるんだろう」

「ふうくん、こんな所が住みやすいもんかしらね。餌になるような動物もいないのに……」

「まあ、俺達にとつちや美味しい相手なんだから、アイツらの事情なんてどうだっていいだろ」

楽観的なキースは、リーンの疑問を気にしなかった。

実際にはこの場所を選んだ理由があつたのだが、彼らがそれを知る前にゴブリンと接触してしまうことになる。

カズマの「敵感知」が多数の反応を捉えるのとほぼ同時に、先頭を進んでいた銀時とダストが、待ち構えていたゴブリンの群れを発見する。



「おいおいおいおい、何なんだよこの数は!?! どう見ても50匹以上はいるぞおーっ!?!」  
「へっ!?! なんだよお前、ビビってんの? それなら俺が全部倒して報酬を貰っちゃまうぜえーっ!?!」

「はあっ!?! 貴族にだってケンカを売れる命知らずなこの俺が、ゴブリンごときにビビってなんかいるわけねえーだろうが!?! あの程度の雑魚なんざ100匹いたって蹴散らしてやらあーっ!?!」

銀時に挑発されて熱くなったダストが、腰に下げた剣を装備しながら一人で飛び出していく。

その直後に非常事態が発生した。

カズマの敵感知に新たな反応が出たのだ。

「待ってくれ、銀さん!?! 俺達の後ろから高速で何か来る!?!」

「ああん? 後ろからだど?」

切羽詰まった様子で呼び止められた銀時は、急停止して振り返る。すると確かに、カズマ達の後方から大きい何か走って来るのが確認できた。

見ると、それは猫科の猛獣みたいな大型モンスターだった。暗闇のように黒い体毛とサーベルのように伸びた2本の牙が特徴的な、虎やライオンよりも遥かに大きい真正正銘の化け物だ。

「グオオオオオオオオオッ!!」

カズマ達の数メートル手前で立ち止まったソイツは、身の毛もよだつ雄叫びを上げて存在感をアピールする。

思いもよらない強敵の出現にみんなが戦慄する中、ソイツの姿を見たリーンがブルブルと震えながらつぶやいた。

「あああああ、あれは【初心者殺し】だ……」

「おいおい何だよ、こんなのウソだろっ!!」

「チツ、チクシヨウツッ！ ゴ布林と挟み撃ちに遭うなんて最悪だっ!!」

彼女の言葉で事実を把握したテイラー達はパニックになる。

初心者殺しとは、ゴ布林のような弱いモンスターをエサにして、それを討伐しに来た新米冒険者を狙うという狡猾なモンスターであり、初心者卒業したテイラー達であつても敵わないほどの強敵なのだ。

当然ながら、初心者殺しを知っているめぐみん達も慌てるが、空気を読まないアクアさんが、さらに恐怖を掻き立てる。

「ちよつと待つてくださいいよ！ あのデカイのが本当に初心者殺しなんですか!? どう見ても、通常の3倍は大きいですよおーっ!!」

「それはアイツが進化した個体だからよ」

「な、なにつ、進化だど!？」

「ええそうよ、ダクネス。1000人以上の冒険者を食い殺した初心者殺しは、ベテランの冒険者ですら裸足で逃げ出す【熟練者殺し】に進化するのよ!」

「なにそのバイオレンスな進化の仕方!？ ゲームみたいな世界のクセに、ポ○モンみたいに出来なかつたの!？」

メタな発言で突っ込んでみても、現実という残酷なシステムは決して変わらない。

しかも、彼らに襲いかかる脅威はそれだけではなかつた。

ゴブリンの群れがいる後方、彼らが住みかとしている大きな洞窟の中から、人間の2倍以上はある巨体が姿を現した。

「グハハハハッ! 滅多に吠えない相棒がそこまで興奮するとはナ。それほどの強敵が引つ掛かつたということか?」

その巨大なモンスターは人の言葉を話した。種族はゴブリンで間違いないのだが、異様なまでに発達した筋肉と人語を理解するほどの知力は、普通の個体とは比べ物にならない。

めぐみんやリン達も知らないような変異種であり、唯一知っているアクアさんが、またしても余計な知識をひけらかす。

「なんとということなの!？」 ゴブリン界の異端児と言われる【ゴブリンガーディアン】まで

出てくるなんてっ!？」

「いや、ガーディアンって何なんだよ!? そんなヤツ、ゴブリ○スレイヤーでも聞いたことないんだけど!？」

「そんなの当たり前じゃない。コイツは、この世界限定のご当地ゴ布林なんだから」「ご当地ゴ布林って何だあーっ!?! ゆるキャラみたいな言い方なのに、これっぽっちもユルくねえーっ!?!」

「ユルくないのも当たり前よ。ゴ布林ガーディアンっていうのはね、大切な家を守るために、自室でひたすら身体を鍛えて強靱な肉体を手に入れた、頑張り屋さんなんだからー!」

「そんなもん、引きこもって筋トレしてる自宅警備員じゃねえーか!?!」

「しかも、それだけじゃないわ。30年という長い時間を誰とも接触することなく己の鍛練だけに注いだ結果、魔法使いと呼ばれるほどの知力までゲットしたのよ!」

「もうそれ只の童貞じゃね?! 女と無縁な暮らしをしていた自宅警備員の男性が、30年も童貞を貫いちゃっただけじゃね?!」

アクアの説明を聞いてみたら、予想に反してふざけた内容だった。

それでも、戦闘力に関しては見えた目通りに強力であり、相棒と呼んでいた熟練者殺しにも引けを取らない実力がある。だからこそ、この2匹は、対等な関係を結んで協力し

あっていたのである。

「ほう。相棒が興奮するだけあつて、中々良い面構えの冒険者がいるではないか。これなら互いの欲望を満たすことができるナ……」

ゴ布林ガーディアンはそう言うと、一番近くにいたダストに向けていやらしい笑みを浮かべる。

明らかに嘲りの意味が込められており、怒ったダストが突つかかる。

「この木偶の坊が、調子こきやがって！ テメエらの欲望なんざ、満たされてたまるかよ！」

「グハハハッ！ だったら、直に確かめてみるか？ 相棒の食欲と、この俺の性欲を、貴様らごとき冒険者に止められるかどうかナアアアアアッ!!」

「ちよつと待てエエエエエッ!? 食欲は分かるけど、性欲って何だアアアアアッ!?」  
いきなりヤバいことを言い出したゴ布林ガーディアンに驚愕する。

まさか、ゴブリ○スレイヤーに出てくるようなヤバい奴がいたなんて。アクアやめぐみんは顔を青ざめ、リーンも身体をすくませる。

その反対に、ダクネスのテンションは一気に爆上げしていくが……。

「おいカズマ、どうしよう!? あの鬼畜なゴ布林は、私のいやらしい肉体で性欲を満たすつもりだぞ!!」

「それはお前の願望だし、喜んでる場合じゃねえっ!?」

カズマの言うように、今はマジでピンチである。このままでは、ゴブリ○スレイヤーのような○○○シーンがあるダークファンタジーになってしまいかもしれないのだ。

こういう時に頼りになる銀時は、R-18にされてはたまらないと、誰よりも早く動いた。一番厄介な相手を熟練者殺しと判断して、真っ先に倒そうと立ち向かっていく。

「おいカズマ! 俺がああ黒猫をぶっ倒してくるまでは、サブリーダーであるお前にこの場を任せたぞ! 絶対に女共の貞操を守りやがれっ!」

「えっ!? 俺がサブリーダー!? そんなもんになった覚えは微塵も無えと言いたいけど、こうなったらやるしかねえ! めぐみん達の貞操はこの俺が守る!」

「カズマにそんなことを言われても、逆にキモいですね……」

「何でお前が引いてんだよ!? ここは普通、男らしいカズマさんにときめいちやう所でしょーがっ!!」

意外に冷静なめぐみんに突っ込みつつも、内心では焦っている。あまりに不利なこの状況を、銀時抜きメンバーで耐えきることができただろうか。50匹以上のゴブリンだけでも十分に厄介なのに、あのデカブツまで同時に攻めてきたら、とてもではないが勝ち目はない。

《だいじょーぶだよ、カズマ君。先行してるチンピラが、一人でアレの足止めをやってく

れるから。しばらくの間はそれで行けるよ」

「(えっ?! やってくれるのはありがたいけど、チンピラ一人で大丈夫か!?)」

どう考えても不安要素しかないが、この状況ではそれがもつとも効果的な作戦だった。

彼の實力を見たことがある銀時は、即座にできると判断したから、危険性が増す逃走よりも戦う道を選んだ。

皮肉なことにダスト自身も同じ答えを出しており、進撃を始めたゴブリンを前に獰猛な笑みを浮かべる。

「こうなりや何でもやってやるぜっ! リーンの初めては俺のもんだっ! テメエなんかにはやらせはしねえーっ!!」

「つて、いつからあたしの初めてはアンタのものになったのよおーっ!」

顔を真っ赤にして文句を言うリーンの怒声を聞きながら武器を変更する。平均レベルの腕前しかない片手剣から、達人レベルの實力があつた槍へと。

長い間怠けていたので最盛期ほどの力は戻っていないが、やはりこちらの方がしつくり来る。

「オラオラ、どげやゴブリン共! ダスト様に道を開けるオオオオオッ!」

槍を巧みに振り回し、ゴブリンの群れを突破していく。雑魚は後ろの仲間に入れて、

自分はそのデカブツだけに集中すればいい。

傷を負うのもお構いなしに全速力で駆け抜けて、標的のゴ布林ガーディアンめがけて突貫していく。

「ほう。たった一人でこの俺に戦いを挑むとは、気に入ったぞ小僧！」

「だったら、コイツを札の代わりに食らわせてやるぜっ！」

坂を駆け下りた勢いを乗せて強烈な突きを繰り出す。

それに対して、ゴ布林ガーディアンは、腕に装備した鋼鉄製の籠手を使って軽くいなした。この籠手は、武闘家のような戦闘スタイルに合わせて自作した攻防一体の装備品だ。

「くっ、コイツ!? 見た目に反して動きが速え!？」

「グハハハッ! どうした? これで終わりか?」

「そんなわきやねえーだろっ!」

意外な速度に驚きつつも、攻撃を続行する。

速度なら自分だって結構自信がある。後は、向こうの攻撃が当たる前に致命傷を入れられるかどうかだが……今はとにかくやるしかない。

誰が見ても分が悪い戦いがとうとう始まってしまい、離れた場所からから見ていたリーンが泣きそうな顔を見せる。



「は、早くダストを援護しないと!」

「待つんだリーン! ここはひとまず、目の前の敵を倒すことに集中してくれ! そうしないと、俺達の方が先に死ぬぞ!」

鬼気迫る状況の中、ギャグ作品とは思えないような緊迫したやり取りが行われる。

ダストを無視したゴブリン達が坂道を駆け上って来ているのだ。弓を装備した奴らはすでに攻撃を始めており、ダクネスが壁となつて、飛んでくる矢を防いでいる。

「いいぞ、いいぞ、どんどん来いっ! お前達の攻撃は、この私が全部防ぐっ!」

「うん、こっちは平気だから、俺も弓で応戦しよう」

はあはあ言ってるDMを無視してこちらにも反撃に出る。

遠距離攻撃ができるカズマは、白兵戦が始まる前に狙撃で敵を減らしていき、キースやリーンもそれに続いた。

《右から来る矢がキースに当たるよ!》

「ええい、分かった! 【ウインドブレス】 ツ!」

「す、すまねえ! 助かったぜ、カズマ!」

臨時リーダーを任されたカズマは、ノルンの助言や初級魔法を駆使して被害を食い止めていく。

そんな彼に触発されて、リーン達も奮戦する。

ダクネスの背後で声援だけを送って来るこっちの面子はクソの役にも立っていないが、この時カズマは妙に充実した気分を感じていた。

「これだよこれ！ こういうのがファンタジー世界の冒険ってヤツだよな！ やくそう程度の駄女神とか、一発屋の中二病とか、ドMでエロい女騎士とか、そんな奴らと一緒にいたら絶対に味わえない素敵体験だぜ！」

「あー!? カズマのクセに私のことをやくそうって言ったーっ!? せっかく、華麗な宴会芸で応援してあげてるのに、あんまりじゃないかしら!?」

「そんなことより、この私を一発屋と言いましたね!? いいでしょう！ 私の一発をバカにするなら、その誤った認識をここで変えてみせましょう！」

「ああ、いっそやってくれ！ ドMでエロい女騎士も一緒に爆裂すりゆがいい！」

「ほーら見てみる!? コイツら絶対普通じゃねえーだろ!? セリフを聞いても、まともな知性がまるで感じられねえもん!!」

「えっ、あーうん。それはよく分かったから、とりあえず戦ってくれ」

同意を求められたテイラー達は、返答に困りながらも応戦を続ける。

もうすぐ白兵戦のラインに迫ってきているのだ。

テイラーは盾を構えてゴブリンの襲来を待ち構えるが、その前に試したい秘策をカズマは思い付いていた。

「ゲームやマンガで鍛えた知識を存分に味わうがいい！」「クリエイト・ウォーター」ツツ!!」

アホな言葉を叫んだ途端に初級の水魔法を使い、前方の坂道に向かって大量の水を撒き散らした。結構な魔力を消費して広範囲が水浸しになったのだが、リーン達にはまったく意図が分からなかった。

「ちよつ、カズマ!? 突然、何をやってんの!？」

「何をつて、こういうことだよ!」「フリーズ」ツ！」

戸惑う彼女にそう言うと、初級の凍結魔法を全力で使った。

そうすると、先に撒いておいた水が一瞬で凍りつき、アクションゲームでよくあるような「ツルツル滑る床」が出来上がった。

突入してきたゴブリン達は、氷で足が滑ってしまい、まともに立つこともできなくなる。そこで再び弓を使って危なげなく倒していく。やつのことで進んで来ても足場が悪くて武器が使えず、今まで霊圧が消えていた長谷川ですら簡単に斬り倒すことができた。

「ようやく出番が来たつてのに、チャドみたいに扱うんじやねえーっ!？」

存在感の薄いマダオの主張など、この際どうでもいい。

初級魔法だけで戦況を変えてしまったカズマさんの活躍に、テイラー達は驚いた。

「おお、すげえーっ!! 本当にお前って最弱職の冒険者かよ!」

「初級魔法にこんな使い方があるなんて!! どうやったら思い付くのよ!」

「フツ、そんなに俺を誉めるなよ。調子に乗ると、失敗フラグが立つちまうかもしれないじゃないか」

まんざらでもない顔で謙遜するが、その予感は大当たってしまう。ゴブリンの数が多すぎて、彼らの死体が氷の床をふさいでしまったのだ。

こうなったら、白兵戦というヤツをやるしかない。

ツンツン丸を装備して気合いを入れたカズマは、テイラーや長谷川と共にゴブリン達を迎え撃つ。

「クツクツクツ。我が愛刀の試し切りには丁度良い……」

「ちよっ、ツンツン丸を持ったカズマが怖い顔で笑ってますよ!」

「シーッ! ああいう輩は見ちゃダメよ! 知らんぷりしてやり過ぎすの!」

外野が何やらほざいているが、構うことなく先へと進む。

《回避予測はボクに任せて、思いつきりやっっちゃえーっ!》

「頼りにしてるぜ相棒!」

頭に乗ったノルンから応援を受けながら、向かってきたゴブリンにツンツン丸の刃を振るう。

「凍りつけっ!」

「グギャアアアアアッ!」

斬りつけた直後にツンツン丸の冷気が伝わり、一瞬の内にゴブリンを凍らせてしまった。この刀に魔力を送ると、エンチャントされた氷属性の魔法が強化されるのだ。

刀身の材質が冬の精霊の魔力を物質化したものなので、特殊な魔法効果が付与されているだけでなく、非力なカズマでも扱いやすい重量となっている。だからこそ、彼でも自在に使えるのだが、ぶっちゃけるとこの刀は、カグヤ達の影響を相殺するために、彼の幸運が引き寄せた救済アイテムだった。

幸運がマイナスな長谷川にとっては嫉妬するほどに羨ましいお宝であり、大人気ない態度で八つ当たりしてしまう。

「やっぱ良いなー、ツンツン丸。ツンツン丸の先つちよでツンツンした美女の胸をツンツンしてみてーなー」

「ツンツンツンツンうるせーっ!? つーか、嫌がらせついでに、気持ち悪い願望ぶっちゃけてんじやねえーっ!」

ウザいマダオに怒りつつも、ゴブリンの討伐数を伸ばしていく。嫌々ながらも、桂から受けてきた戦闘訓練の成果が出ているのだ。

それに加えて、銀時の戦い方を間近で経験していることもプラスに働いている。良く

も悪くも、飛び抜けて常識離れた教師がいたからこそ、今の活躍があるわけだ。

しかも、銀八先生からおかしな教育を受けていたのはカズマだけではない。アクアやめぐみん達もまた、いろんな意味で成長していた。

「ああもう、何だか悔しいわっ！ カズマのクセに、私よりも目立つなんて許せないんだから！」

「私だって、爆裂魔法を愚弄するカズマごときに負けてなんかいられません！」

「何で俺が、お前らごときにデイスられなきやならねえーの!？」

だらしないと思っていたカズマの活躍に刺激を受けて、何故か後衛の彼女達まで前線に躍り出る。

アクアの方は、某Gガンダムのような必殺技を使って暴れ、めぐみんの方は、近くに転がっていた石を使ってゴブリンを撲殺し始めた。

「私の右手が真っ赤に燃える！ 勝利を掴めと轟き叫ぶ！ ぶあああああくねつうううううつ！ ゴツドオツ！ フィンガアアアアアツツ!!」

「お前実は武闘家だろ!!? 僧侶に転職した武闘家だろ!？」

「これでも食らえいっ！ エクスプロージョンツ!!」

「お前もお前でなにやってんの!?! ゴブリンの頭を物理的に爆裂してるだけじゃねえーか!？」

本当に僧侶と魔法使いかよと突っ込みたくなるほどのワイルドな戦いっぷりである。それでも、これは好都合だ。見た目のがっかり感はともかくとして、少しでも戦力になつてくれるのは正直言つてありがたい。

こんなことが出来るのも、ダクネスがヘイトを集めてフクロにされてるおかげなので、カズマは彼女の活躍を誉めてあげることにした。

「攻撃が当たらないダクネスにはお似合いの姿だな。ペッ！」

「くふうんっ!? ただやられてるだけの無様な私をさらに地味に貶してくるとは!?! 容赦ない言葉責めが心地よくてたまらにやいっ！」

本人も喜んでいるようで何よりである。

何にしても、ゴブリンの討伐が終わるなら、見た目がアレでも構わない。常識的なテイラー達にとつてはドン引きする光景だったが、早くダストを助けるためにあえて見ないことにした。

「よっ、よっしやーっ! これでゴブリンは倒したぞ！」

「うっ、うん、そうだね! 後はゴブリンガーディアンと熟練者殺しだけど……」

「ああ、でっけえ黒猫の方はもう片付けて来たぜ」

「……ええ?」

突然声をかけられて後ろに振り返ってみると、そこには銀時が立っていた。彼の後方

に目を向けると、地面に横たわっている熟練者殺しが見えるので、本当に倒して来たのだということが分かった。

「すつ、すつ、すつ!!? あんなに強いモンスターを無傷で倒しちゃうなんてっ!」

「ああ? この俺が野良猫ごときに負けるわけねえーだろう? 俺が勝てない猫なぎ、ドラ○もんかニヤ○スカキテ○ちゃんぐらいなモンだぜ」

「生々しい理由で勝てないヤツばかりだなあオイ!」

確かに、知名度や経済規模において勝ち目など微塵もないが、この世界にいない奴らに構ってなどいられないので、話はダストの方へと進む。

果たして、彼はどのような状況になっているのか。リーンが急いで視線を向けると、そこには信じたくない光景が広がっていた。

「そ、そんな……ダストがやられてるっ……」

「ああ、なんてこったっ!」

「ダツ、ダストオオオオオツ!」

リーンの反応に驚いて銀時達も慌てて見ると、確かにダストがやられている。

痛めつけられて動けないらしいダストが、お尻を天に突き出すような格好で倒れており、何故か下半身を剥き出しにされてブルブルと震えていた。そして、その背後から、股間をモッコリとさせたゴブリンガーディアンが迫って来ている様子が見える。



「やられてるっていうか、ケツの穴をやられそうになってるんですけどオオオオツ!!」  
まさか、ダストのアレが狙われていただなんて。予想外な危機に陥っている仲間を助けるために、みんなで急いで坂を下る。

「おいおいおいおい、ちよつと待てええええいつ!! 性欲を満たすつて、男とやるつて意味だつたのおーっ!!」

「アア? そんなの当たり前じゃないカ。30年もの長い間、女には目もくれず、肉体を鍛え続けて俺は気づいたのだ。美しい筋肉を持った勇ましい男こそ、愛すべき対象だということをやナ! フォーウツ!」

「筋トレ厨を拗らせてハードゲイになってたアアアアアツ!!」

衝撃的な事実全員がビククリする。女性の○○○を狙っていたのかと思つたら、男のケツを狙つてました!

勘違いしていた女性陣は複雑な気分になったが、その代わりと言うべきか、ゴブリンガーディアンの方にも大いなる誤算が起きた。

「ところで、なんで貴様らが全員ここに揃つてイル? 雑魚共はともかく、相棒はどうしたのだ?」

「へっ! あのでつけえ黒猫なら、お前がダストのケツ穴に一発やろうとしてる間に俺が殺つちまつたぜ?」

「なつ、なんだトオオオオツ!? まさか相棒を倒せるような冒険者がいるなんて!? そんな奴ツ……そんな奴ツ……男らしくて素敵じゃないカツ!!」

「何でそこで喜んでんだよ!? 反応がキモいつつーか、そんな目でこつち見んな!? おい、マジで止めてくれよ!? 金持ちに色目を使うキャバ嬢みたいに飢えた視線で、俺のことを舐めるように見つめるんじゃないやねエエエツ!?」

ハードゲイにロックオンされそうになった銀時は、反射的に身体が動いて逃げ出そうとした。

しかし、直後に異常が起きて何故かぶつ倒れてしまう。

「銀さんんんんっ!?!」

「どうしたのですか、ギントキーツ!? もしかして、熟練者殺しにやられていたのですかーっ!?!」

「い、いいや、違う……これはたぶん貧血の症状だろう。冬將軍との戦いで大量の血を失ったから、糖分を取りまくって増やそうとしたんだが、まだまだ足りなかったみてえだぜー!」

「何でそこで糖分取んだよ!? んなもん取つても、血糖値しか増えねえよ!?!」

バカなリーダーは、この大事な場面で戦力外になってしまった。

それを好機と見たゴブリンガーディアンは、撤退することを止めて一発逆転を狙って

きた。

「グハハハハッ！ その男が動けないなら、俺にもまだ勝機はある！」

「くっ、なんてこった!? こいつあかなりヤバイんじゃないか!?」

エースを欠いた状態で、ゴ布林ガーディアンを相手にするのは無理があると言わざるを得ない。

だからと言って、相手は止まってくれやしない。

覚悟を決めたティラー達は、戸惑うカズマ達よりも先に動いて強敵へと向かっていく。

「うおおおおおっ！ ケツの穴をやられたダストの仇を討つてやる！」

「そっ、そうだ！ ケツの穴をやられたダストのためにも、俺達の手でコイツを倒す！」

「わっ、私だつてやってやるわ！ お尻の穴をやられちゃったダストの無念は晴らしてみせる！」

「お、お前ら……俺のケツ穴はやられてねえよ……」

勝手に勘違いして盛り上がった三人は、ダストの反論を聞くことなく戦闘を始めた。

しかし、ゴ布林戦で体力を消耗していた彼らなどゴ布林ガーディアンの敵ではない。

ティラーの剣も、キースの矢も、リーンの魔法も、ことごとく防がれてしまう。

「グハハハハッ！ 貴様らごときに、この俺が倒せるものカ！」

「ぐああああああつ！」

「テイラーッ!？」

「何なのよコイツは!? 私達の攻撃がまったく効かないなんてっ!？」

予想を上回るゴブリンガーディアンの実力に、リーン達は絶望する。

もちろん、それはカズマ達も同様で、アクアやめぐみんはパニックになる。

「カカカカ、カズマさあーん!? これってめっちゃヤバいですけど!? ゴブリンにやられる女神なんて、絶対にイヤだあああああつ!？」

「そそそそ、そうですよ!? 私だってあんなのにやられたくありませんし、カズマ達に至ってはお尻の穴までやられてしまうんですからね!？」

「私としてはそれも有りだが!？」

「俺としては有りじゃねえーよっ!? ケツの穴の貞操は絶対に守ってみせる!？」

「だけど、実際、どうすりゃいいんだ!? 俺達だけで勝てるのかよ!？」

テンパった長谷川が言うように、この窮地を脱するアイデアを何とか出さないとけない。

満足に動けないダストや銀時を連れて逃げるのは論外だし、こんな狭い場所でめぐみんの爆裂魔法を使うのも自滅行為になってしまう。

こうなると、危険を冒してでもアレを使うしかないが……白兵戦主体の相手に果たして上手くいくかどうか。

《だいじょーぶだよ、カズマ君。キミが考えてる方法でアイツを倒せるよ》

「(それは本当か、ノルン!?)」

《うん、イケルイケル。ダクネスと長谷川に協力して貰えばね》

ノルンのお墨付きを貰えたのなら、やってみるしかないだろう。

意を決したカズマは、ダクネスと長谷川を集めて作戦を説明した。

「おお、なるほど！ それなら私も存分に被虐行為を堪能できるし、一石二鳥だなー」

「いや、こんな時までお前の性癖を堪能されても困るんだけど!? とにかく、この作戦は

お前にかかっているんだから、マジで頼んだぜ！」

「ああ、もちろん分かっているさ！ それでは早速行つてくりゅー！」

イマイチ信用できないものの、作戦は開始された。

「それじゃあ、こつちも行くとするか」

「お、おうよ！ ゾンビゲーで鍛えまくった腕前を見せてやるぜ！」

若干ビビリながらも長谷川は頷き、カズマと一緒に「潜伏」スキルを発動する。気配を殺したステルスアクションで相手の背後を取ろうとしているのだ。

それを成功させるために、ダクネスが相手の気を十分に引きつけておく必要がある。

「おい、お前！ 今度は私が相手だ！」

「グハハハッ！ 何人こようと結果は同じだ！」

余裕があるゴ布林ガーディアンは、ダクネスの方に向かって攻撃をしてくる。

その際に生まれた死角を突いてカズマ達は移動していき、相手に気づかれないうように背後から接近していく。

「（とにかく硬いダクネスなら、アイツの攻撃を受け続けても十分に耐えられる）」

こういう時こそ、彼女の存在が光り輝く。現に、自慢の拳が効かないダクネスに向かってゴ布林ガーディアンの意識が集中していた。

「ほウ、貴様も中々良い筋肉を持つているではないか！ 女しておくのは勿体無いナ  
！」

「お前は絶対に殺してやるっ!!」

聞き捨てならない発言を受けて怒りを爆発させたダクネスは、猛攻に耐えながら体当たりを決めた。それによってゴ布林ガーディアンの動きが止まり、絶好のチャンスが訪れる。

よし、今だ。好機を得たカズマは、長谷川と共に走り出した。

何も知らないゴ布林ガーディアンは、無警戒に背中を向けている。これなら弱い自分達でも容易に近づけることができる。狙い通りに接近を果たした二人は、背中側から心

臓に近い場所に手を触れると、ウイズから学んだスキル使った。

「必殺!」【ダブル・ドレインタッチ】ッ!!」

「うひゃああああああああああつ!」

おかしな叫び声を上げながらゴ布林ガーディアンが膝を突いた。

カズマによってヒットポイントとマジックポイントを吸収されて体に力が入らなくなり、長谷川によってハードゲイポイントとマッスルポイントを吸収されて特殊な性癖と自慢の筋力を弱められた。

ドレインタッチには吸い取る量や速度などに限界があり、もし一人でやっていたら効果足らずに反撃を受けていたが、使い手が二人いたおかげで瞬間的に無力化することができたのだ。

まあ、長谷川の方は相変わらず変なものを吸っているけど、結果オーライである。

「フォーウツ!? 見てくれよカズマ君! 何だかよく分かんねえけど、筋肉が美しくビルドアップしたぜえーっ!」

「うわっ、気持ち悪っ!」

いきなりマッチョなハードゲイになった長谷川に思いっきり引いてしまうが、そのおかげでゴ布林ガーディアンの方はすっかり賢者モードになっていた。

「あれ、何で俺は筋肉なんかに興奮してたんだっけ?」

「何かもう記憶まで失った感じになってるけど、とにかく、今がチャンスだ！」

すっかり気が抜けてしまったゴブリンガーディアンは隙だらけになっており、今ならカズマの腕前でも確実に心臓を狙える。いきなり攻撃せずにドレインタッチを使ったのは、自身の未熟さをカバーする苦肉の策でもあったのだ。

その作戦が上手くいった後は、止めを刺すだけである。ツンツン丸を水平に構えたカズマは、無防備な背中から心臓めがけて突きを入れた。

「お前から奪った魔力を返してやるぜエエエエツ!!」

「ウギヤアアアアアアアアツ!!」

ツンツン丸を刺した状態で大量の魔力を送り、身体の中から凍結させる。心臓の血液を凍らせてしまえば、強靱な肉体を持ったコイツでも耐えることはできない。

カズマの目論見通り、胸を凍らされたゴブリンガーディアンはそのまま地面に倒れた。

一連の出来事を呆然と見ていたリーン達は、しばらく思考が追いつかなかったが、アクア達がバカ騒ぎしただしたことでも我を取り戻した。

「や、やった……私達が勝ったんだ！ほんと、信じられないよ！」

「うひゃひゃひゃひゃつ！すごいぜチクシヨウツ！最弱職のクセに、あんな化けモンまでやつちまいやがった！」



「ははは……。あんなすごいメンバーの中に何で冒険者がいるんだって不思議に思ってたけど、これで納得したよ」

テイラー達の中でカズマさんの評価が爆上げしていく。そう思うのも納得できるほどの活躍っぷりなので、彼らに反論するのは、負けず嫌いなアクアとめぐみんぐらいだけだ。

しかし、それで終わらないのがこのSSのお約束。

勝利を確信したカズマの後ろで、倒したと思つたゴ布林ガーディアンが起き上がった。死の間際に、鍛え上げた闘争本能が一瞬だけ燃え上がって、死にかけた身体を突き動かしたのだ。

「俺を殺したコイツだけでも殺してやル……」

浮かれたカズマは、その殺意に気づくことなく隙だらけになっている。

正面にいたアクア達が異常に気づき、『カズマ、後ろ後ろー』と言おうとしたが、タイミング的に間に合いそうもない。

これは万事休すか。そう思われた時に、彼を助けるべく動いた者が二人いた。

「俺の仲間を殺らせねえ！」

「これで借りは返したぜ！」

「あつ!? ギントキとダストがゴ布林ガーディアンに止めを刺して、オイシイところ

をかっさらっていきましたよおーっ!」

説明口調なめぐみんが言うように、ギリギリのタイミングで復活した二人が決着つけた。

「つたく、テメエは脇が甘えんだよ。ハードゲイに背中を見せたら、コイツみてえにケツの穴を掘られちまうぜ?」

「いやだから、俺はまだ掘られてなんかいいねえっつーのっ!」

「は、はははは……ケツの穴を守ってくれてありがとう、二人とも……」

危ういところで助かったカズマは、冷や汗を流しながら礼を言う。

その裏では相棒とやりあっていたが……。

「(おい、ノルン。こうなることも分かってただろ!?)」

「へちよっ、勘違いしないでよ!」 ゴ布林ガーディアンが起き上がってきたのはイレギュラーなんだから! ボクだって、フルチンのダストに無茶させようだなんて思わないもん……」

そう言っただけで彼女が顔を向けた先には、下半身が丸出しになっていることを忘れて近づき、リーンから殴られているダストの姿があった。



クエストを終えた一行は、怪我の治療を済ませてから帰路についていた。

山を降りて草原地帯を歩く彼らの表情はとても明るい。特にテイラー達は、九死に一生を得たことでおかしなテンションになっていた。

「ぶははははっ！ 俺達が生きてるなんて、未だに信じられねえよ！ これもダストが、フルチンになるまで頑張ってくれたおかげだな！」

「うっせーぞ、キース!? フルチンの件はもう二度と口にするんじやねえーっ!」

「はははははっ！ あんな面白いことを忘れるなんてできねえよなあ、リーン?」

「あんた達と一緒にはないで!? あんな汚物、一刻も早く忘れたいわ!」

リーンだけはセクハラ被害に憤慨していたものの、内心では彼の活躍を称賛していたりする。乙女心は色々複雑なものなのだ。

もちろん、銀時パーティの女子達もいろんな意味で複雑である。

その中でも特に物騒なめぐみんは、勝利したのにもかかわらず不満を覚えていた。「すでに理由は分かっています。それは私が爆裂魔法をぶっぱなしていないからです!」

そういう訳で、お祝いの花火代わりに爆裂魔法を撃ち上げましょう!」  
よせばいいのに、余計なフラグ立てやがった。

嫌な予感を感じた銀時が慌てて止めに入るが、こっそり詠唱をしていためぐみんの暴走

を食い止めることができなかった。

「それでは、討伐クエストの成功を祝して……」

「えっ、オイ、ちよまつ!?!」

「【エクスポーション】 ツ!!」

空気を読まないめぐみんは、超迷惑な花火をぶっぱなしてしまった。

眼前に出現する巨大な火球に照らされながら、他の面子は呆気にとられる。

いや、アクアだけはめぐみんと一緒にはしゃいでいやがった。

「きやははははっ! たーまやあーっ!」

「アレを花火と一緒にすんなよ!?! どう見ても大量破壊兵器にしか見えねえだろ、あんなモン!?!」

派手に昇っていく爆煙の下で、こちらの気も知らずに盛り上がっている駄女神に当たり散らす。

そんな彼らにフラグ立って、更なるアクシデントが襲いかかる。爆裂魔法のせいで、たまたま近くにいたホワイトウルフの群れがこちらに向かって逃げてきたのだ。

そこからはいつもの流れで、案の定、ソイツらにこちらの居場所がバレてしまい、またしても大ピンチに陥ってしまった。

「オiiiiiiiiッ!?! だから止めるって言ったのに、やっぱりこんななったじゃ

ねえーかつ!？」

「フツ、過酷な運命を背負いし勇者パーティには、安らぎの時間など無いということですね」

「安らがねえのはお前のせいだろ!!? あーもうお前を爆裂してえーつ!？」

一難去つてまた一難。ホワイトウルフから逃げ出した愚か者達の受難は、まだまだ終わらなかつた。

ちなみに、ゴブリン討伐競争の件はダスト達に軍配が上がったものの、勝負に汚い銀時が『ダストのフルチンネタ』で脅しをかけて、結局最後は山分けすることになったと  
せ。